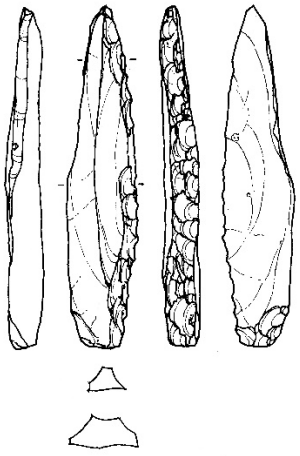
2024 年 3 月　関西大学審査学位論文

近畿地方瀬戸内系旧石器の構造



山口　卓也

関西大学大学院文学研究科　2023 年度

近畿地方瀬戸内系旧石器の構造

要　　旨

山口　卓也

1970 年代、考古学ボーイだった筆者は、神戸市西部で青少年期を過ごし、休日には自転車を漕いで田野をめぐり、遺物を採集した。石器は壊れずに見つかり、何に使うものかが大体わかり、また石材に綺麗なものもあって、その採集を好むようになった。採集した石器は、ほとんどがサヌカイト(黒色ガラス質安山岩)で、縄文時代石鏃や削器などであったが、少しだけ、側縁が刃部で反対側縁を背部加工したナイフ形石器が混じっていて、鎌木・高橋の『日本の考古学』1 を勉強して鑑定できるようになった。1974 年、二上山北麓サヌカイト原産地周辺の旧石器時代遺跡を報告した『ふたがみ』が刊行されて、近畿地方の旧石器時代研究は発展期を迎える。小遣いで購入した『ふたがみ』の図版を開くと、掲載された石器類は、原石産地の石器生産遺跡のため大きく重い。二上山から遠く 60ｋｍも離れた神戸西部で、私が表面採集できた旧石器は、剥片のようなものばかりでナイフ形石器も不細工で小さかったので、「この大きさの差は、なぜだ？」「ひょっとして兵庫県播磨地方東部に国府型ナイフ形石器の時期はないのか」などと考えた記憶がある。この疑問は、筆者が大学に進学して先史考古学、特に旧石器考古学を志したのち、近畿地方の後期旧石器時代を調べ、石器、石器群、遺跡、遺跡のある場所、当時の旧石器時代人の古民族学的動態を考える出発点となった。

前　哨　近畿の 77 年

「前哨」では、岩宿遺跡発掘から 77 年、「明石原人発見」から 92 年、国府遺跡再発掘から 66 年の近地方旧石器時代研究の学史を俯瞰した。

岩宿遺跡の発掘以前の 1931 年の直良信夫による「明石原人発見」は、1985 年の再発掘によって約 7 万年前の可能性が指摘された。岩宿の発見を受けて精力的な踏査を始めた鎌木義昌は、1950 年代半ばから備讃瀬戸地域や国府遺跡を発掘、近畿・備讃瀬戸地域に、後期旧石器時代の国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法、宮田型ナイフ形石器・櫃石島技法、井島Ｉ型ナイフ形石器が確認され、技術形態的型式学によって編年案を提示した(鎌木・高橋 1965)。

1974 年、同志社大学旧石器文化談話会『ふたがみ』が刊行され、二上山北麓のサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）原石産出地周辺の後期旧石器時代遺跡群が報告された。松藤和人

は、瀬戸内技法の再検討を行い、近畿地方後期旧石器時代の研究方法を、精緻な技術形態学的型式学に高めた。

1970 年代後半から 1990 年、高度成長期の開発ブームから、埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加した。旧石器時代遺跡の調査も、件数やその発掘面積に増加が見られた。これによって、研究者個人によるため池や露頭の採集資料を基とした編年研究が、質的に転換をする転機を迎えることとなった。初めての広域調査により集落的な景観を捉えた郡家今城遺跡や津之江南遺跡、住居構造らしき構造を検出したはさみ山遺跡、長原遺跡、碇岩南山遺跡などが調査され、研究の基盤が整ってくる。1980 年代半ば、兵庫県で板井寺ヶ谷遺跡、七日市遺跡、溝口遺跡で広範囲調査が行われ、板井寺ヶ谷遺跡と七日市遺跡で姶良 Tn 火山灰が純粋層で検出されて、初めての石器文化多層検出例となって、近畿地方旧石器時代編年に決定的な時間座標を与えた。これにより従前のナイフ形石器の技術形態学的単方向編年を見直すきっかけとなった。そこでは、徹底した石材の個体識別・接合作業が行われて、石器生産技術の精密な技術形態的型式学研究の契機にもなり、さらには、そこから人の動きを読み取って、遺跡構造、古民族学的動態研究に結びついていく。

2000 年 11 月、「旧石器捏造事件」が発覚した。近畿地方の旧石器時代研究は、直接の当事者被害者ではなかったが、この前後から研究の停滞が続いている。しかし、近畿地方瀬戸内系旧石器の構造的研究は、十分に新たな展開が可能な状態となっている。

第１章　サヌカイトという石材をめぐって

近畿地方の後期旧石器時代、石器の石材として開発され、近畿地方中央部で瀬戸内系旧石器の石材となったサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）について検討した。

第 1 節「濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」」では、近畿地方の石器石材が讃岐石（サヌカイト）であると最初に報告した濱田耕作の石材名命方法、「二子石」「二子山文化」をめぐる経緯、それを継承した末永雅雄の「二上山文化」と二上山文化総合調査に至る学史を検討し、近畿地方の二上山北麓産出のサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）は、「讃岐石」という意味を含む「サヌカイト」ではなく、中立的な「二上山産出黒色ガラス質安山岩」と呼ぶべきことを提案した。

第 2 節「末永雅雄先生の二つの大形石器」では、1955 年、末永先生が二上山北麓で採集して奈良県立橿原考古学研究所の「二上山文化総合調査」のきっかけとなった大形石器 2 点を報告した。この中で、末永雅雄先生も近畿地方に旧石器時代が存在するか、サヌカイトの開発はどこまで遡るかに関心を寄せていたことが判明した。

第 3 節「古瀬戸内とサヌカイト石材」は、近畿地方・備讃瀬戸地域間のサヌカイト石材産地は古地形的にどこにあり、近畿と備讃瀬戸の中間地点である兵庫県たつの市碇岩南山遺跡の石器群を解析して、後期旧石器時代瀬戸内系旧石器の石材供給と分布の意味を検討した。

第4章「サヌカイトの産地」では、サヌカイト石材の産地間の判別は、蛍光X 線分析法

により行われ、多くの考古学的検討事例もあるが、近畿・瀬戸内地域のサヌカイト石材の産地と石器製作上の考古学的問題と、自然科学的方法による産地分析の両者が円滑に意味のある分析結果を得るための課題を考えた。

第２章　後期旧石器時代石器群の研究

瀬戸内系旧石器の構造研究のなかで、近畿地方各地や他地域の後期旧石器時代遺跡発見石器群を研究したが、その中でも重要なものを取り上げた。

第1節「但馬地方における旧石器」は、兵庫県養父郡関宮町在住の研究者、高松龍暉氏と兵庫県但馬地方で旧石器時代探索を行った成果である。近畿地方中央部と比べて遺跡分布の疎らな但馬地方の旧石器時代・縄文時代草創期の石器を報告した。第3節「畑ヶ平高原採集の石器群」は、近畿地方中央部、古大阪平野と全く環境の違う、温泉町の標高1000ｍの高原上の旧石器時代遺跡群で採集した、多様な石材の石器群と安山岩製瀬戸内系旧石器を報告した。

第２節「山形県越中山遺跡群採集の資料と瀬戸内技法についての一考察」は、遠く離れた山形県越中山遺跡から発見された瀬戸内系旧石器を検討し、近畿地方中央部の極相の国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法と比べて、その国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法には変容が認められることを指摘した。

第４節「西日本における初期尖頭器石器群について」では、三重県度会郡ヒロサキ遺跡発掘の尖頭器石器群を取り上げ、南関東と中部高知の尖頭器文化と比較、九州から近畿地方中央部に分布する角錐状石器の後出であろうことから、西日本の初期尖頭器文化の中に位置づけた。

第５節「旧石器時代集落の周辺」では、大阪府高槻市で発掘された郡家今城遺跡が、集落としてどのような自然環境、資源環境にあって、なにが遺存し何が残らなかったかを考察した。遺跡が発掘されて発見される石器そのものの検討だけでは、遺跡がその位置にある意味がわからないこと、遺跡も他の遺跡や資源環境、自然との連鎖の中で考察すべきことを述べた。

第３章　兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の二つの石器群と古民族学的構造

1984 年の板井寺ヶ谷遺跡の発掘では、筆者は石器の詳細記載だけに留まらず、石器の個体識別、接合作業、遺物分布の統計学的解析をおこない、遺物分布の「潜在構造」研究を行った。

第１節「板井寺ヶ谷遺跡の石器群」では、板井寺ヶ谷遺跡の姶良 Tn 火山灰純粋層の上と下から発掘された上下二つの石器群を取り上げた。この石器軍医は南半の泥炭層中の C14 放射性年代が与えられて、近畿地方の旧石器時代編年に初めて時間座標が与えられた。

「2. 下位文化層の石器群」では、在地のチャート等を石材とする石器群と、近畿地方中央部からもたらされたサヌカイトを石材とする石器群の、二つの石器群があること、それぞれ

石器器種をそろえて保持していること、チャート等製石器群の剥片剥離技術は、縦長・不定形剥片剥離技術に基盤があり、サヌカイト製石器群は、瀬戸内系旧石器の横長剥片剥離技術であることを明らかにした。続いて、下位文化層の年代的検討から、約 25,0000 年前に中国山地帯内と近畿地方中央部・瀬戸内地域と、地域伝統の異なる二つの石器群が共存していることを示した。

「3. 上位文化層の石器群」では、姶良 Tn 火山灰降灰直後に、サヌカイト製角錐状石器を持つ石器群があることを示した。

第 2 節「板井寺ヶ谷遺跡の自然環境」では、発掘調査時の古地理学的背景、水文環境、古植生の調査について、自然科学的古環境分析結果の考古学への統合を行なった。古植生では、近畿地方における姶良 Tn 火山灰降灰による植生への大規模ダメージが明らかになった。以上を受けて、「3. 遺跡の立地点」では、篠山盆地全体を視野に入れて遺跡の立地点の考古学的評価を行った。

第 3 節「集落としての板井寺ヶ谷遺跡」は、「1. 下位文化層の遺跡構造」「a.遺物・遺構の分布」で、当時の生活面であった姶良 Tn 火山灰直下の微地形を復元、その上に分布した石器、遺構の分布を記述し、そのまとまり：ブロックを設定した。その結果、遺跡内の陸地部分に石器や遺構が分布しているが、主にチャート等石器群は北半、サヌカイト製石器は南半の陸地に分布していること、チャート等の南半分布はほとんどないが、サヌカイトはまんべんなく分布するという違いが明らかになる。石器類の石核や剥片、破損した石器の接合作業、個体別分類作業を行って、石器類ブロック間の関係を明らかにした。石器器種も、その機能と刃の機能について潜在構造も検討した。「ｂ.集落構造」では、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層に、チャート等石器群を持つ在地集団と、サヌカイト石器群を持つ瀬戸内系集団の二集団が、遺跡内で「南北構造」をもって集落を形成したことを明らかにした。住居と世帯の認定についても検討した。「ｃ.集落と古民族学的動態」では、それまでの潜在構造分析を根拠に、集落景観と構造、中国山地帯内集団と瀬戸内系集団の集団間関係にまで論を進めた。この解析は、当時の生業・石材戦略と地域的・社会的集団の動態を描き出す有力な手段であると考える。

「2. 上位文化層の遺跡構造」では、角錐状石器を持つ石器群の集落構造を検討した。

第 4 章　瀬戸内系旧石器の構造

第 4 章では、近畿地方瀬戸内系旧石器が強固な地域性を発現する仕組みを、石器文化伝統と石器生産のシステムが空間的に広がる構造を組み合わせて明らかにする。

第 1 節「所謂瀬戸内系の旧石器と横長剥片剥離技術伝統について」では、近畿瀬戸内中央部で瀬戸内系旧石器に対して行われた技術形態学的研究を辿って、技術形態的型式学の概念と用語を整理し、この地域の瀬戸内系旧石器は、極相の国府型ナイフ形石器、宮田山型ナイフ形石器、井島Ｉ型ナイフ形石器の諸型式、瀬戸内技法と櫃石島技法や矮小化した不定形剥片剥離技術まで、石器文化伝統として一体であると考えた。

第 2 節「瀬戸内系旧石器の存続期間について」では、板井寺ヶ谷遺跡での姶良 Tn 火山灰による層序出土例の絶対年代付与を受けて、瀬戸内系旧石器の編年について再検討を行った。後期旧石器時代前半期の板井寺ヶ谷遺跡下位文化層は、近畿地方中央部から見て遠隔地辺縁であって、ここに国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法がないこと、むしろナイフ形石器は小形で櫃石島技法に近い横長剥片剥離技術であることは、従来編年の国府型から宮田山型、井島 I 型、大から中、小へと石器が小形矮小化して行くにつれて剥片剥離技術も変異するという直線的編年では説明できないことを指摘した。個々の遺跡の石器群は、遠隔地と石器石材原石産地周辺の遠と近の間でも変わり得るということ、時間軸以外の空間軸も、石器群の理解のために考えないといけないことを指摘した。

第 3 節「旧石器時代における「移動」について」は、学部学生の頃、各地の旧石器時代遺跡発掘に参加し、瀬戸内系旧石器以外の石器群を見たときに、両者ずいぶん違うと思ったことから考えたもので、1983 年、大阪歴史学会「ヒストリア」に発表したものである。瀬戸内系旧石器の構造的研究として、最初の根幹的論文となった。埼玉・静岡・富山の旧石器時代遺跡で使われた石器石材が、どう消費されるか、補充のたびにどれくらい入れかわるかを検討、近畿地方の瀬戸内系旧石器のサヌカイト石材の石器生産と消費の仕方が異なることを指摘した。この研究は、第 4 節「二上山を中心とした石材の獲得」に引き継がれて、二上山北麓の原石産地周辺遺跡と、離れた遺跡を、遠隔地遺跡の石器群を、数量と新たに重量の二つの「数量」から統計学的に比較したものである。瀬戸内系旧石器が、石器生産に「工程の異所展開」を行って、重量作業は原石産地周辺で行い、遠隔地へは素材や製品としてのナイフ形石器を持ち出して、運搬重量の軽減を計っていることを明らかにした。石器石材という資源が二上山北麓という一点にあることから、それを遠隔地まで運んで消費することに石器生産技術が適応し、石器文化伝統の中に組み込まれたと考えた。

第 5 節「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地」は、第 3 節第 4 節を受けて、瀬戸内系旧石器が、なぜサヌカイト石材に固執した石器文化伝統であるのかを、遺跡立地の差から地域性の発生を考えたものである。近畿地方中央部、古大阪平野にある遺跡と、中国山地帯内の遺跡では、地形に開放感があるかどうか、分断されているかどうか、資源環境も異なり、旧石器時代人に積み重なって形成される「心象風景」の違いが地域性形成へと至ると考えた。

第 6 節「西南日本における後期旧石器時代前半期の一様相」では、西南日本の後期旧石器時代台形様石器群を観察、それからナイフ形石器群への移行を探った。第 7 節「近畿地方台形様石器群の一様相」では、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層に含まれる台形様石器群を詳細に再検討した。サヌカイト製台形様石器群は、瀬戸内系旧石器の横長剥片素材ナイフ形石器とともにあって、必ずしも遠隔知的な石器器種ではないことが明らかになった。

第 8 節「淡路島、大阪湾と播磨灘」では、近畿地方中央部と備讃瀬戸の間にある淡路島に、旧石器時代遺跡が少ないことを取り上げた。後期旧石器時代の活動領域は、低地や平野、回廊であり、山地、高所にあることは希であった。淡路島は、資源環境として大きくなく、両地域の中間空白帯である可能性を考えた。

第５章　サヌカイトの開発と黒色ガラス質安山岩

第１節「サヌカイト以前」では、本書第４章で考察したように近畿地方中央部の瀬戸内系旧石器は構造化して、二上山北麓産出のサヌカイトを石材としているが、その開発はいつ始まったのか、サヌカイトを使用しない石器があるとすれば、それは何なのかを考察した。各地の不明石器と年代根拠となる広域火山灰の例を示した。

第２節「兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材山地」では、瀬戸内火山岩区である二上山北麓サヌカイトと異なる第三紀山陰火山岩区に属する安山岩や第四紀火山岩安山岩が産出していて、それらが石器に使われていたとしても、は岩石学的に「サヌカイト」と呼べない「黒色緻密質（ガラス質）安山岩」である。第１章で取り上げた畑ヶ平遺跡群の坑南岸石器も多くがこれと対応する。近畿地方は、近畿地方中央部の古大阪平野と中国山地帯内の回廊や高原上遺跡群は、石器石材の供給を異にするが、一部は広域に搬入されるものがあって、両者が交指する動態を捉える必要がある。

第３節「西宮市甲山の黒色ガラス質安山岩と甲山山頂遺跡の旧石器」では、二上山北麓以外に、サヌカイトのような「黒色ガラス質安山岩」が他に産出していないかどうか、それが石器となっていればどんなものかを確認するため、兵庫県甲山山頂遺跡の石器を調査、また甲山火山岩産出状況も踏査した。山頂遺跡石器群は、台形様石器石器群で、後期旧石器時代前半期の位置付けで、甲山安山岩に含まれる黒色ガラス質安山岩を素材とする。近畿地方中央部の台形様石器石器群であり、武庫川回廊の出口にあることは興味深い。この黒色安山岩は、見た目で二上山北麓とは差異があって区別できるが、二上山北麓以外の瀬戸内火山岩区黒色ガラス質安山岩が石器となっていることは、同種石材見かけで二上山産出と誤認する事例の存在を疑う根拠となった。

第４節「大阪府富田林嶽山周辺の火山岩産出地と龍泉寺西参集の石器」は、近畿地方中央部において、二上山以外の火山岩で石器石材となる得る産地があるか、石器生産がなされているかを確かめるため、嶽山周辺を踏査した。嶽山東の竜泉寺西で少しの石器を採集し、横山では黒色ガラス質安山岩の転石を確認した。

第５節「河内長野市寺ヶ池西岸発見の石器について」は、河内長野市天野川・寺ヶ池の火山岩産出地を踏査して、周辺の大阪層群中などに安山岩転石を発見、一部は二上山北麓春日山サヌカイト（黒色ガラス質安山岩）と同等のものであることを確認、さらに寺ヶ池西岸で石器を採集した踏査の記録である。寺ヶ池に二上山北麓と肉眼観察で区別できない石材があることは、「サヌカイト＝二上山北麓産出」と見なせなくなったことを示している。一方、採集された石器は、非サヌカイトの安山岩製で、近畿地方の後期旧石器文化の中で未認識の技術形態的特徴を示し、前・中期旧石器時代のクリーバーの形態的属性を備えていることが注目され、調査を続けることが必要な地点となった。

第６章　瀬戸内系旧石器の構造的研究と成果

第 1 節「旧石器時代研究の背景」では、筆者が岩宿遺跡発見以来 77 年の研究史の 40 数年を過ごしてきた時間軸で、学史的な研究の進展と自身の研究の連鎖を記した。筆者の青少年期の採集行が、手元の石器を考えるとき、既存の編年や事例に「違和感」を感じたことが、今までの筆者の研究ベクトルを規定したことが、十分振り返って理解できる。

第 2 節「近畿地方瀬戸内系旧石器の特性について」では、本書で幾重にも論じたように、近畿地方瀬戸内系旧石器の構造が、汎列島的にみて特異な石器文化、地域であったことを結論し、古民族学的に描き出すことでまとめとした。近畿地方瀬戸内系旧石器は、その名の通り「瀬戸内」「古大阪平野」と切り離せない地域石器文化であり、石器石材産地を中央に持つ大地形が一体となって、より強く構造化した。

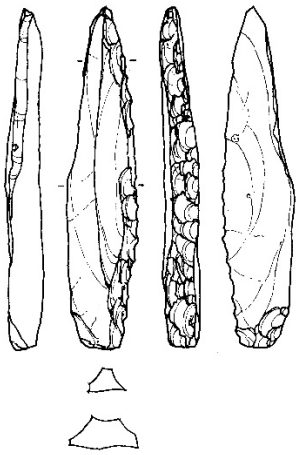
日本列島は、細長い列島地形に脊梁山脈と海岸部に張り付く平野によって、細かい環境帯で区分できる構造がある。この細かな地域性の発現は、縄文時代以降も続き、さらに細かく文化的地域性によって分かたれていく。一方、世界史的には、このような地帯は、例外的な存在ではと感じる。例えばヨーロッパ後期旧石器時代は、ヨーロッパ中央平原が一つの石器文化ステージで編年されている。これと比べて、日本列島、特に瀬戸内系旧石器は、細やかな地域性が発現している特徴があって、それぞれの資源環境に適応した石器文化が地域性を発現させているのだと思われる。

その構造は、この地形単位が続く限り安定して存在した。その一体性が損なわれたとき、後期旧石器時代の瀬戸内系旧石器の構造は終焉を迎える。筆者は、氷河期後半の温暖化による地理阻害を構想している。

第 3 節「瀬戸内系旧石器以前」は、今後筆者が取り組む課題、瀬戸内系旧石器の成立前後の様相を解明することであり、近畿地方に前・中期旧石器があるかどうかを解明することである。蓄積された発掘データを駆使できない非サヌカイト石器の探求と、サヌカイト石材開発の資源解明は、筆者自身の現地踏査と組み合わせて解明する必要がある。2023 年 2 月、河内長野市寺ヶ池の池底を、寺ヶ池火山岩の採集のため歩いていて、第 5 章第 5 節の写真にある石器 1 を発見した。考古学は発見の学問であり、その発見の価値は、最初に手にした考古学研究者が解明しないといけない。二上山産出サヌカイト（黒色ガラス質安山岩）ではない、ひょっとしてサヌカイト開発前の、前・中期旧石器時代かどうか、筆者の新たな課題となった。

本書は、筆者が青少年時代に石器発見の時に持った疑問を、試行錯誤、右往左往しながらも、真摯に解明しようと取り組んだ軌跡である。

近畿地方瀬戸内系旧石器の構造



山口　卓也

目　次

前　哨 **1**

前哨　近畿の 77 年 2

第 1 章　サヌカイトという石材をめぐって **13**

第 1 節　濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」 14

第 2 節　末永雅雄先生の二つの大形石器 32

第 3 節　古瀬戸内とサヌカイト石材 39

第 4 節　サヌカイトの産地 51

第 2 章　後期旧石器時代石器群の研究 **55**

第 1 節　但馬地方における旧石器 56

第 2 節　山形県越中山遺跡群採集の資料と瀬戸内技法についての一考察 66

第 3 節　畑ケ平高原採集の石器群 77

第 4 節　西日本における初期尖頭器石器群について 90

第 5 節　旧石器時代集落の周辺 99

第 3 章　兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の二つの石器群と古民族学的構造 **117**

第 1 節　板井寺ケ谷遺跡の石器群 118

1，板井寺ケ谷遺跡の 2 時期の石器群 118

2. 下位文化層の石器群 124

a，石器群の組成 124

b，剥片剥離技術 126

c，下位文化層の２つの石器群 129

d，石器生産技術体系と石材 130

e，下位文化層の編年的・系統的位置 131

３，上位文化層の石器群 136

第２節　板井寺ケ谷遺跡の自然環境 140

１，古地理学的背景 140

２，古植生 142

３，遺跡の立地点 147

第３節　集落としての板井寺ケ谷遺跡 151

１，下位文化層の遺跡構造 151

a，遺物・遺構の分布 151

b，集落構造 167

c，集落と古民族学的動態 174

２，上位文化層の遺跡構造 187

第４章　瀬戸内系旧石器の構造 191

第１節　所謂瀬戸内系の旧石器と横長剥片剥離技術伝統について 192

第２節　瀬戸内系旧石器の存続期間について 203

第 3 節　旧石器時代における「移動」について　216

第 4 節　二上山を中心とした石材の獲得　231

第 5 節　近畿地方における旧石器時代遺跡の立地　249

第 6 節　西南日本における後期旧石器時代前半期の一様相　261

第 7 節　近畿地方台形様石器群の一様相　271

第 8 節　淡路島、大阪湾と播磨灘　286

第 5 章　サヌカイトの開発と黒色ガラス質安山岩　293

第 1 節　サヌカイト以前　294

第 2 節　兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材産地　302

第 3 節　西宮市甲山の黒色ガラス質安山岩と甲山山頂遺跡の旧石器　316

第 4 節　大阪府富田林嶽山周辺の火山岩産出地と龍泉寺西採集の石器　339

第 5 節　河内長野市寺ヶ池西岸発見の石器について　342

第 6 章　瀬戸内系旧石器の構造的研究と成果　351

第 1 節　旧石器時代研究の背景　352

第 2 節　近畿地方瀬戸内系旧石器の特質について　357

第 3 節　瀬戸内系旧石器以前　361

典　拠　363

引用・参考文献　365

挿図目次

第1章

図 1	秋里籬嶌著・丹羽桃渓画 1801『大坂名所図會』　二子山　二上嶽	15
図 2	濱田耕作京都帝国大学教授	16
図 3	通論考古学	16
図 4	近畿・中国地方の第三紀第四紀火山岩分布	18
図 5	二上火山地質図	18
図 6	二上火山調査報告	22
図 7	箱根火山研究録	23
図 8	二上山文化總合調査記録　文書箱「二上山」の一部	26
図 9	末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所所長・関西大学名誉教授	27
図 10	二上山西麓の大形打製石器	27
図 11	末永雅雄先生のサヌカイト製大形石器 1	33
図 12	末永雅雄先生のサヌカイト製大形石器 2	34
図 13	兵庫県碇岩南山遺跡の石器　1	41
図 14	兵庫県碇岩南山遺跡の石器　2	42
図 15	瀬戸内の沈水谷	43
図 16	近畿・讃岐北部間の遺跡分布	46
図 17	瀬戸内系旧石器のサヌカイト石材開発	47

第2章

図 18	但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の遺跡	56
図 19	但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 1	57
図 20	但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 2・3	58
図 21	但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 4	60
図 22	但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 5	61
図 23	但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 6	62
図 24	瀬戸内系旧石器出土遺跡分布図	67
図 25	越中山 K 地点遺跡採集の遺物	68
図 26	越中山 S 地点遺跡採集の遺物	69
図 27	越中山 S 地点遺跡採集の細石刃核剥離面の切り合い関係	70
図 28	越中山K地点遺跡の接合資料（1）	71
図 29	越中山K地点遺跡の接合資料（2）	72
図 30	鎌木義昌氏による瀬戸内技法模式図	73
図 31	松藤和人氏による瀬戸内技法模式図	73
図 32	櫃石島遺跡の遺物	74
図 33	畑ケ平高原遺跡周辺地形図	77

図 34　畑ケ平高原の旧石器採集地点　77
図 35　畑ケ平高原採集の石核　78
図 36　畑ケ平第 1 地点採集の石器　79
図 37　畑ケ平高原第 3 地点採集の石器　80
図 38　畑ケ平高原第 4 地点採集の石器　81
図 39　畑ケ平高原第 7 地点採集の石器（1）　83
図 40　畑ケ平高原第 7 地点採集の石器（2）　85
図 41　畑ケ平高原第 7 地点採集の石器（3）　86
図 42　上山高原採集のナイフ形石器　87
図 43　ヒロサキ遺跡出土の尖頭器　91
図 44　南関東の尖頭器　92
図 45　中部高地の尖頭器　93
図 46　甲板面調整ある角錐状石器　95
図 47　郡家今城塚跡周辺地形図　100
図 48　近畿地方中央部・西南日本の植生分布　101
図 49　郡家今城遺跡 C 地点遺物出土状況（冨成・大船 1978）　105
図 50　郡家今城遺跡 C 地点の集中箇所別石器組成（冨成・大船 1978）　106
図 51　郡家今城遺跡周辺環境と物質的資源の推定　109

第 3 章

図 52　板井寺ヶ谷遺跡の位置　118
図 53　基本層序と放射性炭素年代　120
図 54　土層ダイアグラム　120
図 55　下位文化層の石器　サヌカイト　1　121
図 56　下位文化層の石器　サヌカイト　2　122
図 57　下位文化層の石器　チャート等　1　123
図 58　下位文化層の石器　チャート等　2　124
図 59　下位文化層の石器　サヌカイト接合資料　127
図 60　下位文化層の石器　チャート接合資料　128
図 61　上位文化層の石器　138
図 62　基本土層柱状図と泥炭層の放射性炭素年代　141
図 63　板井寺ケ谷遺跡周辺の水文環境　142
図 64　姶良 Tn 火山灰直下の樹木化石　145
図 65　姶良 Tn 火山灰による植生へのダメージ　146
図 66　板井寺ケ谷遺跡周辺地形　148
図 67　下位文化層埋没地形鳥観図　151
図 68　下位文化層埋没微地形　152
図 69　下位文化層石器分布状況　153
図 70　下位文化層石器ブロックと礫石分布図　154
図 71　下位文化層チャート等製石器分布図　155

図 72　石器ブロック石器組成集積図　1　156
図 73　石器ブロック石器組成集積図　2　157
図 74　下位文化化層サヌカイト接合関係　159
図 75　下位文化層　チャート等接合関係分布図　160
図 76　下位文化層接合資料ブロック間頻度　161
図 77　石器機種間分布相関のモデル　162
図 78　石器機種間分布相関関係　163
図 79　石器相関関係樹状図　164
図 80　ブロック別主要石器組成　171
図 81　下位文化層の世帯ユニット配置図　175
図 82　東部瀬戸内地域の遺跡分布と原石産地　179
図 83　下位文化層の集落景観想像図　184
図 84　上位文化層の世帯ユニット配置図　188
図 85　板井寺ヶ谷遺跡全景（北から）　190

第 4 章

図 86　ナイフ形石器・剥片・石核各部の名称　193
図 87　松藤和人による瀬戸内技法模式図　194
図 88　ナイフ形石器・角錐状石器の形態　194
図 89　櫃石島遺跡の剥片・石核　195
図 90　瀬戸内技法・石刃技法模式図　197
図 91　高井戸東遺跡IX下層の横長剥片石核　198
図 92　越中山遺跡Ｋ地点の接合資料　199
図 93　岩戸遺跡の接合資料　200
図 94　ネガティブな剥離面の切り合うナイフ形石器　202
図 95　遺跡分布図　204
図 96　百枝遺跡の接合資料　206
図 97　桜ヶ丘第一地点遺跡下層の遺物　207
図 98　板井・寺ヶ谷遺跡下層の遺物（1）　208
図 99　板井・寺ヶ谷遺跡下層の遺物（2）　209
図 100　恩原遺跡の遺物　210
図 101　板井・寺ヶ谷遺跡下層の接合資料　212
図 102　砂川遺跡の個体識別資料接合例　217
図 103　松藤和人による瀬戸内技法模式図　226
図 104　近畿地方の遺跡分布　232
図 105　瀬戸内技法第 1 工程第 2 工程模式図　233
図 106　各遺跡の石器組成と重量組成　234
図 107　各遺跡の石核と剥片類の重量組成　235
図 108　瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関係石器類の数量組成　236
図 109　サヌカイト・チャート等石器の数量・重量　238

図 110　石材供給状況と石器生産技術の構造　241
図 111　西南日本の遺跡分布図　249
図 112　板井寺ヶ谷遺跡の南展望　250
図 113　板井寺ヶ谷遺跡の北展望　250
図 114　板井寺ヶ谷遺跡　251
図 115　七日市遺跡　252
図 116　溝口遺跡　252
図 117　郡家今城遺跡　253
図 118　国府遺跡　253
図 119　桜ヶ丘遺跡　254
図 120　七日市遺跡第 II 文化層のサヌカイト製石器　263
図 121　溝口遺跡のサヌカイト製石器　264
図 122　冠高原 D 地点の安山岩製石器　265
図 123　遺跡分布図　267
図 124　台形様石器実測図（サヌカイト）1　272
図 125　台形様石器実測図（サヌカイト）2　273
図 126　台形様石器実測図（チャート）3　274
図 127　サヌカイト製台形様石器接合実測図　275
図 128　チャート製個体別資料 NO,39　台形様石器接合実測図　276
図 129　チャート製個体別資料 NO,59　台形様石器接合実測図　277
図 130　チャート製個体別資料 NO,106　台形様石器接合実測図　1　278
図 131　チャート製個体別資料 NO,106　台形様石器接合実測図　2　279
図 132　東部瀬戸内地域の遺跡分布　287
図 133　浦壁池遺跡のナイフ形石器　288
図 134　瀬戸内の沈水谷　289

第 5 章

図 135　各地の石器　297
図 136　畑ケ平高原の火山灰分析　299
図 137　兵庫県北部の鮮新世〜更新世火山岩類の分布　304
図 138　八木西宮遺跡の旧石器　306
図 139　大山田遺跡の旧石器　308
図 140　甲山周辺地形図　317
図 141　甲山山頂遺跡の石器　1　318
図 142　甲山山頂遺跡の石器　2　319
図 143　甲山周辺の国府型ナイフ形石器　322
図 144　甲山採集の石器　325
図 145　甲山周辺の地質図と甲山地形の成因（藤田 1959）　332
図 146　嶽山周辺地形　341
図 147　嶽山周辺地質図　341

図 148　嶽山龍泉寺西採集の石器類　341
図 149　周辺踏査地図　343
図 150　寺ヶ池西岸の石器採集範囲　344
図 151　アーバンクボタ 30 号　346

第 6 章

図 152　旧石器文化第 II a 亜文化期　遺跡の分布　357

写真目次

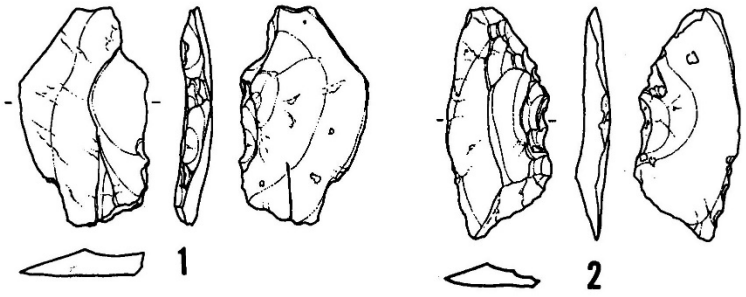
写真 1	末永雅雄先生の二つの大形石器	32
写真 2	展示会「国府遺跡発掘 100 周年―近畿地方先史時代考古学のはじまり―」	35
写真 3	福原潜次郎氏国府遺跡採集大形石器（京都大学総合博物館蔵）	36
写真 4	化石人類頭骨模型（右奥：国府遺跡頭骨）・化石人類復元胸像	38
写真 5	板井寺ケ谷遺跡下位文化層埋没地形	119
写真 6	板井寺ケ谷遺跡の泥炭堆積物	143
写真 7	発掘区南端の泥炭堆積	144
写真 8	姶良 Tn 火山灰直下の樹木化石	144
写真 9	下位文化層礫土壙	165
写真 10	下位文化層礫土壙断面	165
写真 11	兵庫県美方郡新温泉町畑ケ平高原の安山岩四種類の旧石器	305
写真 12	兵庫県養父市鉢伏山東麓の安山岩溶岩露頭	312
写真 13	兵庫県美方郡新温泉町岸田扇ノ山東麓（畑ケ平：亀滝周辺）安山岩溶岩露頭	313
写真 14	兵庫県美方郡新温泉町岸田扇ノ山東麓（畑ケ平：亀滝）安山岩溶岩露頭	313
写真 15	鳥取県八頭郡若桜町諸岡屏風岩の安山岩溶岩露頭	314
写真 16	鳥取県八頭郡若櫻町赤松の安山岩採石場	314
写真 17	東六甲展望台から甲山・大阪平野を望む（西北西から）	316
写真 18	甲山（南から）	316
写真 19	甲山山頂遺跡の石器（左）と周辺の国府型ナイフ形石器（右）	323
写真 20	安山岩の剥離面	324
写真 21	C 地点上部の露頭	329
写真 22	火山岩頸東側標高 250ｍの露頭	329
写真 23	北東標高 210ｍの露頭	329
写真 24	甲山安山岩 B　暗灰色無斑晶質	329
写真 25	北西麓の礫	329
写真 26	北西麓の甲山安山岩 A　黒色ガラス	329
写真 27	C 地点大阪層群中の礫	330
写真 28	C 地点の甲山安山岩 A　黒色ガラス質	330
写真 29	仁川河床の甲山安山岩（A：左　B：右）	330
写真 30	仁川河床の転石　1	330
写真 31	仁川河床の転石　2	330
写真 32	灰色無斑晶安山岩（写真 15 の個体）	330
写真 33	嶽山遠景写真	341
写真 34	汐ノ宮火山岩露頭	341
写真 35	無斑晶安山岩（横山）	341
写真 36	嶽山龍泉寺西採集の石器類	341
写真 37	寺池台住宅地石垣の安山岩　B 地点	343
写真 38	南希望ヶ丘住宅地の安山岩　F 地点	343
写真 39	寺池台の西麓 I 地点、天野川河床の火山岩転石	343

写真 40　1968 年の寺ヶ池改修　344
写真 41　寺ヶ池西岸　石器発見箇所　345
写真 42　石器 1 発見状況　345
写真 43　寺ヶ池西岸　石器 6 発見状況　345
写真 44　寺ヶ池西岸遠景（北から）　345
写真 45　寺ヶ池西岸採集の石器 1　348
写真 46　寺ヶ池西岸採集の石器 2 寺ヶ池西岸採集の石器 2・3　349
写真 47　寺ヶ池西岸採集の石器　4・5・6　349
写真 48　2023 年 10 月、水位の下がった寺ヶ池　350

表目次

表 1　郡家今城遺跡 C 地点の石器組成表　108
表 2　下位文化層の石器組成　125
表 3　上位文化層の石器組成　137
表 4　板井寺ケ谷遺跡周辺の地形要素比率　148
表 5　下位文化層石器ブロック別組成表　156
表 6　石器機種別密度　163
表 7　瀬戸内技法の崩壊過程の組み合わせ　201
表 8　砂川遺跡における個体識別資料　218
表 9　野沢遺跡における個体識別資料組成　220
表 10　瀬戸内技法関連遺物組成　225
表 11　各遺跡の地形要素（4 ㎞圏の百分率比）　257
表 12　台形様石器を再定義した石器組成　280
表 13　兵庫県北部の第四紀火山　304
表 14　兵庫県北部の第四紀火山岩類化学組成（先山他 1995）　305
表 15　甲山安山岩の成分組成表 5-3-2　333
表 16　甲山安山岩ハーカー図　333
表 17　久保弘幸　2021　「但馬高原地帯後期旧石器時代遺跡の編年」　355

前　　哨



板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の横長剥片

前　哨　近畿の 77 年

はじめに

近畿地方の旧石器時代研究史は、1946 年の「岩宿」以前にも直良信夫氏による 1931 年の「明石原人」発見という重要な日本旧石器時代研究上のエポックを有しており、これを考慮するとすでに 92 年の歴史を有している。近畿地方は、「岩宿」以後にまず、鎌木義昌による瀬戸内地域でのいくつかの調査と連動して国府遺跡の発掘が行われた。続いて地域に拠点を置く在野研究者による踏査活動と遺跡発見、資料採集を経てから、同志社旧石器文化談話会メンバーによる二上山北麓でのサヌカイト原産地の踏査・研究へと連なる。最近 40 年間には、いくつかの研究史上重要な遺跡の発掘調査など、いくつかの節目を経ている。

これらは、近畿地方の研究者独自の動きとして発生した場合と、近畿地方の研究動向の自立的な展開によるものではなく他地域の研究動向を受けたものであったり、また他地域から近畿の研究者への研究姿勢や思考方法の変革の連鎖が、遙かに遅れて派生したりする場合も見られる。

本稿では、近畿地方における 77 年を、まず時代を反映した発掘調査遺跡とその成果を、時期的に重複した部分もあるが、「画期」ごとに研究史として整理する。最後に個々の研究内容を紹介するのではなく個々の論考と関係させて近畿地方旧石器研究の成果と今後の課題のいくつかを描き出してみたい。

１．近畿地方における旧石器研究史とその画期

ａ．岩宿遺跡の発掘以前：直良信夫

1931 年 4 月 18 日、直良信夫は兵庫県明石郡大久保村西八木海岸の崩壊土から一片の腰骨化石を採集した。これが後に「明石原人（明石人）」と名付けられたものである。その「明石人」発見以前の 1927 年 11 年 26 日には、同海岸（屏風ヶ浦）にて石器（瑪瑙）を発見すると共に、旧象化石（臼歯）破片も発見し、直良は、日本にも旧石器時代が存在していたと確信していた。直良の西八木海岸での発見は、旧石器時代の遺物と人類化石の同じ「場所」からの発見を目指したもので、近畿地方における旧石器時代の研究は哺乳動物化石と石器との関連を当初から念頭に置いていた、直良信夫によって開始されたと言い切れよう（直良 1931ab、直良 1995、春成 1994）。岩宿を遡る 18 年前である。

その後、この「明石人」の腰骨や、直良信夫の採集した「旧石器」については、春成秀爾をはじめ、考古学や人類学の分野で多くの調査や様々な議論が展開され、1985 年の春成による西八木の発掘調査へとつながった（春成 1987）。発掘の結果、自然科学的分析により「明石人」腰骨算出層は約 7 万年前の西八木層であろうとされ、また人為とも見られる木片の出土をみている。しかし、直良の発見資料自体についての評価は、腰骨が戦災で失われたこと、直良の地

点が海蝕によって失われていることから、今日においてもその決着を見ることはない。

1997 年には西八木海岸から東約 2.5km の藤江川添遺跡（明石市）から瑪瑙製の「ハンドアックス」様の石器が発見された。稲原昭嘉はこの石器について、縄文時代に属する溝状遺構下部の砂礫層中で検出したが、「形態的特徴、使用石材等から後期旧石器時代（今から約 3 万年前）をさかのぼる様相を呈したものとみなされ、旧人段階の人類の存在を強く裏付ける資料となった」と報告した（稲原 1998）。直良信夫の採集した「明石人」骨や「旧石器」の出土が想定されている地層と、今回の「ハンドアックス」が出土した礫層との関係は、今後の大きな課題であるが、一方、近畿地方における「前期（中期）旧石器」の存在を考える上で、サヌカイト石材の開発時期との関係を把握することが大きな課題となっている。

近畿地方でもっとも著名な国府遺跡の 1957 年の再発掘は、戦前に採集されたハンドアックスと考えられた石器や獣骨の出た「礫層」が、旧石器時代のものであるかどうかが発端であったことも忘れられない。また、大阪市文化財協会は長原遺跡や山之内遺跡で、約 10 万年前の層準まで発掘を行い、ナウマン象などの大形動物の歩行痕化石を検出しており、同一水平面に人類活動の痕跡を見いだす試みを続けている。近畿において、その研究史初期において、直良による研究視点の先見性は銘記されなければなるまい。

b．岩宿遺跡の発掘以後：鎌木義昌

直良信夫の明石における調査研究以後、近畿地方では二上山北麓地域を対象とした橿原考古学研究所の総合調査で、1950 年代中頃に大阪府羽曳野市飛鳥新池遺跡が発掘され、若干の遺物が出土したが十分に認識されず終わった以外、旧石器時代に関する研究は皆無であった。

一方、岩宿以後すぐに瀬戸内地域を中心として旧石器時代・縄文時代の研究を進めてきた鎌木義昌らは、1954 年の香川県井島遺跡・岡山県鷲羽山遺跡の発掘調査を皮切りに、各遺跡の発掘調査や表面採集資料調査など、瀬戸内海地方の「先土器時代」文化編年の調査研究を本格化させた。岩宿から約 8 年遅れて 1957・58 年、瀬戸内海地方の東に位置する国府遺跡（大阪府）の鎌木と山内清男らにより行われた調査は、かつて喜田貞吉がヨーロッパ旧石器との類似を指摘した「租石器」の出土層位を確かめるために行われた（喜田 1915）。ハンドアックス状の石器形態から前期旧石器時代の疑いがもたれ、近畿地方での初めての旧石器検出を目的とした調査であったが、多数の縄文人骨などに目を奪われた結果、相当層位までの調査は行われなかった。

この国府遺跡の発掘では、当初の目的とは異なった旧石器が出土し、黄色粘土層中よりサヌカイト製の「相当量の横剥石核、横剥刃器、ナイフ形石器」を発掘した。そしてこの資料を分析した鎌木義昌は、「特殊の技法による石器製作過程が判明し、瀬戸内技法と名づけ」、「この技法によってできあがる剥片を「翼状剥片」とよび、完成したナイフ形石器を国府型のナイフ形石器」と呼んだ（鎌木・高橋 1965）。ここに「瀬戸内技法」・「国府型ナイフ形石器」が提唱され、その後今日に至るまで、近畿地方の旧石器時代研究の技術論的研究の基礎となった。

瀬戸内地方中央部での讃岐北部のサヌカイト原石産地と近畿地方の二上山北麓のサヌカイト

原石産地が広くサヌカイト石材を供給していることと、石器製作技術の特異性が同時に認識されていたことは、研究史的に、瀬戸内・近畿地方の旧石器がどう把握されたかという点で重要である。

鎌木はまた、1959 年の太島遺跡（兵庫県家島群島）の発掘調査では、「井島 I 石器文化」の単純遺跡であると評価し、「その純粋性と独立性が再確認」され、竪場島遺跡の層位的な調査成果により、各型式の前後関係が検討された。そして、「ほぼ国府型ナイフ形石器、宮田山型のナイフ形石器、井島 I 石器文化という順序があきらかにされ」、瀬戸内海での「先土器時代文化編年表」を発表した。結果的に、ナイフ形石器の時間的変遷は、「瀬戸内技法の成立からその衰退へ」の変化とともに、ナイフ形石器自身の「大形から小形」への型式学的な変化がクローズアップされた。

鎌木義昌の瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器・宮田山型・井島 I 型ナイフ形石器の変遷観は、近畿地方各地の在野研究者に大きな刺激を与え、近畿地方各地で旧石器を求めた踏査が活発に行われるようになり、渇水期のため池底や丘陵鞍部などの露地で旧石器の採集が相次ぎ、播磨東部丘陵や高槻、乙訓といった地域に多くの遺跡が知られるようになったが、しばらくは発掘調査例に乏しい状況が続いた。

層位的保証の乏しい近畿地方と瀬戸内地方において、以後この編年観が有効と見なされ、鎌木らの編年案を踏襲する形で、様々な編年案が提起され（松藤 1980、山口 1983、久保 1989、佐藤良二 1989）、技術論的側面の「瀬戸内技法」とともに、近畿・瀬戸内地方の旧石器文化研究の基礎となった。この研究方法は、柳田による編年作業における資料の層位的根拠に対する疑義はあった（柳田 1977）が、特に近畿地方においては層位的出土例が増加する 80 年代半ばまで、その有効性そのものについての検証はなされなかった。

c．ふたがみ：松藤和人・同志社大学旧石器文化談話会

奈良・大阪府県境に広がる二上山北麓はサヌカイト原石産地で、古くからサヌカイト石片が散乱する場所があることで知られていた。戦後には橿原考古学研究所の末永雅雄らによって総合調査がなされ、大阪府飛鳥新池遺跡などで発掘調査が行われているが、旧石器時代の所産であるという認識には至っていなかった。

1967 年、この二上山北麓の遺跡群に注目して同志社大学旧石器文化談話会が結成され、松藤和人らによる二上山北麓の踏査が行われ、サヌカイト石器散布地に国府型ナイフ形石器や翼状剥片、翼状剥片石核、盤状剥片、盤状剥片石核が存在し、二上山北麓の散布地の多くが瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器を基盤とする旧石器時代の所産であることが判明した。この踏査は「ふたがみ」として報告書（同志社大学旧石器文化談話会 1974）が刊行された。

松藤は、採集資料の技術形態的特徴から二上山北麓での瀬戸内技法を模式し、鎌木の国府遺跡での復元を再検討した（松藤 1974）。表面採集資料であるが、量的な検討をともなったこの瀬戸内技法の模式は、広く全国の旧石器研究者に受け入れられ、瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器の「理念形」として使用されるに至っている。この「理念形」は、しばしば一人歩きし、

近畿・瀬戸内地域以外では、模式以外の瀬戸内技法の存在を許容しない判断材料とされ、逆に拡大した定義として広く「瀬戸内系」の判断とされる場合もあるという、一つの技法の模式を逸脱した適用が行われるという弊害まで生み出した。

この同志社大学旧石器文化談話会は、もともと一大学の旧石器時代研究を志す同人によって設立され、主に二上山北麓の遺跡群、近畿地方の旧石器研究を主眼とした活動を行なったものであった。次第に学外の研究者の参加をうけ、1980 年には旧石器文化談話会に発展している。また、当初「プレリュード」と題した談話会の会誌も「旧石器考古学」に改題し、国内では最も歴史のある旧石器考古学専門の研究誌となっている。多くの近畿地方の旧石器編年案や事象研究が全国の研究者の論文・報告とともに発表されている。また、1980 年からは「近畿旧石器交流会」として、近畿地方の旧石器調査・研究に関する交流集会が毎年行なわれ、毎年の交流会のテーマは、その年代での研究動向と研究者の関心を集めた遺跡の内覧会を伴うため、行政機関、在野や大学などの教育機関の幅広い研究者が接する交流の場として重要となっている。

旧石器文化談話会は、会誌や交流会活動・研究会を通して、近畿地方にとどまらない幅広い研究者の交流の場として､研究史的にも重要な役割を果たしてきたということは明らかである。近畿地方において、この専門研究団体が他地域に先んじた非常に早い時期に立ち上がりえた点は、近畿・「京都」という「地」と、近畿に根ざした研究を立ち上げた松藤らの努力を抜きにしては考えにくいであろう。

その後の二上山北麓の調査は、奈良県立橿原考古学研究所による桜ヶ丘第 1 地点の発掘調査（奈良県立橿原考古学研究所編 1979）や香芝市（町）教育委員会による鶴峯荘第 1 地点の調査（佐藤良二 1987）などでさらに資料を蓄積し、行政機関の調査研究による比重を高めつつ、サヌカイト原石産地での瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器盛行期の石器生産遺跡の実体が把握されつつある。

d．増加する旧石器時代遺跡調査：行政調査

1970 年代になると、高度成長期の開発ブームから、埋蔵文化財の緊急発掘調査が増加した。旧石器時代遺跡の調査も、件数やその発掘面積に増加が見られた。これによって、研究者個人によるため池や露頭の採集資料を基とした編年研究が、質的に転換をする転機を迎えることとなったのである。研究の主体は、発掘調査の主担である行政組織の文化財担当者が増加する。

大阪府教育委員会による国府遺跡の発掘の後、大阪府高槻市津之江南遺跡の発掘が行われ、続いて郡家今城遺跡Ｃ地点では、それまでの調査ではみられなかった、1000 ㎡以上もの広さが調査対象となった（高槻市教委 1978）。この調査によって近畿地方ではじめて 8 箇所の石器類ブロック群が検出されると共に、礫群などの遺構も検出され、旧石器時代の「集落」解明への第一歩を記すこととなった。また、石器ブロック群間での接合作業も試みられ、各ブロック群の形成時期についての議論もおこなわれている。

近畿地方中央部では、今日においても旧石器時代の遺構を検出することが非常に少ないが、大阪府藤井寺市にあるはさみ山遺跡（梨田地点）では、国府型ナイフ形石器にともなう「住居

跡」の検出に成功した（一瀬他 1990）。調査区の都合上、住居の約 1/2 の検出にとどまったが、皿状にほりくぼめられた床面の周囲に、7つの柱穴を認め、調査者である一瀬和夫らは、旧石器時代の住居の復元を試みた。また、住居の内外に石器ブロックが分布すると共に、この調査区内で、大形のサヌカイト製の盤状剥片石核を副葬したと考えられる土坑状の「墓」も認められ、集落内における旧石器人の空間の利用の方法についての復元も可能となり、稲田孝司はこの遺跡の復元図を提案している（稲田 1988b）。1990 年には、大阪府教育委員会調査の南河内地域の国府遺跡や青山遺跡などの旧石器資料の報告がまとめて行われている（一瀬他 1990）

さらに、それまで旧石器時代遺跡の存在が皆無であった、大阪平野の「沖積地」からも旧石器時代の石器が数多く出土している。長原遺跡（大阪市文化財協会 1997）や八尾南遺跡（原田・長屋・三原・松藤 1989 大阪府教育委員会 1989・1990a）では、いくつもの地点で石器ブロック石器が検出され、数年にわたる出土層位や、その上下の地層の検討から、ＡＴ火山灰に対比される火山灰層の上下に石器の出土位置が認められた。それまで、火山灰相の発達した近畿北部で先行していた石器群とＡＴ火山灰との関係が、近畿の中央部でも石器群の時間的変化を示す資料を提供する事が可能となった。

このように 1980・90 年代には、行政調査においても厚い沖積層下の洪積層にまで発掘深度が下げられ、これまで「地山」とされていた地層からも旧石器時代遺物の出土が多く知られ、埋蔵文化財担当者の間で「旧石器」が広く認知されるようになった。その結果、小規模な発掘調査でも、確実に旧石器時代の調査例が増加しており、都市化の進む市街地以外の地域でも碇岩南山遺跡（御津町教育委員会 1995）や、勝手野遺跡（兵庫県小野市）の調査や報告がおこなわれている。

ｅ．板井寺ケ谷・七日市以後

1980 年代後半になると、中国山地東部の山間部での旧石器遺跡の調査が行われるようになってくる。これらの遺跡では、姶良Ｔｎ火山灰火山灰との層位関係が把握される遺跡が含まれ、この地域で近畿地方の旧石器編年は急速に進展した。一方、奈良県では平城京左京で、ＡＴ火山灰の下位から、「備讃瀬戸型石刃技法」に類似した技術で製作されたと考えられる、サヌカイト製の 5cm 未満の小形ナイフ形石器の石器群がまとまって出土した（松沢・佐川 1989）。また、90 年代後半には長原遺跡など近畿地方中央部の堆積環境の良好な遺跡での火山灰検出も進捗しつつあり、近畿地方においてようやく層位的事実に基づく編年が可能になりつつある。

中国山地の東に位置する畑ケ平遺跡では数地点で、この火山灰の下位から台形様石器などが多数検出された（高松・山口 1991）。兵庫県溝口遺跡では、堆積環境は良くなかったが、ＡＴ火山灰降灰以前と考えられる石器群が出土している（山下・南 1986）。

1980 年代には舞鶴自動車道建設工事に伴って、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡や、七日市遺跡の調査がおこなわれた。また、三田市溝口遺跡でも広面積の調査が行われている。郡家今城遺跡発掘調査以降、近畿地方各地で旧石器時代遺跡の調査例も多くなると共に、大型開発工事に伴って、

調査対象面積も大きくなり、石器ブロックと当時の地形の関係や、自然環境の復元も試みられ、「遺跡」全体の復元を念頭に置いた旧石器時代の調査が試みられるようになったのである。

板井寺ヶ谷遺跡は、篠山盆地の北端にあり、当時の湿地を望む地形の変換点に存在している。地形と調査区がうまく一致し、ほぼ集落を完掘したと考えられ、遺物分布は陸地部を中心として一部は湿地部にまで及んでいる。湿地部には泥炭が堆積し、自然環境に関するデータが得られている。ＡＴ火山灰を挟んだ２枚の文化があり、下位文化層ではサヌカイト製の瀬戸内系主体の石器群とチャート製の中国山地系石器群が出土した（兵庫県教育委員会 1991）。

調査者は、石器類ブロックを 13 群認定し、６～７世帯の存在と２作業空間を認定している。さらに、遺跡の南北で石器石材分布が異なること、石材の違いが技術的背景の相違と一致すること、接合関係の共有も南北に分かたれること、両石器群は相互に領域を尊重しあっているとみなせることなどを分析し、二つの石器群はそれぞれ異なった人間集団を示し、板井寺ヶ谷下位文化層で瀬戸内系と中国山地系集団が同時存在していると解釈し、瀬戸内系と中国山地系の地域集団の直接的接触の「集落」であるとした（山口 1991a）。

七日市遺跡は、兵庫県と京都府を縦貫する分水界の近くにあり、標高 100m以下の瀬戸内側と日本海側を繋ぐ「氷上回廊」に存在する。七日市遺跡は、1984 年から数次の発掘が行われ、すでに４万㎡が発掘され、推定総面積では１０万㎡にも及び、面積的には西南日本最大級の遺跡となっている。ＡＴ火山灰下位に少なくとも３枚の文化層があり、石器類ブロックが数十カ所検出されている。石器群は局部磨製石斧が 10 本出土しており、在地のチャート石材製のナイフ形石器・台形様石器が主体で一部の石器類ブロックを除けば、石器密度は高くなく、それらが低い扇状地隆起に遺跡が存在することから、短期間ではあるが、大形動物の狩猟解体のために「集団群」が形成され、結果として「大遺跡」が形成されたと考えられている。（山本 1998）。

1993 年から 1998 年までの間に、兵庫県教育委員会によっていくつかの発掘調査がされている。1998 年９月に兵庫県氷上郡春日町で行われた「三万年のメッセージ、七日市遺跡」シンポジウムでは、調査担当者により、積極的に、遺跡が氷上回廊にあり、立地と遺跡・石器群の内容を結びつけて遺跡形成の背景を考察すべきことが主張された。洪積世大形動物群の季節移動と「氷上回廊」、長期間継続される遺跡形成、局部磨製石斧の機能と大形動物解体などが検討され、このような背景を考慮して石器群の内容理解と遺跡立地を考えるべきであろうとした。発掘調査の報告と、さらに分析結果の公表が待たれる。

三田市溝口遺跡で遺物分布構造の分析が行われ、世帯存在の推定が行われ（山下・南 1986b）、板井寺ヶ谷遺跡と七日市遺跡の積極的な遺跡構造についての調査・分析が行われたことは、堆積環境が安定した、遺跡の保存状況の良い場所で、サヌカイト石材以外の個体識別・接合作業の容易なチャート石材が存在し、その分析作業が容易であったことなどの要因が考えられる。また調査担当者の問題意識のあり方も大きく影響する。

郡家今城遺跡の調査の後、近畿地方において遺跡内遺物分布の分析は必ずしも盛んにならなかったのは、近畿地方中央部での遺跡の石器群がサヌカイト石材製であり、個体識別や接合作業に甚だしい困難があること、複合遺跡が多く上層からの掘削を受けた場合が多いこと、市街

地の遺跡では広範囲の発掘例が乏しいことなどが複雑に絡んでいると思われる。

1992 年、郡家今城遺跡以降、大規模調査事例に恵まれなかった近畿地方中央部において、二上山北麓のサヌカイト原石産地から約５ｋｍ離れた大阪府羽曳野市翠鳥園遺跡で、数千㎡が発掘され、数万点の石器類が原位置を保ってあたかも石器製作時そのままの状態で出土したことは、「旧石器時代の石器製作アトリエ」として広く喧伝され、耳目を集めることとなった。

出土石器群は、サヌカイト石材製で、人頭大の円礫を利用しており、やや原石産地にさかのぼった石川などの河川採集が想定される。国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期の所産で、盤状剥片石核・盤状剥片・翼状剥片石核・翼状剥片・国府型ナイフ形石器が多数出土している。

翠鳥園遺跡では、積極的に接合作業が行われ、調査担当者の不断の努力によりサヌカイト石材にありながら接合率は極めて高い。石器類ブロック内で瀬戸内技法の行程が順をおって展開していく様相があり、石器類ブロック単位で激しく接合する事例が多数認められた。翠鳥園遺跡では､多くの瀬戸内技法接合個体が一つの石器類ブロックの中で円礫状態近くまで復元され､瀬戸内技法は一つの石器類ブロックでほとんど作業位置を動かさず一貫して展開する様相が多数把握されたという（京都大学博物館 1994）。国府型ナイフ形石器生産のための「アトリエ」として特化した感が強い遺跡であり、同じ台地にある国府遺跡やはさみ山遺跡とは異なった様相を示している。

多数の瀬戸内技法接合資料は、二上山北麓の原石産地遺跡での瀬戸内技法のあり方と比較検討でき、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期の石器生産の様相の解明に資することとなろう。また、原石産地から離れた遠隔地の、たとえば郡家今城遺跡などとの対比を行う場合の対比遺跡の一候補と考えられる。

近畿地方中央部において、郡家今城遺跡に続いて、サヌカイト石材製石器群が多量に接合され、遺跡形成の分析が行われる遺跡として翠鳥園遺跡は重要であり、その全容の報告が待たれる。

２．近畿地方旧石器研究展望

ａ．編年研究の現状と課題

瀬戸内地域における調査研究の成果によって、鎌木義昌らによって提案された「鎌木編年」を批判・発展させる形で、柳田俊雄（柳田 1977）が鎌木編年の問題点を総括し、松藤和人（松藤 1980）をはじめ、山口卓也（山口 1983）、久保弘幸(1989）らは、相次いでナイフ形石器文化の編年を提案した。また、松藤は角錐状石器の集成と編年的位置の検討を行っている（松藤 1981）。これらの編年研究は、板井寺ケ谷遺跡や七日市遺跡などの中国山地東部や長原遺跡や八尾南遺跡などの近畿地方中央部での層位的出土例や一括性の高い良好な検出例の近年の増加を次第に咀嚼・包有させることによって、次第に整備され、それらの間にあった相違点を解消しており、現在近畿地方の基礎的な編年作業がほぼ成立しつつあるように看取できる（佐藤良二 1989）。

初期の編年案に共通して言えることは、各遺跡の石器群に見られる形態的・技術的特徴が、「瀬戸内技法」や「国府型ナイフ形石器」を中心とする「国府石器群」との技術的な距離の遠近で論じられるとともに、ナイフ形石器自身の大きさ、つまり大形から小形への時間変化が編年案の根幹に据えられているということである。編年案は、最初は型式論的に完成された「瀬戸内技法」が崩壊していくという一方向の変遷過程が、板井寺ヶ谷・七日市（山本・山下・守岡 1998）の層位的検出による姶良Ｔｎ火山灰以前の瀬戸内系旧石器の検出以降は、発生から成立へも考慮した２方向の変遷観へと変更されてきたように思われる。崩壊過程についてはどの編年案も大きな差異はない。

また、山口はサヌカイト原石産地開発と瀬戸内系横長剥片石核剥離技術の成立の関係を仮説している（山口 1998a）。原石産地周辺の石材供給の容易な場合と遠隔地の場合で、石器群の様相が変わる可能性を考慮し、石器群の様相の評価には、遺跡がどこにあるのか、石材供給の状況により石器群の「顔つき」ががらりと変わる可能性があり、時期差と間違う可能性があることを指摘している。郡家今城遺跡のナイフ形石器と遺跡内接合資料の翼状剥片と翼状剥片石核の形状の乖離が想起されよう。

近隣地域、特に瀬戸内地域・中国山地との関係は、その編年作業に際し相互に参照されてきたが、二上山と讃岐の二つの異なったサヌカイト原石産地、中国山地帯内の在地チャートなど堆積岩系石材を使用した石器群などや、汎日本的な石器群との関係も整理して検討する必要があるだろう。全国編年に近畿地方旧石器の位置付けは、佐藤宏之（佐藤 1992）らにより試みられているが、地域間を相対化する時点で根拠の相違から大きくばらつかざるをえない。また、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法に代表される瀬戸内系旧石器は、日本列島内で特異性を強調せざるをえない構造的な相違点が存在することの意味を明示する必要があろうし、全日本的な編年案を試案する際の近畿地方側からの視点・根拠が問題となるだろう。

全体として近畿地方旧石器のナイフ形石器段階の編年は､個々の遺跡の石器群を直接比較し、その差異を時間差と考えるという、基本的に「時間軸」しか考慮しないという姿勢が未だに強くあることは、近畿地方の旧石器研究に問題を残しているといえよう。個々の石器群は、その遺跡のある場所で、その形成時の脈絡の中で解釈されるべきであり、その相違がどこから生まれているかを考慮してから編年評価されるべきであろうと考える。サヌカイト原石産地と遠隔地の国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期の石器群は、異なったあり方を示すことは、よく知られている。まずその相違をもたらす脈絡を解きほぐす試みを続けなければならない。

近畿地方において、未だ間違いなく前期（中期）旧石器として評価できる資料は検出されていないが､大阪市長原遺跡や山之内遺跡での大形動物歩行生痕化石は､同一平面上での前期（中期）旧石器時代人類の活動を予感させた。明石の藤江川添遺跡の瑪瑙製石器は、前期旧石器の在否を考える上で重要であろう。近畿地方中央部の後期旧石器文化がサヌカイトで、後期旧石器初頭から高度な石材戦略を持って開発されたという点は意識しなければならず、藤江川添遺跡の石器を評価するなら、前期（中期）旧石器はサヌカイト石材開発以前の時期と推定され、サヌカイト以外の石材である可能性が高くなる。

ｂ．瀬戸内系旧石器の石器製作技術研究

瀬戸内技法の実体解明は、近畿地方において鎌木・松藤らによって国府遺跡調査、二上山北麓・桜丘第１地点資料の研究によって進展し、近年の鶴峯荘第３地点、翠鳥園遺跡でさらに分析対象を得た。瀬戸内技法第１工程・第２工程の展開と国府型ナイフ形石器生産のあり方が把握された。石器の技術形態的研究の大きな成果である。

この結果、瀬戸内技法とサヌカイト石材の結びつき、技術形態的特徴が鮮明となり、この模式図は、容易に判別可能な石器群判別方法としても流用されるようになった点では、一部に混乱を生じさせている。

この瀬戸内技法の解明は、原石産地とその周辺遺跡で行われたが、国府型ナイフ形石器は、遠隔地の遺跡でも多量に出土し、郡家今城遺跡では多数が搬入されている。郡家今城遺跡など遠隔地においては、国府型ナイフ形石器や翼状剥片と遺跡内生産の剥片やナイフ形石器と乖離があり、典型的な瀬戸内技法工程資料に乏しく、接合資料などのみを観察すると国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期の所産とは認めがたい特徴を示している。一方、二上山北麓の遺跡のほとんどが国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期の遺跡で、それ以前・以後の石器群は認められない。遺跡個々の石器生産技術の検討は、その遺跡がどの時期のどの場所にあるかを勘案して行う必要がある。

ＡＴ火山灰以前の石器群は、長原遺跡 14 層（趙・藤田 1991）や平城京、板井寺ケ谷遺跡下位文化層、七日市遺跡などで出土しているが、いずれも原石産地からはやや距離をおく。国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期との間に時間差があることは明らかであるが、石器生産技術にどれだけの違いがあるかは十分に明らかになったわけではない。現状では、平城京左京の事例を除けば､多くが瀬戸内系横長剥片石核剥離技術の範囲にあることが明らかになっている。

国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法やその他のナイフ形石器と瀬戸内系横長剥片石核剥離技術が、第１工程と第２工程、ナイフ形石器成形の第３工程に分けられ、原石産地と遠隔地遺跡との間で数的・重量的な極端な差が存在することから、後期旧石器時代石器生産の異所展開（山口 1994a）という考え方で、瀬戸内系旧石器の石器生産技術と遺跡分布、地域性の発生を説明しようとする提案もある。第１工程・第２工程・第３工程といった石器生産上の工程区分は、原石産地の限定されるサヌカイト石材を遠隔地まで安定して石器素材として供給するために始まり、最初は石核素材の搬出に適応して石器生産の異所展開に対応した工程区分を発生させ、製品としての国府型ナイフ形石器や翼状剥片を移動させる瀬戸内技法の段階で極相を迎えるとする仮説である。今のところ原石産地周辺遺跡と遠隔地の対比遺跡が少数で、藤井寺丘陵の遺跡群や高槻周辺の遺跡のあり方など、仮説が模式的にも成立するかどうか、遺跡数の増加を待って検証が行われなければいけないであろう。

ｃ．遺跡構造研究・地域集団論

板井寺ケ谷と七日市遺跡、溝口遺跡は中国山地東部の、郡家今城遺跡と翠鳥園遺跡、はさみ

山遺跡などは近畿地方中央部の、遺跡構造を遺物分布の分析を通して検討できうる発掘調査例であろう。はさみ山遺跡や板井寺ケ谷遺跡では住居や集石土坑などの検出もある。面的な発掘が行われ、遺物や遺構が原位置を保って検出される遺跡は、本来的に遺跡構造研究の対象となる。個々の礫群や土坑、住居址といった遺構の集成・研究も、事例の増加とともに研究対象と成り得るであろう。

今のところ、石器の分布状況を、接合と個体識別で分析する試みについては、板井寺ケ谷遺跡や七日市遺跡、翠鳥園遺跡以外には、ほとんど近畿地方中央部では認められない。多くは接合資料を石器製作技術の分析に供しているにとどまる。サヌカイト石材地域での遺物分布構造の研究は、今少しの忍耐と研究方法の工夫が求められよう。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の遺物分布構造は、サヌカイト製石器群とチャート製石器群に2別され、それぞれ瀬戸内系と中国山地系石器群として二つの集団が共存したものであると分析されている。遠隔地材のサヌカイト石材と在地チャート石材の接合と個体識別作業から分析されたものであるが、由来の異なる石材と技術的背景の異なる共存は、この場合有効な検討対象となっている。

近畿地方における旧石器時代地域集団論は、長く国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法に代表される地域性が強調されるにとどまり、旧石器時代社会や集団を問題とした研究少なかった。古くは近藤義郎（近藤 1976）と春成（春成 1976・1981b）により行われたにとどまる。近藤は近畿地方にもいくつかの遺跡集中があり、それぞれに単位的な集団が想定できるとし、また、春成は、播磨の遺跡にしばしばチャート製石器が含まれることから、丹波・中国山地の集団と瀬戸内地域の集団が接触していると考えた。近年では、板井寺ケ谷遺跡を分析した山口は、近畿地方の瀬戸内系旧石器の主分布域が中国山地帯には及ばず、瀬戸内系旧石器の石器生産が原石産地と遠隔地の中で「異所展開」が行われた範囲ではないかと考え、中国山地の他地域集団との棲み分けがなされたとしている（山口 1991b）。佐藤宏之は、このような原石産地へのアクセスと主生活領域が一致する状況を「開発圏」という概念として示し、瀬戸内から大阪湾、近畿地方中央部への地域集団存在を推定している（佐藤 1992）。

近畿地方における遺跡構造と地域集団論の研究は、編年研究の整備の時点での問題を抱えた近畿地方にあって、この問題に慎重な姿勢を示す研究者が多かったことは事実であろう。ある程度の編年的展望を共有できつつあるこれから、地域内の視点を隣接地域との接触・関係をして捉え直し、今後翠鳥園や七日市、増加する調査例によって、さらに活発化することが期待される。

おわりに

近畿地方における旧石器時代研究を振り返ってみると、広域火山灰と地域的な堆積環境の解明が進んだことにより、ようやく編年研究に層位的事実に裏打ちされた編年案が確立されつつあり、また遺跡構造分析や旧石器社会論も緒端に着いたばかりであることが知れる。これから、

阿蘇や大山起源の広域火山灰が重なる発掘例が増加すれば、それぞれの石器群に時間軸を与えることができる。また、石器の技術形態的比較研究や石器生産技術の分析は、サヌカイト石材に対する研究者の観察に対する「習熟度」が高く、今後も多くの成果を上げうるであろう。また、今後は、従来では調査の及ばなかった沖積層下深くの遺跡調査も期待され、近畿地方中央部での遺跡増加も期待できよう。遺跡構造研究など従来手の回らなかった分野での研究も、試行錯誤の上で生み出されつつあるように思える。

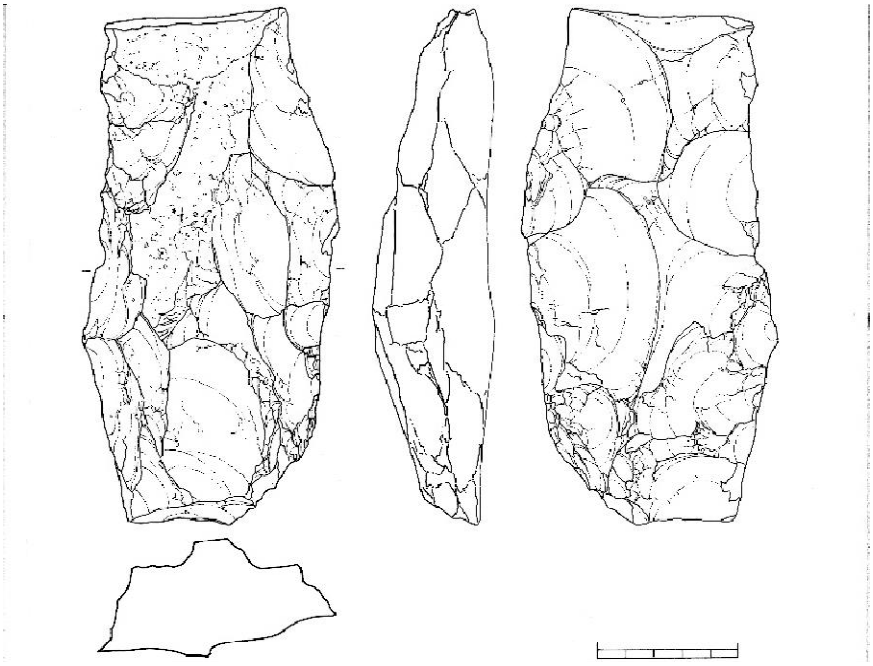
行政組織に、埋蔵文化財としての旧石器時代遺跡という認識が徹底されつつあり、府県単位では各県に旧石器考古学を専門とされる専門職員が配されているし、市町単位でも対応能力が上していることが窺える。文化財に対する社会の理解は、その社会的・経済的動向などに大きく影響されるので、出来つつある好ましい環境が継続されることを願わずにはいられない。翠鳥園遺跡など驚くほど良好な遺存状況を呈する遺跡が発掘され、また保存されて公園化されるなど、行政責任者の発言で「旧石器は遺跡ではない」などと嘆かれたのも遠く研究史の一過程かと思われるようになってきたのだから。

2000 年 11 月に露呈した「旧石器捏造事件」（日本考古学協会 2003）は、近畿地方旧石器研究者にも、研究方法、考古学的データの記録と保存、その公表の仕方など、その取り組みに対して、「疑い」から再出発せざるをえないまで、大きなダメージを与えた。

2001 年以降、21 世紀になった近畿地方旧石器時代研究は、実はあまり大きな飛躍をすることができず、一面、停滞しているようにも見える。一つには、この間に行政発掘による新発見の旧石器時代遺跡が少なくなったこと、中堅の旧石器時代研究者の活動量が減少したことも関係するだろう。

しかし、本稿ですでに概観したように、近畿地方には次の研究段階への飛躍の胎動は確実に認められよう。編年研究や石器群の技術形態的比較研究は、今までに蓄積された遺跡や出土資料によって、ますます精緻に行える環境がととのったといえる。また、遺跡の遺物分布構造や地域集団論は、事例を増すとともにいろいろな試みが続けられるであろう。

第1章　サヌカイトという石材をめぐって



末永雅雄先生採集のサヌカイト製大形石器

第 1 節　濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」

－二上山の「二子石」「Futagonite」「讃岐石」「Sanukite」－

1. 濱田耕作の「二子山文化」

1930（昭和 5）年 12 月 7 日、本山彦一大阪毎日新聞社長が故神田孝平男爵蒐集資料を譲り受け、大阪府堺市濱寺にあった本山邸で、喜田貞吉、清野謙次、末永雅雄ら考古学研究者が参集した展観が催された（末永 1986 p 73）。

京都帝国大学考古学教室の濱田耕作教授（1881～1938）は、展観のあいさつで

「本山翁の蒐集品といひ、神田男の舊蔵品といひ、之を手に取ってみると、確に我が考古學発展史を見る感がある。殊に河内、和泉附近は、奈良朝、飛鳥時代文化の根拠である二子山文化の發祥地である。此の地に住まれる本山翁が、故神田男の舊蔵品を手に入れられ、その他の出土品と共に我々の研究に資して戴くことは我國考古学界のため慶賀に堪へぬ次第である」

と述べた（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 546）。濱田教授は大阪和泉岸和田出身で、本山邸のある堺浜寺の近隣であったので、ことさら河内和泉の地名を強調している。

筆者は、関西大学博物館蔵本山コレクションの由来を検討した際（関西大学博物館 2011）、この濱田教授のあいさつに、「二子山文化」という言葉があることに気がついた。耳慣れない言葉であったので考古学歴史学での記述を探索したところ、同年の濱田教授の講演記録「考古学上より見たる大和」（濱田 1930）に、二上山から石器石材が出て、これが安山岩（アンデザイト）の一種である「サヌカイト」（讃岐石）または「フタゴナイト」（二子石）であり、近畿圏広く使用されたとあるのを見つけた。濱田教授の「二子山文化」は、「近畿地方の石器時代二上山産出サヌカイト石材の石器文化」であり、さらにその「サヌカイト」の別名として「フタゴナイト」（二子石）があることを理解した。

「二子山」という山名は、二上山に添えて大坂名所図會（秋里籬嶌［著］、丹羽桃渓画 1801）に記されていて、現在の二上山の別称であることがわかるが、現在の地図表記や地名には残存しない。近畿地方の石器時代考古学でも、「二子石」「Futagonite」「二子山文化」を使用する研究者は管見の限りではない。

一方、近畿地方の旧石器・縄文・弥生時代、打製石器の石材として主に利用された「サヌカイト」は、「黒色」「ガラス（玻璃）質」「無斑晶」な安山岩（デイサイト含む）である。瀬戸内火山岩区の二上山産出であることを前提に、同種岩石も讃岐産に合わせて「サヌカイト」と経験的に呼びならわしてきている。あくまで、考古学が学史の中で石材を識別認識した時に、地質学岩石学から取り入れた名称であるが、地質学岩石学分野のアップデートに追従していないので、古くなった名称や区分、概念が取り入れられていて、研究上の齟齬も今や生じるようになっている。また、支配的石材であることから、経験的に死角になっている問題もあるのでは

なかろうか。

本稿では、「サヌカイト」という岩石名が、二上山産同種石材も含めて使われるようになった経緯、濱田耕作京都帝国大学教授の「二子山文化」「二子石」「Futagonite」、さらには末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所所長・関西大学名誉教授（1897～1991）の「二上山文化」、「サヌカイト」という石材名称をめぐる顛末をみてみたい。

濱田耕作 1930「考古学上より見たる大和」（一部抜粋）『奈良文化論叢』第一編

南河内では此の国府を以て代表的の「ステーション」と致して差支へはありませぬ。処が何故に此の地――若しくは地方が斯く主要なる石器時代の遺跡を遺すに至つたかと申しますると、其の理由の一は、実は此の遺跡の東方一里半許り、丁度大和との国境、かの大来《おほく》皇女が「二上山を妹（弟？）背と我が見む」（万葉、ニ）などと歌はれた大津皇子の御墓のある二上山から、石器の材料として近畿地方に広く使用せられてゐる安山岩《アンデサイト》の一種「サヌカイト」（讃岐石）若しくは「フタゴナイト」（二子石）など今日の鉄にも相当する適当な原料――が産出せられる為であります。そこで此の手近な原料を取り来つて、こゝに石器の大なる製造所が発達し、また其の原料の侭地方へ移出する市場が現出したと考へられるのであります。

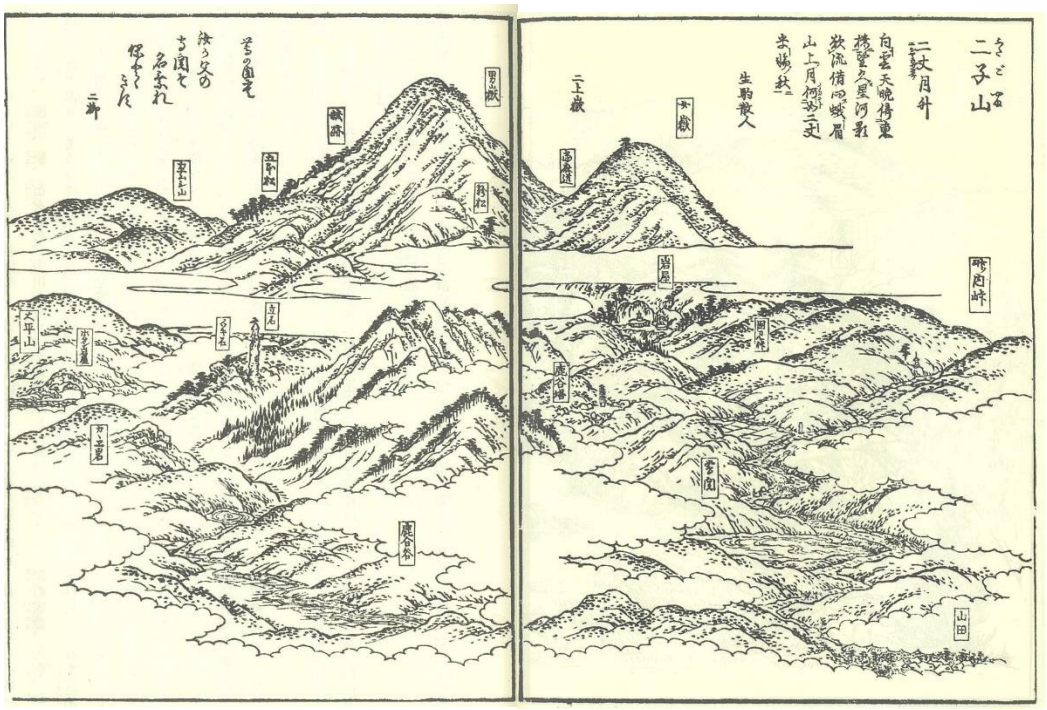


図 1　秋里籬嶌著・丹羽桃渓画 1801『大坂名所図會』　二子山　二上嶽

2.　濱田耕作教授の讃岐石（Sanukite）と二子石（Futagonite）

濱田教授は、石器石材産地として二上山産出のガラス（玻璃）質安山岩「サヌカイト」に注目した最初の考古学者である。第三高等学校在学中の 1900（明治 33）年、国府遺跡などの河

内周辺の遺跡の石器が粘板岩（山崎 1889）ではなく火成岩であることに着目して、松島鉦四郎第三高等学校教授から地質学岩石学の研究を取り入れ、讃岐石（Sanukite）と同等の石材が二上山でも産し、石器石材となっていることを報告した（濱田 1900）。

京都帝国大学文科大学考古学講座教授に赴任した後、1917（大正 6）年、「大形粗石器」と旧石器在否問題を契機とした河内国府遺跡の調査では、京都帝国大学の小川琢治教授から地質学岩石学の専門知識を仰ぎ、分析により二上山産玻璃質安山岩が讃岐産と区別できる可能性と「二子石（Futagonite）」と命名する地質学岩石学研究者がいるとの示唆から、二上山産出ガラス（玻璃）質安山岩に「二子石」（Futagonite）という名称を付す提言を躊躇なく自らの調査報告書に取り入れた（濱田 1918）。

その結果、「讃岐」を冠せず近畿地方における石器時代の石器生産の姿をより鮮明に顕在化させることに成功する。石器生産と流通、分布範囲を根拠として、自らの考古学的次元での「文化」に「二子山文化」という命名を与えることになったのだろう。あえて地名として一般的な「二上山」という山名と、近畿地方から離れた地域名が取り込まれた「讃岐石（Sanukite）」を使用しなかったことを注目したい。

筆者は、学生時代（1976 年）に濱田教授の国府遺跡発掘報告書を初見した際、「二子石（Futagonite）」は、「二上山の石という別表記」（Futag(ami)onite）で、近畿地方石器石材「サヌカイト」のことであると短絡的に読み替えていて、すぐには「二子山文化」と結びつかなかったことを告白しておく。

国府遺跡報告書の註（4）は、考古学的一般岩石名称として「玻璃質安山岩」を提案し、考古学的石材産出地が限定できる場合には「讃岐石」や「二子石」とすることを可とする。又はこれを一般名称に付して「讃岐（産出）＋璃質安山岩」などとすることを示唆する。この濱田教授の考古学的岩石命名法は、生物学における属名と種小名を続ける「リンネ二命名方式」に類似するものとみなせる。

この当時、地質学岩石学は、岩石学的大別を前提に基準サンプルが採取された場所を尊重する「富士石」「御影石」などの一命名表記が主流であった。濱田教授の考古学的石材名称命名法の先進性は際立っていて、現在も考古学で「御影石」「鉄平石」「サヌカイト」などと記述して、一般名称「カリ長石花崗岩」「安山岩」や「ガラス質安山岩」を省略して運用することが多いが、濱田教授の方法で記述すれば、のちに同類石材の産地が新発見されても、混乱が避けられると見込まれていたのだろう。

図 2　濱田耕作京都帝国大学教授

図 3　通論考古学（濱田 1922）

濱田教授は 1922（大正 11）年の著書『通論考古学』で、**「自己の臆説による時代・民族等の意義を包む名称を付するを避くべし。ただそのものの性状を表示し、もしくは最初に発見せられたる地名等を冠するを以て最も適当なり」**（第2編第1章18「遺物・遺跡の名称」）とし、命名による概念の混乱をさけようとした。さらに、特定石材の石器が分布する範囲は、先史時代人の移動や交易を示すものとして注目し、考古学として地質学岩石学上の知識が必要であることを言明（第 1 編第 3 章 13「地質学」）している。考古学本来の学理として、他の科学分野の知見を考古学的上位概念まで構築する姿勢を説いている。

濱田教授の事例は、地質学岩石学の命名による岩石名が、石器素材の由来の明示につながり、さらには考古学的現象の解釈としての「文化名」にまで昇華するという濱田教授の典型的な道筋が示されているといえよう。1930（昭和 5）年の本山への祝辞や講演での「Futagonite」「二子石」「二子山文化」の言及は、濱田教授の考古学研究への姿勢を如実に表している。

濱田耕作 1900「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」『東京人類学会雑誌』第 15 巻第 174 号 p482

序なれば一言せむ従来此の地の石器の石質は粘板岩なりと記され余りしか信ぜしがつらつら精査するに粘板岩にはあらずして火山岩の一種なるが如し、我が校の松島教授に質せしに安山岩か又讃岐石 Sanukite なるべしと云はれき。但し顕微鏡の検査を経て後断定する所あるべし、もし讃岐岩ならば地質学上讃岐地方にて発見さるるものにしてこの邊にては珍しきものにあらずと云ふ、大和河内の国境ニ上山の邊には安山岩があれば其れなるやも知れず、而して此の岩石も矢張り此の山の麓あたりより出つ此の地方にては俗に金石といふ蓋し其の音金の如きを以てなり建築等に用衣いる、讃岐にては讃岐石をチンチン石とかカンカン石とか称するとぞ。

・・・・・・・山城和泉地方にては此の岩石の産地なし似て交易の模様など考ふ可き也。

・・・・・・・尚委しく此の洪積層の端に接して探索せば遺跡遺物を発見する事あらむ。

濱田耕作 1918『京都帝国大学文学部考古学研究報告第２冊　河内国府石器時代遺跡発掘報告』

第３章第１節ｐ14　９行目から 12 行目　旧字を改める

此等石鏃等打製石器は一切黒色の玻璃質安山岩（ニ子石）を用ひ毫も他石と交へざりは國府遺跡をはじめ近畿諸地に於いて普通に見る所の現象なり。其の原石は恐らくは國府の東方約ニ里なるニ子（ふたご）山方面より採集せしなる可く、土俗之を金石（かないし）と称す蓋し打てば其響金属の如きを以てなり（4）。

【註】

（1）磨製石斧の従来此の地にて発見せられたるもの数者を聞く。其の石質は何れもニ子石以外の石を以て造り、蛤刃のものなり。・・・・・

（4）此の石器の材料に就きては、従来粘板岩と称せられしも、余輩は明治 32 年「南河地地方に於ける石器時代遺跡と古墳」に於いて、理学士松島鉦四郎君の鑑定に本き、之を讃岐石（Sanukite）となせり。更に之を理学博士小川琢治君に質すに、玻璃質安山岩にして讃岐石とは殆ど同性質のものなるも、ニ子山より出るを以てニ子石（Futagonite）と命名せる学者ありと云ふ。されは一般的には玻璃質安山岩と称し、特に國府石器の如く、ニ子山より原石を採り来れることを想定し得るものに就きては、之を「ニ子石」と称するを可とす。

濱田耕作 1922『通論考古学』第１章第２編 18「遺物・遺跡の名称」

新たに発見せられ　もしくは注意に上るに至りし遺物・遺跡に対しては、考古学者はこ れに適当なる名称を付するの必要あり。　こ の際学者はすべからく自己の臆説による時代・民族等の意義を包む名称を付するを避くべし。ただそのものの性状を表示し　もしくは最初に発見せられたる地名等を冠するを以て最も適当なりとす。なぜなれば自己の学説は将来の研究により動揺すべきことを予想するは　ひとり謙譲なる態度たるのみならず、過去学界の歴史はこれを証明して余りあり。されば学説の変動するごとに、名称を変更するの不都合を避くるために、あらかじめ学説と関係なき名称を付すべきなり。しかるにわが国においては由来・文字・名称の末に関する議論多く、学者好んで自己の学説による新名称を冠せんとする釈あるは深く加しむべしとなす。

しかれども名称の混乱はなはだしきか あるいは適当なる機会あるに際して、学者の一堂に会合して、前記のごとき主義の下に、名称の協定を試むることは、吾人これを歓迎す。こ れひとえに名称の統一に利あるのみならず、学者の協力・親和を将来すべければなり。ただかくのごとき機会あるまでは、努めて旧称呼を用いて、自己の見解は、ただこれをその注解として付するにとどめんことを希望してやまず。

3.　地質学岩石学の讃岐石：サヌカイトと瀬戸内火山岩区

現在の岩石学分類では、火成岩はその科学的組成によって区別される。日本の岩石学初期には個別命名されていて、和名岩石学名「富士石」とも呼ばれた「安山岩」は、その学術名称が「アンデス山脈の火山岩（Andesite)」であることから、アンデス山脈を「安山」に置き換えて「安山岩」となっている。火成岩で SiO2 が 53-63%のものを安山岩、それ以上 70%までをデイサイト（石英安山岩）とし、成分的には深成岩の閃緑岩と花崗閃緑岩に対応する。酸化マグネシウム（マグネシア MgO）が豊富なものは高マグネシアとして区別し、瀬戸内火山岩区に特徴的なものとされている。なお、現在の地質学岩石学では、地名を冠した命名は推奨されず（巽 2003)、岩石名称の増加が回避されたが、成分比で区別できる標識サンプルが採取された場所を冠した岩石名も継続して使用されている。

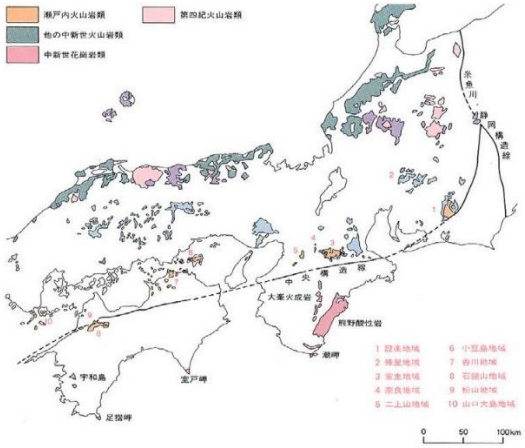


図４　近畿・中国地方の第三紀第四紀火山岩分布（沢井誠・佐藤隆春　1989 より）

サヌカイト（Sanukite：讃岐石）は、新第三紀後半の岩石学的高マグネシア安山岩（デイサイト含む）の中で、ガラス質石基（ガラス質）、斑晶に乏しく黒く緻密なものを呼称する。マグネシウムに富む橄欖石、斜方輝石などのわずかに含まれる斑晶は、高温の初生安山岩質マグマ（深さ 30〜50km のマントルで生じた未分化マグマ）が急激な噴出により急冷されて晶出したものとされる。讃岐の第三紀火山活動で特徴的な産出をしたことから「讃岐石」と命名されたが、類似の特徴を持つ安山岩（デイサイト含む）は、中央構造線北側に沿って瀬戸内火山岩区を含む内帯に、近畿地方から九州まで広域に分布する。

一方、マグネシウム比率が低い漆黒や暗灰色無斑晶のガラス質安山岩（デイサイト含む）は日本列島に広く認められている。今日、これを考古学的な研究のため、「瀬戸内火山岩区のサヌカイト」と「二上山産出」を区別して、後者を含めて「ガラス質安山岩」や「黒色緻密無斑晶安山岩」などとして取り上げることがあって（杉原・小林 2006)、「ガラス（玻璃）質」は、考古学的な区別で使用される岩石の特徴であることを注意しよう。

サヌカイト（Sanukite：讃岐石）は、明治期のお雇い外国人エドムンド・ナウマンが発見して（ナウマン 1885)、「カンカン石」という印象的な名称で紹介した。さらにドイツの岩石学者エルンスト・ヴァインシェンクが命名（Weinschenk1891）したもので、日本の地質学岩石学では 1890 年代後半あたりから同種岩石に Sanukite（サヌカイト）･讃岐石の名称が使われてきた。小藤文次郎東京帝国大学教授は、1916（大正 5 ）年の英文論文で、その岩石学的成分組成を明示した（小藤 1916)。

近畿地方中央部では、現在二上山や三笠山、甲山、生駒山（宝山寺・石切）などで高マグネシアのガラス質安山岩（、サヌカイト・サヌキトイド)、二上山、畝傍山と耳成山、信貴山で流紋岩などの産出が知られている。これら火山岩産出地の多くは、地質調査所のナウマンが主導した日本全域地質図の作成作業として、1882（明治 15）年から 83 年に東京帝国大学学生に課された踏査の結果把握された地点が多いと言われる（今井 1966)。「甲山」の地名は、ナウマンが 1885（明治 18）年の論文中に記載している（ナウマン 1885)。生駒山は、ヴァインシェンクが 1891（明治 24）年に記載した。近畿地方中央部の主な火成岩産出地は輝石安山岩、英雲（石英雲母）安山岩、雲母安山岩に整理されて、地質調査所 1892（明治 25）年発行の 20 万分の一地質図「大阪図幅」の説明書（地質調査所 189 3 ）で記載された。小藤は、1916（大正 5）年の英文論文で、第三期の火山活動を取り上げた後、奈良県三笠山、耳成山、二上山、兵庫県甲山を分析している。

ナウマンは、1885（明治 18）年論文で、ガラス質の「カンカン石」が瀬戸内にほぼ限られること、さらに同種岩石を「古銅輝石」の微斑晶が特徴的な黒色のものと、石基に微長石が特徴的な暗灰色のもの、二つのカテゴリーがあることも把握していた。二上山とともに兵庫県西宮市甲山を前者に含めて記述しているのは注意したい。現在の知見に合わせると、サヌカイト類（サヌキトイド）の中にサヌカイトとそれに類似する特徴を備える安山岩の違いがあることに呼応するだろう。

いくつかの地名が、ナウマンのいう「カンカン石」に含まれているので、ナウマンは、今よ

り広く同種石材を認定したことがわかる。ナウマンとヴァインシェンクの「カンカン石」の分布範囲と、現在の先史時代考古学での「サヌカイト」石材産出地の識別範囲の間に、すでに乖離があることを指摘しておきたい。

4.　二子山、二子石をめぐって

東京帝国大学出身の大湯正雄は、1891（明治 24）年の濃尾地震を受けて設けられた震災豫防調査會の調査として、1910（明治 43）年に「二上火山調査報告」（大湯 1910）を発表した。二上山周辺の火山構造をまとめて明らかにした初めての論考であろう。大湯正雄は、のちに東北帝国大学教授を務めたが、1921（大正 10）年 40 歳で夭折した。

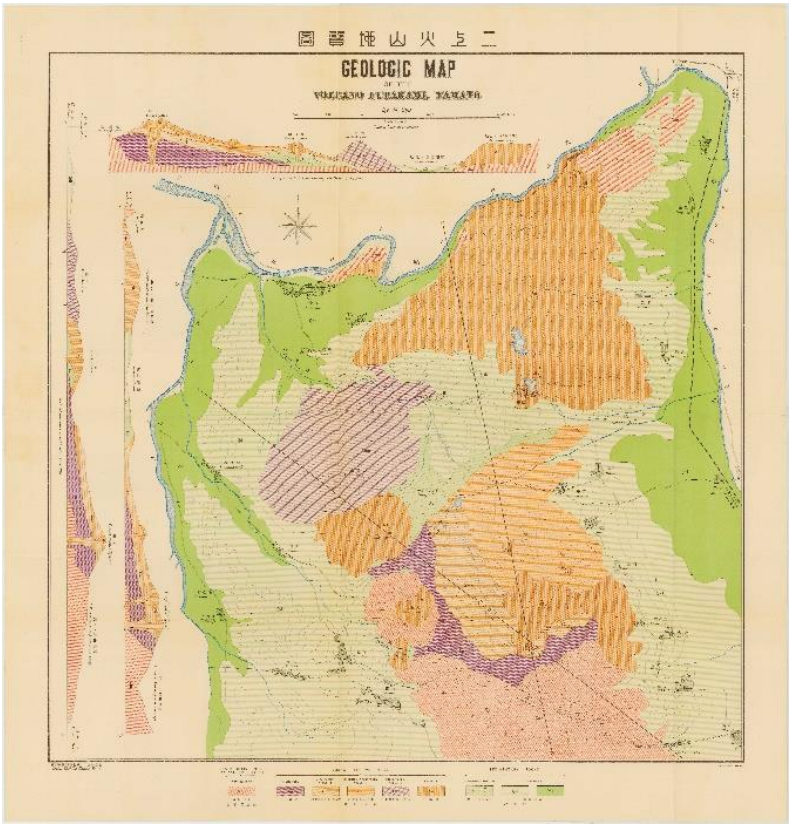


図 5　二上火山地質図（大湯 1910）

大湯正雄の二上山調査の詳細を紹介する紙幅はないので、筆者が注目する部分を述べる。報告の第 1 編「地貌論」第 1 章「山系論山系詳論」に「二上火山」が解説され、「一名二子山ト称シテ此等火山（郡）中最大最高ノ圓錐状火山ナリ　其外形亦美麗ニシテ箱根火山群ノ秀峰タル二子山ニ髣髴タリ・・・」と記す。二上山が箱根二子山に似ていると記述があって、さらに、報告中よく同節同文中に二上山と二子山、二上火山と二子（山）火山が散見される。

この交錯については、一見校正不足とも見えるが、大湯正雄は「二上山」と古名の「二子山」両方の地名を現地に即して使い分けた可能性があって、「二上」は春日山や古市山、明神山などを含む火山群広域、「二子」は雄岳雌岳周辺を指すようにも見える。河内名所図會では、雄岳（嶽）

雌岳（嶽）をあわせて「二上嶽」とする表記となっているので、大湯正雄の表記の根拠は不明である。岩石名は「二子石」や「Futagonite」ではなく、安山岩一般が「富士岩」、「二上山産サヌカイト」は「讃岐石」となっていている。

実は、「二子山」「二子石」の名称は、石井八萬次郎が 1894（明治 27）年に「箱根火山研究録」(石井 1894) の論考で、箱根火山のカルデラ内の南東側に位置する二子山火山および溶岩、火山岩として、すでに使用されている。二子山は、約 5,000 年前の噴火で形成された溶岩ドームで、箱根駒ケ岳、神山、台ヶ岳などとともに中央火口丘を構成する。その名のとおり、双生児のように二つの峰が並んでおり、北側が上二子山 1,099m、南側が下二子山 1,065m である。

石井八萬次郎の箱根二子山の学会報告が 1894 年、大湯正雄の二上山の報告は 1910 年であるので、地名としての「二子山」は除くとしても、火山や火山岩の学術的命名のプライオリティは、16 年も前の石井八萬次郎の箱根二子山論文にあるだろう。この先行研究を大湯正雄も承知していたので、わざわざ二上火山の最高峰である雄岳雌岳の二峰が箱根二子山に似ていると記し、地名にちなんだ岩石名を命名せず当時の一般的学術名称である「讃岐石」の名称を使ったのだろう。

結局、二上山の火山名および二上山産ガラス質安山岩（サヌカイト）の学術名として、「二子（山）火山」「二子石（岩)」の名称を提起することは重複となって、地質学岩石学分野での学術的命名は不可であったし、また実際の提起があった証拠も見つからない。

箱根と区別できるよう配慮して、大和や河内などを冠して「大和二子火山」「河内二子石」を地質学岩石学的に定義する論文も、書かれることはなかった。二上山の名称には「にじょうざん」「ふたがみやま」「ふたかみやま」の呼び分けがあることから、「Nijyonite」「Futaga(n)ito」「Futakamite」なども岩石名に使えそうだが、見当たらない。小藤文次郎東京帝国大学教授は、1916 年の英文論文で二上山の読み方として「Futakami-yama」「Nijo-san」を挙げている。

以上管見では、小川京都帝国大学教授が濱田教授に伝えた、二上山の別名である「二子山より出るを以て二子石（Futagonite）と命名せる学者」の存在は発見できなかった。ひょっとすると、石井八萬次郎の箱根二子山火山岩が二子石と命名されていることと、大湯正雄が煩雑に記載した二上山の別名が二子山であることを、京都帝国大学の小川教授が混同し、二上山のサヌカイトが「二子石」であると、濱田教授に錯誤して伝えたとも想像できるだろう。この時期の地質学岩石学が「富士岩」「讃岐石」「二子石」」といった採取地個別命名単一表記がまだ主流であったので、産出地名を取り違え、さらに一般岩石名も省略して伝えたことにより、学際情報の考古学への取り込みミスが生じた事件であったと推理できる。

5. 「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」

濱田教授の京都帝国大学考古学教室周辺では、国府遺跡発掘以後、二上山のガラス（玻璃）質安山岩：サヌカイトに「二子石」の名称が採用されたようで、京都帝国大学の島田貞彦と末永雅雄は 1926（大正 15）年日下貝塚を発掘し、出土の玻璃質安山岩製石器が、近傍の二子山

（二上山）から供給された石材であることを、「所謂「二子石」と通称さるゝものである」と記述している（島田 1926）。

一方、京都帝国大学の濱田門下とは異なり、周辺の研究者は「二子石（岩）」の岩石名を使用しない。目に触れた範囲では、東京帝国大学卒業の笠井新也は、池田師範学校在職中の 1915（大正 4）年に兵庫県川西市加茂遺跡を発見し、遺跡に「サヌカイト」破片が散布すると報告する（笠井 1915）。樋口清之は、1926（大正 15）年の論文で奈良県山辺郡二階堂村岩屋の磨製石鏃が「サヌカイト」であると記述（樋口 1926）し、さらに 1931（昭和 6）年の「大和二上石器製造遺蹟研究」では、二上山北麓には「Sanukite」の原石産地があること、その周辺の「Sanukite」石器の製造遺跡を取り上げ、石器生産工程、石器時代の遺跡分布や交流や交易まで幅広い検討を行っている（樋口 1931）。

第一編　地貌論

第一章　山系論

山系概論　調査區域ハ大和河内兩國ノ境ヲナシ南北ニ走レル葛城山系北端ノ一火山地方ニシテ地形又單調タルヲ免レズ區域ノ北境ハ大和川ノ溪谷ヲ隔テ、遙カニ生駒山ニ對シ而シテ南境ハ白ラ二上山ニヨリテ限ラル然リ而シテ東西兩側ニ至リテハ徐ロニ大和河内兩平野ニ進ルヲ見ルベシ。

區域一般ノ地勢タルヤ葛城山系トハ其ノ間自ラ趣ノ大ニ異ナル處アリト雖ドモ兩者ノ間其高底ニ於テ特別ノ差異ナキガ爲メカ時ニ人ヌシテ葛城山系ノ一部分ト誤ラシムルコト無キニシモアラズ山系ハ總ジテ火山ニ特有ナル圓錐形ヲ呈シ地形學上又幼年ヨリ壯年ノ時代ニ進行シツヽアルモノナレバ今ヤ老年ニ近キツヽアル葛城山脈トハ溪谷其他ノ有樣ニ於テ異ナル處少ナシトセズ。

山系詳論　區域ニ對スル委細ノ地貌ヲ知ラント欲セバ先ヅ足ヲ二上山ノ山頂ニ運ブベシ。

(1)**中央區域**　區域ノ中央ニ位シテ關谷ノ盆地アリ此ノ盆地ハ東ハ關谷村ヨリ西ハ田尻村ニ至リ全形階圓形ヲナシ第四期時代湖水堆積層ヲ以テ充タサレタル一ノ化石溜タリ而シテ其ノ一部ノ遺物ハ今モ尚ホ盆地ノ東北隅ニ在リ關谷溜ト稱セラル此ノ盆地タルヤ實ニ一小化石溜タリト雖ドモ我區域ニ於テハ地形學上重要視セラルベキモノナリ何トナレバ我ガ全區域ハ此ノ盆地ニ依リ南部及北部ノ二ツニ分タルベシ之レ只低地アルガ爲メ便利上區分セシニ非ズ地形學上既ニ業ニ兩者全ク其ノ趣ヲ異ニスル處アレバナリ。

(2)**北部地方**　此區ハ全體トシテ一ツノ臺地的丘陵地ナリ全部讖岐岩ヨリ成ル而シテ臺地ノ北側ハ緩ナル傾斜ヲ以テ大和川ニ臨メドモ南側ハ徐ロニ關谷盆地ニ向ツテ傾ケリ臺地全體ノ走向ハ南西ヨリ東北ニ伸長ス。

(3)**南部地方**　北部ハ斯カル臺地的地勢ヲ呈スルニ係ハラズ關谷盆地南部地方ハ純然タル火山群地方ナリ略ボ南東ヨリ北西ニ伸長セル線上ニ群出セル圓錐狀火山ニテ充タサルト云フモ過言ニアラザルベシ二上山、大師山、春日山等ハ其ノ重ナルモノナリ以下順次彼等ノ形態ニ就キ其概略ヲ說カン。

二上火山　一名二子山ト稱シテ此等火山郡中最大最高ノ圓錐狀火山ナリ　其外形亦美麗ニシテ箱根火山群ノ秀峰タル二子山ニ彷彿タリ　海拔五百七十五メートルヲ算ス山頂ハ其名

第七十二號　二上火山調査報告　一

図６　二上火山調査報告（大湯 1910）部分

神山石　は最後の噴出物にして神山噴火口邊に最能く流出せし故に神山石と名げたり、岩色濃黒にして磁鐵鑛に富み輝石斑狀をなし、輝石は許多集合して恰も薩摩「がすり」の斑點の如く且つ多少黄色を帶ぶ、黄色は輝石の劃裂したる處に發するものにて金屬の色に類す、此中には大なる斜方輝石もありて甚多色性なり、即ち帶赤褐色より淡綠色若くは綠色に變ず、橄欖石は小なる粒形をなし甚多からず、而して斜方輝石と橄欖石は甚相似たれども、一は常に結晶をなし、一は小粒をなし、且つ一は帶色あれども一は殆と無色に見ゆ、長石は最も鹽基性にして「ビトーナイト」乃至「アノルサイト」あり、石基は微晶質にして玻璃亦あり、此石は最近の噴出なれば神山駒ヶ岳より流出して上部を覆蔽し、重に鹽湖の方に向て流出し、臺ヶ岳に於ては堅緻なる岩石をなせども、全体には多孔質にして粗造あり、元箱根姥子間の通路に低岡起伏するは皆此熔岩流の末端にして、多く多角形狀に劃裂す、

二子石　は神山石の前に噴出したるものにて、二子山に最能く露はるゝ故に名く、岩色淡灰色若くは暗灰色にして輝石斑狀をなし、全体に神山石と同樣あれども共色の淡なる丈酸性多からん、二子山は此石を噴出したる後に火口熄みたるものと見へ最上部に此石あれども、神山駒ヶ岳に於ては神山石の噴出の爲め敲はれて、大地獄、小地獄、早雲地獄等水蒸氣の爲めに噴裂したる場處に於て、神山石の下部に露出するを見る、

要害石　は二子石の前に噴出したるものにして舊火口の最後の噴出物なり、神山駒ヶ岳、二

図7　箱根火山研究録（石井1894）部分

濱田教授が昭和 5 年に本山への祝辞や講演で述べた後、「二上山産出サヌカイト」を指しての「二子石（岩)」や「フタゴナイト」、さらに「二子山文化」は、見当たらなくなる。この頃に、地質学岩石学では「二子石（Futagonite)」が「二上山産出サヌカイト」の岩石名称ではないことが判明し、濱田教授とその周辺が、関連学問の根拠を失った考古学用語として積極的な使用を見合わせることになったかと推測する。

京都帝国大学考古学教室周辺では、1935（昭和 10）年の梅原末治 1935「京都白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第 16 冊』では「サヌカイト」となっている。

末永雅雄は奈良県史蹟名勝天然記念物調査会で濱田教授の指導を仰ぎつつ、1930（昭和 5）年から 1938（昭和 13）年まで奈良県宮瀧遺跡を発掘した（末永 1944)。この調査で末永雅雄は、「今次の調査の特殊研究として・・・・石質から交易関係を知ろうと試み」、自身の研究の根拠を専門研究者の成果に依拠する。地質学岩石学の専門家である京都帝国大学助教授上治寅次郎に、1936（昭和 11）年の宮瀧遺跡現地での地質と地形形成調査、さらに石器類岩質の顕微鏡検査を委嘱し、その報文を収録している。上治助教授の報文（上治 1944）では、宮瀧遺跡の地質学的環境、地形形成などの検討に続いて、地質学岩石学者が採取した溶岩や岩石ではなく、考古学資料である石器の石材を、石基斑晶の違いによる火山岩産地比較を顕微鏡で行って、考古学的な意味での石材の由来を解明しようとした。報告書に遺跡研究のため執筆を依頼した関連科学の論考を、そのまま収録することは、実は濱田教授の轍を踏まぬ工夫ともなっている。

岩石学的検討の結果、石鏃・皮剥、球形石、石斧、石槍、石錐其他雑石等が、「二上火山産の讃岐岩質溶岩」であるとされた。単に「讃岐岩（石)」ではなく、「二上火山産の讃岐岩質溶岩」=二上山産出+讃岐岩（と同）質溶岩=産地名+ガラス（玻璃質）安山岩の記述となっているのは注目したい。岩石学の立場での上治の記述式は、国府遺跡発掘調査報告の註（４）にある濱田教授の岩石二命名法と同様の記述であり、岩石学での記述と考古学での記述を整合させるという成果を生み出している。これを受けた考古学的報告で末永雅雄は、二上山産出であることを明記しつつ、濱田教授の提案する「玻璃質安山岩」ではなく、慎重に考古学的岩石名として定着した「サヌカイト」を使用する。

濱田教授が『「通論考古学』で「もとより一人にして各種の学科に深き造詣あること難きを以て、その特殊の研究は各専門家に委託するのほかなしといえども、ある程度までの知識とこれに対する興味とを挟有することを要す」(濱田 1922 第 1 編第 3 章 11「各学科との関係」部分）と記したことを踏まえ、末永雅雄が自然科学分野と考古学の連携を模索し、上治へその意図を正確に伝えた成果であると思われる。「二上山サヌカイト」と「二子石」「Futagonite」をめぐる混乱を、濱田教授の考古学的二命名方法に回帰して、末永雅雄が収束させたと思っていいだろうか。

この経緯の中で、濱田教授の「玻璃質安山岩」も、一時忘却されたことは注意したい。

1936・37（昭和 11・12）年、末永雅雄を担当者にして、京都帝国大学考古学教室の小林行雄助手、藤岡謙二郎副手らが参加して、大和唐古遺跡の発掘が行われ、弥生時代国府遺跡と同じ

大和の弥生時代遺跡の内容が解明された。その報告『大和唐古彌生式遺跡の研究』(末永・小林・藤岡 1943）では、石器石材の鑑定等は、中村新太郎京都帝国大学名誉教授の教示を仰いだ。藤岡副手と小林助手により石器について精緻な実測図と写真の掲載、記述、考察が加えられた。「石器の用石」の項で唐古遺跡の石器生産と石材供給の問題が考察されている。打製石器の「用石」は「二上山讃岐石」に限られていて近畿地方各地の弥生時代遺跡に共通すること、石器生産は二上山原石産出地ではなく唐古遺跡で行われていること、唐古遺跡の石器生産で「舊石器類似石器」が「偶然の現象」で生産されるとしたこと、畿内弥生時代石器生産では、東北地方や北海道の縄文時代遺跡と異なり「特殊な打製石器の発達」はなかったこと、反面大量の打製石器が生産されていることは「金属製利器の貧困」を示すであろうこと、後期には石器が消失することなどが考察されている。用石の分析は、藤岡副手の原稿を小林助手が大幅に加筆したものといわれる（穴沢 1994p187)。

1937（昭和 12）年、濱田教授は京都帝国大学総長に就任するが、1938（昭和 13）年 7 月 25 日に急逝した。

末永雅雄は、濱田教授の逝去後も、1938（昭和 13）年から橿原遺跡の調査を行い、自ら設けた橿原考古学研究所で研究と報告書の刊行を続け、1952（昭和２７）年に関西大学教授に就任した。宮瀧遺跡、唐古遺跡、橿原遺跡の調査は、大和の縄文時代から弥生時代への石器文化の変遷を明らかにしていく過程であり、故濱田教授の「二子山文化」解明への道標でもあったろう。

末永雅雄橿原考古学研究所所長は、1956（昭和 31）年、「二上山文化總合調査」(橿原考古学研究所 1957）を開始した。その中間報告の冒頭で「この二上山が近畿古文化を象徴する諸条件をもっていると云うことは、・・・かつて京都大学の考古学教授であられた浜田青陵先生が、大正の初期にすでに着眼されていたのである・・・」として、濱田教授の二上山をめぐる研究に言及している。1930（昭和 5）年の本山邸での展観に同席していたことから、末永研究所長の「二上山文化」は濱田教授の「二子山文化」と同じであると読める。国府遺跡と二上山の「フタゴナイト」原石産出地の関係が旧石器在否問題もあわせた石器時代研究の鍵と考え、研究の継承を計画したことになる。

人文科学の先史・古墳の考古学 2 班、歴史学、文学、民俗、地理、石造美術、建築の計 8 班、自然科学の人類学、植物、動物、地質の 4 班が構成され、50 名近い研究者で「二上山文化の總合調査」が行われた。

末永所長の調査の主眼が、所長退任後の 1987 年、奈良県立橿原考古学研究所の彙報「青陵」に、後進への研究報告刊行への叱咤とともに記されている（末永 1987)。

「一　この遺跡でサヌカイトを主とする石材の採取は石器時代のどの時期に上限を置くべきか。あるいは旧石器時代まで遡りうるかどうか。

二　石材の採取は各人各個が自由に採取したか。当初はそうであっても後に地元住民に鉱区権のようなもの、あるいは慣習的なものが現れたか。現代の金剛砂採掘のような手続き（があったかどうか)」

を解明することであった。まさに濱田教授の 1930（昭和 5）年の講演「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」の一節である。1950 年代には「サヌカイト」の石材名称が定着していたので、先史班は、研究課題として「二上山を中心とした無土器文化」「二上山産出サヌカイトの分布」「屯鶴峯附近の遺跡の調査」、地質班は「サヌカイト及び凝灰岩の科学的研究」が設定された。二上山周辺の「サヌカイト」散布地の踏査、河南町飛鳥の「サヌカイト」産出地の調査、さらに濱田教授が大正時代に調査した河内国府遺跡の再発掘調査が 1957（昭和 32）年 3 月に行われている。

末永所長は、濱田教授の「二子石」の膠着を解きほぐした後、二上山總合調査で「二子山文化」の提唱を「二上山文化」として再構築しようとしたようだ。末永雅雄の宮瀧遺跡発掘から二上山總合調査まで、その調査研究の基調には、濱田考古学の学理と学問的構想が潜在通底しているように感じられる。

図 8 二上山文化總合調査記録　文書箱「二上山」の一部

末永所長は、戦前から欧州旧石器の研究で知られる大山柏公爵と親交があって、積極的な論考を発表したことはないが、日本の旧石器在否問題に関心があったことは間違いない。末永所長は、濱田教授の国府遺跡の大形粗石器（濱田 1918 第四章第一節）に一見見間違いそうな「サヌカイト」製「大形打製石器」を二つ、二上山総合調査に先立つ 1955（昭和 30）年の秋、「二上山西麓近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯」で採集（山口 2018）していたが、この石器を「二上山文化總合調査」の研究には供せず、未報告のまま手元に残していた。

畿内弥生時代の石材供給を受ける側の遺跡から発見される「大形粗石器」「舊石器類似石器」に対して、戦前に濱田教授の国府遺跡調査の積極的証拠はなく今後の課題という見解（濱田 1918 p 34）、藤岡副手と小林助手の唐古遺跡の弥生時代石器生産の「偶然の現象」という見解（末永・小林・藤岡 1943 p 205）が出されていた。二次世界大戦が敗戦で終結して、考古学も新しい息吹がもたらされたが、1946（昭和 21）年の群馬県岩宿遺跡旧石器発見を受けても、どの研究者もこれを再検討しなかった。一方、末永所長はこれに納得しておらず、原石産出地上の石器生産遺跡から発見される同種石器についての研究は必要と考えたのだろう。採取した石器が未報告のまま手元に残っていたのは、「二上山文化總調査」が思うように進展せず、慎重を期した結果、発表の機を逃してしまったからではなかろうか。

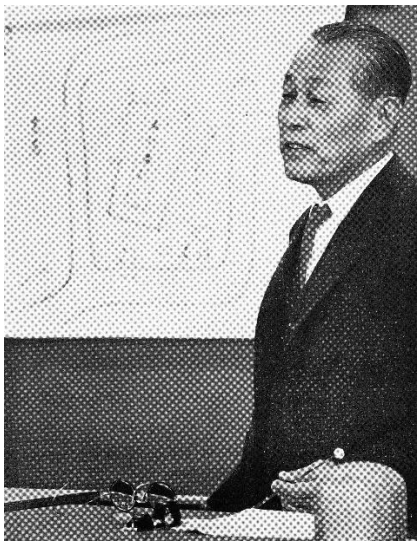


図 9　末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所所長・関西大学名誉教授

図 10　二上山西麓の大形打製石器

末永所長の 1955（昭和 30）年の石器の採集が、濱田教授の国府遺跡と二上山原石産出地との連関を呼び覚まし、奈良県宮瀧遺跡、唐古遺跡、橿原遺跡の調査によって積み重ねられた石器石材の知見と結びつき、「二上山文化」の總合調査の一つの動機になったと思われる。二上山文化總合調査開始時の雰囲気は、末永所長の文書箱「二上山」に保存されていた新聞切り抜き（第 8 図）から覗えるだろう。国府遺跡の「大形粗石器」を問題とした濱田教授の長年の課題を自ら解明しようと、末永所長は、ひょっとしてかなりの期待を抱きながら、再び原石産出地から検討しようとしたのだろうか。

本山彦一の「本山考古室」に収蔵展示された考古資料は、本山大毎発掘隊の国府遺跡を含めて『本山考古室要録』（末永 1935）で目録になり、関西大学教授でもあった末永雅雄の尽力で、関西大学博物館蔵「本山コレクション」となっている（関西大学博物館 2011）。末永名誉教授は、この本山コレクション中の本山発掘国府遺跡資料に、多数の「サヌカイト」製石器があることから、「国府遺跡調査の当時旧石器問題があったので再検討してみてはどうか」

（末永 1986 p 74）と、関西大学文学部考古学研究室で本山コレクション国府遺跡資料（山口 1981）から旧石器在否問題を研究するよう促したことがある。二上山の原石産出地だけではなく、国府遺跡もあわせて旧石器在否は、末永雅雄にとって生涯の未解決課題の一つであったと思われ
る。

末永雅雄 1957「(32) 二上山文化総合調査」『二上山文化總合調査』部分

大和と河内の境にあってどちら側から見ても姿のやさしい二上山は、とくに大和の飛鳥地方から眺めると夕陽を背景に、くっきりと浮き出たその山容の美しさは、万葉歌人のもつた憧れを思わせる。これを河内側から見ても雄嶽、雌嶽の均整のとれた姿もまた特別な趣きを見せている。同じ連峯中の金剛山が厳しさをもつて抜き出ているのとはよい対照である。

この二上山が近畿古文化を象徴する諸条件をもっていると云うことは、これをいろいろの視角から検討しなければならない時期がいつか来るだろうと期待していた。考古学者としては、かつて京都大学の考古学教授であられた浜田青陵先生が、大正の初期にすでに着眼されていたのであるが、その後多くの研究者の注目を浴びながら総合的な調査の実現には至らなかった。

<中略>

一例を挙げると、わが原始時代の人たちの生活に何よりも大切な道具であった、石器の素材たるサヌカイトの主なる原産地として知られており、サヌカイトでつくった石器は長い年代に亙って使われていた。恐らく近畿地方の原始文化の発展に最初の貢献をしたものの一つとして、この二上山のサヌカイトが挙げられよう。そしてその初まりは数千年の昔にあるのではなかろうか。また古墳時代の石棺や飛鳥時代以来の寺院建築の基壇や、礎石をつくった凝灰岩もこの山から供給され、金剛砂の採掘も行われてきた。

原始時代の生産基地としてこの山の働きは、いろいろな文化を育成する条件をもつこととなって、やがては奈良を育て、大阪を発展せしめたのではなかった（か）とさえ考えられる。

かかる見地に立って我々は堅実にこの研究を進めてゆきたいと思っている。

昭和三十二年三月　　末永雅雄

6.　二上山とサヌカイト、ガラス（玻璃）質安山岩

熊本県合志市の二子山石器製作遺跡（熊本県 1979）が、1982（昭和 57）年に国指定史跡となった。縄文時代後期から晩期にかけての打製石斧製作として著名な遺跡である。熊本県合志市二子山には玄武岩質安山岩の露頭が多く発見され、その周辺には剥離された石材・剥片・未成品・敲石等が多量に発見されている。この打製石斧の分布は、南は白川から北は菊地川までの地域に、現在約 60 か所の遺跡が確認されているという。

地質学岩石学での箱根「二子石（岩)」の名称は、この領域での岩石命名方法が変更になって「旧名称」になった。さらに、考古学の学門的領域で、「二子山」を産出地とする玄武岩質安山岩製石器生産遺跡が知られたことから、今や考古学での通称岩石名にすぎないであろうが 1918

（大正 7）年に回帰して、「二上山産出サヌカイト」の名称に「二子石」「Futagonite」を復活させることは慎重となるだろう。

一方、「二上山産出黒色ガラス質安山岩」を「讃岐の石」の意味である「サヌカイト」と呼称することにも、一抹の居心地の悪さを感じないだろうか。直近の近畿地方中央部でもナウマンが言及した二上山以外の地点で産出するガラス質安山岩を使用する旧石器時代や弥生時代石器群が最近発見され、既知資料も再検討されつつある。また、瀬戸内火山岩区以外の火成岩も近畿地方に産することも無視できない。山陰の第四紀火山群や新第三紀グリーンタフ造山運動に連動した北但層群火山活動は、優良な石器石材を供給した可能性があって、現在探査を続けている（山口 2001・2021）。広く日本列島全体でも、「ガラス質安山岩」として多くの原石産地が把握されている（杉原・小林 2006）。今後近畿圏で産出地の検討を経ないものも一括して「サヌカイト」表記を続けるなら、研究上の混乱が拡大するだろうと思われる。汎日本的に研究視野が拡大した今日、瀬戸内火山岩区に制約される名称である「サヌカイト」を、このような近畿圏石器時代研究で使い続けることには限界があると感じる。

近畿地方の瀬戸内火山岩区における二上山産を主とする「サヌカイト類」については、従前の「讃岐」という地名概念を含む「サヌカイト」呼称を（二上山産出以外の識別されていない原石産出地由来のものが混在している可能性を内包していることを意識しながら）継続するか、既知の「二上山」や、「甲山」「生駒」「三笠山」など今後考古学的に石材開発が発見された時の対応を見越して「個別産出地」+「サヌカイト」という地名概念重複の不自然を残して呼称するか、個別産出地名を、濱田教授の採用した一般的な岩石名称「玻璃質安山岩」または今日的にアップデートされた「ガラス質安山岩」と産出地名を組み合わせた二命名法で意図的に呼称するか、近畿地方の石器時代考古学研究者は選択しないといけないだろう。讃岐地方の「サヌカイト」も、五色台や城山、金山など噴出源によってわずかに成分が異なることも知られていて、こちらも学理的に岩石名命に問題を内包している。

日本の初期地質学岩石学では、火成岩産出地で発見された岩石にまず「採取地」（種）が付されて、その岩石の観察分析の結果「一般名称」（属）が位置づける手順が踏まれていた。日本列島の地質構造を解明するために種は属にまとめる学理があって、産出地での命名が煩雑となった時、次第に属名が優占するようになった経緯がある。一方、考古学の岩石は、「石器石材鑑定」を地質学岩石学の成果に依拠依存し、「サヌカイト」という考古学的岩石名は、それが導入された当時の岩石学理解を引きずっていて、「瀬戸内火山岩区」や「高マグネシア」などの理解の中で、やや拡散した考古学的岩石名となる可能性があることは忘れてはいけない。

考古学では、石材の検討は、考古学側が自ら行うか自然科学側に依頼するかは問わず、遺跡から発見された個別の遺物石材を観察分析し、「一般名称」（属）を判定、そのあと周辺の火成岩産出地（種）を相当させて判定する岩石学と逆手順を踏むものでなければ、新たな石材産出地を見逃すだろう。個々の遺跡の石材供給を検討する際には、周辺石材環境理解も考古学的な検討課題である。自然科学分野との連携では、「サヌカイト」石材の微量元素からの産地分析の可能性（藁科哲男・東村武信 1983、杉原重夫・小林三郎 2006）があったとしても、比較検体

が提供されなければ無意味な分析となる。考古学の側から、遺跡周辺で産出候補地の積極的な追加発見の努力と、より多元的な分析依頼を行うことが必要（山口 2001）であるし、初手から先入観を持って「良質と考えられる産地」「あまり良質と考えられない産地」を区別することも危険である。

石器時代研究者は、近畿地方においては、「サヌカイト」が支配的石材であって、見かけ上同種石材であれば、すべて「サヌカイト」として一括してしまい、それ以上吟味しないし比較産出地候補も探さないという盲点になっていたのではないだろうか。筆者も近畿地方をフィールドとする石器時代研究者として、多様な同属石材環境の分析経験に乏しいことを自覚する。いきなり地質学岩石学の既知「産出地」を引き当てて判断するのは、「依存的」「経験主義的」であると反省したい。

近畿地方の「サヌカイト」呼称は、考古学学史的に強い慣性を持った用語であることは理解しつつ、1918（大正 7）年に濱田教授の提案した「玻璃質安山岩」、またはアップデートした「ガラス質安山岩」の石器石材岩石名の使い方を再検討したいと思う。その中で、石器時代古民族学的石器石材移動と石器生産の動態が鮮明にできるのではなかろうか。

7．おわりに

最後に、近畿地方を主なフィールドとしてきた旧石器時代研究者である筆者の私的な回顧を記したい。

普段、末永先生は「二上山のサヌカイト」と表現されていたが、1986（昭和 61）年に「二上安山岩」と記した（末永 1986 p 58）こともあった。その「二上安山岩」が濱田教授の「二上山産出玻璃質安山岩」のことなのか、筆者には確かめられなかった。

また、末永先生が二上山西麓で採取された二つの「大形打製石器」は、そのころ「研究するように」と筆者に託されたものであった。末永先生の旧石器在否への関心に気がつかない筆者は、「大形粗石器」様の打製石器を長く手元に置かれていたと知ったことと、特段の指示がない「研究するように」という言葉に、戸惑を覚えた記憶がある。この石器と関西大学博物館蔵本山発掘隊の国府遺跡発掘石器を研究しろとの暗号に気付くこともできなかったことが悔やまれる。

本稿で、濱田教授が「二子山文化」を、末永先生が「二上山文化」を提唱されたいきさつを確認したことによって、「研究するよう」指示された筆者の今までの不明、至らなさを恥じている。

関西大学考古学研究室が日印共同学術調査インド共和国 UP 州シュラバースティー遺跡発掘調査を行っていた時、国内に残留した筆者は、大阪狭山にお住いの末永先生への連絡員を務めた。居間で緊張して畏まった筆者に、末永先生は「先学の業績を尊重するように」と諭された。宮瀧遺跡の石器生産技術と打製石斧の先端摩耗の関係について確かめに、（間違いなく筆者の勉強のために）宮瀧小学校の収蔵庫まで派遣されたことも懐かしい。

本稿をまとめるにあたり、二上山の「二上」「二子」地名呼称や由来について佐藤健太郎氏、斎藤安輝氏、岩下真央氏に、文献の渉猟について合田茂伸氏に、石器石材について山下大輔氏、渡邊貴亮氏に教示を頂いたことを記して感謝いたします。濱田耕作京都帝国大学教授の不朽の学理と視座、『通論考古学』、「二子石」と「玻璃質安山岩」、「二子山文化」と「二上山文化」、末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所所長・関西大学名誉教授へのリレーに思いを馳せつつ、本稿の責は筆者にあることを明記して擱筆する。

＊本稿中に収録の引用文献には、旧かな使いや旧字を改めたものがある。

第２節　末永雅雄先生の二つの大形石器

１．末永雅雄先生の二つの大形石器

末永雅雄先生の花押のある紙箱に収められた、1955（昭和 30）年に「二上山西麓出土　大形打製石器　昭和三十年秋採集　近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯中検出」のサヌカイト製大形打製石器２点がある。この石器は、1981（昭和 61）年頃、関西大学教育後援会から刊行される「末永雅雄　常歩無限　関西大学考古学二十年の歩み」の編集を担当していた米田文孝氏を介して、末永先生から当時大学院後期課程に在籍中で、旧石器考古学を勉強しようとしていた筆者に、「研究するように」との指示とともに託されたもので、現在関西大学博物館で保管している。この２点は、箱書きに末永先生の花押があって、託されたときに大変な緊張を感じた覚えがある。

写真と実測図（図 11・図 12）を付す。両方ともサヌカイト製で、図 11 の石器は、長さ 18.2cm 幅 9.0cm 厚さ 4.0cm 重さ 708g。片面に礫面を残す厚手の大形剥片を両面加工した石器であるが、裏面にポジティブな大剥離面は残存しない。図 12 の石器は、長さ 17.1cm 幅 8.9cm 厚さ 2.9cm 重さ 470g。礫表を取り込んだ大形剥片を素材として、両側面表裏から幅広剥片を剥離したものであり、表面に強い風化と炭黒化があって、加熱されている可能性がある。

現在の近畿地方の石器研究の成果に照らせば、図 11 の石器は、弥生時代中期に近畿地方中央部で普及するサヌカイト製打製石剣の素材厚を減ずる初期整形工程であると判断される。図 12 の石器は、強い風化が進行しているが、縄文時代石核であろうと思う。二上山の北西麓に相当し、桜ヶ丘遺跡などの瀬戸内技法、国府型ナイフ形石器を出土する後期旧石器時代の遺跡集中地に当たるが、どちらも瀬戸内系サヌカイト製横長剥片剥離伝統に含まれるような後期旧石器時代の遺物ではない。今から 37 年前、筆者にとって、末永先生の「研究するように」との伝言は、まさに「謎かけ」であった。一瞥して縄文や弥生の所産と判断できたことから、「どう研究するか」悩んだ記憶がある。

写真１　末永雅雄先生の二つの大形石器

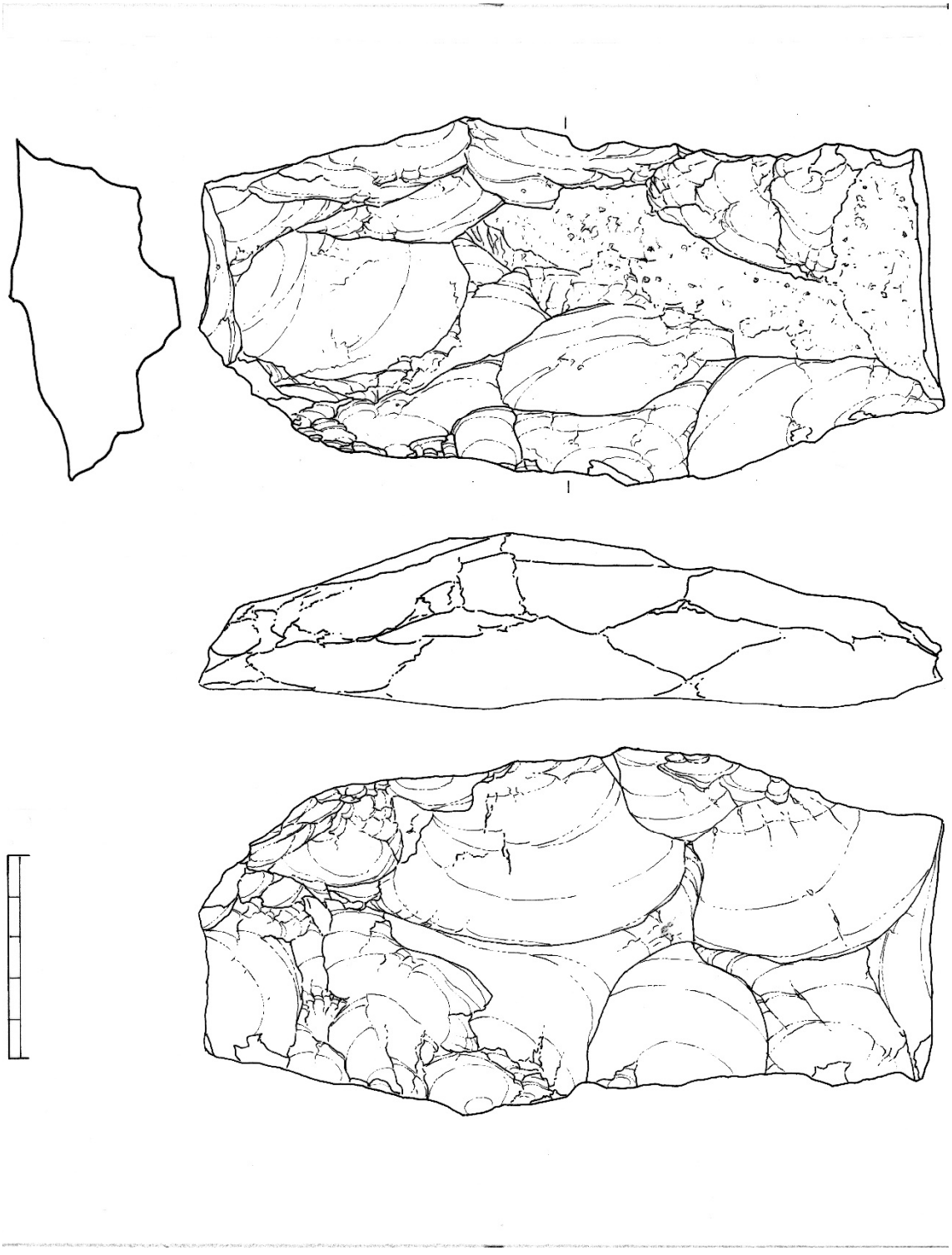


図 11　末永雅雄先生のサヌカイト製大形石器 1

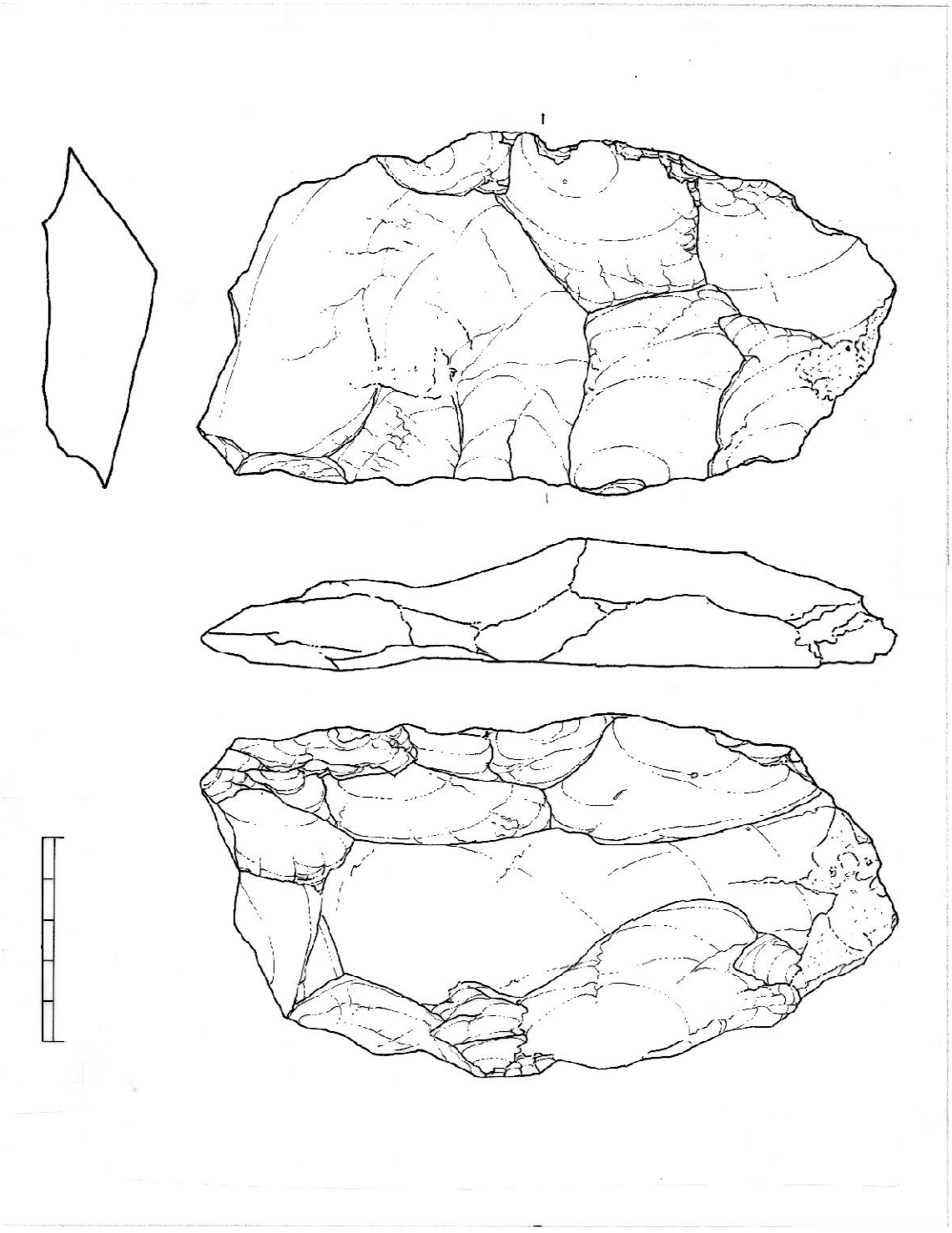


図 12　末永雅雄先生のサヌカイト製大形石器２

しばらくして関西大学のインド共和国祇園精舎遺跡での海外調査が始まり、考古学研究室の網干善教先生や米田氏ほかほとんどのメンバーが遠征していた時期、末永先生と関西大学考古学研究室、網干先生の連絡係として、私が末永先生のご自宅にお邪魔する機会が増えた。その折に、先生が手がけられた先史時代遺跡調査として、宮滝遺跡の打製石斧先端部の摩耗を使用痕と考えたこと、奈良県立橿原考古学研究所で二上山北麓の飛鳥新池などでサヌカイト撒布地を試掘し、自然破砕ではなく人為的な石器生産の所産であると考えたことなど、末永先生の実証的な調査研究のお話を伺うことができた。しかし、このときには、「研究するように」と託された二つの大形石器についてお話は出なかった。謎かけと結びつけて考えることなく、そのまま長く預かったまま時を過ごしてしまうこととなった。

今になって、ようやく先生の「謎かけ」の一部を読み取ることができたので、一文としたいと思う。その契機は、関西大学博物館の所蔵する本山コレクションにある河内国府遺跡が、1917（大正 16）年から発掘が始まったことを記念して、2017 年に関西大学博物館で展示会「国府遺跡発掘 100 周年―近畿地方先史時代考古学のはじまり―」を開催したことで、その準備の過程で、私は関連資料と学史的経緯を調査した結果、末永先生の 2 つの大形石器が、大正時代の国府遺跡の発掘と京都帝国大学での濱田耕作教授に、末永先生が直接の指導を受け、旧石器時代考古学への問題意識を継承していたことと深く繋っていると推測することとなった。

写真 2　展示会「国府遺跡発掘 100 周年―近畿地方先史時代考古学のはじまり―」

2．国府遺跡と二上山

この二つの石器の発見された近鉄関屋駅西南方は、二上山では、1956（昭和 31）～1957（昭和 32）年、末永先生が所長であった橿原考古学研究所が「二上山文化総合調査」を実施して幅広い領域を研究対象としたが、この中で酒詰仲男同志社大学教授らが先史班を組織して、二上山を中心とした「無土器文化」の探査、二上山産サヌカイトの分布調査、大阪府側の河南町飛鳥周辺のサヌカイト産出地調査などを行ない、さらに 1957（昭和 32）年 3 月に国府遺跡の小規模発掘を行なっている。

この石器 2 点は末永先生の手元に置かれていたもので、今まで言及されたことのない二上山

資料であるが、橿原考古学研究所の「二上山文化総合調査」に先立って発見されたことから、「二上山文化総合調査」に含まれる総合的な研究視野の中の、一つの契機であった可能性が考えられる。

「二上山文化総合調査」では、当初から、二上山で産出するサヌカイト石材と旧石器（無土器文化）の在否を研究課題としており、近畿地方ですでに著名であった国府遺跡との関わりが強く意識されていたことが推測できる。

国府（こう）遺跡は、大阪府藤井寺市惣社に所在する国指定史跡で、二上山の西、河内潟の南縁、石川と大和川が合流する地点の南西の丘陵にある。1889（明治 22）年、『東京人類学會雑誌』第 4 巻に遺跡発見の報告があり、人類学・考古学研究者に注目された。1916（大正 5）年、京都帝国大学に考古学研究室を開設した濱田耕作教授のもとに、近畿地方の遺跡探査をしていた福原潜次郎氏が収集した大形石器を、喜田貞吉講師が紹介したことから脚光を浴びた。濱田教授は、この大形石器（写真 3）に、ヨーロッパの旧石器との類似を認め、国府遺跡の発掘を計画した。1917（大正 16）年 6 月、国府遺跡の発掘が開始されたが、縄文時代包含層下の砂利層が自然堆積であるとして、深堀せずに中断し、不十分な検証に終わっている。報告書中で、大形石器について新石器時代の剥片石核や石槍（石剣）の未製品や破損品とした。

写真 3　福原潜次郎氏国府遺跡採集大形石器（京都大学総合博物館蔵）

この福原氏の大形石器は、京都大学の考古学研究室に保管されていたことから、末永先生が実物を観察し、また濱田教授から、ヨーロッパ旧石器との形態的類似があることなどの教示を受けていた可能性が考えられる。末永先生は、1955（昭和 30）年、この 2 点の石器を入手し、京都帝国大学に所蔵される福原潜次郎採集大形石器との形態的類似に注目して、旧石器時代遺跡の探査を試みようとしたのではなかろうか。国府遺跡については、濱田教授から指示されて、堺にあった「本山考古室」の目録を作成した経験があって、その関連性も熟知されていたのであろう。

日本における旧石器時代考古学の可能性について、末永先生自身が論文などではっきり明示したことないと思われるが、あえて花押で箱書きして、この 2 点を取り分けした末永先生自身

は、この 2 つの大形石器が旧石器である可能性を密かに、また強く考慮されていたのではなかろうか。国府遺跡の大形石器がサヌカイト製であることから、その原産地である二上山北麓を対象としたこと、これに連続して国府遺跡を調査したことに、濱田先生の問題意識を継承した表れがあると推測できる。結果として、濱田耕作の京都帝国大学、末永先生の橿原考古学研究所の、どちらの調査も旧石器時代であるとの確証は得られなかったのは残念である。

1957（昭和 32）年、末永先生の国府遺跡調査に続いて、東京大学の山内清男教授、鎌木義昌氏らによる発掘調査が行われ、砂礫層直上の黄色粘土層から土器を伴わない風化したサヌカイト製石器がまとまって発掘された。その技術形態学的特長が、岩宿遺跡で発見され東日本で類例が追加されつつあった旧石器に連なっていることから、近畿地方にも旧石器時代の遺跡があることが証明された。橿原考古学研究所の調査に連続したこの発掘調査には、末永先生から山内氏らへの、問題意識の示唆の存在を類推させるであろう。あたかも大正期の本山彦一が国府遺跡への東西大学の人類学者考古学者の発掘を招致したことと類似していて、末永先生の度量が感じられて興味深い。

従来の学史では近畿地方旧石器時代研究は、この山内・鎌木両氏の国府遺跡でのサヌカイト製旧石器の発見に始まるとする理解が一般ではあるが、そもそもサヌカイト製大形石器が縄文時代文化層下の礫層中から出土するかどうかということが、近畿地方における旧石器時代研究の初端であったこと、濱田教授から末永先生への問題意識の継承があったということ、今年 2018 年は、大形石器が注目されて 102 年目、国府遺跡の発掘が始まって 101 周年であることも銘記されるべきであろう。

3．京都帝国大学考古学研究室と大阪毎日新聞社長本山彦一の考古室

濱田教授は、助教授であった 1913 年に英国ロンドン大学エジプト学講座のフリンダース・ペトリー教授の元に留学し、先進の科学的考古学の方法を日本に持ち帰った。京都帝国大学の考古学教室には、浜田教授とペトリー教授の学術交流の経緯で、エジプト遺物がもたらされた（京都大学総合博物館 2016）。網羅的なエジプト資料の中には、旧石器時代のハンドアックスなどが含まれている。また、浜田教授は、欧州各地の最新化石人類や旧石器考古学の遺跡や遺物も広く巡検したようで、著書『博物館』（1929 年）において、当時最新の化石人類の進化を概観、世界の石器時代にも多くの頁をさいており、エジプトなど海外の旧石器資料を有していたことも併せて考えると、その研究室での指導や講義に、欧州の旧石器考古学や化石人類進化研究の成果が取り込まれていたのではないかと思われる。浜田教授の下で学んだ末永先生は、福原潜次郎の国府遺跡大形石器にあわせて、これらを実見し、またそれについての浜田教授の講義や日本における研究の見通しについて見聞されていた可能性は高いと思われるのである。

これに符合するように、関西の学術研究の有力な支援者であった大阪毎日新聞社長本山彦一が自ら立ち上げた富民協会農業博物館の一角に設けられた「本山考古室」では、浜田教授の『博物館』にある展示室に近似した展示ケース構成が再現される（山口 2011）。神田孝平旧蔵資料

を入手したあと、浜田耕作の指導を得ての設置ではなかろうか。興味深いのは、『本山考古室要録』などに記載はないが、当時発見が続いていた欧米の化石人類の頭骨模型や化石人類復元胸像が本山コレクションに含まれていたことである（写真 4）。これらには日本語のラベルが貼られており、頭骨模型には、本山が発掘した国府遺跡の縄文時代人のものも含まれるので、これらは鳥居竜蔵や島津製作所の科学標本部などの関与が推測される。このような科学標本は、原型を輸入して国内で生産されて大正期から昭和初期、大学予科や高等学校、中学校など、当時の中高等教育機関に広く所蔵され、教育に供された（村野・平田 2016）。多くは日本の勢力圏に取り込まれつつある周辺民族の人種模型などであるが、欧米の化石人類の復元胸像や化石の複製模型、旧石器時代石器の複製もあったことは、濱田の理論的方法的著作が先行して基盤を作り、大山柏による欧州旧石器考古学（大山 1924）の紹介などもあって、高等教育機関における「人の由来」についての根源的な知的好奇心が通底していたことを示しているのであろう。科学的精神にあふれた大正期から昭和初期のエトスを見た気がするであろう。

写真 4　化石人類頭骨模型
（右奥：国府遺跡頭骨）・化石人類復元胸像（すべて関西大学博物館蔵）

濱田耕作教授が、留学で得たエジプトや欧州の旧石器や化石人類の進化と系統研究をもって、100 年前に国府遺跡の大形石器が旧石器の可能性を見いだしたことと、末永先生の橿原考古学研究所の総力をつぎ込んだ「二上山文化総合調査」を実施したことの間には、この二つの大形石器があるのではなかろうか。京都大学で濱田教授に指導を受け、本山考古室の国府遺跡発掘資料を要録にまとめた末永先生は、日本の旧石器時代考古学の黎明に、誰にも気づかれず、大きな足跡を残していたのだと思う。

第３節　古瀬戸内とサヌカイト石材

１．はじめに

瀬戸内系旧石器は、その名のように瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器を「極相」とする石器群（山口 1994）である。この地域の旧石器研究のプロセスにおいて、瀬戸内系旧石器が瀬戸内海沿岸から大阪湾岸の近畿地方中央部にかけて広く分布することが、その石器群把握に大きく関係していた（鎌木 1960）ことは、研究史上も間違いないであろう。この石器に、瀬戸内という地域名称を冠するのは理にかなっている。同時にそれらがサヌカイト石材を使用していることも注目され、瀬戸内の旧石器時代研究史の初期から、瀬戸内技法という石器生産技術の特異性と特定石材の関係が強く示唆されることになった。これらは、現在も瀬戸内系旧石器の研究者に、研究上の暗黙の「了解」を得ていると考えられる。

本稿は、兵庫県揖保郡御津町碇岩南山遺跡の石器群を検討し、この遺跡が地理的、生態的環境としての「古瀬戸内」に、どのように位置付けられるかを明らかにしたい。さらにサヌカイト石材の供給状況を検討することによって、石材の供給のあり方と石器群の「適応」を考察する。

さらに、碇岩南山遺跡の分析を糸口として、この瀬戸内（近畿地方中央部から備讃瀬戸地域まで）という地域とサヌカイト石材、瀬戸内系旧石器の三者がどのように関係を持っているかを、「仮説」する事を目的としたい。これは、ただ単に、瀬戸内系旧石器は、瀬戸内地域ではサヌカイト製のものが圧倒的だ、などということを確認するだけを意図するのではなく、また石器生産技術の「石材決定論」に議論を戻すわけでもない。当該地域の地形的・生態的環境と瀬戸内系旧石器集団の関係を把握することで、結果としてどうサヌカイト石材が「開発」され、旧石器集団の適応戦略の中にどうサヌカイト石材利用が組み込まれていったかを予測し、根本的に瀬戸内系旧石器とはどのような地域的適応を行った存在であるのかを、積極的に「説明」することである。

２．碇岩南山遺跡の石器群

碇岩南山遺跡（芝・山口 1995）は、兵庫県飾磨郡御津町字碇岩にあり、標高 100ｍ前後の山に挟まれた、東西にのびる谷部奥の北向き丘陵緩斜面に位置する。324 ㎡が発掘調査され、石器群 1384 点が出土した。調査地の基本土層は、遺跡の立地点が山麓段丘の緩斜面に位置し、後背山麓から供給される白色砂主体の土壌で構成されているが、このうちの第６層から第９層間に石器群の包含が認められた。６～９層の各層厚は薄く、各層の遺物の平面分布が一致すること、８から９層上面に比較的安定した遺物分布のまとまりが認められた包含状況から、層位的には同一時期の石器群とみなして良いと考えられた。成瀬敏郎（兵庫教育大

学）氏の分析により、下位の第 11 層に姶良Ｔｎ火山灰火山灰、碇岩南山遺跡Ｂ地点の上位相当層から三瓶Ｕ２火山灰の包含が検出されている。

発掘調査の結果、標高 11m前後の西から東に傾く緩やかな旧地形を９～10 層面に追跡し、石器類の集中部を調査区のほぼ中央に検出した。石器類は 784 点を原位置確認して取り上げ、石器類 389 点からなる南群と、395 点からなる北群の、２群の石器類ブロックを認めた。さらに水洗篩を行い、砕片など 600 点を検出した。また、礫石の分布も認められたが、その他の顕著な遺構は検出されていない。

出土した石器類は、原位置を確認したもので、ナイフ形石器 26 点、削器１点、剥片 161 点、砕片 564 点、石核 22 点、叩石１点、礫石９点である。水洗篩にはナイフ形石器５点、剥片 34 点、砕片 561 点がある。石器類の石材はサヌカイトが主体で、これに併せて緑色流紋岩、流紋岩、砂岩などが使用されている。サヌカイトは、視覚的な判断ではあるが、讃岐産と思われる流状構造を示すもので、二上山産と思われるものはなく、転磨を示す表皮を有するものも少ない。緑色流紋岩は、経験的に風化の進行した粗質の「碧玉」とされているものに等しい。石材の判定の困難な砕片を除いた石器類 210 点のうち、サヌカイト製が 162 点、緑色流紋岩製が 35 点、流紋岩製が 12 点、砂岩製が１点ある。

ナイフ形石器は、サヌカイト製が横長剥片素材で打面部側縁に調整を施したものが主体であるが、緑色流紋岩製には縦長剥片素材で２側縁加工のものがある。削器は、サヌカイト製大型剥片の３側縁に鋸歯縁やＵ字状の調整を施したものである。剥片は、サヌカイト製のものに大きさにばらつきはあるものの、横長剥片が目立つ。緑色流紋岩製のものには、底面を有する横長剥片と不定形または縦長剥片が認められる。石核は、サヌカイト製のものがすべて剥片素材の横長剥片石核で、剥離作業面が左右に移動するもの、作業面と打面が転移するものなどが認められる。また、多くのサヌカイト製石核類の側縁には、削器状の調整が施されている点が注目される。緑色流紋岩製石核は、貝殻状剥片を剥離した分割礫素材のもの１点がある。（図 13・14）

碇岩南山遺跡の石器群は、サヌカイト製石器生産技術は「瀬戸内系横長剥片剥離技術」に立脚していること、国府型ナイフ形石器・翼状剥片・同石核など、典型的瀬戸内技法が認められないこと、中・小型ナイフ形石器を主体とすること、火山灰降灰の層位的位置から考えて、国府型ナイフ形石器盛行期の石器群ではなく、それ以後の石器群と見なせる。

碇岩南山遺跡の石器群総重量は、原位置を確認したものと水洗篩から礫石類と叩石を除いた 1276 点で 1075.5ｇにとどまる。サヌカイト製石器類で 860.5ｇ、緑色流紋岩など 152.7ｇである。器種別数量比では石器 2.3%、剥片 11.8%、砕片 84.3%、石核 1.6%に対し、器種別重量比では石器 24.0%、剥片 26.2%、砕片 20.0%、石核 29.8%となる。

碇岩南山遺跡の石器生産は、サヌカイト原石を分割する第一工程が認められないこと、大型の剥片に対応する横長剥片石核が存在せず、中・小型の横長剥片しか生産されていないなど、石器生産工程の展開に偏りがあることが明らかになっている。サヌカイト製石器類の大きさと自然面表皮の観察からは、多くが転磨の無い流状構造を示す自然面を持っており、石

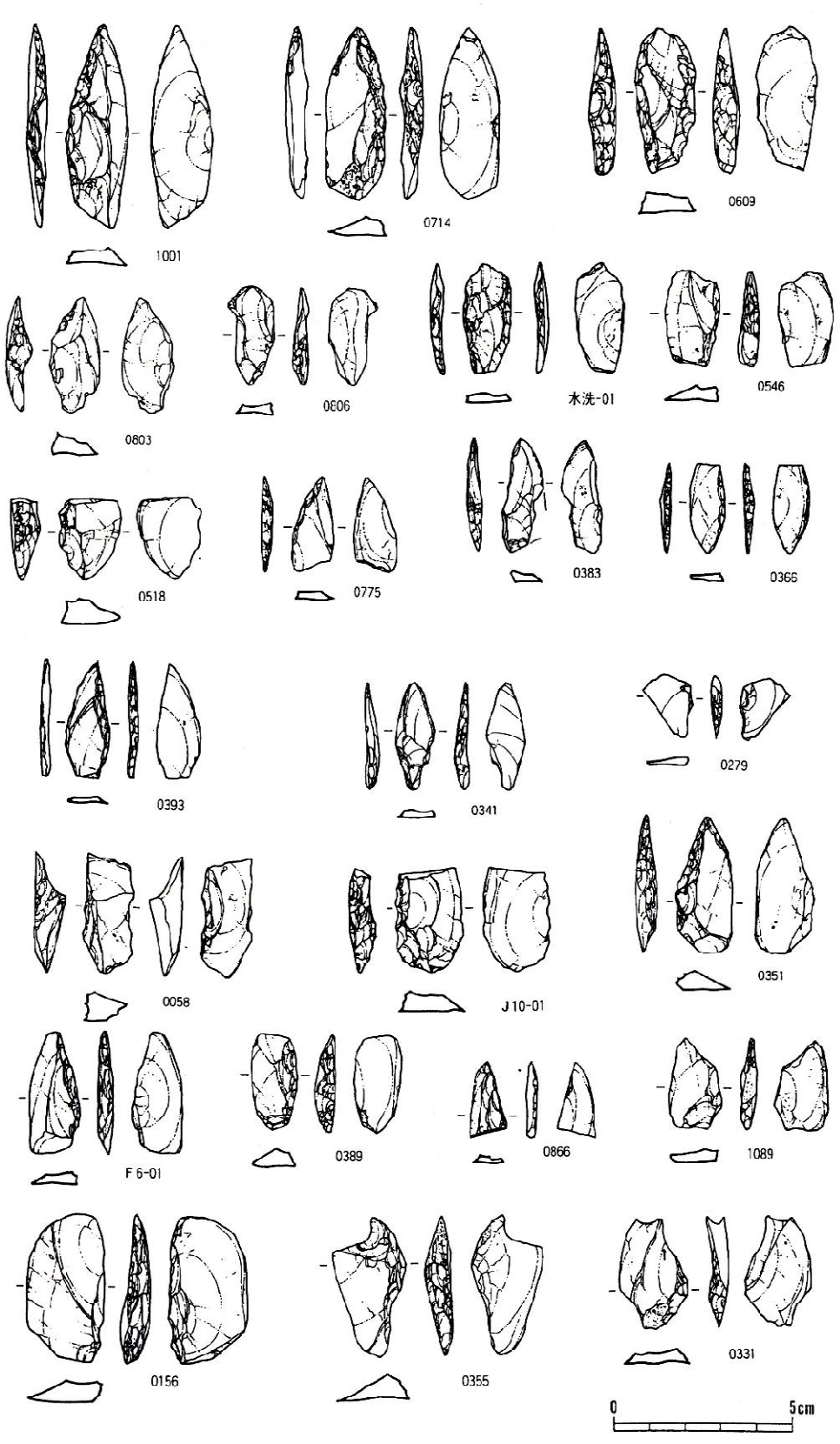


図 13　兵庫県碇岩南山遺跡の石器　1

図 14　兵庫県碇岩南山遺跡の石器　2

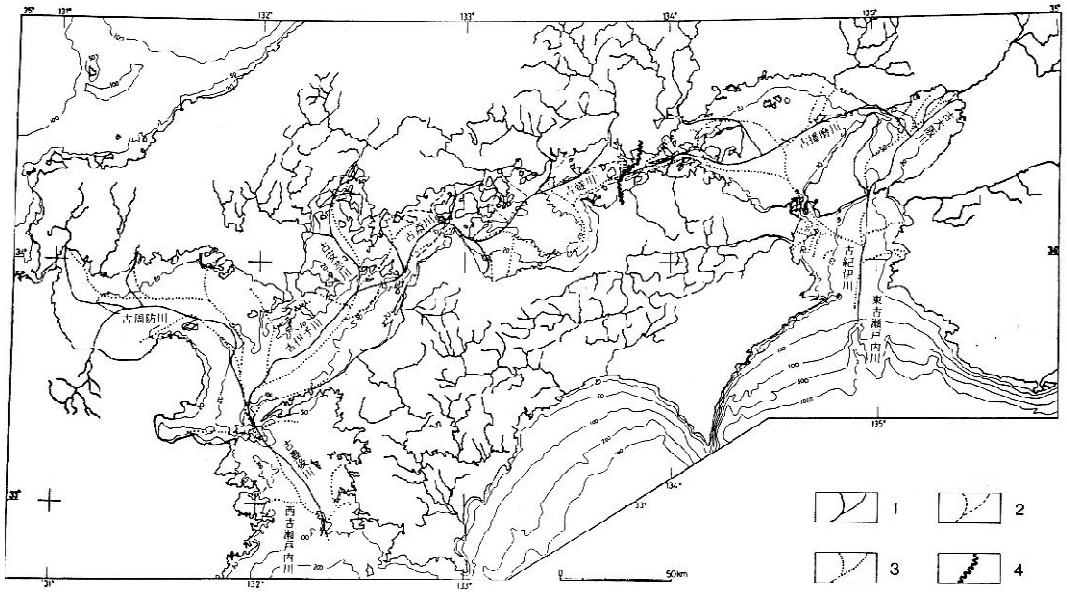


図 15　瀬戸内の沈水谷（堀 1994）
1：おもに桑代 1959 にもとづく沈水谷　2：堀 1986 で加えられた推定谷
3：「日本第四紀地図」1987 最終氷期谷　4：東と西の分水界

核や削器などはサヌカイト石材噴出地での直接採集と考えられる。摩耗した円礫は少ない。

碇岩南山遺跡は、二上山から約 95ｋｍ、備讃瀬戸の原石産地からは約 60ｋｍ離れている。その石器群は、国府型ナイフ形石器盛行期以降のサヌカイト原石産地からの石材獲得・保有のための適応努力の状況を、その器種構成と数量・重量構成、石核の削器転用などに、原石産地からの遠隔地の遺跡として、きわめて特徴的に示していると考えられる。

先に石器類の記述を行った際、剥片生産工程段階の分類を優先した。ところがサヌカイト製石核類や剥片の一部には、その縁辺に調整が行われているものが多く認められ、その技術形態学的分類・機能評価によって石器組成が大きく変動すると考えられる。

サヌカイト製石器群の石器組成は、基本的には主要石器としてナイフ形石器と少数の削器があり、その他の定型石器は組成しない。石核や剥片の一部の分類を変更した場合は、どうであろうか。

剥片の一部には、加工が施されているもの、使用痕と思われる小剥離痕が認められるものが少数あり、それらは加工痕有剥片や使用痕有剥片と分類再編することも可能である。本来剥片は、石器素材として、またそれ自体が利器として機能しうるものであり、当然あり得ることで、奇異なことではない。

碇岩南山遺跡の石器群を観察する上で、もっとも注目すべきは、サヌカイト製横長剥片石核のほとんどに削器状の調整が認められたことである。このような資料は、すでにいくつか播磨地方で認められ（春成 1980・81a・b）、「翼状（横長）剥片石核転用の削器」として知

られている。碇岩南山遺跡の個々の横長剥片石核の削器状調整部分を子細に観察すると、横長剥片の生産後に削器状の調整が施されているもの、先後関係が不明のもの、削器状調整の後に横長剥片を生産したものの３者が認められた。一方、横長剥片石核で削器状の調整の施されていないものは、わずかに６点にとどまる。このことは、碇岩南山遺跡においてサヌカイト製横長剥片石核と削器が、技術形態学的に何らかの構造的背景を有して密接に関係していることを示していると考えられる。削器状調整と横長剥片生産の先後関係は、３者がほぼ同数認められ、その作業の目的的重要性は同等といえる。この点で、横長剥片石核に認められる削器状調整によって、「横長剥片石核転用の削器」として一方的に規定することはできず、同程度に「削器転用の横長剥片石核」が認められることになる。その意味で、その両作業には、一方から一方へ作業が進められる不可逆性を認めがたく、むしろ両作業の可逆性・双方向性を認め得る点に、碇岩南山遺跡の横長剥片石核と削器の、最大の特徴があると考える。以前から存在が指摘された「翼状（横長）剥片石核転用の削器」との関係も検討しなければならないだろう。また、備讃瀬戸地域において存在する、いわゆる「櫃石島技法」による横長剥片石核には、一部に両面加工の尖頭器状や削器と見まちがう調整を施したものが散見される。碇岩南山遺跡の「横長剥片石核転用削器」・「削器転用横長剥片石核」の関係に類似した石器群構造の存在を伺わせている点を注目したい。

定型的器種として唯一組成した削器は、大形剥片の片面の周辺に精緻に調整を施したものであったが、縁辺に損耗痕は肉眼的には認めがたい。碇岩南山遺跡において、「削器転用横長剥片石核」の存在が確定するなら、このような定型的大形の削器が分割・転用されて横長剥片石核の素材となる可能性も考えられることになる。

このことは、削器状調整を施したものが、横長剥片石核の素材であると限定するのではなく、削器と横長剥片石核の両者が双方向的可変的関係にあることを示唆しているのではなかろうか。この双方向的可変的関係は、一遺跡の石器群の技術形態学的検討という従来的研究方法では、その構造の解明できない。碇岩南山遺跡の石器群は、一遺跡のみで評価するのではなく、東部瀬戸内地域旧石器社会の動態の中で評価すべきであろう。

３．瀬戸内・近畿地方中央部の地形単位とサヌカイト石材産地

ウルム氷期寒冷期の到来により、海水面は現水面から少なくとも 100m前後は低下したことが知られている。その結果、水深の浅い瀬戸内は海水面の後退によって排水され、東から大阪湾、播磨灘、燧灘、斎灘、伊予灘、さらに周防灘まで、全瀬戸内が陸化することになる。各湾や灘は、現在の海峡部が地峡となって絞められる連続した盆地群へと変容する。これら盆地群と瀬戸内沿岸地域を総称して、本稿では「古瀬戸内」と呼称する。まず、瀬戸内の当該期環境を、現時点での情報を基に整理しよう。

最終氷期の瀬戸内がどのような地形を示していたかを明らかにした研究として、桑代勲（1959・72）や堀信行（1986）がある。桑代は、氷期における海水準の低下によって陸化し、現

海底には当時の河川の沈水河谷が存在することを指摘し、その古水系を明らかにした。堀は、先行する桑代らの研究を、新しいデータによって更新・補正し、旧石器研究者の利用しやすい形で報告している（1994）ので、ここではそれに従って観察したい。第３図に堀による瀬戸内海の沈水谷の図を示す。また、古河川の名称は、堀によって現在の灘名などをとって与えられているので、これに従う。

「古瀬戸内」には、西と東に流下する東西の「古瀬戸内川」がある。「東古瀬戸内川」は「古紀伊川」から「古大阪川」・「古播磨川」に分岐し、「古大阪川」は現在の淀川に、「古播磨川」は備讃瀬戸へ遡上する。「西古瀬戸内川」は「古豊後川」から西へ遡上する「古周防川」と東に遡上する「古伊予川」に分岐し、さらに「古安芸川」を分岐させた「古斎川」は「古燧川」へと遡り、備讃瀬戸へと遡上することになる。現在の近畿、中・四国地方の河川は、これら東西の「古瀬戸内川」のどちらかに合流することとなる。ここでは、瀬戸内・近畿地方中央部の古地形が、東西二つの「古瀬戸内川」によって分かたれることを確認したい。両者の分水界は、おそらく現在の備讃瀬戸周辺にあったと考えられている。

瀬戸内海沿岸・近畿地方中央部には、サヌカイトの産する地域がいくつかあり、近畿地方で奈良・大阪府県境に位置する二上山北麓、大阪府和泉・岸和田地域、和歌山県梅原、兵庫県甲山、淡路島岩屋地域、淡路島西海岸中部、また備讃瀬戸では香川県国分台、讃岐北部が知られている。また、やや西に瀬戸内沿岸を離れて山間部に広島県冠高原がある（藁科・東村、1983・91）。

近畿・瀬戸内地方東部では、四国の讃岐北部以外に二上山と甲山には火山性噴出源が知られており、その他は海岸・礫層中の非噴出源産出地である。噴出源に伴う産地では、成分分析によって確度の高い同定ができるが、海岸部や礫層中での転石では、各地噴出原産の原石が混在している可能性が指摘されている。転石中には、二上山産や四国、讃岐北部・産、そのどちらでもないが噴出源のはっきりしない岩屋や和泉産の一部の石材群、いずれの群にも判別不能なものなどがあるという。また、藁科・東村のリストにはないが、特に瀬戸内東部の播磨・淡路の海岸部におけるサヌカイト転石の最終可能地が広く認められる。

藁科・東村によると、その石材分析結果から淡路島岩屋におけるサヌカイトは、約６割が四国の讃岐北部地域からの流着石材の可能性があるとするが、淡路島西海岸中部ではこれら四国産地と分類される流着石材は認められていない。また、古大阪川の流域となる和泉・岸和田では、約10%の四国、讃岐北部・産と類似した石材があるが、さらに流下した和歌山県梅原では存在しないという。一方の有力供給源である二上山産石材は、二上山北麓以外に和泉・岸和田において転磨された転石が約６％存在しているという。

このサヌカイト石材の産状を、先の古河川の状況と合わせて考えてみよう。噴出源産地である四国、讃岐北部産のサヌカイト原石が、非噴出源産地で転石として存在する場合、古河川による流下の可能性を考えなければいけない。「古播磨川」が「古大阪川」へ合流する際に、仮に現明石海峡を流下した可能性を前提とすると、備讃瀬戸地域から「古播磨川」・「古大阪川」へと直接下流域に向かって、距離が遠ざかるに対して量を減らしていると仮説

をたてることができる。異なった上流域を有する可能性のある淡路島西海岸では、備讃瀬戸から流下することができず、四国、讃岐北部産の石材が存在しないことになる。一方の二上山産サヌカイト石材が転石として他の非噴出源産地において存在する場合、やはり大阪・奈良県境の二上山北麓から「古大阪川」によって流着したものと考えられる。同様に直接下流域に向かって、距離が遠ざかるに対して量を減らしていると仮説をたてることができる。

岩屋や和泉産の一部の石材は、それぞれ独自石材が認められることから、現瀬戸内海には海没したりして未発見の石材産地があると予測され、特に四国、讃岐北部産に類したものがすべて、四国産と断定できる状況にはない。しかし、サヌカイト石材一般が、特に瀬戸内海沿岸において転石として転磨された状態で産する場合、古河川の流着石材である可能性を指摘しても間違いではないと思われる。

「西古瀬戸内川」側では、藁科・東村両氏によって現在のところ非噴出源の石材産地は分析されていないので、具体的な言及は困難である。このことによって、たとえば備讃瀬戸にあったと推定される東西「古瀬戸内川」の分水界以東には、四国、讃岐北部・産サヌカイト石材が流下していないとも、また海没したりして未発見の噴出源がないとも言い切れないであろう。ただ、備讃瀬戸にあった東西「古瀬戸内川」の分水界が讃岐北部・五台を「東古瀬戸川」が取り込むように図示されている点は注目に値しよう。

４．後期旧石器時代遺跡の分布とサヌカイト石材の開発について

筆者は、以前に瀬戸内系旧石器の地域性の発現に対し、サヌカイトという特定石材を使用した石器製作伝統と石材供給システムが強く結びついていることを指摘したことがある（山口，83a・91b・94a）。考古学的に把握される石器文化を、その地域的構造を維持する要因との関係まで振り返って考えてみよう。

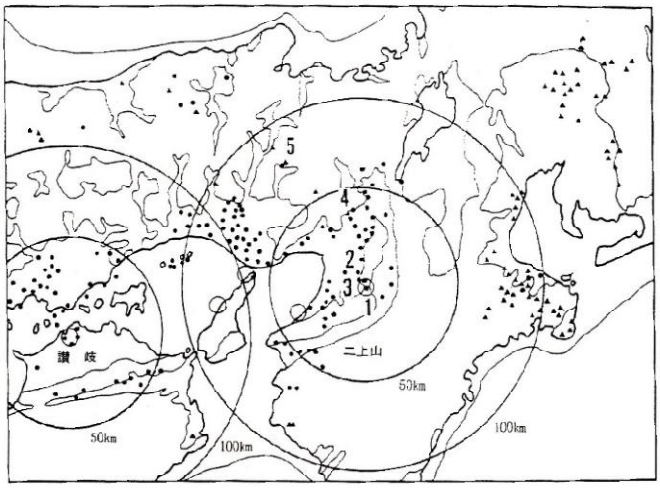


図 16　近畿・讃岐北部間の遺跡分布　○：サヌカイト原産地
1：鶴峯荘　2・3：国府・はさみ山　4：郡家今城塚　5：板井寺ヶ谷

近畿地方中央部・瀬戸内地域に分布する瀬戸内系旧石器は、サヌカイトに限定された石器群であり、この石材選択は原石産地と遠隔地の、たとえば二上山北麓から 40 ㎞離れた郡家今城遺跡でも大差ない。瀬戸内系旧石器文化の「極相」である国府型期の瀬戸内技法には、石器製作工程の異所展開を織り込んだ、第１・第２の２つの工程段階が存在し、第１工程は原石産地中心に展開され、原石産地に日常的な立ち入りの困難ないわば「遠隔」の地では、第１工程が欠落する。原石産地からは、盤状剥片や翼状剥片石核、翼状剥片・製品石器が持ち出され、遠隔地ではそれらを次第に消耗していくことになる。この様相は、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群からも伺え、瀬戸内系旧石器の存続時期すべてに存在する石器群の特徴と考えられる。瀬戸内系旧石器において、所持するサヌカイト製石材が枯渇した時点で原石産地への回帰が必然化することになると推測できるのである。

サヌカイト製の瀬戸内系旧石器の分布範囲は、サヌカイト原石産地周辺と遠隔地の２つのゾーンから成り立っていると考えても良いであろう。サヌカイト製瀬戸内系石器群の分布範囲は、このように考える場合、石材消費の結果、原石産地への回帰が必然化（山口 1988a）する限界点が分布の範囲を決定していると推定することが出来る。瀬戸内系旧石器の特徴は石器製作技術の特異性と共に、他の石材が転石などで容易に採取可能な位置にあってもほとんどこれを利用せず、サヌカイトに固執する性格は、この瀬戸内系石器群の分布範囲を結果として制約し、また石器製作技術の異所展開対応という特異性がこれを維持していたと考えてみることも出来るであろう。

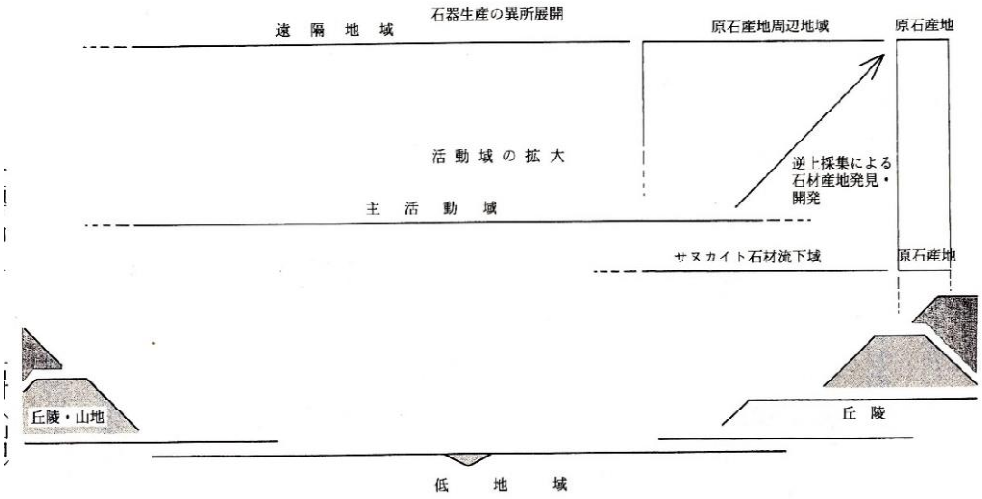


図 17　瀬戸内系旧石器のサヌカイト石材開発

先に検討した碇岩南山遺跡は、二上山から約 100km、讃岐北部から 80km にあり、石材供給上明らかに遠隔地に存在する。ここにおいては、この異所展開が行われた痕跡を残してい

る。「古播磨川」河床から採集できたと推定できるサヌカイト転石材を使用せず、讃岐北部の噴出源産のサヌカイトを使用している。さらに石核・削器間の器種転用を行い、石核と削器の素材の双方向的可変的関係が認められた。このような石核や削器の存在は、特に備讃瀬戸の島嶼部の遺跡において知られており、遠隔地遺跡への石材供給の確保と石器組成の維持を両立させる石器群の「適応」と見なせよう。また、碇岩南山遺跡の編年的位置から考えて、その特徴は瀬戸内系旧石器文化の変遷における極相期を過ぎた、原石産地と遠隔地の石器製作の異所展開を支える、いわば「完成された」適応であると考えられる。

さて、このサヌカイト石材に固執した瀬戸内系旧石器の分布は、近畿地方中央部・瀬戸内地域を通して、多くが瀬戸内海沿岸の比較的低い地形に、あたかも瀬戸内海を縁取るように所在している（山口 1991）。現在では海没したり、厚い沖積層下に埋没しているであろう遺跡の存在を想定・考慮すると、異所展開を行ったサヌカイト製瀬戸内系旧石器の主分布域は、むしろ丘陵部よりも低地にあったと思われよう。遺跡分布状況興味深いのは、瀬戸内の中央にある淡路島や小豆島の山地内には遺跡発見がないことである。

一方、原石産地から少し離れた近傍や遠隔地の遺跡群の位置は、丘陵や帝位段丘などの比較的景観の開放的な場所に立地するのを一般とする。「古瀬戸内」の地形群の盆地底は、深くて現海面下 40m、浅ければ 10mであるので、古河川の埋没谷や湖の存在の可能性を考慮しても、非常に平坦な地形が連続していたことになる。たとえば讃岐北部・二上山北麓のいずれからも遠隔地である碇岩南山遺跡のサヌカイト石材の移動経路を考えてみても、「移動距離」に対して「移動高度」は僅少であることが知れよう。おそらく近畿地方中央部・瀬戸内地域のほとんどの遺跡において移動距離と比高差の比は非常に緩やかなものとなっていると考えられよう。

瀬戸内系旧石器の極相としての「瀬戸内技法」の盛行する時期の石器製作の異所展開は、石材の供給を計画的な集団の「回帰活動」に組み込んでいるものであり、先の碇岩南山遺跡も同様の特徴が認められる点、削器・石核素材に双方向的可変的関係がある点は、同じ範疇にあると捉えられよう。この時期の瀬戸内系旧石器が、原石産地域の「利用」を行い、それを継続できたことは、組み込まれた戦略として理解できよう。

最後に、以上みてきた噴出源・非噴出源産地と当該地域の地形の特徴、後期旧石器時代サヌカイト製瀬戸内系旧石器の技術的特徴から、このようなサヌカイト原石産地の開発が、いつ、どのように行われたかを推察してみたい。

この原石産地と遠隔地の、石器製作工程の異所展開が、主にサヌカイト噴出源上の二上山北麓と四国、讃岐北部の原石産地を起点として行われたことを考えてみると、まず、どちらも噴出源の山塊であることが指摘できる。また、かつてそれぞれがサヌカイト石材を下流域に転石として流下させた点でも同様であった。古大阪川系の二上山北麓は標高 120m前後で、その原石産地遺跡の立地は、通常の近畿地方中央部の遺跡立地とは景観的に異なることが指摘される（山口 1991b）ちなみに、讃岐北部の金山は標高 200m、国分台は標高 200mである。讃岐北部や二上山北麓のいずれも河川上流に位置する噴出源産地であり、立地の異なる

山塊中に原石産地遺跡群が形成されること、石器生産に比重のかかった遺跡の存在の予測されることから、大きく傾向を捉えるなら、原石産地－遠隔地間の関係は、河川水源と下流域の関係に置き換えることも出来よう。

筆者はすでに、サヌカイト製瀬戸内系旧石器の主分布域が山地や丘陵ではなく、むしろ低位な段丘や低地にあることを指摘した。当時の主活動域が、近畿地方中央部から瀬戸内地域の低位な地形単位に広がっていたと考えるのである。

瀬戸内系旧石器成立以前を予測するならば、地域的適応の特化の始まる以前、おそらく中期旧石器の存在を予測しなければいけないであろう。この段階においても、当然主活動域はより低位な段丘上や低地であったと推測する。この段階において汎日本的な石器群の動向と等しく石材選択は多様であり、サヌカイト石材は河床や浸食崖において採取可能な一石材であったにとどまるであろう。

次第に活動域は拡大し、経験的に生まれるサヌカイト石材への嗜好の結果、河川の転石採集が進み、転石の流下した中流域から上流域へと石材採集活動が遡上する。

その結果発見された噴出源サヌカイト石材原産地、二上山と讃岐北部は、どちらも彼らにとっては、低位とはいえ従来の活動領域をわずかに越えた山塊中に位置していた。

次第にサヌカイト石材への嗜好・偏執が高まり、主活動域に接したサヌカイト石材産地へのサヌカイト石材の直接的採集活動が行われる。この結果、非サヌカイト石材への依存度が低下し始める。石材供給活動が集団の回帰運動に組み込まれるという画期が想定されれば、サヌカイト石材への依存拡大と相まって瀬戸内における後期旧石器的な諸相の成立を推測させうる段階となるであろう。

サヌカイト石材の原産地での回帰的採集活動と遠隔地での非サヌカイト石材の現象は、石器生産技術における「適応」を促し、石器製作工程における異所展開が始まる。これがいわば剥片素材の石核から複数の剥片を生産するという二段階の工程を行う、瀬戸内系横長剥片剥離技術となる。この技術的「適応」は、特定産地の石材が結果として流布した結果と考えるより、すでに存在する主活動領域全体で限定された産地の石材を意図的に使用するために進められたと考えた方が妥当であろう。この点で、筆者はサヌカイト石材の執着的使用、瀬戸内系横長剥片剥離技術の出現、石器製作工程の異所展開といった特徴の出現から、安定した地域社会の存在を推定し、近畿地方中央部・瀬戸内地域における後期旧石器時代の始まりを画期したいと考えている。

本稿であつかった碇岩南山遺跡の石器群は、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期以降の所産であり、サヌカイト石材への固執と石器生産工程の異所展開対応を維持しながらも、典型的瀬戸内技法の認められない横長剥片剥離技術に変移しており、また削器と石核素材の両方向性可変性も特徴的である。この段階においては、二元的な異所展開に対する自然的・地理的・社会的いずれかまたは複数の不都合が生じつつあったのではないかという可能性を伺わせている。

瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器は、あくまで瀬戸内系旧石器の「極相」であり、石器生

産におけるサヌカイト石材とその供給を回帰移動に組み込んだ瀬戸内系旧石器の様相の一つに過ぎないのであり、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法のみに瀬戸内系旧石器を代表させることは、後期旧石器時代の画期から瀬戸内系旧石器の終焉までの多様な「適応」を視野に入れない危惧があるといえようか。

５．おわりに

本稿では、碇岩南山遺跡の石器群の検討を足がかりに、古瀬戸内の地形的環境を検討し、サヌカイト石材と瀬戸内系旧石器時代遺跡の分布を動態として考えることにより、サヌカイト石材の「開発」という問題を考えた。その結果、瀬戸内系旧石器のサヌカイト石材との結びつきがどのように形成されたかについて、先のような一つの「仮説」をすることができと考える。このサヌカイト原石産地への「遡上開発」と石器生産技術の「異所展開」によるサヌカイト横長剥片剥離技術の出現、瀬戸内系旧石器の成立と変遷は、当該地域の旧石器時代集団の地域に対する「適応」活動であったのである。

もとより、当該期は氷期最寒冷期を含む時期であり、地形的、生態的環境は現在と大きく異なっている。また、現時点で把握された瀬戸内系旧石器の分布状況や石器群編年が確定しているわけでもない。本稿における議論は、細部の正確さではなく、制約された情報を基にしながらも、まずは、大きな構造の指摘をともなう「仮説」の提示という「方向」を示すことでなければならないと考える。その意図と議論の「方向」は、今後明らかになる情報によって修正されることは明らかではあるが、まず目の前の考古学的現象に対する「説明」を試行する必要があろう。その意味で、本稿の瀬戸内系旧石器のサヌカイト石材開発に関する「仮説」を理解していただければ幸大である。

第４節　サヌカイトの産地

はじめに

サヌカイトは、安山岩の一種で、同質の石材が日本列島の火山活動の認められた地域に産出地が点在している。列島各地で石器石材として供されたが、特に近畿・瀬戸内圏においてきわめて普遍的な石器石材として、旧石器から縄文・弥生時代まで利用された。ここでは、サヌカイトは主に打製石器の製作が製作され、その石材支配率は各時代を通して圧倒的であった。通常サヌカイトという石材名称は、近畿・瀬戸内中部の二上山産や金山・五色台産、広島の冠高原産を中心とした同種石材に限定して使用される場合が多い。

サヌカイトは、蛍光Ｘ線分析法により産地分析が最も早く行われた石材（東村・藁科 1975）であり、多くの考古学的検討事例もある。ここでは、近畿・瀬戸内地域のサヌカイト石材の産地と石器製作上の考古学的問題と、自然科学的方法による産地分析の、両者の間にある課題を考えたい。

サヌカイトの蛍光Ｘ線分析法による原石産地推定

サヌカイトで蛍光Ｘ線分析法により分析比較される対象は、原産地ごとの差異のない主成分ではなく、いわば不純物として包有される微量成分である。サヌカイトは安山岩の一種であり、溶岩流の系統や噴出時期、冷却され方などで、微量成分に変異が生じている。噴出源が異なる場合は当然として、同じ産地にあってもかなりの変異幅を持った微量成分組成のばらつきがある。ある程度の精度を確保するため、本来の原石産地の変異をカバーする検体数が確保されており、蛍光Ｘ線分析後の統計的検定作業には問題ないと分析者はしている。

安山岩の一種であるサヌカイトはガラス質安山岩も含めると、同質の石材を日本列島に産するが、このうちから主な原石産地を単位として 66 原石群が比較資料として登録されている（藁科 2001）。考古学的なサヌカイト石材の分析は、この原石群との間で蛍光 X 線分析により微量成分組成の異同を調べ、多変量解析の手法を経て、原石群すべてとの一致度を計算、各産地に帰属する確率を算出し、可能性の上位を候補としている。統計的方法を駆使する結果、石器１点１点の石材原産地を決定的に解明というよりも、遺跡のサヌカイト全体の出自傾向を描くに留まる場合もあり得るので、分析の限界についての理解が考古学研究者側に必要であろう。

また、遺跡出土の石材を分析して、原石産地が特定できない場合、未発見の産地石材が使用されている場合が考えられるとしている。このため藁科は、傾向を同じくする試料をまとめて「遺物群」とし、その分布域を求めている。現在サヌカイトでは全国に 25 群の「遺物群」が設定され、将来の原石産地との対比を予定している。少なくとも、石器生産に寄与した未知の原石産地がかなり存在していることは疑いないが、このような石材原産地発見への考古学研究者

側の努力を、藁科は強く促している。

付記するが、微量成分組成を正確に捉えるためには、サヌカイト試料にはコンタミを避けるために風化面の除去を行う必要があり、完全な意味での非破壊検査とはなっていないので、考古学的な重要資料を検体とするには、注意が必要である。

考古学の作業と課題

それでは、この蛍光Ｘ分析法によるサヌカイト原石産地の推定と、実際の考古学的な作業を結びつける上での問題点について考えよう。

サヌカイト石材は、旧石器時代では瀬戸内系旧石器の支配的石材として安定して使用され、瀬戸内国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法を極相に生み出している。二上山北麓、国分台・五色台といったサヌカイト噴出源を起点として行われた石器製作工程の「異所展開」を前提とした瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統を発達させることにより、遠隔地での石材欠乏に適応したと考えられる。このサヌカイト石材の拘束性は、瀬戸内系旧石器の構造的発現におおきく関与していると考えられ、旧石器研究に重要な視座を提供している。

一方、播磨など石材供給圏の狭間では、瀬戸内の当時陸化していた河床などを流下した転磨の激しいサヌカイト円礫が臨機に採集されていたことが判明し、「岩屋」石材原産地として識別されている（藁科 1991）。岩屋周辺の段丘崖は、流下礫からなる河床原石産地であり、おそらくこのような石材の分布範囲は播磨灘から大阪湾の海面下に広く広がるのであろう。この場合サヌカイトを使用したとしても石材確保のあり方は、チャートや頁岩といった在地石材の河床での臨機採集と同じと見なせることになり、火山岩としての石材原産地に対する拘束性は無くなることは注意される。このような円礫を利用した石器生産の内容は、典型的な瀬戸内系旧石器生産技術とは相違していると考えられる。

この岩屋産には国分台・五色台等から流下した石材が多く含まれるが、石材の蛍光Ｘ線分析法では讃岐北部から直接採取したものか海没した河床から転石を採集したかは判断できない。遺跡から出土したこのような石材は、付着する表皮面に転磨が認められるかをよく観察する必要かある。また、国分台・五色台産以外のものも多くあり、たとえば瀬戸内海底に未知のサヌカイト噴出源が海没している可能性が考えられ、海岸部での転石状況を考古学側で把握する必要がある。

先に述べた二上山や金山・五色台においても、同一石材原産地での多様な検体の確保には、石材原産地の微妙な地点差を把握している、たとえば石材原産地遺跡の資料収集家や考古学研究者が検体を提供して協力することもあり得えよう。また、火山列島である日本には、一般に粗質・良質の安山岩産地が多数あるが、これらの一部についても積極的な踏査・石材検体の確保が、考古学者の目から行われるべきであろう。とくに、有力なサヌカイト石材原産地の知られていない山陰地方などである。この作業中に、藁科の設定する「遺物群」

が本来の石材原産地に吸収されていくことになるだろう。

縄文時代では、瀬戸内の内海化により播磨地方などでは金山・五色台からの直接採集が困難になったと考えられる。淡路島の縄文遺跡では多量のサヌカイト円礫が使用されており、海岸の波打ちでの石材採集が一般化していることも考えられる。また、山陰では在地安山岩石材の利用も窺え、全体として二上山、讃岐北部での原石産地の比重の低下が認められる。遺跡毎のサヌカイト石材の形状を観察し、石器生産のあり方をよく検討する必要がある。

弥生時代では播磨地方東部にまで金山産のサヌカイトが大型盤状剥片として搬入された拠点的な遺跡が認められ、「舟」による石材運搬・交易の可能性が考えられている。大型盤状剥片か円礫かなど搬入形態と、表皮の付着部分に転磨雅があるか遺跡内での石器生産の実態を把握してから解釈することが必要となるだろう。

実は、サヌカイトは肉眼観察によって、二上山産か讃岐産か否かといった程度の産地判断は可能な場合がある。以前にも二上山北麓のサヌカイト噴出源でのサヌカイト礫の表皮の発泡風化状況を提示し、サヌカイト噴出源を判断しようとした試みがあった。

兵庫県篠山市板井寺ケ谷遺跡（山口編 1991c）では、サヌカイトの風化面に現れる石理と結晶の違いから二上山産とそれ以外とに肉眼観察で区分しようとし、肉眼観察も一定の有効性が認められている。二上山産は約 80%で、近畿地方中央部との間に直線的な石器生産の異所展開の様相が認められる。二上山産以外の石器は、蛍光 X 線分析法を経て「岩屋」とされており、播磨側への臨機的石材採集の機会があったものと解釈されている。出土石器の全量蛍光X線分析が不可能な場合、肉眼による判断も補完的には試みられるべきであろう。

一方、兵庫県神戸市玉津田中遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代中期までのサヌカイト製石器類 600 点という異例に大量の蛍光X線分析を行なっている。また蛍光X線分析と肉眼観察もあわせて行なった 458 点では、一致 437 点、誤判定 21 点で、ここでも金山産か二上山産か程度の肉眼観察の有効性も証明されている。

分析結果によると玉津田中遺跡では数量的には 9 割を越えるサヌカイトが金山産であり、その大型盤状剥片が存在し、打製石包丁や多様な石器類がシステム的に生産される様相が伺えるという（藤田 1996）。重量比ではさらに圧倒した量を占める。玉津田中遺跡では、石器生産のほとんどが行われており、一般的な器種は金山産を使っている。岩屋産はほとんど認められなかったという。

一方、中期には凸基の大型石鏃や打席石剣など「優品」が二上山産を素材としており、特定器種では近畿地方中央部から播磨への流入も認められ、弥生時代の石材供給の多様性が窺える結果となっている。以前より近畿地方中央部での遺跡間ネットワークが二上山産サヌカイト石材を行き渡らせているとされてきたが、播磨東部の玉津田中遺跡もその一端に位置している可能性がある。特に武器類が二上山産で広域に移動している可能性は、政治的・軍事的背景を予期させよう。サヌカイトの石材原産地判定は、近畿地方中央部から播磨へといった領域外への石器石材の移動を明らかに出来るであろう。

玉津田中遺跡において長期にわたるサヌカイト石材を大量に蛍光 X 線分析を行い、播磨地方

と近畿地方中央部にまで及ぶサヌカイト石材の時期的な変遷まで解明したことは、単に蛍光Ｘ線方による産地分析法のというよりも、積極的な考古学側の石材研究の明確な意図の成果であろう。

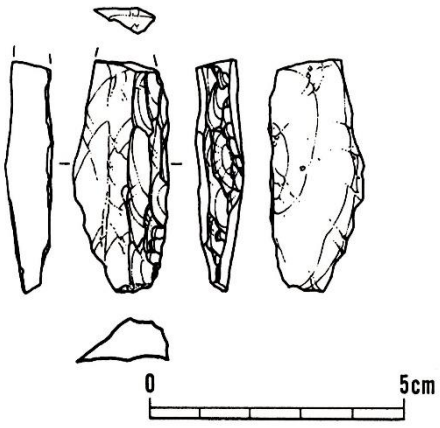
おわりに

サヌカイト石材は自然現象として遺跡から出土するのではなく、考古学的な人為の所産としてある。本来、サヌカイトに限らずどのような石材においてもその産地と遺跡にもたらされた経緯を判断するのは、あくまで考古学側の基礎的な作業であり課題であるといえる。自然科学的石材産地分析の結果と考古学的情報をつなぎ合わせる根本的な姿勢を持ち続ける必要があるだろう。

蛍光Ｘ線分析法は、その比較検体の確保や統計ソフトなど、これからも精度の向上が期待される部分を持っている。考古学側からの積極的な関与が必要であろうし、最近の蛍光Ｘ線分析機械の導入の促進をみると、今後は比較検体データの共有化が図られるのが望ましいだろう。

また、研究環境を一変させた千葉県のように、サヌカイト分布圏においても地域単位での多様な石材を扱った石材マップの整備など、その環境整備が継続して行われることが望まれる。

第２章　後期旧石器時代石器群の研究



兵庫県温泉町上山高原採集のナイフ型石器

1 節　但馬地方における旧石器

但馬地方の旧石器遺跡と遺物

筆者は、兵庫県養父郡関宮町在住の研究者、高松龍暉氏と兵庫県但馬地方の旧石器時代探索を行い、いくつかの遺跡を発見することになった。これらは、兵庫県の同人誌に報告し、また畑ケ平高原の遺跡群は、旧石器考古学誌に報告した。山口の研究者としてのフィールドは、主に兵庫県である。この項の報告は、画期となった畑ケ平高原の遺跡群発見に先立った踏査によるものである。

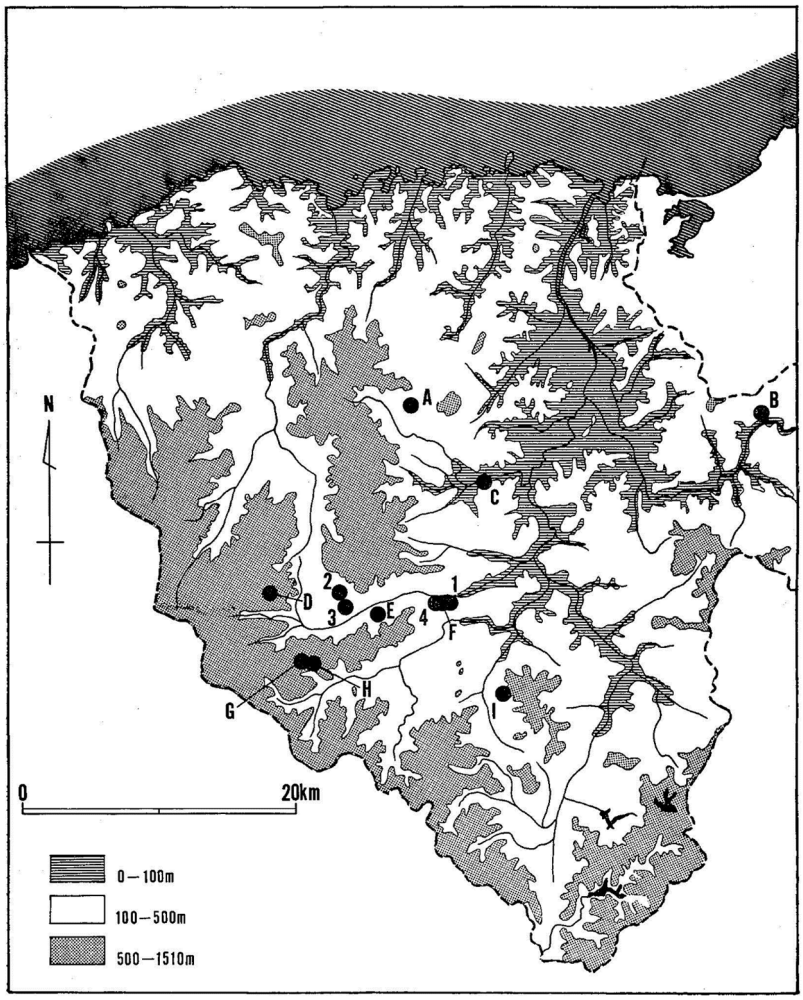


図 18　但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の遺跡

A：神鍋山　B:木村西ケ奥　C:伊府　D:別宮家野　E:相地下向田　F：三宅早詰　G:杉ヶ沢第 13 地点　H:杉ヶ沢第 29 地点　I:石ケ堂

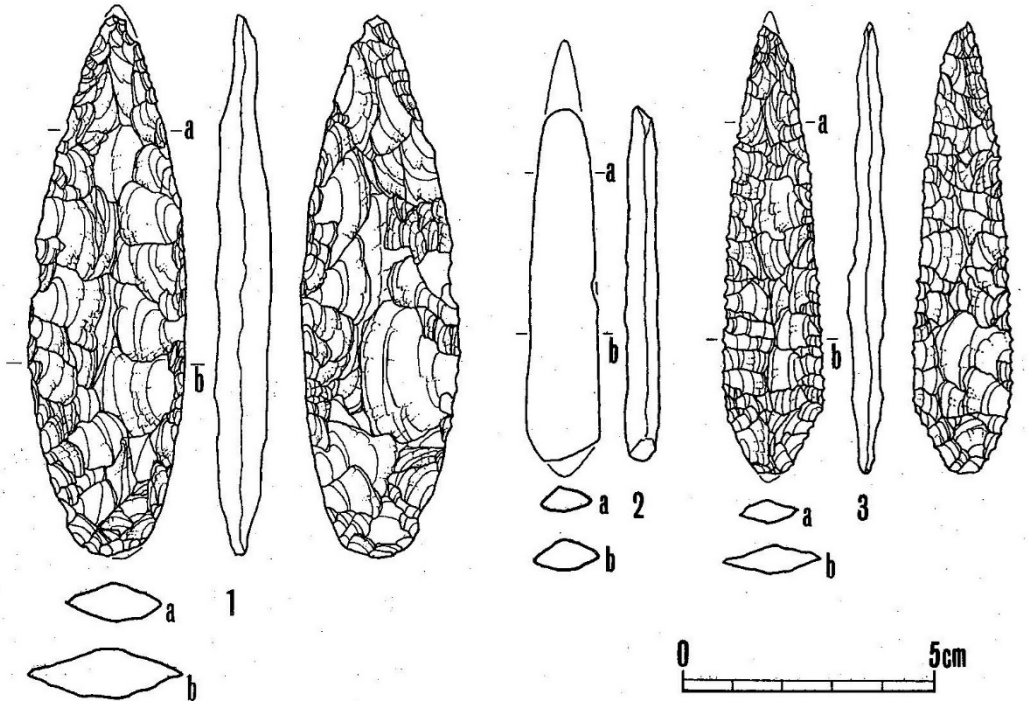


図 19　但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 1

出石郡但東町木村西ケ奥出土の尖頭器（図 19-1）

出石川の支流太田川を約 14km さかのぼった川沿いの平地に木村部落が位置する。西ケ奥は、北側の山から太田川に流れ込む小さな谷の岸にあり、標高約 120m ほどである。

尖頭器は、比較的大形の木葉形尖頭器である。木葉形尖頭器としては比較的長身であり、躯幹は若干丸みをおびる。また、基部は丸味をもって終っている。断面形は、 ほぼレンズ状を呈する。器面は、丹念な調整加工で毅われているが、押圧剥離によるものではない。現長 10. 8cm、幅 3.2cm、厚さ 1. 1cm、サヌカイト製である。

養父郡関宮町三宅早詰遺跡出土の有舌尖頭器（図 19-2）

八木川南岸の山麓に展開する丘陵地帯に位置し、標高は 120m~200m である。周辺には古墳も多く、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。1915 年頃から開墾されて果樹園や桑畑、菜園となっていたが、今では荒地となっている。

有舌尖頭器は、極めて幅狭、長身である。先端部は欠損しているが、躯幹は両側縁とも直線的で長い。また、基部はその一部を欠くが、約 1cm の部分に角度をつけ直線的に舌部を整形している。断面形は、一方の面がやや山形を呈するレンズ状である。器面は、著しい風化と磨耗により剥離面の観察は困難であるが、一部に押圧剥離による調整加工を認める。現長 7cm、幅 1cm、厚さ 0.6cm であり、明灰色を呈する泥岩製である。

養父郡関宮町杉ヶ沢第 29 地点出土の有舌尖頭器（図 19-3）

氷ノ山の一支脈が東方に延びた尾根上、関宮町と大屋町にまたがる約 300ha の熔岩台地が形成されて、標高 725~820m の高原となっている。1969 年から 70 年にかけて、この高原 100ha が開墾され、この開墾地内から、縄文時代の遺物散布地が 20 数ケ所発見された。
さらに、1976 年にはこの新開墾地の東南隅標高 725m の沢地に 2000 点余りの遺物が散布しているのが発見された。

有舌尖頭器は、幅狭、長身である。全体を残しており、先端部から躯幹まで、ほぼ直線的であるが、両側縁とも細かい鋸歯状を呈する。また、基部はその一部を欠くが、約 1.5cm の部分に角度をつけ直線的に舌部を整形している。断面形は、薄い菱形を呈する。器面は、風化が著しいものの、両面ともに押圧剥離による縞状の調整加工が認められる。現長 8.9cm、幅 2.1cm、厚さ 0.8cm であり、サヌカイト製である。

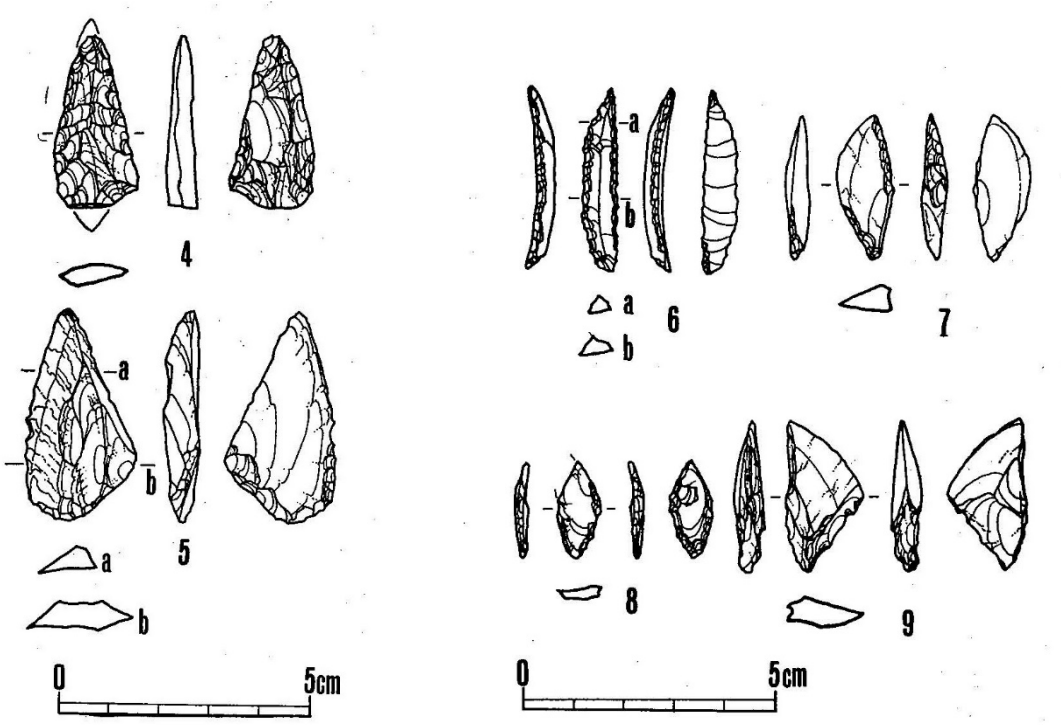


図 20　但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 2・3

養父郡関宮町杉ケ沢第 13 地点出土の有舌尖頭器（図 20-4）

杉ケ沢開墾地の西南に広い湿地があり、スガマチと呼ばれている。

有舌尖頭器は、左側縁がやや弧状を呈し、右側縁が直線的であり、逆刺および舌部の整形は右側縁が明瞭である。比較的短形である。現長 3.5cm、幅 1.7cm、厚 0.6cm であり、サヌカイト製である。

養父郡関宮町相地下向田遺跡出土の横長剥片（図 20-5）

八木川の南岸に形成された河岸段丘に、南から流出する相地谷によって形成された扇状地上

に位置する。標高は約 200m である。1966 年に、小規模な牒道工事が行なわれた。

横長剥片は、剥片を素材とした石核から剥離されたものであるが、瀬戸内技法によるものではない。右側縁の旧打面部には打面調整は認められない。表面には、打面縁調整または先に剥離された剥片の痕であるネガティブな剥離面数面の切り合いが認められる。打瘤は若干の加工により除去され、また、左側縁の裏面には調整加工が施され、削器とされている。長さ 4.2C111、幅 2.2cm、厚さ 0.7c 節であり、サヌカイト製である。

養父郡関宮町別宮家野遺跡出土のナイフ形石器（図 20-6～9）

鉢伏山の尾根から南へ派生した一支脈が緩やかに下ってきた尾根状地形の中に形成された丘の上に存在する。別宮集落から西北 200m の地点にあり、標高 693m である

第 3 図 6 は、縦長の剥片を素材としたナイフ形石器である。左右両側縁には刃潰し加工が施され、刃部は残存せず、両側縁加工尖頭器といったほうがよいかもしれない。先端は鋭く尖るが、器体がやや反り返っている。基部には、右側縁の裏面加工が施されている。長さ 3.6cm, 幅 0. 8cm、厚さ 0. 3cm、チャート製である。

第 3 図 7 は、横長剥片を素材としたナイフ形石器である。右側縁には上半部分に背潰し加工を施すが下半部分は打面部を残存させる。左側縁には、基部周辺に刃潰し加工を施す。長さ 2.9cm、幅 1 .2cm、厚さ 0,8cm、サヌカイト製である。

第 3 図 8 は、横長剥片を素材としたナイフ形石器である。先端部から左側縁にかけ欠損する。左右両側縁には、表面から裏面に向けての加工が施されている。現長 2 cm、 幅 0.9cm、厚さ 0.3cm、明灰色を呈する泥岩製である。

第 3 図 9 は、切り出し形を呈するナイフ形石器である。左側縁は、素材の泥板岩を折断した不規則な面となっており、右側縁の基部周辺にわずかな刃潰し加工を施す。大きく裏面加工が施される。長さ 3 cm、幅 1.5cm、厚さ 0.7cm であり、泥板岩製である。

養父郡関宮町三宅西谷遺跡採集の黒曜石製ナイフ形石器（図 21-1）

関宮町三宅地区における八木川南岸の丘陵地帯西端に近い向三宅集落の東側一帯に所在する水田を西谷といい、標高は 150m~170m である。1977 年には、関宮町内最初の圃場整備事業が行なわれた。その跡から押型文土器片、弥生土器片、多数の土師器および須恵器片が発見され、石器類も散見されていた。黒曜石製ナイフ形石器は、1981 年の春、高松が関宮中学校郷土史部の生徒数名を引率して表面調査中、向三宅集落に近い水田の畦畔から採集したものである。

黒曜石製ナイフ形石器は、上半部分を欠損しているが、本来厚手の縦長剥片を素材としたものである。素材剥片の打面は、 自然面を利用しており、打面調整は施されていない。左側縁に刃潰し加工を施して背部を整形するが、右側縁に匁潰し加工は認められず、上半部分は明らかでないものの、左側縁の下半部分一側縁のみ背部を整形するものらしい。右側縁には刃こぼれ状の小剥離が認められる。裏面加工が若干存在している。多少ローリングを受け、若干稜線が磨滅している。現長 43mm、幅 23mm、厚さ 10mm、現重 12.5 g 、黒曜石製である。

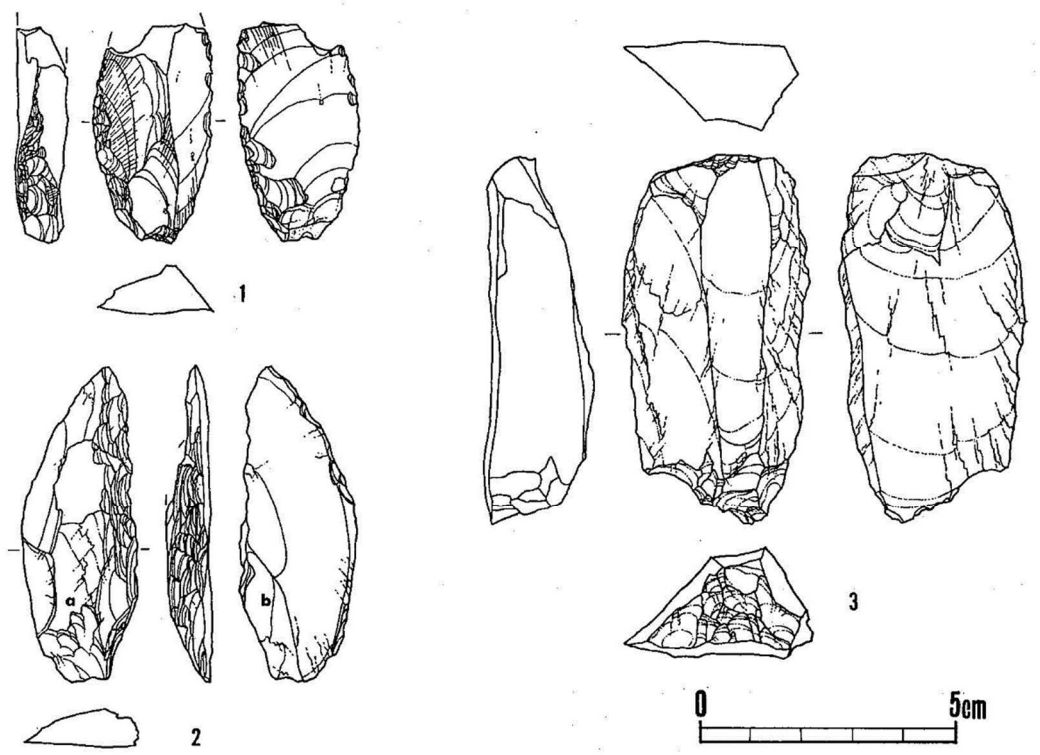


図 21　但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 4

養父郡関宮町吉井奥山円光寺遺跡採集のナイフ形石器および横長剥片石核（図 21-2、図 22-4）

八木川は、円山川の支流であり、氷ノ山に源を発し、八鹿〜熊次断層に沿って関宮町と八鹿町を西から東へ貫流する 27km の淡流である。この八木川も、中瀬、吉井地区に入ると沖積地を拡大し、その北岸には傾斜の緩やかな河岸段丘を形成している。八木川支流の円光 寺川を丘陵地へ向けて 300m ほどさかのぼった右岸の尾根の先端に円光寺が所在するが、さらに西に 100m の丘が遺跡中心地である。標高は 240m 余りである。1967 年に縄文時代前期の爪形文土器片が採集され、その後、山形文をはじめ縄文時代各期の土器片、弥生土器片等および石器、剥片等も採集されていることから、縄文時代早期からの遺跡であることが判明している。

ナイフ形石器は、1979 年に遺跡中の菜園から採集され、横長剥片石核は、1967 年秋に農道切り通し断面から採集されたものである。ナイフ形石器は、表面の大半が剥落しており、石材の性質上風化が著しく、剥離面の観察は困難であるが、泥板岩製の横長剥片を素材とする。打面部一側縁のみを背潰し加工を施すことにより背部を整形するが、背潰しの剥離は数段の階段状剥離を生じている。素材剥片は、著しく薄い板状を呈する石核から剥離されているらしく、石核の打面である裏面の b 面と石核底面である表面の a 面に平行にはさまれて厚さは 7.5mm しかない。また、左側縁には逆方向からのネガティブな剥離面数面の切り合いが認められる。長さ 57mm、幅 23 暉、厚さ 7.5mm、重さ 11.9 g 、泥板岩製である。

横長剥片石核は、大型の板状を呈する泥板岩を素材としている。素材は、本来から方形を呈

していたらしく、石核側縁はほぼ 90° であり、それぞれ自然面となっている。石核裏面は節理面であり、鉄分が固着している。石材供給は、岩盤から直接行なわれた可能性が考えられる。剥離作業面と打面は交互に転換されており、表裏両面に交互に剥離痕が認められる。打面調整および頭部調整が施されているが、主体は頭部調整である。所属時期には問題が残る。長さ 120mm、幅 141mm、厚さ 37mm、重さ 692g、泥板岩製である。

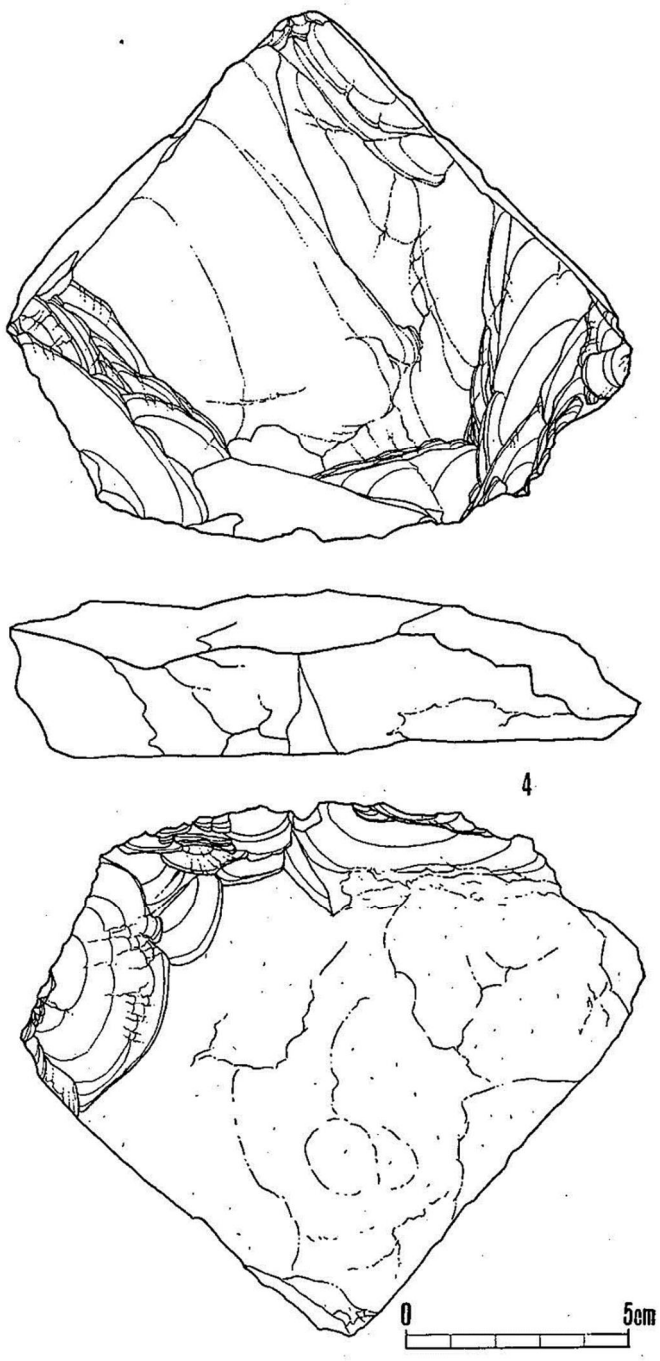


図 22　但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 5

養父郡関宮町吉井上吉井前遺跡採集の先刃型掻器（図 21-3）

吉井地区の集落は、八木川北岸の山麓丘陵地の山裾を通る県道に沿って民家が建ち並んでいる。全但バス上吉井停留所付近の県道南側一帯を上吉井前と呼ぶ。標高 220m 余りである。1979 年に、関宮から吉井にかけて県道と八木川にはさまれた水田 19.3ha の圃場整備工事が行なわれた。上吉井前から各時代の遺物 200 点余りを表採し、先刃型掻器は水田排水路断面より採集された。先刃型掻器は、比較的厚手の縦長剥片を素材としている。打面は自然面を利用しており、加撃はハードハンマーによるものである。素材剥片の末端に掻器機能部を形成しているが、加工は不規則的であり、82~76 度程度である。長さ 74mm、幅 37mm、厚さ 22mm、重さ 58.9g、安山岩製である。

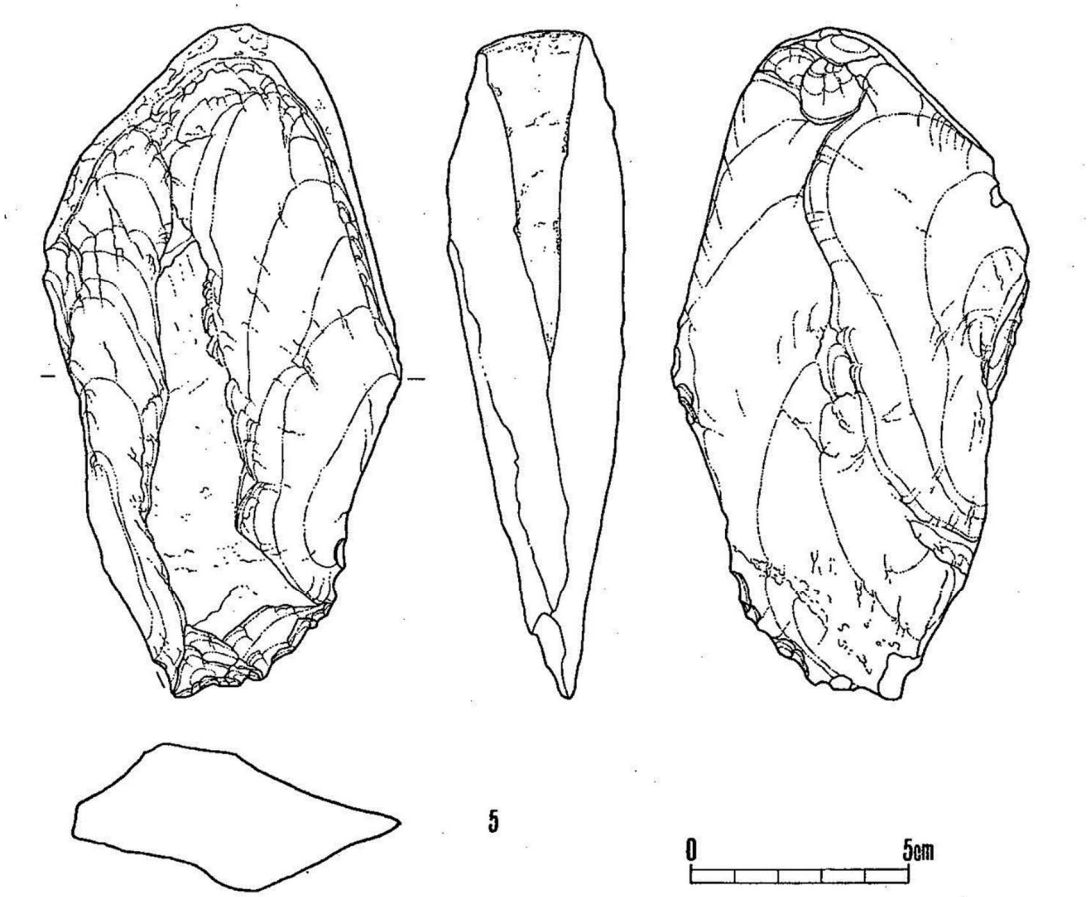


図 23　但馬地方における旧石器・縄文時代草創期の石器 6

養父郡関宮町三宅草刈り山遺跡採集の大型石器（図 23-5）

八木川南岸に広がる丘陵地帯であり、草刈り山遺跡は、三宅早詰遺跡の西に隣接している。これまでに縄文、弥生両土器片、土師器片、須恵器片等など多量の遺物が採集されている。大型石器は、1971 年に三宅在住の長岡輝一氏が水田畦畔を工事中、表土下 1m、ローム状を呈する黄褐色土層中（地山の 30cm 下）から発見したものであり、その出土層位は注目される。

大型石器は、大型の円礫から剥離された剥片を素材としており、自然面を帯状に残している。剥離は、一定の手順は明らかでなく、あたかも円礫を輪切りにしたように観察される。先端部に若干の加工を施す。長さ 153mm、幅 82mm、厚さ 41mm、重さ 445ｇであり、 泥岩製で、明黄灰色を呈する。

但馬地方における旧石器時代についての若干の問題

但馬地方において、現在明らかになった旧石器時代 遺跡は、ようやく五指を数えようとするにすぎない。いずれの遺跡も資料は僅少であり、複数点の資料が存在したのは関宮町別宮家野遺跡だけであった。現状としては、但馬地方の旧石器時代を充分明らかにすることはできないが、ここでは、その予察を試みたいと考 えている。

別宮家野遺跡ではナイフ形石器、三宅西谷遺跡では黒曜石製ナイフ形石器、円光寺林遺跡ではナイフ形石器、上吉井前遺跡では先刃型掻器が、旧石器としてあげられる。

草刈り山遺跡の大型石器は、その出土層位がローム状を呈する黄褐色土層であり、層位を重視するなら旧 石器時代の所産であることは間違いない。しかし、その編年、評価については、草刈り山遺跡の大型石器の形態が極めて特異であり、その製作技術も 明確でなく、他に類似の資料を見出せないことから、一時保留しておきたい。周辺地域で類例が検出されるなら、その出土層位から、古く編年しうる可能性があろう。

さて、明確な資料をもつ遺跡は、いずれもナイフ形石器文化以降の段階の資料を有している。しかし、僅少な資料ではあるが、その内容は一様ではなく、一把して理解しうるものではない。

別宮家野遺跡のナイフ形石器は、小型化が著しく切出し形を呈するものも存在しており、ナイフ形石器の終末的な様相を呈しているもので、いわゆる井島Ｉ 型並行の段階として理解しうる。一部には、縦長剥片を素材とした両側縁加工の石器が存在するが、この資料の位置づけは明確ではない。

三宅西谷遺跡の黒曜石製ナイフ形石器は、縦長、厚手の剥片の左側縁を調整したナイフ形石器であり、単独出土のため位置づけには困難がある。山陰地方でこの種の資料は従来から認められておらず、その関連を強いて他地域に求めるなら、北陸地方を考えざるをえない。北陸地方のナイフ形石器は大きく三段階に区分して編年されており、第Ｉ期には石匁状を呈する縦長剥片を素材とした大型のナイフ形石器、第Ⅱ期にはやや寸づまりな縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器、第Ⅲ期には小型ナイフ形石器が主体であり、剥片 剥離技術も第 Ⅱ 期とほぼ同様であるが、尖頭器を共伴する一群も出現している。三宅西谷遺跡のナイフ形石器は、単独出土であるという資料的限界があり明確な位置づけはできないが、ナイフ形石器の現状という点で直坂 Ⅰ 遺跡の資料に類似点が認められることから、 第Ⅰ期に対応しうる可能性が考慮される。しかし、層位的条件の制約から、北陸地方での編年も今一歩確立されているわけではなく、三宅西谷遺跡での出土層位も不明であり、若干考えうる資料であるというに留まる。

円光寺林遺跡のナイフ形石器は、比較的大型の横長剥片の打面部側縁のみ背潰し加工を施した 側縁調整のナイフ型石器であり、素材剥片は打面転移の著しい横長剥片素材によるものと

観察される。表面には左方 向からのネガティブな剥離面数面がある。石核底面と考えられる a 面と石核打面の b 面とにより推定しうる石核作業面長は約 1 cm であり、石核の薄さは 注意される。円光寺林遺跡のナイフ形石器は瀬戸内技法によるものでないためおそらく国府型期よりも新しく、側縁調整で比較的大型であることから、いわゆる宮田山型に並行する段階として理解できる可能性がある。

円光寺林遺跡の横長剥片石核は採集された層位が明らかではなく、また縄文時代と思われる資料にも若干類似した 石核が存在 するなど、 所属時期は 明確でない。石核は板状の素材を利用し、表裏両面に剥離作業が作業面を転移しながら行なわれている。資料自体は、 その手順に広島県冠高原遺跡群の「冠技法」的な感が強い。冠高原遺跡群と「冠技法」については国府型期よりも先行し、瀬戸内技法の祖形的技法との評価があるが、その技術属性は櫃石島等瀬戸内技法以降のそれと類似したものであり、冠高原の地理的位置も瀬戸内地域の周縁として理解されることから、いわゆる宮田山型期に並行するものとして私案している。円光寺林遺跡の横長剥片石核は、石核の素材の形状、 剥離作業の手順が「冠技法」に近く、瀬戸内地域の周縁的な剥片剥離技術であると思われ、ナイフ形石器と共に横長剥片石核を評価することが可能なら、合せて国府型期より新しくいわゆる宮田山型期に並行して理解できよう。

上吉井前遺跡の先刃形掻器については、その所属時期は明らかでない。瀬戸内地域のナイフ形石器を主体とする石器群には一般に掻器は少なく、本例のように縦長剥片の末端部を調整するものは僅かである。北陸地方では先刃型掻器は比較的多く伴うが、石器組成に加わる時期が限定されているわけではない。本例の掻器は、結晶のめだつ安山岩（玄武岩？）を素材としており、一般的な石材でない点も注目される。

但馬地方における旧石器の編年を強いて私案するなら、瀬戸内地方における、いわゆる宮田山型期に並行するものとして円光寺林遺跡、井島Ⅰ 型期に並行するものとして別宮家野遺跡があり、円光寺林遺跡→別宮家野遺跡の先後関係が推定できる。さらに三宅西谷遺跡の黒曜石製ナイフ形石器は、これらに先行する可能性もあろう。

但馬地方の旧石器は、それ自体が一つの地域として 必ずしも自立していたとは言い切れない状況を呈していると思われる。円光寺林遺跡、別宮家野遺跡は、瀬戸内地方の石器群と同様の資料が認められたが、三宅西谷遺跡、上吉井前遺跡では、北陸地方等と関連を考慮せざるをえない資料が存在した。各遺跡とも遺物の出土状況は良好ではなく、量的にも問題があり、積極的に評価はしえないものの、但馬地方の旧石器は、瀬戸内、北陸のいずれの石器文化に包括されるものでもなく、また、それ自体で一つの安定した地域を有するものでもなさそうである。各遺跡での遺物の量的不足 は、その反映とも理解することができよう。

但馬地方周辺においては、兵庫県氷上郡春日町七日市遺跡では、チャート製の縦長剥片石核等が出土しており、また兵庫県神崎郡神崎町福本遺跡では泥岩製の縦長剥片、石核等が出土している。兵庫県下では中国山地東端の山地帯は、すでに瀬戸内を中心とした石器群分布圏の外にあるといえるかもしれない。同様に、岡山県阿哲郡野原町野原早風遺跡でも、上下 2 枚の文化層が検出されたものの、両文化層とも直接的な瀬戸内系の遺物は認められていない。野原遺

跡上層の小型石器群は、瀬戸内の井島Ｉ型ナイフ形石器との関連が考慮されたりしているものの、剥片剥離技術伝統、ナイフ形石器の調整方法には大きな相異点が存在する。特に剥片剥離技術が、剥片を横に寝かせた石核から横長の剥片を剥離する瀬戸内系横長剥片剥離技術の基本的な伝統と異なっている点は注目しなければならない。中国山地は、兵庫、岡山、鳥取三県を瀬戸内側と 日本海側に分離させている。

では、但馬地方における旧石器時代遺跡の不安定さは、どこに起因したものであろうか。日本海側と瀬戸内海側は、中国山地により隔てられており、但馬地方も同様に兵庫県内の他の地方から切り離されている。 瀬戸内海は旧石器時代の大半の時期に陸化しており、瀬戸内の石器文化は、この大盆地地形を母体として形成されたとも評価されるが、但馬地方を含めた山陰地方では、 旧石器時代にこのような傾斜の緩やかな部分、平野部の形成が海面下の地形により推定される。

また、現在のところ発見されている旧石器時代遺跡は、当時の居住困難な地域に相当するとさえ思われる山地、淡谷に立地しているが、瀬戸内中央部、近畿地方の知見によれば、瀬戸内地方での生活領域の主体が現在の沖積層および海面であると推定され、但馬地方を含めた山陰地方でも、旧石器時代の主な領域は海面下にあると推定が可能であろう。山陰地方の旧石器時代遺跡の少なさは、遺跡数の本来的な少なさの他に、多くの遺跡が日本海海面下に没している可能性も考慮されねばならない。また、今後は高原台地上などで、機会をとらえて遺跡発見に努めなければならない。

おわりに

以上、簡単に資料を紹介し、但馬地方の旧石器をめぐる二、三の問題について考えてみた。別宮家野遺跡に続き関宮町三宅西谷遺跡、円光寺林遺跡でナイフ形石器が認められたことは、但馬地方における旧石器時代が、空白ではなかったことを示すもので、地域的な始原を明らかにした意義は大きい。三宅西谷遺跡の黒曜石ナイフ形石器と上吉井前遺跡の先刃型掻器の存在は、但馬地方の地域性について、東部瀬戸内地域の石器群の他に、例えば北陸地方の石器群との関係をも暗示するもので、但馬地方の旧石器の持つ性格の解明も急がれねばならない。また、瀬戸内側との相異を明らかにするためにも、石器群の検出と編年作業と合せ、地形的•生態学的な意味での遺跡の立地と分布のありかたも問題となろう。

第 2 節　山形県越中山遺跡群採集の資料と瀬戸内技法についての一考察

1，はじめに

1978 年 8 月、新潟・山形両県を訪れ、各地の遺跡を見学することができた。この中で、鶴岡市から山形市へ向う途中、越中山遺跡群を訪れる機会をもった。そして、越中山遺跡群を踏査見学中、若干の遺物を採集することとなった。

越中山遺跡群は、山形県東田川郡朝日村に所在している。朝日連峯を源とする大鳥川と月山を源とする梵字川とが合流し、赤川となる地点の東岸には、数段の河岸段丘が発達している。越中山遺跡群は、この河岸段丘の標高 100m 程度の大鳥苗畑面と標高 130m 程度の越中山開拓地面とにわたり、各地点を分布させている。

大鳥苗畑面は、北東に延びる段丘面であり、西端に A 地点、ここから北東方向に Á 地点・E 地点・G 地点・C 地点・B 地点・F 地点の順に分布している。越中山開拓地面には、段丘面の南西の縁に S 地点・K 地点・Q 地点・M 地点が分布し、東北に Y 地点・M 地点が在している。越中山遺跡群は、1958 年に A 地点遺跡が発見されて以来、加藤稔氏らにより、A 地点・Á 地点・E 地点・K 地点・S 地点等が発掘調査されており、重要な成果を挙げている。今後、各地点の発掘調査・研究が進展するにつれ、その内含する東北地方に留まらない汎日本的な旧石器時代の諸問題が明らかにされるものと期待される。特に、越中山遺跡群 K 地点遺跡と S 地点遺跡は、それぞれナイフ形石器文化と細石刃文化の地域性と石器製作技術の問題について、加藤氏を中心とした研究により、重要性が高まってきつつある。

K 地点遺跡は、1968 年から数次の発掘調査により、直径 10m の遺物集中個所が、数個の礫群を有して検出されている。検出された石器組成には、ナイフ形石器・彫器・掻器・削器・角錐状石器などがあり、ナイフ形石器には、翼状剥片と横長剥片を素材としたもの、台形状剥片を素材とするもの、石刃と縦長剥片を素材とするもの、の三類が諦められている（加藤 1975 他）。

越中山遺跡群 K 地点における翼状剥片を素材としたナイフ形石器の存在は、佐藤道夫氏により、ほとんど純粋な国府型のナイフ形石器文化を表わしていると評価された（佐藤 1970）。K 地点遭跡は、その東方への波及と見なされたのである。以後、この K 地点遺跡での知見は、国府型ナイフ形石器文化の系統・編年・地域性の理解だけに留まらず、汎日本的に旧石器文化を探る上で重要な問題を提起することとなっている。

S 地点は、K 地点の西北 60m の地点にある細石刃文化の遺跡である。細石刃・船底形細石刃核・ナイフ形石器・彫器・掻器・削器をどの石器が検出されている(加藤 1972)。

S 地点遺跡の細石刃枝は、両面加工体を素材としているとされ、またスキー状スポールが検

出されていない点から、典型的湧別技法とは、やや異なった荒屋技法の中で理解できるとされている(加藤・上野1973)。東北地方における細石刃文化は、北海道の細石刃文化との深いつながりが指摘されている。このようを中で、S地点の発掘資料は良好な内容を持っており、今後さらに重要となろう。

1978年に越中山遺跡を訪れた際、各地点から若干の遺物を採集した。各地点とも杉苗畑または畑地となっており、農道周辺の崩土や畑中などに遺物が散布していた。

特に、K地点遺跡からは、横長剥片を素材としたナイフ形石器を、S地点遺跡からは舟底形細石刃核を採集する事となった。両地点は、加藤氏らによる発掘調査により、多くの成果が挙げられ、その重要性は極めて高い。また、採集することと有った遺物も、その焦点とも言える内容を含んでいる。

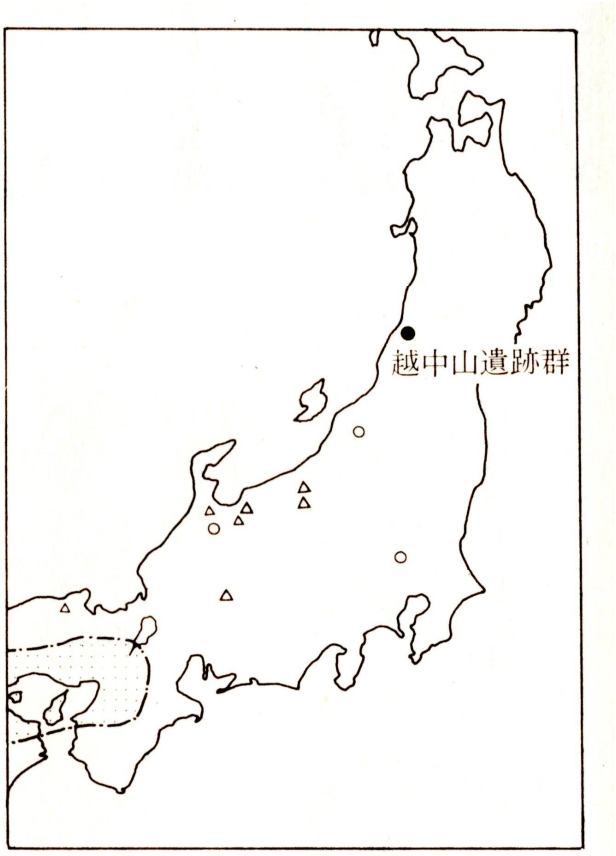


図24 瀬戸内系旧石器出土遺跡分布図
(○=国府型、△=いわゆる宮田山型・井島工型)

資料を採集して、数年を経てはいるが、今回簡単に採集資料を紹介することとしたい。また、越中山遺跡群をめぐる問題のうち、K地点遺跡の「瀬戸内技法」について、若干の見解を述べてみたい。越中山遺跡群K地点遺跡の「瀬戸内技法」を示す接合資料は、加藤氏らにより、紹介されており(加藤・鈴木1976)、この図からの推測にすぎないが、最近、特に盛んに行をわれている瀬戸内技法の検討に、わずかでも益することができれば、と考えている。

2, K地点遺跡およびS地点遺跡採集の遺物

K地点遺跡およびS地点遺跡では、若干の遺物を採集した。ここでは、特に重要と思われるK地点遺跡のナイフ型石器二点・横長剥片1点、S地点遺跡の舟底形細石刃核2点の計5点を紹介したい。以下、それぞれを説明していくことにする。

a、K地点遺跡採集の資料(図25)

1は、横長剥片を素材としたナイフ形石器である。後に検討するように翼状剥片を素材とす

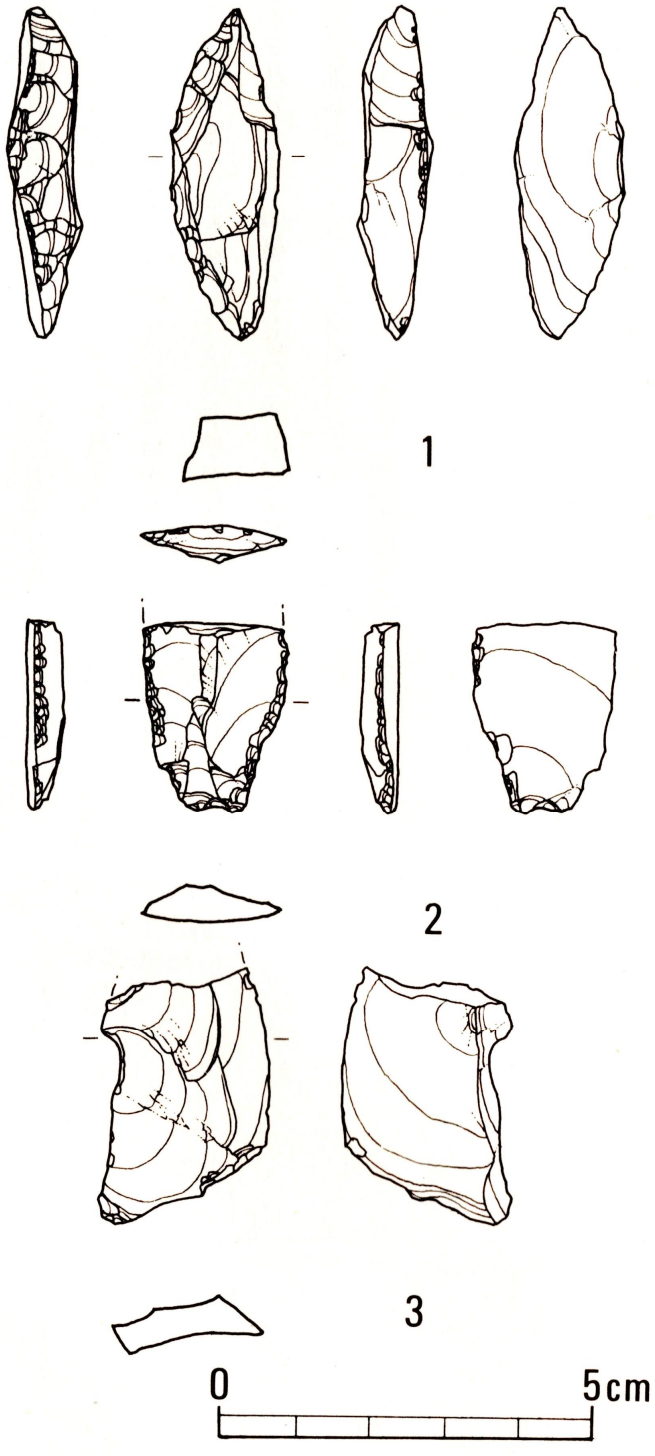


図 25　越中山 K 地点遺跡採集の遺物

る可能性もある。左側縁の打面部を背潰し加工を施し、除去している。表面(背面)には、ネガティブな剥離面二面が認められる。断面形は台形状を呈する。先端には、左側縁の小樋状剥離を打点として、右側縁に一面の樋状剥離が施されて、彫器に転用されている。右側縁の中央および樋状剥離面には、刃こぼれ状の小剥離痕が認められる。硬質頁岩製である。

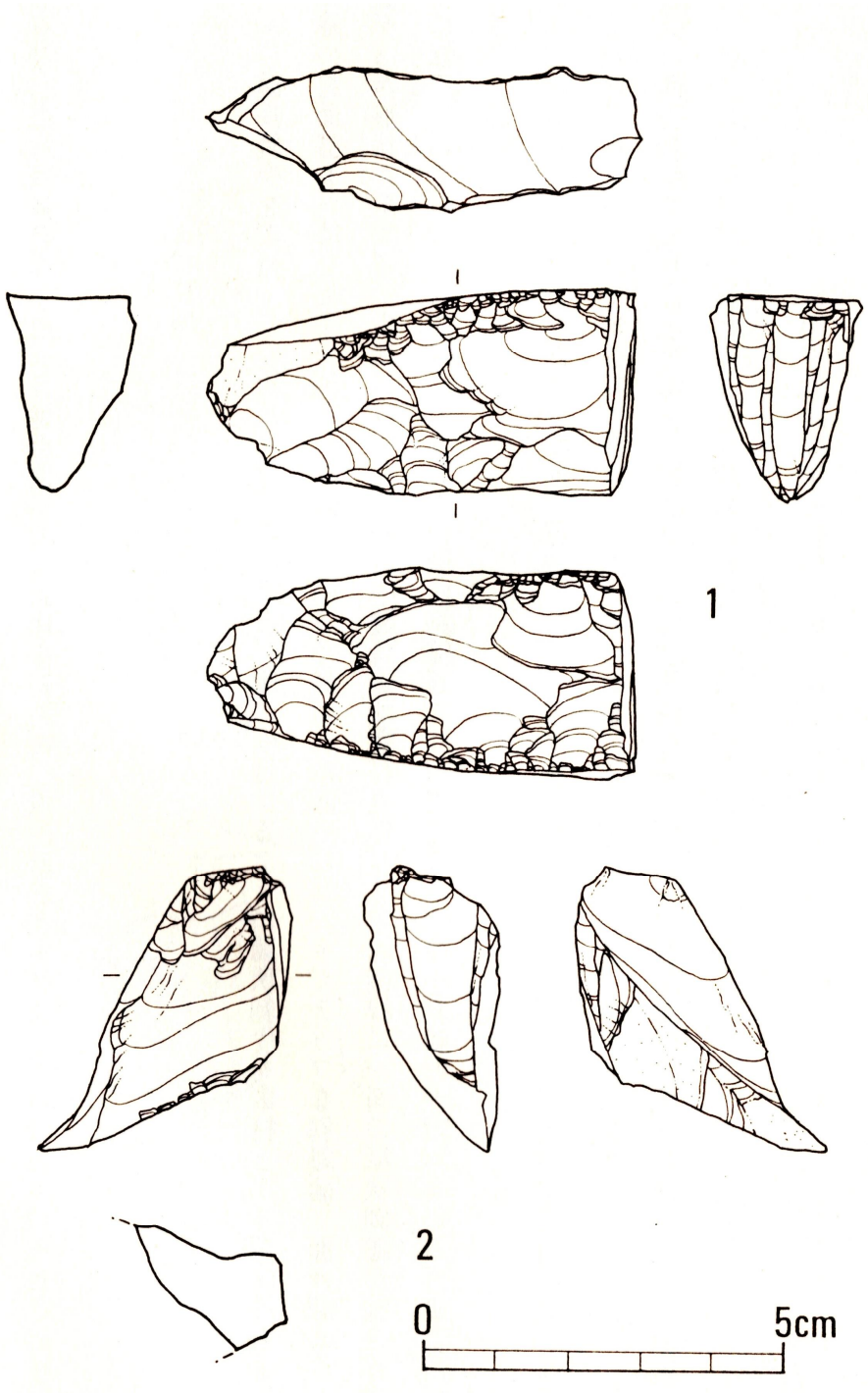
2 は、縦長剥片を素材としたナイフ形石器であり、上半部を欠損させている。基部周辺の左右両側縁には刃潰し加工が施されている。上半部の欠損は、裏面からの打撃により生じている。硬質頁岩製である。

3 は、横長剥片であり、上半部を欠損させている。打面は平坦であり、打面調整は施されていない。表面(背面)には:ネガティブを剥離面 2 面が認められる。流紋岩製である。

b、S 地点遺跡採集の資料

(図 26)

1 は、舟底形細石刃核である。甲板面作出のための剥離の打撃方向は、細石刃核の長軸方向である。この打撃の打点側を細石刃剥離作業面としてお



第 26　越中山 S 地点遺跡採集の遺物

り、打面調整は認められないが、若干の頭部調整が施されているのが観察される。作業面には、7 枚の細石刃剥離痕を残している。打面と細石刃の剥離面との角度はほぼ直角である。また、

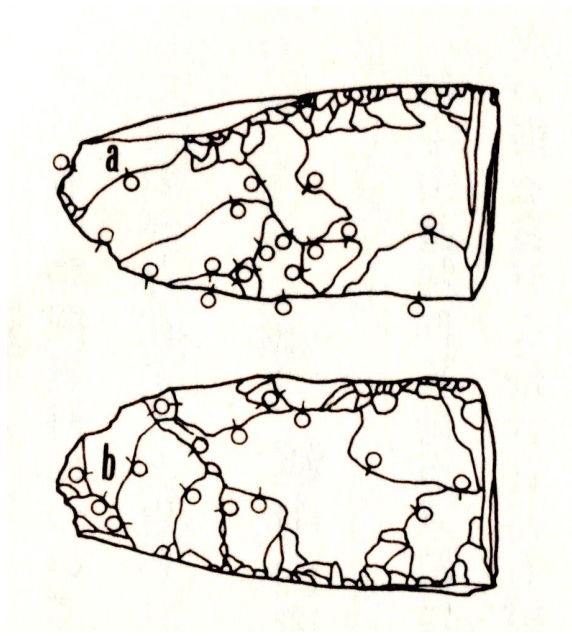


図 27　越中山 S 地点遺跡採集の細石刃核
剥離面の切り合い関係

細石刃剥離痕の長さは、最も長いもので 2.7mm である。

2 は、細石刃核の断片である。本来の形状は不明であるが、おそらく舟底形を呈する細石刃枝であったろうと考えられる。細石刃剥離作業面には、4 面の細石刃剥離痕が認められる。細石刃核の破砕は、甲板面上からの打撃により行われている。

越中山 S 地点遺跡の細石刃生産技術は、荒屋技法に近いものとされている。越中山遺跡群 S 地点遺跡出土の細石刃核は、舟底形であり、スキー状スポールは出土しておらず、稜付きスポールはあることから、湧別技法ではないにせよ、細石刃核は、両面加工の素材を分割したものである、とされている。

ところで最近、矢島国雄氏は、S 地点遺跡の細石刃核のすべてがかならずしも両面加工体の分割によるものではなく、部厚い剥片を器体側面の調整加工により、舟底形に仕上げたものも存在している可能性を指摘している(矢島 1979)。この点について、採集資料 1 の剥離面を検討し、その製作上の手順を分析してみた（第 4 図)。本例の整形は、甲板面からの著しい器体側面調整加工により行なわれている。舟底側からの調整加工は、ほとんどが甲板面からの調整加工の後に施されたものと思われるが、わずかに打面側からの加工より古い剥離面等が残存している。自然面の a、剥離面 b である。この 2 面から、甲板面からの加工が施される以前の素材の形状を推定するなら、両面加工体かどうか、という点では今一歩明確ではないが、楔形を呈する素材が想定されよう。本例の甲板面の形成が、長軸方向の打撃により行をわれている点を考え合せるならば、採集資料 1 については、荒屋技法に類似した所産と考えられる。その他の発掘資料については明らかではないが、少なくとも、越中山遺跡群 S 地点遺跡には、荒屋技法に類似した技術が存在すると思われる。

3，越中山遺跡群 K 地点遺跡と瀬戸内技法について

越中山遺跡群 K 地点遺跡は、国府型ナイフ形石器が発見された北限の遺跡であり、剥片剥離技術の一端をうかがい得る良好を接合資料も検出されている。ここでは特に、K 地点遺跡の瀬戸内系旧石器と剥片剥離技術について考えてみたい。

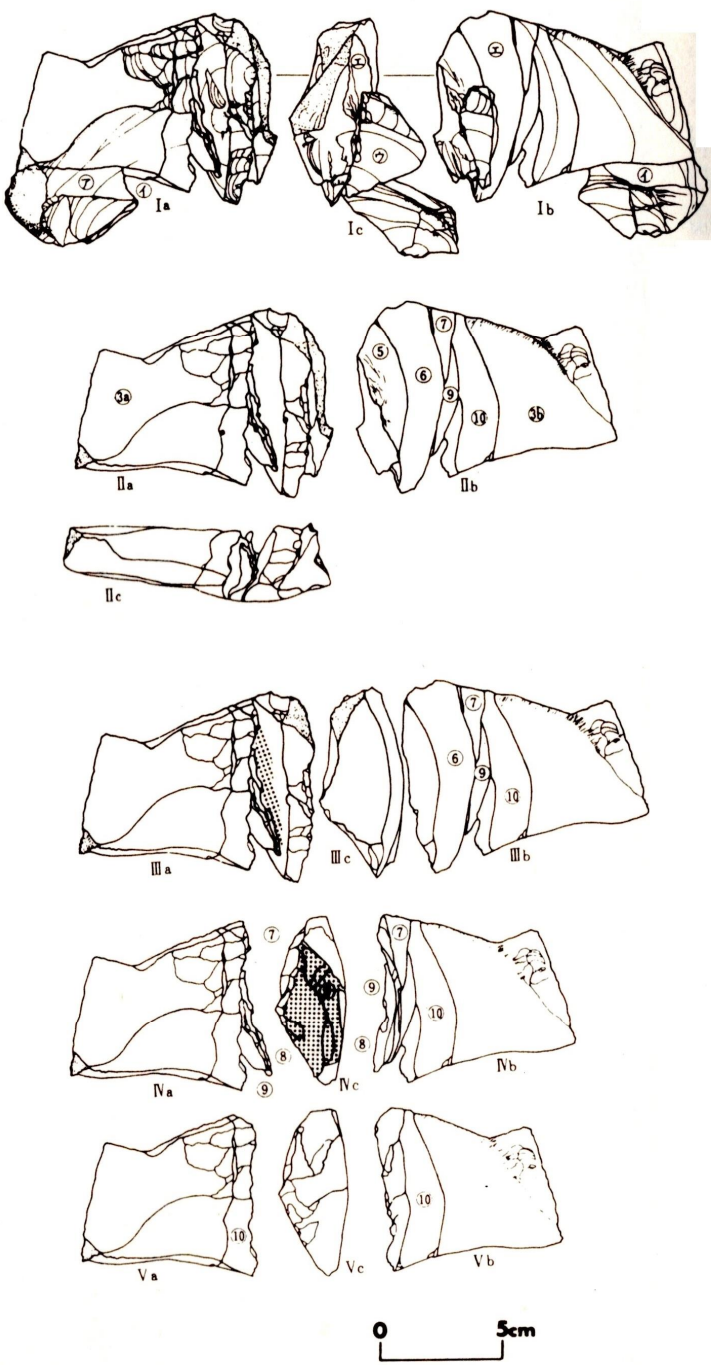


図 28　越中山Ｋ地点遺跡の接合資料（1）（加藤・鈴木 1976）

Ｋ地点遺跡では、加藤稔氏らにより数次の発掘調査が行われ、ナイフ形石器・彫器・掻器・削器・錐等の石器類と、翼状剥片・横長剥片・翼状剥片石核などが出土している。翼状剥片・横長剥片・翼状剥片石核等の「瀬戸内技法」を示している資料は、硬質頁岩・凝灰質砂岩・流紋岩などを素材としている。

加藤稔・鈴木和夫両氏により考古学研究第32巻第4号で紹介された接合資料は、硬質頁岩であり、翼状剥片と横長剥片7点･剥片1点･石核 2 点よりなっている（第 28 図・第 29 図)。

この接合資料の翼状剥片等の剥離手順については、加藤・鈴木両氏により詳細に検討されている。それによれば、接合資料には二つの大きな工程が認められている。

第 1 工程は翼状剥片石核の素材となる盤状剥片を作り出す工程であり、第 2 工程は翼状剥片を翼状剥片石核から連続的に剥離する工程である。第 1 工程は、盤状剥片以外も生産されているらしく、松藤和人氏の模式図(第 7 図)とは相違している。(松藤 1974)。第 2 工程では、⑤の盤状剥片剥離時のポジティブな打痕をもつ横長剥片が剥離された後に、打面調整が施され、翼状剥片⑥が剥離されている。この後に、翼状剥片⑦が、再び打面調整が施された後に剥離され､さらに横長剥片⑧･⑨と未検出のＸが連続して剥離されている。

つづいて、「翼状剥片」⑩が剥離され、石核は放棄されている。

ところで、剥離された翼状剥片・横長剥片等を観察すれば、大・小に二分される。横長剥片⑤・翼状剥片⑥・⑦・⑩が大型であり、⑦は大きく欠損しているが、剥片の接合状況から推定すれば、不規則な翼状を呈する。小型のものには、横長剥片⑧・⑨とXがあり、いずれも薄く、不定形を点が注意される。

瀬戸内技法の本領は、翼状を呈する規格性の強い目的剥片を連続して生産することにあり、

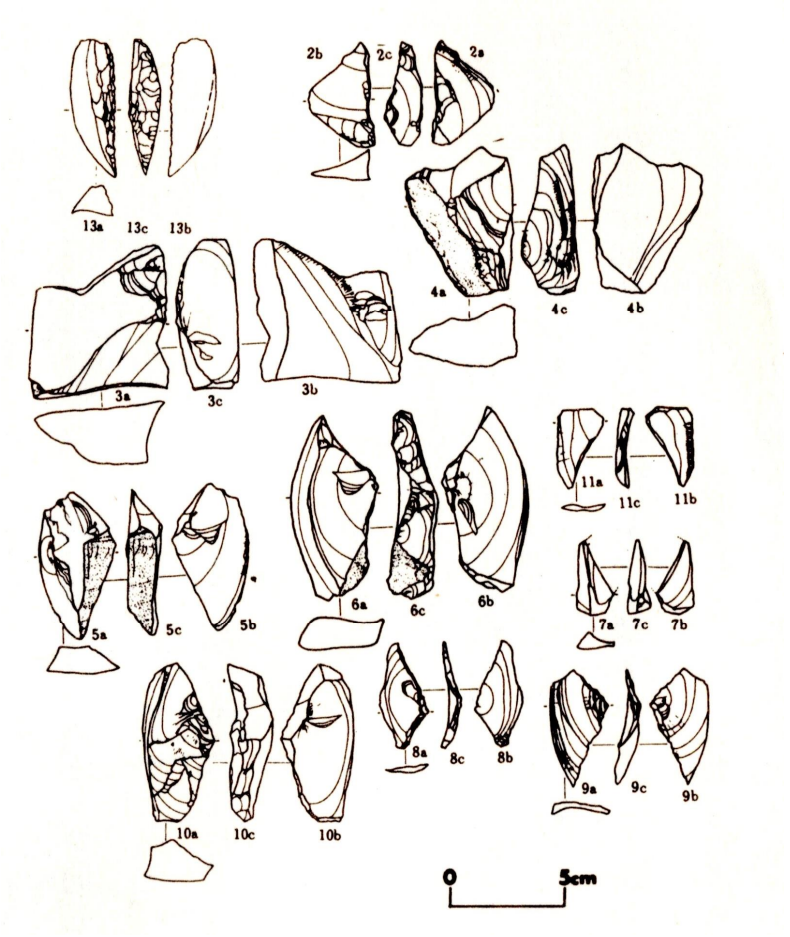


図 29　　越中山K地点遺跡の接合資料（2）（加藤・鈴木 1976）

このように大・小のある目的剥片の生産は興味深い。むしろ、大型の翼状を呈する剥片のみが「目的的」であり、小型の横長剥片については、他の意味を考えるべきであろう。接合状況を検討してみれば、周辺の接合資料によって逆に推定される「翼状剥片」⑦の形状が、先に剥離された翼状剥片⑥と比べれば、翼状剥片の右半分が延び切らず、また、底面が局部的にしか残存しないなど、不規則な形を呈する点が注目された。⑦は、剥離に失敗した翼状剥片である可能性がある。

この翼状剥片の剥離の失敗により、盤状剥片の中軸線に直交するように設定された剥離作業面が、左右に傾くこととなった。小型の横長剥片は、傾いた作業面を修正するために剥離された、一種の調整剥片と考えられよう。

この調整により、剥離作業面は中軸に直交するように修正され、⑤・⑥・⑩の大剥離面と平行することとなっている。

剥離作業面の調整が施されたため、その後に剥離された「翼状剥片」⑩の表面(背面)にはネガティブを剥離面の数枚の切り合いが残されることになる。本来、翼状剥片には、表面に、先に剥離された翼状剥片によるネガティブを剥離面が一枚大きく残され、打両側から見て翼状を

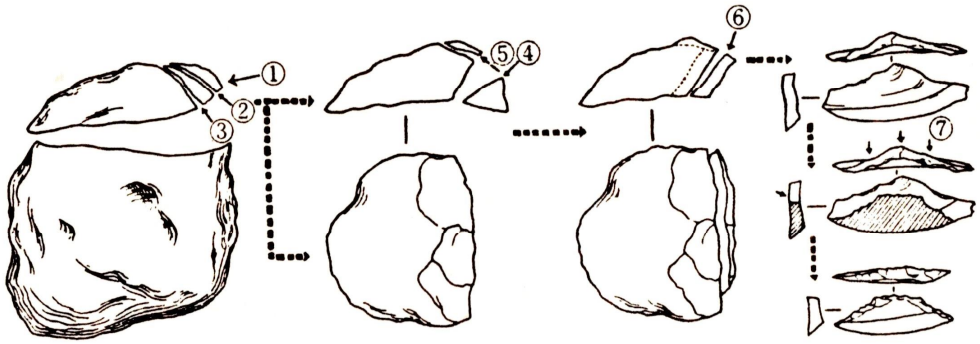


図 30　鎌木義昌氏による瀬戸内技法模式図（鎌木 1965）

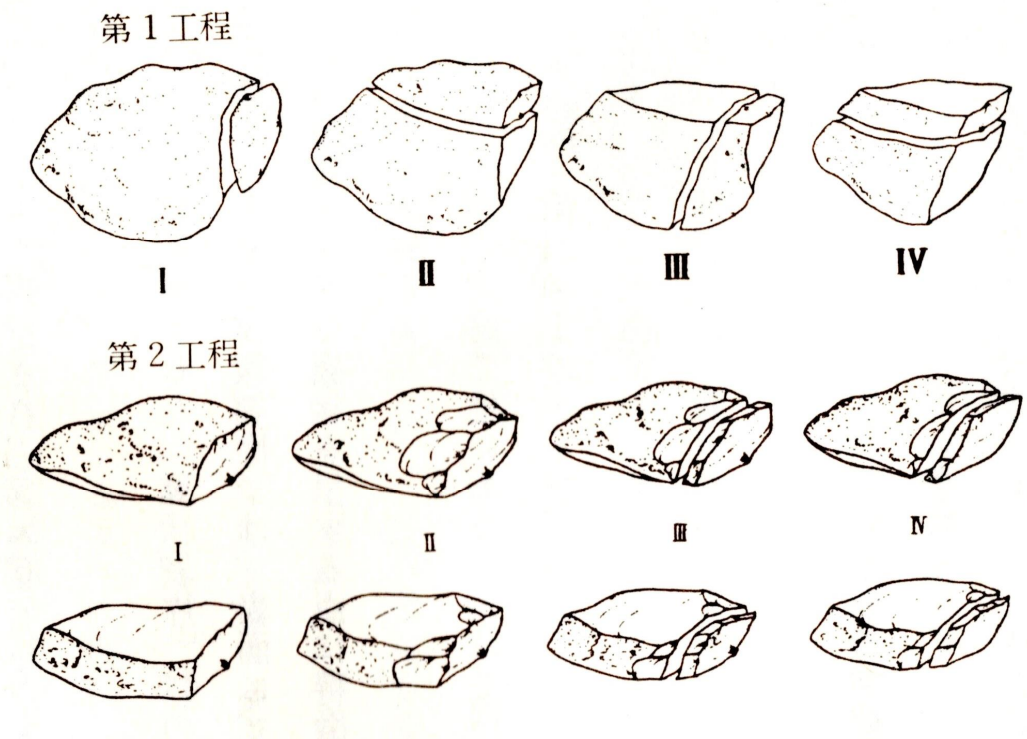


図 31　松藤和人による瀬戸内技法模式図（第 1 工程第 2 工程）（松藤 1974）

呈する点に特徴がある。⑩は、それそのものの観察からでは、翼状剥片としての認定には、若干困難があろう。

この種の剥離作業面の調整は、越中山遺跡群 K 地点遺跡で他にも行をわれているらしく、翼状剥片石核から剥離されたか明確ではないが、採集品 1、(加藤 1969)第 21 図 1 のナイフ形石器、さらに⑬の接合資料と同一個体のナィフ形石器には、表面にそれぞれ数枚のネガティブな

剥離面が認められる。しかし、この調整の認められる資料は、いずれも硬質頁岩製であり、ならずしも K 地点遺跡の瀬戸内技法を示す資料に普遍的をものではない。凝灰質砂岩製の、大型で、より典型的な翼状剥片などには少ないようである。

K 地点遺跡の接合資料について、先に述べたように翼状剥片剥離作業面の調整加工が認められる。この種の調整は、瀬戸内技法の設定・再検討(鎌木 1965)(松藤 1974)に際しても認められていない。一般に、瀬戸内技法は、「ヨーカン切り」または「カマボコ切り」といった印象が強く浸透しており、長方形の素材を、一方向から平行に、「スライス」するものであり、調整としては、打面調整のみが強調されている。瀬戸内技法と翼状剥片剥離作業面の調整加工との関係、さらに瀬戸内技法の定義と範囲についても検討を迫る内容であると思われる。

瀬戸内地方中央部・近畿地方中央部で、瀬戸内技法に後続するものとして、「櫃石島技法」が想定されている(間壁 1968)。櫃石島採集の石核・剥片等の検討により、「国府型が打面調整を間に行いながら、石核の同一面を打面として剥離」しているのに対して、「剥離面と打面が交互に入れかわる方法」で目的剥片の剥離作業が展開されると考えられたのである。その結果、打面調整と目的剥片剥離との区別が消滅している。

櫃石島の石核等に認められた剥片剥離技術は、剥片を素材とした石核から横長の目的剥片を連続して剥離するという点で、瀬戸内技法と同じ技術的伝統にあるものである。しかし、瀬戸内技法とは、剥離作業面と打面が逆転する・剥離作業面と目的剥片の幅が対応せず、目的剥片

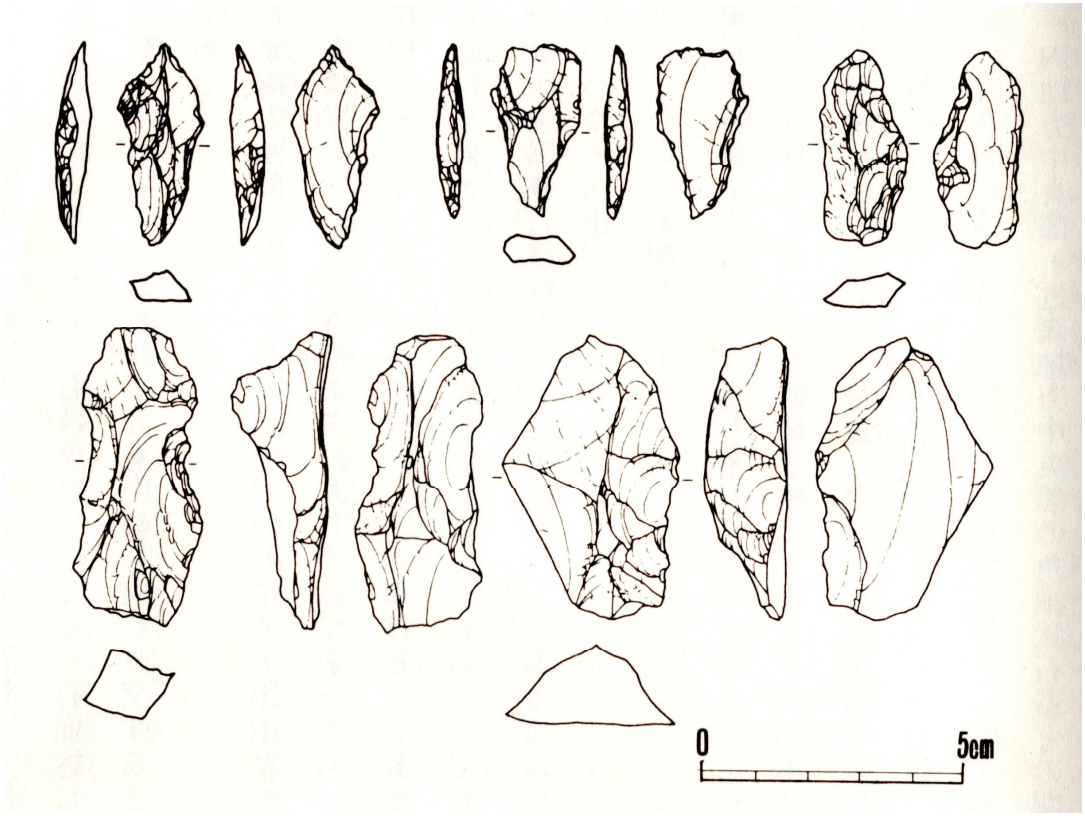


図 32　櫃石島遺跡の遺物（間壁 1968）

が小型である・といった点で相違している。

また、盤状剥片を素材とした石核の中軸方向に直交するように同型の目的剥片を平行するよう「スライス」する瀬戸内技法とは異なり、剥離作業面の幅と目的剥片の幅が対応しないため、目的剥片の剥離が同一作業面上でも左右に移動して行われている。このため目的剥片は、翼状剥片のように左右が対称ではなくなる。また、作業面上に、剥離面の切り合った稜が形成される(第 32 図)。

この稜を除去する目的剥片剥離作業面の調整加工は、櫃石島遺跡・宮田山遺跡等の石核・剥片等に広く認められるようであり、いわゆる宮田山型の時期には、越中山遺跡群 K 地点遺跡の例と若干異なるものの、瀬戸内地方中央部では作業面の調整が行われている。

一方、国府型では、「剥片の厚みを石核上で調整し、得られる剥片の器厚を一定に保つための配慮と打撃力の効果的な適用をはかるための石核調整」として、打面縁に施される頭部調整がある(松藤 1979)。K 地点遺跡の作業面の調整は、あくまで剥離作業面を中軸方向に直交するよう保つものであり、目的が異なるが、技術的には近いものである。

打面縁の頭部調整・作業面調整、いわゆる宮田山型の時期の作業面調整の三者が、一つの技術の流れであるのか、今後検討されるべきである。もしもそうであるなら、K 地点遺跡の「瀬戸内技法」は、瀬戸内技法の最終末的な様相を示しているのであろうか。この事は逆に、K 地点遺跡の編年的位置付けを与えることにも有ろう。

表面にネガティブを剥離面が数面認められる翼状剥片を素材としたナイフ形石器は、その製形された状態からでは翼状剥片製であるかは明らかではなく、国府型とは認定されない場合が考えられる。このような資料は、一般にいわゆる宮田山型として分類されている場合が多い。瀬戸内技法の範囲と認定に加えて、ナイフ形石器の型式設定についても問題があろう。

瀬戸内系旧石器として、翼状剥片を素材としたナイフ形石器の他に、角錐状石器がある。瀬戸内系のナイフ形石器は、東日本においても各地で検出されてきつつあり、富山県七曲遺跡・新潟県御淵上遺跡等で国府型ナイフ形石器が検出されている。最近、埼玉県殿山遺跡で、関東地方で初めて、典型的な翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器が検出され(松井 1980)、これに角錐状石器に類似するナイフ形石器が伴もなうことが知られ、東日本への瀬戸内系旧石器の波及に際して角錐状石器も同時に移動していた可能性が高くなった。技術的特徴のみにより、瀬戸内地方中央部・近畿地方中央部の角錐状石器との関係が考えられていた K 地点遺跡の角錐状石器についても位置付けが、より明確になってきたと言えよう。

4, おわりに

以上、越中山遺跡群 K 地点遺跡および S 地点遺跡採集の遺物について簡単に紹介した。また、越中山 K 地点遺跡の接合資料に見られる「瀬戸内技法」について若干の検討をしてみた。

K 地点遺跡は、瀬戸内地方中央部・近畿地方中央部の瀬戸内技法の濃く分布する地域から遠く離れた山形に位置する。K 地点遺跡の瀬戸内系旧石器については、佐藤達夫氏以来、多く検

討されており、多くの問題が提起されている。

K地点遺跡を佐藤達夫氏は、瀬戸内系旧石器の国府型期における波及の証と考え(佐藤1970)、平口哲夫氏は、「国府型ナイフ形石器の島」として評価した(平口 1970)。日本海沿岸の「島」の数は若干増加したものの、その広がりは「面」としては、今もとらえられていない。また「石材決定論」については古くから論ぜられている問題である。

越中山遺跡群 K 地点遺跡は、重要な内容を持ってはいるが、九州大分県岩戸遺跡と同様に、瀬戸内地方中央部・近畿地方中央部を離れた地域で、瀬戸内系の剥片剥離技術の一端をうかがわせる、という点も極めて重要である。

加藤・鈴木両氏により紹介された接合資料は、瀬戸内地方中央部・近畿地方中央部の、個体識別の困難なサヌカイト製がほとんどである地域での、接合資料自体の剥離技術の検討の不足を大きく補うものである。本稿で明らかにした剥離作業面の調整加工は、瀬戸内地方中央部・近畿地方中央部の国府型期で、現在の所認められてない点は重要である。この接合資料の翼状剥片が、盤状剥片の中軸方向に直交するように剥離され、さらに剥離に失敗した場合には、剥離作業面が平行に在るように作業面の調整が施される点など、いわゆる「ヨーカン切り」に代表して表現されている瀬戸内技法の特徴的な伝統を継承するものである。この接合資料自体、瀬戸内技法の範疇に入るものであるが、表面(背面) にネガティブを剥離面数枚が残る翼状剥片が、典型的を翼状剥片と共に生産される点は注意されなければいけない。また逆に、翼状剥片剥離作業面の調整加工が施される事自体、瀬戸内技法の 「変質」を物語るものであろう。

本稿では、主に、K 地点遺跡の剥片剥離技術について検討してみた。この作業により、瀬戸内系旧石器について、越中山遺跡群 K 地点遺跡を代表として、周辺地域の資料の検討の重要性をますます実感することとなった。周辺地域の瀬戸内系旧石器については、再度機会を改めて論じてみたいと念じている。

第３節　畑ケ平高原採集の石器群

１，はじめに

兵庫県は、日本列島中央にあって南北両方に海を有する特異な位置を占めている。この中には地理的・自然的に異なった環境が包有されている。これを簡単に示すと、旧国名でいう淡路・摂津と播磨の瀬戸内海側、丹波と播磨・但馬の山地部、但馬の日本海側の３地帯に区分できる。

瀬戸内海側は瀬戸内系旧石器の分布域として知られ、発掘例には乏しいものの、多数の遺跡の存在が判明している。内陸部の丹波地方では近年、板井寺ケ谷遺跡（山口編 1991）や七日市遺跡（久保・藤田他 1990）などの発掘が行われた。また但馬地方の山地部である八木川流域でもいくつかの遺跡が知られるにいたっている。但馬地方の日本海側では、ようやく１・２の旧石器時代遺跡の発見があると言われている。県内の南北、標高の高低共に、多様な旧石器時代遺跡立地様相を観察することが出来る。

今回報告する畑ケ平高原は、兵庫県の北西端に位置し、但馬地方の山地帯中にある。われわれの遺物採集地点の近傍で、町教育委員会の調査によって石器類が出土しており、遺跡群は、更に広がるものと考えられる。近年注目されるようになった中国山地帯内の高地に位置する遺跡群と同様の選地傾向を示すが、従来知られていたよりも更に高い標高に位置する遺跡群である。遺物の採集は全てが表面採集で、層位との関係が確定しないことから、一括性の不安や時期的な検討が十分に出来ない恨みがある。しかし、台形様石器を含み、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器群と見なせるものが含まれている点、立地環境が特異な点を勘案し、近傍の上山高原採集のナイフ形石器と合わせ、現時点での採集資料を紹介し、その問題点を指摘したいと考える。

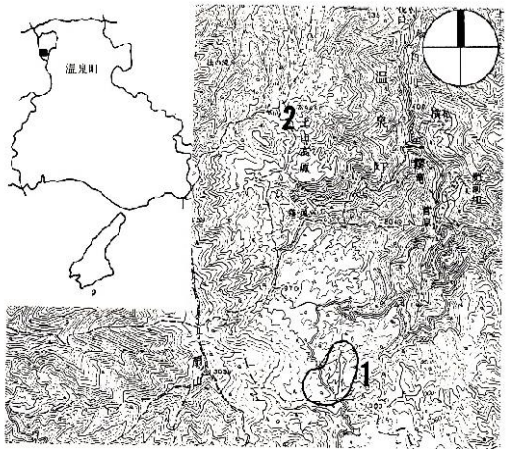


図 33　畑ケ平高原遺跡周辺地形図
1：畑ケ平高原　2：上山高原

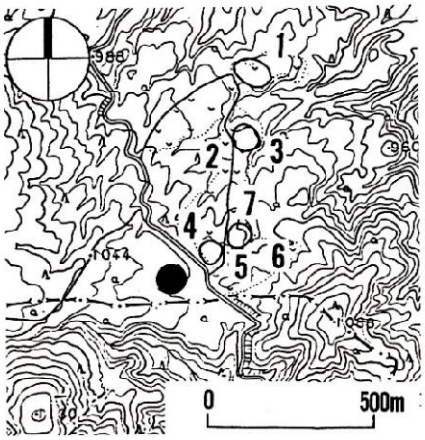


図 34　畑ケ平高原の旧石器採集地点

２，各地点の石器類

畑ケ平高原第１～７地点までのうち、確実に旧石器時代の所産である石器類を出土したのは、第１・３・４・７の４地点である。定型的石器・剥片・砕片・石核を含め、数百点が採集されている。これらの地点の石器類のうち、旧石器や器種判別可能なものを以下に記述・説明する。また、上山高原採集のナイフ形石器についても行う。２・５・６の３地点には、時期を確定できる遺物・定型的な石器類は発見されていないので、割愛する。

第１地点（図 35-1、図 36）

第１地点からは、台形様石器・ナイフ形石器・楔形石器・掻器・削器などの石器、剥片・砕片、石核などが採集されている。

図 36-１は、碧玉製の台形様石器である。打点から素材剥片末端まで、一側縁に調整加工を施す。調整の角度は急で、ナイフ形石器の刃潰し・背潰し加工に類似する感がある。刃部に僅かの刃こぼれ状小剥離がある。打点部を右上に配し、縦長・横長不分明な素材剥片である。２は、流紋岩製ナイフ形石器である。両側縁全体に調整加工を施すが、右側縁先端に僅かの刃部を残す。表裏とも打点を下に配するが、加工度が高く、素材剥片の形状は不明である。裏面には打瘤裂痕を大きく残す。３は、安山岩製ナイフ形石器破片である。横長剥片素材らしく、表面にはポジティブな面を配する。打面部側縁に調整加工を施し、打瘤部を除去している。上下欠損し、全体の形状は不明である。４は、安山岩製の楔形石器である。上下両側縁に両面調整を施し、稜線上を「つぶし」た部分が認められる。５は、碧玉製の掻器である。縦長の一部に礫表皮を付けた、円礫から作出されたと考えられる大形剥片を素材とする。打面は平坦で、打面調整などは認められない。末端に急角度の刃部、右側縁にやや緩やかな調整を施したものである。右側縁裏面中央には、薄い小剥離が認められる。６は、流紋岩製削器である。平坦打面から剥離された剥片を素材としている。右側縁にやや細かい調整加工を連続させている。７は、粗質碧玉製剥片である。打面部が折断されている。図 35-１は、碧玉製石核である。表面いっぱいに上面を打面とする縦長剥片の剥離痕が認められ、裏面は自然面となっている。打面上には調整は認められない。残核状態である。

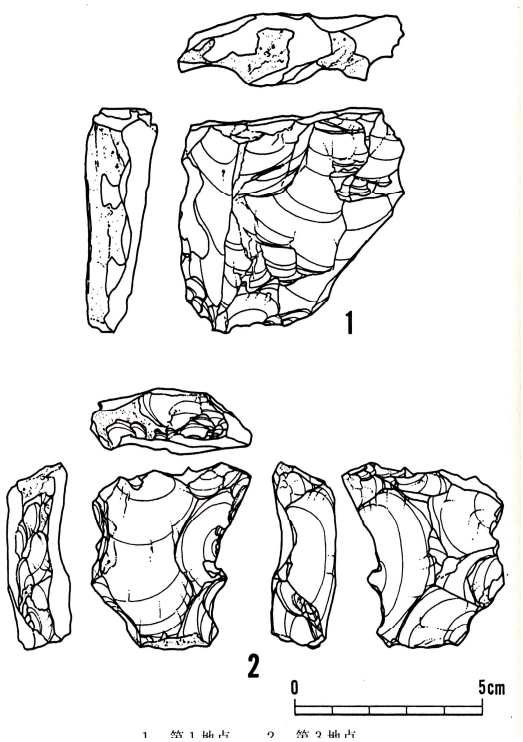


図 35　畑ケ平高原採集の石核
１：第１地点　２：第３地点

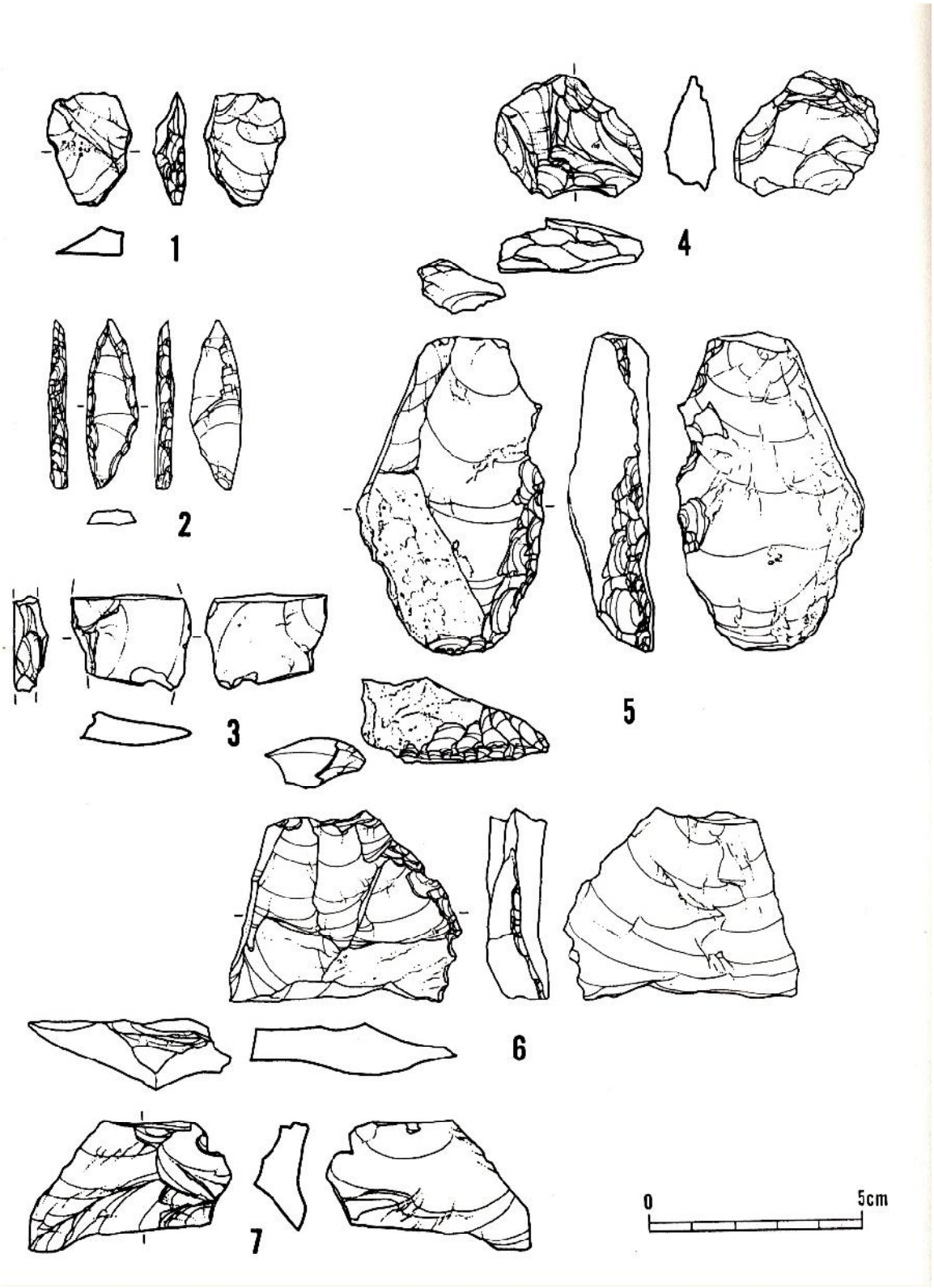

1
2
3
4
5
6
7
0
5cm

図 36　畑ケ平第 1 地点採集の石器

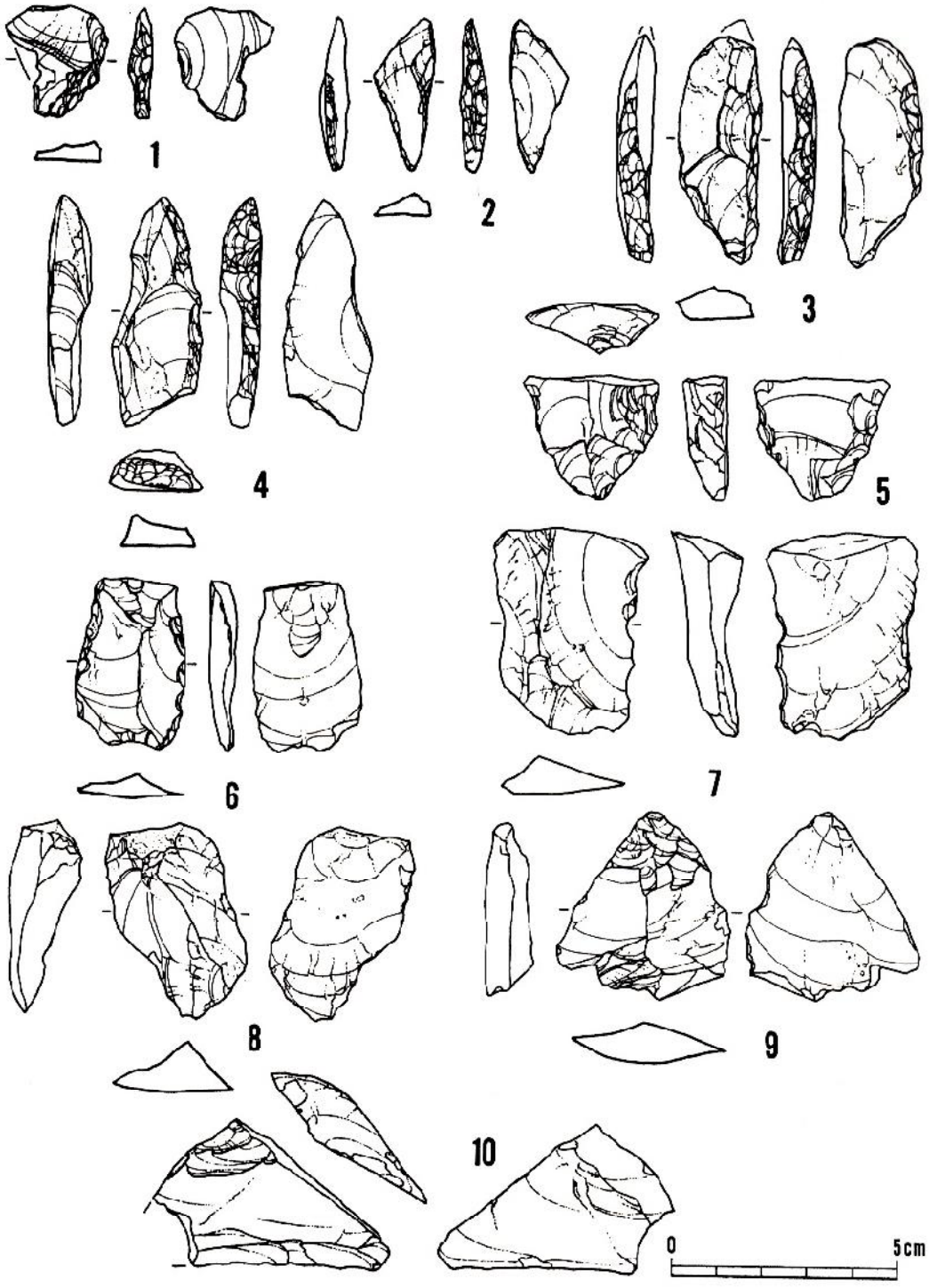


図 37　畑ケ平高原第 3 地点採集の石器

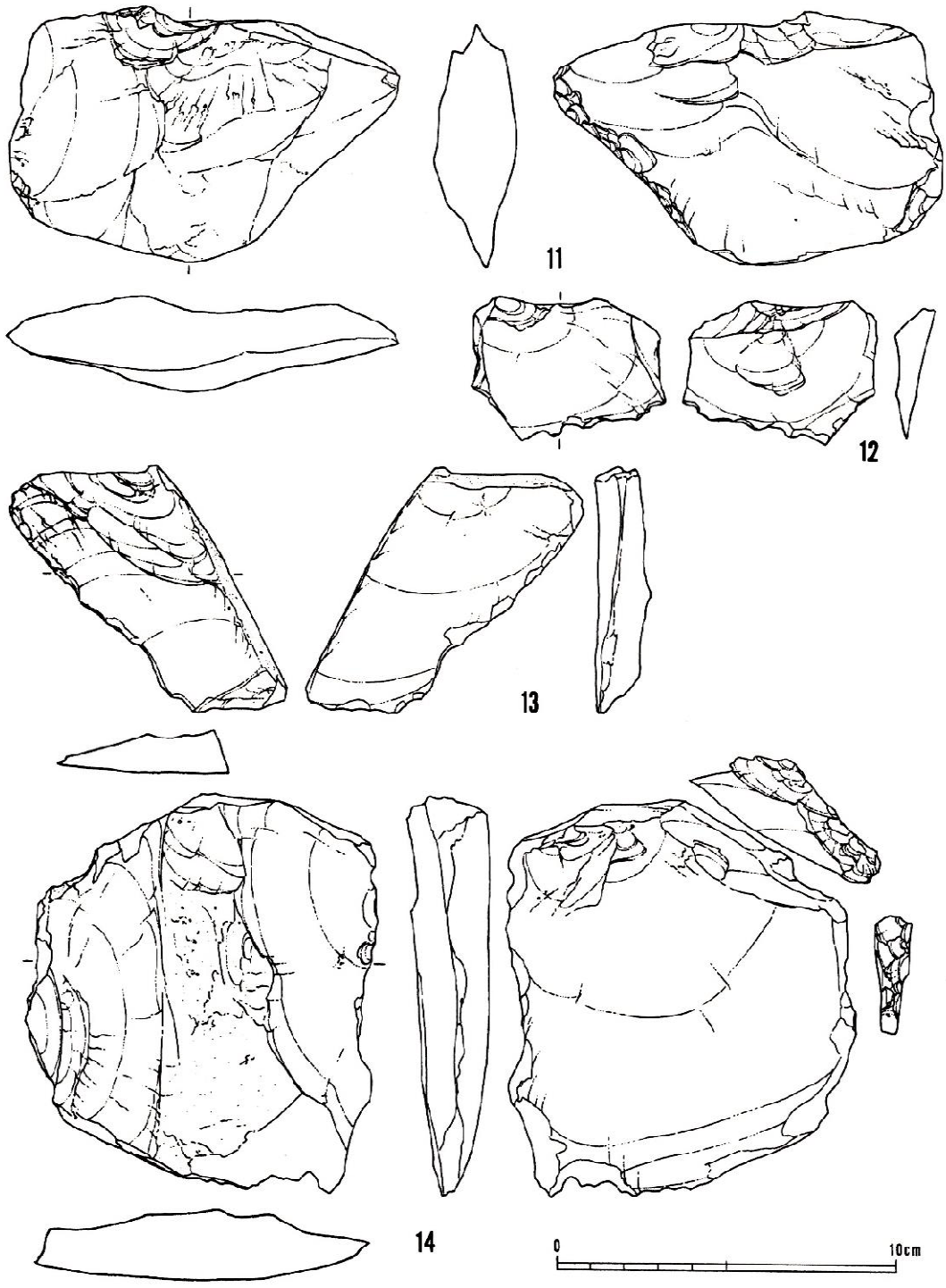


図 38　畑ケ平高原第 4 地点採集の石器

第 1 地点の石器群は、台形様石器と両側縁加工のナイフ形石器など、単一時期とは考えにくい内容を含んでいる。碧玉製の剥片・砕片もあり、碧玉製石器類が多数認められるのも特徴的である。

第 3 地点（図 35-2、図 36）

第 3 地点からは、台形様石器・ナイフ形石器・削器、剥片・砕片、石核などが採集されている。

図 36- 1 は、黒曜石製台形様石器である。素材剥片左側縁に刃部が配される。剥片の打面部側縁を右に寝かせて、打面部に急角度の調整加工を施して除去している。素材剥片末端には大きな欠損があってよく観察できないが、下端に調整加工が認められ、少なくとも下半部には調整加工が施されたものと考えられる。 2 は、良質の安山岩製ナイフ形石器で、表面にはポジティブな面を配することから、横長剥片を素材として可能性がある。打面部側縁は一部対向調整によってほぼ垂直の「背潰し」加工を施して打面部を除去している。左側縁下半は、細かい刃潰し加工が施されている。 3 は、流紋岩製ナイフ形石器である。素材剥片の打面部側縁には裏面側から、末端側縁には基部付近には裏面から、中央部には表面からの加工を施したもので、左側縁先端に刃部を配している。 4 は、流紋岩製ナイフ形石器である。素材剥片の末端に急角度の刃潰し加工を施し、素材剥片打面部は樋状剥離によって除去した特異な形態である。打面部を除去した樋状剥離の打点位置の観察は、風化が激しくて困難であるが、基部には、急角度の調整によって背部が形成されている。彫器の機能が複合しているかも知れない。 5 は、褐色の頁岩製削器または掻器である。素材剥片の打点部側に機能部を形成しており、右側縁と打点部を除去した側縁に表裏両面に緩やかな調整加工が認められる。上半は折断している。 6 は、流紋岩製削器である。縦長剥片の両側縁に裏面からやや散漫な調整加工を施す。 4 ・ 8 ・ 9 は、微少な剥離痕の認められる剥片類で、 7 が粗質の瑪瑙、 8 ・ 9 が流紋岩製である。10 は、良質の安山岩製剥片である。第　図 2 は、流紋岩製石核である。石核の周囲から貝殻状の剥片を剥離した石核の残核で、一部に打面調整を施した部分、剥片剥離作業で打面と作業面が表裏が逆転する部分が窺える。

第 3 地点の石器群には、二側縁加工の安山岩製ナイフ形石器一点がある。その他は流紋岩製や頁岩などの石器群と肉眼的にみて隠岐島産かと思える漆黒色良質の黒曜石製台形様石器があり、安山岩製ナイフ形石器の形状に差がある。時期的な一括性に不安がある。

第 4 地点（図 37）

第 4 地点から、台形様石器・ナイフ形石器・削器、加工痕ある剥片、剥片・砕片が採集されている。

図 37- 1 は、黒曜石製台形様石器である。素材剥片打面部を下に配し、両側縁に調整加工を施す。左側縁の調整は微細で、表面から施される。右側縁の調整は緩い角度で広く行われている。 2 は、安山岩製ナイフ形石器である。素材剥片の打面部側縁に「背潰し」加工を施し、末端側縁を切断している。刃部は先端に僅かに残っている。台形様石器とも共通する技術的形状

を呈している。３は、碧玉製剥片である。刃部に微細剥離痕が認められる。４・５は、安山岩製の削器である。４は風化が激しく、剥離面の観察に困難があるが、裏面両側縁に調整加工が施されている。５は大形のもので、表面側縁に大形で角度の緩い調整加工が顕著に認められる。素材剥片の打面は、表裏両面に広範囲に行われた加工で除去されている。

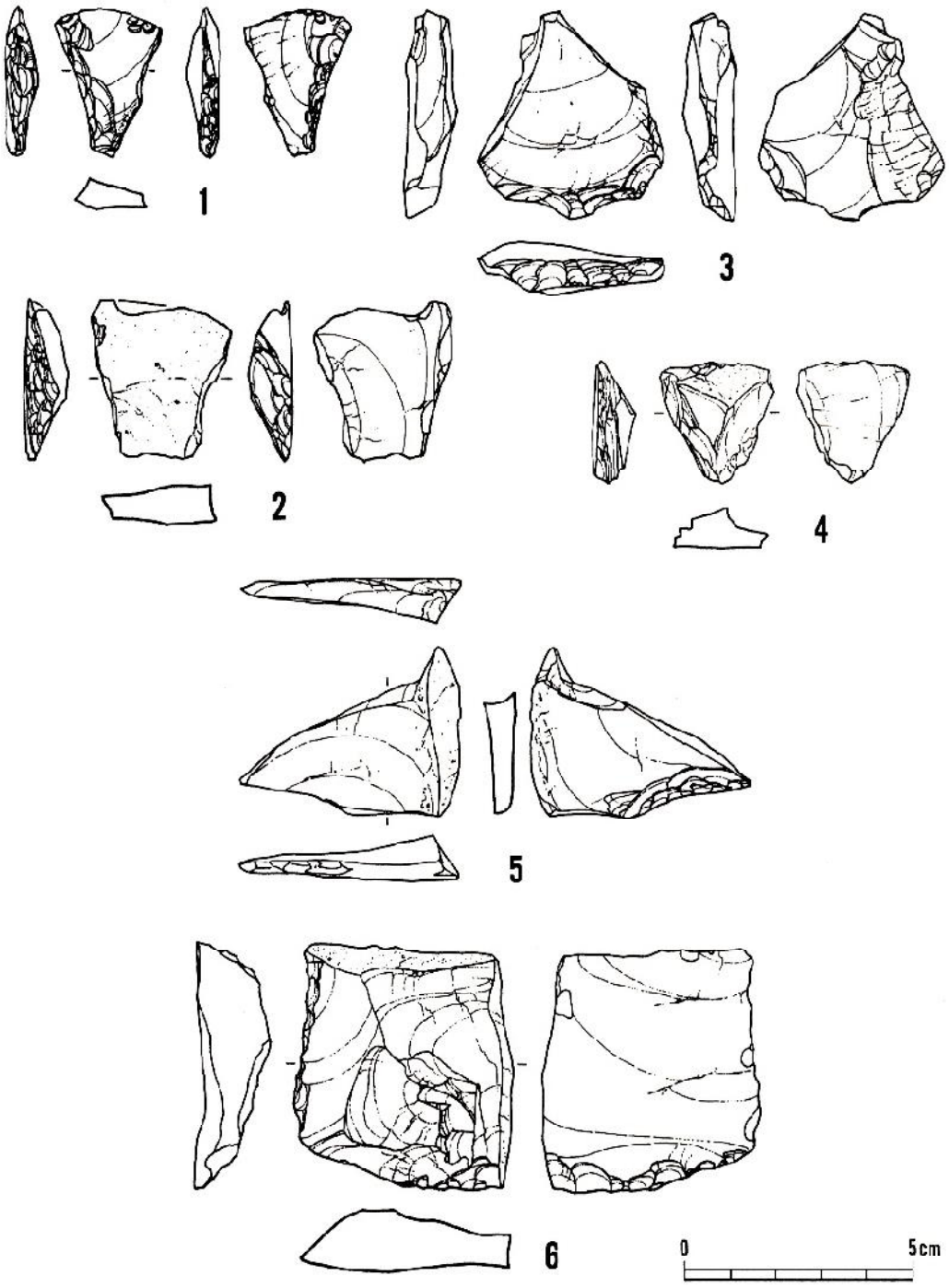


図 39　畑ケ平高原第 7 地点採集の石器（1）

第 4 地点の石器群は、黒曜石と安山岩製の石器群を主体としている。安山岩製石器類には大形の削器がある。ナイフ形石器の加工度は低く、第 3 地点のものとは異なる。

第 7 地点（図 39・40・41）

第 7 地点からは、台形様石器・掻器・削器、剥片・砕片、石核類などが採集されている。

1・2 は、台形様石器である。1 は黒曜石製で、素材剥片の打面部側縁を左に配し、打面部を表裏両面の調整加工でほぼ除去し、左側縁として整形しているが、僅かに打点を残す。素材剥片末端は、ほぼ垂直の加工で調整されている。刃部は、先端に配され、バチ形を呈している。2 は、碧玉製で、表面全面に自然面を残す素材剥片の打面部と末端部に加工を施している。いずれもほぼ直角の調整加工を施す。刃部は、台形状に基部と先端に平行して認められるが、先端の方がやや幅広に配されている。3 は、凝灰質砂岩製掻器である。切断によって素材剥片の形状は不明である。折断部を除いて掻器機能部調整加工が施されている。4 は、安山岩製の器厚のある削器である。素材剥片の打面部側は折断されている。末端は、階段状剥離を呈する。台形様石器の可能性もある。5・6・7・11 は、削器である。5 は流紋岩製の削器である。折断剥片の一側縁に調整加工を施す。6 は砂岩製削器である。左側縁表面と末端裏面に調整加工を施す。素材剥片の上半は節理により古く折損している。7 は安山岩製削器で、横長剥片を素材としている。表面には右半分にポジティブな底面を残しており、また先行する剥片剥離があったことを窺わせるネガティブな副面がある。打面は自然面で打面調整は施されていないが、打面縁調整を多用しており、形状的に瀬戸内系横長剥片剥離技術により作出されるものの技術的特徴をよく完備している。素材剥片末端に調整加工を施す。11 は安山岩製大形削器である。右側縁裏面に調整加工を施す。ひどく進行した風化によって剥離面の観察には困難があるが、素材剥片の打面部が 2 枚の横長の剥片剥離によってすでに除去されていることから、本来横長剥片石核であった可能性がある。8〜10・12・13 は、剥片類である。8 は凝灰質砂岩製剥片である。9 は良質の安山岩製剥片で、表面の一部に自然面を残す。10 は、良質の褐色頁岩製微小剥離痕のある剥片である。不定形な縦長を呈する。打面には稜線が認められるが、打面調整はない。左側縁に疎らに微小剥離痕が認められる。12・13 は、風化の激しい安山岩製剥片である。14 は、安山岩製の大形剥片または石核である。裏面は、1 枚のポジティブな第剥離面構成され、本来独立した剥片である。表面の左右両側縁には、各 1 枚の剥離痕が認められる。左側縁には打面調整とも考えられる調整加工がほぼ垂直に施されており、横長剥片剥離が行われたと考えられるが、全体に風化が激しく、左側縁裏面に欠損部があり、切り合い関係を詳しく検討することが出来ない。右側縁では打点の部分が新しく欠損し、切り合い関係の観察が不可能である。

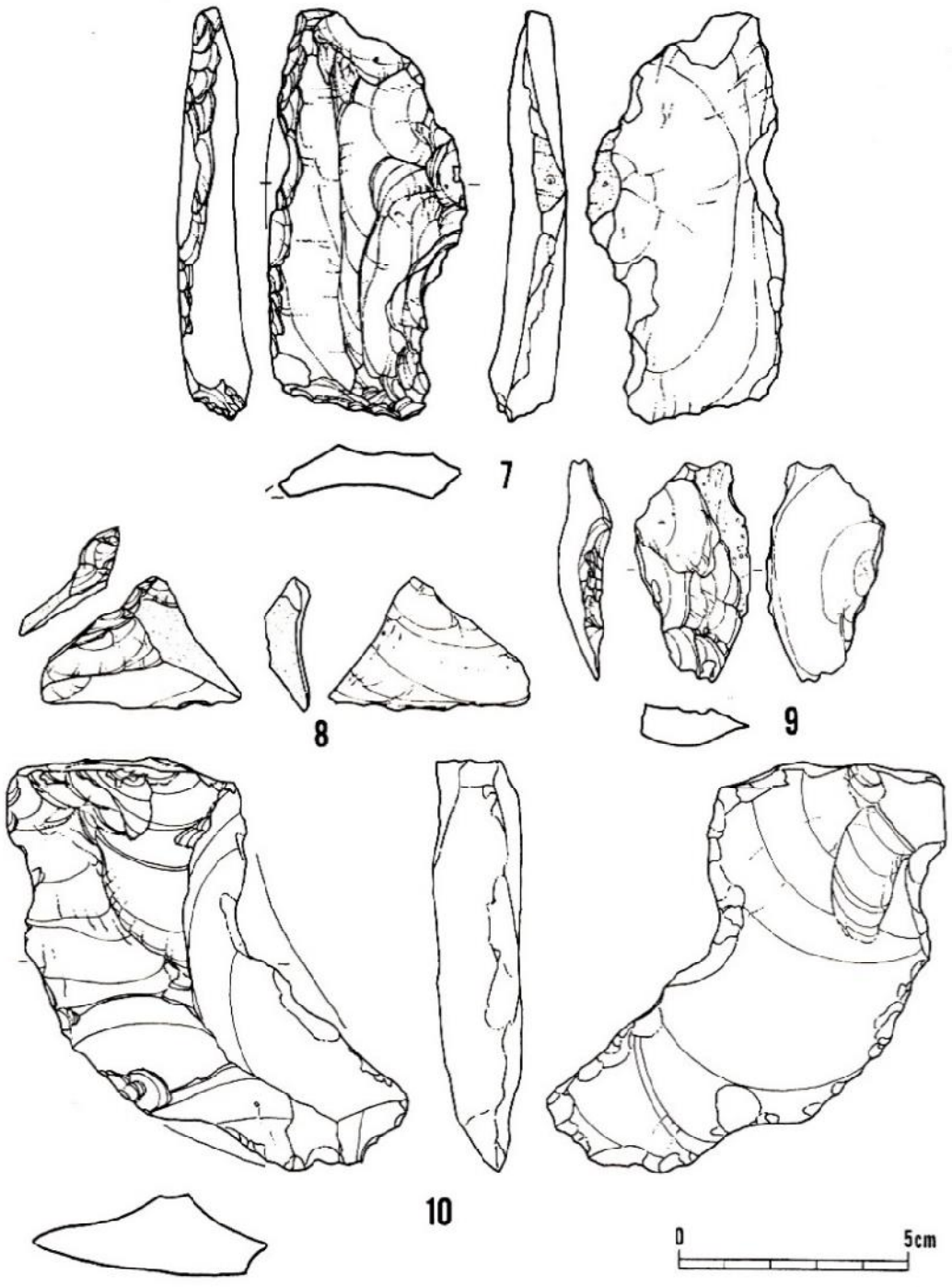


図 40　畑ケ平高原第 7 地点採集の石器（2）

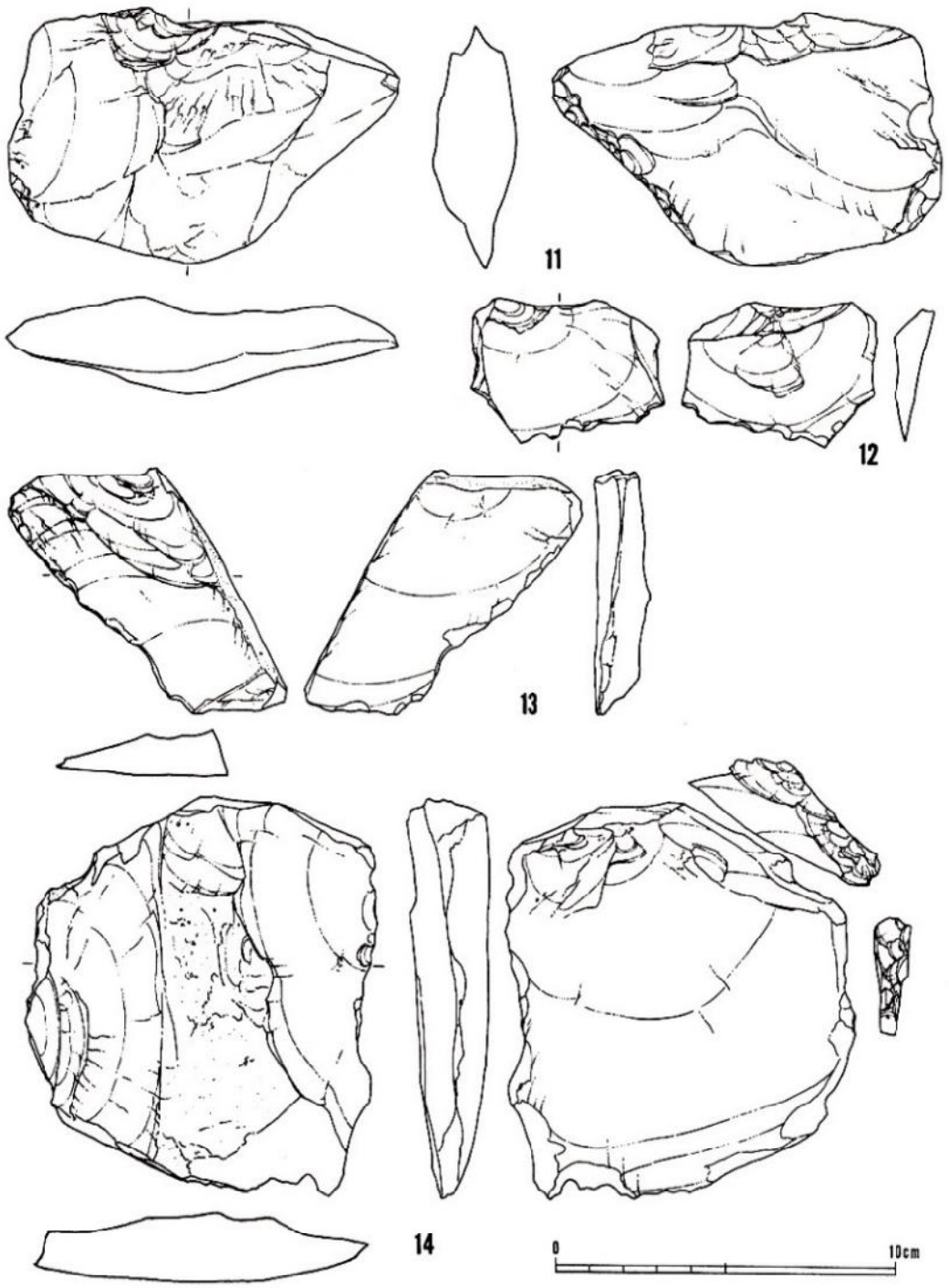


図 41　畑ケ平高原第 7 地点採集の石器（3）

第７地点の石器群は、黒曜石・碧玉・凝灰質砂岩や頁岩・安山岩など、多様な石材が認められる。黒曜石と碧玉製の台形様石器を含む石器群と、安山岩製横長剥片製削器・大形剥片・横長剥片石核の二者は、区別して考えた方がよいと考えられる。

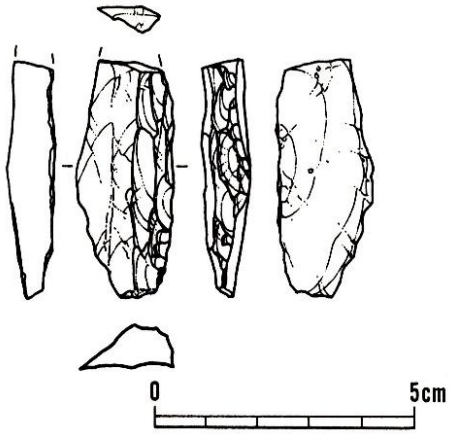


図 42　上山高原採集のナイフ形石器

上山高原のナイフ形石器（図 42）

上山高原の山頂部に近い林道上で採集された安山岩製ナイフ形石器（図 2-2-10）は、瀬戸内技法を含む瀬戸内系横長剥片剥離技術により作出されたと考えられる横長剥片素材である。表面にはポジティブな底面とネガティブな腹面を合わせ持っている。打面部側縁のみを「背潰し」加工を施して除去・整形している。刃部側縁に加工はない。形態的には国府型とも見なし得る。先端部は折断している。

３，畑ケ平高原の旧石器遺跡群をめぐる問題

今回報告した畑ケ平高原と上山高原の石器群は、表面採集のもののみで、層位的に採集した資料はない。現状では、その時期比定には石器類の型式学的方法で既知の石器群との対比を行うほか術はない。ところで、畑ケ平高原の既耕地の切り通しでは、良好な土層の堆積が認められ、町教育委員会の調査では、姶良Ｔｎ火山灰直下から石器群が出土する地点が確認されたことから、今後層位的に石器類が出土する可能性は高いと考える。畑ケ平高原では、上から下に表土直下のクロボク層は非常に薄く数㎝しかなく、赤色のアカホヤ層が約 10 ㎝、大山系火山灰を含むと思われる火山灰層約 30 ㎝、姶良Ｔｎ火山灰の純層約 10～15 ㎝、粘火山弾の混じる粘性の高い火山性降下物層約 40 ㎝、基盤に火砕流層（層厚未確認）の順となる。姶良Ｔｎ火山灰の識別が容易なこと、各層厚がかなりあることから、石器の包含層準による時期比定には期待がもてる地域である。今後、遺物の層位的採集を行う努力が必要である。

各地点の採集石器群は、採集状況から単一時期の一括資料と考えにくいものも含まれている。第１地点では、姶良Ｔｎ火山灰下の所産と考えられる台形様石器と加工度の高い周縁加工

のナイフ形石器や掻器が共伴する。第３地点でも、台形様石器と二側縁加工のナイフ形石器がある。第４・７の２地点では、安山岩製の大形削器・剥片・石核に異質さが感じられ、特に第７地点の横長剥片製削器は、瀬戸内系横長剥片剥離技術との関係で、台形様石器群とは全く異なった技術的基盤にあることは明かである。現状では各地点の資料が同時に混在して表面採集されているため、個々の資料をあげて分離することには困難があるが、複数時期の資料が混在していると考えた方が良かろう。

石材差を根拠として、黒曜石・流紋岩・頁岩・凝灰質砂岩などと、安山岩製のものの２つに分離することが可能であれは、第３地点の安山岩製ナイフ形石器を安山岩製大形石器群の内に含めて、大きく２群に一括できる。主な石器を抽出してみると、まず第１に台形様石器は、第１・３・４・７の全ての地点に認められる。個々の地点で採集された点数は僅かであるが、４地点に台形様石器を主とする石器群が含まれることが認められよう。第２に、安山岩製大形削器・剥片・石核は、第４・７の２地点で認められた。第７地点の横長剥片製削器は、技術的基盤から瀬戸内系石器群との関係を考慮させよう。第３に、加工度の高い二側縁加工のナイフ形石器は第１・３地点で認められた。第１地点は流紋岩製縦長剥片製周縁加工、第３地点は安山岩製二側縁加工横長剥片素材と異なる。第３群をどう評価するかは問題であるが、畑ケ平高原の各地点には、以上の二ないし三つの石器群が混在していると見なせよう。

上山高原の安山岩製ナイフ形石器は、出土層準は不明で、その形状から位置づけを行わなければならない。畑ケ平高原の石器群との関係を考えるなら、石材から安山岩製石器群との関係をまず考えるべきである。

中国・近畿地方において、台形様石器を主とする石器群は、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前早い時期に、縦長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器主体のものは後半に位置づけられる（藤野、89）。サヌカイト製で横長剥片剥離技術を基盤とした石器群は、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の比較的早い時期に成立し、中国山地帯内の石器群と平行して姶良Ｔｎ火山灰降灰以後まで継続するらしい（山口・久保・藤田 1992）。

台形様石器主体の石器群は、広島県冠Ｄ地点（広島県埋蔵文化財調査センター1989）、岡山県小林河原（堀川 1985）等があり、ナイフ形石器・掻器・削器などを伴った例として兵庫県板井寺ケ谷下層（山口編 1991c）等がある。畑ケ平高原での各地点の点数は少ないものの、形態的に完成された斉一性を有する。特に第７地点の黒曜石製台形様石器は、一見、九州地方の台形様石器の一部の大形のものに紛うばかりである。畑ケ平高原は表採資料で石器組成全体を回復しておらず、どの様な石器組成を有するか現時点で不明だが、組成として掻器や削器等を組成するなら板井寺ケ谷下層に近い時期、形態的斉一性と剥片剥離技術基盤を軸に考えるなら古い時期に位置付けられるであろう。在地の多様な石材を利用する点は、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の古い時期の石器群の特徴であろう。

サヌカイト・安山岩製の横長剥片剥離技術を基盤とした横長のナイフ形石器主体の石器群は、姶良Ｔｎ火山灰に先行するものとして兵庫県板井寺ケ谷下層、以降のものとして恩原（恩原遺跡発掘調査団 1988）などがある。畑ケ平高原の安山岩製石器群の位置付けは、サヌカイ

ト製ナイフ形石器の僅かの形態と削器・剥片・石核などから類推できるに留まるが、恩原遺跡の一部とよく類似するようである。上山高原のナイフ形石器も同様の評価をしておきたい。

畑ケ平・上山高原の石器群には、採集資料の形状的検討から大きく考えて、姶良Ｔｎ火山灰の上下二時期の石器群があることが考えられるが、個々の石器の所属は不明な点が多い。また、それぞれの地点の石器群には相違点も見られ、地点間に細かい時期差があると考えられる。今後は、各地点の様相を明かにし、正確な編年を行うもために、畑ケ平資料の追加が望まれる。

畑ケ平高原と上山高原は、いずれも標高 900～1000ｍの高原にある。この高原帯は、中国山地帯東部で高原状地形がもっともよく連なった部分であり、標高も群を抜いて高い。今、畑ケ平高原の冬季における降雪は激しく、積雪５ｍを越える。山頂部の北向き斜面は強風と積雪のためブナ林の育成が阻害されている。現代でも高原上での越冬には久しい困難がるという。旧石器時代の気候は、想定するに困難があるが、少なくとも標高 1000ｍの高原での越冬には困難があったと考えて間違いはあるまい。高原上の居住は、季節を選ぶものだったのではなかろうか。畑ケ平高原遺跡群の位置を観察すると、４㎞圏内はほぼ 600ｍ以上の標高の高原台地に限定される。２㎞圏では 900ｍ以上がほとんどである。当時の高原上の植生や動物相などの実態がどの様なものであったか、十分な情報はないが、この遺跡群の立地が高原上の資源利用を目的としたものであると考えて間違いはないと考える。

石器群の内容を把握し、時期的・系統的な位置付けを行い、石材の産地分析を行うことによって、石材供給状況を把握し、遺跡を残した集団の移動経路を解明することが出来る。また、生業に結びつく環境情報と石器群を結び付ける努力も必要であろう。高原という特異な環境を選択した旧石器人の「意図」を読みとることが重要である。このような中で、畑ケ平・上山高原に遺跡を残した旧石器人の行動を明らかにすることが出来よう。

４，おわりに

畑ケ平高原の発見は、３０年来続けられている高松の不断の遺跡踏査の賜であった。高松は、八木川流域でいくつかの遺跡を発見し、高原上にも手を延ばしつつあった。まったく土器のない石器散布地に注目したのである。但馬地方のスキー場よりも高い標高 1000ｍは、旧石器遺跡の存在するところであるとは想像もしていなかった。畑ケ平・上山高原は、長野県以西の旧石器時代遺跡の存在地としては最高度であろう。

畑ケ平・上山両高原は、劣悪な交通環境のため長らく開発が及ばなかったが、70 年代からの高原野菜畑開墾やスキーリゾートの設置など、近年大規模な開発の波が及びだしている。今回の発見は、新しい大根畑の開墾に先立つ分布調査が契機であった。続いて、温泉町教育委員会によって発掘調査が行われている。良好な石器群の検出、遺跡の層位的関係の解明など、期待される点は大きい。遺跡の保存問題と合わせ、今後の温泉町教育委員会の対応に期待したい。

第 4 節　西日本における初期尖頭器石器群について

はじめに

西日本における尖頭器出現期および発達期の様相は、最近十年間の間に特に中部・南関東地方で急速に解明されつつある。一方、近畿地方以西にあっては、その多くの地域で調査・研究態勢の立ち後れ、土壌堆積条件の劣悪さから良好な遺跡が発見されないなどの要因が重なって、いまだ十分明かとなってはいない。

尖頭器石器群は、ナイフ形石器文化後半期に出現することが、南関東の豊富な層位的出土例から明らかになっている。近畿地方以西においては、当該期の遺跡数が極めて少なく、同石器群を出土する遺跡が点々と散在する状況で、面的に様相を把握するに至っていない段階にある。当該期の遺跡分布が、中部・東海・南関東に主分布域があることは明かである。西日本の尖頭器石器群の研究は、東海・近畿間で大きな落差を生じているといえよう。

このような中で、今回調査したヒロサキ遺跡において、当該期の石器群を検出したことは、西日本における研究に新しい資料を提供することとなった。中部・東海以東の遺跡分布の濃密な地域と、疎らな近畿地方以西の接点での、まとまった石器群として初めての調査例である。

ここでは、この様な研究状況を念頭に、西日本における初期尖頭器石器群の状況を検討し、ヒロサキ遺跡の石器群がどの様な編年的・系統的脈絡にあるかを考察してみたい。

1，ヒロサキ遺跡の尖頭器と石器群

ヒロサキ遺跡は、三重県度会郡南勢町船越字ヒロサキにある。遺跡は、五ケ所湾最深部に面した小さな岬上に位置する。ヒロサキ遺跡では、地元在住の中世古祥道氏が長年に渡って遺物を採集し続けてきた。中世古氏の採集資料は三重県教育委員会でも注目し、1976 年には山沢義貴氏によって紹介されている（山沢 1976）。山沢氏は、ヒロサキ遺跡採集の石器群の内代表的なものの実測図を掲示し、その重要性を指摘した。採集中にナイフ形石器が含まれることから旧石器時代の遺跡であること、掻器や尖頭器などの石器も採集されていることの指摘であり、さらにナイフ形石器と尖頭器の共伴関係についても考慮する必要を指摘している。

ヒロサキ遺跡で発掘調査を行うにあたって、特に意図したのは、旧石器の一括性のある石器群を検出すること、山沢氏がすでに指摘したように、ナイフ形石器と尖頭器が共伴するかを確定すること、の二つであった。

調査の結果、調査地の土壌堆積状況は最悪で、当初期待した安定層位での石器群の検出は果たせなかった。南地区では、土壌堆積状況は悪いものの旧石器のみが出土し、層位的検出ではないものの、技術形態学的に一括性の有る石器群の検出、という最低限の成果を挙げることが出来た。中世古氏採集資料の旧石器資料は、同地点での採集である。出土した石器群には、尖

頭器・ナイフ形石器・掻器・削器等があり、ほとんどかチャートを素材としている

尖頭器は、発掘調査でチャート製の尖頭器基部１点、安山岩製の小型木葉形尖頭器１点が出土した。中世古氏資料には、チャート製尖頭器４点があり、両面加工・両側縁加工のものなどか認められる。共伴する石器群は、ナイフ形石器を主体とし、掻器・削器・楔形石器等がある。量的に、尖頭器はナイフ形石器を主体とする石器群に、従的に共伴する器種として評価すべきである。

ヒロサキ遺跡のナイフ形石器は、極小切り出し形のものを多く含み、ナイフ形石器文化の終末段階のものとして位置づけられる。尖頭器は小型、木葉形のものが主体であるが、調整部位・調整方法・形態的に斉一性に乏しく、初期尖頭器と見なし得る。

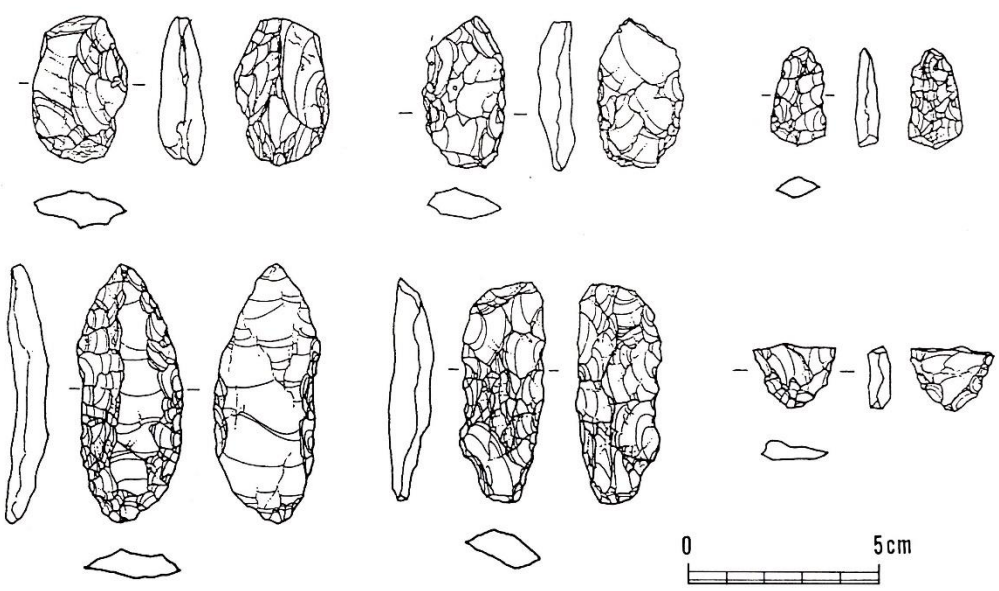


図 43　ヒロサキ遺跡出土の尖頭器

２，西日本の初期尖頭器

ａ，関東・中部・東海地方

関東・中部地方においては、初期尖頭器を有する遺跡多数が知られ、尖頭器石器群の発生から発達・盛行期・衰退期まで、ほぼその全容が把握されている。ここでは、個々の遺跡を子細に取り上げることは避け、その全体的様相を整理するにとどめる。

南関東では、ナイフ形石器文化後半期のナイフ形石器が切り出し形化を進行させる段階で、槍先形尖頭器が出現する。次第にナイフ形石器と尖頭器が主・客を入れ替える発達期、細石刃文化を経て、尖頭器盛行期を迎えるという尖頭器文化の変遷感の骨組みは、この地域の豊富な層位的出土例によって確立した。層位的条件の良い南関東では、武蔵野では４期、武蔵野では５期に編年段階が設定されている。ここでは、相模野台地の編年（鈴木・矢島 1978）で整理しながら観察することにしよう。

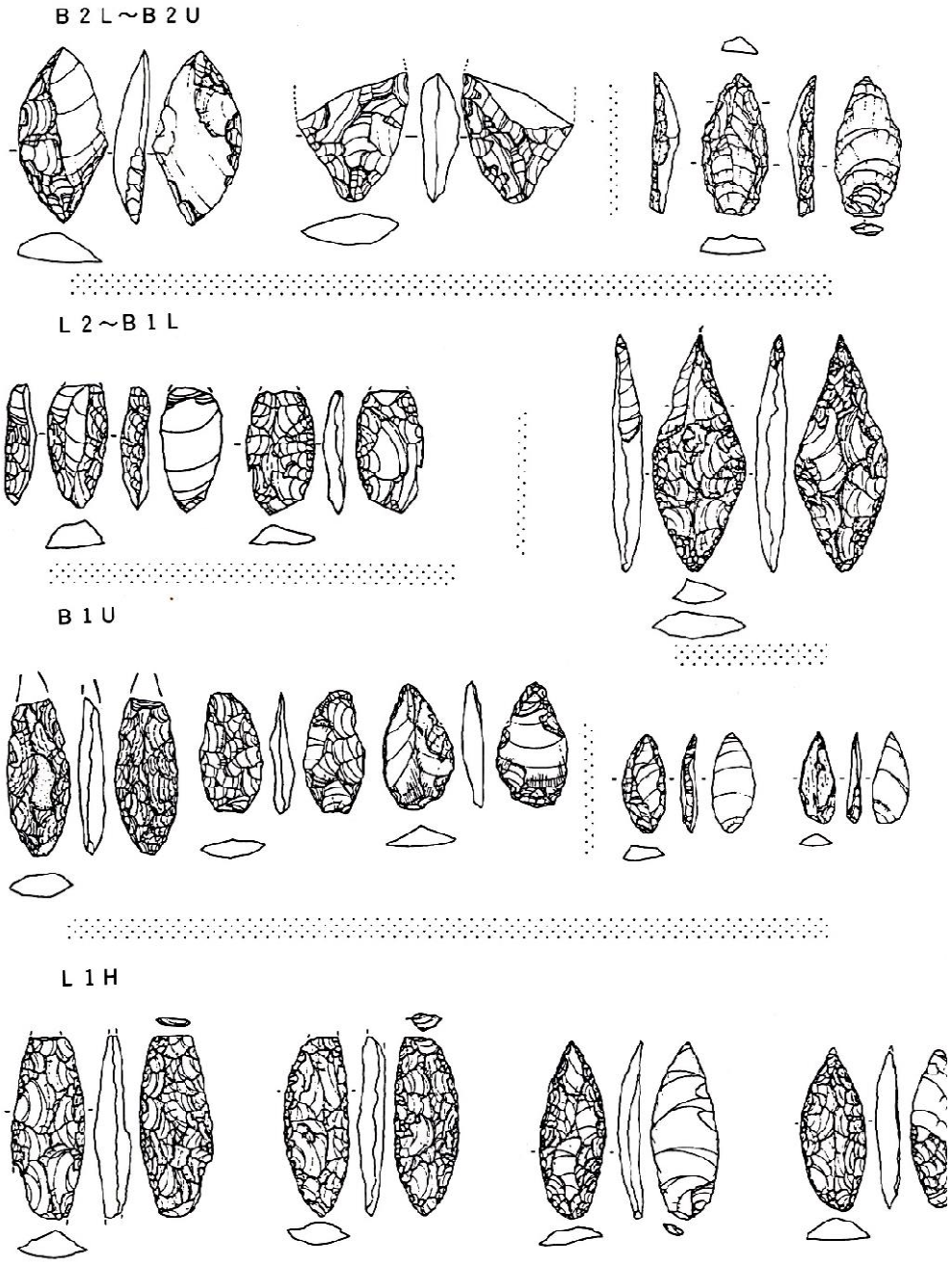


図 44　南関東の尖頭器　（上左：下九沢山谷　上右：柏ケ谷長ヲサ　中上左：栗原中丸　中上右：中村　中下左：橋本　中下右：下鶴間長堀　下：中村）

発生期の槍先形尖頭器は、南関東地方の武蔵野台地ではⅣ層中～上部に出現し、相模野台地ではＢ２Ｌ下部～Ｂ２Ｕ上部の間に出現する。相模野台地の編年に合わせると、段階Ⅲの石器群（西之台遺跡Ｂ地点・柏ケ谷長ヲサ遺跡・下九谷山谷遺跡など）に最初の尖頭器が認められるが、遺跡数は多くない。また、正確な出現期が把握されているとはいいがたい。僅かな尖頭

器には形態的・技術的斉一性は感じられないが、すでに両面加工の尖頭器が含まれ、南関東地方の中で自立的な尖頭器の発生があったとは考えられない。他地域からの波及を考える必要がある。この段階は切り出し形ナイフ形石器が主体で、一部基部加工ナイフ形石器・角錐状石器・円形掻器等が伴う。希には、国府型ナイフ形石器が発見される。角錐状石器・国府型ナイフ形石器が一部の遺跡で共伴する。

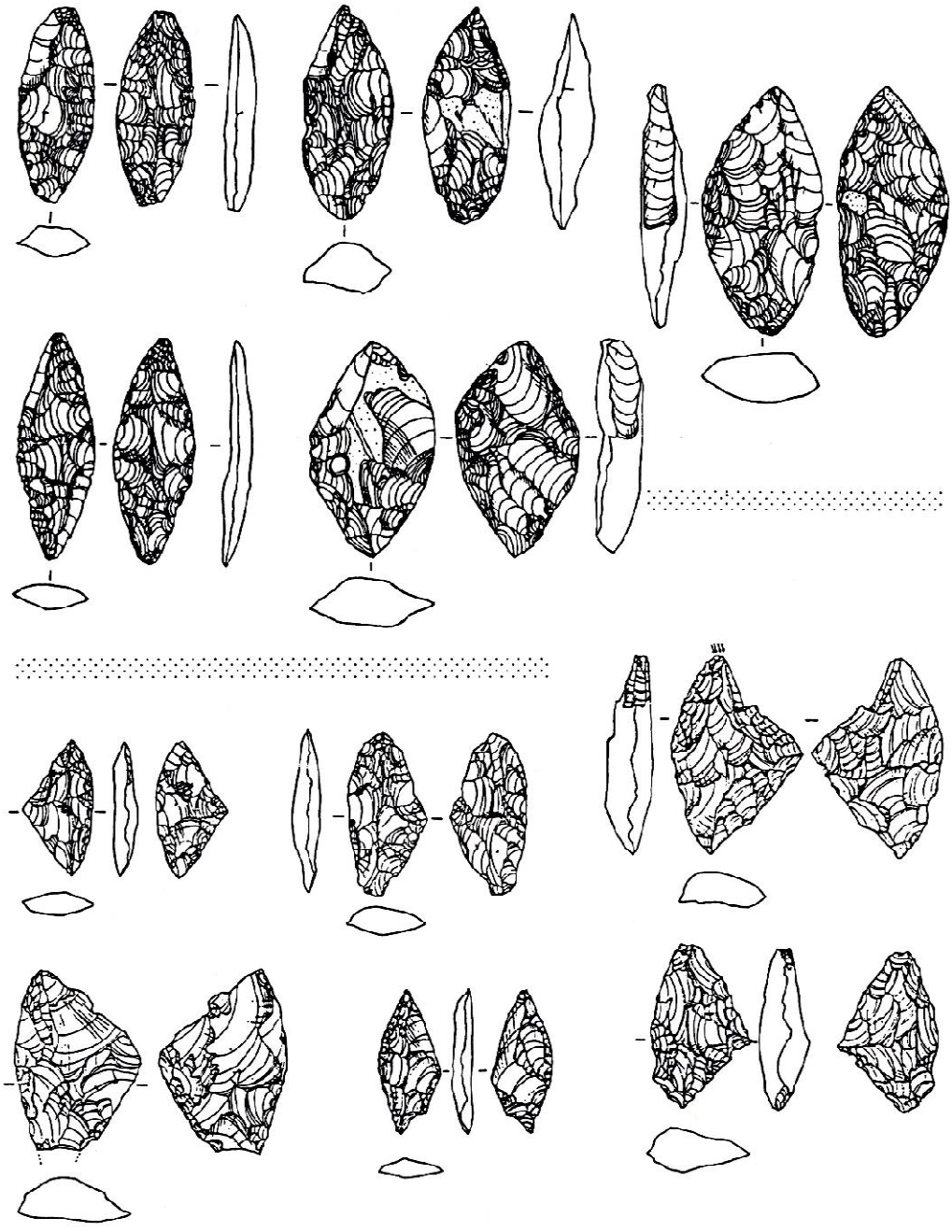


図 45　中部高地の尖頭器（上：男女倉　下：渋川 2）

段階Ⅳ（武蔵野Ⅳ上半・相模野Ｌ２～Ｂ１上部）では、下部では初期尖頭器はいまだ客体である。二側縁加工ナイフ形石器と部分加工ナイフ形石器を主体とし、少数の尖頭器・先刃形掻器・彫器などを組成する。剥片剥離技術は「砂川型刃器技法」に代表される石刃技法である。組成される尖頭器には、両面加工・半面加工・半両面加工・側縁加工などがあるが、両面加工が多い。ほとんどが寸詰まりな木葉形の４～６㎝ほどの中・小型で、大型のものは少ない。上部では、次第に尖頭器の質量が増加する。ナイフ形石器は小型化し、二側縁加工のものに幾何学形のものが多くともなう。彫器・掻器・錐状石器などは減少する。また、黒曜石の比重も増大するという。

段階Ⅶ（武蔵野Ⅲ・相模野Ｌ１Ｈ～Ｌ１Ｓ）では、尖頭器とナイフ形石器の主・客が入れ替わり、尖頭器主体の石器群となる。発達期の様相である。尖頭器は、両面加工のものが主体で、10㎝前後の大型品が出現する。石材は多様化する。ナイフ形石器の組成は貧弱で、形態的な技術的な斉一性は失われる。この段階は、一方で尖頭器をほとんど組成しない細石刃石器群も同一期に存在し、その並行関係を考慮するなら、地域的石器群の様相は、モザイク的な様相を呈していたことになる。

この後、大型尖頭器を多量に組成する段階を経て、縄文時代草創期へと続く尖頭器文化がある。

中部高地では、黒曜石原産地を中心に多数の尖頭器を組成する遺跡が発見されている。ただ、層位的条件が南関東に劣ることから、段階を踏んで精密な編年を完成させることは出来ていない。総体として、南関東と同様の変遷感を保ち得る状況であるが、山岳地であること、黒曜石の有力な原石産地を有することなどによる地域性の問題もある。形態的に初期尖頭器を組成する遺跡では、切り出し型ナイフ形石器との共伴関係が強く認められている。ナイフ形石器との機能的互換の確保として男女倉技法が行われたこと、これらの遺跡と黒曜石原石産地周辺という立地を関連づける必要が指摘されている（須藤 1989）。

東海地方では、相模野Ⅳ期中葉相当に初期尖頭器を組成する遺跡があるが、散漫な分布を示すに留まる。Ⅳ期前半期には尖頭器は認められず、中葉の遺跡（広合遺跡・広野北遺跡Ｋ２・京見塚遺跡等）では側縁加工・部分加工尖頭器に併せて両面加工尖頭器が認められている。また一部の遺跡では、男女倉型尖頭器が出土している。いずれの遺跡も尖頭器は客体で、二側縁加工の石刃技法を基盤としたナイフ形石器が主体を占める。後半では、次第に尖頭器の組成を増大させる。不定形・幾何学形小型ナイフ形石器が伴う。剥片剥離技術は、不定形剥片を剥離するものとなる。

西日本東部は、遺跡の粗密の問題はあるが、その発生期・発達期の様相・石器組成・男女倉型尖頭器の組成について、ある程度のまとまりが認められる。また、これらの地域では、角錐状石器が先行して普及し、速やかにその地位を尖頭器に譲っているように観察される点も同様である。尖頭器文化の変遷が南関東を舞台に整備されているので、ここを中心に、今後の検討を進めることとする。

b，近畿・瀬戸内・九州地方

近畿・瀬戸内・九州地方において、槍先形尖頭器を出土した遺跡は少ない。また、層位的状況も良好とはいいがたい地域が大半を占める。僅かの遺跡は、ことごとくその様相を異にすることから、時期的にも異なっているものと考えられるが、南関東のように編年的基軸を与え得る地域がない。

近畿地方では、三重県宮川・櫛田川流域、二上山北麓、兵庫県瀬戸内海、但馬地方などに尖頭器を出土した遺跡があるが、層位的に所属時期・石器組成を明らかにした遺跡はない。初期尖頭器のものとして形態的に抽出できる遺跡は明かではなく、多くが発達期以降に属すると考えられる。

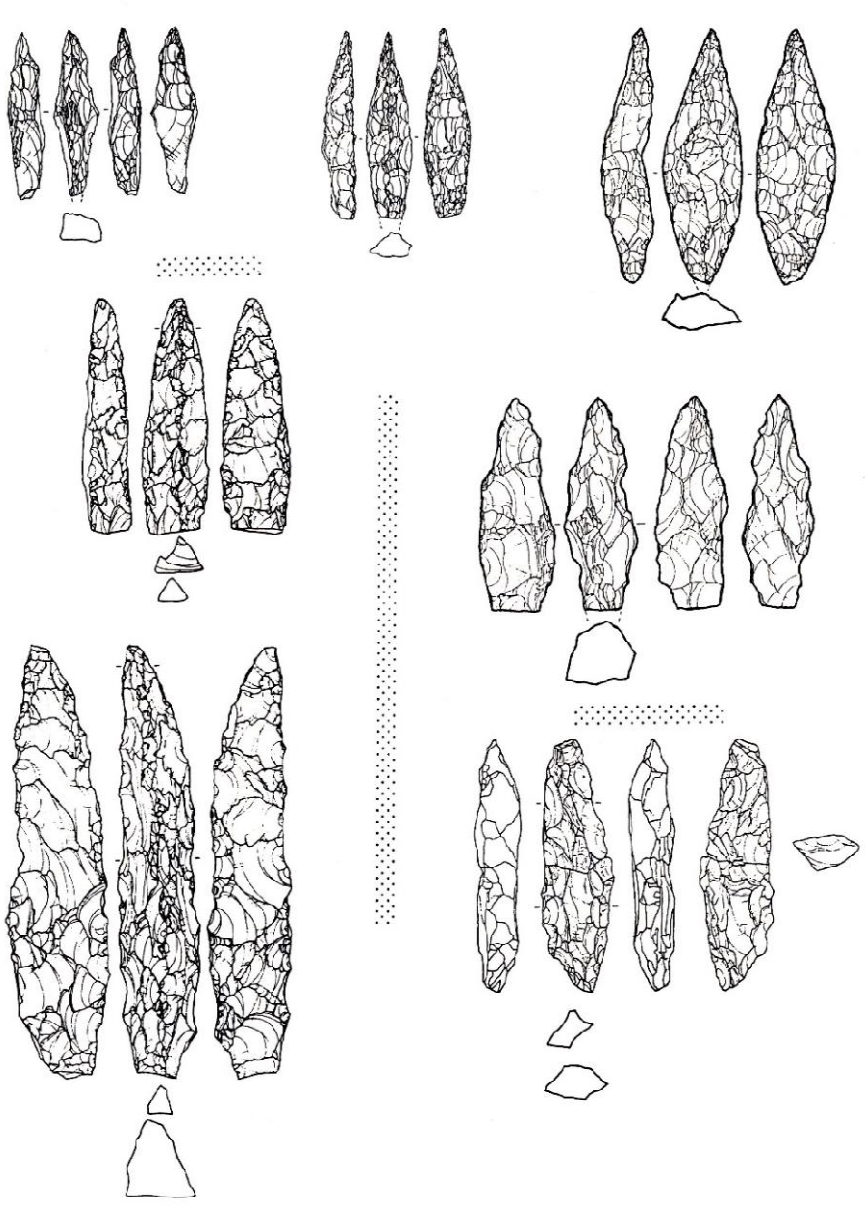


図 46　甲板面調整ある角錐状石器（上：下城　左：百坂　右：板井寺ヶ谷）

瀬戸内海沿岸では、備讃瀬戸に尖頭器を組成する遺跡が知られる。備讃瀬戸では岡山県鷲羽山遺跡、羽佐島遺跡、国分台第 7 地点遺跡等がある。これらの遺跡は、層位的状況は劣悪であるが、両面加工の中型木葉形尖頭器がかなりの点数出土している。鷲羽山・羽佐島などの海峡部の遺跡では、多様な瀬戸内系横長ナイフ形石器と同一層順から出土している。冠高原遺跡では、槍先形尖頭器を主体に、ナイフ形石器・錐状石器等が組成する。中・大型の尖頭器主体で、原石産地の立地背景を反映している。

九州地方では、槍先形尖頭器は極めて希な地域である。九州北部の多久周辺にサヌカイト製尖頭器を出土する遺跡群が知られているが、十分にはその編年的・系統的背景を検討できない状況である。原石産地周辺としては、二上山・国分台・冠高原に通じた状況を示す。

初期尖頭器は、以上のように近畿地方以西には疎らにしか認められない。南関東・中部高地・東海地方とは全く異なった様相を呈する。発達期の尖頭器分布も疎らで、有舌尖頭器の段階まで顕著な展開は認められないことが知られる。この地域の尖頭器は、多くの遺跡で瀬戸内系中・小型ナイフ形石器と共伴して出土し、両者の共伴関係に間違いがなければ、国府型ナイフ形石器とは共伴しないことから、ナイフ形石器文化後半期のものであると考えられよう。全てが両面加工であることを考えると、近畿地方以西での尖頭器文化の自立的な発生・発達は考えられないことになる。

ところで、初期尖頭器の尖頭器以前にナイフ形石器以外の主要な器種の内、尖頭器との機能的互換の考慮される器種として角錐状石器がある。近畿地方以西は、角錐状石器の古い段階の分布領域である。現在角錐状石器は、姶良Ｔｎ火山灰降灰直後に九州に出現し、急速に近畿地方にまで展開した新来の石器であると考えられている。角錐状石器は、基本的には両側縁加工の尖頭器としての形態を有し、ナイフ形石器とともに槍先に装着される刺突具としての機能を有している点で、槍先型尖頭器と機を一にする。

最古の角錐状石器は、下城遺跡、岩戸第Ⅲ文化層相当、百枝Ｃ地点第Ⅱ文化層、板井寺ケ谷遺跡上位文化層などが姶良Ｔｎ火山灰降灰直後と考えられている。これらの遺跡では、両側縁加工のもの、舟底稜線上からの調整を有するもの、甲板面にも調整した三稜尖頭器状のものがある。尖頭器として、西日本東部の槍先型尖頭器との関連を考慮する必要がある。

3，西日本の初期尖頭器石器群とヒロサキ遺跡の石器群

ヒロサキ遺跡の石器群を、まず西日本の初期尖頭器石器群に対比してみよう。近畿地方以西には比較できる基軸がないので、最も整備された編年を有する南関東地方相模野台地の編年と対比したい。

ヒロサキ遺跡の尖頭器には、両面加工・両側縁加工のものがあるが、形態的には中・小型木葉形主体のものと考えられる。また、石器群総体としてややナイフ形石器が優位を占めること、ナイフ形石器が小型化し、極小幾何学型化したものがあること、掻器や削器を組成すること、剥片剥離技術を見ると石刃技法は認められず、不規則な縦長傾向の剥片を多方向から剥離

する技術であることを総合すると、相模野編年に当てはめて時期を考えると、第IV期後半に位置付けられよう。

三重県南部から中央部において、該当期の石器群は、主にナイフ形石器を主として組成する遺跡が知られている。宮川・櫛田川流域の遺跡群のほとんどは、第IV期の所産であろう。ただ、これらの遺跡での初期尖頭器の共伴出土例は知られていない。この地域の尖頭器組成が本来僅少な可能性もあるが、ナイフ形石器の形態が南関東・東海地方と異なることから、技術形態学的な精密な比較検討が出来ない。いわゆる砂川期の特徴である二側縁加工の中型ナイフ形石器は、伊勢湾岸には乏しいのである。宮川・櫛田川流域では、小型で先端の尖った基部周辺の加工度の高い一群が大量に保持され、これがこの地域の第IV期後半のナイフ形石器の特徴となっている。一部では、角錐状石器を出土した遺跡もあるが、そこでは初期尖頭器の共伴はない。紀伊半島東南部で、角錐状石器を組成する遺跡と初期尖頭器石器群は、時期を異にしていると考えられよう。

ヒロサキ遺跡は、このように尖頭器石器群として編年的位置の定まった現在の時点では、その分布域の西限にあたる。ヒロサキ遺跡を鍵として、西日本東部と西部を対照してみる必要があろう。

近畿地方以西では、ヒロサキ遺跡に先行することが明らかな尖頭器を組成する遺跡は知られていないが、中部高地・南関東には多くの先行する遺跡が存在する。このことから槍先型尖頭器文化の直接的な起源は、東部にあることが推定できる。南関東地方の最古の遺跡では、すでに尖頭器の形態が完成して出現するので、おそらく中部高地で最初に完成された尖頭器文化が、その領域を周辺に拡げていった過程が伺われよう。もし、ヒロサキ遺跡が紀伊半島南・中部での尖頭器石器群最古の位置を占めるなら、西日本西部の尖頭器石器群は、ここを中継地として波及したことになるかも知れない。紀伊半島東部と近畿地方中央部でのナイフ形石器文化は、縦長剥片剥離技術を母胎とした東部と瀬戸内系横長剥片剥離技術を母胎とした近畿地方中央部では大きくことなり、相互のナイフ形石器の共伴事例の乏しい現状では、両者の精密な比較検討は出来ない。東から西への尖頭器石器群の拡大は、ナイフ形石器文化の地域的相違を乗り越えただけに、重要な問題となろう。

一方、西日本東部の角錐状石器は、尖頭器石器群にやや先行することが明らかなものの、姶良Ｔｎ火山灰降灰直後にはすでに槍先形尖頭器と同等の形態と機能を保有するに至っている。角錐状石器の東部への普及は、西部に少し遅れることは明かであるが、これに尖頭器の起源を求める主張もある（白石 1974）。現在のところ、角錐状石器の形態組成と尖頭器石器群の形態組成には、大きな差異があって、安直に関連を認めることは出来ない。ただ、今後中部高地でまとまった角錐状石器・尖頭器移行期の石器群が発見されることがあるならば、中部高地と推定される尖頭器石器群の発生が、西からの角錐状石器に影響であるとすることが出来よう。今後、紀伊半島南東部での更なる当該期石器群検出の努力が必要であろう。現在のところ、東海地方・近畿地方・瀬戸内地方において、角錐状石器と初期尖頭器の共伴した遺跡は知られていない点は、両者の関係を考える上で重要である。

おわりに

本稿では、以上のようにヒロサキ遺跡の尖頭器を組成する石器群について、積極的に評価を行った。特に、南関東の相模野編年に位置付ける作業を行い、近畿地方東部に位あるヒロサキ遺跡を、第Ⅳ段階後半と特定し得た意義は大きい。このように、紀伊半島は日本列島のなかで東西の旧石器文化が交差する重要な領域にあり、この地域での角錐状石器・尖頭器両石器群に先行・共伴する石器群の調査研究は、西日本旧石器の、系統的・編年的研究に重要な意義を保ち得ると考える。

第５節　旧石器時代集落の周辺

－郡家今城遺跡の集落環境－

１，はじめに

旧石器時代遺跡は、旧石器時代人の活動の結果営まれたものである。その活動を環境への適応作用と考えるなら、その環境を復元することは、旧石器時代研究に不可欠の作業であろう。旧石器時代人は、一定の領域に集落、特定作業集落や特定作業地点、通過時短期集落など多様な遺跡を残したと考えられているが、それらの形成の中心には集落の存在が予測されよう。その環境との接点は集落の内容と立地に代表させて表れると私案される。この視点から考えるなら復元すべき環境には、地形、気候、動物相・植物相といった自然的環境だけでなく、集落から回収される考古学的情報の背後の旧石器時代の文化的・社会的環境も含められなければいけない。また二つの異なった環境の間に立つ生業・生活技術を絡めての相関関係の解明は、最重要の課題であろう。旧石器時代集落を評価しようとする場合、これら全ての関係を考慮し、生態学的立場へと止揚されなければなるまい。

本稿では、近畿地方中央部で発掘調査されて報告書が刊行された代表的遺跡である郡家今城遺跡（冨成・大船 1976・78）を取り上げ、その集落としての基盤がどの様な環境的側面から構成されているかを考えてみたい。郡家今城遺跡は、大阪府高槻市氷室町１丁目に所在する。郡家今城遺跡はＡ・Ｂ・Ｃの三地点に分かれるが、集落遺跡としての検討に耐えうるのはＣ地点である。Ｃ地点を中心として分析を進める。郡家今城遺跡は、近畿地方中央部の国府型ナイフ形石器を主体とする遺跡として多くの考察が行われているが、視点の転換を行い、別の角度から分析を行ってみたい。現在の自然科学的・考古学的研究は、両者をこの目的のために摺合せていけるほど、充分には蓄積できていないし、また個々の研究は個別的にすぎる。本稿では、まずこの分野での研究の口火を強引にでも切ることを試みる。この検証と批判を繰り返すことによって、郡家今城遺跡の集落としての内容・性格を鮮明化できるであろうし、瀬戸内系旧石器社会の構造もまた明らかになってくると期待する。

２，郡家今城遺跡の環境

ここでは、郡家今城遺跡を取り巻く自然環境と集落立地の性格について考えてみたい。その中で、集落を正当に評価する上での現実に存在する障害と課題を明らかにできよう。自然環境を記述する上での郡家今城遺跡の年代的位置については、遺跡内から回収された考古学的資料では知りえない。一応、周辺地域での知見を基にウルム氷期後半の厳寒期後と仮定する。年代的な誤差が環境評価に大きな変動をもたらす場合、別に補足する。

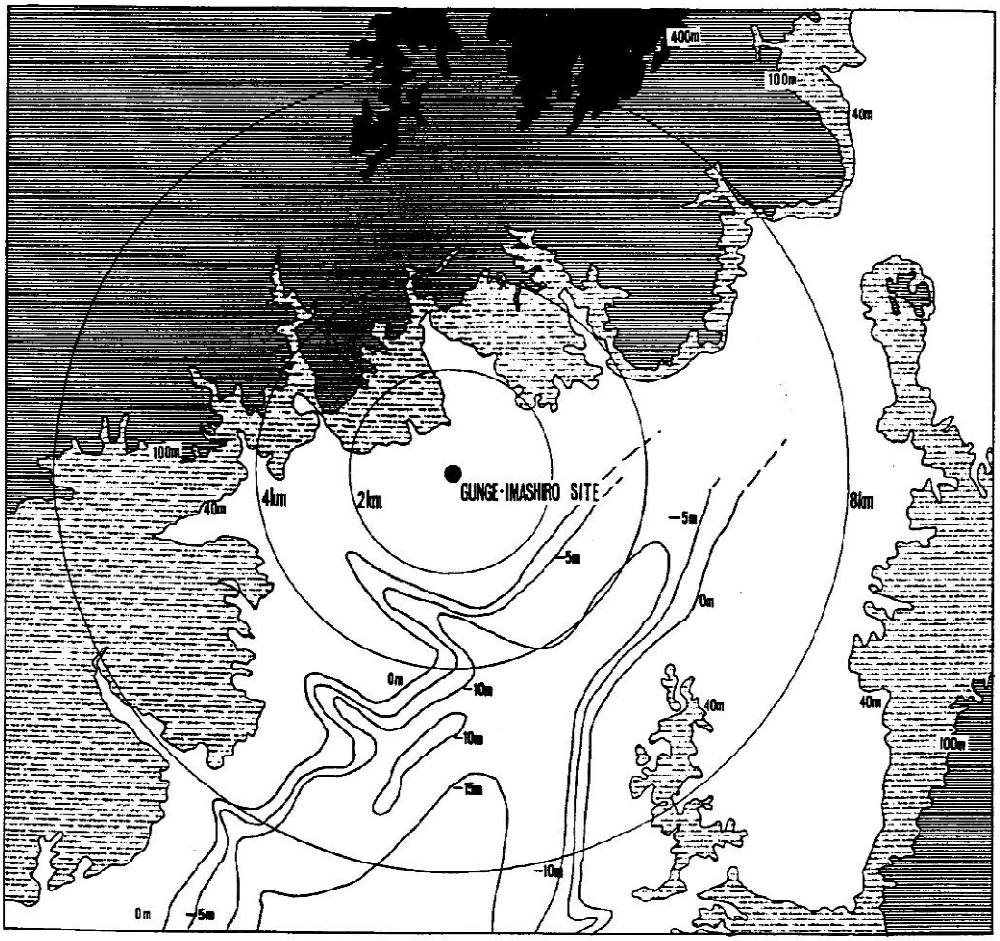


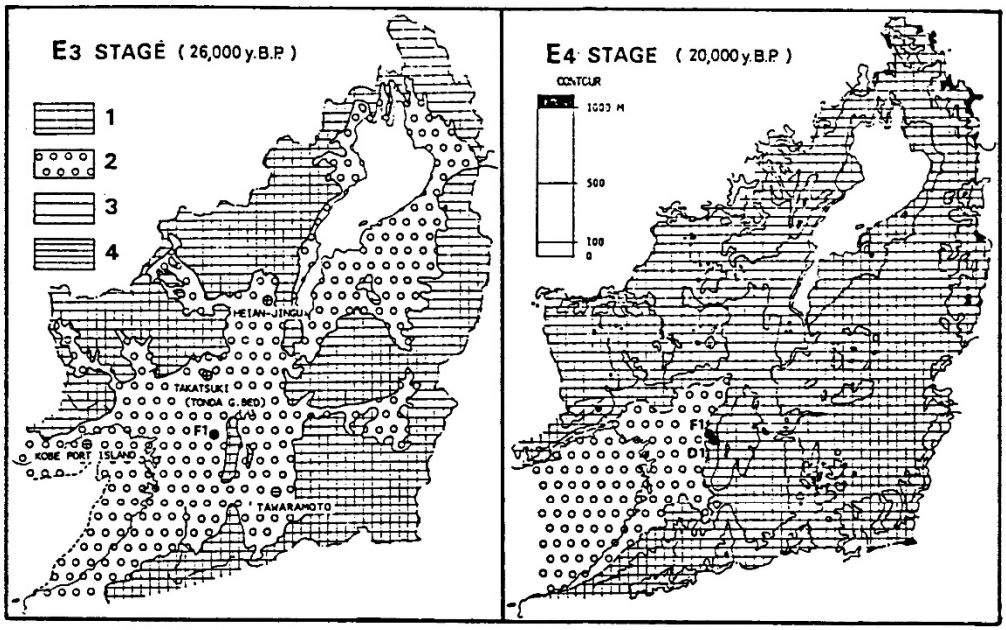
図 47　郡家今城遺跡周辺地形図（土質工学会関西支部 1966 を合成）

沖積層下の地形を、大阪地質図を合成することで表現。0～-15ｍが古淀川河床・氾濫原、0～40ｍが低位段丘、40～100ｍが丘陵、100ｍ以上を山地としてトーンをかけた。

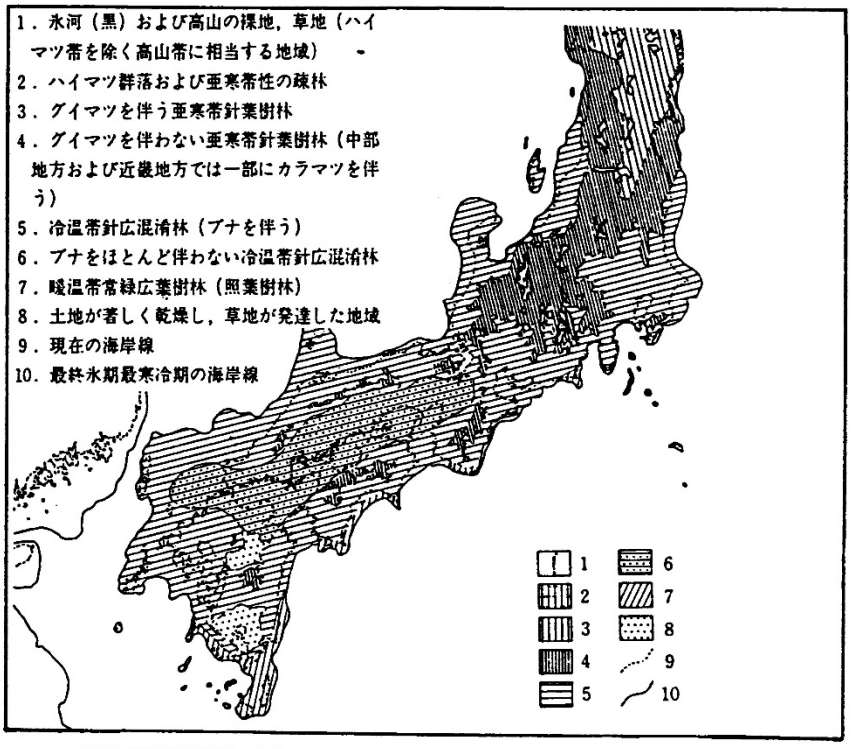
ａ，地形・気候

郡家今城遺跡は、瀬戸内地域の東部、古大阪平野の北東端に位置している。

約２万年前のウルム氷期厳寒期には瀬戸内海は陸化しており、大きな盆地形の連続となっていた。その低地部には湖沼・湿地が発達していた可能性がある。瀬戸内西部から下ってくる古明石川に、古猪名川・古武庫川が合流した古淀川が、現在の大阪湾上で一体となり、友ケ島水道から紀伊水道を通って太平洋に注いでいた。後の海水面上昇期に何回かの海食崖が形成されたり、また堆積が促進されて谷を埋めたりしたものの、大体のところ現在の大阪湾は、標高-50～-70ｍ程のところになだらかな地形を呈していたことになる（梶山・市原 1974・市原 1975・市原・藤野 1979）。



1. 亜高山帯針葉樹林、2. ブナ林、3. モミ・ツガ林、4. シイ・カシ林



最終氷期最寒冷期の古地理と古植生

図 48　近畿地方中央部・西南日本の植生分布（上：古谷 1979、下：那須 1985 を改変）

現在の大阪平野は、古淀川と古大和川からの沖積作用によって河内潟と大阪湾が埋め立てられて形成されたものである。大阪平野の沖積層基底部は、ほぼウルム氷期前後の地形を代表し、古大阪平野としての景観を示していよう（日本建築学会近畿支部・土質工学会関西支部 1941）。古大阪平野は、現在の大阪湾となっている低位な部分と淀川北岸の部分、現在の河内平野となっている河内潟の部分の三つに分けられる。古河内平野は古大和川の河床を含み、標高-5〜-20m程の緩やかな平原とその周辺の丘陵からなる。河床は、沖積層基底面に谷となって示されている。古河内平野中央は、その緩やかな傾斜と古大和川の迂回によって長期にわたって排水が不良な時期が続いていたらしく、ウルム氷期厳寒期からの湿原・泥炭層の形成が知られている（梶山・市原 1974）。

古淀川は、桂川・宇治川・木津川が合流して始まり、山崎周辺で古三島平野に東北方向から西へ流下し、上町台地と千里丘陵の間を抜けて南に方向を変えている。現在の三島平野は、ウルム氷期の川岸に形成された低位な段丘と古淀川の氾濫原を埋めた沖積面からなっており、ウルム氷期の三島地方は標高 0〜-15m程の氾濫原と周辺の低位な段丘や丘陵からなっていたと考えられる。三島地方の西北は標高 600m前後の丹波山地南端となっている。ウルム氷期前後の三島地方は、当時活発な侵食・堆積作用の存在を考慮したとしても、基本的な地形単位は先の復元同様であったろうと考えられよう。この山地と古淀川の間を、山地・丘陵・段丘・氾濫原・河床の順に西北の山地を最高部として古淀川の最低部までを、平行に区分することがほぼ可能である。段丘の形成は、まさに進行中であったと考えられる。

この山地から芥川・茨木川などの中小河川が東南方向に古淀川に向かって流下することによって、古淀川北岸の段丘・丘陵はほぼ数㎞ごとに分かたれている。女瀬川と芥川に挟まれた南平台丘陵南端は低位段丘になっており、標高では南端で 14m、北部で 32mを計る（富成・大船 1978）。この低位な段丘の面積はほぼ 8 平方㎞で、若干南北に長い舌状を呈している。

郡家今城遺跡は、女瀬川の東岸に接して低位段丘のほぼ中央に位置し、標高約 20mである。さきに記述した地形から、ウルム氷期には西北方向約 3 ㎞で山地、約 1 ㎞で南平台丘陵、東南方向へ約 2 ㎞で古淀川氾濫原に到達することができたことになる。西南方向・東北方向へは、低位な段丘が小河川によって区切られ、僅かに高低差はあるものの、同様な地形が続くことになる。ウルム氷期後半期を通じて、景観としての地形は、河床と氾濫原が沖積作用によって埋められたほか、大きく変動していないと考えられる。

ウルム氷期の気候については、その厳寒期から温暖化の開始後で大きく変動していることが知られている（小野 1985）。一般に寒冷で、降雨・降雪が西南日本では少なく乾燥した気候であったが、海水面が久しく低下した結果、段丘の形成作用が認められるという。気候は、地形形成と共に当時の植生に大きな影響を与えたと考えられる。根元的な環境要素として気候は重要である。

b，植物相・動物相

地形的・気候的な根元的要素によって制約される植物相は、生物的動態であり、それを把握

しようとする場合、目的・視点や方法が問題となる。植生図も、無原則に考古学に応用することはできない。まして郡家今城遺跡の所属時期を特定できない現状では、郡家今城遺跡周辺の植物相を言及するのには非常な困難がある。控え目に、ウルム氷期後半期の植物相変動の傾向を整理するに留める。

近畿地方中央部のウルム氷期の植生は、大きく冷温帯針広混交林とされ山地にブナを伴い低地に伴わない部分の変動であるとするもの（那須 1985）、山地の針広混交林と低地の冷温帯落葉広葉樹林の変動であるとするもの（塚田 1974）、山地の亜高山帯針葉樹林と低地のブナに代表される植生帯の変動であるとするもの（古谷 1979）など、多くの考察がなされている。植生の特徴把握の方法は異なるものの、近畿地方中央部で山地と低地で植生に差異があることで一致している。寒冷期には低地の植生が縮小、山地の植生が拡大し、温暖化が進行するに従い逆に低地の植生が拡大、山地が縮小するのも同様である。古大阪平野は先の地形の検討から言えるように周辺の山地と陸化した低地から構成されていることから、この植生の変動が寒温にあわせて高低をローラーのように移動していたものであろう。

郡家今城遺跡の所属時期がウルム氷期厳寒期以降いずれの段階であったとしても、山地と低地の境界線近い位置を占めることから、郡家今城遺跡の周辺には緩やかなものであろうが植生帯の変化が認められた可能性が高い。河川の氾濫原などを除き森林的要素が郡家今城遺跡周辺に広がっていた可能性は認めてよい。時期的・部分的には草原発達の可能性もある。

動物相は、地形・気候・植生に制約されつつその環境に適応して生息していたものであり、さらにその一部は人間からも影響を受けている可能性が高い存在である。現在のところ、精密な言及は困難であろう（稲田 1984）。

ｃ，集落立地と自然環境

郡家今城遺跡と周辺を取り巻く環境の関係は、それを旧石器時代人が選択し、集落をそこに営んだという事実によって集約されている。郡家今城遺跡の中に残された遺物や遺構、その潜在構造は、旧石器時代人の集落を通しての活動の結果残されたものであることが銘記されねばならない。

郡家今城遺跡の集落立地は低位な段丘上の中央にあり、中小河川が段丘をいくつかに区分するものの、ほぼ縦２㎞、横４㎞の平坦な領域が広がっている。西北３㎞で山地に、東南３㎞で氾濫原と古淀川河床に到達することが可能である。山地には、針広混交林と称されたりする植生が、段丘や丘陵には冷温帯落葉広葉樹林とも称される植生が、境界ははっきりしないものの広がっていたと考えられる。また山地と低地の高度差以外の要素、例えば日当りの善し悪し、乾湿の違いによっても次第に植物相は変移していたに違いない。当然、動物相も地形・植生の変化にあわせて棲み分けたりして変化する。

郡家今城遺跡の集落立地は、このように多様な地形・植生・動物相を最大限有効に利用すべく選択されたものであろうことは想像に難くない。狩猟採集民としての旧石器時代人は、諸外国の良好な遺跡などでの知見や現代に残存している民族例との対比によって、食用植物と小動

物の採集、中・大型動物の狩猟という生業活動を営んでいたと考えられている（Lee and Devore1968）。食用植物の採集は、集落の周辺の比較的近い部分で行われていたと推定できる（Binford1980）。また狩猟は非常に広範囲に行われた可能性が高い。それに 5 ㎞圏・10 ㎞圏、一時間圏・二時間圏を当てはめていく考え方も提示されている。郡家今城遺跡の周辺に観察できるような地形要素を植物相・動物相と連動させて旧石器時代生業の活動領域として考えてみる必要があるだろう。

郡家今城遺跡周辺での山地と低位段丘の二つの地形要素の存在は、高低二つの環境帯を代表しているといえる。この環境帯の区別は、大方のところ植生帯の差異とも一致する可能性が高い。郡家今城遺跡は、やや低地に片寄ったものの二つの環境帯を使い分けられる位置に存在している。HIGGS らによれば、狩猟採集・初期農耕段階の集落は、二つの環境帯の境界上に位置する場合が多いという（HIGGS1972･75）。この環境帯の使い分けは、植物採集などの日常的近距離活動において行われたと考えられる。また、運搬の為の労力を削減するため最も基本的で重要な資源の近くに遺跡は立地したのであろう（Binford1980）。さらに低地部も、丘陵と低位段丘、氾濫原、川というもので、同一視できる環境でないのは当然である。氾濫原が草原になる可能性が高く、丘陵・段丘上で日当りの善し悪し、小河川の縁の乾湿で植物の種類は変化する。この変化を熟知することによって複数の環境の複数の資源を活用できることは、集落として安定した資源を確保する上で重要な意味を持つ。郡家今城遺跡の集落活動の重要な部分にこの小環境の使い分けがあったに違いない。

郡家今城遺跡を中心として営まれた狩猟活動は、現存する狩猟採集民の研究に対比することが可能であるなら、その活動領域は非常に広範囲にわたったと推察できる。ウルム氷期の中・大型動物群は、棲みわけと食生分離が進んでおり（Guthrie1982）、山地・丘陵・段丘・氾濫原・古淀川といった大きな環境が帯状に区別できる郡家今城遺跡周辺環境では、環境帯に動物相を当てはめられる可能性がある。大型動物は草原に、中小動物は潅木地帯から森林にという対応があったかもしれない。郡家今城遺跡の旧石器時代人は、狩猟活動においても長年知識蓄積した結果熟知した地形・植生と動物相を使い分けていたという可能性も考慮できよう。

自然遺物の遺存が検出されていない郡家今城遺跡の場合、以上のように二つの環境帯の境界に近いことから植物などの採集活動にその使い分けが考えられた。また狩猟活動にも環境帯の相違が関係しているかもしれない。しかし現状では可能性の提示に留まり、どの様な資源をどこから、どれだけ、どの様に獲得したかを明らかにするのは困難である。また、同一の環境帯も夏と冬では様相をまったく異にする。遺跡が集落として機能した期間の長さ・季節を解明することが、自然環境と集落の関係を明らかにする上で、最大の課題である。自然遺物の検出と共に、当時の旧石器時代社会の様相など他の要素と合わせて総合的に検討することが必要であろう。

d，郡家今城遺跡Ｃ地点の集落構造

郡家今城遺跡Ｃ地点は、発掘調査によって遺構と遺物が現位置を保って検出され、報告され

た瀬戸内・近畿地方でも希な重要遺跡である。ここでは紙幅の制限もあり、遺跡の構造について充分な検討をする余裕はないので、報告書の記載事実を簡単に整理しつつ、若干の私見を述べたい。

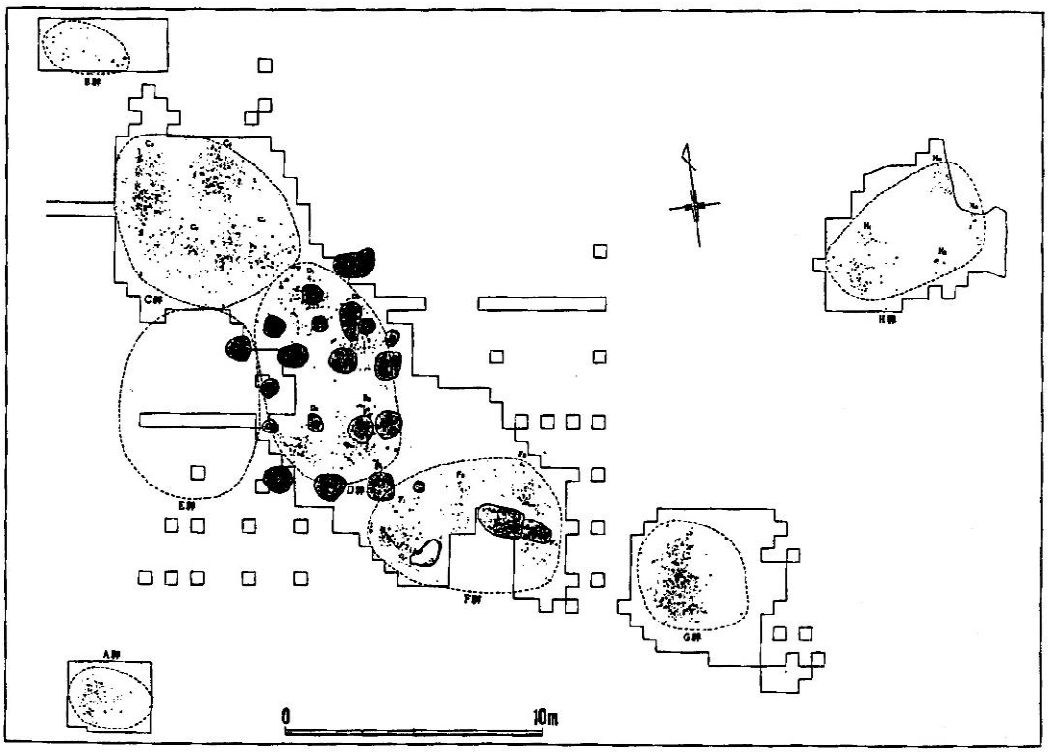


図 49　郡家今城遺跡 C 地点遺物出土状況（冨成・大船 1978）

郡家今城遺跡C地点からは、合計 1114 点の石器類、推定 451 点の礫が出土し、明確な遺構は認められていないが、石器類と礫によって遺物集中箇所が形成され、報告書（富成・大船 78）によると南北 27m、東西 38mの約 650 ㎡の範囲にA群からH群まで、合計８群の遺物集中箇所が認められたという。遺物集中箇所の区分に若干の問題があると私案するが、明らかに分布の単位性が認められる。

石器類は、多寡の差はあっても合計８群の遺物集中箇所に分かれて集中箇所を形成している。石器類は、ナイフ形石器・掻器・彫器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・翼状剥片・縦長剥片・剥片・砕片・石核・叩き石からなっており、各群に分かれて検出された。一部の器種には数量的には遍在傾向が認められるが、各群にそれぞれ分布し、点数の少ない器種を除きほぼ欠落していないことには変わりない。各群の基本的な石器組成は、ナイフ形石器、掻器、加工痕・使用痕ある剥片等の石器と翼状剥片、縦長剥片からなり、それに彫器、叩き石が伴う集中箇所があることになる。剥片・砕片・石核も、各群から出土している。石器分布の上から、各集中箇所はほぼ均質であるといえる。敲石・磨石が遺跡から一点も検出されていないことは、注目される。

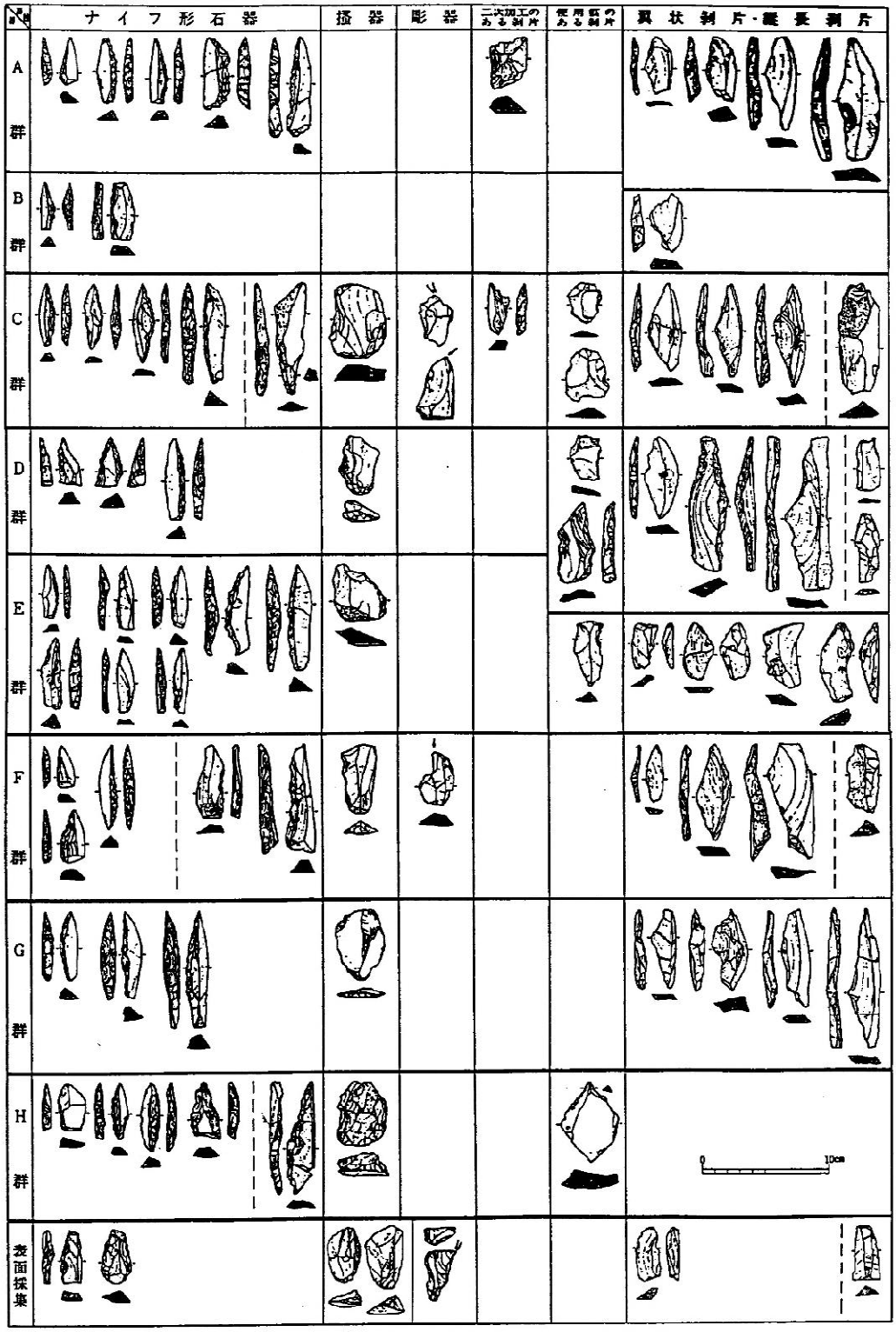


図 50　郡家今城遺跡 C 地点の集中箇所別石器組成（冨成・大船 1978）

礫は、多数が破砕片として出土しているが、推定で451個が認められている。礫も、各群から出土し、その質量には差があるものの欠落する集中箇所はない。各群の礫集中度は低いものの、集中に単位性があることが知られる。各群から出土した破砕礫には受熱破砕と思われる個体が多く含まれていることから、受熱破砕礫を多く含む礫ブロックには火の使用との関係が考慮できる（鈴木他1987）。一部には、受熱していない1kg以上の大型礫も存在するようで、これらには別の機能を考慮できよう。

郡家今城遺跡C地点の遺物集中箇所各群の石器組成はほぼ均質であり、剥片・砕片・石核の存在からある程度の石器制作活動の展開も認められること、受熱破砕礫の礫ブロックがあることによって火処の存在も推定できること、各遺物集中箇所が10m前後の間隔を配して位置することを総合的に考慮するなら、遺物集中箇所を比較的等質な単位として認定できる。いくつかの群については、統合が可能ではないかと私案しているので、数単位に再編成できるかもしれない。

遺跡のどの部分が集落構成単位としての世帯と対応するものとして捉えられるかについては、日本の旧石器時代遺跡から回収される情報の状況では、確たる根拠に乏しい現状である。ここでは、鈴木忠司氏らによる成果（鈴木他1980・82・85）を一時借用し、これらの単位を世帯と対応して考えていることを明らかにする。当然、寺谷遺跡や野沢遺跡などの事例とは完全には同等な構造ではない。このような解釈的作業は、これからの研究段階に合わせて仮説的に検証されていくものであろう。この立場に立つ限り、旧石器時代の一般的単位集団と集落構成世帯群は、ほぼ同質であるということになる。

旧石器時代人による一般的な遺跡形成が、複数の世帯による集落の形成と維持による結果の物理的遺構・遺物の集積であるとするなら、一時的な通過遺跡や特定作業遺跡を除けば、郡家今城遺跡C地点のような遺跡は、旧石器時代人の一般的な集落遺跡として見なして大過ないであろう。また、集落は単位性のある集団による一般的居住地であるとも言い替えることも可能である。集落と集団には、一定の対応関係があると見なせよう。

e，郡家今城遺跡C地点の石材・資源的背景

郡家今城遺跡C地点から回収された遺物には、石器類と礫がある。いずれも石材鑑定によって識別が可能である。

ナイフ形石器は、ほとんどが国府型ナイフ形石器によって占められており、縦長剥片素材のものが1点のみ含まれる。ナイフ形石器は、破損率が高い。いずれもサヌカイト製である。掻器は、サヌカイト製が大半を占めるが、チャート製・頁岩製各1点を含んでいる。彫器は点数が少ないが、チャートが多用されている。二次加工・使用痕ある剥片は、サヌカイトとチャート・凝灰岩・鉄石英等の石材がほぼ同数を占めている。翼状剥片はすべてサヌカイト製で、破損品が多い。縦長剥片にはサヌカイト製はなく、チャートと流紋岩製である。叩き石は、珪岩と粘板岩製である。剥片・砕片にはサヌカイト製が圧倒的で、チャートなどは少ない。石核は、いずれもサヌカイト製である。

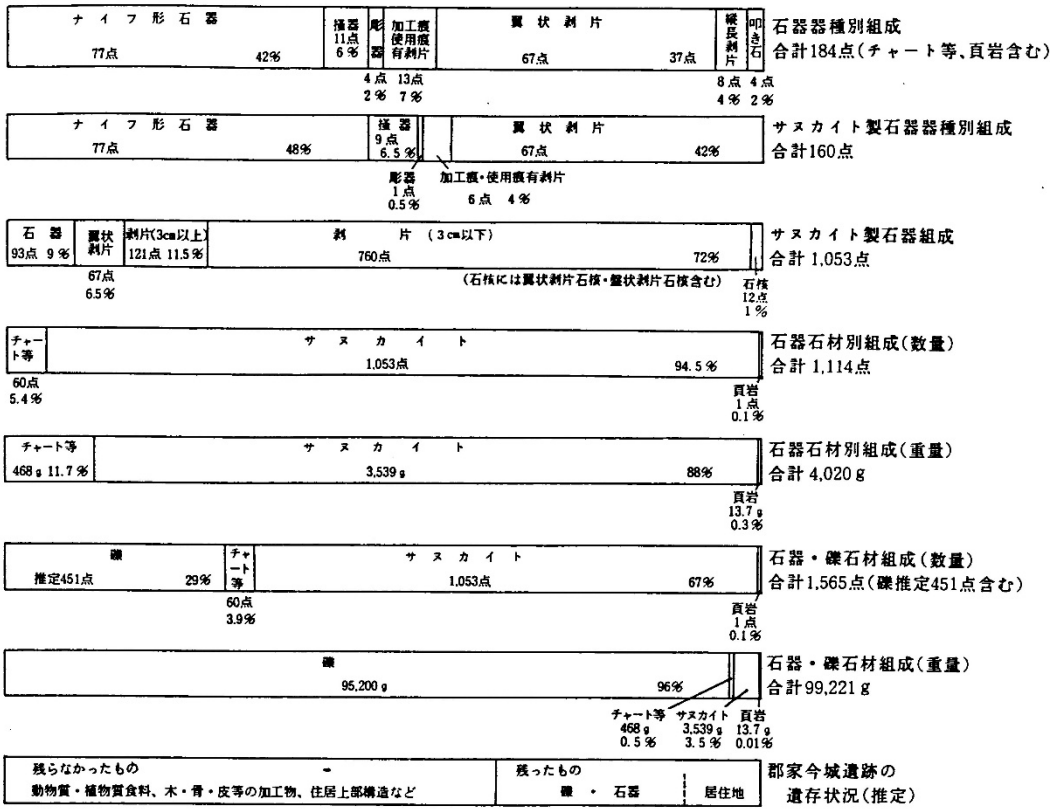


表 1　郡家今城遺跡 C 地点の石器組成表（冨成・大船 1978 から作成）

礫は、完形のものや受熱破砕したものなどは石材差と微妙な相関があるようだが、遺跡内ではチャート・砂岩・泥岩・輝緑岩・粘板岩・安山岩・花崗岩が認められている。

石材のうち、その性状によってその原産地や地帯を特定でき易いものがある。サヌカイトは最も近くでは約 40 ㎞南の二上山北麓に産出するが、郡家今城遺跡のサヌカイトのほとんどは二上山産として確定できるという（藁科・東村 1983）。頁岩は、近畿地方で良質のものの産出は知られず、北陸など他地域の所産である可能性が考えられている（麻柄 1985）。チャートは、郡家今城遺跡の後背山地が丹波山地南端であることから、遺跡周辺で多量に産出している。石器石材のうちその他のものは微量であるが、遺跡周辺で獲得された可能性は考慮される。礫は、チャート・砂岩などほとんどが石器石材には不適な石質で、後背山地からの供給により遺跡周辺の中小河川河床・氾濫原などで多量に産出するものである。

サヌカイトは二上山から持込まれた搬入石材であり、数量・重量とも定量的に圧倒的な石材である。頁岩は、異なった別の地域から持ち込まれた意義の異なる搬入石材であり、一点のみに留まる。その他は、遺跡周辺で確保された可能性の高い石材であるが、定量的には小数である。石器石材は、搬入石材と在地石材とから成っていることになるが、郡家今城遺跡立地から見れば、搬入石材が主体となっていることが理解される。一方、礫はすべて在地石材であり、

総重量約 95 kgも遺跡内で検出されている。石器石材と礫石材の量と供給源の捻れ現象は、石材の用途と嗜好、社会的・文化的・伝統的関係によって、多様な石材供給源が選択・決定されていることを予想させよう。

つぎに、石材だけに留まらず、集落として、旧石器時代人の日常的生活を維持する時に郡家今城遺跡で必要であったと考えられる資源的背景を考察したい。

郡家今城遺跡は、旧石器時代集落として一定の経済的活動領域を保持していた。

石器石材のうち支配的なサヌカイトは、日常的な領域を越えた 40 km南の二上山から搬入された。頁岩製掻器は、おそらく遥か北東の他の石器文化領域から、社会的・文化的意義を持ちつつ持ち込まれたものであろう。礫は、日常的に火処でおそらく調理に使用され、すぐ近くの小河川河床・氾濫原で獲得したものである。火処にくべられる燃料は、集落周辺の森林で確保される。建築用材としての柱なども考えられる。当然必要な食料としては、水は小河川、日常的な採集活動による植物質食料・小動物は近距離の経済領域で、計画的な狩猟活動によって獲られる中・大型動物は比較的遠距離の領域で確保される、として大過あるまい。居住可能な土地資源としての郡家今城遺跡の集落設定位置も、その場所が本来森林であった場合、放火や開墾によって確保されたのであろう。遺跡内から遺物として検出はできなかったが、その他の考慮できる物質資源には骨角器材料などがあるが、一般的には日常の狩猟活動で入手可能であろう。

以上、些か強引な単純化した分析の結果、郡家今城遺跡が旧石器時代集落として営まれる上で必須の物質資源は、そのほとんどが集落周辺の日常的経済領域で確保可能であることが明らかになった。郡家今城遺跡は、遺跡の構造が世帯単位に安定し、複数世帯からなる集落構造を示していること、その集落の領域内部で確保できる物質資源で日常的生活が維持できるということによって、まさに旧石器時代の一般的集落であるという証明を果したことになる。

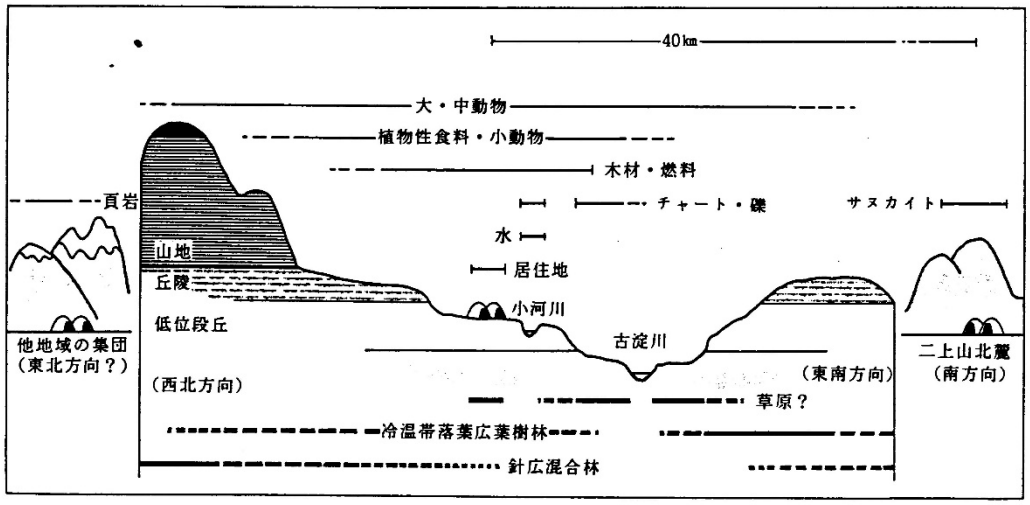


図 51　郡家今城遺跡周辺環境と物質的資源の推定

ｆ，旧石器時代瀬戸内社会と郡家今城遺跡

郡家今城遺跡Ｃ地点の石器石材は、その他の物質資源のように集落の周辺領域で確保できない点で、他の基本的資源とは異なった性格を有している。サヌカイトは約 40 ㎞南の二上山北麓から運ばれたものであり、基本的石器石材を集落にとっての搬入石材に頼っていることになる。

出土したナイフ形石器はほとんどが国府型であり、多数の翼状剥片も出土していることから、瀬戸内技法の所産である石器が多数あることが知られる。ナイフ形石器・翼状剥片には中央から破損したものが含まれ、ナイフ形石器整形作業が遺跡内で活発であったことが知られる。一方、翼状剥片を生産する瀬戸内技法第 2 工程は、国府型ナイフ形石器と翼状剥片との対応が明瞭でない 11 個の翼状剥片石核・横長剥片石核が存在するに留まり、国府型ナイフ形石器や典型的な翼状剥片との接合資料も認められないことから、剥片生産は遺跡内で活発でなかったと考えられる。石核素材の盤状剥片や盤状剥片石核もわずか 1 点ずつ存在するに留まる（松藤 1985b）。国府型ナイフ形石器や典型的な翼状剥片は、多くが遺跡内で製作されたものでなく、別の地点で製作された後に郡家今城遺跡に持ち込まれたものと考えられよう。石器石材が遠方の原石産地から供給されるだけでなく、石器製作の前半工程の大半を遺跡外で前もって展開していることになる。

前節で郡家今城遺跡が集落として成立できるのは基本的な物質資源が日常的周辺領域で獲得できるからであるとしたが、このサヌカイト製石器素材供給源の位置と製作工程の分割は安定的、独立的な集落性格とは符合するものではない。石器が日常的に使用される主要生産用具である以上、その補給が脅かされうる状況を受け入れた背景を解明する必要があろう。安定して石器製作を展開しようとするならば、40 ㎞も遠方の石材に頼るよりも在地で容易に豊富に獲得できるチャートで一貫工程が行いえるのである。郡家今城遺跡では、チャートなどのサヌカイト以外の石材が使われていることが特異なのではなく、本来、この場所で 90％を越えるほどサヌカイトが使用されたということが問題とならなければいけないのである。

近畿地方一円にサヌカイトを供給した二上山北麓には、鶴峰荘・飛鳥新池・桜丘第一地点などの原石産地内遺跡があり、活発な石器製作活動の展開が知られている（同志社大学旧石器文化談話会 74）。多くの地点で瀬戸内技法第 1 工程から第 2 工程までの剥片剥離作業が活発である。盤状剥片石核・盤状剥片・翼状剥片石核が豊富に存在することから多量の国府型ナイフ形石器や翼状剥片が生産されたであろうと推定できるが、豊富な石核類の量と製品であるナイフ形石器・翼状剥片の遺存数に数量的差異が存在すると考えられる。

筆者はこの点から、原石産地で不足するナイフ形石器と翼状剥片は翼状剥片や石核素材と共に郡家今城遺跡など遠方の瀬戸内系旧石器集落に搬出されたのでないかと私案したことがある（山口 1983）。各集落に搬入される遺物の量は、目的地集落までの距離に反比例し、物理学的法則の量＝仕事量÷距離が成り立っている可能性もあるとも指摘した。事実、より原石産地に近い国府遺跡では、はるかに質量とも豊富なサヌカイト製石器が出土している（石神 1981）。郡家今城遺跡の石材と石器製作工程の遍在が、この二上山北麓からの半製品状態を含む石材供

給と対になって完結する現象である可能性は高い。

二上山北麓から約 40 ㎞北にある郡家今城遺跡からは、サヌカイト製石器がナイフ形石器、掻器、彫器、加工痕・使用痕ある剥片、翼状剥片、縦長剥片などの定形的なもの 160 点を含み、剥片、砕片、石核などを合わせて合計 1064 点が出土している。サヌカイトの総重量は 3,539 g である。全てのサヌカイトが二上山から供給されたとして先の法則に当てはめるなら、

仕事量＝3,539 g ×40 ㎞

ということになる。約 4 kgという重量は、成人男子に特に荷の重い量ではあるまい。この場合、むしろ距離が問題となろう。郡家今城遺跡に至るまでに失われたり、遺跡内から他の場所に持ち出された量について、現状では判断できないが、石材を搬入するに要する必要時間や次の地点での活動内容に相関するであろう。さらに関数化できそうなものとして、郡家今城遺跡の居住期間と遺跡内石器出土量が正比例している可能性を考慮したい。郡家今城遺跡が、例えば春・夏・秋といった一定のシーズンを居住したものであるなら、年間に一つの集落構成集団が消費する石器を補給するためには、 4 kgの数倍、最低十数kgのサヌカイトが確保できればよいことになる。原石産地により近い領域を確保できるなら、石材消費量は先の法則の距離が減少するため仕事量が減少するか、石材消費が拡大することによって表されよう。

松藤和人氏は、二上山北麓の原石産地帯内遺跡の石器組成が必ずしも均質でなく、第 1 工程を欠く地点もあること、また郡家今城遺跡Ｃ地点で盤状剥片石核と横長剥片石核が接合することなどによって、石材供給と石器製作工程の原石産地と集落との相互補完性について疑問を呈し、原石状態での搬出もあったとされている（松藤 1985）。しかし、本稿で検討し、また先の論文で述べたように原石産地の遺跡群と郡家今城遺跡の石器組成には甚だしい偏りがあることは事実であり、郡家今城遺跡Ｃ地点のナイフ形石器と翼状剥片が原石産地で生産されたものである可能性は高いと考える。翼状剥片石核などの素材も同時に供給されたものであるが、典型的なナイフ形石器・翼状剥片と新しく遺跡内で剥離作業の行われた翼状剥片とでは対応関係が乏しい。盤状剥片石核と横長剥片石核は確かに接合するが、この第 1 工程が郡家今城遺跡内で行われたとは断定できない。原石産地帯内で剥離され、そのまま両者とも石核素材として搬出された可能性も考えられよう。このように、適当な形状の盤状剥片石核も石核素材として搬出の対象となる場合があるなら、原石産地帯内での石器組成の偏りの一つの原因となっているかも知れない。

郡家今城遺跡の石器石材の供給と製作工程の分割には、サヌカイトという石材に対する瀬戸内系旧石器社会の対応が関連している、極めて社会的な背景があると見なせるだろう。これほど高率の占有石材であるということは、南関東の黒曜石のように中間に交易集団を置くことを考慮するには困難がある理由になろう。交易といった不安定なものではなく、当事者による直接的・日常的で強力な供給システムの存在を推定させよう。集落で供給可能な石材でなく供給に不安のあるサヌカイトにもかかわらず 9 割を越えて多用するために、さきに検討したような供給システムを維持することは、単に石材に対する嗜好の範囲を越えているといえる。

サヌカイト供給システムとしては、例えば、郡家今城遺跡のような遠方の集落から小数の構

成員が原石産地まで石材獲得のために往復することも考えられるし、集落構成世帯員全員が原石産地近くまで移動する可能性も考えられる。より合理的な仮説として検討に値する集落構成世帯員全員が移動する考え方の場合、年単位での季節移動の周期に組み込まれたことを推定するなら、原石産地近くと基本的な居住のための集落を含む周回移動であろうと考えられる（栗島 87）。このような場合が推定できるなら、原石産地の限定されるサヌカイトであっても一番安定した石材供給が計れるであろう。郡家今城遺跡なら、あるシーズンには高槻の古三島平野に集落を営み、いくつかの集落を移動した後、二上山北麓近くで石材を補給することになる。

瀬戸内地域のナイフ形石器文化は、剥片剥離技術が瀬戸内技法に代表される横長剥片剥離技術伝統にあることが周知されている。瀬戸内系旧石器群は、この石器製作技術上の伝統を同じくすることによって識別される。二上山北麓や讃岐北部などのサヌカイト原石産地周辺に多数の遺跡が発見されているが、いずれの遺跡でもサヌカイトを圧倒的に多用する傾向を有している。郡家今城遺跡も、この瀬戸内系旧石器群の範中に含まれる。瀬戸内系ナイフ形石器文化の形成と発展には、サヌカイトという石材が大きく関わっている可能性が考慮できるかもしれない。遺跡の構成世帯・構成員が保持している石器製作技術は、サヌカイトを使用することと合わせ、ひとつの伝統的・技術的環境とも見なし得るものである。

高槻市の三島地方周辺には、国府型ナイフ形石器を出土する遺跡が多数知られている（冨成・大船 1976）。高槻周辺の遺跡は遺跡が集中して存在することから、一つの「核地帯」を形成するとされてきた（近藤 1976）。一定の地域にほぼ同時期の遺跡が集中する遺跡群形成の原因に、物理的環境としての食料確保や居住の容易さの確保が一体となった回帰的移動があったと、背景を考慮することも可能であろう。原石産地に一方で縛られている結果、石器石材としてサヌカイトを使用し続け、伝統的に石器製作技術として瀬戸内技法を保持していくことになる。

核地帯は、近畿地方の場合二上山の周辺、約 40 ㎞半径の範囲に位置し、二上山産サヌカイト製旧石器分布は約 100 ㎞を限界とする（藁科・東村 1983）。これら全てが二上山と集落の周回移動の関係にあったと仮定できるなら、原石産地近くで他の集落構成員と接触する可能性が高くなったに違いない。原産地からの放射状の移動経路ができよう。各集団がサヌカイト原産地周辺に移動するシーズンが限定されていたならば、集団間接触が頻繁な期間に一定の社会的・文化的機能が配置されていたという推定も、あながち困難ではない。春成秀爾氏が播磨地方で瀬戸内と山地帯内の集団間で推測する構成員の交換・婚姻といった社会システム（春成 82）を、近畿地方の旧石器社会が二上山北麓周辺で展開していた可能性すらあろう。このような背景がさらに重層してあるのなら、サヌカイトの強固な供給システムを維持していく大きな力となっていたであろう。

旧石器時代社会においての動態についての仮説の一つとして、大型動物の協同狩猟を契機とした複数集団の離合集散説（春成 1976）がある。旧石器時代社会の地域文化を同じくする集団の移動と接触には、社会的背景とともに経済的側面も考慮しなければならないが、瀬戸内系旧石器群地域では同一石材産地でのサヌカイト獲得という行為もひとつの契機となっていたのではなかろうか。

現状では、これらの社会システムの存在を実証することはほぼ不可能であろう。ただ、本稿が目的とするように、集落の周辺として重層的な環境側面をシステム的に観察していく視点が、今後ますます重要であることは明かで、仮説的・解釈的な検討をまったく排除してかかるわけにはいかないと考える。

3，集落と環境の接点

日本の後期旧石器時代人は個々の集落に依拠することにより、当時の自然環境に適応していたし、それぞれの地域で旧石器時代集落間の社会的な関係を維持することができたに違いない。旧石器時代の集落を包み込んでいる環境には、食料生産に関わる部分以外のものも含まれる。気候、地形、動物・植物相、水域環境といった自然的なものに合わせ、当時の旧石器時代の技術・文化・伝統、さらには構成員の意志といった社会的な環境も考慮に入れられるべきである。ここでは、最も一般的と考える日常の居住が行われる集落とそれを取り巻く異なった環境の接点について考えたい。

旧石器時代集落と環境の関係は、まずどの様な自然環境に集落の立地を選択するかから始まる。集落立地の選択は、地形・地質条件から水系、気候といった集落立地選択地を取り巻く背景的環境と、背景的環境に合わせ変位し最も環境を端的に表している植物相とそこに生息する動物相を、まず選択することであった。

個々の集落で行われる生業活動が食料確保戦略の最適化によって選択されるものであるなら、食料の確保がこの集落の立地選択の最大の要因であったと考えてよかろう。食料獲得の確実さが集落の安定度・定着度、集落以外の特定作業集落や地点、通過時短期集落の多寡・配置にも反映する。旧石器時代集落は、当時の自然環境に適応した狩猟と採集を主たる生業活動にしていたと一般に考えられるが、しかし、その活動内容はかならずしも明かではない。日本の土壌の性質から、旧石器時代人によって狩猟・採集された食料資源・食物残滓である動・植物遺体が、遺跡内に直接遺存することはきわめて希であり、また調査方法に対する認識、技術水準も十分に高まっていないことも、この方面の研究の少ない原因となっている。しかし、旧石器時代集落の評価に自然環境の復元は重要な部分を占めることは明かである。この自然環境と旧石器時代集落・旧石器人との接点は、彼らがそこで行ったのであろう生業活動で、これによって個々の旧石器集落が存続できたのである。直接的に考古学資料から具体的な生業活動を知りにくい旧石器時代集落遺跡を記述・報告する場合、その立地環境の地誌的知見は必要となる。現在知りうる限りの自然環境情報を検討することにより、より具体的な旧石器時代集落立地の選択のあり方が知りうるであろう。直接的に自然的環境と物質的資源を選択するという意味と合わせ、旧石器時代人が長期にわたって一つの領域に対する情報を知識として蓄積し、環境利用の効率化を計りえたことまでもが、旧石器時代研究者の視野に入れられなければならない(安斎 1986、 87）。

遺跡を、個々の集落として評価しようとした場合、生業活動の内容復元とあわせて集落とし

ての遺跡構造の把握は最も重要であろう。まず住居、調理空間・施設、作業空間、さらには墓地までを含めて集落自体が解明されねばならない。集落以外の特定作業集落や地点、通過時短期集落の実態把握も重要であろう。これらの構造の把握ができてはじめて、旧石器時代社会の集落構成員間の社会的関係が具体化して解明できるであろう。旧石器時代遺跡で、確かな住居跡などの遺構が発見される場合は希である。良好な情報の回収できた僅かな遺跡から研究は進められねばならないが、復元しようとする目標が旧石器時代の動態の一部である社会構造に属するものだけにその際の類型化は積極的に進められねばなるまい。動態である社会構造の一部を反映するに違いない集落構造は、ある程度の地域で斉一性・普遍性が感じられるが、この集落内での構成員の居住活動を律していた原理は、複数の異なった自然環境帯からなる長大な日本に関わらず、意外に普遍性のあるものであるかも知れない。積極的に遺跡の構造・遺構や生業・生活用具の内容から、生活活動を窺うことが求められる。

以上を総括するなら、月並みな結論であるが、集落周辺の自然環境に適応しようとする旧石器時代人の努力が最も鋭敏に反映されたものが生業・生活活動であり、集落構造や社会的・文化的・技術的・伝統的関係に表れるともいえる。

さて、集落で行われた活動が集落と自然環境の接点であることはすでに述べた。ここで、視点をより上位の環境に目を転じてみたい。これら旧石器時代集落で行われた種々の活動は、旧石器時代社会の保持した技術基盤を背景に行われるものである。旧石器時代に存在しない技術体系を必要とするような活動を、旧石器時代人が展開することはできないのは当然である。旧石器時代人の全ての技術は、日常の生業・生活活動の中で、次第に形成・保持されてきたものである。

その技術には、旧石器時代社会・集落・構成員の全ての段階で必要とされた活動を満たすものが含まれている。集落・特定作業集落や地点・通過時短期集落の立地決定・住居設営に要する技術、生活上の技術、生業に要する技術などがあり、道具の制作に必要な技術だけに留まらない。これらの技術は本来環境への適応手段であるので、ある一定の自然環境を共有する社会的・文化的集団によって共有されている可能性が考えられよう。ただ、全ての技術が顕在的であるわけではなく、それぞれの集落により選択的に活用される技術体系であったに違いない。旧石器時代の技術的選択の幅がそれなりに大きいものであるなら、生業技術、集落の設営に要する居住技術、生業・生活用の道具を制作する技術などは、環境に適応すべく獲得・蓄積され、継承され、また選択された技術伝統的側面が強く含まれているだろう。研究の現状では、より具体的な旧石器時代の生業・生活活動に要する技術基盤解明努力の積み重ねが要求される。

生業・生活用具には石器・骨角器・木器・皮革などが考慮される。これらの種類・器種の組成は、集落で行われた生業・生活活動を最も反映したものであろう。生業・生活用具は必要に応じて生産されるからである。旧石器時代の基本的な生業・生活用具の組成復元とそれぞれの活動の必要用具を認識することは、生業・生活活動の復元に必須であるといえる。集落の機能的側面の解明は、生業・生活用具の研究にも大きな比重がかかってこよう。

生業・生活用具の組成や種類・器種は、旧石器時代全体を通じて緩やかに改良されていった

のであろう。これらの生産には機能的改良と制作技術上の現実的制約によって技術的伝統の差異が現れ易いものとそうでないものが含まれる。素材の供給や素材自体の性状に制約が大きいほど、製作技術や用具の維持が複雑化・困難化するのは当然であり、用具制作技術伝統の特異化が進展する場合が考えられよう。石器は地域毎・集団毎で伝統的・技術的に選択される異なった性状・産地の石材を素材として生産されるものであり、木器・皮革・骨角器などと比較して、制作技術上に地域的・伝統的差異が生じ易かったにちがいない。石器以外の人工遺物に乏しい日本では、従来から特に形態的・技術的側面からのみ研究し、個々の石器群の編年的・系統的位置付けを考察してきた。この方法は、編年的・系統的位置を考察するのに結果として最も妥当な研究材料選択ではあった。しかし今後は、石器群とその製作技術のあり方をより集落の場所と環境に即して解釈を進めることが求められている。石器群を、生業・生活用具の一部と考える立場で、素材入手から石器製作過程、使用までの全ての技術を含め集落を性格付けるものとして考えなければなるまい。木・皮革・骨角といった普遍的な素材は、石器より加工が容易であり、製作技術上の差異は生じにくいものの、さらに上位の精神的・社会的表象が付加される場合が多かったとも推察できる。その製作技術には、素材加工の難易さによって規定されるのでなく、旧石器時代人自身の自発的意志・嗜好によって選択される可能性が高い。遺存する可能性は少ないが、その意義を過小評価するわけにはいかない。

自然環境は、以上のように旧石器時代集落における立地選択・生業・生活活動に強い関係を有している。生業・生活活動は自然環境によって規定され、また自然環境は集落立地によって逆に選択されているとも言える。生業・生活活動は、それを行うに要する物質的のみならず社会的・文化的な技術によっても裏付けられている。その技術基盤がなければ自然環境が適していても生業・生活活動は成り立たない。技術基盤は、社会的・文化的な環境・伝統と重なりあうものであったろう。自然環境や生業・生活活動、技術の選択といった集落構成員の意志執行は、実際には社会的・文化的環境によって伝統的に条件付けられて行われたものと私案したい。考古学的情報を残しにくい社会的・文化的環境を直接復元する手段はないが、集落立地・生業・生活活動に要する技術選択における集落構成員の意志決定から窺いうる可能性は強調され、また追求されるべきである。

以上、旧石器時代集落とそれを取り巻く環境－自然環境から社会的・文化的な環境までを含めて－の接点を考えてみた。現在直接検討可能な論点は、多々存在する障害によって僅かに留まるが、しかし旧石器時代遺跡を集落として評価しようとした場合、本来検討さるべき問題は多岐にわたる。また、それぞれの側面では他の問題と連動してもいる。それぞれの問題を個別に考えるのではなく、有機的な構造を有するものとして考えていくことが必要であろう。この中で現実に存在する障害も乗り越えることができるのではなかろうか。

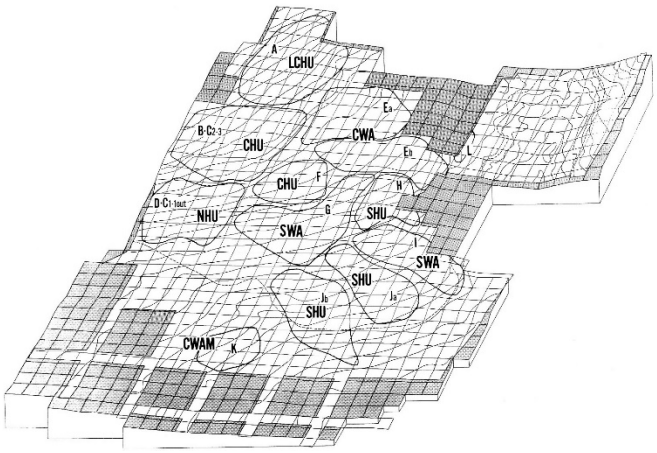
4，おわりに

本稿では、郡家今城遺跡C地点を材料として、旧石器時代の集落を取り巻く環境のいろいろ

な側面について考えてみた。集落とは何かについても、考えるところがあった。自然的な環境のみでなく、社会的・文化的・伝統的なシステムまで集落の環境に含めるという、やや大胆な考え方を提示した。本稿には依然として方法的にも、検討にも多くの問題があるし、紙幅の関係で充分検討を進めることも不可能であった。しかし、郡家今城遺跡と環境・強石器時代社会の関係について、従来の視点から欠けている部分をなんとか指摘できたものと自負している。検証・分析の不十分な問題については、機会を改めて論じてみたい。

第３章

兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の二つの石器群と古民族学的構造



下位文化層世帯ユニット配置図

第１節　板井寺ケ谷遺跡の石器群

１，板井寺ケ谷遺跡の２時期の石器群

西南日本の、特に近畿地方中央部や東部瀬戸内で、石器群が層位的に検出された事例は極めて少ない。従来、編年作業をおこなう根拠を石器群の形態差や剥片剥離技術の属性の組合せに求めてきたが、板井寺ケ谷遺跡や七日市遺跡のような良好な材料を基に、編年網の再構築が可能となると期待できよう。

兵庫県篠山市の板井寺ケ谷遺跡では、姶良Ｔｎ火山灰は厚いところでは約 20 ㎝、薄いところでは約５～３㎝の層厚で存在するが、この上下から石器群が出土し、姶良Ｔｎ火山灰上の暗灰色火山灰層中のものを上位文化層、下の黄色粘土層中のものを下位文化層とした。

板井寺ケ谷遺跡は、地形要素の境界域にあり、土層堆積環境にきわめて好運な状況を提供している。まず、姶良Ｔｎ火山灰など数枚の火山灰が調査区の全域で遺存していたこと、南半には泥炭層が発達し、放射性炭素年代測定が行えたことなどにより、遺跡内の旧石器時代相当期の土層の前後関係を確定するとともに、絶対年代を与えることができた。上位文化層の放射性炭素年代測定結果は、23,000～20,000 の間、下位文化層は約 25,000 年前と推定される。ちなみに、板井寺ケ谷遺跡での姶良Ｔｎ火山灰降灰年代の測定結果は、ほぼ 23,000 年前となった。

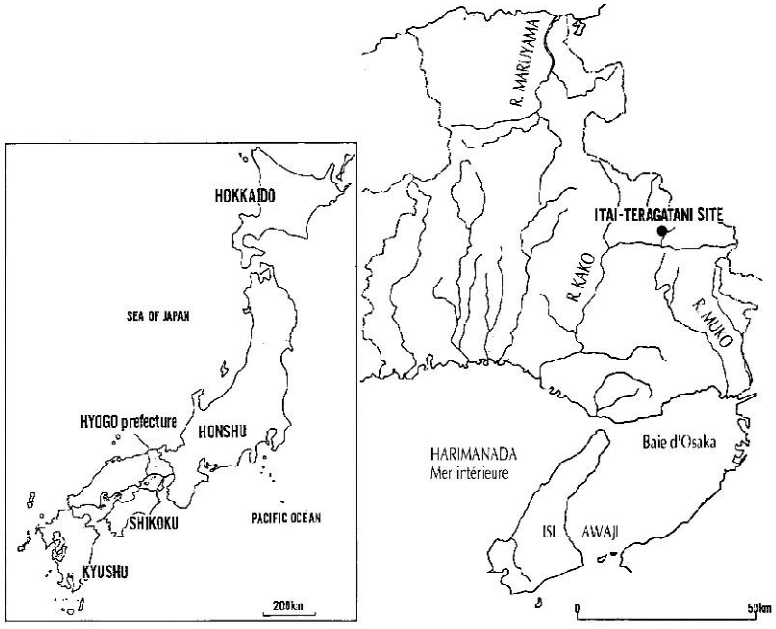


図 52　板井寺ヶ谷遺跡の位置

写真５　板井寺ケ谷遺跡下位文化層埋没地形

上位文化層は、姶良Ｔｎ火山灰の風化・土壌化の始まった部分である暗灰色火山灰層中に含まれ、姶良Ｔｎ火山灰降灰後、別の供給源からの土壌供給が始まる前に、火山灰層表面に遺された遺物が巻き込まれるように埋没したものと考えられる。上位文化層の分布範囲で、姶良Ｔｎ火山灰純粋層と暗灰色火山灰層の両方を合わせて本来の姶良Ｔｎ火山灰降灰厚である層厚約20㎝となる。このような状況は、姶良Ｔｎ火山灰降灰後そう時間をおかない時期を想定する根拠となった。

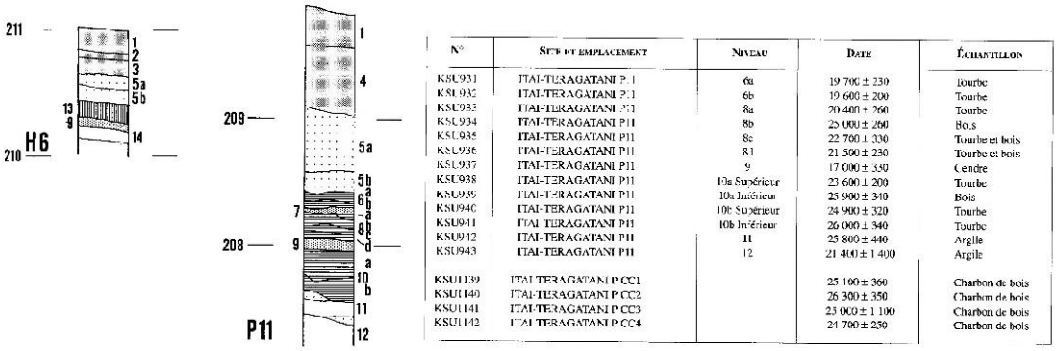
下位文化層は、姶良Ｔｎ火山灰下の、灰色粘土上部が風化した黄色粘土層中に包含され、また泥炭Ⅲと灰色粘土の層理面上にもあることから、姶良Ｔｎ火山灰降灰よりもかなり以前であることが知れ、この時間内で黄色粘土層中に埋没したものと考えられた。

両文化層の分離は、間に約５㎝前後の姶良Ｔｎ火山灰純粋層があることが確実な判断基準となった。層質が暗灰色火山灰層・姶良Ｔｎ火山灰層と黄色粘土層では、土質が異なり、両文化層の分離は発掘時に行い得る。

ところが、上位文化層中には、特にチャート等製石器類中に多数の下位文化層と同一個体のものが認められ、下位文化層からの浮き上がりがあることが知れた。この浮き上がり現象は、黄色粘土上に遺された下位文化層の遺物のうち、埋没せずに露頭していた一部が、姶良Ｔｎ火山灰降灰時に火山灰層中に巻き込まれたものと考えられた。逆に、土質の関係から上位文化層のものが下位文化層に沈下する現象は認めにくい。個体識別作業を行なった結果、チャート等製のものを中心に、上層に紛れた下位文化層所属の石器類をかなり捕捉できたので、これらは上位文化層の石器類組成から排除する事ができたが、個体識別の困難なサヌカイト製のものについては、問題を残している。

分析資料の取扱は、原位置を保って出土した資料をＡ資料、上層に遊離した資料をＢ資料、表採品をＣ資料とし、それぞれの信頼性に鑑みて、分析を進めた。下位文化層の分布論的検討にはＡ資料のみを、石器の技術論的検討にはＡ・Ｂ資料に層位の明確なＣ資料を併せて、分析

対象とした。上位文化層の分布論的検討は、下層からの浮き上がりを排除した残りのＡ資料のみを、石器の技術論的検討はＡ資料と層位の明かなＣ資料を併せて、分析対象とした。



N°	Site et emplacement	Niveau	Date	Échantillon
KSU931	ITAI-TERAGATANI P. 1	6a	19 700 ± 230	Tourbe
KSU932	ITAI-TERAGATANI P.1	6b	19 600 ± 200	Tourbe
KSU933	ITAI-TERAGATANI P.1	8a	20 400 ± 260	Tourbe
KSU934	ITAI-TERAGATANI P11	8b	25 000 ± 260	Bois
KSU935	ITAI-TERAGATANI P11	8c	22 700 ± 330	Tourbe et bois
KSU936	ITAI-TERAGATANI P11	8d	21 500 ± 230	Tourbe et bois
KSU937	ITAI-TERAGATANI P11	9	17 000 ± 330	Cendre
KSU938	ITAI-TERAGATANI P11	10a Supérieur	23 600 ± 200	Tourbe
KSU939	ITAI-TERAGATANI P11	10a Inférieur	25 900 ± 340	Bois
KSU940	ITAI-TERAGATANI P11	10b Supérieur	24 900 ± 320	Tourbe
KSU941	ITAI-TERAGATANI P11	10b Inférieur	26 000 ± 340	Tourbe
KSU942	ITAI-TERAGATANI P11	11	25 800 ± 440	Argile
KSU943	ITAI-TERAGATANI P11	12	21 400 ± 1 400	Argile
KSU1139	ITAI-TERAGATANI P.CC1		25 160 ± 360	Charbon de bois
KSU1140	ITAI-TERAGATANI P.CC2		26 300 ± 350	Charbon de bois
KSU1141	ITAI-TERAGATANI P.CC3		23 000 ± 1 100	Charbon de bois
KSU1142	ITAI-TERAGATANI P.CC4		24 760 ± 230	Charbon de bois

図 53　基本層序と放射性炭素年代

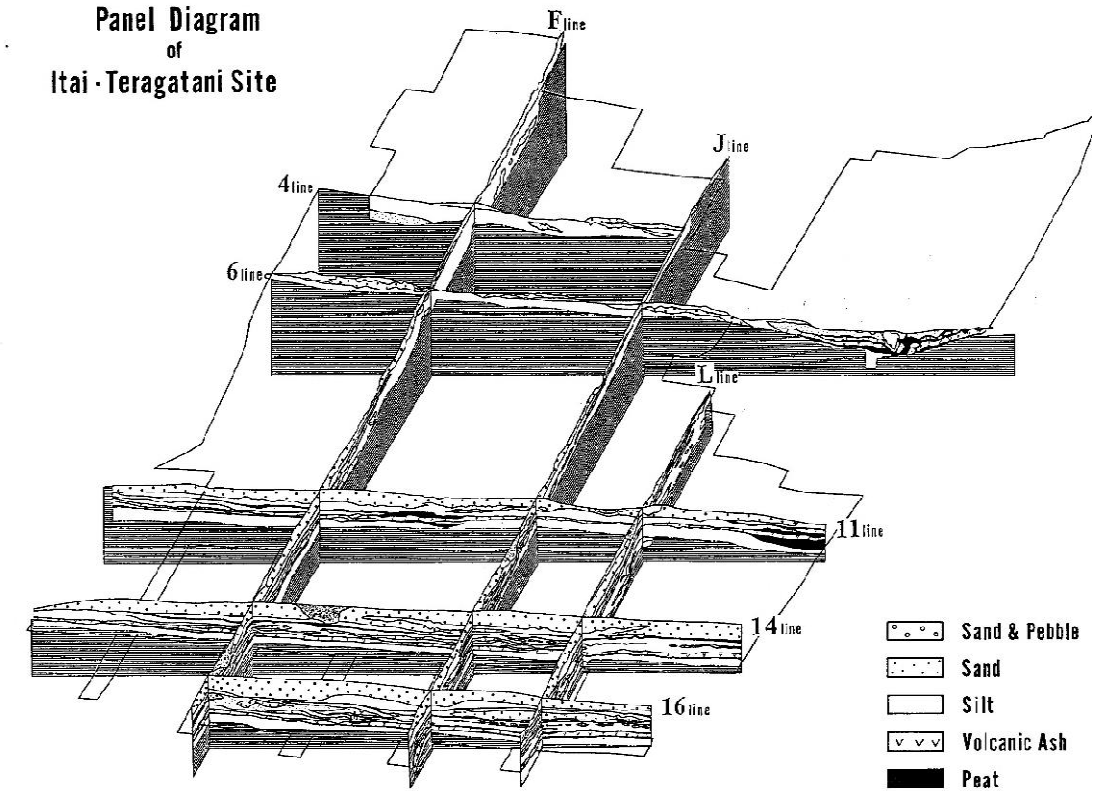


図 54　土層ダイアグラム

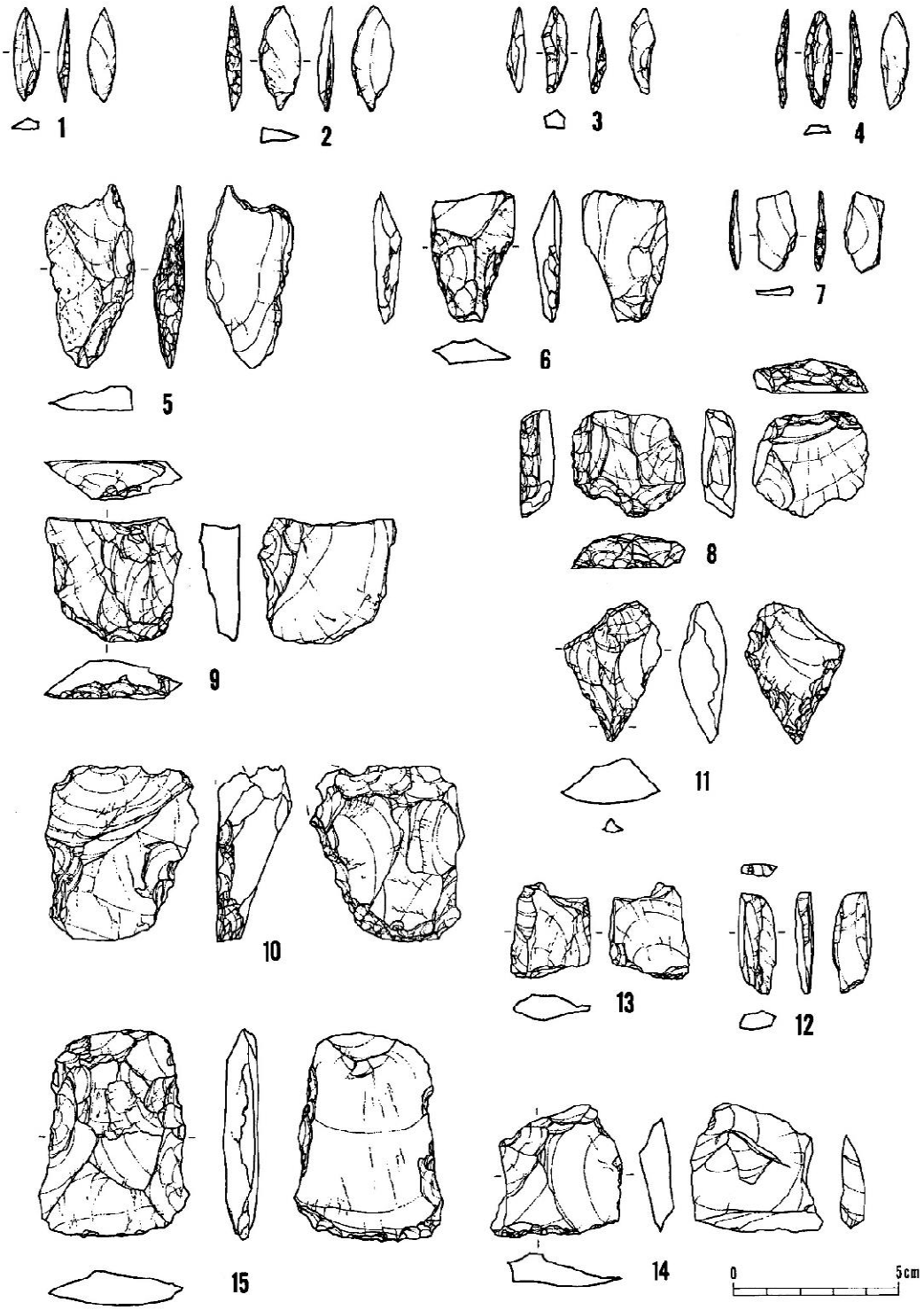


図 55　下位文化層の石器　サヌカイト　1

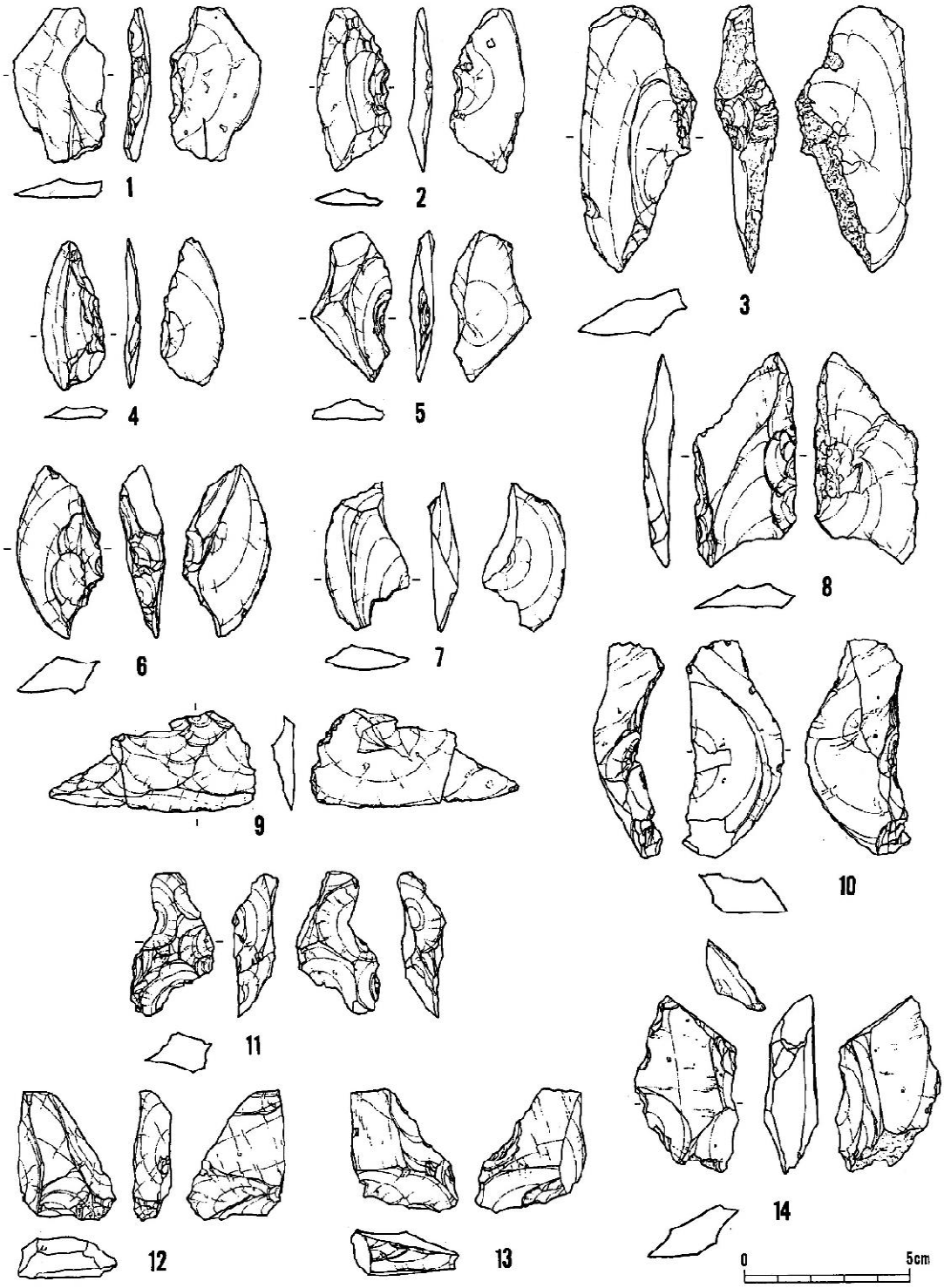


図 56　下位文化層の石器　サヌカイト　2

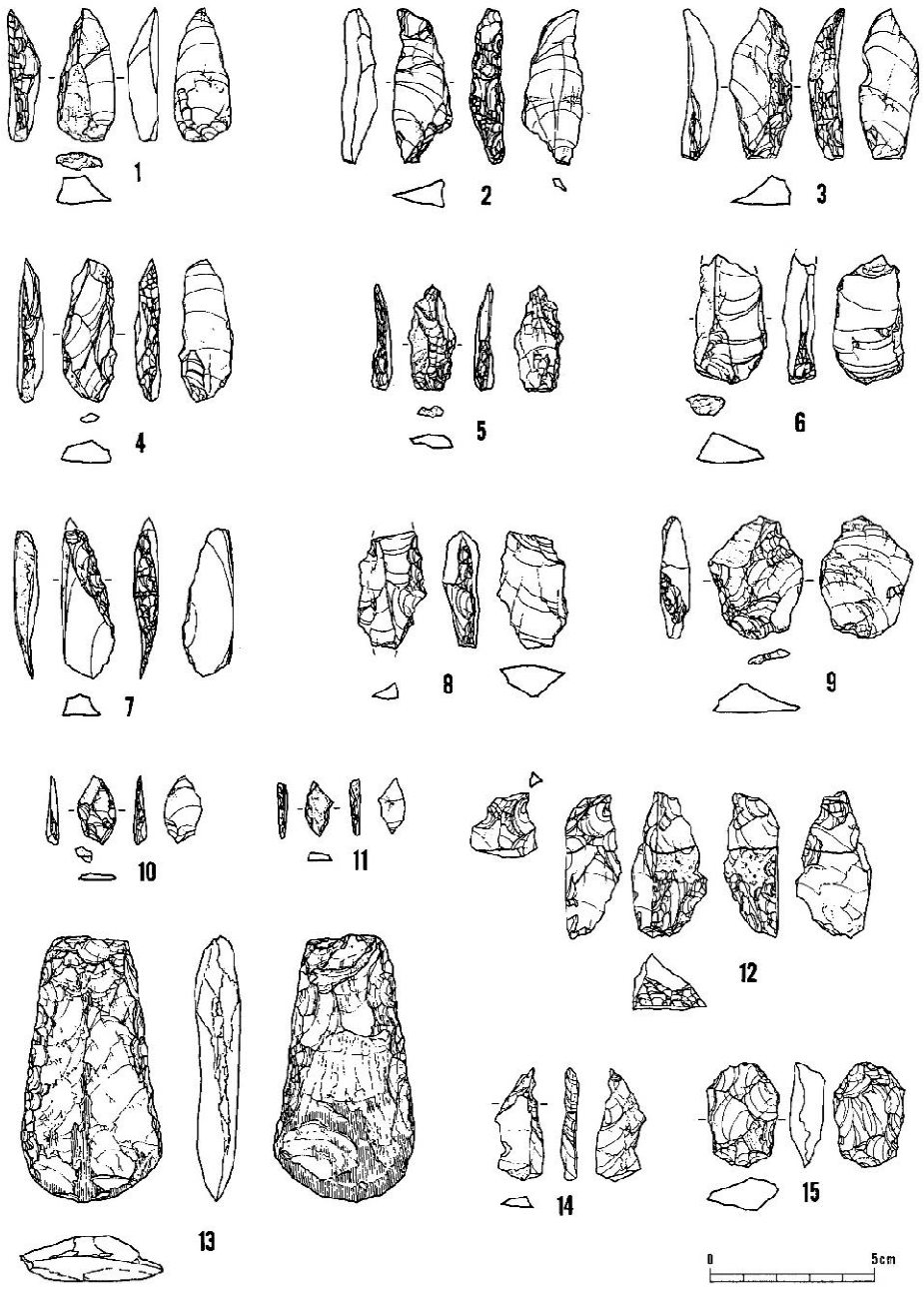


図 57　下位文化層の石器　チャート等　1

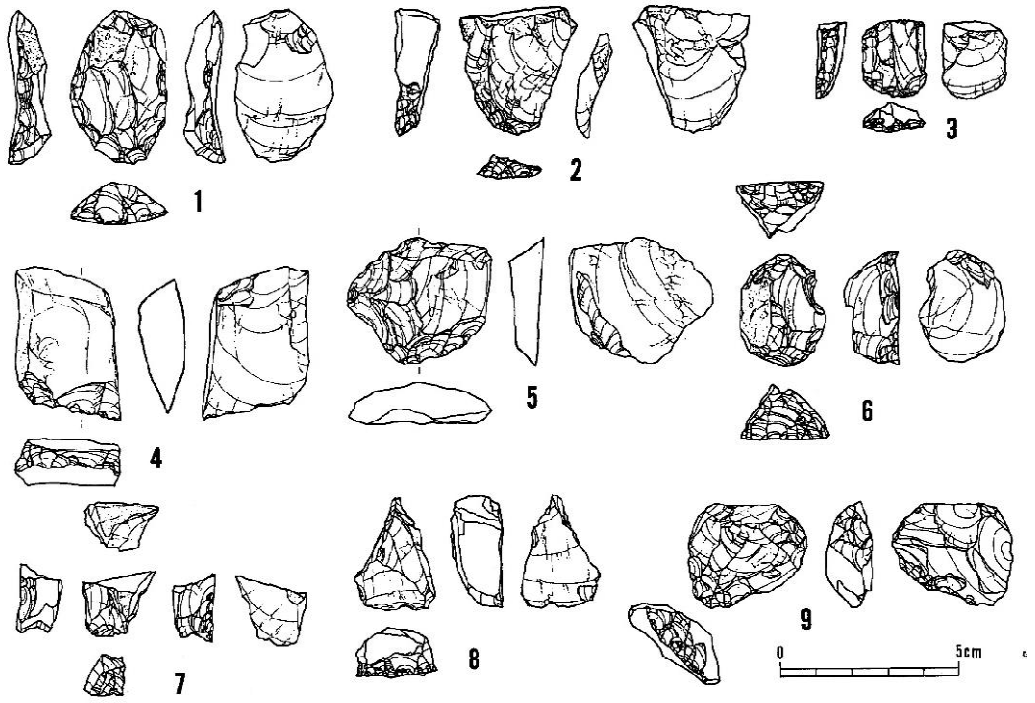


図 58　下位文化層の石器　チャート等　2

２、下位文化層の石器群

a，石器群の組成

下位文化層の石器群の組成は、原位置を保ったものの総点数で 2353 点におよぶ。ナイフ形石器・掻器・削器・楔形石器・錐状石器・彫器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・斧形石器・局部磨製石斧・礫器・敲石・磨石・台石・剥片・砕片・石核・石核素材・原石破砕片がある。これらは、大まかに定型石器と加工痕・使用痕有剥片、剥片剥離作業・石器調整作業における付随生産物、礫石器類に区別することができる。

定型石器類のなかで数量的に多いのは削器であり、ナイフ形石器と掻器がこれに続く。その他の定型石器の点数は、数点ずつ組成されるに留まる。加工痕有剥片は、石器を技術形態学的に分類する際に、素材の形状や加工の度合、加工部位などに曖昧・不十分な点があり、いずれとも決せなかったものが一括して含まれる。使用痕有剥片は、定型石器と加工痕・使用痕有剥片を合わせた点数のほぼ半数を占める。ナイフ形石器や削器・加工痕有剥片等の中に含まれた台形様石器とも比定できる一群は、形態的にも技術的にも斉一性が乏しいため、分離して一器種とはしなかったが、本石器群の位置づけのためには、重要な側面を代表している。付随生産物である剥片・砕片と石核は、全石器類の約 82%を占める。礫器・敲石・磨石、台石といった礫石器類は、礫器と敲石が数点ずつ組成され、磨石と台石は僅かである。

剥片石器類の素材として、チャートとサヌカイトが主体を占め、僅かに鉄石英・頁岩・流紋岩・凝灰岩・砂岩がある。サヌカイトは、丹波山地中にある板井寺ケ谷遺跡周辺に産出地が知

られていない。チャートや他の石材は、基本的に堆積岩が多く、板井寺ケ谷遺跡周辺の河床や中・古生層の露頭岩脈で認められるものである。遠距離からもたらされたサヌカイト材と、在地のチャート等材からなっていることが知れた。

剥片石器類の個別器種の観察を進めるなかで、個々の器種に含まれたサヌカイト製のものとチャート等製のものの間に、ほぼ全器種に渡って技術形態学的に差異があることが看取された。サヌカイト製定型石器や剥片が横長剥片を主体とし、チャート等製定型石器や剥片などが縦長剥片に主体があることなどは、下位文化層が、技術的背景を分けた異なった石材による2つの石器群で構成されるのではないかということを、強く示唆した。

サヌカイト製石器群の組成は、ナイフ形石器・掻器・削器・楔形石器・錐状石器・彫器・斧形石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・剥片・砕片・石核がある。

サヌカイト製ナイフ形石器は、小型・極小型のものと中型のものに区別できる。国府型としての属性を完備したナイフ形石器はない。掻器は、いずれも調査区北半で出土し、やや異質な器種となっている。削器は、定型石器のなかで最大点数を誇る。斧形石器は、形態的にも特異な存在である。加工痕有剥片・使用痕有剥片は、横長剥片素材のものが主体であるが、この中の大型のものは、ナイフ形石器や定型石器よりも明らかに大型の石核から剥離されたものを素材としている。加工痕有剥片中の台形様石器とも見える石器は、技術形態学的に斉一性に乏しい。使用痕有剥片は、サヌカイト製石器のほぼ55%を占める。

チャート等製石器群の組成は、ナイフ形石器・掻器・削器・楔形石器・錐状石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片と剥片・砕片・石核・石核素材、さらに礫石器分類に含めた局部磨製石斧が挙げられよう。

TOTAL DES OUTILS	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	CH	EG-AX	HS	PS	AN	F	C	NUCLÉUS	R.C	DEB
2 353	376	24	19	58	6	4	1	1	66	185	5	1	4	1	1	1 376	412	160	4	25
%	16,0	1,0	.8	2.5	.3	.2	0	0	2.8	7.9	.2	0	.2	0	0	58.5	17.5	6.8	.2	1.1

表2　下位文化層の石器組成

チャート等製石器群のナイフ形石器は、縦長剥片素材の中型のものが主体である。掻器と削器は、点数的にナイフ形石器を上回る。その他の定型石器は、僅かな組成に留まる。使用痕有剥片は、チャート等製石器のほぼ47%を占める。

両石器群は、量的に一部アンバランスさはあるものの、いずれも後期旧石器時代の普遍的な石器を網羅した組成を有したものとなっている。技術形態学的な差異は大きいものの、機能的な石器組成自体には共通点は多い。掻器・削器の組成上の卓越は、両石器群に認められる現象である。この相違点と類似点の共存という現象に対する背景が検討されねばならないだろう。

ｂ，剥片剥離技術

下位文化層の石器・剥片・砕片・石核と接合資料・個体別資料の分析から明らかにされた剥片剥離技術は、大きく２つに分けることができる。一つは横長剥片を目的とした剥離技術であり、サヌカイト製石器群に認められた。もう一つは縦長または不定形・貝殻状剥片を目的とした剥離技術で、チャート製石器群を主体とし、サヌカイト製石器群の一部にも認められた。

接合資料・個体別資料の観察から復元された剥片剥離技術の工程を、再度順を追って説明しておく。

サヌカイト製接合資料によって把握された横長剥片剥離技術は以下のようになる。まず、石核素材となった大型剥片の剥離作業が行なわれた接合資料・石核が存在しないので、この第１段階の工程の内容は不明であるが、大型剥片を石核素材とする。素材剥片の側縁に剥離作業面を配するが、多くは素材剥片打面部に主剥離作業面を選択し、さらに剥離作業面上を左右、表裏逆転するもの、石核の側縁や末端にも剥離作業面を配するものがある。打面調整は希であるが、打面縁の調整は散見される。確認された接合資料中の目的剥片は総じて小型で、ナイフ形石器の小型・極小型に対応する。

サヌカイト製石器群の横長剥片剥離技術は、石核素材の生産工程Ｓ４類の内容が不明であるなど、全てが明らかなわけではないが、以後の工程の進行の仕方、技術的属性の組合せからみて、瀬戸内系旧石器に特有の「瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統」の範疇にあることは明かである。従来知られている剥片剥離技術の対比を考えると、瀬戸内技法の範疇に含められる属性の組合せをみせるＳ１ａ類、いわゆる「檜石島技法」と同様の技術的属性をみせるＳ１ｃ類、「殿山技法」類似のものまで、多様な横長剥片剥離技術が認められる。

サヌカイト製石器群の縦長剥片剥離技術Ｓ２類は、接合資料が断片的で、また石核も未検出であることなどから、工程すべてを追えるほど内容が明かではない。サヌカイト円礫を母岩として、一つの打面から打面や石核側面の顕著な調整は施さず、縦長剥片を剥離するもので、打面の更新がしばしば行なわれるもののようであるが、細部は不明である。

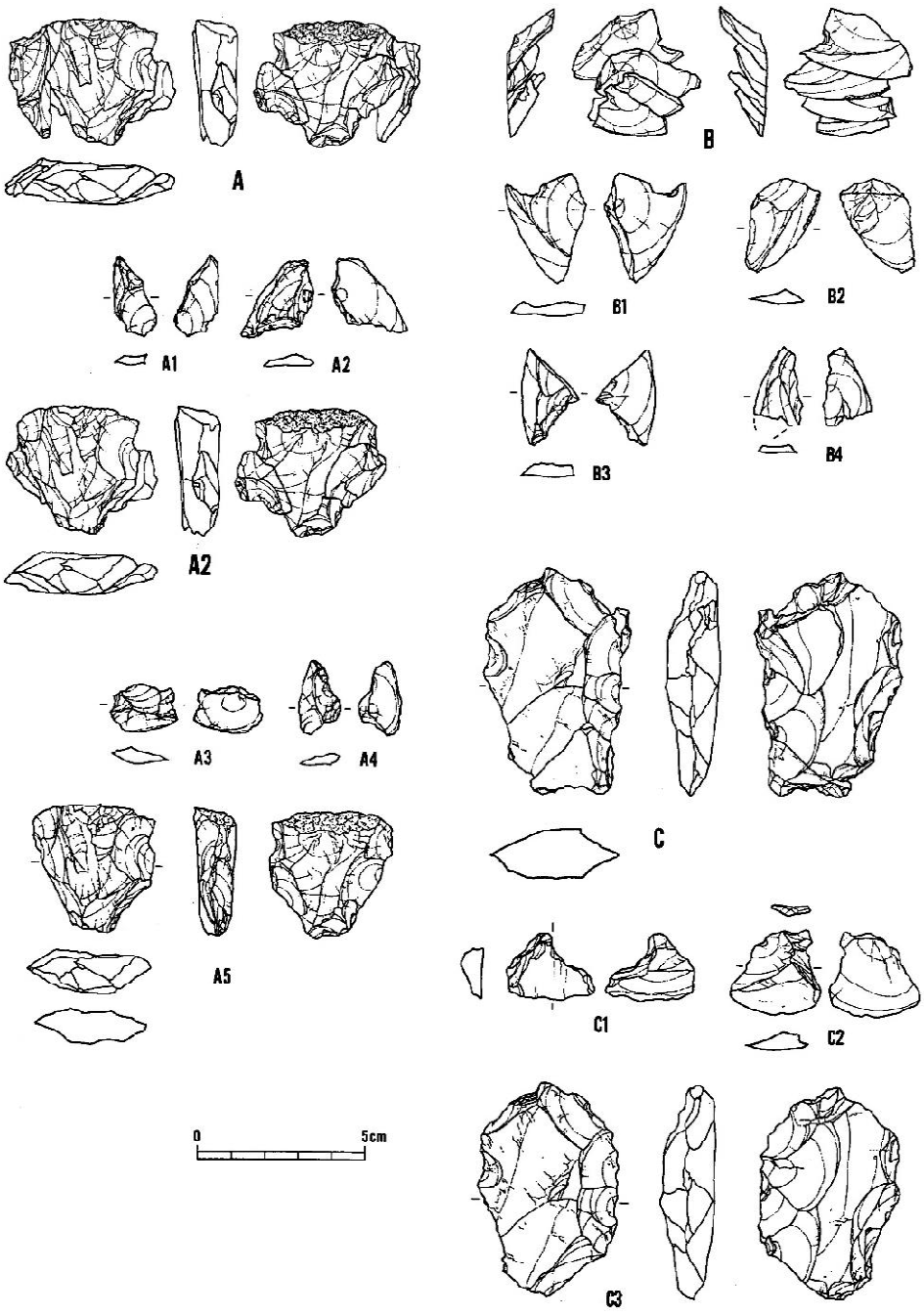


図 59　下位文化層の石器　サヌカイト接合資料

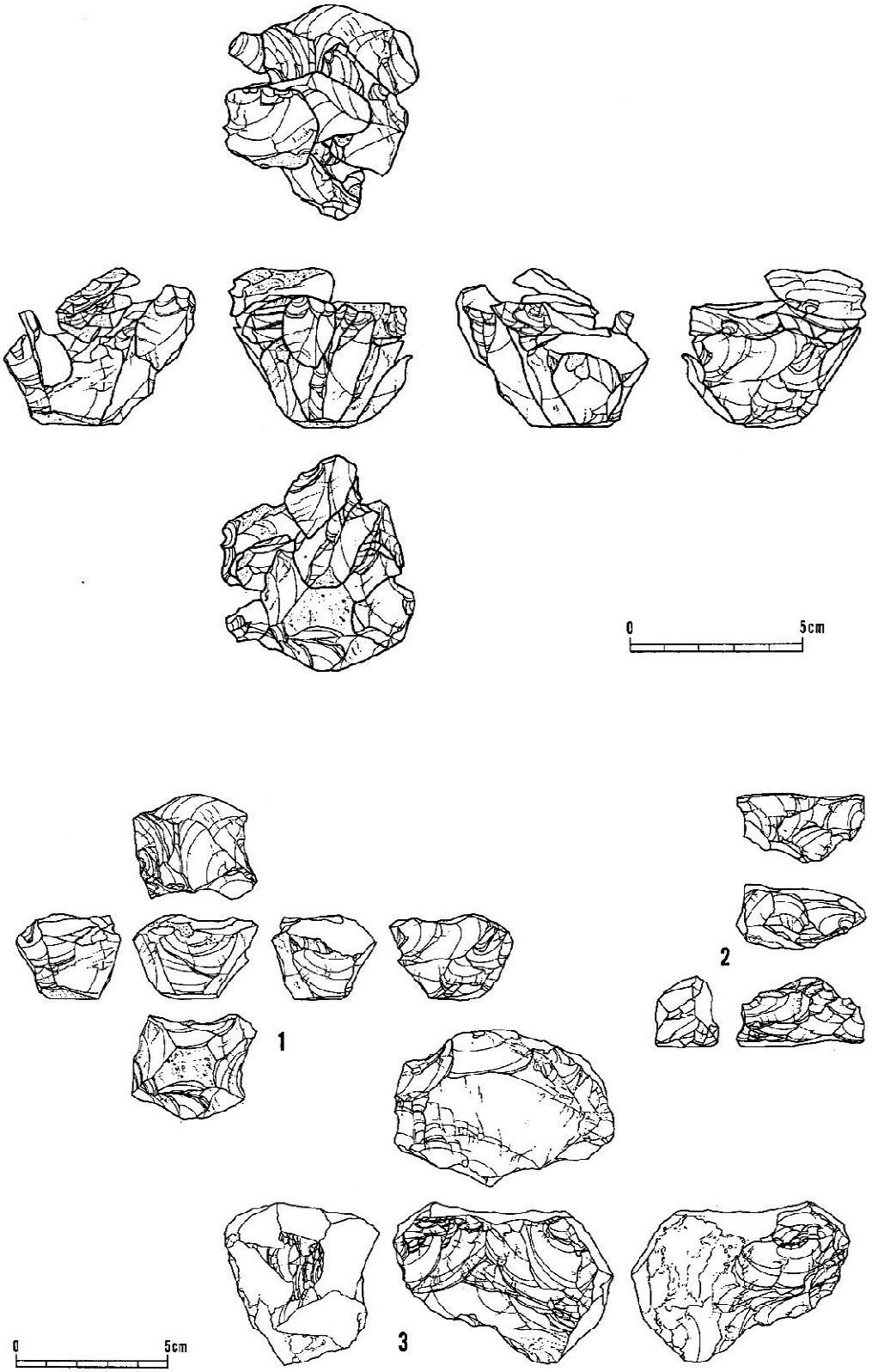


図 60　下位文化層の石器　チャート接合資料

チャート等製接合資料によって把握された縦長・不定形剥片剥離技術は、以下のようにまとめることができる。直径５～20㎝の亜角礫または板状材か、その塊状の分割材を保ったものを石核素材とする。打面の意図的な作出は最初の１面に限られ、その後は打面と剥離作業面の機能的区別が不鮮明なままである。また打面調整・石核側面調整などもほとんど認められない。剥片剥離は、石核の作業面高が、目的剥片剥離に十分な間は同一打面を後退しつつ進行するが、打面転移が行なわれる場合、転移の法則性は認められない。一般に、チャート等製石器群の剥片剥離技術Ｃ１～Ｃ３類は、個別の剥片剥離技術と考えるより、個々の段階での技術に共通性が多く、一連の剥片生産の、個々の様相と考えた方がよい。生産される目的剥片は、不定形剥片が多く、縦長剥片も含まれる。ナイフ形石器には縦長剥片が選択的に採用されており、目的別の剥片剥離が行なわれているといえるかも知れないが、剥片剥離技術が明瞭に分離できるほどの技術属性を顕在化させるには至っていない。

注目すべきは、横長剥片を目的とした剥離技術と縦長・不定形剥片を目的とした剥片剥離技術の２つの剥片剥離技術が、サヌカイトとチャート等という２つの石材によって分離された石器群にそれぞれ対応し、中間的な技術が幾らか両者に認められるものの、横長剥片剥離技術がサヌカイト製石器群に、縦長剥片剥離技術がチャート等製石器群に主として認められたことである。両石器群には、石器類の形態記述で問題にされたように、石材と技術形態学的特徴、剥片剥離技術が密接に関連していると考えられた。

ｃ，下位文化層の２つの石器群

サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の両者には、石材・剥片剥離技術・石器形態などの各段階で大きく相違し、構造的に区別できる。ここで問題となるのは、両者の関係であろう。この２つの石器群が板井寺ケ谷遺跡下位文化層で認められたことは、どの様に考えることができるであろうか。具体的には、両石器群を保持したものが、何者であったかという問題として検討しなければならないだろう。

２つの石器群は、石器類総数で４対６、石器総数では１対１と数量的には拮抗する。また、定型的石器は両石器群に共通のものがほとんどで、石材によって特定の器種を作り分けたと見られるような現象は顕著ではない。いずれも剥片剥離作業の展開があり、どちらかが従の存在として、搬入品としての位置に甘んじていると考えることもできないだろう。

ナイフ形石器と剥片剥離技術の技術形態学的属性によって、サヌカイト製石器群が瀬戸内地域東部・近畿地方中央部にある瀬戸内系石器群と、チャート等製石器群が中国山地にある石器群と共通する特徴が明らかとなったことなど、石器類の技術形態学的な相違と剥片剥離技術の隔絶と合わさった石器群の構造的な違いは明瞭であろう。このような状況は、両石器群の保持が個別の集団によって行なわれたと考えるに十分な根拠となっていると思案する。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の石器群は、石材という基準によって大きく２群に分けることができ、サヌカイト製石器群とチャート等製石器群の２つは、異なった集団によって保持された独立した構造の２つの石器群、を示すと考えられるのである。

ｄ，石器生産技術体系と石材

サヌカイト製石器群とチャート等製石器群には、遺跡内での石器生産工程の遺存状況に大きな差異があることが知れた。

サヌカイト製石器群は、遺跡内で展開した横長剥片剥離技術は、その石器素材剥片をすべて供給するに足るものではなく、小型・極小型の横長剥片を主に剥離した気配が濃厚で、対応する定型石器は、小型・極小型のナイフ形石器があるに留まる。大型・中型の横長剥片は、遺跡外からの搬入である可能性が高い。石器の整形作業も、必ずしも活発ではないようで、石器の状態でかなりの量の搬入があったことを示唆する。遺跡内で横長剥片石核の素材である大型剥片を原石から生産する第１段階の工程が存在しないことを併せて考えると、下位文化層のサヌカイト製石器群の剥片剥離作業の前半段階の作業と剥片生産のかなりの部分は、別の地点で行なわれていると考えられた。下位文化層への石材供給は、石器と既に剥離された大・中型剥片、小型・極小剥片剥離のための横長剥片石核・同素材の状態で行なわれ、大・中型剥片剥離のための石核や同素材、石核素材剥片剥離のための石核（盤状剥片石核）・原石は認められなかった。工程の前半がないことに併せて、サヌカイト製石器群においては、新たに作られる石器や剥片剥離を開始する石核の数よりも、遺棄される石器の数と剥片剥離の終了する石核の数が多く、本来保持している石器群の消費が進行しても十分には補充されない、いわば縮小再生産状態といい得る状況を示していることも明かとなった。

チャート等製石器群は、遺跡内で活発な剥片剥離作業が行なわれ、ほぼ全ての石器素材を供給するに足る剥片生産が行なわれている。規格性には欠けるものの、多様な剥片が供給されており、ナイフ形石器・掻器・削器などの定型石器の素材が確保されている。原石から剥片剥離作業・石器整形段階まで、一貫した作業が行なわれている。発掘調査範囲ではそれを証明するに足る、ほぼ全ての工程の資料が残されている。チャート等製石器群においては、石器の生産と消費・剥片生産作業の進行にともなう石材の消費に見合う、十分な個体の補充と石器の生産が行なわれ、総量の維持が計られている。

この二つの石器群には、石材と石器群の技術形態学的特徴、剥片剥離技術の構造的相違に合わせて、剥片剥離作業の遺跡内完結度、石器群の保持の仕方にも大きな差があることが判明した。サヌカイト製石器群の石器製作作業の地点間分業は、地点毎の石器群の様相が大きく相違する場合が有り得ることを示唆している。この違いは、編年や石器群の技術的背景のみの検討からは説明できない相違であると考えられる。

両者の背景には、サヌカイトが原石産地から遠くはなれた石材であり、チャート等が在地の入手容易な石材であることが反映しているが、先に考察したように両石器群を保持したのが異なった集団であると考えた場合、さらにその意味を考えておく必要があるであろう。ただ単に、石器群の技術形態学的属性を抽出し、その石器群の指標として従来の編年や技術系統との比較の根拠とするのは、遺跡のおかれている状況から切り放した議論を行なうことになりかねないのである。

ｅ，下位文化層の編年的・系統的位置

下位文化層は、泥炭層と炭化物密集箇所の放射性炭素年代測定結果が、ほぼ 25.000 年を前後したことから、一応 BP25.000 年前後の絶対年代を推定して良さそうである。姶良Ｔｎ火山灰上の泥炭層の測定値を根拠として、姶良Ｔｎ火山灰の板井寺ケ谷遺跡での推定年代は 23.000 年前後ということになるが、この結果は、板井寺ケ谷遺跡周辺での放射性炭素年代測定結果（松本、）とほとんど差はない。下位文化層が残されて、姶良Ｔｎ火山灰降灰まで、2.000 年程の時間差があったことになる。

板井寺ケ谷遺跡で、文化層２枚の前後関係、放射性炭素による絶対年代が付与できた事実は、西南日本での旧石器編年作業に大きな足がかりを与えるものである。特に、下位文化層のサヌカイト製石器群とチャート等製石器群の両者は、考古学的に同時存在と考えられ、瀬戸内系・中国山地系の２つの異系統石器群の並行関係を明らかにしたことは重要である。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群と関係を考慮すべき瀬戸内地域東部・近畿地方中央部の瀬戸内系の石器群は、層位的出土例に恵まれず、従来、その技術形態学的特徴を根拠とした編年が行なわれていた。ナイフ形石器の形態と素材剥片の剥離技術の属性変化を、時間的変遷の根拠としてきたのである。ところが近年、瀬戸内・近畿地方周辺、北陸・九州といった地域での層位的出土例の増加が進み、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を最古と考える従来の編年観にそぐわない事例が相次いで見出されている。板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群も、その１つの例である。まず、サヌカイト製石器群の編年的位置について検討しよう。

瀬戸内系旧石器を出土した遺跡で、下位文化層と層位的に対比できる条件を備えた遺跡は多くない。近畿地方では、奈良県桜丘遺跡第１地点（松藤・佐藤他 1983）の第Ⅲ層が姶良Ｔｎ火山灰下の層準であるとされ、翼状剥片・同石核などを出土させ、広島県冠遺跡群Ｄ地点（妹尾他 1989）では、サヌカイト原石産地近傍で姶良Ｔｎ火山灰層下からサヌカイト製石器群が出土し、台形様石器・錐状石器・掻器・削器、横長剥片などが出土し、郡家今城遺跡Ｃ地点の国府型ナイフ形石器を組成する石器群が姶良Ｔｎ火山灰以前である可能性が示唆されているに留まる。いずれも、遺跡間での相対年代、絶対年代とも明かではなく、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の遺跡の前後関係は不明であるので、板井寺ケ谷遺跡との比較も従来と同様の方法に頼らざるをえない。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群は、国府型ナイフ形石器が組成せず、瀬戸内技法の存在に関しても、翼状剥片や翼状剥片石核が認められるものの、瀬戸内地方東部・近畿地方中央部で典型的とされるようなものの存在は明確ではない。近畿地方中央部で国府型ナイフ形石器を出土させた２遺跡とは石器群の内容が異なっていることは明かである。この違いを、通常行なわれてきたように時期差として考慮するならば、国府型ナイフ形石器の盛期が姶良Ｔｎ火山灰降灰以後にあることから、下位文化層のサヌカイト製石器群が近畿地方中央部での２遺跡に先行すると推測できる。この場合、板井寺ケ谷遺跡の小型・極小型のナイフ形石

器・櫃石島技法の属性を備える剥片剥離技術などが国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法に先行すると考えることとなる。

下位文化層のナイフ形石器と石器類を観察して気付かれたのは、ナイフ形石器の素材剥片の形状と搬入品である中・大型剥片の差である。多量の剥片が搬入されているのに、それらがナイフ形石器に加工されず、遺跡内で剥離された可能性の高い小型・極小型剥片を主に加工するという点は、より制約がなく行なわれたであろう原石産地周辺の地点での横長剥片剥離技術がナイフ形石器の製作と結びついていないことを示すのではないか、という危惧を与える。国府型ナイフ形石器の成立は、規則的な段階を踏んでいく瀬戸内技法による翼状剥片をナイフ形石器に加工することによって成立し、翼状剥片が他器種の素材となることは希であるが、板井寺ケ谷遺跡の状況では、ナイフ形石器と横長剥片との結びつきが強固ではない。横長剥片剥離技術は、横長の「刃器」を生産することに主眼があったようである。このようなナイフ形石器と剥片剥離技術の様相は、瀬戸内系ナイフ形石器文化発生期の様相として理解できるかも知れないが、瀬戸内系旧石器本来の分布域で同様の石器群が発見されるのを待って判断すべきであろう。現時点での資料検討のみで、下位文化層並行期に、瀬戸内系旧石器分布域中央で国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が存在しないとは断言できない。

冠遺跡群Ｄ地点の石器群は、台形様石器がありながらナイフ形石器を欠くことに特徴がある。台形様石器の位置づけについては、佐藤の指摘があるように、後期旧石器の代表的な主導的生産用具であるナイフ形石器と機能互換性がある器種であり、次第に置き換えられていった可能性の高い器種であったと考える。板井寺ケ谷遺跡では、台形様石器とも見なせる削器・加工痕有剥片がナイフ形石器と共存し、その調整技術に折断と平坦剥離調整が認められる点は、佐藤の台形様石器の型式変遷観に照らすと、台形様石器終末的様相として位置づけられる。ナイフ形石器の有無、その様相などを根拠として、前後関係を与えるなら、冠遺跡群Ｄ地点が板井寺ケ谷遺跡に先行すると考えられるであろう。

冠遺跡群Ｄ地点での台形様石器の素材剥片は、かならず底面を付着させるような横長剥片剥離技術によるものとは考えられない。塊状の石核から剥離した不定形な剥片の側縁に折断加工を施して大まかな器形整形を行い、平坦剥離で器厚を調整したと考えられるものがある。瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統の中にあるかは、疑問がある。板井寺ケ谷遺跡では、台形様石器の素材剥片が不定形剥片と共に横長剥片製のものも認められることから、素材剥片の選択の幅は一般のナイフ形石器と素材剥片剥離技術との関係のようなものは存在せず、一部瀬戸内系位横長剥片剥離技術伝統に依存していると見られる。この点は、板井寺ケ谷遺跡のサヌカイト製小型・極小型ナイフ形石器と中・大型横長剥片の剥離技術との関係と機を一にする。板井寺ケ谷遺跡でのナイフ形石器と台形様石器と見なせる石器の共存は、その主客が逆転し、次第にナイフ形石器主体に変化しつつある移行期の石器群の様相を示すと考えることもできる。初期に曖昧であったナイフ形石器と横長剥片剥離技術の対応は、ナイフ形石器主体に移行するなかで完成されたのかもしれない。

定型石器として板井寺ケ谷遺跡で組成した掻器と削器・錐状石器等は、従来の瀬戸内系石器

群には希な器種である。近畿地方中央部での姶良Ｔｎ火山灰前後の遺跡に組成される量は少ない。郡家今城遺跡Ｃ地点では、サヌカイト製掻器に合わせて頁岩製のものなどが発見されているが、桜ケ丘遺跡第１地点など多くでは発見されていない。一方、冠遺跡群Ｄ地点遺跡では、台形石器に合わせて掻器・削器・錐状石器が組成し、板井寺ケ谷遺跡と近い関係にあることを示唆している。板井寺ケ谷遺跡では、共伴したチャート等製石器群には多量の掻器・削器と錐状石器などが含まれるので、瀬戸内系旧石器の本来の組成からやや逸脱して見える豊富な石器組成は、下位文化層につけ加えられた他の石器群からの影響である可能性を考慮したい。サヌカイト製斧形石器は、板井寺ケ谷遺跡で初めて認められ、従来の瀬戸内系旧石器中には存在していない。むしろ中国山地系石器群との関係を考慮すべき器種かも知れない。

下位文化層のサヌカイト製石器群の占める位置は、それに絶対年代が与えられたことにより、姶良Ｔｎ火山灰下の最古の瀬戸内系ナイフ形石器と横長剥片剥離技術に保持された石器群の一つとしての位置を占めることとなった。瀬戸内地方東部・近畿地方中央部で、台形様石器を主体としたサヌカイト製石器群が、ナイフ形石器を主体とした石器群に先行するかどうか、台形様石器群を瀬戸内系伝統のなかに含み得るかについては、現状では即断できないが、台形様石器の出自が、後期旧石器に先行する石器群にあるであろうことは、十分考慮に値する。冠遺跡群Ｄ地点の台形様石器主体の石器群は、サヌカイト製であるからといって、すぐに瀬戸内系ナイフ形石器と横長剥片剥離技術の伝統に結びつけず、例えば中国山地帯内の石器群または西南日本の先行する石器文化の中に出自を求めてもよいとも考えられる。十分な事例の蓄積と、母胎となる石器製作技術体系の構造的比較が必要なのはいうまでもないことである。

チャート等製石器群の編年的・系統的位置について考えてみよう。

中国山地帯内には、姶良Ｔｎ火山灰下の石器群を多数見いだすことができる。

近傍の遺跡では、兵庫県下の氷上郡七日市遺跡（久保・藤田他 1990）で姶良Ｔｎ火山灰下からナイフ形石器・台形様石器を主体とした石器群が出土している。また、温泉町畑ケ平遺跡、三田市溝口遺跡（山下他 1986）では、技術形態学的に姶良Ｔｎ火山灰以前と考えられる石器群が発見されている。七日市遺跡では、姶良Ｔｎ火山灰下に少なくとも３枚の石器群包含層順があり、上位には極小型の台形様石器・細部調整石器等が、中・下位にはナイフ形石器・台形様石器と削器等が組成するチャート製石器群が出土している。畑ケ平遺跡では、黒曜石・碧玉・頁岩・安山岩など多様な石材を素材とした台形様石器・ナイフ形石器・削器・局部磨製石斧等が組成する石器群、溝口遺跡では鉄石英・チャート等を素材としたナイフ形石器・削器などに石斧が伴った組成をする石器群がある。

中国山地帯内の石器群では、岡山県野原高原早風Ａ地点遺跡（平井 1979）、恩原第１地点遺跡（稲田 1986ａ・88a）、蒜山高原戸谷第５地点遺跡（鎌木・小林 1984・86）、広島県地宗寺遺跡（三枝 1982）などがある。また、広島県西ガガラ遺跡では、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前と考えられる石器群が出土している。早風Ａ地点遺跡では、姶良Ｔｎ火山灰下に２枚の文化層があり、上層から小型の台形様石器・細部加工石器、その下層からナイフ形石器・削器・局部磨製石斧に代表される組成の石器群が出土している。恩原遺跡では、切り出し型の茂呂型的

な縦長剥片素材のナイフ形石器を主体とする石器群が出土している。戸谷第５地点遺跡では、その第Ｘ層から縦長剥片素材のナイフ形石器・削器・局部磨製石斧等を組成する石器群が出土している。地宗寺遺跡では、調査面積の狭さのためか、削器以外の定型石器に乏しい。西ガガラ遺跡では、ナイフ形石器・削器・局部磨製石斧等が出土している。

以上の遺跡は、石器類の組成・剥片剥離技術の特徴によって、大きく３分することができる。第１には、不定形剥片剥離技術を基盤とし、台形様石器・細部調整石器・ナイフ形石器・削器・斧形石器など僅かに組成する石器群で、七日市遺跡上位文化層・早風Ａ地点遺跡上層・地宗寺遺跡・溝口遺跡などが該当する。第２には、縦長剥片剥離技術・不定形剥片剥離技術の両者を技術基盤とし、ナイフ形石器・台形様石器・掻器・削器・局部磨製石斧などを組成する石器群で、七日市遺跡中位文化層・早風Ａ地点遺跡下層・戸谷第５地点遺跡第Ｘ層・西ガガラ遺跡などが該当する。第３には、完備した縦長剥片剥離技術を有し、いわゆる茂呂型類似のナイフ形石器を組成する石器群で、恩原第１地点遺跡下層がある。中国帯内石器群の変遷は、地域内でほぼ一貫して追える。

第１と第２は、基本的にナイフ形石器・局部磨製石斧を主な組成とする石器群で、ナイフ形石器の素材剥片に縦長志向が認められ、その形状も打面部を残して、一側縁をほぼ完全に整形するものが目立つなど、共通する特徴が認められる。台形様石器は、両者に組成されるが、どちらかというと第１の遺跡に主体があるようである。剥片剥離技術は、第２の遺跡で縦長傾向が強まるが、個々の剥片剥離技術の属性は両者に認められる。

板井寺ケ谷遺跡は、この第２の石器群に近い内容を持っているが、これらと比べると掻器や削器の組成が優越し、豊富な石器組成は趣を異にする。第２の石器群と比較して、やや新しい時期を占めると評価することも可能と考えるが、遺跡の「場」や季節性の機能の相違の可能性を考慮する必要があるだろう。

第１・第２の石器群の先後関係は、相違的関係・絶対年代測定結果によって、両者とも姶良Ｔｎ火山灰降灰以前、約 25.000 年前後の絶対年代が考慮できる。現状では、その先後を決定することはできないが、南関東の状況を参考にするなら、第Ⅶ・Ⅸ層の石器群との対比が可能であろう。台形様石器の多寡と形態変遷を考慮すれば、第１・第２の石器群の内の台形様石器は、先行する石器群の残存と考えられる。次第に第２・第３の石器群へと移行しつつある一段階に第１と第２の石器群が並行する時期があったと考え、その最後の時期が約 25.000 年前であったと考えられるのではなかろうか。

姶良Ｔｎ火山灰降灰直前に、第３の石器群が出現し、完成した縦長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器を主体とする石器群へと変移していったと考えられるであろう。

板井寺ケ谷遺跡のチャート等製石器群は、中国山地帯内の台形様石器を主体組成する石器群が、次第にナイフ形石器主体に移行していく過渡期の最終末段階と位置付ける事ができるのではなかろうか。中国山地帯内の姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器群は、日本列島の後期旧石器がいまだ十分に地域性を発現するに至っていない時期に相当し、汎列島的様相を帯びたものと考えられる。

瀬戸内系・中国山地系といったナイフ形石器文化と、台形様石器を有する石器文化の関係について、考えておきたい。通常、瀬戸内系旧石器という場合、瀬戸内系横長剥片剥離技術を基盤としたナイフ形石器を主体とした石器群（山口 1983）を示す。この組成には普通、台形様石器は含まれない。板井寺ケ谷遺跡では、削器・加工痕有剥片として分類した台形様石器と見なし得る石器が組成し、瀬戸内系旧石器初期の様相の一端を明らかにした。一方のチャート等製石器群にも台形様石器と見なし得る石器が組成し、また、中国山地内、近隣地域、西南日本では、同様の石器群に台形様石器が多寡の違いはあれ、組成されている。瀬戸内系旧石器の中にも、西南日本全体での動向と期を一にした台形様石器主体からナイフ形石器主体への移行があった可能性が高いと考えられよう。板井寺ケ谷遺跡のこの様相は、台形様石器主体の石器群がナイフ形石器主体に移行する過渡期の様相を示していると考えたのである。一つ注意されるのは、この移行の完了に先行して、既に瀬戸内系と中国山地系といった地域毎のナイフ形石器文化が出現している点である。サヌカイ製石器群にあっては、横長剥片剥離技術とナイフ形石器という器種が未だ密接な対応を持つに至っておらず、また国府型ナイフ形石器や典型的瀬戸内技法も認められなかったが、既にサヌカイトに固執した横長剥片素材の石器生産が行なわれている。チャート等製石器群は、既にナイフ形石器主体の石器群として成立し、台形様石器と見なし得る石器の点数は多くない。板井寺ケ谷遺跡の台形様石器に類した石器は、サヌカイトとチャートという石材ごとに相違があり、両者はすでに別個の石器群に組み込まれた存在となっている可能性が高い。後期旧石器時代と先行する石器文化の画期が、ナイフ形石器の普及と地域的適応の結果の地域性の成立にあると考えるなら、板井寺ケ谷遺跡の台形様石器群に石材との技術的・伝統的関係が認められるかは、重要な問題となろう。当然、先行する石器群においては、石材に対する特殊な適応は無かったと考えられよう。

さて、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の石器群を見た場合、重要な特徴の一つにサヌカイトが遠距離の石材で、チャート等が在地の石材であったことである。両者には、遺跡内での石器生産の工程の完結性に大きな隔たりがあった。この状態を、それぞれの系統の各遺跡での石器群の様相と関連付けることは、系統論・編年論的に重要な視点であると考える。

板井寺ケ谷遺跡のサヌカイト製石器群とチャート等製石器群は、それぞれ瀬戸内系と中国山地系を代表し、両者が姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の一時期に共伴するという、編年作業上、重要な材料を提供した。従来は、瀬戸内地方東部・近畿地方中央部の瀬戸内系旧石器、中国山地及び隣接地域の石器群といった各系統の石器群単位で編年を行なった後、段階的な整合性が検討される場合が多かったが、板井寺ケ谷遺跡の事例は、その地域間年作業に一つの絶対的な指標を与えたのである。両地域の編年は、技術形態学的比較や層位編年という異なった方法に主眼がおかれ、統一的な方法は見出されていない。現状では、チャート等製石器群を瀬戸内系石器群との対比において評価し、「中国山地帯内系旧石器群」と呼称する。今後、板井寺ケ谷遺跡につづいて、さらに良好な条件の遺跡の検出があるならば、より精密な地域間編年が可能になるとともに、全国的な旧石器編年・系統の中に位置付けが可能になってくるものと考えられる。

それぞれの石器群の変化をもたらすものとして、視点を従来の時間軸以外のものをもとめる場合、距離的関係、すなわち原石産地までの遠近の問題がすぐ想起できる。板井寺ケ谷遺跡の位置が、瀬戸内系サヌカイト製石器群の中心分布限界と考えられる範囲の外にあることから、原石産地近くの遺跡との間に、石器製作上の分業がもたれ、石器群の組成・顔つきが変わっている可能性は、十分検討に値する可能性である。時間軸と空間軸が、縦と横の関係で、石器群の様相が碁盤目状に変移している可能性も考慮の範囲にあるといえよう。一方、チャート等製石器群は、中国山地帯内での在地石器群であり、原石供給に困難はないため、瀬戸内系サヌカイト製石器群とは異なった石器群の変異があるのではなかろうか。石材供給と集団移動・回帰運動といった古民族学的動態と関連した分析・解釈が必要な側面であろう。

板井寺ケ谷遺跡には典型的な瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器は認められないが、形状のよい翼状剥片が伴うこと、そもそも遺跡内での目的剥片剥離が活発でなく、多くの石器素材剥片・大型剥片を他からの搬入に依存していることは、遺跡内での石器製作技術で当該期の技術的背景を代表しきれるかには大きな不安があるといえよう。この問題については、石器類の組成や器種別重量構成の検討を行なってきたが、本章第２節で再論したい。

３，上位文化層の石器群

上位文化層の石器組成は、合計 524 点あり、角錐状石器・同未成品・ナイフ形石器・掻器・削器・楔形石器などの定型石器、礫器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片・砕片、石核からなる。サヌカイト製が主体で、小量のチャート製が伴う。下位文化層からの浮き上がりがあるので、組成的にやや不安がある。サヌカイトは、下位文化層からの浮き上がり混入を考慮すると、ほとんどが二上山製と考えられる。

角錐状石器は、上位文化層の主要定型石器であり、多様な形態を含んでいる。基本的には先端を尖らせたものが多数を占めるが、一部には厚手で寸詰まり・樋状剥離を有するものも認められる事から、全てが刺突具的なものとは限らない。大型のものには甲板面の一部や全面に調整を施したものがある。ナイフ形石器は、下位文化層からの浮き上がりなどを除外すると、わずか１点が出土したに留まる。サヌカイト製であるが、瀬戸内系のものではない。掻器は、点数的には多くはない。削器は、上位文化層の主要器種のひとつで、大型剥片素材の末端に急角度の調整を施したものが目立つ。加工痕有剥片は、定型石器として分類できなかった調整の施された石器を一括したものであり、一種の型式学的分類上の「吹き溜まり」的な分類である。一部にはナイフ形石器・台形様石器・掻器に類したものも含まれている。使用痕有剥片は、定型的石器以外の微細な刃こぼれ状剥離を認めたものを一括した。サヌカイト製剥片には、不定形剥片・横長剥片に合わせ、角錐状石器の素材剥片になり得る大型厚手の板状剥片がある。砕片はサヌカイト製のものがほとんどだが、その形状から考えて角錐状石器の調整砕片が含まれる。サヌカイト製石核には、瀬戸内系横長剥片剥離技法に含まれ得るものもある。

板井寺ケ谷遺跡の石器生産・剥片剥離技術は、接合資料・個体別資料の貧困さから、全体像の把握が困難である。サヌカイト製石器群では、角錐状石器の整形作業が行われたものの、素材剥片の生産は認められない。石核類は使用痕有剥片などになり得る不定形な剥片を生産したに留まる。また、出土した定型石器・加工痕・使用痕有剥片、大型剥片に見合う量と形状の石核・接合資料は見つかっていない。さらに、サヌカイト製石核のほとんどは剥片素材の石核であるが、この素材剥片生産作業が遺跡内で行われた接合資料・原石・石核は認められない。小量出土したチャート製石核は、亜角礫などを素材とする。

板井寺ケ谷遺跡上位文化層に残された石器群は、石材が二上山産サヌカイト主体であることから、近畿地方中央部との結びつきが考慮される。板井寺ケ谷遺跡のサヌカイト製石器群では石器整形工程を中心に行っており、石器・石核の素材剥片生産が別の遺跡で行われた可能性が高いが、サヌカイト石材産地から遠い位置にあるという背景を反映しているのであろう。石材産地との遠近関係によって、石器の製作工程を異所で行っている可能性が高い。

	SANUKITE										CHAILLE etc							
TOTAL	KAKU	KN	P	EN	SC	RF	UF	F	C	NUCLÉUS	KN	EN	SC	UF	F	C	NUCLÉUS	CH
524	12	1	1	3	7	20	25	144	209	14	1	2	3	10	28	38	5	1

表３　上位文化層の石器組成

上位文化層の時期は、板井寺ケ谷遺跡の泥炭層と火山灰の関係、放射性炭素年代測定結果によって、絶対年代を伴って定まった。近畿地方ではじめての層位的出土例である。姶良Ｔｎ火山灰降灰直後といい得る年代が与えられる。九州地方では、角錐状石器の出現が姶良Ｔｎ火山灰降灰直後にある事が判明している。近畿地方中央部も板井寺ケ谷遺跡と同様に角錐状石器主体の石器群が存在しており、近畿地方での角錐状石器の出現の時期が九州地方と大差ない時期にある事が判明した。角錐状石器が九州地方から広がった器種だとすれば、板井寺ケ谷遺跡ですでにサヌカイトという近畿地方固有の石材を素材としているという、”地域化”をどう考えるかは問題であろう。

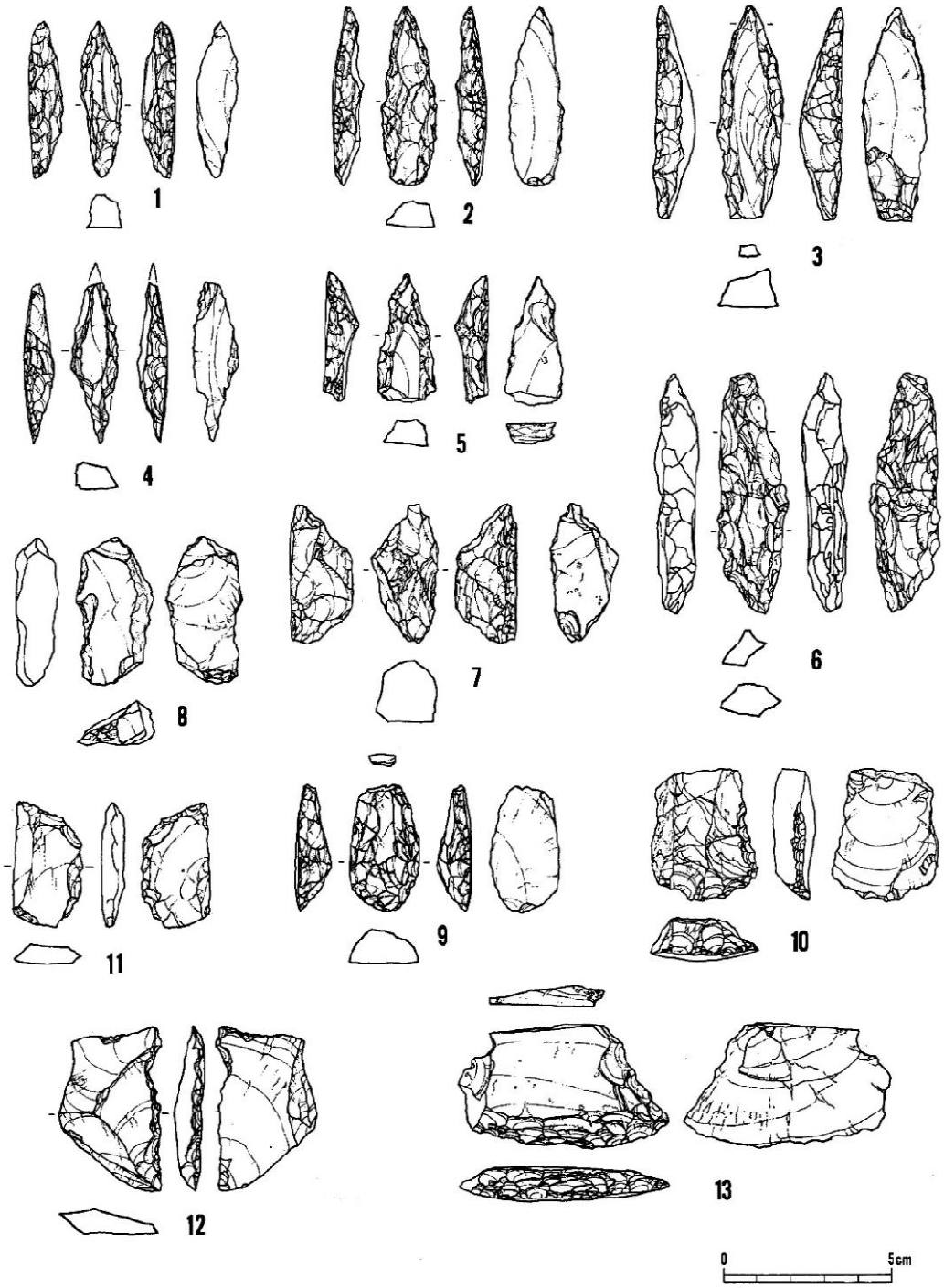


図 61　上位文化層の石器

始良Ｔｎ火山灰の降灰は、西南日本の自然環境に多大の影響を与えた。板井寺ケ谷遺跡でも、始良Ｔｎ火山灰の降灰が遺跡周辺の植生に大きな被害を与えた事は確実である。この様な被害は植生のみに留まらず、それを食料とする動物相の減少・産地樹木の被害のよる土壌流

出、排水の悪化など、降灰直後の短期的に顕著な環境変化をもたらす。また、長期的にも植物相から動物相、地理的環境まで、改変し得る影響をもたらしたろう。上位文化層と姶良Ｔｎ火山灰降灰との時間的間隔がどの程度かは明示出来ないが、近畿地方にあった先行する旧石器社会が姶良Ｔｎ火山灰降灰によって一時的にせよ混乱を来たしているなら、角錐状石器石器群を保持する集団の近畿地方での出現と姶良Ｔｎ火山灰の降灰の自然破壊の関係を考慮する事ができるかも知れない。今後は、角錐状石器石器群の出自の追求と、九州・中国・近畿といった地域ごとの石器群の精密な実態解明が必要となろう。

第２節　板井寺ケ谷遺跡の自然環境

１，古地理学的背景

板井寺ケ谷遺跡の営まれた時期は、竹村・檀原の火山灰・土壌分析の結果把握された火山灰の同定と降灰層順（竹村・檀原 1991）、山田の行なった泥炭層中の泥炭及び炭化物密集箇所の炭化物の放射性炭素年代測定結果によって（山田 1991）、上位文化層が約 20.000 年前、下位文化層が約 25.000 年前という絶対年代が与えられた。両文化層の間には姶良Ｔｎ火山灰が狭叉されており、姶良Ｔｎ火山灰降灰前後のほぼ 5000 の時間差が存在することになる。

古気候的には、この時期はウルム氷期後半にあたり、やや寒冷な時期から厳寒期を経るまでに相当するという。厳寒期を絶対年代でいつにするかは、意見のばらつきはあるが、板井寺ケ谷遺跡の旧石器相当期は、ウルム氷期後半でも特に寒冷な時期にほぼ該当することは明かである。

遺跡周辺の地形形成を、田中と野村の分析（田中 1991）（野村 1991）からみていくと、板井寺ケ谷遺跡のある篠山盆地は、標高 400～500ｍ前後の山に囲まれた標高 200ｍ前後の盆地底を有し、篠山川によって川代渓谷をへて加古川に排水しているが、ウルム氷期後半には最初、盆地内の排水が武庫川へ行なわれていたという。そして、ウルム氷期厳寒期に起こった山麓での岩屑生産によって、古市周辺で武庫川方向への排水が遮断され、水位が上昇し、篠山盆地底の南半は湛水状態となったという。また、盆地の排水不良は姶良Ｔｎ火山灰降灰前後に最悪となり、盆地底に「弁天黒土」と称される泥炭層の形成が行なわれる。この間、加古川の上流部からの侵食が進行し、川代渓谷が開析され、厳寒期以降のある時期に盆地内に侵食が到達し、武庫川方面に流下していた篠山川が加古川流域に河川争奪されたのだという。この地形形成の段階を旧石器文化層に対応すれば、篠山盆地が湛水し、泥炭の形成が始まった初期から、湛水面が最大に達した前後までのどこかに対応すると考えられた。

板井寺ケ谷遺跡の標高 210ｍ、篠山盆地中央部での盆地底標高 200ｍ前後から考えて、篠山盆地中央の湛水面が、遺跡周辺まで同一の水面を有したとは考えられない。板井寺ケ谷遺跡周辺の泥炭層の堆積状況は、篠山盆地中央の川代露頭面の泥炭層の放射性炭素年代測定の結果と珪藻分析（佐藤 1991）の結果、観察される層相・堆積と大差ないことを示すことから、極端な水深差があったとは考えられないのである。

この時期には岩屑の生産が活発で、篠山盆地からの排水が古市周辺で遮断されたように、盆地内の古篠山川や宮田川でも局地的な排水不良が発生していた可能性が高いと思われる。板井寺ケ谷遺跡の調査区内では、姶良Ｔｎ火山灰降灰前後に多量の砂礫や岩屑の堆積が認められた。また、板井寺ケ谷遺跡の土層堆積と微地形の形成過程を分析した青木（青木 1991）は、板井寺ケ谷遺跡周辺の泥炭層の形成が宮田川周辺に堆積した砂礫堆の後背湿地形成のためであ

ることを示唆した。事実、板井寺ケ谷遺跡の湿地部の泥炭層中には、西方から供給された砂礫のラミナ状態堆積が認められ、同様の事が宮田川右岸でも発生していた可能性は高い。遺跡周辺の低地が砂 礫堆の形成によって排水不良になり、後背湿地を形成、西と北からの砂礫供給によって埋められていく過程が復元された。

板井寺ケ谷遺跡の泥炭層中の珪藻分析を行なった佐藤は、泥炭層中の珪藻化石が姶良Ｔｎ火山灰上から増え、最初は流水性種主体であったものが、泥炭Ｉの時期には浮遊種が出現することから、泥炭Ⅲの形成は表面水で行なわれ、泥炭Ⅱで流水面域が増大、泥炭Ｉの最初には一時水位が上昇し、湛水状態となったとした。泥炭Ⅱ・Ｉに出現する珪藻化石には寒冷種があり、流水・湛水とも冷たかったことを示唆した。

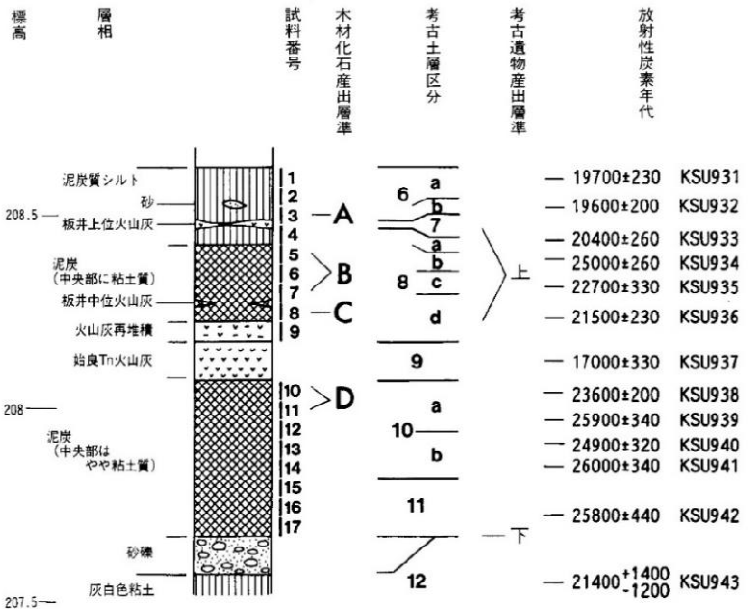


図 62　基本土層柱状図と泥炭層の放射性炭素年代

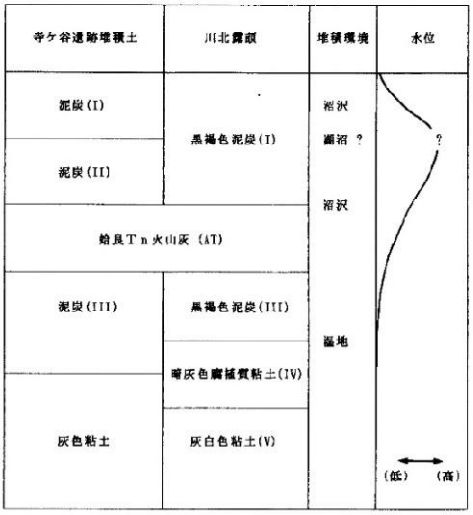


図 63　板井寺ケ谷遺跡周辺の水文環境

板井寺ケ谷遺跡周辺の環境は、第Ⅶ章での成果をもとに考えると、下位文化層相当期の地形は、周辺に砂礫堆の形成が進行中で、山地からの流水と併せて南半が湿潤化したが、砂礫帯は調査区内には及んでいない。泥炭層の堆積が開始された段階にあたり、舌状の微地形がその中に乾燥した陸地として突出していた。泥炭層は、調査区西からの流水によって遡上し、その上面の標高差が極端で、また珪藻の生息もないことから、ウルム氷期後半の寒冷気候下で表面水下の泥炭形成が考えられた。姶良Ｔｎ火山灰直下の泥炭Ⅲ上面には、多数の根株を持った埋もれ木が存在し、樹木の生育を阻害するほどの水深でなかったことが知れた。

上位文化層相当期の地形は、姶良Ｔｎ火山灰後背以後、周辺の山地から供給される砂礫が、西から調査区南半の泥炭面中に堆積し、新たな陸地部を形成する。古宮田川の砂礫帯が発達し、後背湿地化した部分の水位が次第に上昇し、厚い泥炭層が形成された事が知れた。

このような環境は、両文化層相当期に篠山盆地で、おそらく広い範囲で観察されたと思われる。篠山盆地中央の川代露頭地の観察でも、姶良Ｔｎ火山灰を挟む泥炭層が認められ、珪藻化石の分析からは、姶良Ｔｎ火山灰上での水位の上昇が示唆されている。篠山盆地西北部にある板井寺ケ谷遺跡から南の西木之部遺跡、内場山遺跡でも、泥炭層の形成範囲の高度はまちまちで、同一の原因かどうかは不明であるものの、姶良Ｔｎ火山灰降灰期前後のこのような立地が発掘調査によって面的に確認されている。

篠山盆地の中小河川周辺の浅谷部には、砂堆形成によって後背湿地と化して谷からの流水によって、泥炭の形成がそこここに見られ、その湿地部に向かって山裾から派生した低位な尾根や扇状地がこの中に舌状に突出した地形が、普遍的に存在したようで、板井寺ケ谷遺跡上位・下位文化層は、そのような環境の一つを選択した立地であったのであろう。

板井寺ケ谷遺跡周辺の地形要素は、盆地にあるという環境から、視覚的に山地と盆地底に分けられる。盆地底には湛水時に水没した部分と、泥炭層が発達したものの湿原地に留まった部分、自然堤防など微高地状の乾地であった部分があったと考えられる。また山地は、低位な部分と高位な部分に分けられよう。下位文化層相当期は、盆地中央部や遺跡周辺での泥炭層形成が開始されたころにほぼ相当し、山地は乾燥、低地は湿地に二分された環境であった事が知れよう。

上位文化層相当期には、全体として湛水部の水位が上昇し、篠山盆地中央に湖水面が存在した時期（佐藤、第Ⅶ章第　節）にほぼ相当する。下位文化層では盆地中央での湛水部の範囲がやや狭いかも知れないが、全体としてほぼ同様の地形要素から成り立っていたと思われる。

２，古植生

板井寺ケ谷遺跡の泥炭層中の植物遺体・花粉分析を行なった大井らは、遺跡周辺の植生を以下のように描き出した（大井・南木・能城 1991）。遺跡周辺の山地・低地に分かたれて立体

的に復元された植生の変遷は、泥炭層の植物・花粉化石をもとに、５つの時期に分けられた。

下位文化層はⅠの時期、上位文化層はⅢ～Ⅳの時期に相当すると考えられる。泥炭Ⅲ下部に相当するⅠの時期は、泥炭堆積初期にあたる。低地に草本類はまだ少なくハンノキ属の湿地林が優先し、山地ではマツ属・ツガ属等の針葉樹とコナラ亜属・ニレ属などの広葉樹の混交林となっていた。

泥炭Ⅲ上部に相当するⅡの時期には、気候の寒冷乾燥化が進行し、低地に泥炭の堆積が促進される。低地はカヤツリグサ科・イネ科・ワレモコウ科・セリ科・キク科等の草本類の草原で、ハンノキ属・シラカンバ・トウヒ属の林が出現する。湿地にはハンノキ属ハンノキ節、陸地にカバノキ属、山寄りにトウヒ属が多くすみ分けた。水流のある部分ではミズバショウが生育する。山地ではスギと広葉樹が減少し、モミ属・マツ属単維管束亜属が増加し、針広混交林となる。

始良Ｔｎ火山灰降灰直後のⅢの時期、降灰の結果植生に大きな被害があった。ハンニキ属と草本類のミズバショウ属・カヤツリグサ科を除き、そのほかの植物は大きく減少した。

泥炭Ⅱに相当するⅣの時期には低地の草原や湿地林はすぐに回復したが、山地での回復は遅れた。低地では湿地にハンノキ属・カバノキ属・ヤナギ属・ナナカマド属が混在し、山地よりにトウヒ属が生育していた。

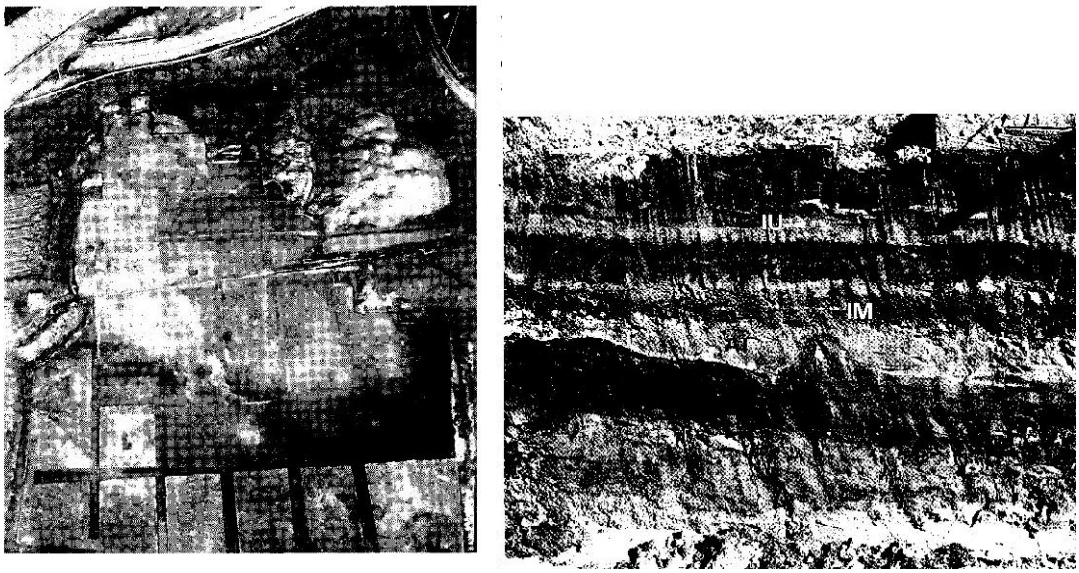


写真６　板井寺ケ谷遺跡の泥炭堆積物

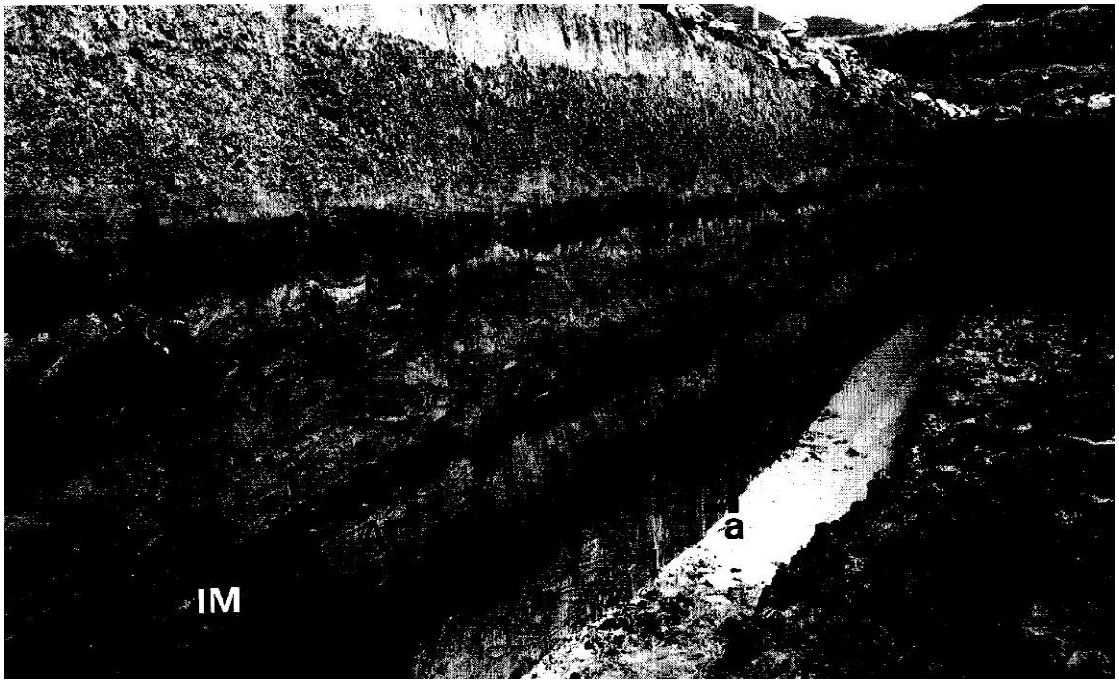


写真７　発掘区南端の泥炭堆積

写真８　姶良Ｔｎ火山灰直下の樹木化石

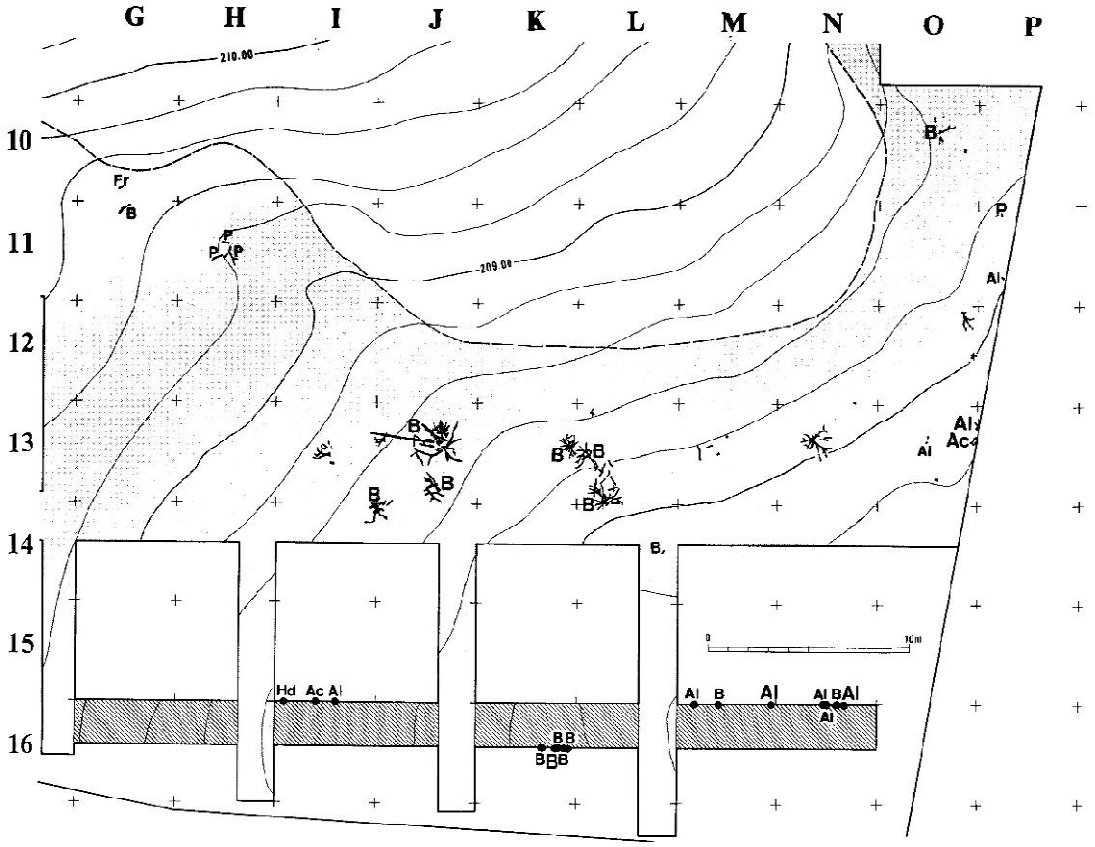


図 64　姶良Ｔｎ火山灰直下の樹木化石

泥炭Ｉに相当するⅤの時期には、姶良Ｔｎ火山灰降灰の被害から回復が進むが、以前とはやや異なった植生となった。低地ではイネ科・ワレモコウ属・ヨモギ属などが増え、カヤツリグサ科・ミズバショウ属が減少する。山地では、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹が減少し、モミ属・トウヒ属・マツ属単維管束亜属などの針葉樹が優先する。

姶良Ｔｎ火山灰の降灰は、当時の植生に多大の被害を与え、植生の回復に長い時間がかかったという姶良Ｔｎ火山灰荒廃の被害が具体的に把握されたことは、重要な成果である。姶良Ｔｎ火山灰降灰により山地の森林に大きな被害があり、土壌の荒廃・流出が生じた事も明かとなった。

板井寺ケ谷遺跡調査中に採取した川北露頭地と丹南町大山上天内の花粉分析結果では、篠山盆地中央と西北谷の合流部淀みという局地環境の板井寺ケ谷遺跡旧石器相当期の植生が明らかになった。盆地中央の川北ではマツ属単維管束亜属とツガ属が多く、川北が盆地中心部にあって山地から遠く花粉の散布能力の高い針葉樹比率が高く出現したと考えられた。川北は、盆地中央の湿地帯にあり、周辺に木本の有力な花粉供給源のない環境であったと考えられた。板井寺ケ谷遺跡と大山上ではおなじように落葉広葉樹が多いが、相違も見受けられる。板井寺ケ谷遺跡ではコナラ属が落葉広葉樹の中で優占するのに対し、クマシデ属－アサダ属・ニレ属－ケ

ヤキ属の比率がコナラ属と同じように組成する。尾根端の板井寺ケ谷遺跡と谷部淀みの大山上という地形の違い等に起因する近辺の植生の違いが反映したと考えられた。

草本類や湿地性樹木では、川北でヤチヤナギ属、板井寺ケ谷遺跡にミズバショウ属、大山上でハンノキ属が多い。このような泥炭上で生育する分類群の違いも、水流の有無、水温、日照時間など、微妙な環境の違いを反映していると示唆された。

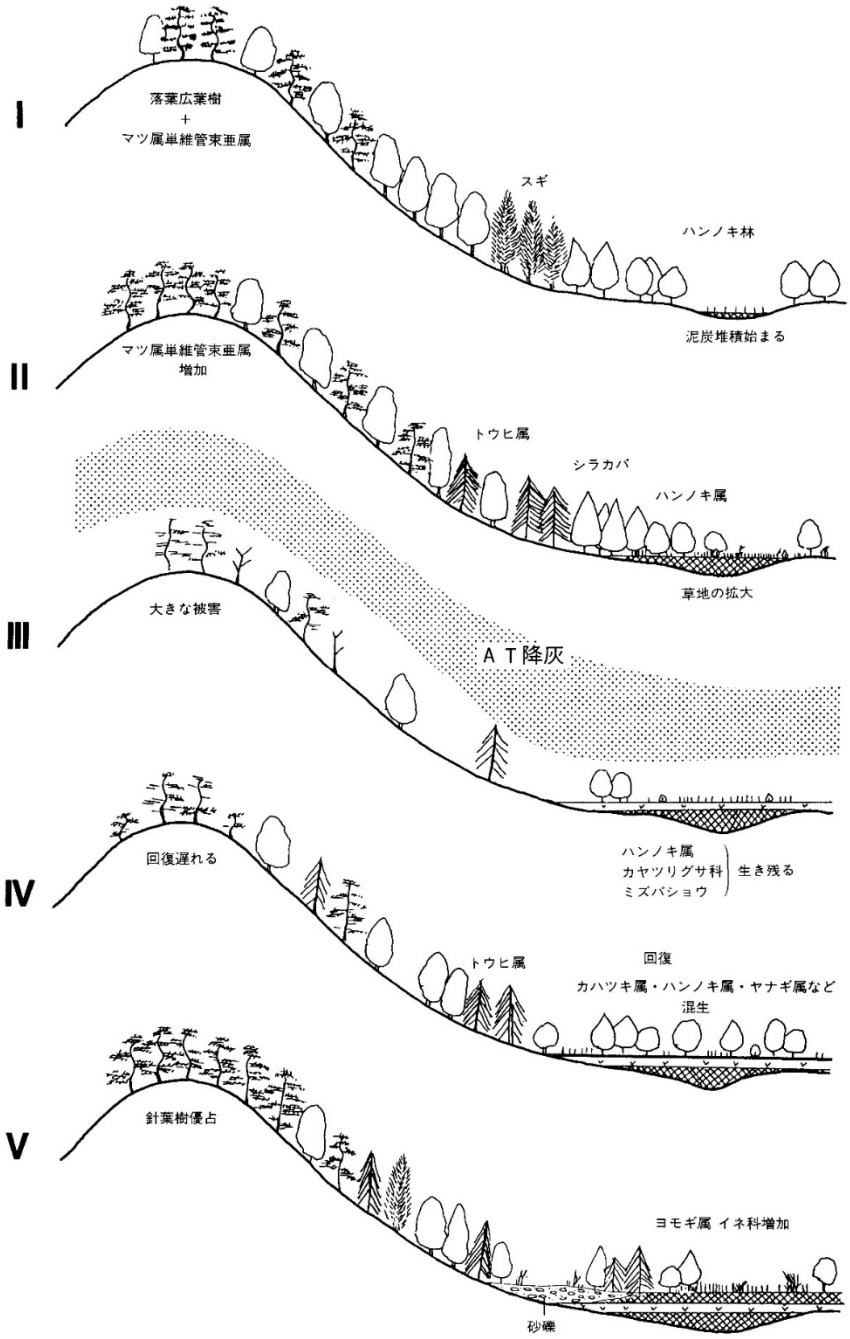


図 65　姶良Ｔｎ火山灰による植生へのダメージ

3，遺跡の立地点

以上、多角的に自然環境を観察した。続いて視点を遺跡に移し、遺跡から周辺環境の記述を行いたい。板井寺ケ谷遺跡の周辺環境を、遺跡を中心に同心円状の環境として観察してみよう。

板井寺ケ谷遺跡は、篠山盆地西北端の山地と平野部の地形変換点にあり、山裾が現水田面に埋もれ込んだ部分に位置する。遺跡は、緩やかに南東に張り出す微尾根上に立地し、南が平坦な水田面、北がすぐ山地となっている。遺跡が南にひらける谷奥にある事から、南方向の視界は篠山盆地中央部まで見渡し得るが、東西は左右の尾根に遮られて視界は延びない。北はすぐ山となり、尾根上にでない限り有効な視界確保は出来ない。この現在の眺望は、古地理的に考えて、侵食や堆積作用などを考慮しても、旧石器時代相当期と大差ないと考えられる。

板井寺ケ谷遺跡南半は、発掘調査当時水田であったが、泥炭層の存在から当時低地が湿地であったことが判明し、堆積作用の結果が大きい事が知れた。また、篠山盆地中央の篠山川川岸の段丘は、新しいものであった。旧石器相当期、遺跡南部の湿地と篠山盆地中央部の冠水面との連続性は確認できないが、盆地底や緩傾斜部には扇状地堆積物や砂堆で形成された後背湿地や谷部の泥炭面遡上が広く存在すると考えられる。

板井寺ケ谷遺跡内や川北露頭地・大山下の植物花粉・材・遺体の分析の結果、篠山盆地の植生は、山地と低地・湿地部では大きく異なっていた事が明らかになった。また、周辺の地勢や水流の有無等によって、局地的な様相が認められた。下位文化層と上位文化層の間に姶良Ｔｎ火山灰が降灰して植生に大きな被害があった事、上位文化層相当期はウルム氷期厳寒期に相当する事から、両文化層の植生には一部相違がある。

篠山盆地北西端にある板井寺ケ谷遺跡の立地は、眺望的に南が開き、周辺は低地と山地に二分されること、低地には、砂堆や扇状地・湿地・冠水面があったことが知られた。植生的には、山地と低地・湿地の状況、両者の距離的関係によって、局地的に相違も見られた。これら環境要素が相互に関係しながら構成した”総合環境”が、板井寺ケ谷遺跡の自然的立地環境である。

図 66 は、旧石器時代相当期の板井寺ケ谷遺跡周辺の地形の地形環境を把握するため、現在の地形図上のいくつかの等高線を選んで製作した地形ゾーン図である。傾斜角度が大きく変化したり、泥炭層が発達したりするような地形・地質の変換点に対応しそうな等高線を選んである。高山地を標高 400ｍ以上、低山地を標高 220ｍ以上、盆地底平面を標高 200ｍ以上、現在でも排水不良の湿潤であって、侵食によって段丘化したような場所を含め、盆地底を標高 200ｍ未満として、それぞれにアミをかぶせた。

作図作業は地図上の現在の地形を基におこなったため、盆地底の平面には板井寺ケ谷遺跡周辺のように後背湿地や谷部の泥炭面の遡上があり、全てが乾燥した陸地であった訳ではなく、また盆地底の標高 200ｍ未満の部分全てが湛水されていたとは考えられないなど、旧石器文化

層相当期の地形とは多々隔たりがあるが、これによって篠山盆地の大まかな地勢を把握することは可能である。板井寺ケ谷遺跡から１㎞以内、２㎞以内、４㎞以内、８㎞以内の範囲に分けて地形構成比率を観察した結果を表４に示す。

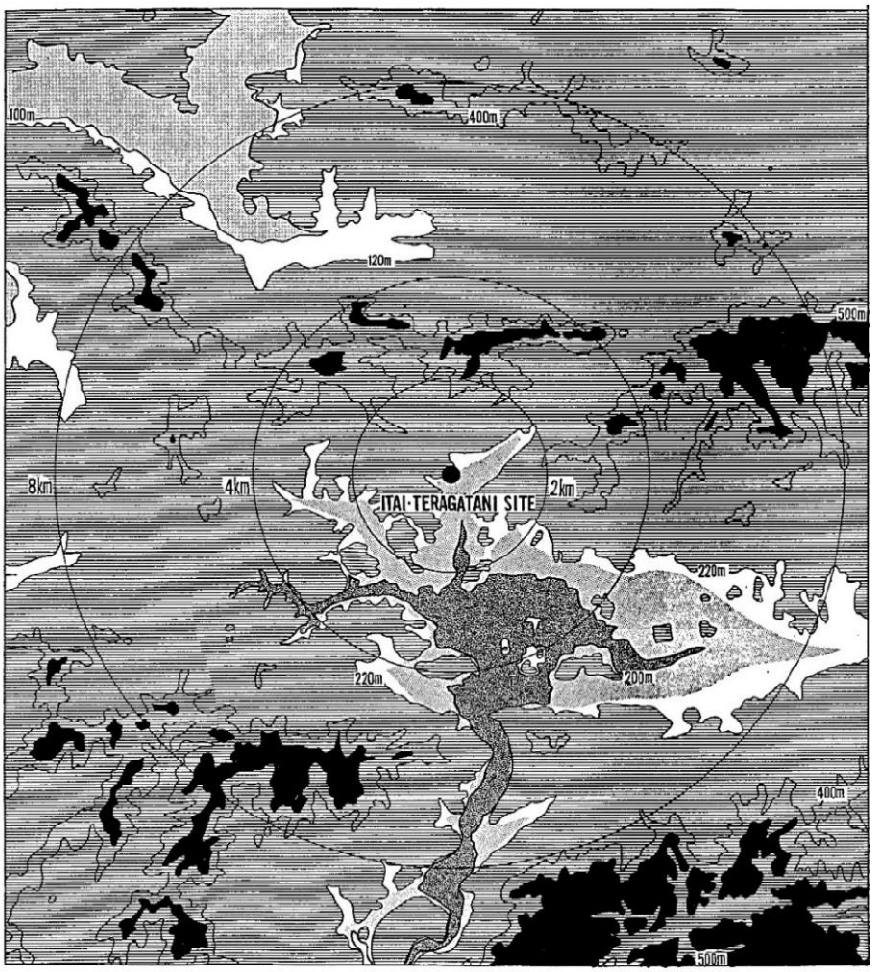


図 66　板井寺ケ谷遺跡周辺地形

表４　板井寺ケ谷遺跡周辺の地形要素比率

	200m以下	200m～220m	220m～400m	400m以上	面積合計
１㎞圏	0.03k ㎡	1.57k ㎡	1.54k ㎡	0.00k ㎡	3.14k ㎡
	1%	50%	49%	0%	
２㎞圏	0.38k ㎡	4.41k ㎡	7.79k ㎡	0.25k ㎡	12.56k ㎡
	3%	33%	62%	2%	
４㎞圏	5.53k ㎡	9.55k ㎡	26.63k ㎡	8.54k ㎡	50.24k ㎡
	11%	19%	53%	17%	
８㎞圏	10.05k ㎡	26.12k ㎡	120.58k ㎡	44.21k ㎡	200.96k ㎡
	5%	13%	60%	22%	

1㎞圏では、盆地底の標高200～220ｍの部分と220～400ｍの部分が相半ばし、低地と山地がほぼ同面積となっている事がわかる。2㎞圏では、山地の部分が増大する。低地は南方向に開きながら北へ縦貫し、篠山川支流の宮田川流域に該当する。山地は南方向を除いて遺跡周辺を遠巻きに広がる。4㎞圏では、低地の比率が30％と2㎞圏とほぼ同様であるが、200ｍ以下の部分が11％出現し、200～220ｍの部分が減少する。低地は、篠山盆地北西の谷部にほぼ該当し、板井寺ケ谷遺跡以南に扇型に広がり、篠山盆地底部にまで及ぶ。山地は70％と増大し、17％が400以上となり、後背山地の主尾根が取り込まれ、左右には有力な支尾根がある。8㎞圏では、南に篠山盆地ほぼ全域を包有して盆地南側の山塊に及び、北は多紀連山の主尾根を越えて氷上低地にまで及ぶ。低地は、北に取り込まれてきた氷上低地を含めて18％で、篠山盆地の200ｍ以下の部分全てを取り込み、比率で５％となっている。山地は、地形の82％に及ぶが、400ｍ以上の部分が22％で、異なった水系・山塊を取り込んでいる。特に北の氷上低地・由良川水系は、約35％と大きい比率を占める。

板井寺ケ谷遺跡を中心とした自然環境を、多紀連山の主尾根以南・川代渓谷以東の領域を想定し、この圏別地形要素に、植物の花粉・材・遺体化石の分析から立体的・広範囲に復元された植生を乗せて、記述する。

下位文化層相当期、氷期厳寒期に向かいつつあった段階に相当し、年間の寒暖の差は今よりもはるかに大きかった。丹波山塊・篠山盆地では内陸山地の寒冷さが加わり、近畿地方中央部・瀬戸内の盆地底とはかなりの差があったと考えられる。遺跡周辺では、気候の乾燥・寒冷化から山地に岩屑生産、低地に泥炭層の形成が始まっていた。扇状地堆積物の供給は活発ではなく、寒冷地流水を好む珪藻化石が認められることから、せき止められた静止水面はなく、東と南の水流は低温であったと考えられた。低地には草本が少なくハンノキ主体の湿地林となっていたが、次第にカヤツリグサ科などの草本類が増加して草原湿地になっていった。遺跡周辺の低地は、泥炭の形成されるような湿地や山裾の微高地・扇状地や河川堆積物の上などの乾燥地といった地表の状況、静止水面・水流の有無とその温度、日照時間等によって、多様な小環境に分割されていた。この小環境は、植生の上に反映されていたと考えられる。近くの大きな谷中央の淀みの周辺などにはクマシデ属－アサダ属・ニレ属－ケヤキ属などがコナラ属と共に繁茂していた。篠山盆地中央部の低地では、湿地性樹木ではヤチヤナギ属が多い。

上位文化層相当期の遺跡周辺の低地は、篠山盆地中央の湛水面拡大を受け、扇状地堆積物や河川供給物の後背湿地が拡大していた。遺跡南半の泥炭面は、西の谷部からの扇状地形成によって埋められつつあった。姶良Ｔｎ火山灰降灰の結果、木本ではハンノキ属・カバノキ属、草本ではイネ科・ワレモコウ科・ヨモギ科が増加し、カヤツリグサ科・ミズバショウ科が減少した。

篠山盆地周辺の山地は、下位文化層相当期にはどこでもほぼ同様の植生であった。基本的植生として、マツ属・ツガ属などの針葉樹とコナラ亜属・ニレ属などの広葉樹の混交林となる。上位文化層相当期では、姶良Ｔｎ火山灰の降灰の結果山地の植生に大きな被害があり回復は遅れた。マツ属単維管束亜属を中心に生き残った。

板井寺ケ谷遺跡にこの様な環境をもたらした要因の大きなものの一つが、当時の気候であろう。板井寺ケ谷遺跡の成果から直接気象条件を言及できるような調査は行えなかったが、重要な側面として考慮したい。また、その遺跡の形成された時期の季節毎の気温・日照時間・気象条件は、旧石器時代の集落立地戦略の重要判断材料であった事は、間違いなかろう。

板井寺ケ谷遺跡周辺の環境から考えられる当時の旧石器人が利用可能な可食植物を、泥炭層中の植物化石の分析結果から明らかになった植生の中から選んでみると、予想外に乏しいことに驚かされる。春にはベリー類、秋には松の実類がまとまって認められるに過ぎない。植物質食料はその場で適時採集活動が行われるものであり、一ケ所で全てをまかなう必要はないが、よほど広範囲の採集活動が行われない限り、板井寺ケ谷遺跡周辺で確保できる植物質食料で全ての食料を維持することは困難であったろう。板井寺ケ谷遺跡周辺に生息した動物相については、遺跡内・周辺での当該期化石の出土事例は知れず、まったく知り得なかった。

板井寺ケ谷遺跡の立地は、低地と山地・乾地と湿地の二つの環境帯の境界域にあり、両環境が等距離に遺跡を中心とした同心円を上下に二分して取り巻いている。この様な古地理と植生は、さらにその地での季節ごとの降雨や気温、日照時間といった基礎的環境、さらに板井寺ケ谷遺跡では直接的な検討の出来ない棲息動物、当時の人間社会まで合わさって、はじめて総合的な遺跡環境となりうると考える。板井寺ケ谷遺跡で行われた多角的な自然科学の調査は、遺跡を取り巻く自然的環境を初めて立体的に明らかにした意義がある。

第３節　集落としての板井寺ケ谷遺跡

１，下位文化層の遺跡構造

ａ，遺物・遺構の分布

姶良Ｔｎ火山灰直下の微地形

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の発掘では、約 3670 ㎡を発掘した。AT 火山灰層直下の黄色粘土と泥炭Ⅲの下部から遺物が出土している。AT 火山灰直下の埋没微地形は、北西が高く南東が低い標高 214.20ｍから 207.50ｍまでのなだらかな斜面となっている。

調査範囲には、当時の湿地と陸地の２つの異なる領域を検出した。湿地部は、西端で標高 210.60ｍ、北で 210.80ｍ、南で 207.50ｍ、1388 ㎡を発掘した。周辺地形から考えて湿地部は南東へ広がっているが、標高差が大きくて篠山盆地南部にあったと考えられている湖水面（野村、第Ⅶ章第　節）には連続しない。草本を主体とする腐植質で形成された泥炭が豊富に堆積し、根株の残る埋もれ木が豊富に発掘された（大井・南木・能城 1991）。泥炭中の珪藻分析では、遺跡内の泥炭は安定水面下でなく、表面水流によるものであることが指摘されている（佐藤祐司 1991）。

陸地部は、北で標高 214.20ｍ、南で 208.40ｍ、2280 ㎡を発掘した。陸地部は湿地部に東南方向に舌形を呈して突出している。陸地部の黄色粘土中には、自然の礫包含はない。

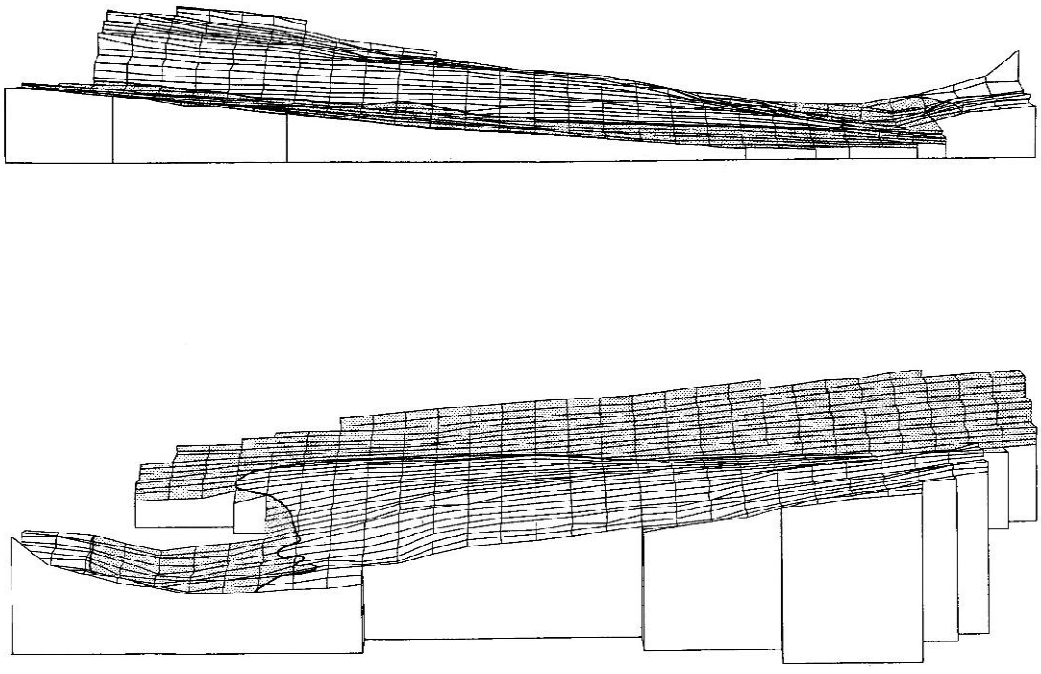


図 67　下位文化層埋没地形鳥観図　上：南から下：北から

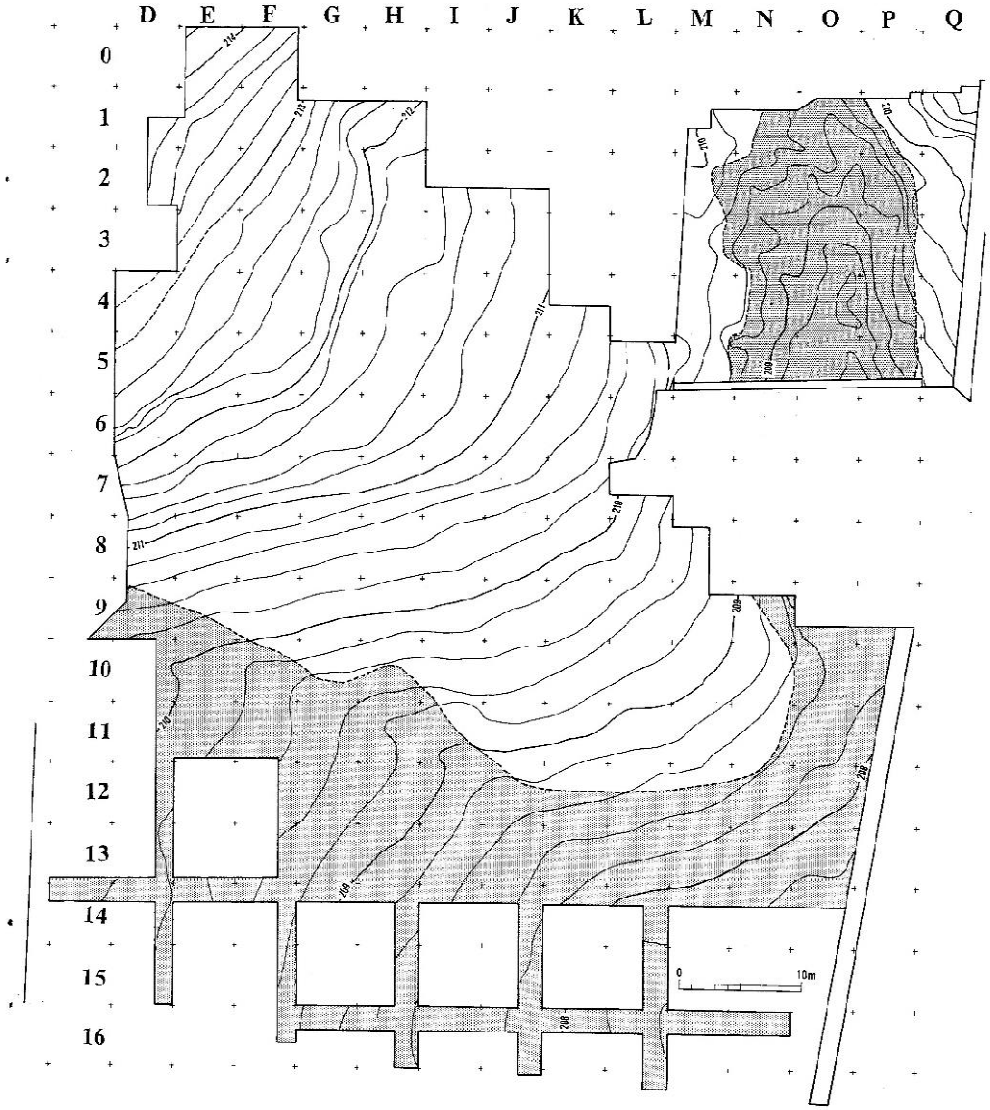


図 68　下位文化層埋没微地形

石器の分布とブロックの設定

遺物分布は、現位置を確認して取り上げた合計 2353 点で構成される。遺物のほとんどが陸地部の範囲全域で発掘された。東側の谷部には遺物分布は延びない。南の湿地部には陸地部南端から近いところに若干の遺物分布がある。遺物は、黄色粘土層と泥炭Ⅲ下部・灰色粘土層理面上から出土した。

遺物分布は、まんべんなく散布しているわけではなく、視覚的にいくつかの集中に分けることができる。大きく観察するなら直径 10 数mの範囲で区切ることができ、細分すれば 2〜3m の範囲で境界を引くことができる。大きい単位で観察すると、求心性のある集中部と求心性に乏しく小さな島状分布の集合部が認められた。統廃合しながら区分した遺物集中は、石器類ブ

ロックＡ～Ｌとなる。さらに、群島状集合部は島ごとに、求心的集中部分は粗密の判断によって、小ブロックに細分を行った。あまりに大きい石器類ブロックは、２分して検討する場合がある。下位文化層出土の石器は、いずれかの石器類ブロック・小ブロックに所属することになる。また、視覚的判断によって設定された各石器類ブロックは、検討を進める中で統廃合される。石器類ブロックＢ、Ｃ，Ｄは、境界が鮮明ではなく、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｄ＋１・１out に整理できる可能性がある。

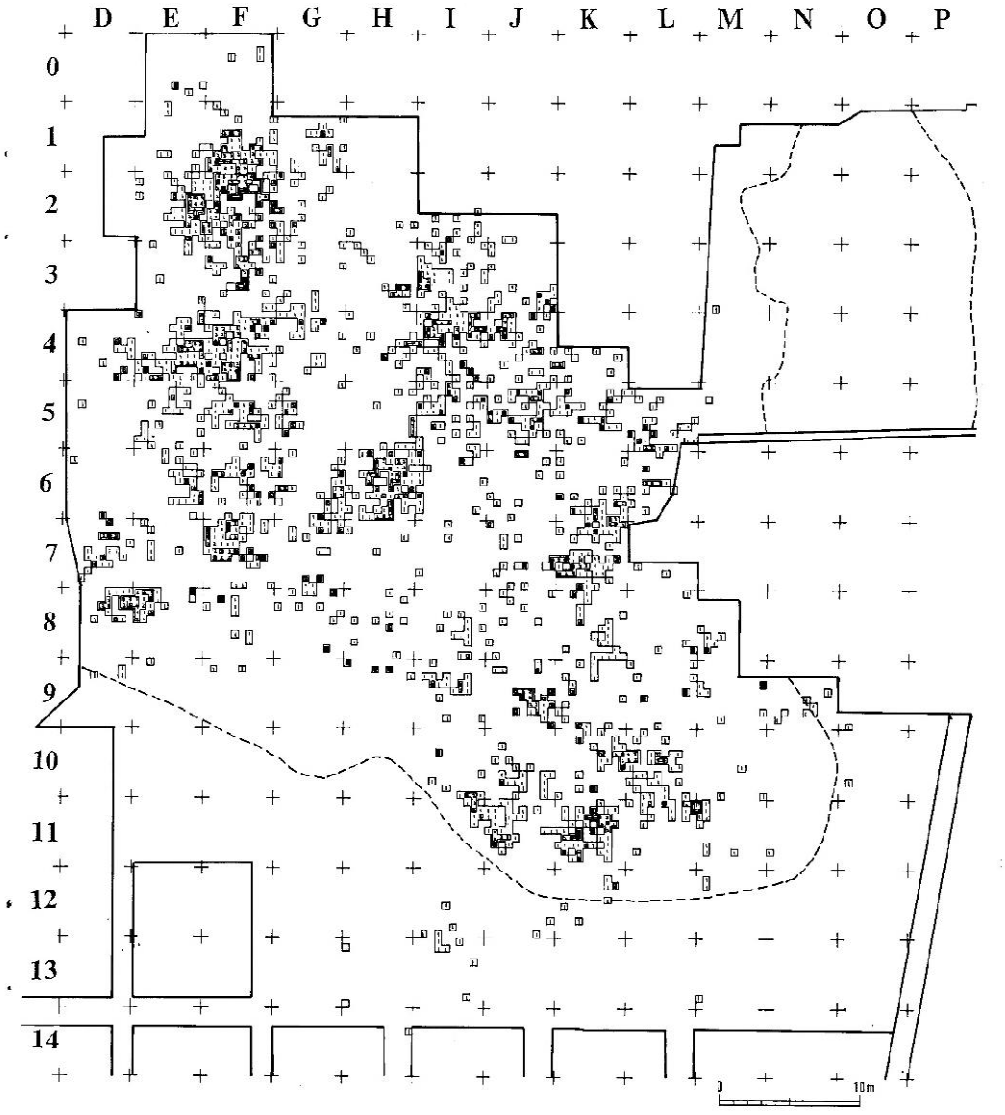


図 69　下位文化層石器分布状況

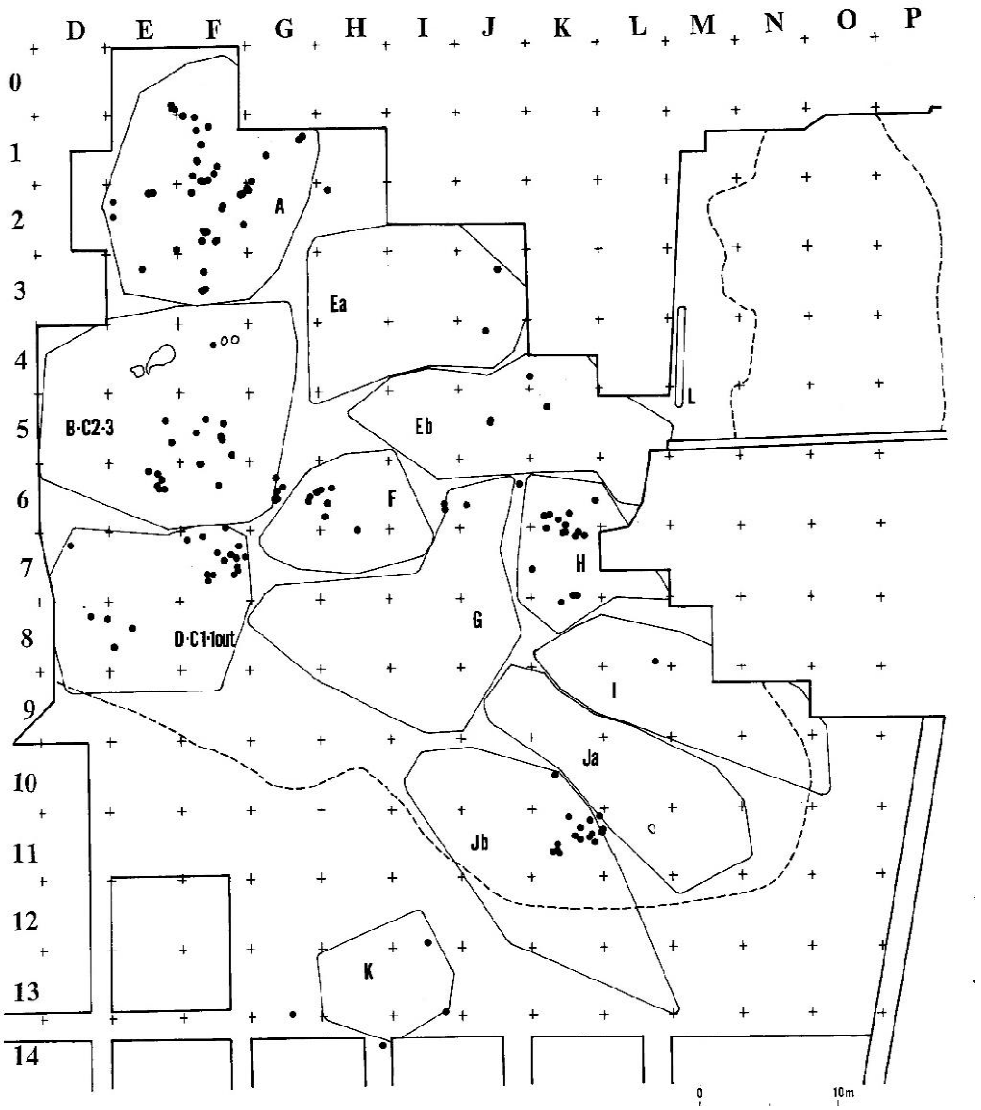


図 70　下位文化層石器ブロックと礫石分布図

下位文化層では、ナイフ形石器・掻器・削器・彫器・楔形石器・斧形石器といった定型石器と加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片・砕片・石核などの剥片石器生産による付随生産物、局部磨製石斧・礫器・磨石・敲石等の礫器類が組成するが、発掘調査中より、剥片石器がチャートとサヌカイトを石材としていることが気付かれた。両石材の石器群は遺跡内の分布状況に差があり、サヌカイトはほぼ全域から発掘されるが、チャートは北部に集中した。先の石器群の検討で明らかにしたように、サヌカイト製とチャート等製の石器群は、それぞれ瀬戸内と中国山地とに系譜が求められ得る石器群である。両石材石器群の、遺跡内での分布状況を明らかにする必要があるので、両石材の石器類の分布状況は、全石器群の検討と併せて、できるだけ分けても検討した。

設定された石器類ブロックＡからＬまでを観察しよう。Ａ、ＢまたはＢ＋Ｃ２・３、Ｅａ、

Ｅｂ、Ｆ、Ｈの６集中部は、遺物の集中度が高く、分布に途切れが無い。これらの集中度の高いブロックでは分布の粗密によってブロックに細分される。ＣとＤまたはＤ＋Ｃ１・１out、Ｇ、Ｉ、Ｊａ、Ｊｂ、Ｋの６または７集中部はいくつかの小集中部が集まってできていて、隣接したり、共通した内容を持つものを統廃合したものである。小集中部はそのまま小ブロックとして取り扱った。Ｌは、未発掘部が大きく評価できない。いずれのブロックも直径10m以上の面積を持つ。

石器ブロックの分布中心を、石器類の取り上げ座標を平均する事によって求めた。各ブロックの泥炭面からの距離によって、ブロックの離水度を判断すると、ブロックＡは、泥炭面からいちばん遠く舌状の中軸線上に位置する。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅａ・Ｅｂ・Ｆが遠く、Ｄ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊａ・Ｊｂが泥炭面に近い。Ｋは、泥炭面中にある。

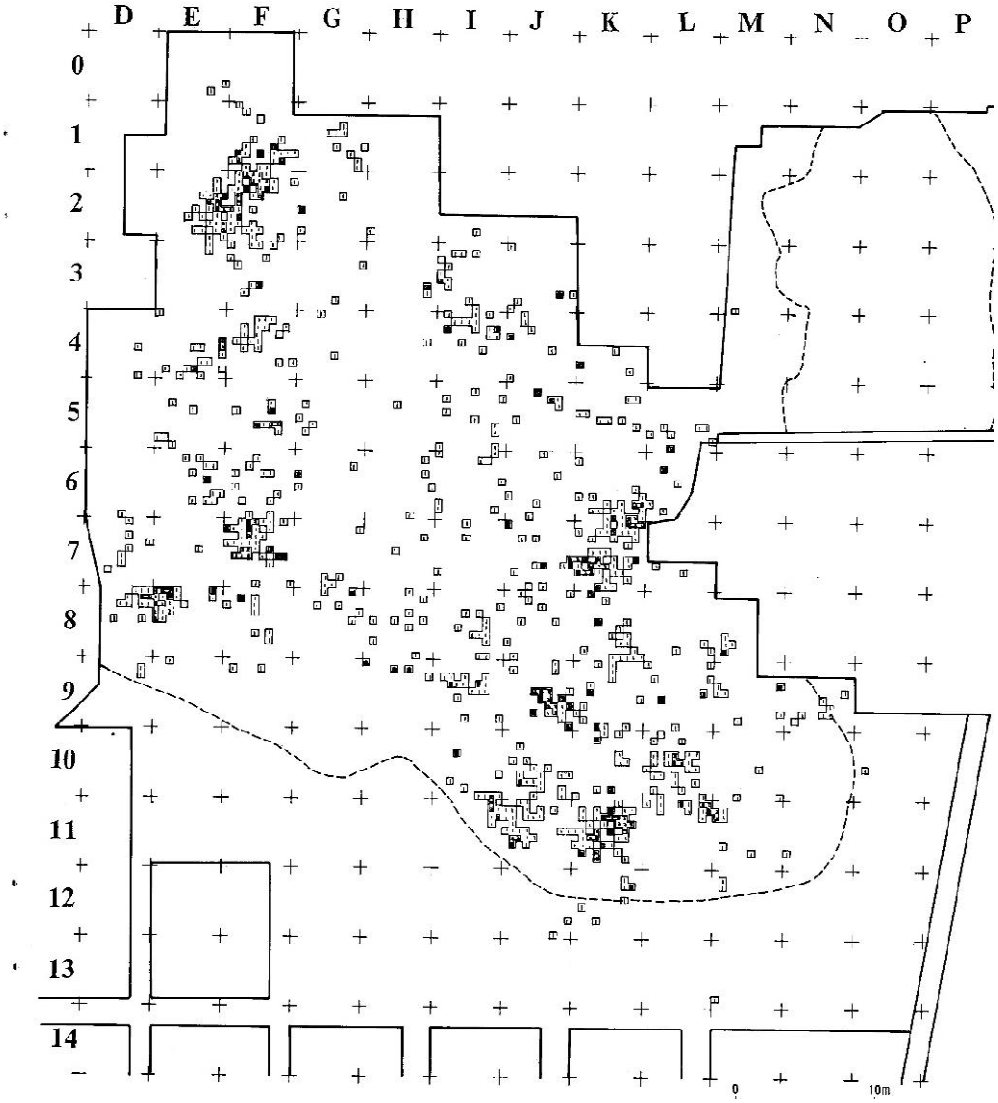


図 71　　下位文化層チャート等製石器分布図

SANUKITE

	Total des outils		KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	F	C	Nucléus
A	143	37	1	0	4	1	0	0	0	6	25	64	34	8
B	58	17	1	2	3	0	1	0	0	2	8	32	6	3
C	102	20	3	1	3	0	0	0	0	2	11	50	28	4
D	62	11	0	0	2	1	0	0	0	1	7	39	11	1
Ea	49	17	0	0	6	0	1	0	0	1	9	28	3	1
Eb	45	10	1	1	5	0	0	0	0	0	3	22	7	6
F	14	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	6	0
G	81	15	1	0	1	0	0	0	0	2	11	48	14	4
H	113	13	0	0	2	1	0	1	0	4	5	83	10	7
I	51	13	0	0	0	1	0	0	0	7	5	28	6	4
Ja	110	15	4	0	2	0	0	0	1	3	5	60	25	10
Jb	142	14	1	0	0	0	0	0	0	2	11	91	29	8
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
L	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
PD	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50	0	0
B+C2.3	86	23	1	3	4	0	1	0	0	2	12	45	13	5
D+C1.1out	136	25	3	0	4	1	0	0	0	3	14	76	32	3

CHAILLE etc,

	Total des outils		KN	EN	SC	P	DR	RF	UF	F	C	Nucléus	B.C
A	333	32	1	2	3	1	0	5	20	197	73	31	0
B	259	41	2	8	9	0	2	10	10	155	39	22	2
C	79	13	1	0	1	0	0	4	7	46	14	6	0
D	38	10	0	0	0	1	0	2	7	19	7	2	0
Ea	178	31	5	1	8	0	0	5	12	112	28	7	0
Eb	168	24	1	2	2	0	0	6	13	102	29	13	0
F	159	11	2	1	2	0	0	1	5	115	18	15	0
G	15	4	0	1	1	0	0	1	1	8	3	0	0
H	13	2	0	0	0	0	0	0	2	8	3	0	0
I	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0
Ja	53	1	0	0	1	0	0	0	0	41	6	4	1
Jb	18	5	0	0	2	0	0	0	3	6	5	2	0
K	13	5	0	0	0	0	0	1	4	7	0	1	0
L	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
PD	9	1	0	0	1	0	0	0	0	1	5	1	1
B+C2.3	310	52	3	8	10	0	2	14	15	187	44	25	2
D+C1.1out	66	12	0	0	0	1	0	2	9	33	16	5	0

表５　下位文化層石器ブロック別組成表

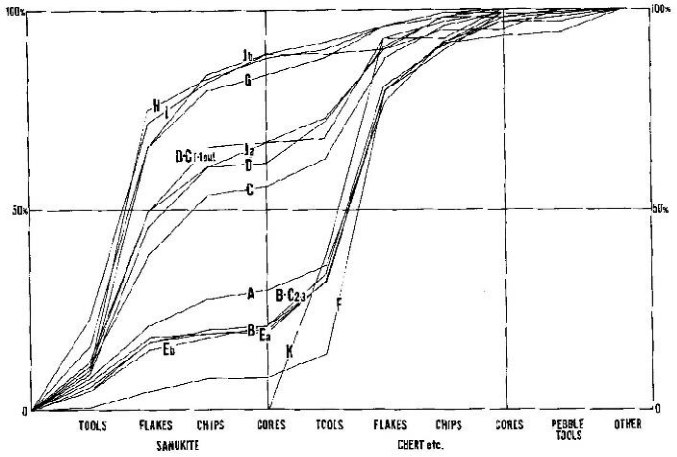


図 72　石器ブロック石器組成集積図　1

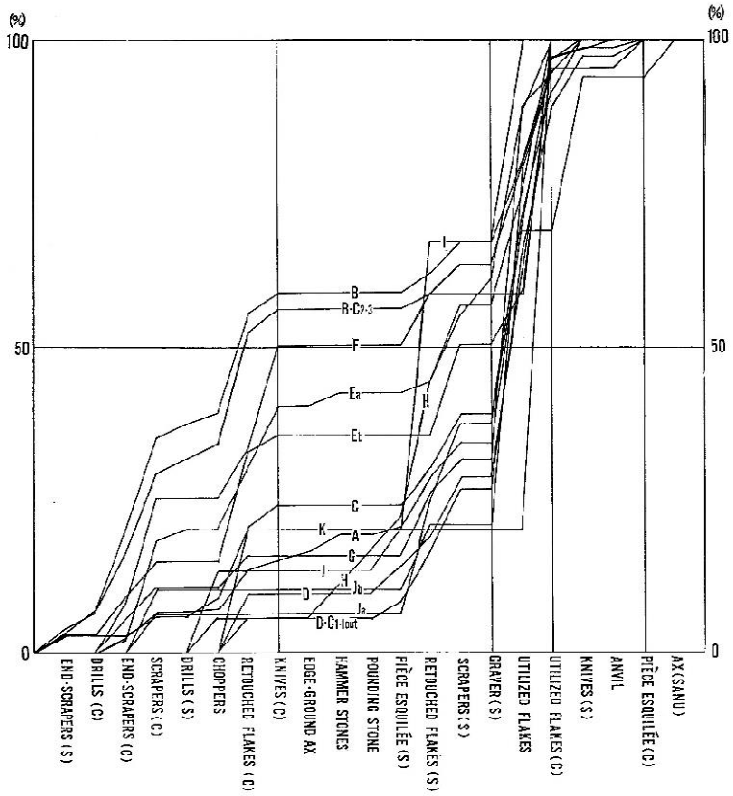


図 73　石器ブロック石器組成集積図　2

下位文化層の石器群は、系統が異なるサヌカイトとチャートの両石器群があるので、次に石材別に分布状況を観察しよう。サヌカイト製石器群の分布は、各集中部に広がるが、特にＡ、Ｄ＋Ｃ１・１OUT、Ｇ，Ｈ、Ｉ、Ｊａ、Ｊｂに豊富である。どちらかというと陸地部南部に多いように観察する。チャート製石器群の分布は、陸地部北部に集中する。集中個所ではＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｄ＋Ｃ１・１out、Ｅａ、Ｅｂ、Ｆに極めて集中する。これらは、中央に空白部を持ちながら環状に配置されている。南部のＪａ、ＪｂとＫにも疎らに分布する。全石器群の分布から視覚的に設定した石器類ブロックは、大きくみると石器類ブロックＧを重複領域として、南北に二分できる。

石器類ブロックの分布の状況を、求心的・散漫・島状などといった視覚的・漠然とした表現でなく、数値として遺物分布のあり方を把握するため、50 ㎝四角での両石材製石器類の点数を数え、その共伴平均個数を求めた作業をした結果、Ａ・Ｅａが平均値を越えて集積度が高く、Ｂ・Ｄ・Ｆがほぼ平均値、その他のブロックは平均値を下回った。特にＧ・Ｉでは遺物が散在している事が判明した。結果は、ほぼ視覚的な判断の妥当性を裏付けた。

全石器群・サヌカイト製・チャート等製石器群の平均共伴個数から考えると、サヌカイト製石器群とチャート等製は、それぞれの観察値よりも全石器群の共伴個数が高くなる事から、一見、南北に両者が分離して分布しているように見えるが、両者は積極的とまでは言いがたい

が、関係を持って分布している事が理解される。

石器類ブロックの石器組成

石器類ブロックごとの石器組成について検討してみよう。石器類の点数の多いのはブロックＡで 478 点、少ないのはブロックＫの 13 点、Ｉの 55 点で、石器類の数量は一定しない（表5）。極端な石器類の量的多寡の存在は、それらの石器類ブロック形成の背景が、必ずしも同じではない事を伺わせる。石器類点数の多いのは求心的分布の認められたブロックで、少ないのは「群島状」を呈したブロックである。石器類点数で 400 点を越えたのは石器類ブロックＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、多くが 100 から 250 点で、100 点を下回ったのは石器類ブロックＧ、Ｉ、Ｋ、Ｌがある。ブロックが単一の機能空間で構成される場合、複数の機能空間が重複して構成される場合など、小ブロックに細分して検討する必要がある。

サヌカイトとチャートの２群の石器類の石器類ブロック内での点数的比率を求めてみる。サヌカイト製石器類が、80%前後の高率を占めるＧ、Ｈ、Ｉ、Ｊｂの４集中部、60%前後のＤ＋Ｃ１・１OUT、Ｊａの２集中部に多く、主体となっている。サヌカイト石器群占有率が２0%前後のＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｅａ、Ｅｂ、Ｆ、Ｋの６集中部ではチャート製石器群の方が主体であり、Ａがサヌカイトをやや多く含み、ＦとＫが少ない。サヌカイト石材占有比率では、遺物集中部を３群に区別できよう。遺跡内での空間配置に照らしてみると、サヌカイト占有率によって陸地部南部と西部、北部の３つの領域に区分できる。

定型的石器と加工痕有剥片・使用痕有剥片の組成比率をブロック毎に観察してみると（図７2）、大きく二つのグループに分ける事ができる。ナイフ形石器・掻器・削器が多いＢ、Ｂ＋２・３、Ｅａ、Ｅｂ、Ｆ、Ｊａの一群と、加工痕有剥片・使用痕有剥片の多いＡ、Ｃ、Ｄ、Ｄ＋Ｃ１・１out、Ｈ、Ｉ、Ｊｂの群である。

各遺物集中部とも一通りの石器を保有するが、チャート製石器群主体のＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｅａ、Ｅｂ、Ｆでナイフ形石器・掻器・削器など全ての器種が豊富で、サヌカイト製石器群主体のＤ＋Ｃ１・１ｏｕｔ、Ｈ、Ｉ、Ｊａ、Ｊｂでは、サヌカイト製加工痕・使用痕有剥片が優越する。チャート製石器群主体の遺物集中部の石材別石器組成は極めて似ている。一方のサヌカイト製石器群主体の遺物集中部はばらつきが大きい。

サヌカイト製石器とチャート等製石器を分けて、どちらが多いかを検討してみると（図７3）、Ａ、Ｂ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｅａ、Ｅｂ，Ｋがチャート製石器主体で、まんべんなく石器組成を有している。Ｃ、Ｄ、Ｄ＋Ｃ１・１out、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｊａ、Ｊｂがサヌカイト主体で、ばらつきの大きい石器組成をしている。Ｊａで定型石器が多い事が注目される。

各遺物集中部での道具箱について検討しよう。それぞれの石器類ブロックは、遺物の点数では大きな差があるが、石器類ブロックＧ・Ｉ・Ｋ・Ｌなど特に石器類点数の少ないブロックを除くと、石器組成としては一応、基本的な石器器種を有している。南北に分割して比較した場合、南群・北群とも内部でほぼ等しい石器組成となる。剥片・砕片・石核等の付随生産物に合わせて、北群ではナイフ形石器・掻器・削器・錐状石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などの

豊富な石器組成、南群ではナイフ形石器・削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などが出土している。石器組成として、南北にほぼ等質な石器類ブロック群がある事がわかる。

石器類ブロックを、小ブロックに細分し、その組成傾向を観察してみる。ナイフ形石器・掻器・削器・錐状石器・楔形石器などの定型的石器を多く組成する小ブロックと、加工痕有剥片・使用痕有剥片の組成が多い小ブロックがあり、これが組合わさって、石器類ブロックを形成する。定型石器の多い小ブロックと少ない小ブロックが組み合わされたのはA、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｅｂの３石器類ブロック、多い小ブロックのみはＥａ、Ｆ、Ｊａの３ブロック、少ないのはＤ＋Ｃ１・１out、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｊｂの５ブロックである。石器類の組成が豊富なのは北群に、貧弱なのは南群に多く存在する。

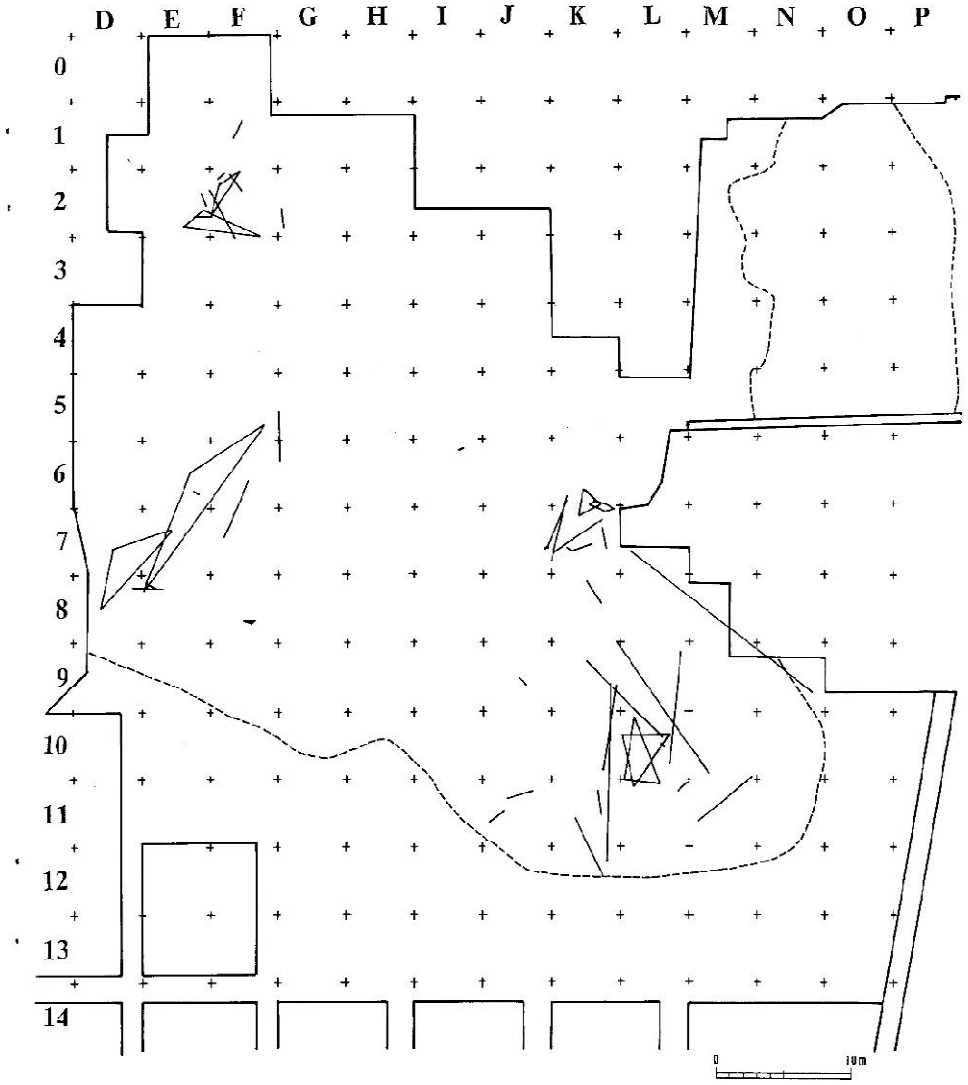


図 74　下位文化化層サヌカイト接合関係

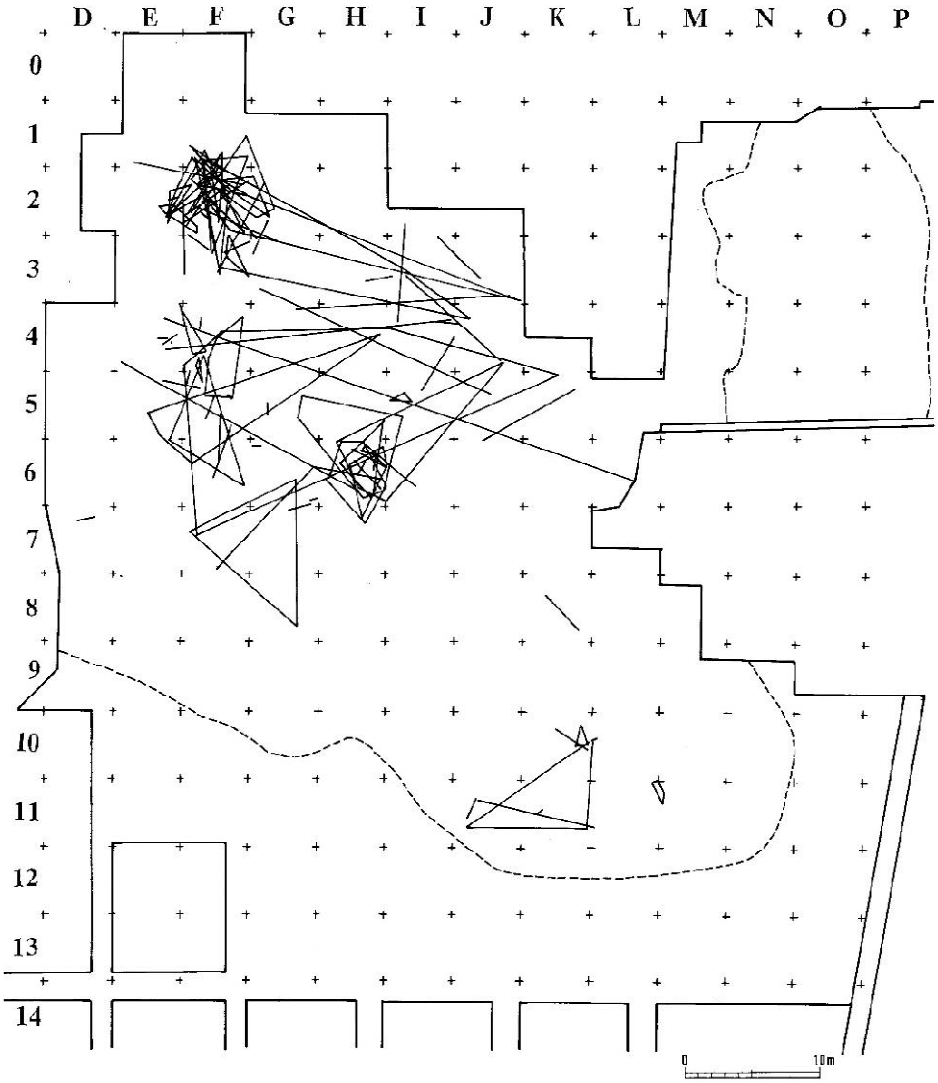


図 75　下位文化層　チャート等接合関係分布図

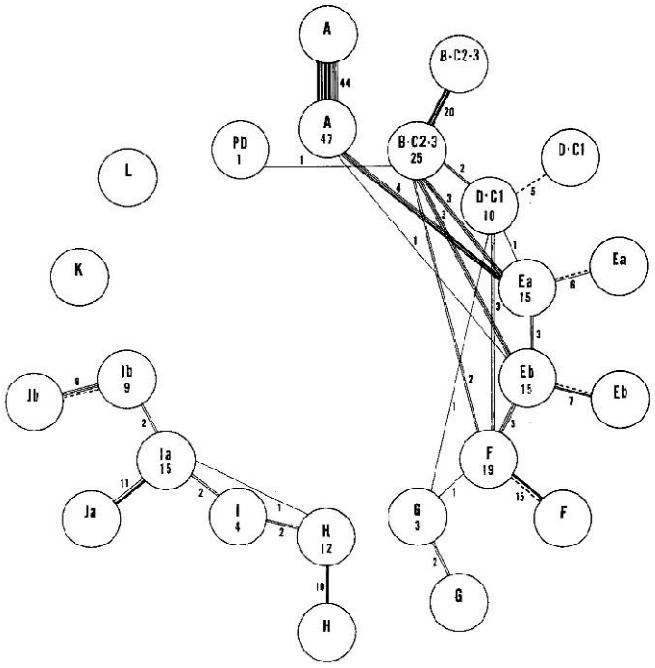


図 76　下位文化層接合資料ブロック間頻度

接合資料・個体別資料の分布

接合資料と個体別資料の分布状況を観察しよう。接合資料・個体別資料の分布は、石器の制作、移動と使用・廃棄の状況を示していると考える。接合資料・個体別資料の発見は、石材の個性を認め易いチャートは容易で、特徴に乏しいサヌカイトは極めて困難である。個体の識別は、チャート等製の石器類に限定される。接合資料の発見率も両者には久しい差があり、チャート製石器類の接合率約 24.5%、サヌカイト製石器の接合率は約 11.8%である。

サヌカイト製接合資料の分布（図 74）は、サヌカイトの多く分布するＡ、Ｄ＋Ｃ１・１ＯUT、H、Ｊａ、Ｊｂ周辺に限られる。剥片生産段階の多くが欠落するサヌカイト製石器群の場合、点数の多い場所で石器製作・調整や使用が行われ、使用後遺棄または破損廃棄にいたったと考えることができる。多くが石器類ブロック内での接合である。石器類ブロック間に認められたサヌカイト製接合資料には、石器の破損接合が多く認められている。

チャート製接合資料の分布（図 75）は、チャート製石器群が集中して分布する北半に片寄っている。剥片生産工程が遺跡内で一貫して行なわれたチャート製石器群に含まれる接合資料は、圧倒的に剥片生産段階のものが多く、Ａ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆ、の遺物集中部に多い。接合資料分布はほとんどが１つの集中部内で完結しているものの、環状分布の空白部を跨いで動く接合個体もあり、これら移動する資料は石器や剥片である場合が多い。石器類ブロックを移動して剥片剥離を続けた個体は認められない。石器類ブロックＡ・Ｊａでは、ほとんどの接合資料がブロック内で完結する。ブロックＢ＋Ｃ２・３、Ｆ、Ｅａ、Ｅｂ、Ｄ＋Ｃ１・１out は、相互に接合資料を共有する。近接するＡとＢ＋Ｃ２・３間には接合資料は認められない。Ｅ

ａ、Ｅｂ内部では接合率は低く、ほとんどが石器または剥片の破損接合である。ＡとＥａ間には、僅かの接合資料がある。

個体別資料はチャート等製石器群にのみ認められた。個体別資料の分布（第 422 図）は、北半に集中し、僅かに南部に散在する。泥炭面にある石器類ブロックＫやサヌカイトを主体とするブロックＪａにある個体の一部は、北群に同一個体を持つ。

石器の機能と場の機能

遺跡全体の石材別石器器種間の相関関係を観察するために、器種分布位置関係でどれだけ隣接確率が高いかを統計学的に求めた。石器分布の位置関係の中に制作・使用・廃棄等の何らかの関係があれば共伴確率が増減して、一般値を上下する度合いでその相互の関係強度が示される。検定基準として２ｍ以内を採用した。１が遺跡の一般値であり、数字が１より大きいほど関係が強く、少ないほど弱い。この結果をもとに樹状図（図 79）を作成した。サヌカイト・チャート両製掻器、サヌカイト・チャート両製錐状石器、チャート製削器、礫器、チャート製加工痕ある剥片が一つのクラスターを標準値の５倍以上で作る。局部磨製石斧と槌石、磨石もクラスターを作る。サヌカイト製楔形石器とサヌカイト製加工痕ある剥片、サヌカイト製削器、サヌカイト製彫器も 2.3 倍程度の緩いクラスターを作る。サヌカイトとチャート両製の使用痕ある剥片は、他の器種と結びつかず疎らに分布するらしく、クラスター内に組み込まれない。サヌカイト製ナイフ形石器と台石、チャート製楔形石器が一つのクラスターになる。サヌカイト製斧形石器は、単独で位置する。

石材別器種間分布の相互関係強度は、サヌカイト製とチャート製の両石器群の分布が２つのクラスターを作り、２つの異なった石器群の構造を示す。サヌカイト製石器群の中で特異な存在であった掻器が、チャート製石器群のクラスター中に含まれたことは、サヌカイト製掻器がサヌカイト製石器群ではなくチャート製石器群に組み込まれたものであることを暗示する。チャート製クラスターが強くでるのは、北半に集中するからであろう。同時並存ながら、サヌカイト製とチャート製の両石器群は異系統の異なる分布パターンを持つものとして分離できる。

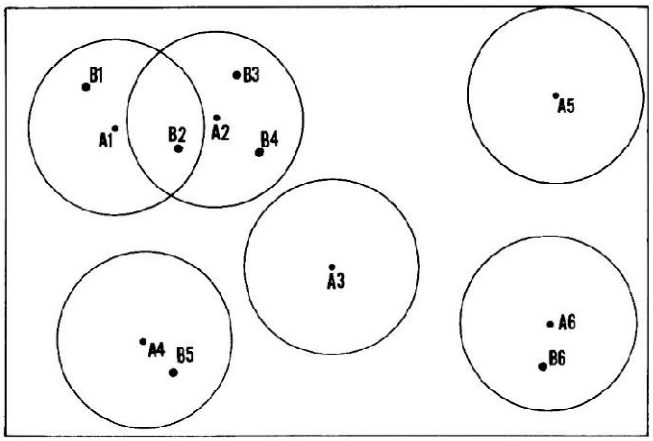


図 77　石器機種間分布相関のモデル

	点数	密度	CHERT 点数	密度	SANUKITE 点数	密度
KNIVES	24	.06544	12	.00327	12	.00327
END-SCRAPERS	19	.00518	15	.00409	4	.00109
SCRAPERS	58	.01581	30	.00817	28	.00763
piece-esquilees	6	.00164	2	.00055	4	.00109
DRILLS	4	.00109	2	.00055	2	.00055
GRAVERS	1	.00027	0	---	1	.00027
RETOUCHED FLAKES	66	.01799	35	.00954	31	.00845
UTILIZED FLAKES	185	.05044	85	.02318	100	.02726
AX	1	.00027	1	.00027	1	.00027
EDGE GROUND AX	1	.00027	1	.00027	1	.00027
CHOPPERS	5	.00136	5	.00136	5	.00136
HAMMARS	4	.00109	4	.00109	4	.00109
POUNDING STONE	1	.00027	1	.00027	1	.00027
ANVIL	1	.00027	1	.00027	1	.00027
FLAKES	1378	.37816	819	.2233	558	.37816
CHIPS	412	.11233	233	.06353	179	.11233
CORES	159	.04335	103	.02808	56	.04335
BLANKS OF CORE	4		4	.00109		
DEBRIS	25		25	.00682		
TOOLS	376	.103	195	.053	195	.53

	点数	面積合計	定型石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片・礫石器類 対象点数	観察値合計	観密値	期待値	共伴強度
CHERT+SANUKITE	376	4722.56	376	2223	.471	.103	4.573
CHERT	195	2449.2	195	1208	.493	.103	4.786
SANUKITE	195	2449.2	195	1099	.449	.103	4.359
SOUTH	81	1017.36	81	194	.191	.103	1.854
NORTH	309	3881.04	309	2070	.533	.103	5.175

表 6　石器機種別密度

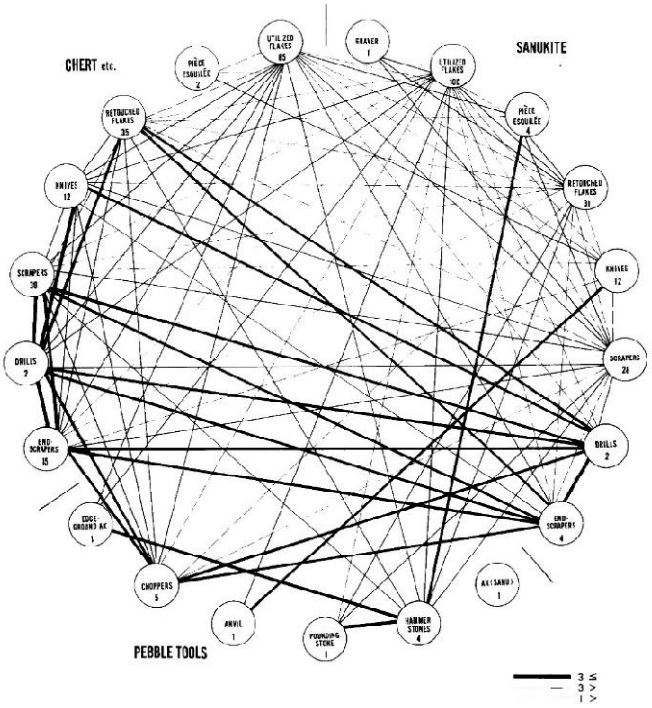


図 78　石器機種間分布相関関係

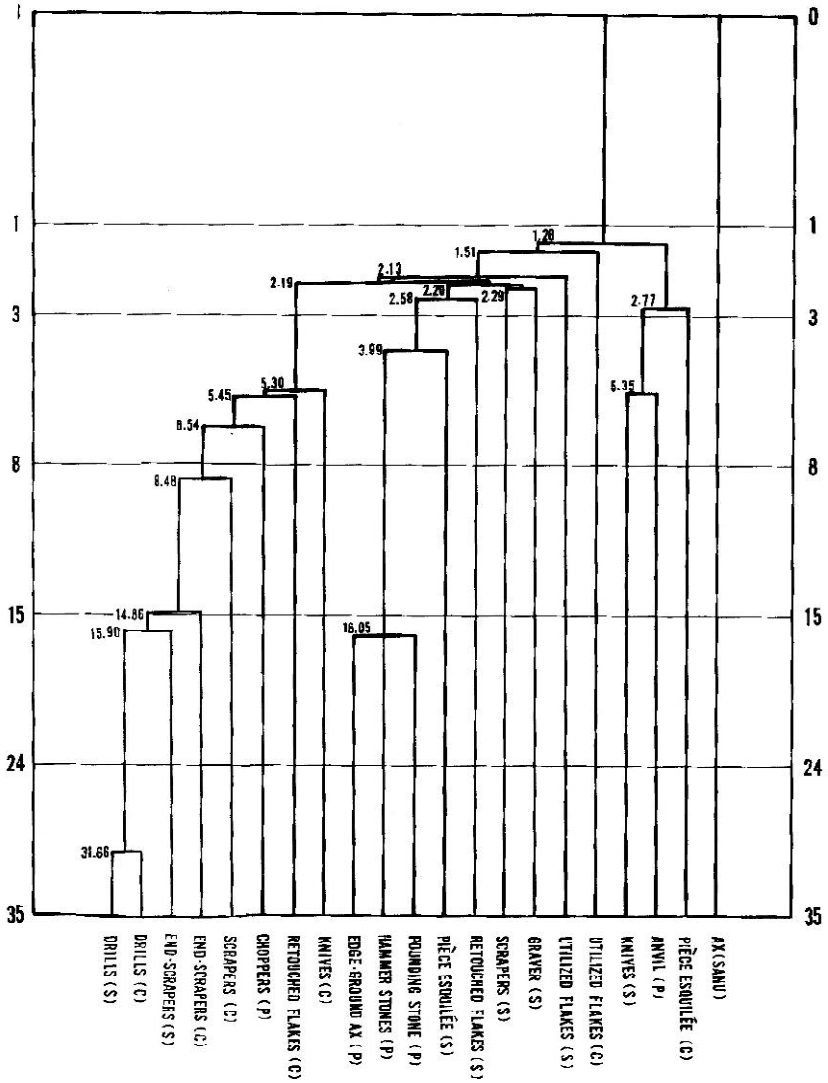


図 79　石器相関関係樹状図

写真 9　下位文化層礫土壙

写真 10　下位文化層礫土壙断面

板井寺ケ谷遺跡下位文化層で発掘された遺構としては、配石・配石群・礫ブロック、土壙、炭化物密集部がある。

配石・配石群・礫ブロックは、礫石を単独もしくは複数配置したものである。礫石は、腐

敗・風化を受けず、全てが遺存していると考えられる。配石・配石群・礫ブロックの分布は、石器点数の多い石器類ブロックに重なって認められる。配石群は、チャート製石器類の多い北群やブロックＨ、Ｋにあり、南群には乏しい。下位文化層の微地形の中では、傾斜のややきつい部分でブロック周縁に配石が多く、緩やかな部分のブロック中心に配石群・礫ブロックが配される事が多い￥。礫ブロックの構成礫は、受熱したものが含まれ、多くが小さく破砕している事から、火に近く、打撃を受けうる様な使用が一定の空間で行われたと考え得る。配石・配石群は、大型礫で、受熱が認められず、多くが完形を保つ事から、石器製作や調理、居住との関係が考慮される。

土壙は、Ａに土壙１基、Ｂ＋Ｃ２・３に土壙４基、Ｊａに土壙１基で、このうち１基は住居の可能性がある。ブロックＢ＋Ｃ１・１out の土壙４基は、ブロックの北半に集中する。土壙の数は多くなく、埋没するまでの年月で破壊された可能性があるが、石器類ブロックに付随して出現する遺構と見なし得る。土壙の性格としては、墓、貯蔵施設、廃棄施設、住居等が推測されようが、必ずしも特定に至らない場合が多い。第１・２土壙は、礫石が充填された小型のもので、調理施設、石器が内部から出土した事から祭祀施設のいずれかの可能性が有力と考えられる。第３・４土壙は浅い皿状の大型のもので、大型の第３土壙検出時に上面で定型石器が集中した事、復元推定した土壙の形状が直径 2.5ｍの円形になる事から、住居である可能性が考えられた。この場合、第４土壙は住居の一部か付属施設と考えられる。第５・６土壙は小型不定形のもので、必ずしも人為とは決めかねる。ある。第５土壙内部には配石群構成配石１個が認められ、土壙と配石群の形成が同時であることが知れる。第６土壙では微細炭化物多数が埋土に含まれ、近傍に火処のあった事が知れる。

炭化物密集部は、泥炭面で４ヶ所が認められた。南地区２ヶ所、東地区２ヶ所で認められ、あたかも陸地部を囲むように配される。陸地部に認められたものはないが、土壙６の内部に多量の微細炭化物を含む埋土が認められた事から、陸地上でも同種の炭化物の集中が全く無かったとは言えない。石器類ブロックとの関係は薄いと考えられる。炭化物密集部が泥炭面中に発見されたことから、世帯の火処とは考えにくく、作業上のものか、失火、山火事の延焼とも考えられる。また、自然状態での遺跡周辺が森林環境であることから、集落選地の為の野焼き行為の存在を示すかも知れない。

下位文化層のいずれの石器類ブロックの大きさも、直径 10〜15ｍ前後の空間を有し、いくらかの刺突具、調理・加工用具が伴う。人間集団が一定日数居住した空間に本来必ず残されるべき遺構として、住居・火処がある。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層において、住居の可能性のある遺構として、石器類ブロックＢ＋Ｃ２・３の第３土壙があるに留まる。その他のブロックには、住居施設と考えられる遺構は検出されていない。下位文化層において住居施設は、掘り込みや柱穴などを伴わない、構築性の低いもので、本来的に考古学的検出が困難だったり、すでに自然破壊されたと考えた方がよい。

火処は、泥炭面にある炭化物密集部と第６土壙内の炭化物、受熱した石器類の存在から窺え

る。炭化物密集部は、石器類ブロック外の湿地部に存在し、居住空間外と考えられる。第６土壙は石器類ブロックＪａにある。土壙自体が火処とは考えられないが、炭化物の集中は近くでの火処の存在を推測させる。微細炭化物の分布状況について、十分な調査は出来なかったが、陸地部分で火処の形成による炭化物の生産があっても、風水の影響によって失われている可能性が高い。受熱石器類は、数量的多少はあるものの、石器類ブロック全てで検出され、石器類の一部がしばしば受熱しうる状況があったことを示唆する（山下 1988）。明瞭な火処や炭化物密集部は認められないが、本来、全ての石器類ブロックに火処があったと考え得るであろう。

ｂ，集落構造

下位文化層の空間分析

旧石器時代遺跡の遺跡構造把握のため、遺物分布分析の基礎的単位として、ブロックまたはユニットという単位が用いられる。板井寺ケ谷遺跡の旧石器時代集落復元を目指そうとする場合、この設定に付いて整理しておくことが必要である。旧石器時代遺跡の集落景観復元に意欲的に取り組む鈴木忠司氏は、ブロックとユニットの定義を以下のように整理している。

「ブロックは、純粋に遺物の分布上の視覚的な、まとまりに対して用い、分布上のまとまりということの他に意味をもたない事とする。」「ユニットは、ブロックにおける見かけ上の単位を越えた、・・・機能的なあるいは行動型に裏打ちされた意味づけをなして、これを用いる。」「・・・単一のブロックとして認めた中に、分析者の視点にそって、複数のユニットを設定しても良い。また逆に複数のブロックを統合してユニットを設けてもよい。」

鈴木氏等は、寺谷遺跡（鈴木編 1980）・野沢遺跡（鈴木編 1982）・溝口遺跡（山下・南 1986）の調査を通して、旧石器時代遺跡を集落として捉え、それを構成する基本的単位として世帯の存在を考えている。集落景観とその構成単位の把握のため、一世帯によって集中的に残されたと考えられる遺構・遺物群に対し、分析単位として世帯ユニットと呼称している。

板井寺ケ谷遺跡では、ブロック・ユニットの概念を、鈴木氏らの成果に準じて使用する事としたが、分析したように複数の段階のまとまりを問題としてきたという、板井寺ケ谷遺跡独自の状況もある。まず、下位文化層全体、南北の構造、サヌカイト製・チャート等製石器群の分布、石器類ブロック、小ブロックなどであり、配石・配石群・礫ブロック、土壙、炭化物密集部などの遺構のまとまりである。全てが視覚的なまとまりとして把握され、いくつかの分析を経て、統廃合される。多くの段階を重複して検討したのは、集落全体の景観、瀬戸内系・中国山地帯系の集団間関係、集団毎の世帯関係、世帯内の場の機能の重層的構造を明らかにしたいが為であった。このため、一部の資料操作は鈴木氏らと必ずしも一致するものとなってはいない。

下位文化層における南北構造、瀬戸内系・中国山地帯系石器群の関係は、異系統の石器群が直接接触をした状況を示し、従来知られていなかった地域集団間の動態を示した希有の例であると考えられるので、重点的に検討する事となった。この場合の分析単位は、石器類ブロック

の南北両群、サヌカイト製・チャート等製石器群である。総体としての集落は、南北構造にも関わらず、基本的居住単位としての世帯により構成される。しかし、南北両者の間に構造的相違がある事から、構成世帯の出自は瀬戸内系・中国山地帯内系のいずれかに求められ、世帯の抽出は両石器群毎に行う必要があり、全集落を一つの基準で判断する事には困難があると考えられる。

筆者は板井寺ケ谷遺跡下位文化層の状況から、ユニットという分析用語を世帯に保持または世帯間の関係によって形成されたと考えられる遺構と遺物の集まりに適用することにした。世帯に対応するまとまりが、世帯ユニットとなる。世帯ユニットは、複数が構造的関係を持って、南北両群のまとまりを形成するとともに、総体としての集落を形成する。一方、集落としての段階から考える場合、それを構成する基本的単位として下位文化層全体の段階と、南北構造を個別の集落と考える段階の二つがある。この段階は、この様な南北構造を有する板井寺ケ谷遺跡特有のものである。そこで、世帯に保持される遺構と遺物のまとまりの把握作業に合わせ、南北両群の内容把握にも心がけた。

下位文化層の集落構造の追求は、個別の検討課題の結果の当否はともかく、解釈的要素が強くなる。当然、導かれる結論も仮説的である。しかしながら、異なった系統の石器群の共存という、希有の考古学的事例であり、積極的に可能性を探る意義は大きいと私案する。

南北構造

サヌカイト・チャート製両石器群は、石器類の技術形態学的特徴、復元された剥片剥離技術、石材によって、異なった石器文化伝統の石器群である事が判明した。サヌカイト製石器群は、瀬戸内系旧石器群としての形態的・技術的特徴を備えている。チャート等製石器群は、縦長剥片剥離中心の剥片剥離技術を母胎とし、中国山地帯に広がった旧石器群と共通性がある特徴を備える。サヌカイトは瀬戸内・近畿地方中央部からの遠距離石材であり、チャートは板井寺ケ谷遺跡周辺で普遍的な在地石材である。

両石器群の判別は、技術形態学的に曖昧なものがあるが、石材で区別するのが分かりやすいので、サヌカイト製石器群＝瀬戸内系石器群、チャート等製石器群＝中国山地帯内系石器群と考え、遺構と遺物の分布状況を解釈する。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層のように、異なった技術形態学的特徴を持つ石器群が二つ同時に発掘された場合、可能性ある解釈は以下のように大きくまとめて三つある。

１、一見同時のように見えるが、両者に時間差がある場合。
２、一つの集団が二つの石材と技術を使い分ける場合。
３、同時に二つの集団が、それぞれの石材と技術を使用した場合。

両石器群の同時性は、チャートとサヌカイトのどちらが主体石材であるかに関わらず、どの遺物集中部でも共伴することで証明される。集中部の中心が一致する場合が多い。下位文化層全体での両石器群の積極的共伴関係が認められる。また、石器類の組成には、サヌカイト製掻器や斧形石器など、チャート等製石器群からの影響とも思える器種がある。両石器群は全く

の同時期と考えてよい。視覚的には、チャート等製石器群の分布が北半に片寄るのは、南半に立ち入りにくい存在があった事の証明である。考古学的に考えて同時性を認め得る事から、仮説１の可能性は低い。仮説２はどうだろうか。下位文化層全体として両石器群は積極的共伴関係にあるが、主分布域は南北に片寄る。この場合、石材と技術を使い分けようとするとき、大きく場所を替えて行った事になるが、チャート等を山側で使用すべき理由がない事、もともとサヌカイト製石器群は瀬戸内系、チャート等製石器群は中国山地帯内系石器群である事が明かで、仮説２も難しい。結局残るのは、仮説３である。

板井・寺ケ谷遺跡下位文化層でのチャート製・サヌカイト製の２つの石器群は、石器組成内容と石器制作技術、遺物分布の片寄り、器種間の分布相関関係強度による遠近、石器接合資料の分布関係から、

１，瀬戸内系と中国山地系の２つの旧石器時代集団が、
２，それぞれの存在を意識しながら瞬間的同時期に１つの遺跡に共存し、
３，中国山地系集団は北半に、瀬戸内系集団は、南半に居住した。
４，両者の石器群が混じることから、何らかの共同が行われた。

ことが導き出せる。

両石器群の分布は、下位文化層全体であるが、とくに石器類ブロックＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｅａ、Ｅｂ、Ｆ、Ｋ、Ｌにチャート等製石器群＝中国山地系石器群の分布主体域があり、Ａ、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｊａ、Ｊｂにサヌカイト製石器群＝瀬戸内系石器群の分布主体域がある。両石器群を保持した集団として、それぞれに中国山地系居住集団、瀬戸内系居住集団が相当するだろう。両居住集団の実態解明は、世帯に保持された遺構と遺物のまとまりである世帯ユニットの検討を待たねばならない。

住居と世帯の認定について

世帯に保持されたと考えられる遺構と遺物のまとまりをどの様に把握するかは、旧石器時代集落研究に留まらず、先史考古学一般にかかわる、大きな問題である。集落研究にとって、それを構成する世帯と住居の数と内容把握は、欠くべからざる要素である。ところが、旧石器時代において明確な住居遺構の検出が希なため、縄文時代以降のように検出した住居遺構をもって世帯と見なす事は出来ない。

現在、旧石器時代集落の「世帯」認定は、住居遺構の欠落によって、遺構と遺物のまとまりから行おうとする事が、一般的動向となっている。また、遺構や自然遺物に乏しく、石器・礫石以外の出土物の希な日本では、視覚的に判断する事は困難で、石器・礫の接合関係も含め徹底的な分布の検討作業が必要となっている。

この様な状況から、1970 年代に入って、砂川遺跡で個体識別・接合作業の成果とブロックの分析を結び付ける試みが行われ、野川遺跡では、石器類の分布のまとまりと組成の違いを、ユニットとして把握しようとした。また、先に述べたように寺谷遺跡、野沢遺跡、溝口遺跡、広野遺跡では、鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫氏らによって、各種・各段階のブロックをユニ

ットに統廃合し、世帯存在を明らかにすることが試みられている。

埼玉県砂川遺跡では、Ａ、Ｆの２地点、合計６ブロックに対し、ブロックごとに６世帯を認める解釈、周辺に未発掘の世帯がある大集落と考える解釈、１～３世帯のＦ→Ａ地点への回帰を考える解釈、Ａ・Ｆ両地点を同時存在の２世帯とする解釈がある。

遺構・遺物の分布の中で、世帯をどの様に認定するかは、多様な解釈が行われている。この様に、世帯の認定を積極的に行おうとした場合でも、個々の場合、必ずしも判断基準の一致を見ているわけではない。特に、最も精緻な情報の公開が行われた砂川遺跡では、世帯の認定・同時性の判定でたくさんの解釈がある。たとえ、自然遺物などの遺存状況がどんなに良くても、視覚的に住居遺構が認められない場合、解釈が分かれることも知られている。遺構・遺物のまとまりと世帯の行動を同時に観察することの出来ない旧石器時代にあって、住居遺構がない限り、世帯としての決定的考古学的証拠を手にすることは、まずないと考えるべきである。現状において、世帯の認定は、民族考古学の成果や外国の事例を援用したとしても、考古学上の解釈的・仮説的な検討段階に留まっているといえよう。逆に考えると、集落の検討には、解釈的・仮説的な部分が必然であることになる。結果として、考古学的に検出される数々の顕在・潜在構造の複合の、ある組み合わせをもって、世帯存在と見なすことになろう。

以上のような状況を前提として、板井寺ケ谷遺跡の分析にあったって筆者は、遺構と遺物の潜在的・顕在的分布構造の組み合わせから、世帯の認定の条件を以下のように考慮した。

１、世帯を支え得る石器（道具）を確保していること

２、施設（住居や炉、配石群・礫ブロックなど）が認められ、世帯として十分な空間を有すること

３、石器類の接合資料・個体別資料分布の完結性があり、主体的な剥片剥離作業、石器生産が認められること

４、占有空間での「場」の使い分けが認められること

５、石器類ブロック相互の位置関係が独立的であること

必ずしも、これら全ての要件が満足されなければ世帯を認定していけないわけではない。また、必要な用件の欠落があるとも考えられ、全てを満たしても世帯の存在を実証するわけでもない。遺構・遺物の分布の中で、考古学的に仮想される世帯と実際の世帯存在の間に、差異があることは、容易に予測されよう。しかし、実際の世帯と近似した考古学的仮想世帯は、集落の実態解明に一歩近づける唯一の手段である。世帯存在の仮想という考古学的仮説の当否は、今後個々の事例を重ねることによって、明かとなろう。同時に、考古学的仮想世帯を、より実際の世帯に近似させ得るようになると考える。ここでは、従来の解釈では抜け落ちる場合の多かった世帯の占有空間の広さに注意を払い、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の遺構と遺物分布を残した行為者の実像を解明する手段として、検討を進めることに専念する。

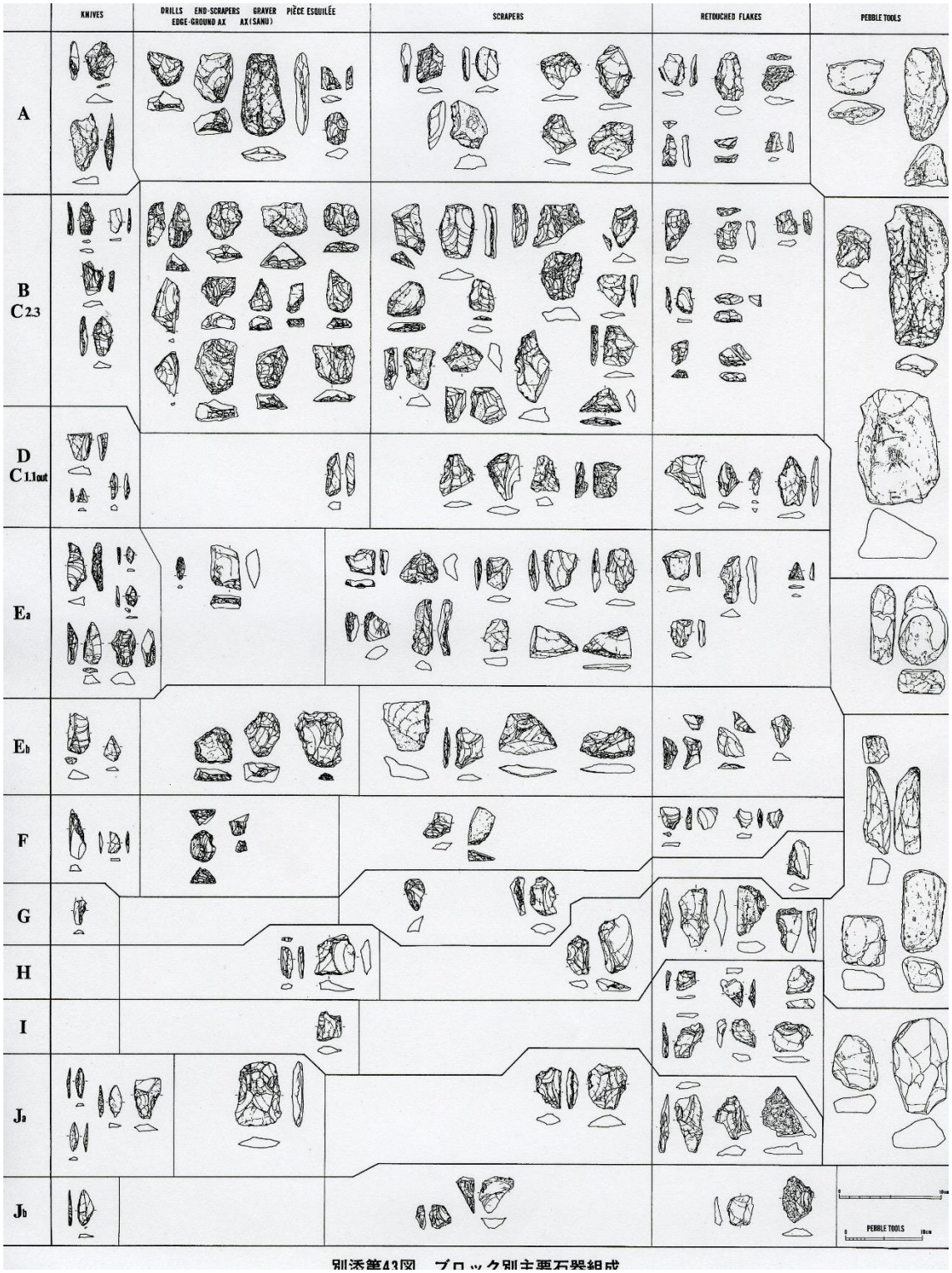


図 3-3-14　ブロック別主要石器組成

南北両群とユニットの設定

先にあげた世帯存在を認定する要件は、下位文化層に瀬戸内系と中国山地系の二つの集団があり、それぞれの石器類ブロックの石器類組成や、分布上の石器器種間関係も大きく異なることが、すでに明かとなった。南北両群で、異なった基準によって世帯ユニットの設定が必要となる。特に、定型的石器の組成比率がチャート等製石器で高く、サヌカイト製石器で低い点は、両石器群それぞれの道具箱が異なっていることを示唆した。サヌカイト製石器群の分布する南群では、チャート等製石器群の分布する北群よりも定型石器が少なくても世帯ユニットを認めることが妥当であろう。接合資料についても同様の傾向があるので、剥片剥離・石器製作作業の活発さの判断も、これに準じよう。判定した結果は、以下のようになる。

チャート等製石器群が集中する北群では、石器類ブロックＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｄ＋Ｃ１・１out、Ｆ、がこの要件をほぼ満たしている。石器類ブロックＥａ、Ｅｂ、Ｇでは、石器組成が貧弱だったり、剥片剥離作業が存在しない、場の使い分けが認められないなど、要件の一部または全てに欠けている。北群では、世帯に保持されたと考えられる遺構と遺物のまとまり、世帯ユニットをＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｄ＋Ｃ１・１out、Ｆの４個所に認めることにする。石器類ブロックＤ＋Ｃ１・１outは、世帯とユニットとしての要件をほぼ満たすが、石材組成と剥片剥離作業の不活発さの点で、他の世帯ユニットと異なっている。このＤ＋Ｃ１・１outは、サヌカイトの石器類組成比率がチャート等を上回っている点で、北群と南群の中間的様相をした世帯ユニット的である。Ｅａ、Ｅｂ、Ｇは、特定の世帯として特定できない空間であるが、石器の移動が周辺の世帯ユニットから認められることから、世帯間の共有的空間と見なした。これは、具体的な遺物の動きの分析から、作業や廃棄の為の空間と仮定できよう。石器類ブロックＧは、南北の境界領域ではあるが、サヌカイト製石器類組成比率がチャート等製石器類よりも高く、むしろ南群に親和性がある。

サヌカイト製石器群が集中する南群では、サヌカイト製石器類が分布主体であり、石器組成や遺物の分布に特徴が乏しいため、世帯ユニットの設定の根拠を見いだすのは容易ではない。石器類ブロックＨは、石器組成が十分ではないものの、ほぼ要件を満たす。石器類ブロックＪは、単一の世帯とするとやや範囲が広すぎるし、Ｊａ、Ｊｂの両方とすると両者の内容に違いがありすぎ、ブロックＪに世帯ユニットを認めるのは肯首できるが、その数と実態には問題を残した。南群では世帯ユニットを、Ｈ、ＪまたはＪａ、Ｊｂの、合計２乃至３個所に設定できる。Ｇ、Ｉ、Ｋは、石器の分布、接合資料の希さから、世帯間の共有空間と見なした。作業や廃棄空間と考えておく。石器類ブロックＫは、石器類全てがチャート等製であること、泥炭面に離れて位置すること、個体の共有関係から、南群のサヌカイト製石器群には含め得ず、北群の突出的発現と考えた。

下位文化層では、系統の異なる二つの集団が南北に接して同時に存在する。この空間配置を俯瞰図にして示す（図 81）。

世帯ユニットの構造

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の南北両群で、世帯を設定する場合、異なった基準で世帯の要件を満たしたかを判断する必要があった。瀬戸内系集団における世帯と中国山地系集団の世帯では、考古学的事実として仮想される世帯存在は、多くの点で異なっている。当然、実際の世帯も、両集団では違ったことは間違いない。

それでは、同一集団内の世帯のあり方はどうだろうか。ＡとＢ＋Ｃ２・３は、チャート等製石器群の主に分布する北群において、最も石器類の出土した世帯ユニットである。そこでは、石器類の他に配石や配石群・礫ブロック、土壙などの遺構も存在し、石器ブロックの範囲も明瞭である。第Ⅳ章第３節６ｅで、ＡとＢ＋Ｃ２・３の世帯ユニット内空間配置を検討した。南群の世帯ユニットでは、その仮想世帯存在の内容に不安があって、断念した。

この二つの世帯ユニットを、定型石器、加工痕有剥片・使用痕有剥片、剥片、石核、接合石器類、遺構がどの部分に分布するかを観察し、空間機能の配置を検討した。同じ意図で小ブロック石器組成の比較を行っているが、小ブロックの設定が石器類の量的集中度によって行われたので、機能と空間がうまく対応しない場合が考えられたのである。

世帯ユニットＡは、遺跡内最高所に位置し、直径 15～18ｍほどの、最も石器類の点数の多いユニットである。剥片剥離作業が行われたのはユニット中央部で、北半には廃棄空間・作業空間が大きく重なるように広がったと考えた。居住空間は、特に遺構としての検出はなかったが、剥片剥離作業の行われた空間より高い位置に、南の低位な方向に向かって開口するように想定した。剥片剥離作業のほとんどは、ユニット内で分布が完結し、ユニット外への持ち出しは石器や剥片状態で行われている。

世帯ユニットＢ＋Ｃ２・３には、土壙４基があり、このうち第３土壙が住居遺構とも考え得るものである。ユニット中央から南半に広がって剥片剥離空間が認められる。定型石器が集中するのは第３土壙上に限定され、機能的に特化した作業空間と考えられた。剥片剥離作業空間の周辺には、加工痕有剥片や使用痕有剥片の多い作業空間が配される。北の東西には廃棄的な空間が考えられた。居住区間は、第３土壙の形状と上面での石器の集中を根拠に、ここに想定した。南の剥片剥離空間に向かって開口する住居施設を復元できよう。世帯Ｂ＋Ｃ２・３の住居施設と考えられる第３土壙上では、掻器・削器・錐状石器などが集中して出土している。復元想定した土壙の形は浅い皿状彫り込みを呈し、住居施設の一部に類似する。土壙底部には薄い砂層が存在し、多くの石器がその上部で出土したことから、土壙の埋没と石器の分布に時間差があると考えられる点は、消極的証拠であるが、ここを住居と考えると、世帯ユニット内の空間配置をうまく説明できる点は極めて重要であろう。空間配置との整合性を積極的に評価できるなら、旧石器時代での確実な類例は知られないが、逆に砂層を住居の「張り床」的機能を持った意図的なものと考えてもよい。ここだけに遺構として住居と考えられる遺構が残り得たのだから、すべての住居施設の構築性が低かったとは、言い切れまい。第３土壙上面の石器は、遺跡内でも特異な集中を示す。掻器と錐状石器、削器の集中は極端である。板井寺ケ谷遺跡において使用痕分析は実施していないが、一般的に掻器と錐状石器は、皮革製品の加工とし

ての機能を含んで想定されていることを当てはめたい。この両者が第３土壙上で集中したことは、そこで皮革製品の加工が行われたと推測される状況であることになる。この様に際だった特定器種の集中と遺構の空間的重複は他に認められないが、第３土壙では、遺構と遺物の分布とに空間的関連があることを認め得ると考える。具体的には、住居内部での皮革の嘗めしと穿孔作業である。東には接するように礫土壙２基がある。第３土壙が住居として考え得るかどうかは、旧石器時代の住居施設のあり方を考えると、遺構そのものの検討のみで断を下すことは出来そうもない。周辺の遺構と遺物の中で、住居と考えた場合の空間的機能をどこまで満たしているかを、問う必要があると考える。

世帯ユニットの内部は、以上のように世帯ユニットを認定するための要件を満たしたものの中でも、相違することもあることが判明した。特に、剥片剥離作業空間と作業空間・廃棄空間が避け合ったり、重複したりする場合があり、区間の機能を曖昧としている。また、小ブロック単位での空間機能設定は、石器類の量的問題があって、十分に検討することが出来ないのでは、という疑問を生じさせた。

遺構と遺物の分布という考古学的事実によって、世帯の機能的空間利用を明らかにすることは、世帯存在として仮想する遺構・遺物のまとまりを世帯ユニットと見なしたことの当否から、多くの検討すべき問題を残している。多様な試みが必要とされている。

C，集落と古民族学的動態

集落景観と構造

今まで、下位文化層の遺構と遺物の分布構造の検討結果を整理し、集落構造についてまとめた。最後に、今までの操作・検討の成果をもとに、集落景観の復元を行う。さらに、下位文化層で共存した両集団間・世帯間・世帯内に認められる「古民族学的」動態について、解釈的・仮説的領域を犯すことは自明であるが、あえて言及してみたい。

最初に、世帯間の関係を描くことによって、集落の景観を復元したい。考古学的に検討できる世帯間の関係は、石器類や礫石の接合関係、個体別資料の共有関係によって検討できるに留まる。石器の使用や廃棄、製作上の動きしか問題に出来ない。実際の世帯間の関係は、社会的・文化的・経済的に、重層的で複雑なものであったろうこと、そして、それら考古学的に検証できない次元のほうに比重が大きいであろうことを、念頭に置いておきたい。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層は、チャート等製石器群を主体に保持した北群４世帯、サヌカイト製石器群主体の南群２～３世帯の存在が明らかになった。合計で６～７世帯となる。両群は、中国山地系・瀬戸内系集団の世帯群である。また、北群Ｄ＋Ｃ１・１out の世帯は、他の北群世帯よりも南群に近い性格を有し、両者の中間的世帯といい得るであろうか。大きく分けると二つ、北群でユニットＤ＋Ｃ１・１out を分離すると三つの集団が、同時に居住していたことになる。また、南の湿地には、チャート等製石器群の石器類ブロックＫが単独で存在する。

下位文化層での遺構と遺物の分布を決定した要因は、この集団と世帯であるが、その決定の

背景には、考古学的事実としての検討は難しい場合が多いが、地形の傾きや地表の乾湿、樹木・下草の繁茂の状況が影響していたと考える。巨木等の物理的障害物があれば、空間的に避けざるおえなくなる。また、集団内での住居位置の決定の優先度は、世帯間の優劣という社会的脈絡から決定されるのであろう。

中国山地系の集団は、活発な石器製作の行われた石器類ブロックＡ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆの計３個所に世帯が居住する。遺物分布の空白となっている広場を隔てているブロックＥａ、Ｅｂは、廃棄または共同作業の場となる。３世帯と作業空間・廃棄空間が広場を囲んで、あたかも環状の集落景観が出現する。

遺跡内最高所を占める世帯ユニットＡは、遺構・遺物分布の平面形がほぼ正円で、眺望のよい場所にやや離れて位置している。剥片剥離作業は活発ではあるが、ほかの世帯ユニットと個体や石器生産段階レベルの交換という直接交渉をもたない。作業・廃棄空間であるユニットＥａを介して他の世帯と間接的に関係する。

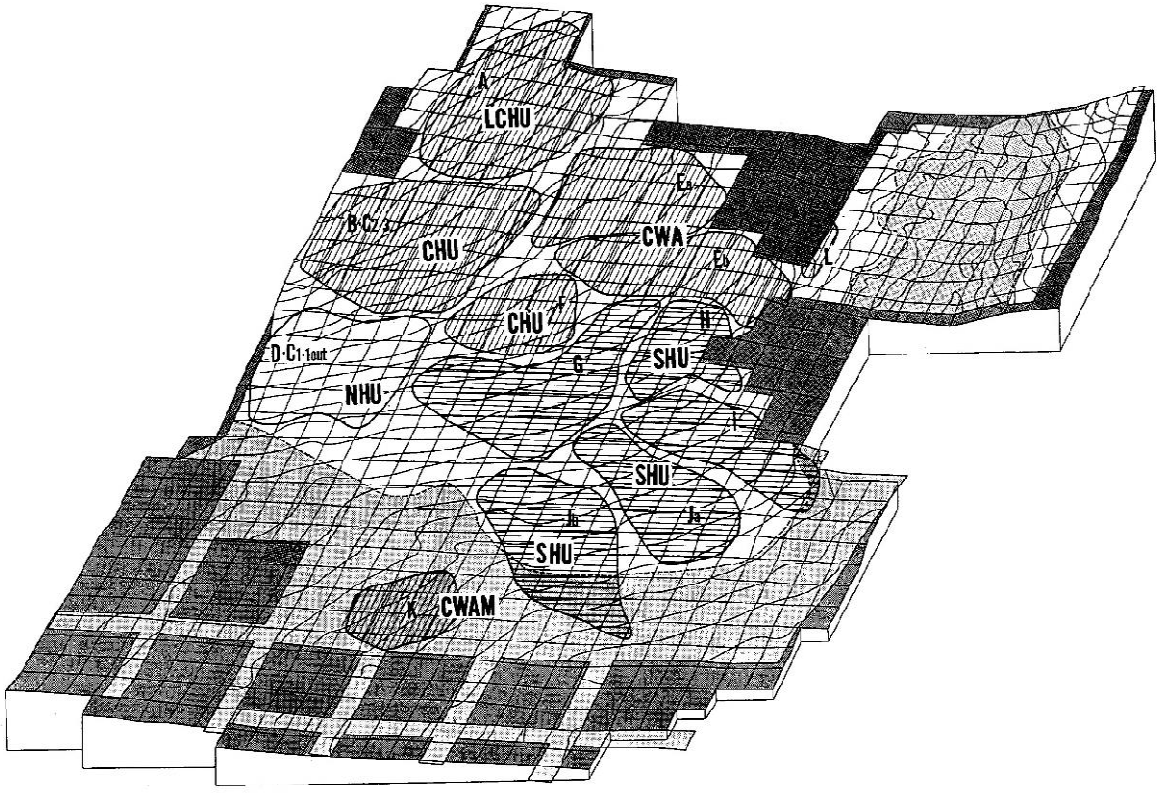


図 81　下位文化層の世帯ユニット配置図

世帯ユニットＢ＋Ｃ２・３は、ユニットＡに次ぐ高い位置にあり、規模もユニットＡに等しいが、ややまとまりに欠く空間配置を呈する。石器製作・剥片剥離作業は、必ずしも世帯内で完結せず、ユニットＡを除く周辺の世帯や作業ユニットと個体別資料・接合資料の交換があ

る。

世帯ユニットＦは、Ａ、Ｂ＋Ｃ２・３よりも低位な位置にあり、規模も小さくて、活発な剥片剥離作業・石器生産のみが認められ、石器組成も貧弱である。周辺世帯や作業ユニットと個体別資料・接合資料の交換がある。

ユニットＥａとＥｂは、内部での剥片剥離作業が不活発であること、遺物分布が散漫で場の機能の区別が乏しいことから、世帯ユニットとは見なさなかった。ユニットＥａの石器・剥片の一部はユニットＡ、Ｂ＋Ｃ２・３・Ｆと、ユニットＥｂの石器・剥片の一部はユニットＢ＋Ｃ２・３、Ｆ、Ｄ＋Ｃ１・１outと、個体別資料・接合資料の共有関係があり、そこから持ち込まれたと考えられる。石器・剥片の持ち込み・廃棄が多いことが知れる。ＥａとＥｂとでは、Ｅａに定型的石器の組成率が高い。

世帯Ａと世帯Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆの間は、集落の中でどの様な関係であったろうか。また、ユニットＥａ、Ｅｂを集落の中に組み込む関係を考える必要がある。世帯ユニットＡは、遺物量が多く、やや離れてゆったりとした空間配置で、他の世帯を見おろす位置にあり、他の世帯に優越した、集団のリーダーを含む世帯である可能性も考えられよう。Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆの２世帯には、接合資料の共有関係が認められ、位置関係も接していることから、両者に親密な関係が認められる。個体別資料・接合資料の一部、石器、剥片・石核を交換しているが、世帯を移動して剥片剥離作業を行った例はない。また、礫ブロックの位置が両世帯の間にまたがったものがある。両世帯間には、石器生産上の独立性と、石器の使用・生活上の融合性があると考えられる。これらの世帯は、世帯Ａと比べて選地・分布の平面形・石器類の量などが劣ることから、世帯Ａの優位性を受け入れた世帯群、一般構成員からなる世帯と考えよう。ユニットＥａ、Ｅｂは、それぞれの世帯ユニットから持ち込み・廃棄された石器・剥片が認められ、それらを使用した何らかの作業空間と考えた。石器組成の違いがあることから、ＥａとＥｂとでは、作業内容に相違がある可能性がある。

石器類の個体別資料・接合資料で見る限り、世帯Ａ、Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆの３世帯は、世帯間を直接的に、作業ユニットＥａ、Ｅｂを介して間接的に、関係を持っている。世帯Ａは、他の世帯と直接の関係を持たず、Ｅａを介して世帯Ｂ＋Ｃ２・３と関係を持つ。世帯Ｂ＋Ｃ２・３は、世帯Ｆと直接に、Ｅｂを介して間接に関係を持つが、北に隣接する世帯ＡとはＥａを介した間接的関係に留まる。世帯Ｆは、世帯Ｂ＋Ｃ２・３と直接、Ｅａ、Ｅｂを介して間接にも関係を持つが、世帯ＡとはＥａを介した間接的関係に留まる。世帯間の直接的関係は、世帯Ａと世帯Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆ間がお互いの接合資料を共有し合わない「並行」的世帯間関係、世帯Ｂ＋Ｃ２・３間が共有し合う「交叉」的世帯間関係とも表現できよう。鈴木氏等は、集落の世帯間関係がこの二者の様相を示すとき「並行型集落」・「交叉型集落」と呼称した（鈴木他、82）。板井寺ケ谷遺跡の様相は、世帯間の直接的関係に限れば、両者が出現していることになる。この関係を重視すれば、中国山地系集団は二分され得ることにもなる。しかし、Ｅａ、Ｅｂといった作業ユニットを介した部分を強調すれば、下位文化層全体として「有機」的世帯間関係と言い得る状況であろう。世帯Ｂ＋Ｃ２・３と世帯Ｆ間の接合資料の共有は、剥片生産が

複数個所で行われ石器製作の共有が進行したものではなく、多くが石器や剥片の搬入出の結果であるとするなら、世帯の独立を損なうほどの世帯「融合」が進んでいると見なすべきではない。一方、接合資料上認められる世帯Ａの「孤立性」は、Ｅａを介しての間接的関係がある。この世帯間関係の断層の存在は、下位文化層中国山地系集団三世帯間の社会的関係の反映である段階に留まっていると考える。

中国山地系と瀬戸内系の分布境界には、石器類ブロックＤ＋Ｃ１・１outとブロックＧがある。石器類ブロックＤ＋Ｃ１・１OUTには、中国山地・瀬戸内両集団の中間的な性格の世帯ユニットが想定できる。チャートとサヌカイトの石材比率が近い。位置は、中国山地系の南、瀬戸内系の西に隣接する。石材組成が単純に世帯の構成員組成比を示すなら、この世帯は両集団の構成員が融合した新しい世帯であるのかも知れない。道具箱はサヌカイトにやや片寄っている。ブロックＧは、北にある中国山地系集団からの石器類の分布が一部及んでいるが、本来は瀬戸内系集団の領域に属することが明かである。

瀬戸内系集団は、接合資料のまとまった石器類ブロックＨとＪまたはＪａ・Ｊｂ両方に認める場合の計２～３世帯が推定できる。石器類ブロックＧ、Ｉは世帯ユニット間の統廃合の出来ない部分と、何らかの作業の行われた空間と考える。世帯Ｄ＋Ｃ１・１outとユニットＧを加えて眺めてみると、世帯Ｈを頂点とする湿地部に開いた逆Ｕ字形の集落景観を呈する。

世帯Ｈは、ややまとまった石器組成と接合資料を有しているので、世帯としたが、ユニットＧ、Ｉの一部との所属範囲が不明確である。ユニットＪは、小さな島状分布のまとまりで、まとまった石器組成と接合資料を有しているが、一つの世帯とするにはやや大きすぎる領域を有し、ＪａとＪｂに分割して二世帯を設定し得る可能性がある。島状分布の集まりであるので、ユニットＧ、Ｉの南半との所属範囲が不明である。世帯Ｈ、Ｊａ、Ｊｂは、ほぼ同様の面積と石器組成を有し、瀬戸内系集団の均質な世帯の様相を示す。ただ、世帯Ｊａは、定型石器とチャート製石器類の組成率がやや高い。一応世帯の性格を考えると、世帯ＪまたはＪａは、石器組成がやや優れることから、中国山地系集団の有力世帯Ａの存在との対比で考えるなら、ここを瀬戸内系集団の有力構成員を含む世帯とも見なせよう。世帯Ｈと世帯Ｊｂは、一般構成員からなる世帯と考える。作業空間と考えたユニットＧ、Ｉは、実は石器組成は世帯ユニットと大差なく、剥片剥離作業の存在を示す接合資料の存在に乏しい。

瀬戸内系集団の世帯間の関係は、この様に２乃至３世帯が想定されるものの、サヌカイト石材の背景と性状のため、個体識別が出来ず、ユニット間を跨ぐ接合資料も乏しいため、中国山地系集団ほど十分明らかに出来なかった。しかし、元々サヌカイト製石器群は、剥片剥離作業・石器整形作業の異所製作を行うことに特徴があり、本来的に接合資料は生じにくいことが明らかになっている。よって、接合資料を見出し得ないからといって、石器・剥片の搬入出段階で、まったく世帯間に関係が持たなかったという証拠にはならない。考古学的に検証できないということになる。

石器類ブロックＫは、湿地部で何らかの活動が行われた作業空間であろう。接合資料はないが、個体別資料の共有関係から、中国山地系集団に含まれることが明らかになった。

瀬戸内系集団と中国山地系集団は、それぞれ陸地部の南北に世帯を配置する。両者は、同時にお互いを認識して存在したと考えられる。北の中国山地系集団は環状の集落配置、南の瀬戸内系集団は逆Ｕ字形の集落配置を呈する。舌状の陸地部最高所には、中国山地系集団の有力世帯Ａ、舌状陸地部先端には、瀬戸内系集団の有力世帯Ｊ、Ｊａがあり、その間に一般世帯Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆ、Ｈ、Ｄ＋Ｃ１・１outがある。瀬戸内系集団の集落構造は泥炭面に面しているため環状にはなっていないが、両者の集落配置は南北に対照しているように見えよう。両者の違いは、標高差が明かで眺望に違いがあること、おそらく当時かなりの乾湿があったであろうことが想起され、住環境に優劣があると考えられるが、水辺への接近の容易さの点では、ぎりぎりに居住するのと他集団の間を通らなければいけないのでは、逆の状況が生まれよう。現時点での情報では、両集団の優劣を決することは出来ない。ほぼ同面積を占拠し複数世帯を配置していることから、中国山地系集団と瀬戸内系集団は、対等に集落展開を行っていると考えよう。

世帯Ｄ＋Ｃ１・１outは、位置が中国山地系集団に北接、瀬戸内系に東接し、石材組成はサヌカイトが多いがチャート等製がほぼ等しく組成する事から、瀬戸内系と見なせるものの、中国山地系との中間的な性格が強いと考えた。南北、サヌカイト・チャート等、瀬戸内系・中国山地系の二元論的解釈では割り切れない世帯であると考えられる。世帯の位置が両者に挟まれるようにあり社会的な緊張が必至であること、調査範囲内で最も傾斜の激しい場所にあり、流水が近くて湿土面であろうことを考えると、最も条件の悪い場所に居住させられていると考えられよう。

集団間関係

板井寺ケ谷遺跡下位文化層で認められた瀬戸内系集団と中国山地系集団の同時共存は、今までの旧石器時代遺跡調査では認められていなかった、直接的な集団間関係を示している。両集団の接触が行われ、露営地を分かって居住したと考えられることは、積極的に相手の集団を認知し、何らかの共同が行われたと見なし得る状況を示している。少なくとも、この集団間関係が敵対的、消極的なものではなかったことを示唆すると考える。両集団の関係を示すものとして、両集団が同時に居住したという事実は、両者の関係が「友好的」であったことの象徴であるが、さらに、両集団の合同集落の内部を律したであろう瀬戸内系・中国山地系の両集団間の関係を問題にする必要がある。

両集団の世帯数は、性格の中間的な世帯Ｄ＋Ｃ１・１outを除けば、それぞれ３ないし２世帯となり、ほぼ同数となる。遺跡全体で出土した両集団の主要石材であるサヌカイト製・チャート等製石器の数量もほぼ同数であり、残された両石材製石器の数量が当初両集団の保持していた石器の数量を示していると考えられる。両集団を構成する要素を観察すると、特に大きな相違はなく、ほぼ同規模の集団があったことが知れよう。この様な場合、集団間の関係は「対等」「友好的」と呼び得るものであった可能性が高くなる。板井寺ケ谷遺跡での、両集団の具体的な「振る舞い」を検討しなければいけない。

サヌカイトとチャートという二つの主要石材は、それぞれの集団の石器製作に供されるが、一部の石器類は集団の違いを越えて出土している。中国山地系集団で出土したサヌカイト、瀬戸内系集団で出土したチャート、それぞれの主要石材の供給環境を観察し、その集団的背景を考えてみよう。異なった石材を対象とすること、サヌカイトの個体識別が出来ず接合資料にも乏しいこと、チャート等の分布が北半に片寄っていることから、精密な議論の対象にはしがたいが、大きく二分構造の対比を行いつつ、両集団の性格を検討しよう。先にサヌカイト製石器が南北でほぼ同数出土することを指摘したが、このことは、石器の量が構成員の数に比例すると考えるなら、北群の集団が南群の集団の約 2.5 倍の構成員数を抱えていたと考えることも可能とする。石器群の構成からではなく、南北両群に集団を認める場合、「対等」の関係とはいいがたい面も出来する。南北とサヌカイト・チャート、瀬戸内系・中国山地系、３重化した二分構造を分析する中で、解釈していこう。

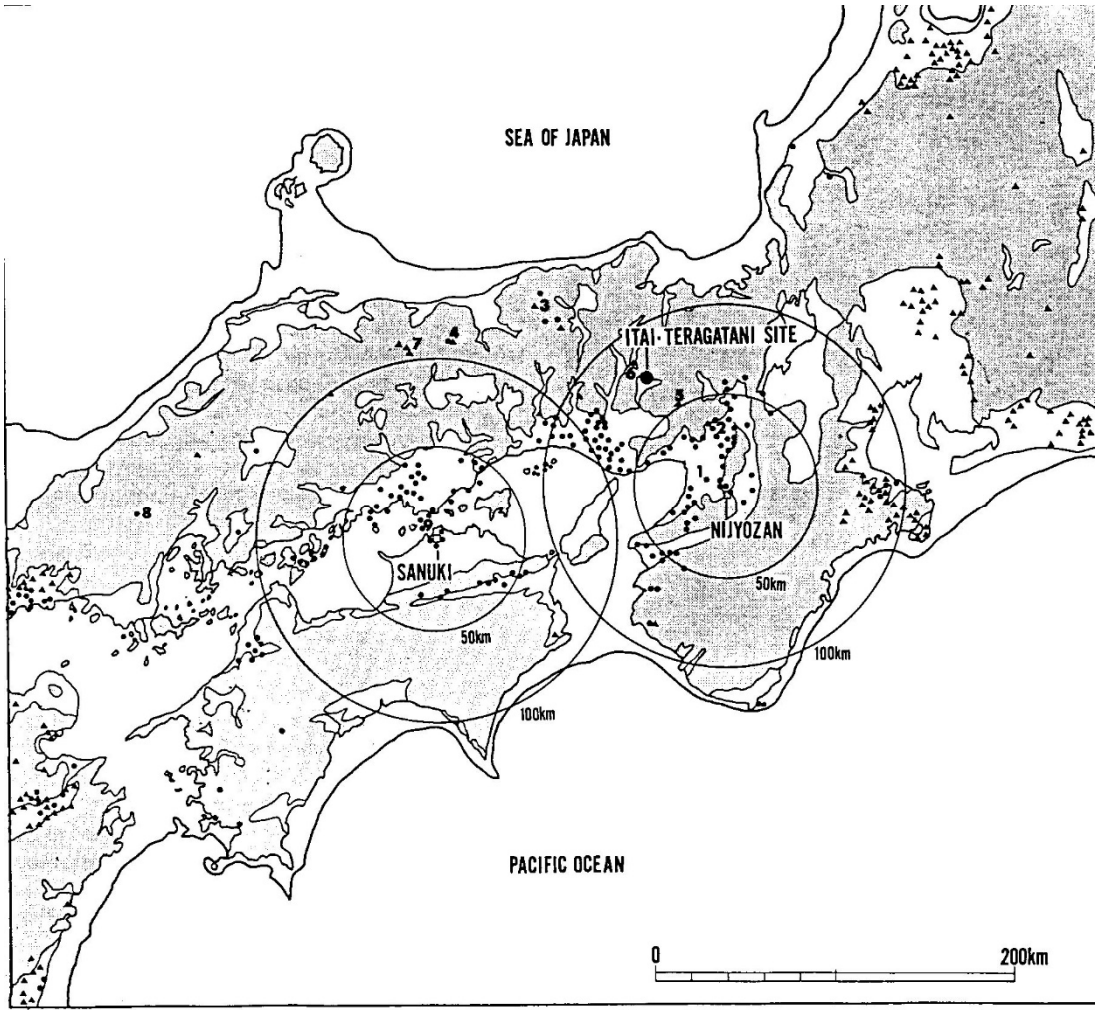


図 82　東部瀬戸内地域の遺跡分布と原石産地

サヌカイトは北群全域で出土したが、特に世帯Ａ、Ｄ＋Ｃ１・１out で多く出土し、世帯Ｂ＋Ｃ２・３、Ｆや作業ユニットＥａ、Ｅｂでは多くない。驚くべきことに、北群で出土したサ

ヌカイトの量は、南群とほぼ同量である。南北両群間を結ぶサヌカイト製接合資料はなく、移動の過程を復元することは出来ないが、石材の由来や石器類の技術形態学的特徴から考えて、中国山地系集団がもともと多量にサヌカイトを保持していたとは考え難い。サヌカイト製石器や横長剥片などは、両集団がここに居住している間に瀬戸内系集団の構成員が北群に立ち入って石器を使用・廃棄したりする場合があったことを示すのだろう。また、かなりの量が中国山地系集団に贈与・交換された可能性も高い。北群において、石器や大型の剥片、石核以外に不定形剥片や砕片が多量に出土するのは、北群でサヌカイト製石器の製作が行われたことを示すと共に、砕片や不定形剥片でも贈与・交換の対象になったことを示す可能性がある。約 80 ㎞以上を運ばれたサヌカイトは、中国山地系の集団にとって珍しい石材であったのだろう。中国山地系集団は、在地の豊富な石材をもとに活発な石器生産活動を行い、さらにサヌカイトまでも使用する。他の世帯と比べて有力な世帯Ａは、中国山地系集団の中で最も多量にサヌカイトを入手し、接合資料を生じうるように、剥片剥離まで行っている。中国山地系集団の石材に対する貪欲さが表れる。Ｄ＋Ｃ１・１out は、その中間的性格にも関わらず、世帯Ａにサヌカイト保有量が及ばない。

一方、中国山地系の主要石材であるチャートは、北群全体にまんべんなく分布し、各世帯で多量に使用されるが、特に世帯Ａの重量集中は激しい。

今度は、瀬戸内系集団の南群でのチャートの出土状況を見てみよう。チャートは、泥炭面上のユニットＫ、世帯ＪまたはＪａにわずか存在するのみで、南群にほとんど分布しない。その他のユニットから出土するチャート等製石器類は、ほんの数点に留まり、偶然に北群から南群に移動した可能性を排除しきれない。状況として、瀬戸内系集団は、チャート等の石材での石器生産をほとんど受け入れなかったことを示している。世帯ＪまたはＪａでややまとまった量の出土があり、接合資料が認められることから、ある程度の剥片生産が行われたことが知れるが、有効な石器生産ではない。瀬戸内系集団は、携帯するサヌカイトの制約から慎重な石器制作を進め、サヌカイトに固執している保守性が認められる。

瀬戸内系集団の主要石材であるサヌカイトは、南群各世帯ユニットや作業ユニットからほぼまんべんなく出土し、特に遍在傾向は認められない。小規模な小ユニット単位に観察すると、さらに均質化が進行する。

瀬戸系集団の世帯ＪまたはＪａと中国山地系集団の世帯Ａは、それぞれ大型の分布領域と多くの石器類を持つ有力な世帯である。そこでは、異集団の保持した石材がある程度まとまって出土し、接合資料も見出される。この２世帯が、舌上の陸地部の両端に位置することは興味深い。有力世帯が異なった石材を多く保持するのは、両集団がここで接触したとき有力世帯がそれぞれの集団で石材の交換を管理した証拠であるとも考えられる。有力世帯内でのみ接合資料が認められるのは、儀礼的な石材の交換と試し割り、石器製作の存在を示している可能性も否定できない。

全体として、中国山地系集団はサヌカイト製石器類を多量に受け入れるのに対し、瀬戸内系集団はチャート等製石器類をほとんど受け入れていない。両集団は、同時に同じ場所に居住

し、存在を認識しあっていたと考えられる隣あった集団でありながら、それぞれの石材・石器を受け入れるか、受け入れないかで、全く異なった選択をしていることが理解されよう。石材・石器類の受け入れに関する限り、中国山地系集団は「開放的」であり、瀬戸内系集団は「閉鎖的」と表現できよう。

この点では、遺物の分布状況から受ける印象とで、やや異なっている。中国山地系集団に保持されたチャート製石器類は、北部に集中し南部に乏しい。瀬戸内系集団のサヌカイト製石器類は、ほぼ全体から出土しているように見える。石器類の分布と集団・世帯の間に差があることを認めないなら、逆にチャート等製石器類の分布が閉鎖的で、サヌカイト製石器類の分布が開放的であるとも表現できよう。

石材・石器類の受け入れの反対側の立場、送り出しを考えてみよう。本来瀬戸内系集団が保持していたサヌカイト製石器類の量の半分が中国山地系集団に送り出される。瀬戸内系集団の保持した石材の量は、結果として半減したことになる。集団が遺跡内で残した石器類とは別に、保持したまま保ちだした石器類・石材の存在を考慮しても、板井寺ケ谷遺跡周辺でのサヌカイト材の直接入手が不可能なことを考えれば、保有石材の激減は明かであろう。瀬戸内系集団は、チャート材での石器製作を嫌っており、ここでの新たな石材の獲得が無い以上、サヌカイト石器類・石材の驚くべき量のサヌカイト石器類・石材の送り出しは、「飢餓輸出」以外の何物でもない。一方の中国山地系集団はチャート等の在地石材を多量に保持しているが、ほとんど瀬戸内系集団に送り出していない。全く石材保有に影響はない。また、受け入れたサヌカイト製石器類・石材も、点数はともかく重量的にみると些細な量である。

石器類・石材の受け入れ、送り出しの状況、分布から考えられる両集団の性格は、やや混乱した印象を強める。サヌカイトの受け入れ送り出しをめぐっては中国山地系集団が開放的（貪欲）なのか瀬戸内系が一方的飢餓輸出（自己保全出来ないほどの利他行為）をしているのか、チャートの受け入れ送り出しをめぐっては瀬戸内系が閉鎖的なのか中国山地系が利己的保全を優先したのか、を決するのは難しい。異なった石材製の石器類の受け入れという考古学的現象は、仮説的にいくつかの説明が考えられる。第１に異集団から完成した石器類を入手した場合、第２に異集団から石材を入手し、自ら石器製作に供した場合、第３に集団中に異集団構成員が加わり、持ってきた石材で石器製作を行った場合、第４にこれらの混合した場合、などである。個々の石器類の来歴を検証するには徹底的な個体識別と接合作業が必要とされるが、板井寺ケ谷遺跡の石材の性状の制限から、北群のサヌカイト製石器群、南群のチャート製石器群全体への言及にとどめたい。

瀬戸内系と中国山地系集団を、ほぼ同規模の対等な集団と考えた場合、考古学的現象としてサヌカイト製石器類が一方的に北群に持ち出されることは、大きな矛盾点とも成り得ることが理解される。南群と北群に分かれて出土したサヌカイト製石器類が誰のものであったかが、問われなければいけない。

北群のサヌカイト製石器類は、その技術形態学的特徴から瀬戸内系集団の所産であることが明らかな石器・剥片・石核が多い。掻器は、中国山地系集団に影響されて出現した器種と考え

られるが、素材は瀬戸内系と考えても良いと思われる。また、世帯ＡやＤ＋Ｃ１・１outでは瀬戸内系の石核や剥片の接合資料が認められる。石器や剥片に二次的な加工が施される場合を除けば、北群のサヌカイト製石器類大半の第一次製作者は瀬戸内系集団であるといえよう。第２の場合である可能性は少ないといえる。一方、南群のチャート製石器類は、世帯ＪまたはＪａ、ユニットＫを除けば、北群からの偶然の移動の可能性を排除できない点数に留まる。世帯ＪまたはＪａでは接合資料が存在するが、有効な石器製作を行った痕跡が乏しく技術的特徴が明瞭でなく、瀬戸内系集団でもチャートを割れないわけではないことから、行為者が誰か特定できない。

南群では、チャート等製石器類・石材は僅かである。石器製作が行われた場合の行為者の特定は難しいが、世帯ＪまたはＪａの行為者は、瀬戸内系集団構成員である可能性も残る。考古学的現象として、チャート等製石器類の豊富な譲渡も、中国山地系集団構成員の南群への立ち入りも認め難い。北群のサヌカイト製石器類・石材は、瀬戸内系集団の手になるものであるが、そのまま中国山地系集団に受け入れられたか、人に保持されて動いたかが問題となる。北群から出土したサヌカイト製石器類は、南群に存在するのとほぼ同量が出土した。定型石器、加工痕・使用痕有剥片、目的剥片・石核というような、それ自体で機能をはたし得る石器類のみならず、調整剥片、砕片までが出土している点でも、南群と異なってはいない。大きく異なっているのは、サヌカイト製掻器が北群に集中している点と北群で接合資料の存在するのは世帯ＡとＤ＋Ｃ１・１outに限定される点である。このことから、北群では石器調整加工が活発に行われたことが明かであるが、剥片生産がほとんど行われなかったことが理解される。世帯Ａで認められた僅かの剥片剥離作業は、瀬戸内系横長剥片剥離技術によるものである。

この様な状況は、不活発なものであったにせよ、北群で瀬戸内系集団構成員による石器調整加工・剥片剥離作業が行われたことを示している。瀬戸内系集団構成員が石器類を携帯したまま一時的に中国山地系集団の中へ入り石器類を残した場合も有ったのではないか、との疑いを抱かせよう。石器の北群での混在は、人の動きも伴っていると考えた方が良かろう。この様に考えると、北群のサヌカイト製石器類には、１、瀬戸内系集団から中国山地系集団へ、南群から北群へ渡された場合、２、北群に入った瀬戸内系集団構成員がサヌカイト製石器類を携えてきた場合、の両者が混じっていることになる。個々の石器類の来歴を、個体別資料や接合資料の検討を通じて検討できないため、明らかに出来ないことは残念である。

さて、先にサヌカイト製石器が南北でほぼ同数出土することを指摘したが、このことは、石器の量が構成員の数に比例すると考えるなら、北群の集団が南群の集団の約2.5倍の構成員数を抱えていたことになり、「対等」な集団間関係という解釈に疑問を呈する事になり得る。しかし、この考えは、北群のサヌカイト製石器類・石材が全て中国山地系集団に譲渡され、彼らの石器組成に組み込まれたとの前提に立っている。しかし、これら北群のサヌカイト製石器類の多くが、一時的に北群に立ち入った南群の瀬戸内系集団構成員によって持ち込まれ、使用や石器製作に供された後、そのまま遺棄・放棄されたものとすることもできるのである。下位文化層北群のサヌカイト製石器類の実態は、おそらく両者の入り交じったものと考えられるであ

ろう。サヌカイト製掻器の存在は、中国山地系石器組成に取り込まれたサヌカイト製石器生産があったことを示す一方、瀬戸内系集団による石器製作が明らかなのである。

北群の多数の横長のナイフ形石器や横長剥片、横長剥片石核と接合資料の存在によって、南群の石器と共に北群のサヌカイト製石器類の保持者は、瀬戸内系集団と見なし得ることになる。瀬戸内系集団が中国山地系集団と共同し、北群中で何らかの作業を行ったと考えるのである。この場合、北の多くと南のサヌカイト製石器類を合わせたものが、瀬戸内系集団の保持した石器類となる。南北の石器数のアンバランスをもって、社会的・文化的集団である瀬戸内系・中国山地系両集団の保持石器の量と構成員数の多少を直接考えることはできない。見かけほど石器類の保有バランスを崩していた訳ではないことになり、副次的にサヌカイト製石器類の集団間譲渡があったとしても、両集団の構成員数には大きな差のない「対等」な集団といい得るであろう。板井寺ケ谷遺跡における石器類の受け入れ・送り出しは、人の動きに伴ってもあったと考えられる。瀬戸内系・中国山地系集団を、石器類と共に人の動きとしても評価する必要がある。

すなわち、中国山地系集団では、多くの瀬戸内系集団構成員を領域内に受け入れ、共同で何らかの作業を行う。瀬戸内系集団との接触を主導した有力世帯Ａの占有領域中央では、一番多くサヌカイト製石器類を残し、瀬戸内系集団構成員によって剥片剥離作業まで行われる。瀬戸内系集団の活動は、作業ユニットＥａ、Ｅｂに留まらず世帯Ａ、Ｂ＋Ｃ２・３でも行われる。この中で、瀬戸内系集団の保持するサヌカイト製石器類が中国山地系集団に譲渡され、新たに掻器などの製作に供される。場合によっては、調整剥片や砕片なども譲渡の対象になった可能性がある。一方、瀬戸内系集団では、チャート製譲渡石器が多くはなく、中国山地系集団構成員をほとんど領域内に受け入れた痕跡にも乏しい。中国山地系集団と瀬戸内系集団の共同作業空間は南群には形成されず、泥炭面中に中国山地系単独でユニットＫとして表れる。瀬戸内系集団の有力世帯ＪまたはＪａでは、チャート材が石器製作に供されるが、どちらの構成員が行ったかを決めることは出来ない。有力世帯ＪまたはＪａを除けば、各作業ユニット・世帯ユニットともチャート等製石器類の点数は僅かである。

中国山地系集団と瀬戸内系集団は、「対等」な「友好的」集団間関係にも関わらず、その集団の「振る舞い」には大きな差があることが明らかになった。中国山地系集団は他集団に対し「開放的」、瀬戸内系集団には「閉鎖的」な集団の居住領域形成が認められる。石器類や構成員の相手側への移動では、中国山地系集団は「消極的」ではなく、瀬戸内系集団は「積極的」に見える。他集団の石材に対する摂取のあり方は、中国山地系集団は「摂取的」、瀬戸内系集団は「拒絶的」といいえよう。

生業・石材戦略と地域的・社会的集団

チャートは瀬戸内・近畿中央部でも容易に入手可能な堆積岩であり、瀬戸内系集団は本来の領域で日常的に手にすることが出来る石材であると考えられる。南群の瀬戸内系集団は、携帯してきたサヌカイトに固執し、チャート材での石器製作をほとんど受け入れないことは特に特

異な現象ではなく、瀬戸内系集団が本来の領域で行っている石材選択を続けた結果であると考えることが出来る。

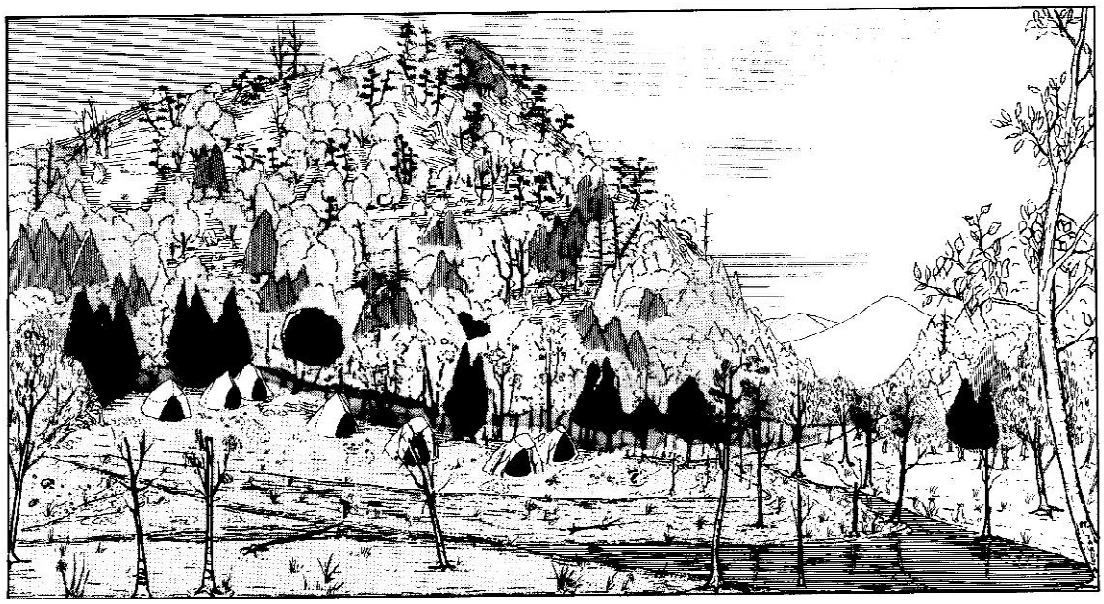


図 83　下位文化層の集落景観想像図

原産地の限られるサヌカイトに頼った瀬戸内系集団の剥片生産技術には、２段階の工程がある。板井寺ケ谷遺跡等の遠隔地では前半の段階を行わず、国府遺跡（石神 1980）の様な原石産地に近い場所で生産した石器や剥片、石核を搬入するにとどめるなど、携帯重量の軽減が計られている可能性（山口 1983）がある。板井寺ケ谷遺跡のサヌカイトの多くが二上山産で、一部に岩屋産と考えられるものがあることがサヌカイト産地分析の結果判明している。瀬戸内系集団のサヌカイト石材の補給は、瀬戸内中央部に回帰した時に集中して行なわれた可能性が高い。瀬戸内系旧石器の顕著な技術形態学的特徴は、原石産地周辺の遺跡と遠隔地の遺跡が補完関係を持つ石材供給と剥片生産技術が一つのシステムとして長期間機能して、形成されたと推測する。姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の板井寺ケ谷遺跡下位文化層相当期に、瀬戸内系集団は、すでに地域的伝統を発現している。瀬戸内系旧石器は編年的座標が定まった遺跡に乏しいがほぼ全ての時期に渡って、近畿地方中央部においては圧倒的にサヌカイト石材を使用し、チャートや他地域からの搬入石材は希であると言えそうである。この石材選択によって遠隔地での石器生産が低調になり、結果として考古学的に検証できる集落構造が不明確となっているといえるのは、郡家今城遺跡でも同様であろう（冨成・大船 1978）。

一方の中国山地系集団は、在地のチャート等の石材を臨機採集し、石器生産に供する。一ケ所での消費的な剥片剥離作業の展開が基本で、基本的に異所製作的な石材戦略も認められない。この時期、中国山地系集団は、地域性を十分には発現せず、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の汎日本的な石器群の一部として存在する。地域的に分断され、石材戦略の特殊化の進んでいない石器群であった。

板井寺ケ谷遺跡で接触・共同した２集団は、石器石材の供給の点で異なるシステムを有している。遠隔地産のサヌカイトに固執し、保守的・貧弱な道具箱を持つ瀬戸内系と在地石材を大量に使いながら解放的かつ豊富な道具箱を持つ中国山地系の間には、石器群の内容レベルを越えて文化的・社会的な構造の違いがあることを推測させる。板井寺ケ谷遺跡下位文化層における両石器群の集落合同に際しての対応は、この本来の領域で広範に見られる性格が明瞭に発現したものと考えられよう。瀬戸内系集団の石器群は、早くからサヌカイト石材と石器生産技術の特化を進め、強固な地域性を発現することになるのに対し、中国山地系の石器群の地域性が顕著になる時期は極めて遅れる。地域性の発現は、その領域への生態的適応活動の結果であると共に、地域集団の確立でもあったと考えるべきであろう。地域集団としての確立の早い瀬戸内系と、あいまいなままの中国山地系では、集団の個性・排他性に大きな差があったのであろう。このような２者によって接触が持たれたことは、旧石器時代後期の社会の平和的な性格を示していると考えられる。

石器類・石材では、この様に明らかな考古学的現象が存在するが、ここで想起すべきは、考古学的資料として残り得ない交換材の存在である。ほぼ均等な集団間で、物質的・経済的・社会的・精神的に一方的な屈服・譲渡が行われたとは考えにくい。当然何らかの反対給付が行われたと考えた方がよいと思われる。

南北に分かれての同時居住と北群での瀬戸内系石器群の混在から考えられる様に、何らかの共同作業の存在があったと考えなければ、このような異系統集団の合同という状況を説明することはできないであろう。まず、両者の合同集落の形成に対する積極的な経済的意味を考える必要がある。まず、想起される状況は、生業活動上の共同であると私案する。両集団の生業活動が直接共同したという証拠は、まず北群での瀬戸内系サヌカイト製石器類の混在があげられる。さらに、第一次的な生業活動ではないものの、継続的な日常作業の存在を示すかも知れないものとして、特に北群にあるサヌカイト製掻器の存在は注目されよう。中国山地系集団に対する瀬戸内系集団構成員の直接的な協力があったと言えるかも知れない。しかし、生業上の共同だけという段階であれば、一方の構成員が他方集落に出向くか、どこか別の所に共同作業の場を新たに設定した方が自然であるとも言える。瀬戸内系集団に対し、何らかの反対給付があったとするだけでは説得力に乏しいであろう。異系統の集団であれば、集団間に全く緊張関係が無かったとは言い切れないのである。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の場合、さらに生業・日常的活動での共同という以上の社会的結びつきがあったとしても不自然でない。生業上の戦略から集落合同が行われたとしても、その期間が長期に渡ったとすれば、より高次元の社会的関係が持たれたとしても不思議はない。ほとんどの社会的高次元の関係は、考古学的に検証することは困難であるが、中国山地系・瀬戸内系両集団がこの集落共同を促した「利益」が直接的な生業上の共同以上のものであったとすると、社会的・精神的な面で追求された可能性も考慮され得る範囲であるだろう。特に、瀬戸内系集団の利他行為の背景には、社会的・精神的動機を寸度したい思いをかられる。方法的にかろうじて考古学的検証が及び得る分野として人の動きが考えられる。たとえば嫁取り・婿入

りによる世帯の新設、「離れ」行動、集団の分離・分割による世帯や構成員の集団間移動であろう。この分野から考えると、板井寺ケ谷遺跡の遺構・遺物の分布の検討から明らかになった状況の中で仮に可能性ある現象をあげれば、石器や石材の保有率を世帯構成員の出身集団出自比率、両集団の領域に挟まれた世帯位置を根拠として、両石材を保持するＤ＋Ｃ１・１ｏｕｔが両集団の婚姻により創設された新世帯であると仮定することも、解釈として許されよう。このような世帯の新設は、それぞれの集団内の構成員に生じた過不足を調節し、集団内の安定に寄与するであろう。両集団にとっても大きな社会的・集団的「利益」であったと見なされたのではなかろうか。この新設世帯の帰属がどちらの集団になったか、にわかに決することは出来ないが、サヌカイト製石器類が優越する事から、石器類の保持者を男性の世帯構成員と考え、瀬戸内系の男性狩猟者世帯を考えることもできる。このような社会的に高次元の集団間交流は、ただ単なる生業上の経済的利益のみで、集落合同を説明するより説得力を持つであろう。生業上の経済的利益を越えた社会的・精神的動機の存在を、両集団の集落合同の背景に想定しておきたい。

両集団は、板井・寺ケ谷遺跡からそれぞれの領域へ回帰したであろうが、それぞれの道具箱には接触時の交換品や石材がつけ加えられたに違いない。板井寺ケ谷遺跡の周辺でも、七日市遺跡（久保・藤田他 1990）、溝口遺跡（山下・南 1986ｂ）でチャート製石器群主体の中に、サヌカイト製石器類が共伴している。それぞれの領域の遺跡でしばしば発見される異系統石器類は、このような接触の産物であったことになろう。定型石器以外に、不定形剥片や石核・砕片が伴うような場合が知られる。もし、世帯の新設や構成員の集団間交換が行われたとすれば、この様な考古学的現象の背景に、人の動きがあったことになるであろう。

旧石器時代集団の移動は、限られた資源を最大に活用し労働効率を最適化するために必然である。季節ごとに巡回して居住地を替え、集落周辺の資源を活用する。多くは季節的に移動して、結実・可食化する動植物を追求することになる。瀬戸内系、中国山地系の２つの石器文化伝統は、本来の生活領域が異なり、環境帯としても性格が異なる立地をしていることから、古瀬戸盆地周辺の低地・丘陵に主に分布する瀬戸内系と中国山地山間部に分布する中国山地系とは一種の住み分けがなされているといえる。このような中での板井・寺ケ谷遺跡での接触は、両者がお互いの存在を認識していた証拠であろう。おそらく季節移動の機会に何らかの合同が行われたものと考えて良かろう。

旧石器時代社会の集団移動は、夏から冬の２シーズンの間に北〜南または高〜低、寒冷地〜温暖地間や異なった環境帯間の移動が想定できる。冬から夏へは逆方向の移動となる。巡回移動となることが多いと考えられる。瀬戸内系では丘陵部から低地、乾燥した高地から湿地へ、中国山地系では山間高原から谷部・盆地底へといった季節的移動が予測できよう。板井寺ケ谷遺跡の位置は、瀬戸内系旧石器集団にとって、本来の領域から北にやや離れた寒冷な山間部にある。本来、瀬戸内海・大阪湾に望む丘陵部・河岸段丘上を主分布域とする瀬戸内系集団の移動としては、異例の行為であると考えられよう。板井寺ケ谷遺跡への瀬戸内系集団の移動は、おそらく武庫川に沿って行われ、四季の内寒冷期ではなく温暖な時期に行われたと推定できよ

う。中国山地系集団は、本来的に篠山盆地周辺を移動領域に含めていると考えたい。周辺の七日市遺跡、溝口遺跡などは、中国山地系の遺跡と認めて良い内容を持つ。板井寺ケ谷遺跡へ、到着が瀬戸内系、中国山地系のいずれが早かったかよくわからないが、中国山地系が山側に追い上げられていることから、瀬戸内系が早かった可能性もある。温暖な季節に持たれた世帯合同は、在地集団である中国山地系集団側ではなく、遠距離を移動してきた瀬戸内系集団側の動機によって解体される。保持したサヌカイト石材の枯渇であり、本来の領域とは異なった環境、特により厳しい寒さによって近畿地方中央部、瀬戸内への回帰が促されたのであろう。

春～夏・初秋といった温暖な季節での食料事情を見てみよう。板井寺ケ谷遺跡では動物化石の残存はなく、周辺での当該期の化石出土は知られていない。地域相に合わせた動物相の復元は出来ない。結局、植物相から動物生態学的にある程度一般的な氷期動物群の存在を期待するに留まり、直接的な狩猟活動の内容を知ることは出来ない。採集活動についても、明らかに食料として確保された植物化石は検出できなかった。植物化石から窺うことのできる温暖期の可食植物としてあげられるものは、僅かにベリー類があるに留まる。秋以降では松の実類が確保できよう。板井寺ケ谷遺跡周辺で入手可能な植物質食料は、意外に乏しく、生業活動はいきおい広範囲なものと成らざるをえなかったものと考えられよう。

板井・寺ケ谷遺跡の瀬戸内系集団は、温暖な季節に本来の領域を突出して、山間部に移動したのであり、これには生業活動が関わっていたと考えるのが妥当であろうが、本来の領域を逸脱する行為が日常的であったとは考えにくい。板井寺ケ谷遺跡周辺の沼沢地の存在は、当時の生業活動の環境を提供したのである。泥炭層からは、自然科学的分析を多分野行った結果、多くの成果をあげたが、直接自然環境と人間集団を結び付ける情報は求められなかったことは残念であった。しかし、彼らの経済的基盤が、狩猟と採集にあり、最も社会構造に影響を与えたといわれるのが大型動物狩猟活動であることを考慮すれば、たとえば洪積世後半期まで日本列島で生存を続けていた大形動物の季節移動に随伴した可能性も想起されよう。このような大形動物の共同狩猟こそ、旧石器時代社会の連帯の機会ではなかったろうか。この様な機会には、集団の相違を乗り越え、集落合同や共同作業がしばしば行われたのであろう。また、婚姻や集団の分割・分離、構成員の移動の機会でもあったと考える。このような社会的結び付きは、特にすでに地域性を鮮明にしている瀬戸内系地域集団にとっては、本来の領域の同一地域集団内で通常行われるものであったに違いない。異集団間では、普通相互の存在認知の段階に留まっており、この様な場合は希であったと推測しておきたい。篠山盆地での湖・沼沢地存在は、近畿地方中央部・瀬戸内の大盆地地形ほどではないにせよ、動物の回帰・棲息する環境であり、狩猟の場をも与えるとともに、この様な社会的交流の場を与えた可能性があると考える。

2，上位文化層の遺跡構造

上位文化層の遺構・遺物の分布は、北東部分が中世の居館によって削平され、また下位文化

層からの浮き上がりもあり、全ての要件の分析が可能であった訳ではないが、遺構・遺物の分布が遺跡中央に集中することから、一応の検討が可能であった。

上位文化層の遺構は、礫群と土壙があるに留まる。いずれも発掘調査範囲のほぼ中央、南北20m、東西40mの範囲に分布する。全てが暗灰色火山灰中に基底または掘り込み面がある。

礫群は、大小10数群があるが、その配置の近遠関係によって大まかに３つに群化が認められる。これを、礫群Ａ群・Ｂ群・Ｃ群とした。礫群の構成礫は、遺跡周辺で容易に入手できる礫石を使用している。個々の礫群の構成礫数はまちまちで斉一性はないが、各礫群の構成礫のほとんどは、受熱・赤化しており、礫群の機能の一部には火の使用が不可分であったことを示している。礫群の集積度は低く、南関東から東海にかけて分布する礫群とは異なっている。このような礫群は、近畿地方中央部で国府型ナイフ形石器を出土した郡家今城遺跡Ｃ地点（冨成・大船、78）、角錐状石器を主体とした郡家川西遺跡（森田1981）などで見られ、近畿地方中央部には認められる。また、中国山地帯内の遺跡にもこのような礫群が伴う場合があるようで、近畿・中国地方の礫群の地域的なあり方の一つであろうか。南関東・東海型の礫群と比較して、礫の大きさ、構成礫数、破砕度になど、多くの点で相違するが、いずれも火との関係が強い施設である。なお、礫群周辺には、礫を加熱した「火処」の存在が考慮できるが、遺構として検出できていない。このような礫を構成した施設が３群に分けて残されたことは、礫を加熱して行なう作業が、数回づつそれぞれで繰り返されたことを示している。このような繰り返される活動は、通常推測されてきたように、火または余熱を利用し、日常的に行なわれる「調理」活動に伴うものであった可能性が高いと考えられる。

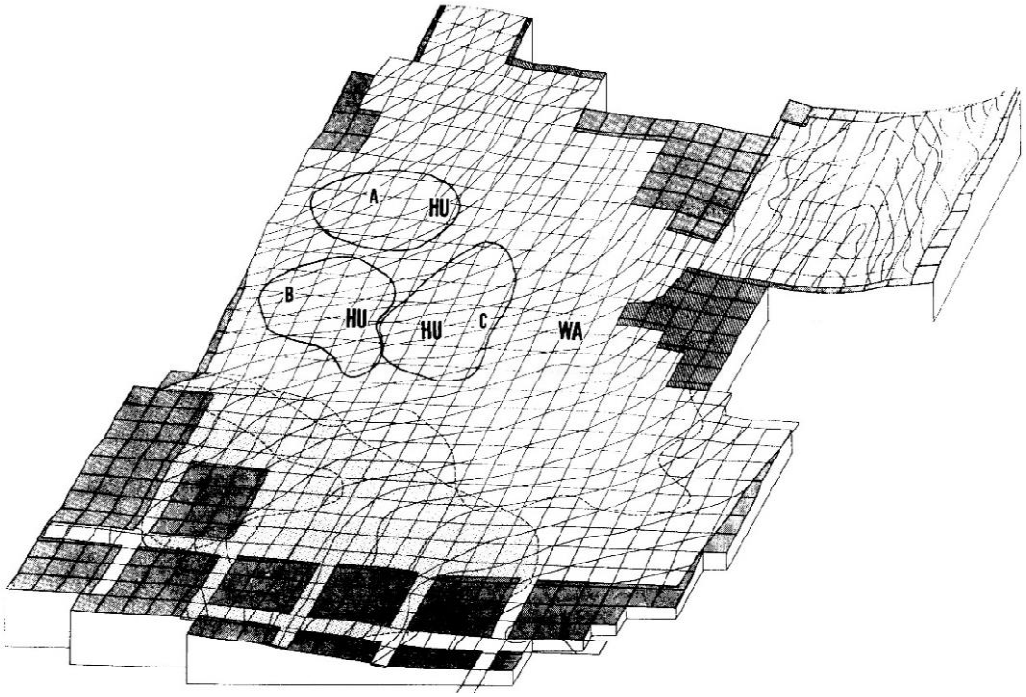


図84　上位文化層の世帯ユニット配置図

土壙は、上位文化層の遺構・遺物の分布範囲の東南縁辺にある。掘り込み面を復元したとしても、浅い長楕円形の土壙で、内部には砕片以外遺物は見られない。土壙の形状から機能を推定することは困難であるが、一般に「墓」「貯蔵穴」が想定されるが、皿状の浅い土壙であること、位置が主分布域の外縁であることから、どちらかというと日常的生活に関係した施設とは考えにくい。

上位文化層の石器類の主な分布は、北部が中世期の削平によって失われている可能性があるが、発掘調査範囲のほぼ中央部にあり、南北約 20m、東西 45mの範囲に散漫に分布する。発掘調査区南半のH14 区からチャート製剥片 1 点が出土しているが同時性の確認は難しい。上位文化層の遺構・遺物は発掘調査区中央に集中して分布しているといえる。

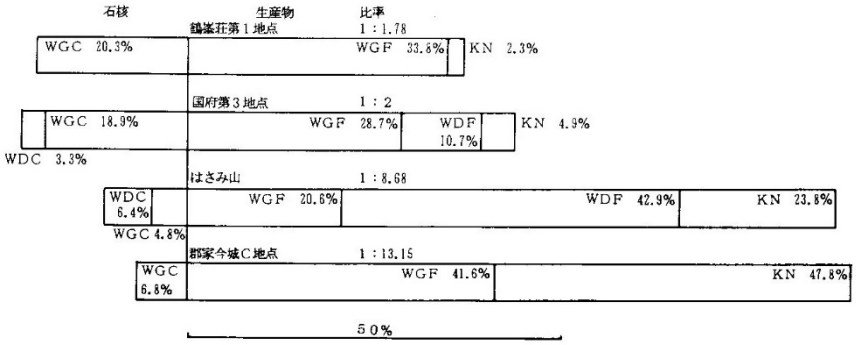
石器類の分布は遺跡中央に集中して認められる。東部の散漫分布部と中央から西の粗密の認められる部分に分けられ、先の礫群は中西部に分布している。中西部の石器類の分布は、その分布のまとまりから 5 群に分けられ、これを石器類ブロックとした。石器類ブロックＡ・Ｂ・Ｃは中央部の分布の密な部分で、ブロックＥは西端に発掘限界を有した散漫分布である。東部の散漫分布をブロックＤとした。遺物集中の顕著なブロックＡ・Ｂ・Ｃには、上位文化層の主要器種である角錐状石器や削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などが組成し、上位文化層での基本的な器種を網羅している。いずれのブロックも多少の多寡はあるものの、石器組成が類似する事は、この 3 ブロックの形成された背景を有する事を推測させる。いずれも、サヌカイトの剥片剥離作業は不活発で、特にブロックＣでは盛んに角錐状石器の調整を行っている。散漫なブロックＤは、分布密度が低く、剥片剥離作業は行われず、各器種の点数でも及ばないので、前 3 ブロックと同様には考えられない。

石器類ブロックＡ・Ｂ・Ｃは、礫群Ａ・Ｂ・Ｃ群の分布範囲と一致する。石器類ブロックＡには礫群Ａ群、ブロックＢにはＢ群、ブロックＣにはＣ群である。またブロックＤには土壙がある。石器類ブロックは、それぞれ直径 10 数mの範囲の空間に石器類が分布する空間であるが、礫群も同じ空間の中にまとまって発見されるのである。

下位文化層の検討で示したように、ほぼ同様の区間を占有、主要石器を網羅した石器組成を保持、石器類の製作が行われ、内部に調理空間と考えられる礫群を複数有するという特徴は、上位文化層を残した旧石器時代集団の存在を考える場合世帯がそこで生活を営んだ痕跡であるとみなす事は、あながち無理な事とは言えまい。これらを総合して考えると、この様な属性が重複する事によって考古学的に示される世帯に保持されたと考えられる空間「世帯ユニット」を、石器類ブロックＡ・Ｂ・Ｃと礫群Ａ群・Ｂ群・Ｃ群が重なった範囲に、合計三つを想定することができる。世帯間の相互関係は、サヌカイトに接合資料が乏しかった事により、よくわからない。ブロックＤは、土壙の存在も併せて考えると、何らかの作業空間、おそらく世帯間の共同的な作業の行われた空間と考える事も出来ようか。

図 85　板井寺ヶ谷遺跡全景（北から）

第４章　瀬戸内系旧石器の構造



第２工程の石核類と生産物の組成比
＊ナイフ形石器には国府型ナイフ形石器以外のものも含まれる。

第 1 節　所謂瀬戸内系の旧石器と横長剥片剥離技術伝統について

はじめに

東部瀬戸内地域のナイフ形石器は、その研究開始時から他地域のナイフ形石器と区別され、一つの地域性を持つとされてきた。特に、国府型ナイフ形石器は、瀬戸内技法による翼状剥片を素材とする点で、他地域のナイフ形石器、特に、石刃技法による杉久保型と峻別されている。

瀬戸内技法かそれに類似する剥片剥離技術を持つ石器群が他地域に存在した場合、その技術的な特徴によって比較的簡単にその地域の石器群と区別することが可能である。この種の資料の検討は、当時の地域性とその動態、文化の伝播、さらに社会構成の究明についても、絶好の手掛りを与えるものであろう。また、層位条件の劣悪な、個体識別・接合作業の困難なサヌカイト地帯である東部瀬戸内地域内のみで解明できない問題に対し、他地域の好条件に恵まれた瀬戸内系旧石器と遺跡に、その手掛りを見出せる可能性がある。しかし、瀬戸内技法の認められない「横剥ぎ」のナイフ形石器を、「国府型」として認定するなど、各地域でその理解に若干の混乱が生じており、数段階に渡る瀬戸内系旧石器との交渉と影響を今一歩、明らかにできぬ恨みがある。

各地域に分布する瀬戸内系旧石器は、それ自体重要であるが、そのナイフ形石器と剥片剥離技術を、東部瀬戸内地域のそれと対比し、位置付ける必要があるし、そのための明確な基準も提示されねばならない。

佐藤達夫氏は、東部瀬戸内地域のナイフ形石器を軸とし、各地域のナイフ形石器を総括されたことがある(佐藤 1970)。その目的は、ナイフ形石器の系統と編年に年代を与えることにあった。本稿では、瀬戸内系旧石器の基準を模索すること、他地域の瀬戸内系旧石器の編年と動態を予察すること、剥片剥離技術の変遷を検討することのみを目的とする。まず、東部瀬戸内地域の剥片剥離技術とナイフ形石器を整理し、瀬戸内系旧石器の特徴的伝統を検討する。その後に、他地域の瀬戸内系旧石器を検討し、若干の問題を指摘・考察してみたい。

1，東部瀬戸内地域のナイフ形石器と剥片剥離技術の用語

まず、本稿で用いる各部の名称を整理しておきたい。

翼状剥片に限らず横長剥片を素材としたナイフ形石器は、ほとんどが素材剥片の打面都側縁に整形加工を施すが、横長剥片の打両部は剥離された時点で「背部」としての形状を持っている。この部分に対する加工は、石刃・縦長剥片を素材としたナイフ形石器の整形加工と区別する必要がある。「刃潰し」加工という訳語の充てられる「ブランティング」とは内容が異なるものであろう。本稿では、用語として依然として問題を残すが、打面都側縁に施される加工を「背潰し加工」、整形された部分を、「背部加工」。刃部側縁に施される加工を「刃潰し加工」。整形

された部分を「刃部側背部」として整理しておきたい。その他の、横長・翼状剥片、横長・翼状剥片石核等の各部の名称については、ナイフ形石器と同様に簡単に整理してみる。

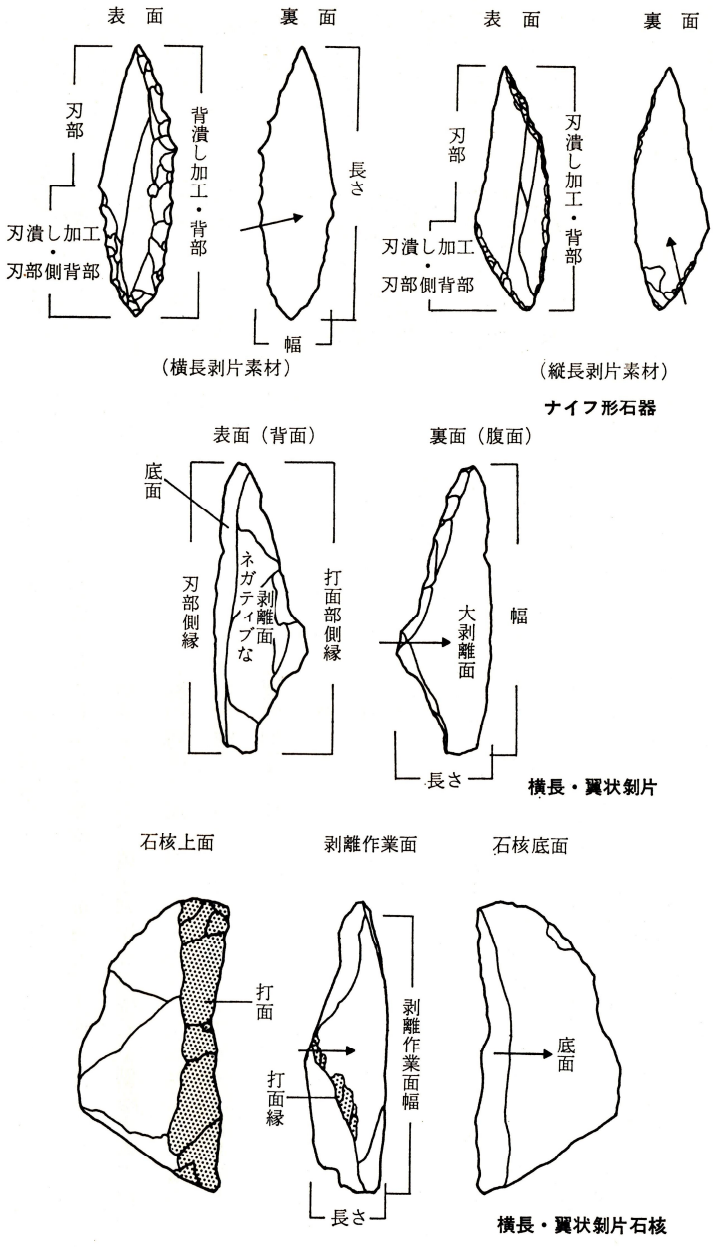


図 86　ナイフ形石器・剥片・石核各部の名称

2,　国府型ナイフ形石器

a、国府型ナイフ形石器の剥片剥離技術

国府型ナイフ形石器は、瀬戸内技法によって生産される翼状剥片を素材とする。瀬戸内技法は、松藤和人により再検討され(松藤、1974a、1979)、大きく二つの工程が認められている(図 87)。第 1 工程は、円礫から翼状剥片石核の素材となる盤状剥片を剥離する工程である。第 2 工程は、盤状剥片の打両部を剥離作業面とし、上面(盤状剥片の背面)を打面として、打面調整を適時施しつつ、翼状剥片を連続して剥離する工程である。瀬戸内技法第 2 工程の特徴的属性のうち、特に注意されるべきものに、

○盤状剥片の打両部に剥離作業面、上面(背面）に打面を設定する。

○剥離作業面の幅と翼状剥片(目的剥片）の幅が等しく、剥離作業は剥離作業面上を左右に移動する余地はない。

○翼状剥片が平行して剥離される結果、石核の中軸線に直交するよう剥離作業面が形成される。

の三つがある。これにより、瀬戸内技法は「カマボコ切り」または長方形の菓子の一端から均等スライスするといった印象が強調・一般化されていると言える。翼状剥片は、この規格化された手順により、簡単に区別される形状を呈する。表面(背面)にはネガティブな剥離面とポジティブな剥離面各一面があり、打面部側からは翼状を呈する。

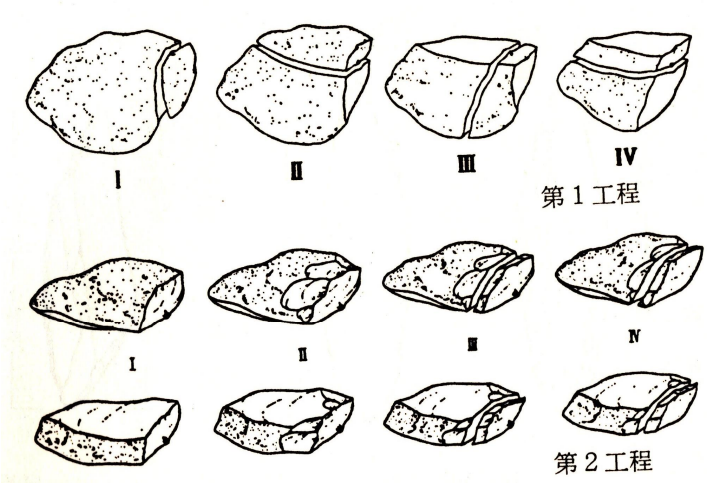


図 87　松藤和人による瀬戸内技法模式図（松藤 1974）

国府型期の一部の遺跡では、瀬戸内技法の他に、縦長剥片剥離技術と機長剥片剥離技術が認められる(柳田 1979)。特に横長剥片剥離技術は、瀬戸内技法に埋没され、その存在自体充分意識されていない。国府型期に、剥片剥離技術が複合する点は注意されねばならないが、ナイフ形石器素材剥片の剥離技術としては、瀬戸内技法が圧倒的である。

b、国府型ナイフ形石器の形態

国府型ナイフ形石器の形態組成は、極めて単純であり、翼状剥片の打両部側線にのみ背潰し加工を施して背部を整形するＡ類がほとんどであり、この種のものが従来、国府型ナイフ形石器とされてきた。最近では、刃部側縁にも刃潰し加工を施して刃部側背部を整形するＢ類が認められている。また、若干ながら、切出し形を呈するもの(C 類)、素材剥片の一端を切断するもの(E 類)の存在も指摘されている。

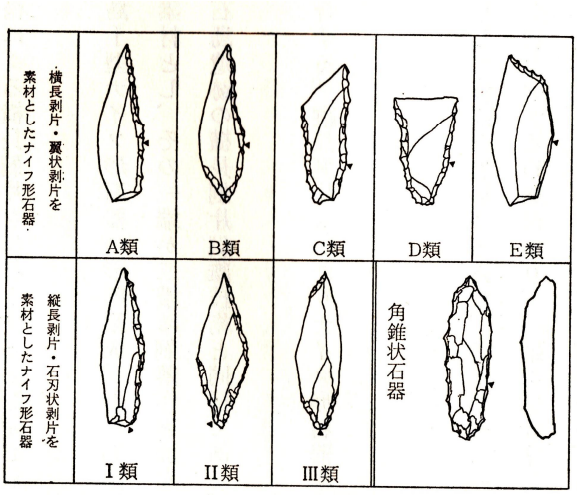


図 88　ナイフ形石器・角錐状石器の形態

国府型期の石器組成は、一般に極めて単純であり、若干の削器等が伴うにすぎない。角錐状石器が、大阪府郡家今城遺跡(冨成・大船 1978) でＡ・Ｂ類のナイフ形石器と共伴して出土したらしく、国府型期の新しい段階の石器組成に加わるものであるとされている(松藤 1980)。国府型期のナイフ形石器の形態組成・剥片剥離の複合は、遺跡ごとに少しずつ異なり、古と新の二つの段階に区別される。

3，いわゆる宮田山型ナイフ形石器

a、いわゆる宮田山型ナイフ形石器の剥片剥離技術

いわゆる宮田山型ナイフ形石器は、瀬戸内技法とは異なる横長剥片剥離技術による横長剥片

を素材とする。香川県檀石島遺跡(間壁 1968)の横長剥片剥離技術が想定されている。檀石島遺跡の剥片剥離技術は、間壁霞子氏によれば、瀬戸内技法から暫次変化した技術であり、瀬戸内技法が「打面調整を間に行いながら石核の同一面を打面として剥離」するが、檀石島遺跡では「剥離面と打面が交互に入れかわる方法」で剥離が進行し、目的剥片剥離と打面調整剥片剥離の区別はなく、両者共、ナイフ形石器の素材とする。特に明記されていないが、檀石島遺跡の横長剥片石核は、いずれも剥片を素材とし、瀬戸内技法第 1 工程に対応する工程が存在するのは明らかであり、横長剥片剥離技術第 1 工程としてその存在を想定することができる。

檀石島遺跡の横長剥片剥離技術第 2 工程の特徴的属性として、特に注意されるべきものに、

○剥離作業面は、石核素材剥片の打両部のみに限定されず、大型剥片の一端もしくは二端に形成される。

○剥離作業面と打面の区別はなく、両面共、両機能を持ち、石核上面と底面が交替される。

○剥離作業面の幅より横長剥片(目的剥片)の幅が狭く、剥離作業は同一作業面上を左右に移動しながら行なわれる。

がある。このような属性により、檀石島の横長剥片剥離技術は瀬戸内技法より不規則・不定形といった印象が一般化されていると言える。

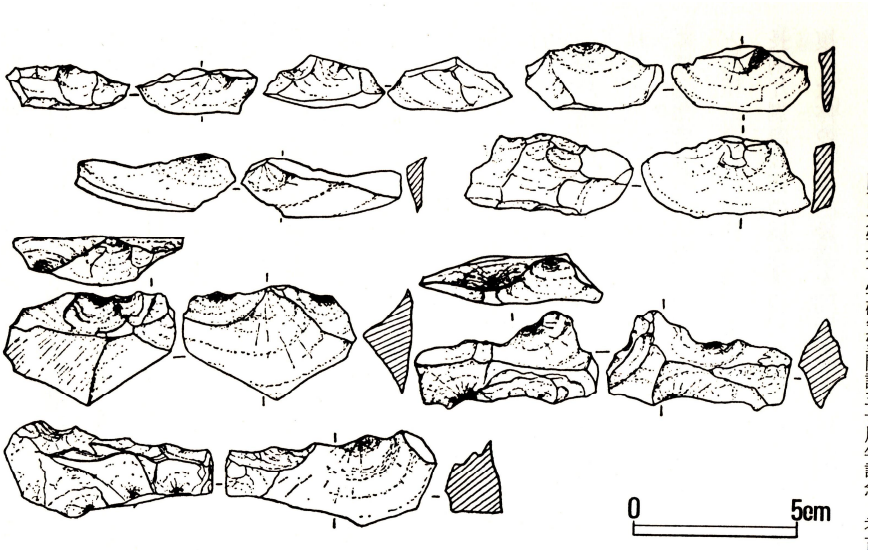


図 89　檀石島遺跡の剥片・石核（間壁 1968）

檀石島遺跡の横長剥片剥離技術による横長剥片は、翼状剥片に比べると規格性に乏しい。一見翼状を呈するものから、表面が数面のネガティブな剥離面で覆われるものがあり、その形状は多様である。宮田山型期には、檀石島の横長剥片剥離技術が主体であり、他に縦長剥片剥離技術が複合する。ナイフ形石器素材剥片の剥離技術としては横長剥片剥離技術が圧倒的である。

b、いわゆる宮田山型ナイフ形石器の形態

いわゆる宮田山型ナイフ形石器の形態組成は、国府型期と比較すれば多様化している。横長剥片の打面部側縁に背潰し加工を施して背部を整形する A 類、刃部側縁の一部にも刃潰し加工を施して刃部側背部を整形する B 類、切出し形を呈する C 類が主体となる。他に台形状を呈するもの(D 類)、一端を切断するもの(E 類)が若干伴う。比較的大型で A 類・B 類を主体とした一群と、B 類・C 類・D 類を主体とする一群を区別し、古・新の二段階を認めようとする見解(松藤、1980)もあり、国府型期と比較すれば A 類が減少していて、さらに細分して編年される可

能性が強い。宮田山型期の石器組成は、国府型期と同様に単純であり、角錐状石器が普及する他、若干の削器以外顕著ではない。

4，井島Ｉ型ナイフ形石器

a、井島Ｉ型ナイフ型石器の剥片剥離技

井島Ｉ型ナイフ形石器は、主に櫃石島遺跡の横長剥片剥離技術に類似した技術による横長剥片を素材とすると想定されていた。春成秀爾により兵庫県西脇遺跡の資料が報告され(春成1980)、井島Ｉ型ナイフ形石器の形態組成、剥片剥離技術が明らかにされた。西脇遺跡の横長剥片剥離技術は、大型の剥片を石核の素材とし、その一端か二端に剥離作業面を設定、表裏逆転して剥離作業を行ない、同一作業面上を左右に移動する点も、櫃石島遺跡の横長剥片剥離技術と同様である。目的剥片の形状も類似するが、規格性はさらに薄れる。

井島Ｉ型期には、この種の横長剥片剥離技術の他に、縦長剥片剥離技術が複合する。縦長剥片もかなりナイフ形石器素材とされるが、横長剥片剥離技術は宮田山型期と同一基盤上にある。

b、井島Ｉ型ナイフ形石器の形態

井島Ｉ型ナイフ形石器の形態組成は豊富であり、打面都側縁に背潰し加工を施して背部を整形するＡ類、刃都側縁の一部にも刃潰し加工を施して刃都側背部を整形するＢ類、切出し形を呈するＣ類、台形状を呈するＤ類があり、一端を切断するＥ類も若干伴う。特にＢ類・Ｃ類・Ｄ類が多い。一部では、打両部の一部分または全部を残すナイフ形石器が認められ、素材剥片の小型化と整形加工の簡略化のためか、「約束ごと」に不履行が生じている。ナイフ形石器の終末的様相が興味深い。井島置型期の石器組成は、依然単純であり、削器が伴う程度で、この時期に再び角錐状石器は認められなくなる。

5,いわゆる瀬戸内系旧石器

東部瀬戸内地域の剥片剥離技術、瀬戸内技法・植石島および西脇両遺跡の横長剥片剥離技術には、各時期を通して一貫性がある。それを直接他の石器群と対比させるわけにはいかないが、

○剥片を素材とした石核である。

○石核の上面(素材剥片の背面)もしくは底面(素材剥片の腹面)上を打面とし、横長剥片(翼状剥片を含む)を剥離する。

この二点の属性が、東部瀬戸内地域のナイフ形石器素材剥片剥離技術の最大の特徴であり、この視点に立つかぎり、瀬戸内技法に限定されるものではない。瀬戸内系横長剥離技術伝統の中で、先に挙げた瀬戸内技法の特徴的属性を持つものが「瀬戸内技法」とされ、その一部またはすべてに変化を生じたものが「横長剥片剥離技術」に分類されているのが現状であろう。瀬戸内技法の特徴的属性が変質し、櫃石島遺跡の特徴的属性に完全に転換するまでに、数段階が想定しうる点と、国府型期に横長剥片剥離技術がすでに複合して存在する点は注意されねばな

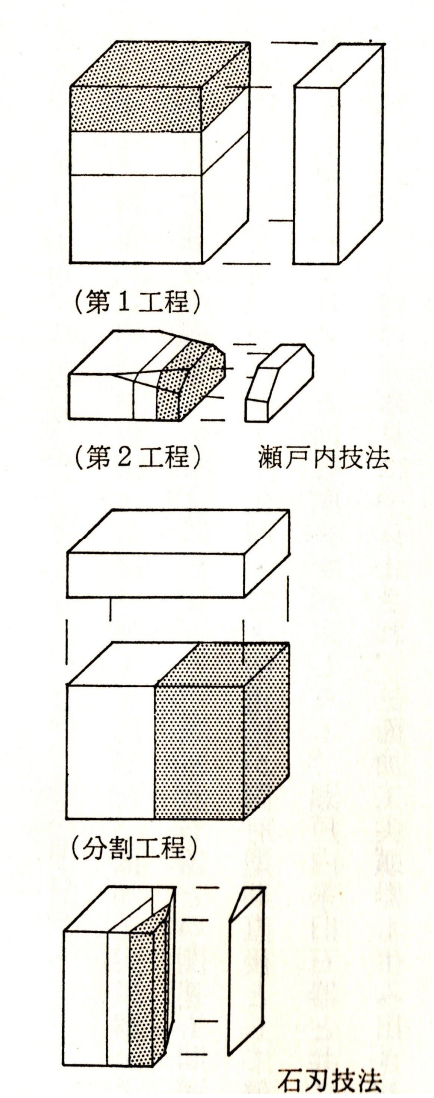


図 90　瀬戸内技法・石刃技法模式図

らない。その他、東部瀬戸内地域で複合する剥離技術については、瀬戸内系として強いて区別される特徴的属性を認めることができない。

東部瀬戸内地域のナイフ形石器は、A 類＋B 類・A 類＋B 類＋C 類・B 類＋C 類＋D 類と、その形態組成が変遷する。井島Ｉ型に一部縦長剥片を素材としたものが混じる他、一貫して翼状剥片を含む横長剥片を素材とする。A 類・B 類・C 類・D 類・E 類を通し、井島Ｉ型に若干の例外はあるものの、素材剥片の打両部側線に背潰し加工を施して背部を整形する点でも一貫性がある。

ナイフ形石器の瀬戸内系旧石器の特徴的属性として、
○剥片を素材とした石材から剥離された横長剥片を素材とする。
○打両部側線に背潰し加工を施し背部を整形する。
が挙げられる。もちろん、ナイフ形石器のみの観察は誤認の可能性が高く、剥片剥離技術と合せて認定されねばならない。瀬戸内系旧石器としての誤った認定は、旧石器時代の地域性と社会構造に対する考察に影響を与える恐れがあり、慎重な検討が必要である。またその点で、ナイフ形石器とその剥片剥離技術に検討が集中し、その他の旧石器を瀬戸内系旧石器として抽出できない原因でもある。

まず、「国府型」なのかどうかよりも、瀬戸内系かどうかの判断が先に求められるべきであろう。瀬戸内系と判断された資料で、瀬戸内技法と国府型としての属性を備えるもののみ、国府型として扱うべきである。

6、瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統について

瀬戸内技法の発生について

東部瀬戸内地域において、国府型ナイフ形石器には瀬戸内技法が、いわゆる宮田山型・井島Ｉ型ナイフ形石器には櫃石島遺跡・西脇遺跡で認められる横長剥片剥離技術が対応すると考えられている。礫素材石核による石核素材剥離の第 1 工程は共通して認められる。礫素材石核による横長剥片剥離技術は認められず、いずれも剥片素材の石核である。東部瀬戸内地域の剥片剥離技術伝統は、その石核の素材と剥離手順の相違により、日本列島の旧石器時代剥片剥離技

術伝統の中で特異な存在となっている。東部瀬戸内地域の剥片剥離技術伝統－特に瀬戸内技法の発生について、その技術的基盤を東南アジアに求めようとする見解(大井 1968、佐藤達夫 1970)、むしろ石刃技法の一形態として積極的に把握しようとする見解(小野 1969)がある。

東部瀬戸内地域の剥片素材の石核による横長剥片剥離技術は、模式的に考えれば、剥片を水平に寝かせ、その一端に剥離作業面を設定、石核上面すなわち剥片平面(背・膜面)上に加撃し、長さの規定された横長剥片を連続剥離するものである。

剥片を複数剥片に「分割」・「スライス」するという点で、東部瀬戸内地域の横長剥片剥離技術伝統は内容的にいわゆる分割または折断技術に近い部分があると筆者は勘案している。特に、瀬戸内技法は出現当初から「完成」された技術として認められ、剥片を素材としている点と目的剥片の長さ、剥離作業面の幅と目的剥片の幅が対応する点で目的剥片の幅が先に規定されており、瀬戸内技法の手順には分割技術的な印象が強いと言えよう(図 90)。

礫を素材とした横長・不定形剥片を目的とする剥片剥離技術は、瀬戸内系横長剥片剥離技術と異なり、目的剥片の幅・長さを先に規定することはできない。野川遺跡第Ⅳ4 層の例などは白石・荒井両氏が指摘されるように、技術流用現象(白石・荒井 1976)であろうし、礫を素材とした構長・不定形剥片剥離技術はむしろ、縦長剥片剥離技術または礫器製作技術に近似するものであろう。

一方、瀬戸内技法第 1 工程などは礫から大型剥片を生産する工程であり、第 1 工程の手順自体礫器製作技術ないし分割技術に近い感がある。石刃技法・縦長剥片剥離技術でも、礫を分割して複数の石核が作られる場合があるが、あくまで石核は塊状を保つ点で若干相違する。

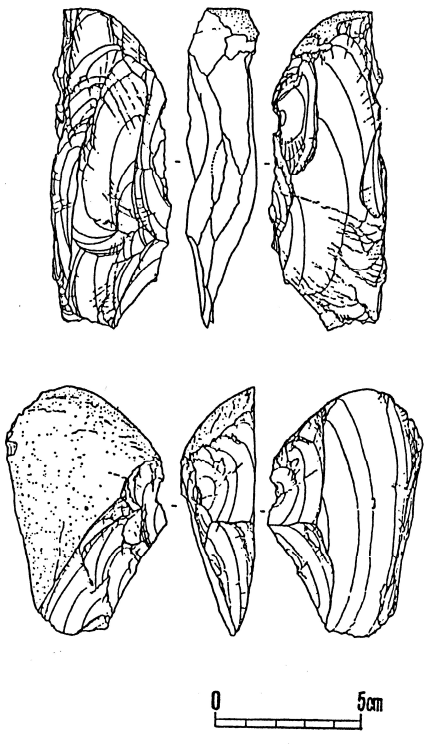


図 91
高井戸東遺跡IX下層の横長剥片石核
（高井戸東遺跡調査会 1977）

瀬戸内系横長剥片剥離伝統と他の剥片剥離技術伝統、特に、瀬戸内技法と石刃技法との差異は大きく、その起源自体異なると思われるが、両者をどう関連させるか今後も問題となろう。

瀬戸内技法の起源の追求は、先の問題と不可分である。東部瀬戸内地域で国府型ナイフ形石器に先行するものとして、縦長剥片を主体とした石器群が想定されており(鎌木・高橋 1965)、またルバロワ型石核などが二上山北麓筆で散見されているが(松藤 1978)、瀬戸内技法の発生に関する資料は未発見である。その点で、東部瀬戸内地域から遠く離れるものの東京都高井戸東遺跡第IX下層の資料(高井戸東遺跡調査会 1977)は、興味深い。

第IX下層の横長剥片石核(図 91)は、剥片を素材とし、その背・膜面を打面、打面部側縁に剥離作業面を

設定し、左右に移動しつつ目的剥片を剥離するものであり、東部瀬戸内地域での横長剥片剥離技術第２工程と類似した点が認められる。

関東地方第Ⅰ文化期前半段階の剥片剥離技術複合は、縦長剥片剥離技術の他に礫を素材とした幅広・不定形剥片剥離技術が存在するなど、東部瀬戸内地域の国府型期のそれと一致するわけではない。

また、瀬戸内系横長剥片剥離技術と技術上類似する資料が、秋田県米ケ森遺跡（富樫・白石・村岡・藤原 1977）でも認められ、東部瀬戸内地域と無関係な発生と考えることもできる。しかし、高井戸東遺跡第Ⅸ下層の資料によって関東・東部瀬戸内の両地域の横長剥片剥離技術が、その技術的基盤を当初共有していたと考えることが可能なら、瀬戸内技法発生の上限が少なくとも関東地方第Ⅰ文化期中頃まで遡ることになるだろうか。

東部瀬戸内地域で瀬戸内技法は、その出現時から完成している印象が強く、それ以降の横長剥片剥離技術の変遷は、瀬戸内技法の特徴的属性が失われていく過程として把握されている。瀬戸内技法の技術的完成度の高さの由来と共に、東部瀬戸内地域での該当時期の資料が検出されねばなるまい。

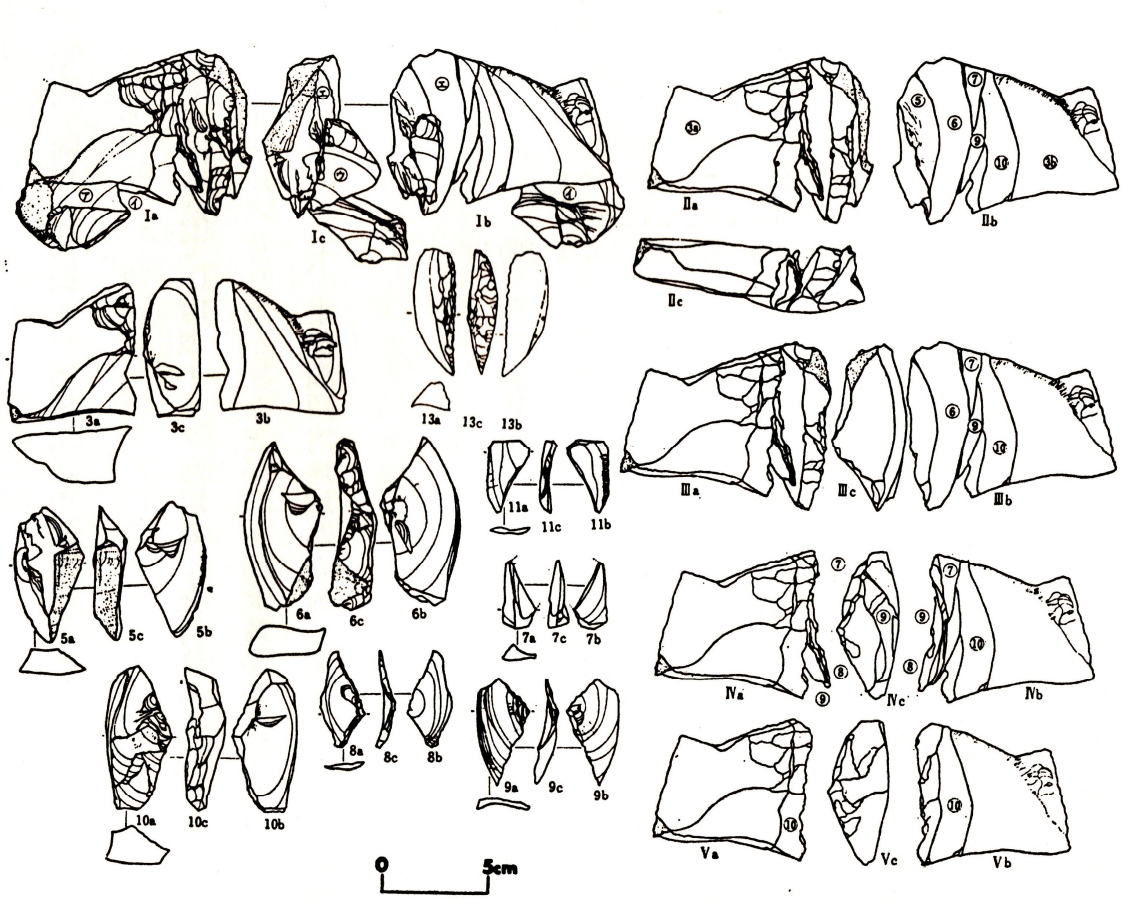


図 92　越中山遺跡Ｋ地点の接合資料（加藤・鈴木 1976）

7, 瀬戸内技法の崩壊と宮田山型期・井島 I 型期の横長剥片剥離技術について

越中山遺跡 K 地点では、加藤・鈴木両氏により接合資料一例が報告され(加藤・鈴木 1976)、剥片剥離技術の一端が明らかにする硬質頁岩製で翼状剥片・剥片・翼状剥片石核からなり、瀬戸内技法第 2 工程を検討できる。その細部を見れば、横長剥片⑤・翼状剥片⑥・⑩と欠損が大きい翼状剥片⑦が大形で、横長剥片⑧・⑨と仮想剥片 X が小型なのが注目される。大型のものは目的剥片であろうが、小型のものは他の機能を考えるべきである。周辺の接合資料により逆に推定される翼状剥片⑦の形状は、右半分が延び切らず、底面が局部的にしか存在しないなど、⑦は、剥離に失敗した翼状剥片である可能性が高い。その失敗の結果、石核中軸線に直交するよう設定された剥離作業面が、それと斜行することとなった。小型剥片三点は張り出した剥離作業面左半分から剥離され、作業面を修正する一種の調整剥片であると考えられる。剥離作業面は⑤・⑥・⑩の剥離作業面と平行するよう再び修正されている。この種の剥離作業面の調整は他にも行なわれているらしい。剥離作業面の調整は、従来の瀬戸内技法の設定・再検討を通して認められていない。この接合資料自体瀬戸内技法の範疇に入るが、剥離作業⑲面の調整が施されている点で、瀬戸内技法の変質を物語るものである。

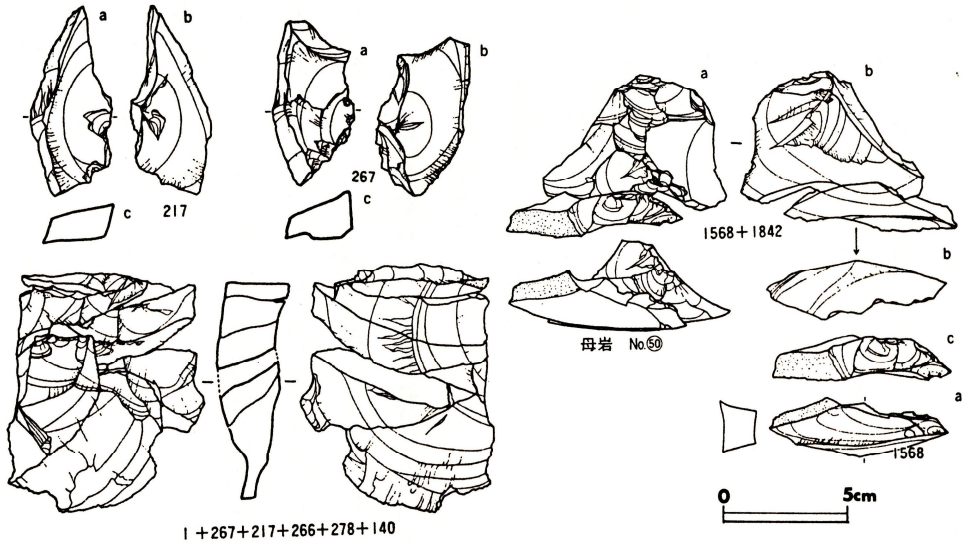


図 93　岩戸遺跡の接合資料（芹沢・柳田 1978）

岩戸遺跡第 1 文化層では、瀬戸内技法に類似した横長剥片剥離技術が存在し、接合資料によりその第 2 工程を検討できる。芹沢・柳田 1978 の実測図によれば、横長剥片石核 140 を含む接合資料は、盤状剥片の打面部でなく、左側縁に剥離作業面を設定し、打面調整を施した後に横長剥片 2267・217 を剥離、再び打面調整を施して横長剥片 X を剥離するもので、横長剥片 37 は翼状を呈する。横長剥片石核 1842 を含む接合資料は、大型剥片の末端に剥離作業面を設定し横長剥片を剥離したもので、ナイフ形石器 1568 は国府型に近い形状を呈している。その他では、横長剥片石核 241 を含む接合資料は石核底面が自然面であり、横長剥片石核 1447 を含む接合資料は、打面と剥離作業面を入れ換えて横長剥片剥離を行なったものである。

岩戸遺跡第 1 文化層の瀬戸内系横長剥片剥離技術は、石核の素材剥片の形状、作業面設定位

置、剥片剥離作業の手順等、瀬戸内技法としての多くの属性が欠け、典型的瀬戸内技法は認めることはできない。

越中山遺跡K地点・岩戸遺跡第1文化層の瀬戸内系横長剥片剥離技術は、瀬戸内技法ないし類似の剥片剥離技術であり、その一部に変質を生じている点でも同様である。その技術的変質を、東部瀬戸内地域から遠く離れて在地石器群の影響を受けたためと解釈することも可能であるが、むしろ瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統の中での編年的位置を示しているのだと思われる。すなわち、瀬戸内技法の特徴的属性が失われ、橿石島遺跡の横長剥片剥離へと変遷する過程として評価しうるのではなかろうか。

瀬戸内技法	(1)瀬戸内技法の発生 (2)頭部調整 ‖ (3)剝離作業面の調整	越中山遺跡K地点
橿石島遺跡・西脇遺跡の横長剝片剝離技術	(4)剝離作業面上を左右に移動しながらの剝離作業 (5)打面と剝離作業面を入れ替えて剝離作業 (6)石核の両端に剝離作業面の設定 (7)瀬戸内系横長剝片剝離技術の終末	岩戸遺跡第1文化層

表7　瀬戸内技法の崩壊過程の組み合わせ

瀬戸内技法では、翼状剥片の剥離に先立って打面縁に頭部調整が施される場合が知られている(松藤 1974)。K地点の剥離作業面の調整とは、加工の深さの点で相違するが、頭部調整の目的が打両角の修正と目的剥片の厚さの調整にあるとされており、両者の技術的な近さが認められる。また、橿石島遺跡の横長剥片剥離技術では、剥離作業面の調整と打面縁の頭部調整が盛んに施されている。橿石島遺跡の頭部調整と剥離作業面調整は、剥片剥離が同一作業面上を左右に移動して行なわれるため生ずる稜線を修正するもので、K地点の剥離作業面の調整について、その技術的関係に注意をうながす。岩戸遺跡第1文化層では、その横長剥片剥離技術はむしろ橿石島遺跡に似ており、目的剥片剥離が左右しており、打面と剥離作業面が交互に入れ替るものが認められる。目的剥片の幅と剥離作業面の幅が対応せず、目的剥片の形状の不規則化が進行している点も瀬戸内技法的ではない。

瀬戸内技法の特徴的属性が橿石遺跡の横長剥片剥離技術の属性に変化する過程の中にK地点と岩戸遺跡第1文化層の横長剥片剥離技術を位置付けるなら、表7のように概念化できる。実際には、特に国府型期には瀬戸内技法でも変質程度の異なるものと典型的瀬戸内技法が複合して存在したのだろう。宮田山型期でも、橿石島遺跡の横長剥片剥離技術の属性獲得程度の異なるものが複合している。一遺跡の剥片剥離技術複合全体の技術的段階を問題としなければならない。

ところで、越中山遺跡K地点の接合資料中の翼状剥片⑩のような表面にネガティブな剥離が切り合う横長剥片を素材としたナイフ形石器は、越中山遺跡K地点・岩戸遺跡第1文化層・郡家今城遺跡・初矢遺跡等で広く認められるが、先に指摘したように瀬戸内技法・橿石島遺跡の横長剥片剥離技術のいずれでも生産されるため、国府型ナイフ形石器であっても、単独の場合宮田山型期の古い段階のナイフ形石器と誤認されうると思われる。結局、ナイフ形石器等のみの検討は、その編年的位置を明らかにするのには不充分であり、剥片剥離技術の検討が必要で

ある。この種のナイフ形石器については注意を要すると考える。櫃石島遺跡の横長剥片剥離技術と西脇遺跡のそれとは、ほとんど差異は認められない。東部瀬戸内地域でこの時期の編年作業が進展しておらず、各遺跡でも属性獲得程度の異なる剥片剥離技術が混在するなど、各段階の技術的変遷も明らかではない。良好な単純遺跡の剥片剥離技術の検討が望まれる。この時期の横長剥片石核は多様であり、瀬戸内技法の翼状剥片石核に類似するものから一見両面加工石器のような形状を呈するものまで混在する場合がある。

剥離作業面が素材剥片の打面部と末端の二側縁に設定された場合、剥片剥離作業が進行し、剥離作業面が後退するにつれ、石核は両面加工の尖頭器状を呈する。特に、打面縁に頭部調整・作業面調整・打面調整が施されたものには槍先形尖頭器に類似したものが多い。宮田山型期・井島Ｉ型期の横長剥片剥離技術が、両面加工尖頭器の製作技術と類似することは、春成秀爾氏により指摘されている(春成 1980)。角錐状石器にしろ、尖頭器発生は瀬戸内系旧石器を介在させた形で論ぜられる場合が多い。両者の技術的水準・系統に近さが認められるかもしれない。

他地域の瀬戸内系旧石器を含めて、東部瀬戸内地域の横長剥片剥離技術伝統の変遷を把握することは、結局、層位的発掘の条件の悪い東部瀬戸内地域の編年確立に、最も有効であろう。石器群全体と剥片剥離技術複合を合せ、検討が行なわれることが望まれる。

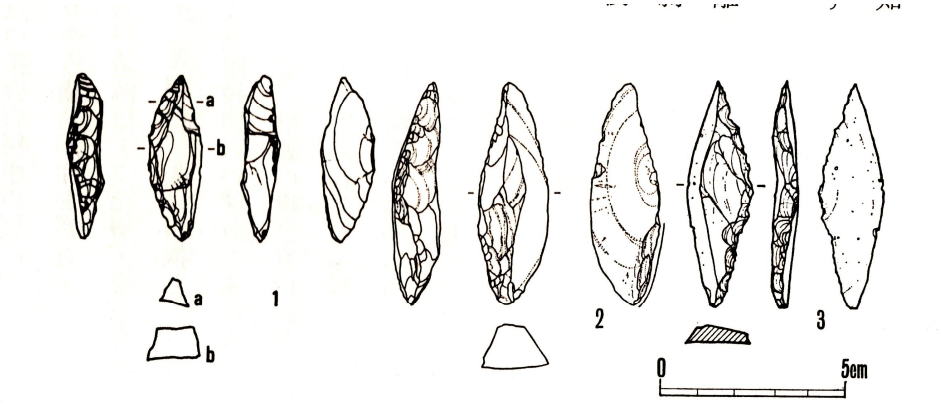


図 94　ネガティブな剥離面の切り合うナイフ形石器
1：越中山遺跡Ｋ地点　2：初矢遺跡　3：郡家今城遺跡

第２節　瀬戸内系旧石器の存続期間について

1,　はじめに

いわゆる瀬戸内系の旧石器は、近畿地方中央部から瀬戸内地方東部を中心に分布域を持ち、サヌカイトという特定の石材に最適化した石器製作体系を基盤としている。瀬戸内系のナイフ形石器は、風化土壌中の不確かな層位的資料により、国府型ナイフ形石器が最古で、以後宮田山型・井島Ｉ型ナイフ形石器の順で変遷したとされた。国府型ナイフ形石器の素材剥片生産は、瀬戸内技法によるものであり、宮田山型ナイフ形石器には植石島技法が対応することも認められた。

瀬戸内地域の旧石器研究の初期から、瀬戸内系の横長剥片剥離技術の変遷は、まず瀬戸内技法が完成したものとして存在し、それが次第に崩壊・変質していくのであると考えられてきた。いわゆる櫃石島技法の位置づけは、瀬戸内系横長剥片剥離技術の終末であるとされる。この変遷観は形式学的にも妥当性があり、ナイフ形石器の編年とおたがいに補完しつつ、研究者に受け入れられてきたが、実際の遺跡での変遷が確認されたことはなかった。

この瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術伝統の汎日本的な位置づけについては、その本来の分布域ではなく他地域の遺跡でのわずかな資料をもとに、先の横長剥片剥離技術とナイフ形石器の予測される技術形態学的変遷を当てはめたものであり、その検証には問題を残していた。

1980 年代、西南日本で大規模な旧石器時代遺跡の発掘調査が行われるようになり、層位的な検出例が増加している。ようやく近畿地方でも、AT 火山灰の上下から石器群が出土するなど、層位的検出がなされ、従来からの問題について解決を計ることが可能となった。現在では、従来形式学的方法が優先され、わずかな他地域での出土例から推定されていた瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術伝統の位置づけを、近畿・瀬戸内地方・南関東地方・九州地方などで瀬戸内系旧石器を出土した遺跡の新たな資料を付き合わせて、修正することが求められている。

まず瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術伝統の編年を確立する必要から、本稿では特に、瀬戸内系横長剥片剥離技術と瀬戸内系旧石器の変遷の様相・瀬戸内的文化伝統の存続期間について新資料を検討したい。現時点で可能なのはその時間的枠組みを明らかにすることである。

2 周辺地域の層位的出土例

近畿・瀬戸内地方以外の地域で検出された層位的出土例は、南関東、東海、九州など、広範囲に分散している。各各の地域で、土壌の堆積環境は大きく異なる。一律に比較は困難であるので、まず AT 火山灰の位置に注目する。

－南関東－

南関東では、埼玉県上尾市殿山遺跡・神奈川県海老名市柏ケ谷長ヲサ遺跡から国府型ナイフ

形石器などが層位を確認して出土している。南関東では、立川ローム中に幾枚もの文化層が存在し、日本で最も石器群編年に良好な条件を備えている。

殿山遺跡（石器研究会 1982）は、大宮台地に位置し、立川ローム層のソフトドームからハードローム、黒色帯上部にわたる出土層準から国府型ナイフ形石器など５点のナイフ形石器、石核等が出土している。遺物の出土は、ハードローム中にピークがある。黒色帯にはガラス質の結晶が肉眼で認められ、AT 降灰層準と考えられる。国府型ナイフ形石器など瀬戸内系のものとしては、底面がポジティブな剥片を素材とし打両部側線を背潰し加工した国府型ナイフ形石器としての属性を備えるもの三点、打両部側線と刃部側線の両側緑を調整し一見角錐状を呈するもの 2 点、のナイフ形石器がある。共伴した石核には、瀬戸内技法によるものは認められず、剥片素材の打面調整を施さず横長剥片を剥離したものがある。

柏ケ谷長ヲサ遺跡(柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団 1983)は、相模野台地に位置し、その第IX文化層から国府型ナイフ形石器か出土している。遺物の出土は立川ローム層 B、B2 L 層中で、その直下 S1S 層下に AT 降灰層準が認められる。国府型ナイフ形石器は、ポジティブな底面をもつ翼状の横長剥片を素材とし打両部側線に背潰し加工を施したものであり、国府型としての属性を備える。瀬戸内系と見なしうる横長剥片剥離技術は認められないという。

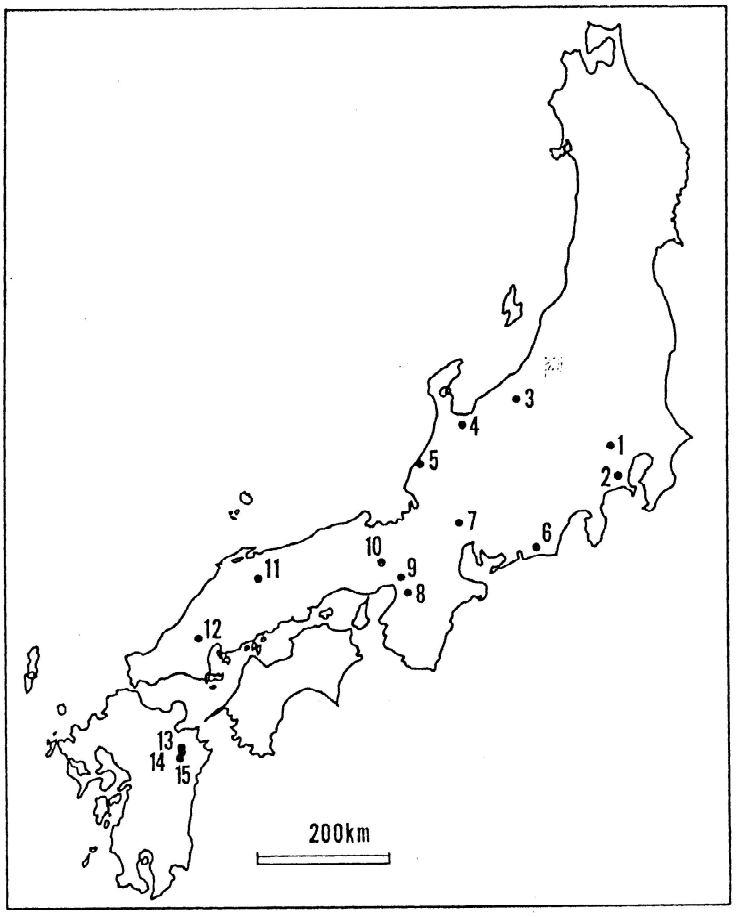


図 95　遺跡分布図

1：殿山　2：柏ケ谷長ヲサ　3：仲町　4：新造池　5：西下向　6：広野北　7：日野寺田　8：桜ヶ丘第１　9：郡家今城　10：板井寺ケ谷　11：恩原　12：冠高原Ｂ地点　13：都留　14：百枝　15：岩戸

－中部高地・北陸－

中部地方中央高地・北陸では、長野県上水内部信濃町野尻仲町遺跡、富山県射水郡小杉町新造池 A 遺跡、福井県坂井郡三国町西下向遺跡等から瀬戸内系の可能性を考慮できる資料が層位的に検出されている。総じて土壌の堆積環境が悪く、風成層の土壌堆積厚によって位置を決定している場合が散見される。

野尻仲町遺跡(野尻湖人類考古グループ 1984)は、野尻湖西岸の丘陵上にあり、上部野尻ローム層Ⅱ

赤褐色ローム層上部から横長剥片を素材としたナイフ形石器などが出土している。上部野尻ローム層工の下部の C14 年代が 24,970±1,660BP から 23,530±1,180BP を示している。赤褐色ローム層上部は、AT 降灰以後のいわゆるソフトロームに該当する。ナイフ形石器には、翼状剥片と異なるポジティブな底面とネガティブな副画数面をもつ横長剥片を素材とし打両部側線に背潰し加工を施したもの、刃部側線にも刃潰し加工を施した二側線加工のものなどがある。交互剥離を両側縁で行った剥片素材の横長剥片石核があるほか瀬戸内系の剥片剥離技術は顕著には認められていないようである。

新造池 A 遺跡(山本 1983)は、射水丘陵に位置し、基本的には風成層と考えられる黄褐色粘質土の上部から横長剥片を素材としたナイフ形石器、横長剥片、横長剥片石核等が出土している。黄褐色粘質土の下部に AT 火山灰のピークが認められる。ナイフ形石器には、ポジティブな底面とネガティブな副面数面を持つ打両部側線に背潰し加工を施すもの、ポジティブな底面のみのものがある。横長剥片・横長剥片石核の観察から剥片剥離技術を推定すれば、剥片剥離作業が石核の一作業面に固定されず左右に移動しつつ打両部との逆転を行うものである。

西下向遺跡(平口他 1983)は、日本海に面する段丘上に位置し、腐食・風成層である第 Ib 層から第Ⅳ層にかけ、国府型とみなしうるナイフ形石器等と瀬戸内系の横長剥片剥離技術が、良好な状態で検出されている。第Ⅲ層に遺物包含のピークがあり、第Ⅴ層中部に AT 火山灰のピークが認められている。ナイフ形石器にはポジティブな底面とネガティブな副面をもつ翼状剥片素材の国府型ナイフ形石器、副面が数両切り合う横長剥片素材のものがある。共伴している横長剥片にはネガティブな副面が数両切り合うものが多く翼状剥片はない。西下向遺跡の横長剥片剥離技術は「三国技法」として瀬戸内系横長剥片剥離技術のうちに位置づけられた(平口他、1984)。三国技法は、大型の盤状剥片の背面を打両部として調整し、左右に移動しつつ連続して横長剥片を剥離するが、作業面と打面が逆転することはない。剥離される剥片に形態差が大きくなる特徴があり、翼状剥片素材の国府型ナイフ形石器もこの所産と考えられている。

-東 海-

東海地方では、静岡県磐田郡豊田町広野北遺跡、岐阜県岐阜市日野寺田遺跡などで層位を明確にして瀬戸内系旧石器との関連を考慮しうる資料が出土している。風成層が基本となり一般に土壌堆積環境はよくないが、広域火山灰の捕捉可能な局地的条件を備えている。

広野北遺跡(山下他 1985)は、天竜川東岸にあり、天竜川から巻き上げられた風成層の黄褐色土層下部からナイフ形石器等が検出されている。黄褐色土層下の暗褐色土層中部に AT 火山灰のピークが認められる。出土したナイフ形石器は、いわゆるファーストフレイクを素材とし面部側縁に背潰し加工を施した一側縁加工のもので、共伴した石核には、盤状剥片の背面側に打面調整を施し、作業面を素材剥片の打面部に設定したものがある。

－九州－

九州地方では、大分県大野郡清川村岩戸遺跡、三重町百枝遺跡、犬飼町津留遺跡など大野川流域の遺跡から層位を確認して瀬戸内系旧石器が出土し、また九州北半でも多くの遺跡が知られている。九州には姶良、阿蘇といった大規模・広域の火山性噴出物供給源があり、層位的に

極めて良好な環境となっている。

岩戸遺跡(芹沢・柳田 1978)は、大野川川岸の段丘上にあり、黄色ローム層上部から国府型に類似するナイフ形石器、横長剥片剥離技術関連の資料等が出土している。AT 火山灰のピークが黄色ローム層下部にある。ナイフ形石器・角錐状石器・三稜尖頭器、瀬戸内技法的な横長剥片剥離技術関連の剥片と石核が出土している。岩戸遺跡のナイフ形石器には、ポジティブな底面とネガティブな副面を持った国府型に類似するものがあるが、その剥片剥離技術は石核素材剥片のどこに作業面を設定するか、作業面と打面の安定度、打面調整の程度、といった点で典型的な瀬戸内技法と差異がある。この横長剥片剥離技法を「岩戸的横長剥片剥離技法」と呼称する提案もある(綿貫 1982)。

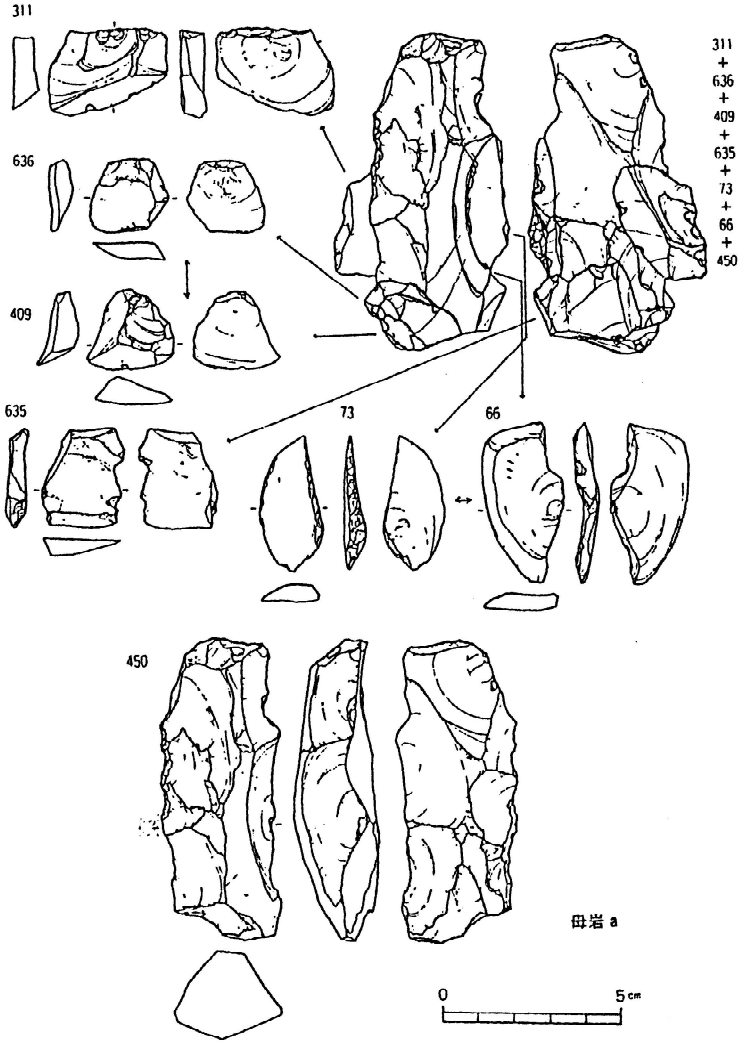


図 96　百枝遺跡の接合資料（栗田他 1985）

百枝遺跡(栗田他 1985)は、おなじく大野川川岸にあり、明黄褐色ローム層からナイフ形石器、角錐状石器、三稜尖頭器、横長剥片剥離技術関連の剥片、石核が出土している。AT 火山灰のピークは、明黄褐色ローム層にあり、その風化土層と考えられている。ナイフ形石器と横長剥片数点、横長剥片石核からなる接合資料があり、ナイフ形石器にはポジティブな底面のみを持つ横長剥片が素材とされている。剥片剥離は作業面上を左右に移動しつつ行われ、作業面と打面が入れ替わる形で行われ、瀬戸内技法的ではない。

津留遺跡(清水他 1982) は、おなじく大野川川岸にあり、第Ⅲ層褐色土層下部から国府型ナイフ形石器、角錐状石器等が出土している。AT 火山灰層は認められていないが、岩戸遺跡、百枝

遺跡の層準とほぼ同層準と考えられる。

3　近畿・瀬戸内の層位的検出例

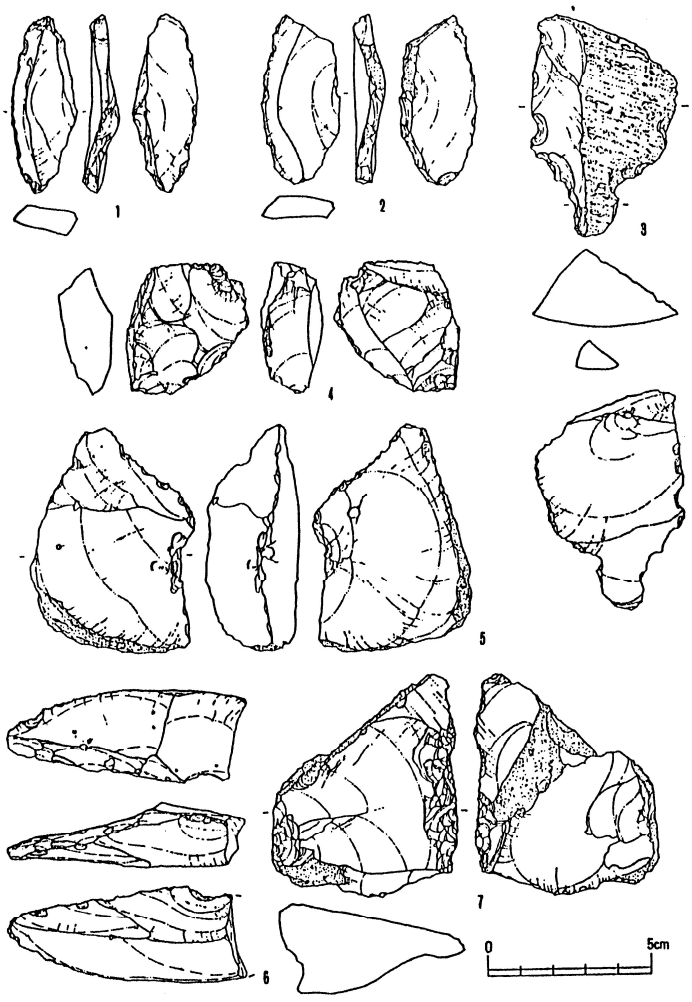


図 97　桜ヶ丘第一地点遺跡下層の遺物（松藤・佐藤 1984）

本来の瀬戸内系旧石器分布域である近畿地方・瀬戸内地方で、瀬戸内系の旧石器が層位関係を明らかにして検出される場合は少ない。土壌の堆積活動の不活発な地域では、良好な遺跡は山麓の崩壊土や大河川の沖積面下深くにある場合を考慮しなければならない。風成層の形成も不十分で全時期の石器醇があたかも同一平面上から出土するような状況を示す。AT 火山灰との関係に言及できる遺跡としては、奈良県北葛城郡香芝町桜丘第一地点遺跡、大阪府高槻市郡家今城遺跡 C 地点、兵庫県多紀郡西紀町板井寺ケ谷遺跡、岡山県苫田郡上斎原村恩原遺跡、広島県佐伯郡吉和村冠高原 B 地点遺跡があげられるに留まる。

桜丘第一地点(橿原考古学研究所編 1979、松藤・佐藤他 1984)は、二上山北麓にあり、今までに四次の発掘調査が行われている。第三・四次の発掘調査で、第Ⅱ層の黄褐色シルト質土層と第Ⅲ層の礫層に分かれて遺物を出土している。第Ⅱ層黄褐色シルト質土層中に火山ガラスの包有が認められ、第Ⅲ層は AT 降灰以前であるとされている。第Ⅱ層中からは、国府型ナイフ形石器、横長剥片素材のナイフ形石器、角錐状石器、楔形石器、瀬戸内技法関連の翼状剥片、翼状剥片石核等、横長剥片、横長剥片石核、縦長剥片、縦長剥片石核等が出土している。第Ⅲ層からは、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核、盤状剥片石核、楔形石器、削器等が出土している。多量のナイフ形石器と剥片剥離作業用の盛んな活動を示す多量の遺物は、原石産地周辺での石器製作場的な様相を強く示している。桜丘第一地点遺跡は、国府型期の代表的な遺跡の一つであり、第Ⅲ層の瀬戸内技法関連の資料と第Ⅲ層の資料では、第Ⅲ層の資料が過

小で今一歩明かではないが、大差ないとされている(松藤和人、1985)。

郡家今械遺跡 C 地点(冨成・大船、1978)は、阿威川の川岸にあり、1976 年に発掘調査されている。奈良時代遺構面下の黄褐色砂質土層から遺物が出土している。調査地点からやや離れた遺跡内で、黄褐色砂質土を洗掘する帯状の窪地から AT 火山灰とみなせる火山ガラスが検出されている。土壌堆積には水流の影響も考えられるという(石田・笹嶋・横山・竹村 1984)。出土した遺物には、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、削器、彫器等の石器類、翼状剥片、横長剥片、翼状剥片石核、横長剥片石核、縦長剥片、縦長剥片石核等がある。遺跡内での剥片剥離作業の不活発さに比べ多量のナイフ形石器が遺跡内に搬入されており、石器製作よりも生活拠点的な様相の強い遺跡と考えられよう。ナイフ形石器、翼状剥片は典型的な国府型期としての様相を示す。

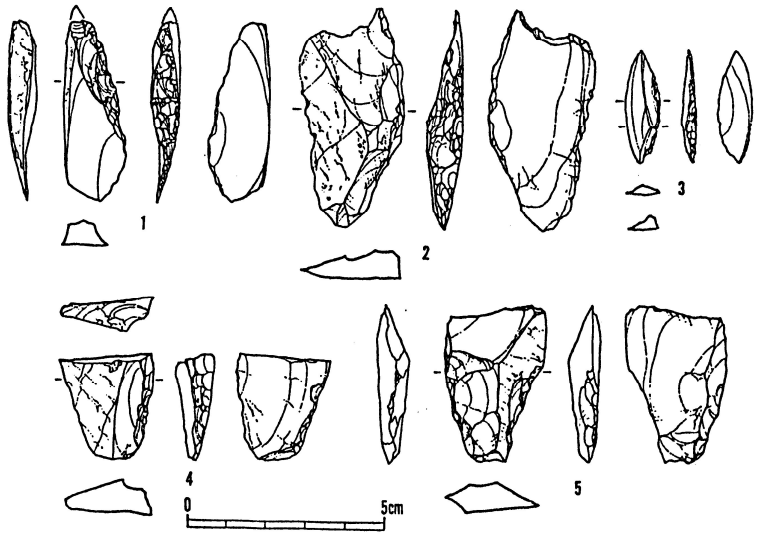


図 98　板井寺ヶ谷遺跡下層の遺物（1）（山口編 1991）

板井寺ケ谷遺跡(兵庫県教育委員会 1985 山口編 1991、水口・市橋・岸本・山口他 1987)は、篠山盆地の北西端にあり、極めて良好な層位関係の中で遺物が検出されている。奈良時代遺構南下の無遺物第Ⅰ層の砂礫層を挟んで第Ⅱb層暗灰色火山灰層と第Ⅲ層黄色粘土層の二枚の文化層が認められ、上層からは角錐状石器、ナイフ形石器、削器等、下層からは、横長剥片素材と縦長剥片素材のナイフ形石器、削器、掻器、局部磨製石斧、横長剥片、縦長剥片、横長剥片石核、縦長剥片石核等が出土している。石器群は陸性堆積の部分に多く分布するが、一部は水性堆積の部分にも広がる。水性堆積の部分は、泥炭Ⅰ、上位火山灰、泥炭Ⅱ、下位火山灰、泥炭Ⅲ、灰色粘土という層序を示す。第ⅡC 層と下位火山灰が AT 火山灰であり、陸地部の第Ⅰ層下部にもピークの出た上位火山灰が大山起源の火山灰であるとされている。上層の石器群は泥炭Ⅱに、下層の石器群は泥炭Ⅲに対応する時期に残されたものである。泥炭層は 14C 年代測定が成されており、泥炭Ⅱが 22,700±330BP から 20, 400±260BP、泥炭Ⅲが 26, 000±340BP から 23, 600±200BP、泥炭Ⅲ中の火処と考えられる消炭状臭化物密集箇所が約 25, 000BP との測定結果が出ている。

上層の石器群は、角錐状石器が特徴的であり、ナイフ形石器には瀬戸内系横長剥片素材のものはない。剥片剥離技術は、量的に不十分ではあるが打両部と作業面が安定せず左右上下に移

動しつつ剥片剥離を行うものが認められ、瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統としての中にあるが、製品には乏しい。

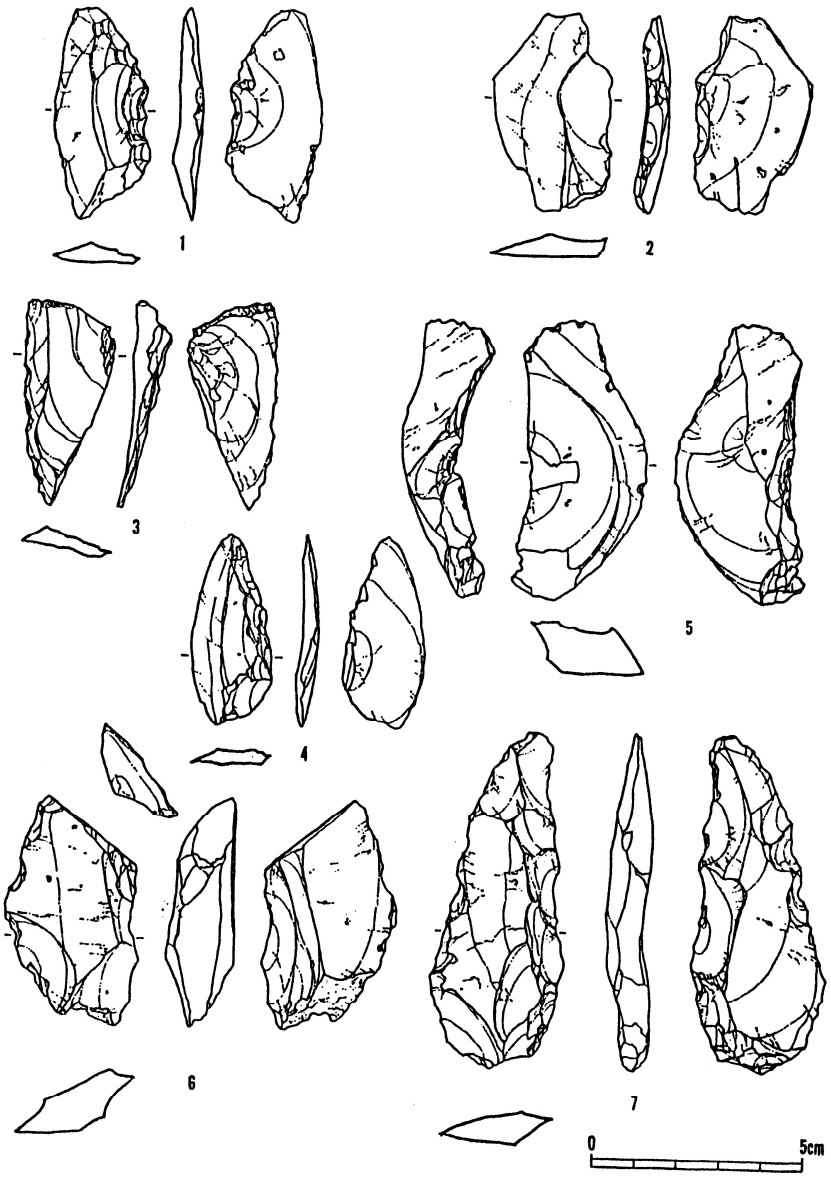


図 99　板井寺ヶ谷遺跡下層の遺物（2）（山口編 1991）

下層の石器辞には、横長剥片剥離技術が明瞭に認められ、打両部と剥離作業面が固定せず剥離作業が左右に移動しつつ行われるいわゆる植石島技法的なもの、打両部と作業面が固定され左右に移動しつつ目的剥片剥離を行うもの、剥離作業面と打面が固定され作業面一杯の目的剥片剥離を行うもの、の三つが存在する。ナイフ形石器は、横長剥片素材の打面部に背潰し加工を施した一側線加工のものが多い。横長剥片はネガティブな副面が数面切り合うものが多いが、ポジティブな底面とネガティブな副面が認められる翼状剥片も存在している。

恩原遺跡(稲田、1986)は、中国山地恩原高原にあり、ソフトローム層中から第一地点で横長剥片素材のナイフ形石器、第二地点でもソフトローム相当から国府型ナイフ形石器、翼状剥片等が出土しているという。ソフトローム層の下は大山起源のオドリ火山灰層、AT 火山灰層となっている。国府型ナイフ形石器には、いわゆるファーストフレイク素材の打両部側線と基部に加工を施したものと翼状剥片素材のものがある。

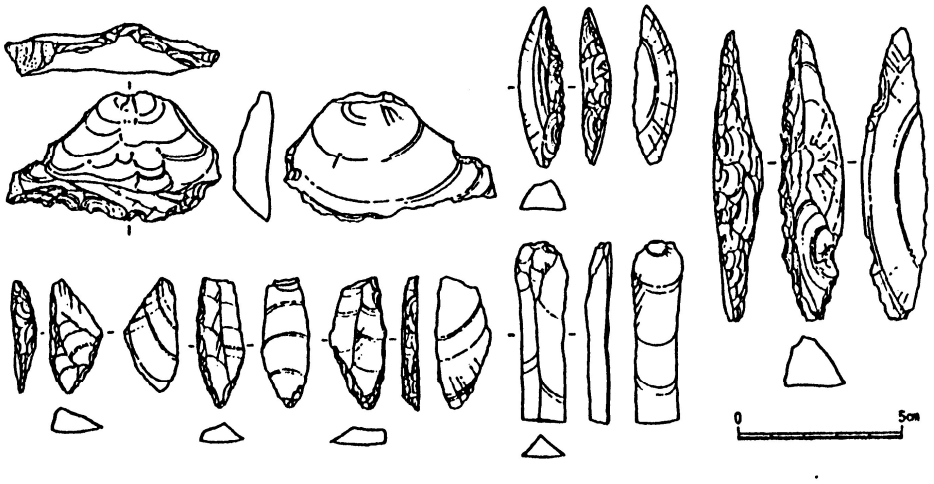


図 100　恩原遺跡の遺物（稲田 1986）

冠高原 B 地点遺跡(植田・梅本・桑原・三枝他 1983)は、中国山地帯のサヌカイト原石山地である冠高原にあり、第Ⅲ層黄色粘土層からナイフ形石器・角錐状石器・削器・楔形石器・彫器等が出土している。第Ⅲ層は風成層であるが、第Ⅳ層には AT 火山灰ガラスのピークが認められ、第Ⅲ層上部にはアカホヤ火山灰も認められた。出土したナイフ形石器は、ネガティブな副面とポジティブな底面の関係が翼状剥片の属性を示さない一側線加工・二側線加工のものが多く国府型ナイフ形石器は僅少である。角錐状石器は、稜上調整を施すものは少ない。共伴した横長剥片石核と横長剥片には、打両部と剥片剥離作業面とが固定せず逆転し作業面上を左右に移動しつつ目的剥片を剥離する剥片剥離技術が認められる。一方、瀬戸内技法によると思われる翼状剥片石核は少なく、翼状剥片も僅かである。

4 瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術の存続期間

瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術伝統は、その本来の分布域である東部瀬戸内・近畿地方で良好な層位的検出例がなく、花崗岩風化土壌や風成堆積作用の及んだ出土層区分に従った石器詳把握と、ナイフ形石器の形態差と素材剥片剥離技術の形式学的比較にたよった編年作業が、長い間行われてきた。この編年観と他地域の石器群との整合性については、東京都野川遺跡の調査時に第Ⅳ4 層の横長剥片素材のナイフ形石器が国府型ナイフ形石器の影響である可能性が考慮され、また山形県越中山 K 地点遺跡、大分県岩戸遺跡で国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が発見されてのち、しばしば問題とされている。他地域のナイフ形石器文化と瀬戸内系旧石器文化は、ほぼ同時期に並存したものと推測されたが、その検証は果たされていなかった。

第 2 項で周辺地域、第 3 項で近畿・瀬戸内地域の層位的検出例をあげた。これらの遺跡は、それぞれ堆積環境を異ならせており、一律には比較できない。また、遺物の量的・質的にも等価でない遺跡が含まれている。遺跡内容の比較は後に譲り、まず全国的に広域で発見され、広く鍵層として利用されている AT 火山灰層の位置を基準として、その上下のどちらで瀬戸内系の遺物を出土したかを確認し、瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術の存続期間について考えてみたい。

AT 火山灰層よりも上位で瀬戸内系の遺物を出土した遺跡は、それぞれ層位的条件を異ならせるが、ひじょうに広域に分布しており、またその包含層準にも大きな幅があるように観察される。層位の堆積状況に差異があるので簡単に整理すれば、AT 火山灰降灰層準より上位であることのみ明らかなのは富山県新造池 A 遺跡、福井県西下向遺跡、岐阜県日野寺田遺跡、奈良県桜丘第一地点遺跡、広島県冠高原 B 地点遺跡がある。AT 火山灰の降灰直後と考えられているものに大分県岩戸遺跡、百枝遺跡、兵庫県板井寺ケ谷遺跡上層、やや時間を置くと見なせるものとして埼玉県殿山遺跡、神奈川県柏ケ谷長ヲサ遺跡、静岡県広野北遺跡がある。長野県仲町遺跡、岡山県恩原遺跡はソフトローム中に遺物の主包含層があるとされ、さらに新しい段階のものとも考えられるが、個々の地域でのソフトローム形成の条件が同じではない。AT 火山灰層よりも下位で瀬戸内系の遺物を出土した遺跡は、奈良県桜丘第一地点遺跡と兵庫県坂井寺ケ谷遺跡があるが、桜丘第一地点遺跡は時期を特定できない。坂井・寺ケ谷遺跡は、水性堆積の泥炭層中の 14C 年代が約 25,000 年前を示した。また大阪府郡家今城遺跡 C 地点も AT 火山灰降灰層準より下位になる可能性が指摘されている。

整理した結果、従来の瀬戸内系旧石器の編年観と大きく相違する例や同時期と見なせる遺跡間の遺物内容の様相が大きく異なる場合が認められる。また時期毎に分布域も変動しているかも知れない。大きく瀬戸内系として見なせるか否かで括ることが許されるなら、兵庫県坂井寺ケ谷遺跡の 14C 年代約 25,000 年前を最古とし、恩原遺跡・仲町遺跡の出土層からソフトローム相当のナイフ形石器文化後半期にまで、瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術が存続したことを示しているといえる。坂井・寺ケ谷遺跡の 14C 年代と他遺跡の層位的関係による検討を同一レベルで考察するには現在のところ問題は残るが、一般に良好な編年試案を提示している南関東地方、特に武蔵野台地の層位と対比を一応考えてみるなら、板井・寺ケ谷遺跡下層はIX～X層相当、桜丘第一地点は、VI層に AT 火山灰ガラスを含むことからⅦ層以下に、岩戸遺跡と百枝遺跡・坂井寺ケ谷遺跡上層は、AT 降灰直後のⅤ層相当に、殿山遺跡はⅣ層下部に、柏ケ谷長ヲサ遺跡はⅣ下部˜Ⅴ層に、恩原遺跡・仲町遺跡はⅣ層上部に対応するとしてよいであろう。瀬戸内系のナイフ形石器を中心とした石器群は、以上、検討の方法として多くの問題があるものの存続期間については、ほぼ他地域のナイフ形石器文化と同様の期間存続している可能性が考えられた。

5 伝統としての瀬戸内系旧石器と横長剥片剥離技術

近畿・瀬戸内地方で現在のところ存続年代の検討に資することが可能な遺跡は、板井寺ケ谷

遺跡・桜丘第一地点遺跡・恩原遺跡・冠高原 B 地点遺跡と郡家今城遺跡 C 地点があるにすぎない。これらとて桜丘第一地点遺跡を除けば、山地帯に含まれる遺跡ばかりであり、瀬戸内系旧石器を出土させていたとしても二次的に現地化した石器辞である可能性がある。また他地域の遺跡は瀬戸内系旧石器の分布域と間接的な関係である場合が多いと考えてよい。この場合、本来の分布域での石器群と異なった顔つきを示す場合がないとは言えない。現時点では、先の検討でこれらすべてを一括したが、今後その個々の性格を検討しなければなるまい。また、近畿地方・瀬戸内中央部で瀬戸内系旧石器本来の石器辞自体を直接層位的に検出することが望まれよう。ここでは現時点で知り得た材料を基にナイフ形石器と横長剥片剥離技術、その伝統をめぐる若干の問題について考えてみたい。

近畿地方・瀬戸内中央部の旧石器は、先に検討したように全時期を通してナイフ形石器の調整と素材剥片の剥離技術に大枠で共通の属性を有し、他地域の石器辞と峻別できることから、これを「瀬戸内系旧石器文化伝統」として考えたい(山口 1983)。個々のナイフ形石器と横長剥片剥離技術については一つの段階・様相であると考え、瀬戸内系としての属性の集合体として組み合わされて認められるものと見なせよう。

まず、瀬戸内系旧石器の代表的型式として知られる瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器のあらわれかたである。国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法に関係する可能性のある旧石器を出土したのは、殿山遺跡、柏ケ谷長ヲサ遺跡、恩原遺跡、桜丘第一地点上・下層、板井寺ケ谷遺跡下層、郡家今城遺跡 C 地点がある。桜丘第一地点の礫層中の資料は、AT 火山灰降灰以前に瀬戸内技法が存在していたことを示した。また一方で恩原遺跡の事例は国府型ナイフ形石器がやや不安はあるもののソフトローム層中に包含されていた可能性があるとされ、極めて新しい時期に国府型ナイフ形石器が存在していることも示唆した。殿山遺跡・柏ケ谷長ヲサ遺跡では、AT 火山灰降灰後に国府型ナイフ形石器を認めさせている。板井・寺ケ谷遺跡下層では、国府型ナイフ形石器こそないものの瀬戸内技法の所産とも見なせる資料があり、現時点での最古の資料となっている。従来、国府型ナイフ形石器は瀬戸内系旧石器辞の中でもっとも古い位置を占めるものとして推定されていたが、これらの事例では国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法の存続期間を限定することはできない。個々の事例に誤りがなければ、むしろ瀬戸内系の旧石器文化伝統全時期にわたって国府型が存続したように看取できる。現時点では良好な遺跡が瀬戸内系旧石器分布域内に少なく、特に

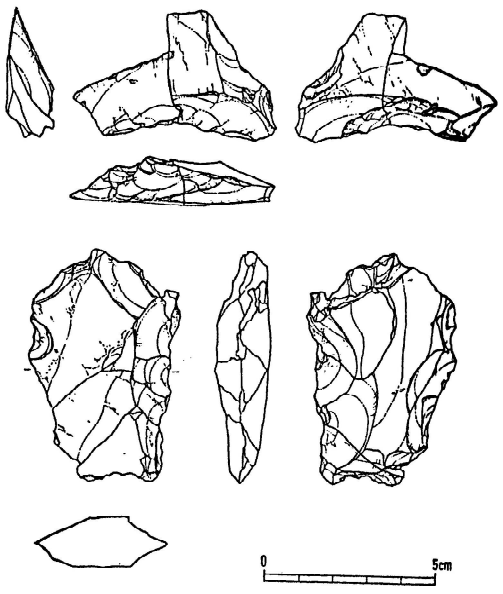


図 101　板井寺ヶ谷遺跡下層の接合資料
（山口編 1991）

AT 火山灰降灰以前の資料が不足しており、また AT 火山灰よりも上位のこれら原資料も再検討が必要であろうが、今後さらに事例が増加するようならむしろ積極的にこの状況を認めていく必要があると考えたい。

以上の状況を前提として、国府型ナイフ形石器とその他の型式のナイフ形石器との関係を考える場合、現時点でどのように推定が可能であろうか。ここでも他地域の瀬戸内系旧石器を出土した遺跡の資料の性格検討が不十分であり、これらは慎重に取り扱わねばならない。まず板井寺ケ谷遺跡下層では特に典型的な国府型ナイフ形石器が認められず横長剥片素材極小型ナイフ形石器が存在する。このような形状のナイフ形石器は、従来の型式学的編年によりナイフ形石器文化の最新期に位置づけられてきた。また、板井・寺ケ谷遺跡の事例は、国府型ナイフ形石器に留まらず、その他のナイフ形石器諸型式も従来推定されていた編年的位置が必ずしも正確でなかったことを示している。

角錐状石器については、岩戸遺跡が AT 火山灰直上、百校遺跡が AT 火山灰の風化土中、板井寺ケ谷遺跡上層が AT 火山灰と上位火山灰間の AT 火山灰風化土中であることから、少なくとも AT 火山灰降灰直後に分布を拡大した石器であることが理解される。現在のところ比較的独立的に近畿地方の遺跡で発見されており、瀬戸内系旧石器と完全には一体化していないように見える。

瀬戸内地域の旧石器編年については以前からその方法の問題点が指摘されてきたが（柳田 1977）他地域の事例であるとはいえ、AT 火山灰より上位の土層から国府型とは異なるナイフ形石器を出土させる遺跡は多数あり、坂井寺ケ谷遺跡下層の一事を取って極小型ナイフ形石器の方が古いという結論に至るのではなく、少なくとも国府型から極小型ナイフ形石器への単方向的変遷観では説明できなくなったと考えることが適切であろう。

宮田山型ナイフ形石器には大きな形態差が存在しており、ナイフ形石器文化全期間を通してある程度の型式が同時に並存していた可能性を考慮せねばなるまい。単純に国府型ナイフ形石器のみが最古の位置を占めるものとは出来ない。瀬戸内系ナイフ形石器すべてを技術形態学的な意味での形式学的根拠のみで編年するのは不可能となったと言えよう。

さらに、その素材剥片の生産技術である瀬戸内技法は、いわゆる植石島技法などの他の横長剥片剥離技術とどのような関係になろうか。板井寺ケ谷遺跡下層には各種の横長剥片剥離技術が並存するが、その中には既に盤状剥片の打両部背面に山形調整を施し、作業面一杯の目的剥片剥離が、平行に後退して作業が繰り返されるといった瀬戸内技法の主要属性がいささか個別的に出現している。また桜丘第一地点遺跡の事例も瀬戸内技法が AT 火山灰以前に遡り出現していることを証明した。現在の時点では桜丘第一地点遺跡と板井寺ケ谷遺跡下層の時間的関係は不明であるが、板井寺ケ谷遺跡下層の横長剥片剥離技が、板井寺ケ谷遺跡下層の横長剥片剥離技術が瀬戸内技法の初現的な状況を示しているという可能性と共に、すでに原石産地周辺に成立していたかもしれぬ瀬戸内技法の影響下にあった可能性も併せて考えなければならない。櫃石島的な横長剥片剥離技術と瀬戸内技法の差異は、坂井寺ケ谷遺跡下層で瀬戸内技法の主要な属性がすでに総てに出現していることから単に属性の組合せの問題に過ぎないとも言える。

瀬戸内系旧石器文化伝統の起源自体さらに遡り得るのは確実であり、その出自を問題にすることにもなろう。

筆者は先に典型的瀬戸内技法にみられる主要属性を保持する程度により横長剥片剥離技術全体を細分、その差異により編年を行うという試案を発表したことがある(山口 1983)。ナイフ形石器の型式変遷についても同様の解釈をしていたが、ここにいたって瀬戸内系旧石器の型式と剥片剥離技術の変遷についての見通しを変更する必要が生じている。個々の石器辞としてみた場合属性の程度は異なっており、これを基準に石器辞の特徴とすることは間違っていない。問題はこの石器群の特徴的属性の差異が何を意味するかという点であろう。従来の瀬戸内地域での形式学的方法ではこれを時間差として解釈する場合がほとんどであった。本稿の検討は、従来の方法では現象を十分に説明するものではなく、他の解釈を必要とするようである。瀬戸内系旧石器の本来の分布域での石器群のあらわれ方と外縁部のそれとでは顔つきが異なる場合があるとされたことがあるが、従来のように時間差と考える方法と合わせて地域差または立地差・性格差と考える方法があろう。

近畿地方の原石産地である二上山のサヌカイトは約 100km 半径が分布限界であるかのような法則に規制されるように広がっている。国府型ナイフ形石器または瀬戸内技法関連の資料を出した二上山北麓の桜丘第一地点遺跡と摂津北部の郡家今城遺跡 C 地点、分布圏の北端にある板井寺ケ谷遺跡での石器・剥片剥離技術の展開方法に、距離に比例して大きな差異が認められるように、瀬戸内系の旧石器は原石山地から離れるにしたがい石器・剥片剥離技術ともに小型・変形化することが知られている（山口 1983、松藤 1985)。石核素材剥片の可搬性が「距離×重さ」で制約されているとする法則の適応性がどこまで時代的・地域的にあるか検討することも必要である。外縁部や他地域に位置する遺跡での石材利用のあり方が、近畿・瀬戸内中央部でのサヌカイト一色と異なり、多様な様相を示す理由も、このサヌカイトという重い石材から離れたことへの一つの適応表現なのだろうか。

6 おわりに

瀬戸内系旧石器文化伝統の存続期間について近畿・瀬戸内中央部や周辺地域での層位的出土例を検討し、他のナイフ形石器文化とほぼ同じ期間、後期旧石器時代初頭から後半まで存続していたことを推定した。また、この石器文化伝統をめぐる若干の問題についても触れた。

瀬戸内系旧石器の編年については、従来の方法では今の事例に十分な説明が不可能な事態が出来しつつある。資料的には個々に問題はあるが、今後事例の増加があるなら従来編年の再検討が必要であろう。また派生する間趨として、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法の編年的・技術的位置づけが、瀬戸内系旧石器文化伝統としての中にどう定まるか興味深い。一時期の瀬戸内の旧石器がすべて同じ顔つきを示すわけではなく、時期変遷に従って以外に別の法則の存在も考えられる。ようやく板井寺ケ谷遺跡や桜丘第一地点遺跡など、近畿・瀬戸内中央部でも層位的検出例が認められた。今後は型式学的方法に合わせ層位編年によっても石器辞の再編成が可能となってこよう。

本稿では、わずかに問題点の存在を明らかにしたに過ぎず、その解決は今後の課題である。個々の問題については、機会を改めて再論したい。

第 3 節　旧石器時代における「移動」について

はじめに

旧石器時代はいわゆる狩猟採集経済を基盤とした社会であった。旧石器時代社会における個々の集団は、その当時の自然環境、直接的生産能力の低さのもと、現在の民族例の検討により、その保有する領域内で移動していたものと考えられている。当時の自然環境と旧石器時代社会は、その後の高度に発展・発達した狩猟採集経済社会である縄文時代のように安定した生産力を有さず、一定地域で生活の維持できる期間は年間を通して限定されており、その単位集団ごとの移動は必然であった。

旧石器時代にかぎらず、各時代人間社会は、個人から国家・民族に至るまでの諸段階の集団の「移動」活動により歴史を形成してきたものとも言える。この人間集団の移動の把握は重要な意味を持つが、考古学的方法により、その「移動」を直接把握することは極めて困難である。しかし、旧石器時代の研究が地域的な編年網の整備、石器生産技術の研究という段階から一歩前進し、集落論的視点から、近年では埼玉県砂川遺跡、静岡県寺谷遺跡、富山県野沢遺跡などで、旧石器時代集落の構造と、その移動を把握しようという試みが行なわれつつある。また、旧石器時代における集団関係について、理論的な理解も行なわれている（近藤 1976、春成 1976）。本稿では、旧石器時代の分布論的な二つの視点、遺物分布と遺跡分布を重視し、まず個体別資料を中心として把握できる「旧石器時代人の活動」について、特に石材を中心に若干の予察を試みたい。

さらに、そのような遺跡内での個体別資料のあり方を踏まえ、地域性の問題について、いわゆる瀬戸内系旧石器を中心として試案を呈示してみたい。

1，東北日本における石器および石材の消費と補給

遺跡から発掘される石器類は、ナイフ形石器・削器などの石器、目的剥片、非目的剥片、砕片、打面調整剥片、石核の多様な集合である。個々の資料は、本来、所属した個体別に剥がし取られた順で接合し、円礫の形状にまで復元されるべきものである。

しかし、一遺跡で発掘により回収される個体別の資料組成は、ほとんどの場合完全ではなく、多くの部分が欠落し、接合状態は不充分で円礫に近く復元できたものも、その内部に空白部を有するし、大半の個体では接合する例は少なく、石材の質により同一個体であると知られるものが多い。

発掘が、一遺跡を完掘したかどうか、発掘精度が高く、回収もれがなかったかどうか、といった技術的な問題もあり、一様に断定できないが、個体別資料の遺存状態の不完全さについて、

遺跡を形成することになった旧石器時代の活動にその原因を求めざるをえない。

この個体別資料の遺存状態の把握と分析は砂川遺跡において最初に行なわれた(戸沢他 1968、74)（註 1)。

砂川遺跡の報告の中では、まず遺跡に残された個体別資料のありかたから、大きく三類型に分類された。

類型 A 石核ないし残核、打面調整剥片、目的剥片、非目的剥片、砕片、石器類より構成されるもの

類型 B 打面調整剥片、目的剥片、非目的剥片、砕片、石器類より構成され、石核、残核を欠くもの

類型 C ナイフ型石器・削器等の石器、目的剥片等のみで構成されるもの

の三類型である。

類型 A は、遺跡内で剥片剥離作業が行なわれ、さらに終了した個体であり、類型 B は、遺跡内で剥片剥離作業が行なわれるか、作業途中の石核が遺跡外に持ち出される個体であると理解された。さらに、類型 C は、遺跡内で剥片剥離作業、石器製作が行なわれたものでなく、遺跡外から持ち込まれたものとして考慮された。

旧石器時代遺跡は、この三類型に属する個体が組成を構成しているのであり、この個体別資料の遺存のしかたを遺跡ごとに検討し、個体別の搬入、搬出、剥片剥離作業の展開状況、石核の廃棄、石器の使用と遺棄を把握することが可能である。

この個体識別作業は、石材の質によって難易の差が著しく、珪岩を主体とする砂川遺跡では100%の識別率を有するが、泥岩、サヌカイトなどを主体とする場合は、識別率が極めて低く、非接合資料の個体識別が不可能な遺跡が過半を占める。それに合せて、遺跡全域を完掘できず、遺物分布を完結させられず、調査精度にも問題がある遺跡も多く、現状では、この種の分析に

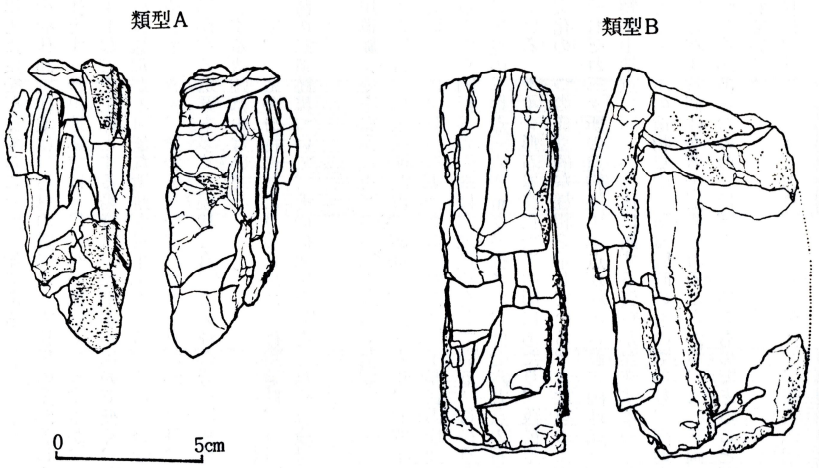


図 102　砂川遺跡の個体識別資料接合例（戸沢 1968）

耐えうる資料を保有する遺跡は少ない。

ここで、一応の分析に耐えうると思える砂川遺跡、寺谷遺跡、野沢遺跡の 3 遺跡について、その個体別資料をそれぞれ検討してみたい(註 2)。

砂川遺跡(埼玉県所沢市)(戸沢 1968、74)

砂川遺跡は、埼玉県所沢市にあり、1966 年、74 年の 2 回、戸沢充則氏らにより発掘調査がなされた。埼玉県狭山丘陵の洪積台地に買入する開析谷の先端に 6 地点を有している。このうち、A 地点と F 地点の 2 地点 364m2 が発掘され、計 769 点の石器群が出土している。ナイフ形石器文化後半中頃にあたり、茂呂型ナイフ形石器文化の一つの典型的な様相を示している。A 地点および F 地点にはそれぞれ三ヶ所の遺物集中地点が検出され、両地点とも三ヶ所の遺物集中地点に同一の個体に属する資料が存在することから、両地点とも三ヶ所の遺物集中箇所は同時のものであり、両地点にまたがって存在する個体も若干認められることから、A、F 両地点は若干の時間差があるものの、ほぼ同一時期のものであることが明らかにされている。

石材は、珪岩が主体であり、珪岩 54 個体、黒曜石 6 個体、粘板岩 2 個体、頁岩 2 個体、砂岩 2 個体の計 66 個体であり、個体差の著しい石材という好条件により識別率は 100%である。

A 地点の個体別資料を類型別にみれば、類型 A には 6 個体、類型 B には 14 個体、類型 C には 7 個体が所属し、計 27 個体がある。百分率で示せば類型 A は 22．2%、類型 B は 51．9%、類型 C は 26%である。

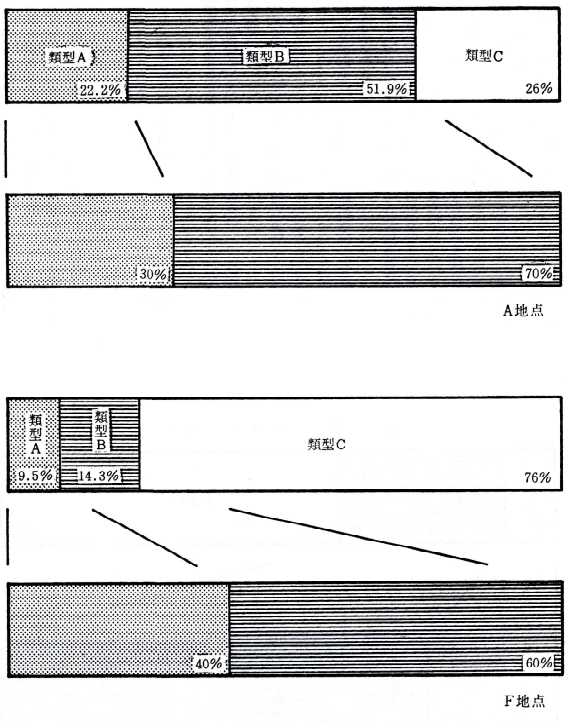


表 8　砂川遺跡における個体識別資料組成

F 地点の個体別資料を類型的にみれば、類型 A には 4 個体、類型 B には 6 個体、類型 C には 32 個体が所属し、計 42 個体がある。百分率で示せば、類型 A は 9．5%、類型 B は 14．3%、類型 C は 76%である。

A 地点、F 地点にまたがって 3 個体が分布する。

砂川遺跡の A・B 両類型で注意されるのは、遺存状況のよい個体でも初期の剥片剥離作業により作出される帽子状剥片、表皮剥片といったものが欠けている点であり、遺跡内に原石のまま搬入されたものでないことが知られる。

寺谷遺跡(静岡県磐田市)(鈴木他 1980)

寺谷遺跡は、静岡県磐田市にあり、1977 年、78 年に発掘調査されている。天竜川の東岸にある磐田原台地の段丘上にあり、浅い開析谷

の西側に位置している。約 400m2 が発掘され、計 4924 点の石器群が出土した。茂呂型ナイフ形石器文化のうちでも後半的な様相が認められる。調査区内は、大きく N 群と S 群の二つの領域に区分されている。

石材は、泥岩、凝灰質泥岩、珪質泥岩、砂岩、黒曜石などによるものであり、個体識別には限界がある。4924 点のうち、識別できたのは計 1315 点のみであり、識別が接合によるもの 496 点、非接合 841 点で、全体の 27%、ある程度の大きさの資料中の 41%にとどまり、148 個体が確認されている（註 3)。

このうち、N・S 両群それぞれに属する個体で分布の完結性、個体識別に問題のない類型 A および B に属する個体数を示せば、計 76 個体ある。

N 群の個体別資料を類型別にみれば、類型 A には 18 個体、類型 B には 10 個体と可能性のあるもの 3 個体、合せて 13 個体の計 31 個体が所属する。百分率で示せば、類型 A が 58

%、類型 B が 42%になる。

S 群の個体別資料を類型別にみれば、類型 A には 31 個体、類型 B には 12 個体と可能性のあるもの 2 個体を合せて 14 個体、計 45 個体が所属する。

石器として持ち込まれた類型 C には、個体識別されたもので、N 群に 15 個体 15 点、S 群に 7 個体 7 点の計 22 個体 22 点が認められる。類型 A・B と同様に、個体識別率が 30%以下に留まる点から、本来追加して類えられる資料が数倍存在するものと推定されるが明瞭な抽出ができない。

報告書の分類によれば以上のようになるが、寺谷遺跡の個体別資料の遺存状況はあまり良好ではなく、識別不能の資料について考慮すれば、大きく数値が変動するものと考えなければいけない。石核の識別率が 100%なのに比較して、砕片を除き、他の器種の識別率が 40%程度に留まっている。接合例はないものの、非識別資料中に多く類型 B が含まれる可能性があり、類型 A と類型 B との比率については、扱い方を考慮しなければならないだろう。また、類型 A・B 両者とも、帽子状剥片、表皮剥片等、初期の過程を欠くものが多い点も注意される。

野沢遺跡(富山県上新川郡大沢野町)(鈴木他 1982)

野沢遺跡は、富山県上新川郡大沢野町にあり、1979 年に発掘調査された。神通川東岸の河岸段丘上にあり、微高地の東斜面に位置している。約 4000m2 と極めて広面積が発掘されており、計 674 点の石器類が出土した。いわゆる金谷原型ナイフ形石器を主体とする石器群が出土している。調査区の中心 600m2 ほどに遺物集中箇所 3 群が認められ、その周辺には広く空白部分が広がり、旧石器時代集落の空間的広がりを確認するような良好な状況を示した。

遺物集中箇所は、相互に同一個体を有し、同時に形成されたものであり、集落の完掘例として注目される。

石材は、流紋岩、鉄石英等であり、674 点のうち砕片を除いた 176 点の 47%が接合し、79%が個体識別された。

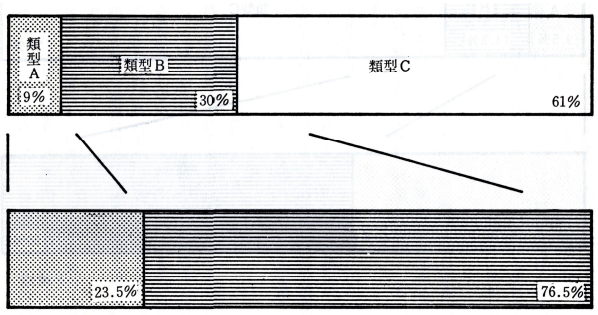


表 9　野沢遺跡における個体識別資料組成

野沢遺跡の個体別資料を類型別にみれば、類型 A は 4 個体、類型 B には 22 個体、類型 C には 27 個体ある。百分率で示せば、類型 A は 9%、類型 B は 30%、類型 C は 61%となる。

野沢遺跡の個体識別状況は良好であり、砂川遺跡と同様に模式とされるべき内容を有している。

以上、砂川・寺谷・野沢各遺跡の個体別資料の遺存状況についてみてみた。

剥片剥離状況をめぐる類型 A・B に注目し、その百分率を観察してみれば、砂川遺跡 A 地点では類型 A が 30%に対して類型が B70%、F 地点では類型 A が 40%に対して類型 B が 60%、寺谷遺跡を報告どおりとすると北群で類型 A が 58%、類型 B が 42%、南群で類型 A が 69%、類型 B が 31%、野沢遺跡では類型 A が 23.5%、類型 B76．5%となる。

砂川遺跡 A 地点・F 地点、野沢遺跡の類型 A は、それぞれ 30%、40%、23．5%である。これらと比較すれば、寺谷遺跡北群の類型 A は 58%、南群の類型 A は 69%であり著しく高率であることが理解される。寺谷遺跡については、先に指摘するように、個体識別の状況が不充分であり、この数値が実態を示しているとは考えにくい。約 60%をしめる非識別資料中に類型 B が多数含まれる可能性を考えれば、類型 B の比率は、一対二近くまで修正されるものと考慮できるかもしれない。一応ここで、砂川・寺谷・野沢遺跡では類型 A が 40%˜〜23．5%の内に収まることが推定できるものと考える。

さて、類型 A は石核ないし残核を有する個体別資料であることから、遺跡内で剥片剥離作業を終了させたものであると理解でき、一方、類型 B は、遺跡内で剥片剥離作業が展開されるものの、石核は消費されつくさず、他遺跡で剥片剥離作業を継続することを意図し搬出されたものである。すなわち、類型 B は、他遺跡での石核を保有しての移動を示すものである。

先のパーセンテージは、砂川遺跡・寺谷遺跡・野沢遺跡の各地点の石材の消費率が 40%〜23．5%であることを示している。

逆に、これらの遺跡の石核補給については、いずれの遺跡も最初期の打面作出を意図する帽子状剥片を有する個体が存在せず、遺存状況の良好な個体別資料でも石材は原石状態ではなく表皮の一部が除去された形で遺跡内に搬入されている。すなわち、遺跡内に搬入される以前に、遺跡外で初期の作業が行なわれていることになるが、この作業はどこで展開されたのだろうか（註 4）。

搬入品である以上、移動してくる前の遺跡で剥片剥離作業が行なわれたと考え、そこで目的剥片の生産から石器類の製作、そして、それらを使用しての活動が行なわれたことを示すと考えてよいかもしれない。しかし砂川・寺谷・野沢の各遺跡では、打面作出・表皮除去作業がす

べての個体で終了しているが、さらに詳細に資料を観察すれば、その作業の進行状態に差異のあることが認められた。すなわち、最初期打面作出、表皮除去までの段階に停まるものと剥片剥離作業用打面作出・目的剥片の剥離にまで及ぶものの二つである。

この二種類の個体の作業を進行させた地点が、その遺跡に集団が移動してくる前の遺跡であれば、それぞれの遺跡内で新たに剥片剥離作業を開始した個体は無く、すべての個体が他遺跡から移動することにより搬入された個体数は、新たに補充されず、そのまま再度の消耗が行なわれていることになり、それぞれの遺跡から再度移動する際の個体数は、搬入された個体数より 23．5%～40%減少していくことになる。

この状態が普遍的であって、この縮小再生産が続くとはとても想定できない。本来、旧石器時代における一般的規模の集落では、ある程度の剥片剥離作業が遺跡毎で行なわれても、その石材の消費により石核の保有数が減少しないよう、それに見合う個数が新たに補充されていると考えたほうがよい。

目的剥片の剥離作業開始までという最初期の工程を認定する基準で考えるなら、野沢遺跡では、剥離作業の行なわれた 17 個体のうち 11 個体、65%に搬入された段階で目的剥片の剥離が行なわれている痕跡を認めることができる。これらは明瞭に移動前の遺跡からの搬入品であるが、他の 6 個体 35%は、目的剥片の剥離作業が明らかでなく、移動前の遺跡の活動に直接貢献しないことから、他の個体と同様に持ち込まれたものと考えず、新たに本遺跡から加えられた個体であると推定できるかもしれない。

帽子状剥片と表皮剥片の一部が剥離された状態で遺跡内に搬入されたと推定されるわけで、それに先だつ工程は、原石産地においてなされたと考えるわけである（註 5)。野沢遺跡でのこの種の個体比率が 35%であるのは、先に検討した石核消耗率の 23．5%と相関性があると考えられないだろうか。砂川遺跡では、分類基準を明確にしがたいが、A・F 両地点合わせて 28 個体中 2 個体には最初期の工程のみを欠くような遺存状況が観察される。7%に相当する。これらは、原石産地での石材荒わり作業工程の存在を示すものと想像させ、石質の良悪の確認等の意図が考えられよう。時には目的剥片の剥離にまで及んで行なわれることもあったかもしれない。

以上のことを総合するなら、砂川・野沢・寺谷の 3 遺跡について、石核の消耗と補充のパターンを示せば、消耗率 23．5%～40%、補充率 70%～35%となる。すなわち、遺跡間移動を行なう毎に保有している石核が約 20%～40%で入れ替るということと模式化できよう。当然、この数値が、すべての旧石器時代遺跡について普遍化されてあてはめられるとは考えられず、数値的にバラツキが同曲ある。この模式自体大きな誤差を有している。

石核消耗率の差異は、遺跡内での石器製作の程度を示すものであり、石器の消耗・石器を使用する活動の激しさを暗示する。遺跡内で、どのような活動が行なわれたかを明示できる遺跡はないが、石核消耗の差異は、その背景として活動内容の差異をも合わせて考えられる。

次に石器の消耗と補充について考えてみる。まず、砂川遺跡では、遺跡内で剥離作業の行なわれた痕跡のない搬入されたと思われる個体、類型 C に分類されたものは、A 地点で 7 個体 12 点、F 地点で 32 個体 34 点であり、主にナイフ形石器、目的剥片からなる。寺谷遺跡では、同

一個体の他に見出せない単独資料 22 点があり、削器・使用痕のある剥片・目的剥片などからなる。野沢遺跡では、類型 C に分類されたものは 27 個体 57 点があり、ナイフ形石器・使用痕のある剥片・削器・目的剥片、剥片等からなる。寺谷遺跡は、その状況から、非識別資料の存在を考慮すると本来は数倍するものと思われる。ナイフ形石器等の石器と剥片との二種類が持ち込まれるのは、剥片自体機能を有しているか、石器素材として意図されていたかと考えられようか。これに対し、遺跡内で製作されたことが明らかな剥片剥離作業の行なわれた個体に属する石器類、目的剥片は、砂川遺跡では A 地点 99 点、F 地点で 42 点余りであり、野沢遺跡では 105 点である。剥片剥離作業の行なわれた個体の接合資料には多くの空白部分があり、仮想剥片として欠落を推定され、これらが遺跡内で発見されていない点は、遺跡外に持ち出されたものも多数存在することを示している。

搬入された石器類については、かなり数量に偏差があるものの、この数量の差異はその遺跡の移動前の遺跡への石器依存の比重を示すもので、その比重が低い場合、移動後に活発な石器製作が行なわれ、その不足を充足しようとする方向が認められる（註 7)。砂川遺跡 A 地点がそれであり、搬入品点数が極めて少ない。搬入品 3 点に対して製作・剥離数 99 点、比率では 11%対 89%である。ちなみに F 地点では 34 点対 42 点、比率では 45%対 55%、野沢遺跡では 57 点対 105 点、比率では 35%対 65%となる。石器は、石核よりも直接的生活活動に強く結びついているものであり、それを欠いては生活が成立しえない要因を含むと推定されており、それが、石器をして旧石器時代の最も普遍的な遺物としている。逆に石器素材となる目的剥片の剥離作業は、一定量の要求を満たす石器類を保有しなければ、行なう必然性があると考えられる（註 6)。

結局、旧石器時代における遺跡の石器の保有と製作・剥片剥離作業の展開による石核の消耗と補充、遺跡間の移動、それらの間の関係は極めて連鎖的な構造を持つものといえよう。

以上、ここまで砂川遺跡と寺谷遺跡・野沢遺跡の出土資料の分析に従って検討してきた。わずか 3 遺跡についての分析であり、遺跡規模も一定水準以上であるなど、資料にも若干の問題を残し、分析した結果抽出できた数値には極めて大きな偏差がある。どの程度の誤差を含有するかも明瞭ではない。しかし、三遺跡以外の遺跡でも、多様な遺跡が知られており、分析結果もその内部に包合されるべき範囲に位置するのではなかろうか。さらに多くの遺跡が検証されれば明確にされていくであろう。

2,　瀬戸内地域における石材の消費と補給

前項で、砂川遺跡・寺谷遺跡・野沢遺跡の個体別資料のありかたから、旧石器時代における石材と石器を持った移動の一端をうかがう試みを行なった。

ところで、砂川遺跡は関東地方南部にあり、寺谷遺跡は中部地方南部に、野沢遺跡は中部地

方北部にある。後期旧石器時代の日本列島には強い地域性を示す石器文化が存在し、大きく区分していた(小野 1969)。砂川・寺谷両遺跡は茂呂型ナイフ形石器に代表される地域に、野沢遺跡は金谷原型ナイフ形石器に代表される地域に位置している。中部地方以北・関東地方・東北地方の茂呂型ナイフ形石器、金谷原・杉久保型ナイフ形石器は、その剥片剥離技術の基盤が石刃技法ないし縦長剥片剥離技術にあることでは共通しており、ナイフ形石器の形状自体には差異があるものの、中部地方以北の旧石器では、巨視的に一つの文化圏を形成している。これに対する文化圏として、瀬戸内地方を中心とする国府型ナイフ形石器を主体とする石器文化があり、この瀬戸内系石器文化は、中部地方以北と著しく異なり、剥片剥離技術が横長剥片剥離技術伝統上にあるという極めて特異な技術体系を有している。ナイフ形石器も横長剥片を横位に一側線を背潰し加工を施すもので、その形態は特徴的である。

砂川遺跡・野沢遺跡・寺谷遺跡の分析は、結果として中部地方以北の旧石器時代における移動を焦点にすえたものであった。旧石器時代の「移動」として把握される活動には、その当時の生態学的自然条件、旧石器時代の社会的な条件等により規定される諸原因が絡んでいると考えられ、その要因の多くは、旧石器時代の日本列島全域で共有されていたと考えてよいだろうが、この石器および石核の消費・補給と遺跡間移動については、中部地方以北と瀬戸内地方とで一致するだろうか。

ここでは瀬戸内地方でも特に二上山北麓および高槻市周辺の遺跡群を含む近畿地方中央部の国府型ナイフ形石器を主体とする石器文化の事例、奈良県桜ケ丘遺跡第一地点(堀田他、1977)、奈良県鶴峯荘(同志社大学旧石器文化談話会 1974)、大阪府国府遺跡(石神 1981)、大阪府郡家今城遺跡 C 地点(冨成・大船 1978)から推定されるありかたと、先に検討した中部地方以北の様相との比較をする（註 8)。

砂川遺跡の周辺の関東地方南部では、遺跡周辺の河岸の礫層露頭、河原を中心に容易に入手される石材である珪岩、泥岩、頁岩、砂岩を主体としており、明らかな搬入石材としての黒曜石は、いずれの遺跡でも占有率が 0〜50%にとどまる。例えば、前原遺跡第Ⅳ中層では 45%、武蔵野公園遺跡第Ⅳ下層では 1%程度にすぎない。

寺谷遺跡は、天竜川の河岸段丘上に立地しており、磐田原台地の遺跡群は主に泥岩を石材とするが、この泥岩は天竜川氾濫原では円礫状態で存在する。野沢遺跡周辺でも同様に神通川東岸の河岸段丘上の遺跡群は、神通川上流域からの転石として神通川氾濫原に存在する流紋岩等を主要な石材としている。

中部地方以北の地域では、東北地方における頁岩、中部地方における黒曜石など、一地域で優勢を占める石材が存在するが、中部高地での黒曜石を除けば、主体は堆積岩や火成岩であっても転石した岩石であり、特に石材産地が限定されるわけではない。中部地方以北では基本的に在地の石材を主体とした石材供給であり、遠距離からの搬入石材のみに依存する遺跡は極めて少ない。

さて、瀬戸内地方においては、その石器文化伝統の特異性と合せて石材選択についても他地域と異質である。いわゆる瀬戸内系ナイフ形石器文化とその横長剥片剥離技術伝統は、その成

立からサヌカイトという特定の石材と強固に結びついているらしく、一貫してその関係が存在している。瀬戸内地方において、瀬戸内系旧石器の領域では石材のうちサヌカイトの占有率はどの遺跡もほぼ 90%を越える。これらのサヌカイトは産地が限界されており、火山性の岩石であるため、奈良県二上山・香川県城山・国分台・広島県冠高原などが主要な原石産地として著名である。近畿地方中央部では、二上山北麓の他に兵庫県甲山、岩屋周辺にサヌカイト原産地が知られるものの、石材の劣質なことから淀川地域では二上山産サヌカイトが圧倒的である。

二上山産サヌカイトは 80km 北東の京都盆地周辺にまで運搬されており、極めて広域の支配的石材となっている（註 9)。

サヌカイトについては、その石材が火山性の岩石であり、個々の特徴にとほしく、個体識別作業ならびに接合作業を行なうのには困難がある。また、最近まで瀬戸内地域で、良好な発掘例も得られていなかった。本稿ではそれに替えて、若干の内容のうかがえる遺跡の石器組成の比較という方法を通して、この石材と領域内にある遺跡内での石材消費、剥片剥離技の構造について一応の検討をしてみよう。まず、二上山北麓のサヌカイト原石産地帯内に位置する桜ケ丘遺跡第一地点(堀田他 1977)・鶴峯荘遺跡第一地点(同志社大学旧石器文化談話会 1978)、サヌカイト原産地に比較的近い国府遺跡(石神 1981)・遠距離に位置する郡家今城遺跡 C 地点(富成、大船 1978)の石器群の順に観察する（註 10)。

桜ケ丘遺跡第一地点(奈良県北葛城郡香芝町)

桜ケ丘遺跡は、奈良県北葛城郡香芝町にあり、1975 年に第一地点が発掘調査された。原川の河岸段丘上にあり、約 20 ㎡が発掘され、国府型期に属するものを主体に、約 900 点のナイフ形石器等を中心とした石器群が出土している。ナイフ形石器・舟底形石器・削器・楔形石器・楔形石器削片・彫器様石器・槌石・剥片・石核・砕片などがあり、一部にチャートが混在する他はサヌカイト製である。

桜ケ丘遺跡第一地点では、ナイフ形石器 1. 5%を含めて石器類 6%、剥片類 38%、石核類 6%、砕片 5%という石器組成を示す(このうち、国府型ナイフ形石器の素材剥片生産技術である瀬戸内技術に関係するものは、約 80 点、8．5%を占める。翼状剥片 40%、翼状剥片石核 27．5%、翼状剥片石核の素材となる盤状剥片 22．5%、盤状剥片石核 10%と推測される。

桜ケ丘遺跡第一地点は、長期にわたり石器製作が行なわれた遺跡であり、豊富な石器組成を有するが、剥片剥離技術には瀬戸内技法の他に縦長剥片剥離技術、不定型な剥片剥離技術も伴存している。

鶴峰荘遺跡第一地点(奈良県北葛城郡香芝町)

鶴峯荘遺跡第一地点は、奈良県北葛城郡香芝町にあり、春日山の東麗に位置する。旧石器文化談話会等により分布調査が行なわれ、表採品ではあるが国府型期の良好な資料が紹介されている。

約 500 点の瀬戸内技法に開通する資料があり、国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核・盤状石核があり、盤状剥片石核も認められる。概算の百分率は、国府型ナイフ形石器と翼

状剥片を合せて 77%、翼状剥片石核 18%、盤状剥片 5%となる。

国府遺跡(大阪府藤井寺市)

国府遺跡は、大阪府藤井寺市にあり、大和川西岸の段丘上に位置する。1955 年以来、十数次にわたる発掘調査が行なわれている。

第 3 地点では、ナイフ形石器 2%、削器 0. 5%、尖頭状石器 0. 5%、使用痕のある剥片 6%、剥片 59%、石核 17%、砕片 15%、計 290 点が出土しており、典型的な国府型ナイフ形石器を中心とした石器群であり、いずれもサヌカイト製である。瀬戸内技法関連のものとして、国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核があり、122 点ある。ナイフ形石器および翼状剥片で 90%を占め、翼状剥片石核は 10%であり、他は不明である。

郡家今城遺跡 C 地点(大阪府高槻市)

郡家今城遺跡は、大阪府高槻市にあり、C 地点は 1975 年に発掘調査が行なわれた。C 地点は富田礫層の上面にあり、8 箇所の遺物集中地点が検出され、約 1100 点の石器群が出土している。

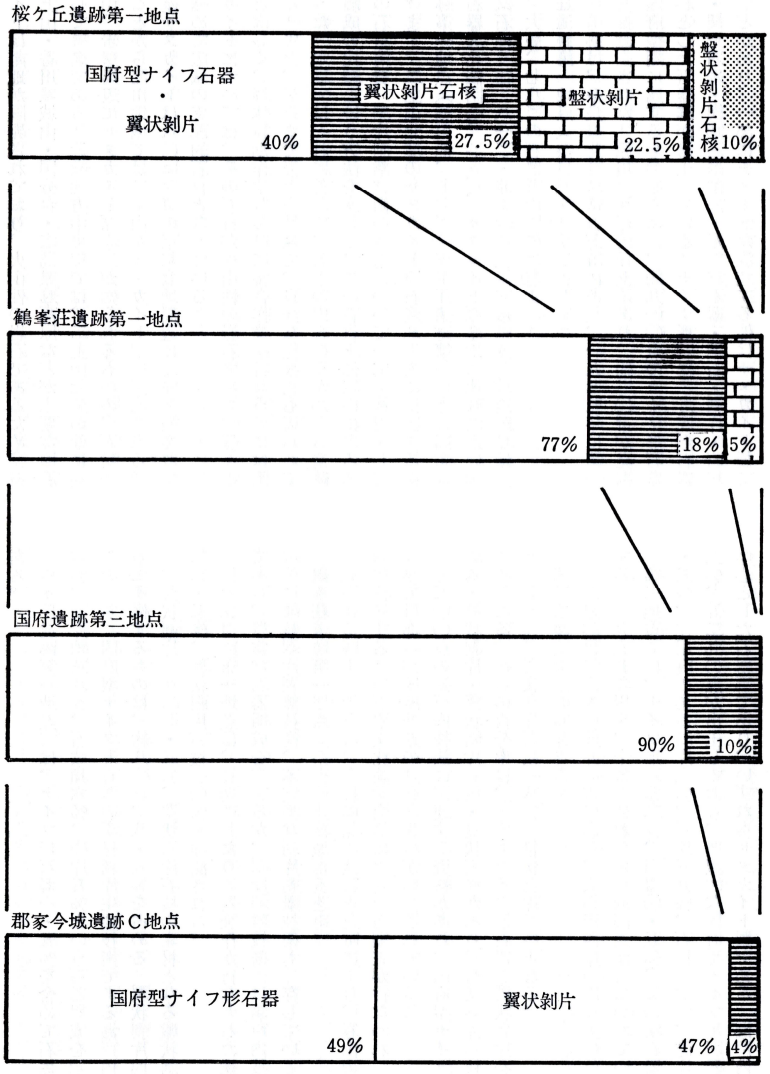


表 10　瀬戸内技法関連遺物組成

ナイフ形石器 7%、掻器 1%、彫器 0. 35%、削器 0. 2%、使用痕のある剥片 1%、ハンマーストーン 0. 35%、剥片 14%、砕片 66%、石核 21%など多様な石器が出土した。石材は主にサヌカイトの他、頁岩・チャートなどが認められる。瀬戸内技法に関連するものとして、国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核があり、約 140 点余りである。内容は、国府型ナイフ形石器 49%・翼状剥片 47%・翼状剥片石核 4%である。

翼状剥片には刃こぼれ状小剥離や調整痕があるものが多く、それ自体石器として使用されたことを示す。また、郡家今城遺跡 C 地点では翼状剥片石核と横長剥片石核は 10 点余り存在するが、ナイフ形石器・翼状剥片等の目的剥片

は生産されておらず、他遺跡で生産された搬入品であることを示している（註 11）。

以上、四遺跡について、石器群を観察した。近畿地方中央部の旧石器時代の遺跡である四遺跡には多種類の石器類が含まれるが、特に当時の主導的生産用具であったと考えられるナイフ形石器に注目するなら、国府型ナイフ形石器および翼状剥片・翼状剥片石核・盤状剥片・盤状剥片石核といった瀬戸内技法に開通するナイフ形石器素材剥片生産技術に属する資料とナイフ形石器の形式が特徴的に存在している。ここでは近畿地方中央部の遺跡における石材の消費と補給の傾向について、瀬戸内技法関連の資料により観察してみる。

二上山北麓のサヌカイト原石産地である春日山から 2km 以内に位置する桜ケ丘遺跡では、瀬戸内技法関連の資料の百分率は、翼状剥片 40%、翼状剥片石核 27．5%、盤状剥片 22．5%、盤状剥片石核 10%となり、同様に原石産地帯中にある鶴峯荘第一地点では、国府型ナイフ形石器と翼状剥片 77%、翼状剥片石核 18%、盤状剥片 5%となる。二上山北麓の原石産地から西に 5．5km に位置する国府遺跡第 3 地点では、国府型ナイフ形石器と翼状剥片で約 90%を占め、翼状剥片石核は約 10%にすぎない。原石産地から北に 36km に位置する郡家今城遺跡 C 地点では、国府型ナイフ形石器 49%、翼状剥片 47%、翼状剥片石核 4%となる。4 遺跡の瀬戸内技法関連の遺物組成百分率を見ると、次のような点が看取される。

①盤状剥片・盤状剥片石核は、二上山北麓の原石産地に位置する桜ケ丘遺跡第一地点・鶴峯荘第一地点に偏在する。

②翼状剥片石核の百分率占有率が、二上山北麓の原石産地から遠くなるのに比例して減少する。

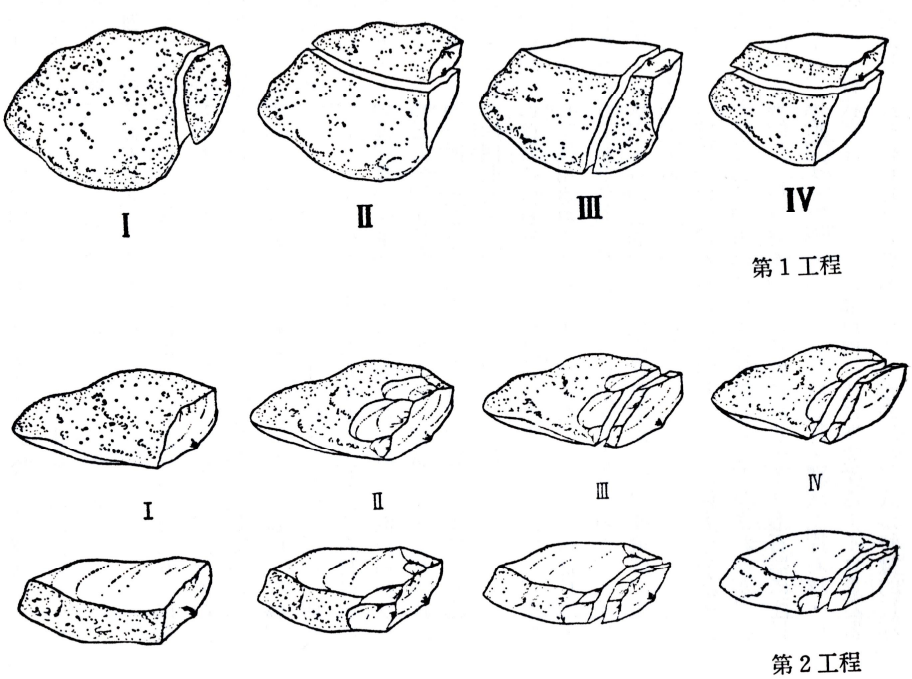


図 103　松藤和人による瀬戸内技法模式図（松藤 1974）

瀬戸内技法は、サヌカイトという石材と強固に結びついた剥片剥離技術であり、瀬戸内地域以外では、ほとんど認められない特徴的な作業手順を有している。瀬戸内技法の概念として、ナイフ形石器の調整を含めるか問題が残るが、まず、サヌカイト礫を荒割り分割して盤状の剥片を生産する段階が第1工程、盤状剥片の打両部側に打面調整を施して剥離作業面となし、平行に後退しながら翼状剥片を生産する段階が第2工程と、国府ナイフ形石器の素材剥片である翼状剥片の作業段階は第3工程に分割されて整理・理解されている(松藤 1974)。

すなわち、盤状剥片と盤状剥片石核は瀬戸内技法第1工程の展開される結果生産されるものであり、翼状剥片と翼状剥片石核の存在は、打面調整剥片と併せて、瀬戸内技法第2工程の展開を示すものである。加えて、国府型ナイフ形石器と翼状剥片は、翼状剥片が素材剥片であるに留まり、背潰しによる砕片が共伴するならいわゆる第3工程の傍証になろう。

看取された瀬戸内技法関連遺物の組成の偏在は、この瀬戸内技法の工程と照合するならば、二上山北麓の原石産地内の遺跡群において瀬戸内技法第1工程の作業が行なわれたこと、それぞれの遺跡で第二工程の作業が行なわれたことを示す。

しかし百分率を細かく観察すれば、遺跡が原石産地よりも遠くなるほど翼状剥片石核の比率が減少しており、翼状剥片・国府型ナイフ形石器の数量と比較して遺跡内で行なわれた第2工程の比重が低下しているのがうかがえる。

これらの傾向は、本稿ではわずか4遺跡を検討したに留まり、近畿地方中央部の国府型期の遺跡全般にわたる傾向を完全に表しているわけではないが、二上山北麓の原石産地帯の他の遺跡、大阪府新地遺跡、穴ケ谷遺跡、今池遺跡、奈良県穴虫遺跡(同志社大学旧石器文化談話会 1974)、株山遺跡等では瀬戸内技法第1工程の展開を示す資料が安定して存在し、高槻市周辺の津之江南遺跡(喜成・大船 1974)、郡家町内遺跡群等では瀬戸内技法第1工程を欠く状況を示しており、生駒山西麓および古河内平野上の遺跡の様相は明らかでないものの、一応の組成と距離の関係を示しているものと考える。

さて、この傾向が認められるものなら、国府型期において近畿地方中央部でのサヌカイト石材供給が、主に二上山北麓を原石産とされていることから、原石産地帯内での第2工程の展開により生産された盤状剥片が、原石産地帯外の遺跡に翼状剥片石核またはその素材剥片として搬出・搬入されたのではないかと推論することができる。原石産地帯内では、翼状剥片石核・翼状剥片・国府型ナイフ形石器の製品も発見されることから、これらの状態でも搬出されていたのだろう。さらに、原石産地帯外の遺跡では、遠距離に位置する遺跡で保有する翼状剥片石核が少なく、原石産地帯近傍の遺跡の距離に応じて翼状剥片石材ないし盤状剥片の搬入量が比例していることになる。言い換えれば遠距離の遺跡ほど搬入量が少なく、近距離であるほど搬入量が多いということになり、物理学的法則である、仕事量=重さ×距離が、成立している仮定すら推定できよう。

奈良方向、泉・紀伊方向へ向けての遺跡と石器組成の変化は充分明らかにされていないが、一部で礫層・氾濫原のサヌカイト円礫が利用できたとしても、近畿地方中央部における国府型期の旧石器時代において、二上山北麓の原石産地からの放射状の石材供給のあり方が存在して

いるように私案される（註 12）。

さて、中部地方以東の 3 遺跡の検討によって、遺跡の移動ごとに 23．5%～40%の石材が消費され、それに見合う量の石材補給が存在しているだろうことを推測した。東北地方・関東地方・中部地方において、黒曜石の主体となる一部を除き、石材は河川氾濫原・段丘礫層中に転石として存在するものが利用でき、寺谷・野沢同遺跡では推定産地が数 km 以内に位置する（鈴木他 1980、83）。

この環境下で石材は移動および石材消費で生じた新たな需要に応じて入手され、石材の保有に断絶は生じないものと思われる。中部地方以北においては、いわば三本撚りの縄のような線移動が、石材の保有に関しては推定でさようか。中部地方以北における石材の消費と補給のあり方と近畿地方中央部での石材補給のあり方とでは、大きな相異があると思われる。

瀬戸内地域の国府型期の石器群は、他の地域の石器群と大きく違い、排他性をも有した強固な地域性を有している。この地域性の成立原因には瀬戸内技法ないし横長剥片剥離技術に求めるのが一般的であった。これは間違いないが、先に検討した石材供給のあり方は関連しないだろうか。瀬戸内技法と地域性の関係は、瀬戸内技法の成立の問題と密接に結びついている。瀬戸内技法の起源に関わる手掛りは、横に長い剥片を生産することと剥片剥離作業が二重構造となっていることと私案するが、二上山北麓の原石山地から遠距離の遺跡への石材搬入が、重量と強い関係があるらしいのは興味深い。重量のかさむ原石自体や盤状剥片石核を搬入せず、より可搬性のある盤状剥片・翼状剥片石核の状態、さらに翼状剥片・国府型ナイフ形石器といった未製品・完製品といったもので負担を軽減しようとする意図がうかがえる。瀬戸内技法の二重構造の発生には、この可搬性をも考慮した部分が存在しないだろうか。香川県城山・国分台・広島県冠高原といった他の原石産地帯と周辺の状況が明らかでなく、まさに推論上に推論を重ねる行為ではあるが、瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器といった強固な文化的伝統が、原石産地からの放射的な石材供給によりその領域内部で安定して支持された結果、瀬戸内地域という地形的領域を閉鎖的に保持する特異な地域性ができたのではなかろうか。原石産地は、瀬戸内地域の旧石器文化にサヌカイトを産出するといった意味だけでなく、領域の石材を中心とした『核』とした証しでもあろう。

おわりに

本稿では、まず個体別資料の適存状況から東北地方・関東地方・中部地方の石刃技法・縦長剥片剥離技術を基盤とする地域での石材の消費と補給のあり方を検討し、それと比較しつつ瀬戸内地域、特に近畿地方中央部における石材供給のあり方について考え、地域性の成立についても関連があると推測を行なった。

旧石器時代遺跡の出土遺物について、個体識別を行なうことは、しだいに一般化されていくであろうが、この方法は本稿において意図した石材の補給による移動の把握によりも、まず先

に遺跡内における集落構造の理解に成果を掲げつつある(鈴木他 1980、83)。

遺跡間移動の問題は、石材の消費と補給だけにとどまらず、石器のみによって行なわれる場合もあることである。剥片剥離作業が行なわれない遺跡であり、結果的に砂川遺跡の報告書による類型Cのみにより構成されることとなる。これらの遺跡には、通過性のものと出張性のものとが推定され、出張性には狩猟場におけるキルサイトといった単目的遺跡が概当しよう。砂川遺跡・野沢遺跡のような規模の集落は、旧石器時代における普通的な集落である可能性が強い(稲田 1977)が、これには付随する出張性遺跡がどのように関連するだろうか。おそらく、この段階の活動レベルは瀬戸内地域にも東北日本においても大きな差異はないだろう。石器の機能・使用痕研究と合せて、遺跡内外での「場の機能」が追求されなければならない。また、遺跡内出土資料の個体識別・接合作業と並行して、遺跡間接合資料の発見をも意図されよう。

本稿は、あまりにも少ない例をもととして困難な推論を積み上げて、一応の結果を入手しようとしたものであり、現状では強引な部分も多く含んでいる。しかし、筆者の意図は、存在は確実でありながら、しかし直接証明の不充分な旧石器時代における移動に対し、その一端を明らかにすることにあった。本稿での結果は、今後調査例が増加し、精密な検討が為されれば、新たな知見、訂正されるべき問題が明らかになろう。本稿は、その踏み台としての意義を持つものであり、旧石器時代社会理解に向けられた一つの試論にすぎない。

註

（1）本稿では、個体別資料の分類基準を砂川遺跡の報告に準じている。寺谷遺跡・野沢遺跡の報告では、より細かな類型設定を行なっているが、遺物の遺存状況による類型判断に困難があり、煩雑な結果となる。その方法については、本稿の進行に合せて紹介することとし、単純化を行なった。

(2) 現在、東京・神奈川両県を中心とした地帯で、現位置論的方法と個体識別の方法が広く行なわれており、

これらの事例について明らかになれば、より精密な検討が可能である。個体識別の作業が行なわれているのは神奈川県寺尾遺跡(白石他 1981)、東京都鈴木遺跡（鈴木遺跡調査会 1978・79・80・81）等であり、本稿では紙面の都合上割合する。

(3)寺谷遺跡で類型の把握しうる個体数は、本来遺跡内で使用された石材の一部にすぎない。個体差の著しい石材ならともかく、泥岩質の均一な石材は、個体識別に大きな誤差をもたらす可能性があり、慎重な検討・分析が必要である。

(4)この剥片剥離技術の最初期の工程は、寺谷・野沢両遺跡の報告では、これをA類とし、この次の目的剥片を連続して剥離する工程をB類、目的剥片剥離の終了から石核の残核化までをC類として分類、この組み合せにより類型を説明している。

(5)この原石産地での荒割り作業は、富山県直坂Ⅰ遺跡（橋本 1978）でも認められ、東北日本においては広く存在しているものと想像される。

(6)この石材の消費率は、遺跡内における石器生産活動と強く関係しており、また石器生産は、直接的生産活動により求められる行為である。旧石器時代における直接的生産活動は、自然環境の動・植物柏に大きく規製されており、冬期と夏期においては石器の必要性に差異があった可能性が大きい。結局、各遺跡の成立要因の解明と合せての理解が必要である。
(7) 石器のみ遺跡から持ち出されて、他の地点で直接的生産活動に使用され、失われる石器も多数存在していると思われる。
(8)備讃瀬戸を中心とした地域および広島県冠山高原を中心とする地域では、最近ようやく内容の一部が明らかにされつつある。本稿では、比較的調査の進行している近畿地方中央部の例を中心に検討したい。
(9)例えば、滋賀県瀬田川河口周辺でも翼状剥片・翼状剥片石核が採集されている。橋本亮一氏教示による。
(10)数量・百分率の算定は各報告による。報告に個別記載のある場合、それをもとに筆者の判断による。
(11) 郡家今城遺跡では、国府型ナイフ形石器・翼状剥片はすべて搬入品として存在し、翼状剥片には歯こぼれ状小剥離が認められる。翼状剥片石核は少数存在するが、ナイフ形石器・翼状剥片の生産に主体を占めるものでない。
(12) 国府型期においては、先のようであるが、国府型以降では、次第に石材原産地を固定する傾向は消失していく。いわゆる宮田山型・井島工型期においてはサヌカイト小円礫を周辺地帯で多用する。放射状の石材供給は、明瞭ではない。

第４節　二上山を中心とした石材の獲得

はじめに

瀬戸内系旧石器の「極相」である瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器の技術形態学的特異性は、鎌木義昌氏（鎌木 1960）によって最初から認識され、松藤和人氏（松藤 1974・79）や柳田俊雄・藤原姫敏両氏（柳田・藤原 1981）らの業績によって明確にされてきた。その技術的特徴は、後期旧石器時代の日本列島において特異な石器群として、一つの地域性の発現をもたらしたとして、学史的にも極めて重要な評価を得ている。

瀬戸内系旧石器は、ナイフ形石器の生産技術において極めて独自の地域的進化を果たしている。この瀬戸内系旧石器の技術的特徴の発生原因には、早くからサヌカイト石材との関係が指摘されていたが、石材の性質と技術形態学的特徴を直接関係づけようとしたもので、石器群を支える基盤的な検討には不足があった。特に、従来の研究はナイフ形石器や剥片剥離技術の技術形態学的記述にのみ重点が置かれていたのは明らかである。以前に筆者は、瀬戸内系旧石器のサヌカイト石材供給システムと瀬戸内技法の工程展開が密接に構造化しており、汎日本的な在地石材を使用する石器群の石材供給システムと大きく異なることを明らかにしたことがある（山口 1983a）。本稿では、サヌカイト石材とその供給のあり方との関係で、瀬戸内系石器生産技術、特に瀬戸内技法がどのように構造化しているかを明らかにしたい。この視点の目的は、瀬戸内系旧石器社会を律した動態や集団的規範・地理的認識にまで迫りうる（山口 1991b）、より高度な重層構造の存在を視野に入れることである。

瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器を保持する遺跡で内容の明らかな鶴峯荘第一地点、国府、はさみ山、郡家今城Ｃ地点の石器群を取り上げる。また、非サヌカイト製石器群との石材供給のあり方の相違を明らかにするために、瀬戸内系旧石器の初期の石器群である板井寺ケ谷下位文化層を検討する。現時点での検討可能遺跡の制約から、また実体把握を容易にするためにも、原石産地・周辺と遠隔地の遺跡群に２分した形で検討・議論を進める。

１、近畿地方の遺跡分布とサヌカイト原石産地の位置

近畿地方には、サヌカイトの産する地域がいくつかあり、奈良・大阪府県境に位置する二上山北麓、大阪府和泉・岸和田地域、和歌山県梅原、兵庫県甲山、淡路島岩屋地域、淡路島西海岸中部が知られている（藁科・東村 1983・91）。二上山と甲山には火山性噴出源が知られており、その他は海岸・礫層中の産出地である。噴出源に伴う産地では、成分分析によって確度の高い同定ができるが、海岸部や礫層中での転石では、各地噴出原産の原石が混在している可能性が指摘されている。藁科・東村によると、近畿地方のサヌカイト製旧石器素材は二上山と岩屋産が主で、その他の地点からの石材はあまり利用されていないという。

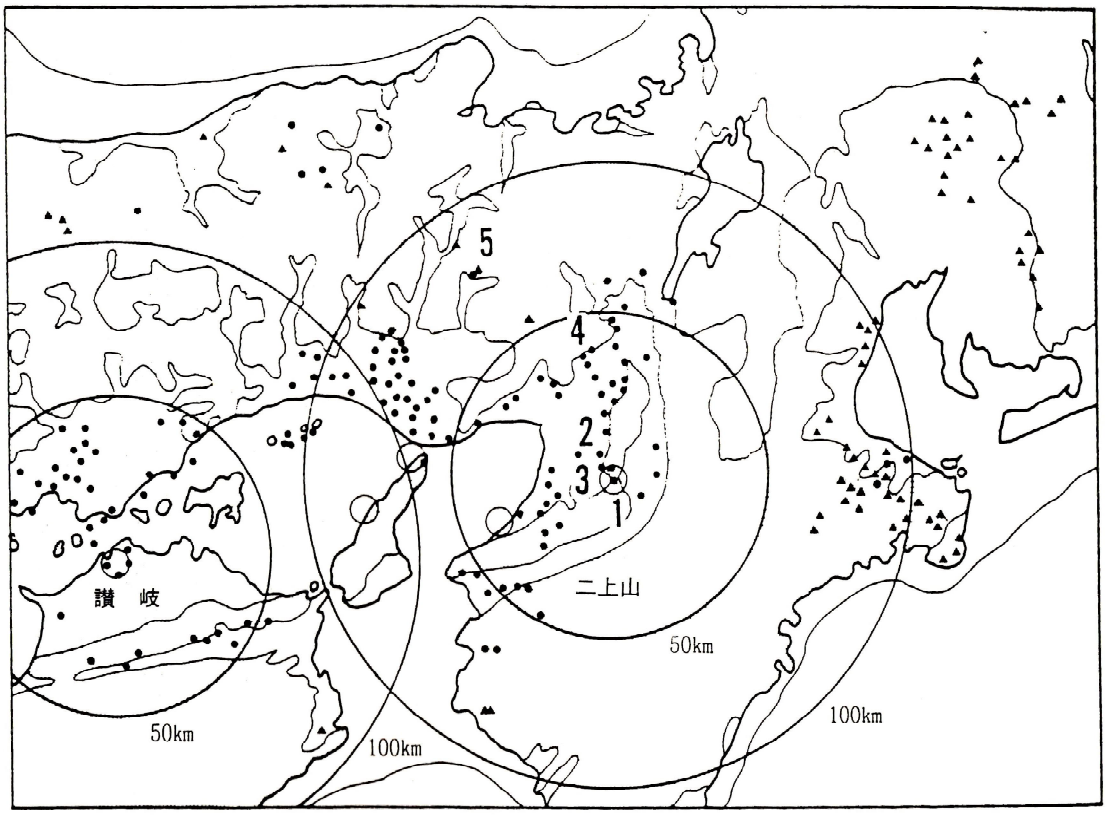


図 104　近畿地方の遺跡分布　○：サヌカイト原石産地
1：鶴峯荘　2・3：国府・はさみ山　4：郡家今城　5：板井・寺ヶ谷

近畿地方の瀬戸内系旧石器遺跡の分布（図 104）は、中国・丹波山地内・以北、大阪湾・瀬戸内海東部から淀川回廊、京都盆地や琵琶湖・奈良盆地東部などの内陸平野、紀伊山地以南の地域に分けることができる。

サヌカイト原石産地、特に二上山北麓を中心として、本稿で検討する遺跡の分布は以下のようになる。「原石産地」の遺跡として鶴峯荘第１地点、石川を下って西北の「原石産地周辺」では国府遺跡やはさみ山遺跡を採り上げる。国府遺跡から原石産地までは約６ｋｍで、より近い飛鳥川や石川河床でのサヌカイト転石採集の可能性も考えられる。これらの遺跡では、距離的な関係から原石産地への「日帰り」・日常的なアクセスの可能と考えられるので、原石産地と一括した議論をする場合が生じる。一方、遠隔地遺跡として採り上げる郡家今城遺跡は、古河内平野・旧淀川を隔て二上山北方約 40ｋｍのところにある。近傍には良質サヌカイト噴出源はなく、二上山北麓への「日帰り」や日常的なアクセスにも困難がある。さらに、板井寺ケ谷遺跡は、北上して丹波山塊中の篠山盆地、二上山北麓からは約 80ｋｍのところにある。

2、各遺跡の石器数量と重量の組成

鶴峯荘第1地点遺跡（佐藤良二 1987）は、二上山北麓のサヌカイト原石産地上にあり、一つのサヌカイト採掘坑と考えられる土壙2内から7,173点の石器群が出土している。石器重量は公表されていないので、重量組成の検討はできないが、一土坑内一括の資料としては、きわめて多量である。国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核・盤状剥片・盤状剥片石核など瀬戸内技法関連資料は、砕片を除いた2,235点の内、399点、約18%を占めるという。

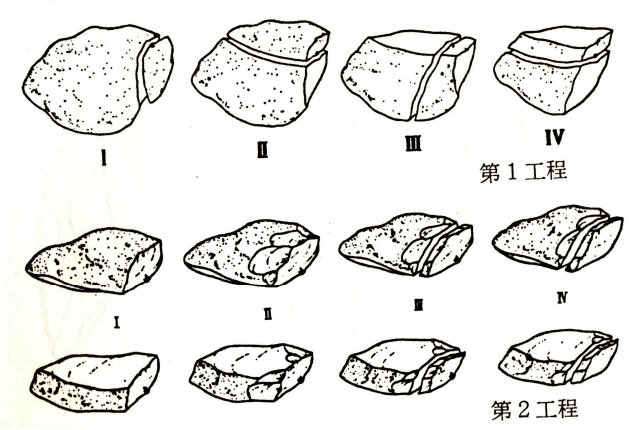


図105　瀬戸内技法第1工程第2工程模式図（松藤 1979）

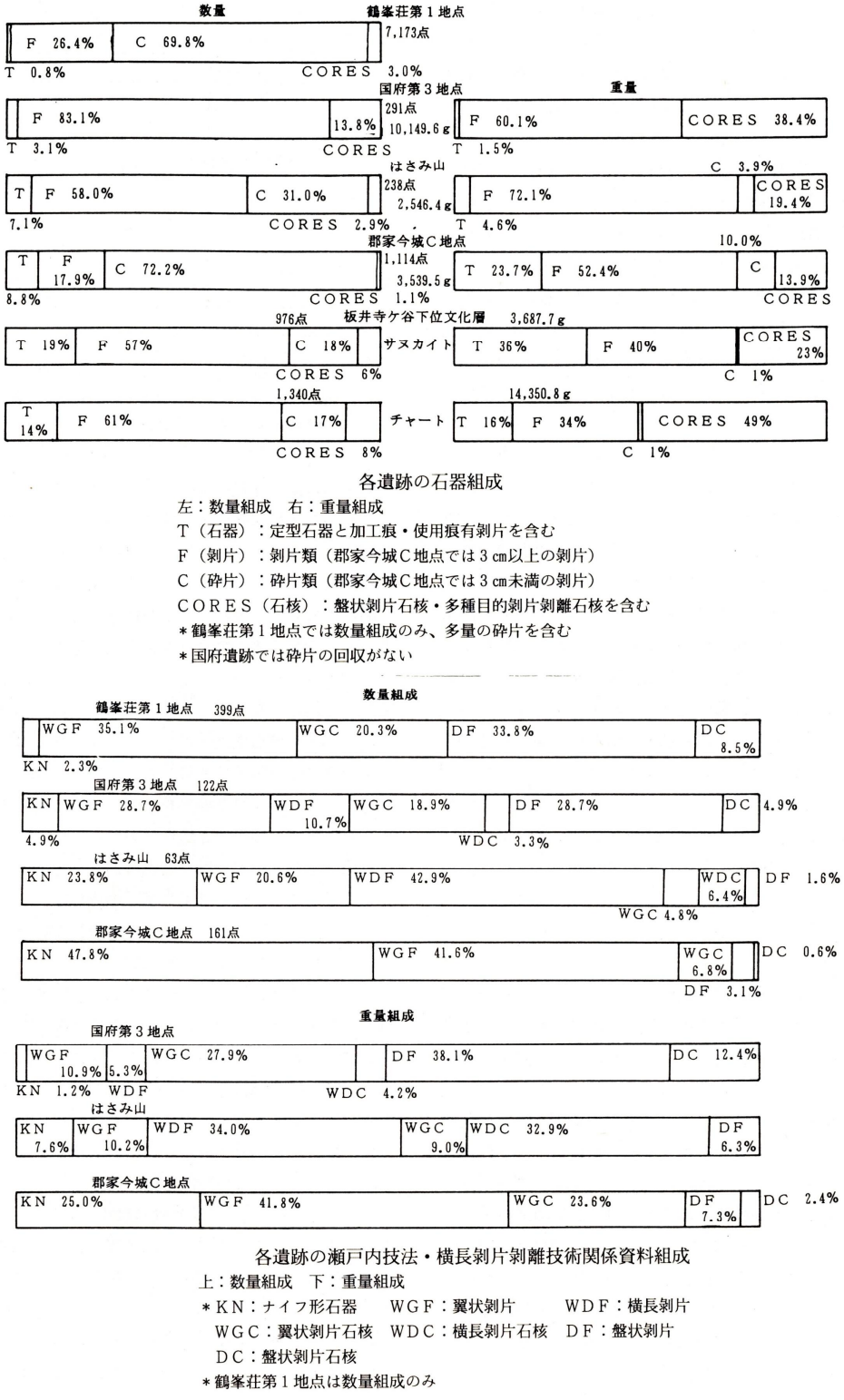
国府遺跡第3地点（石神 1981・一瀬 1990）は、サヌカイト原石産地からやや離れた藤井寺丘陵上に位置する。約80㎡が発掘され、このうち2×3ｍから集中して石器群が発掘されたという。石器類集中ブロックの一つからの所産とみなせよう。合計291点の石器群が出土しており、このうち122点、42%が瀬戸内技法・横長剥片石核剥離技術関連資料である。盤状剥片石核や盤状剥片、翼状剥片石核、翼状剥片など相互の接合資料が多く存在する。

はさみ山遺跡（一瀬 1990）は、国府遺跡と同じく藤井寺丘陵上に位置している。約550㎡が発掘調査され、4×11ｍの範囲に石器群が出土し、住居遺構と考えられる落ち込みを伴っているが、集中部分全体が発掘されているとは見なせない。原位置を保っていると考えられる合計238点が出土している。このうち、63点、26%が瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関連資料である。瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関係資料の接合資料は認められない。

郡家今城Ｃ地点遺跡（冨成・大船、78）は、サヌカイト原石産地北方80ｋｍの三島平野に位置する。40×28ｍの範囲に、合計8群の石器類集中ブロックが検出されている。合計1,114点の石器類が出土しており、このうち161点、14%が瀬戸内技法関連資料である。翼状剥片と翼状剥片石核、翼状剥片石核と盤状剥片石核などの接合資料が存在するが、国府型ナイフ形石器と翼状剥片の多くの生産は、遺跡外で行われた可能性が高い。

まず、各遺跡の石器数量と重量について観察しよう（図106上）。

遺物数量を観察すると、砕片の回収率について配慮する必要があるが、点数的に多いのは鶴峯荘第1地点→郡家今城Ｃ地点→国府→はさみ山の順となる。鶴峯荘第1地点は、砕片を除いても突出した数量を誇る。郡家今城Ｃ地点がこれに次ぐが、国府・はさみ山の調査面積や遺跡範囲・ブロックの完掘度を考慮すると、順序について再検討する余地がある。8ブロックの合計である郡家今城Ｃ地点を除けば、それぞれの遺跡は一つの石器類集中ブロックま



各遺跡の石器組成

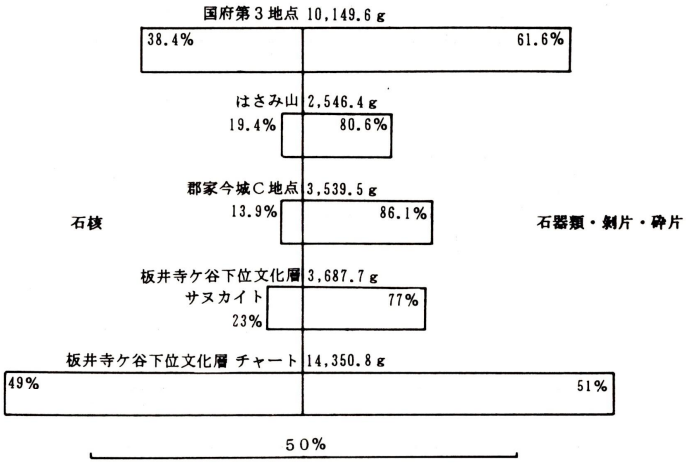
左：数量組成　右：重量組成
T（石器）：定型石器と加工痕・使用痕有剥片を含む
F（剥片）：剥片類（郡家今城Ｃ地点では３cm以上の剥片）
C（砕片）：砕片類（郡家今城Ｃ地点では３cm未満の剥片）
CORES（石核）：盤状剥片石核・多種目的剥片剥離石核を含む
＊鶴峯荘第１地点では数量組成のみ、多量の砕片を含む
＊国府遺跡では砕片の回収がない

各遺跡の瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関係資料組成

上：数量組成　下：重量組成
＊KN：ナイフ形石器　　WGF：翼状剥片　　WDF：横長剥片
WGC：翼状剥片石核　WDC：横長剥片石核　DF：盤状剥片
DC：盤状剥片石核
＊鶴峯荘第１地点は数量組成のみ

図 106　各遺跡の石器組成と重量組成

たは土壙内からの一括資料であるので、一つのブロックあたりの遺物集中度で比較することも可能である。郡家今城Ｃ地点の１ブロック平均 139 点と比較してみると、鶴峯荘第１地点の数量的突出のみならず、国府第３地点・はさみ山においても、この場合むしろ数量的に高



各遺跡の石器総重量
左：石核重量　右：石器類・剥片・砕片重量
＊鶴峯荘第１地点は未計量

図 107　各遺跡の石核と剥片類の重量組成

いことが理解されよう。

続いて遺物総重量を観察すると、国府第３地点→郡家今城Ｃ地点→はさみ山の順となる。鶴峯荘第１地点は重量データの公表がないが、石器組成の数量から推測すると、国府第３地点よりも重量が優ると思われる。郡家今城Ｃ地点の１ブロック平均の重量 442ｇと比較すると、ここでも国府第３地点の重量 10、149ｇ、はさみ山の 2､546ｇは、はるかに凌駕している（図 106）。

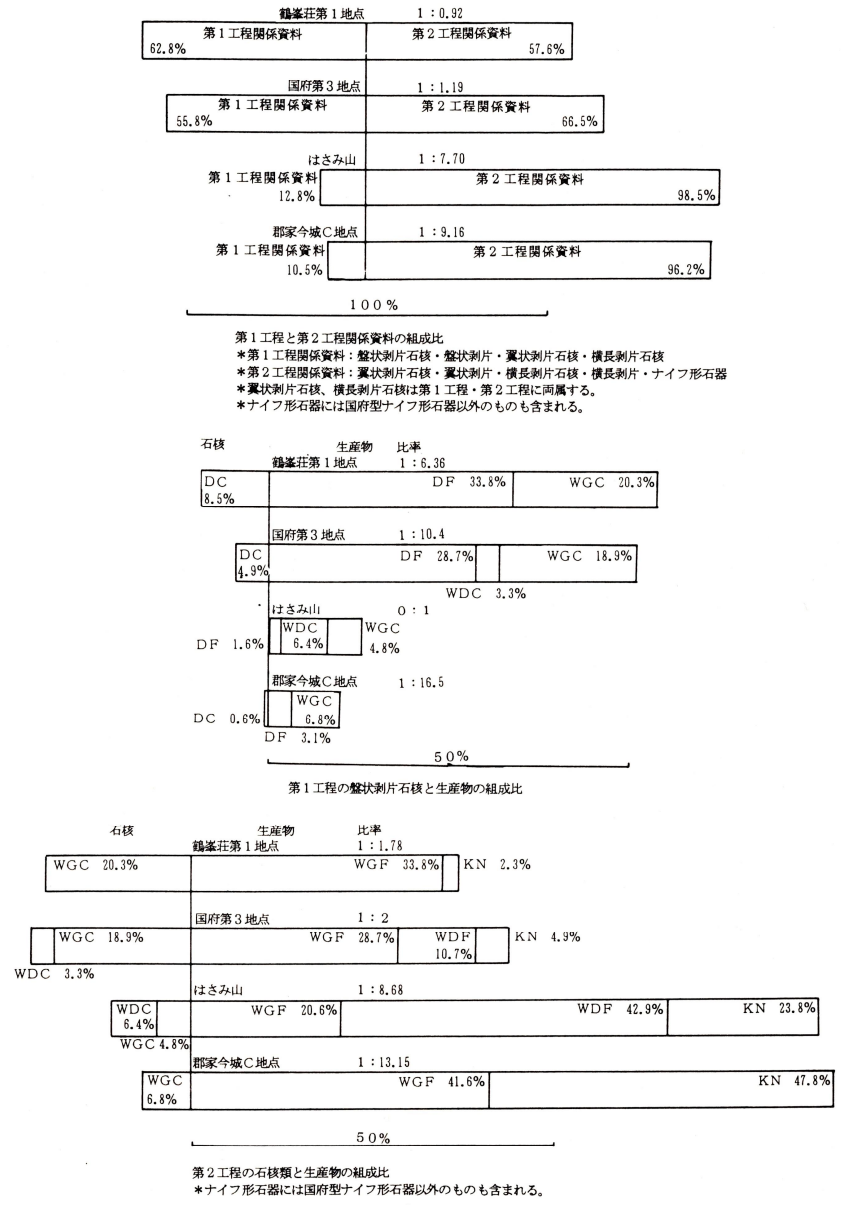
はさみ山と国府第３地点の数量・重量の順位入れ替わりはあるものの、基本的な流れとして鶴峯荘第１地点→国府第３地点・はさみ山遺跡→郡家今城Ｃ地点の順で、１ブロックあたりの石器類数量・重量が減少していくこと、さらに数量よりも重量のほうがその傾向に顕著であることが把握された。

瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関連資料（国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核・盤状剥片・盤状剥片石核などと横長剥片・横長剥片石核）に限定した石器類の数量と重量について観察しよう（図 106 下）（註３）。

瀬戸内技法関連資料の数量を観察すると、点数的に多いのは鶴峯荘第１地点→郡家今城Ｃ地点→国府第３地点→はさみ山の順となるが、１ブロック平均では郡家今城Ｃ地点が最下位となる。重量的には、国府第３地点→郡家今城Ｃ地点→はさみ山の順となる。鶴峯荘第１地点では重量データの公表はないものの、数量から考えると、国府第３地点を上回ると推測される。鶴峯荘第１地点と国府第３地点の重量と比較すると、はさみ山の重量と郡家今城Ｃ地点は顕著に少なく、１ブロック平均ではやはり郡家今城Ｃ地点が最下位となる。

続いて、各遺跡の瀬戸内技法関連資料の数量・重量組成比を比較してみよう（第 108 図）。

瀬戸内技法は、剥片生産技術として、サヌカイト石材を分割・剥離して盤状剥片を生産する第１工程と、盤状剥片を石核として翼状剥片を生産する第２工程がある（図 105）。盤状剥片石核・盤状剥片と翼状剥片石核自体も第１工程の、翼状剥片石核・翼状剥片とその加工品である国府型ナイフ形石器も第２工程の、それぞれ剥片生産技術の展開段階の所産であるということになる（註４）。翼状剥片石核や横長剥片石核には、剥片生産工程段階の二つの工



瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関係石器類の数量組成
上：第１工程と第２工程関係資料の組成比
中：第１工程の盤状剥片石核と盤状剥片・翼状剥片石核・横長剥片石核の組成比
下：第２工程の翼状剥片石核・横長剥片石核とナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片の組成比
＊ＫＮ：ナイフ形石器　　ＷＧＦ：翼状剥片　　ＷＤＦ：横長剥片
ＷＧＣ：翼状剥片石核　ＷＤＣ：横長剥片石核　ＤＦ：盤状剥片
ＤＣ：盤状剥片石核

図 108　瀬戸内技法・横長剥片剥離技術関係石器類の数量組成

程への両属性がある。瀬戸内技法関連資料を、翼状剥片石核と盤状剥片・盤状剥片石核（第１工程関連資料）と国府型ナイフ形石器と翼状剥片などの製品と翼状剥片石核や横長剥片石核（第２工程関連資料）の二つに分けて数量組成比を観察すると、鶴峯荘第１地点と国府第

３地点、はさみ山と郡家今城Ｃ地点の間に大きな差があることが把握される。鶴峯荘第１地点では第１工程関連資料と第２工程関連資料の比率が１：0.92、国府第３地点では１：1.19であるのに対し、はさみ山では１：7.70、郡家今城Ｃ地点では１：9.16となる（図108上）。鶴峯荘第１地点と国府第３地点では、盤状剥片石核と盤状剥片・翼状剥片石核、翼状剥片石核と翼状剥片など相互の接合資料が認められることを考えあわせると、瀬戸内技法第１工程から第２工程にかけて一貫した剥片生産作業が行われたことが窺える。一方、はさみ山・郡家今城Ｃ地点では、第１工程の展開した痕跡に乏しいことになる。

各遺跡での第１工程展開の実体はどうだろうか。第１工程関連資料の盤状剥片石核と盤状剥片・翼状剥片石核・横長剥片石核の比率は、鶴峯荘第１地点では１：6.36、国府第３地点では１：10.4となる。はさみ山では盤状剥片石核がなく、郡家今城Ｃ地点では１：16.5となる。一つの盤状剥片石核から平均いくつの盤状剥片が生産されるかは明らかではないが、遠隔地の郡家今城Ｃ地点で盤状剥片・翼状剥片石核の比率が高いことは注意されなければいけない。原石産地から遠隔地へは、盤状剥片・翼状剥片石核で搬出され、盤状剥片石核や原石状態の搬出が希であったことを示している。郡家今城Ｃ地点に盤状剥片石核と翼状剥片石核の接合資料１例（松藤1985）が存在するものの、両者とも搬入された可能性が高い。消耗した盤状剥片石核自体が瀬戸内技法第２工程やその他の剥片剥離技術の石核素材として搬出されることのあった証拠であろう。

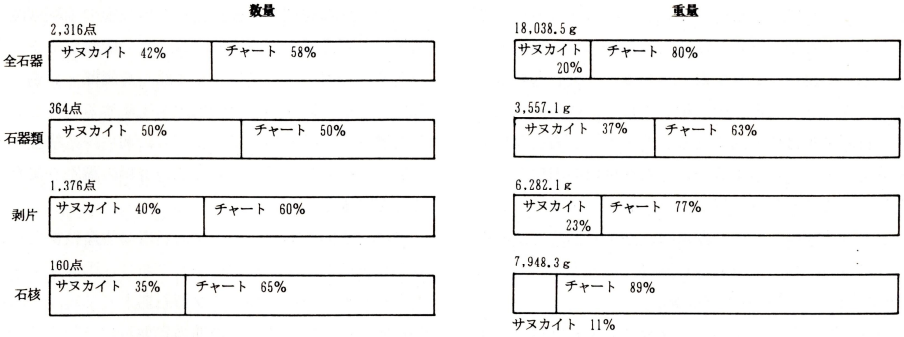
第２工程の展開のあり方については、はさみ山を除けば、多寡はあるものの翼状剥片・国府型ナイフ形石器と翼状剥片石核の接合資料があり、それぞれの遺跡で第２工程の展開が窺える。翼状剥片石核・横長剥片石核の合計点数と国府型ナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片の合計点数とを各遺跡で比較してみると、鶴峯荘第１地点で１：1.8、国府第３地点で１：２、はさみ山で１：7.8、郡家今城Ｃ地点では１：13となる。一つの翼状剥片石核から平均何点の翼状剥片が剥離されるかは明らかではないが、鶴峯荘第１地点・国府第３地点では明らかに翼状剥片石核と比べて翼状剥片・国府型ナイフ形石器が少なく、存在するより多くの翼状剥片が生産され、その多くが持ち出された可能性、はさみ山・郡家今城Ｃ地点では翼状剥片石核点数に見合わないほど多量の翼状剥片・横長剥片・国府型ナイフ形石器などが存在し、多量の持ち込みがあった可能性を示している（図108下）。

石器類の数量組成比率は、極小資料の回収率の多寡によって見かけ上大きく変動するが、ある程度の大きさの資料においてはある程度安定して把握できる。重量比率では、砕片など極小資料の重量比率が目立たなくなるので、石器類の組成の検討にも耐えうると思われる。石核の大きさによって石核の重量比が増大すること、砕片の重量組成比がほとんど無視できる程度にまで減少することになる。瀬戸内技法・横長剥片石核剥離技術関連資料の重量組成比率を観察すると、石核類の重量比率が増加している。原石産地周辺の国府第３地点の翼状剥片石核の重量よりも遠隔地の郡家今城Ｃ地点の翼状剥片石核がはるかに軽く、遠隔地遺跡では本来的に翼状剥片石核・盤状剥片の軽量なものが持ち込まれるのか、より消耗した残核の状態を呈しているのかは問題を残している。

各遺跡でのサヌカイト製石器群の瀬戸内技法以外の石器生産技術についてはどうだろうか。国府第３地点・はさみ山ではわずかな縦長剥片剥離技術・不定形剥片剥離技術が伴う。郡家今城Ｃ地点では、不定形な剥片剥離が行われている。いずれの遺跡も、定型石器を生産するものではない点で、補助的な石器生産技術であるに留まる。石核は小型のサヌカイト分割礫か盤状または板状剥片と考えられる。石核素材の生産工程は、国府第３地点・はさみ山・郡家今城Ｃ地点でも認められない点で、瀬戸内技法のあり方と類似する。

３、板井寺ケ谷遺跡の石材別石器数量・重量組成

板井寺ケ谷遺跡下位文化層（山口 1991）は、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器群であり、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法極相期のものではない。下位文化層にはサヌカイト製石器群とチャート製石器群があり、前者は「瀬戸内系旧石器」の古い段階のもの、後者は「中国山地系」旧石器の範疇に含めうる。サヌカイトは、約 80ｋｍ離れた二上山北麓産が約９割、約 50ｋｍ離れた岩屋産と推定されるものが約１割となっている（藁科・東村 1991）。チャートは在地石材であり、遺跡周辺の露頭や河床で採取可能な石材である。



板井寺ヶ谷下位文化層のサヌカイト・チャート等製石器の数量・重量
左：数量　右：重量
＊石器類には定型石器、加工痕・使用痕有剥片を含む
＊砕片は省略

図 109　サヌカイト・チャート等石器の数量・重量

板井寺ケ谷下位文化層からは、合計 2,353 点の石器類が出土しており、礫石器類と原石破砕片を除いた 2,316 点のうち 976 点がサヌカイト製、1,340 点がチャート等製である（図 109）。数量比 42%と 58%となる。重量ではサヌカイトとチャート等製石器類の総重量 18,038.5ｇ、サヌカイト製が 3,687.74ｇ、チャート等製が 14,350.76ｇ、重量比では 20%と 80%となる。サヌカイト製石器類とチャート等製石器類には、それぞれ基本的な石器器種を網羅している。サヌカイト製の石器生産技術が瀬戸内系横長剥片石核剥離技術伝統上の流れの中にあるものであり、チャート等製の石器群が姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の西南日本に広く認められ

る石器生産技術の流れにあること、石材と石器生産技術が対応することから、両者は石器群として独立した構造を示している。また遺跡のほぼ全域が発掘され、11 の石器類ブロックが検出され、６～７世帯ユニットに再編されるが、両者の遺跡内での主分布域が南北に分かれたことから、異なった集団が異なった石材を使用して、同時共存したと考えられている。

サヌカイト製石器類の組成は、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法の極相期の石器群ではないため、わずかの翼状剥片・翼状剥片石核が伴うに留まり、国府型ナイフ形石器は検出されていない。国府型ナイフ形石器を欠く点で狭義の瀬戸内技法の存在はないが、石核類や接合資料には、量は多くないが瀬戸内技法第２工程と呼びうる資料が存在する点は注目される。サヌカイト製石器群には、剥片類の優越が目立ち、石核類の組成が貧弱である。石核や剥片、接合資料から伺われる剥片生産技術の展開状況は、瀬戸内技法第１工程に相当する石核素材となる剥片を生産する段階の資料が全く認められず、第２工程に相当する剥片素材の石核から剥片を生産する段階の接合資料・石核・剥片接合資料のみに限定される。第２工程でも終末段階の資料が多く、石核はやせた残核状態のものが目立つ。生産された剥片は極小主体で、遺跡内で主体の中・大型の横長剥片は生産されていない。中・大型の剥片の多くは搬入品と考えられる。国府型ナイフ形石器や典型的瀬戸内技法は認められず、また遺跡内で生産された横長剥片類と調整剥片類の形態的差異にも乏しく、瀬戸内系横長剥片剥離技術の工程別資料の組成比を産出することが困難であるが、基本的に第１工程相当の資料の存在しないことは、強調されるべき特徴である。

チャート等製石器類の組成は、定型的石器・剥片類・石核等が安定して組成されており、活発な石器生産活動が認められる。接合資料には亜角礫もしくは板状材を母岩として、初期から終末からの工程の各段階のものが認められる。一部には、搬入・伴出された個体が存在するが、両者はある程度均衡しており、遺跡内での石器生産工程の展開には、基本的な欠落はないと見なせる。

サヌカイト製石器類とチャート等製石器類の器種別組成を観察してみると、定型石器の内容は異なるものの、定型石器・加工痕有・使用痕有剥片の合計・剥片類・石核類に大別した数量比としては、ほぼ等しいものになっている。重量比では、サヌカイト製石器群の石器と剥片類を合わせた比率が 76%に達するのに対し、チャート等製石器群では 50%に留まっている。この違いは石核類の重量比に原因があり、サヌカイト製石核類 23%に対しチャート等製石核類 49%と２倍以上に大きな違いがある。

定型石器と加工痕・使用痕有剥片の組成で観察すると、数量的には等しく、重量比では、サヌカイト製 37%、チャート等製 63%となる。活動上必要な石器量を同等保持しているが、個々の石器は軽量化していることが理解される。剥片類では、数量比サヌカイト製 40%とチャート等製 60%、重量比サヌカイト製 23%とチャート等製 77%となる。剥片類は、サヌカイト製石器類の本来の組成比通りの数量比が確保されてはいるものの、さらに軽量化されている。石核類では、数量比サヌカイト製 35%とチャート等製 65%、重量比サヌカイト製 11%とチャート等製 89%となる。石核類は、数量的にもサヌカイト製石核の約２倍の量がチャート

等製にあり、石核類の総重量では８倍、個々の石核重量では約４倍の差がある（図 109）。

板井寺ケ谷下位文化層のサヌカイト製石器群とチャート等製石器群のあり方には大きな違いがある。チャート等製石器群は入手容易な在地石材を使用し、遺跡内で一貫した石器生産を行っている。このあり方は、このチャート等製石器類の組成と重量組成に反映していると考えて良い。これに対しサヌカイト製石器群は、遠距離搬入材を石器生産に供しており、遺跡内で行われた石器生産は終末的である。サヌカイト製石器類の総重量が約４Ｋｇに留まるのは、石材供給の困難さが反映している。板井寺ケ谷下位文化層のサヌカイト製とチャート等製の二つの石器群は、在地石器群と遠隔地からの石材に頼った遠隔地石器群のあり方の、一つの「標識」を示していると見なせよう。

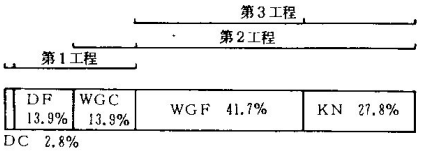
板井寺ケ谷下位文化層のサヌカイト製石器群は、瀬戸内系旧石器のもっとも古い段階のものである。サヌカイト石材の開発が、後期旧石器時代でも前半期に遡ることが明らかになった。一方のチャート等製石器群は石器生産の遺跡内一貫作業が行われているに対し、サヌカイト製石器群は石核が剥片素材であるにも関わらず、その素材剥片を生産する工程が遺跡内に存在せず、横長・翼状剥片なども多くが搬入品であると考えられることから、石器生産は先だった遺跡での石器生産に依拠している部分が大きいと看取される。新規に開始されたサヌカイト石材の石器生産よりも、消費し尽くされた終末段階の接合資料・石核がある。板井寺ケ谷への到着が石材消耗の頂点で行われたと見られるが、視点を変えると、先だった遺跡がどこに存在したか特定できないが、明らかに石器生産の組織的な「異所展開」が行われていることになる。チャート等製石器群が、西南日本に広がる姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器群と連なるものであるなら、瀬戸内系旧石器の成立と地域性の発現は、他の地域性の明瞭な石器群に先立っていたと考えられる。

４、近畿地方における後期旧石器時代のサヌカイト石材供給

近畿地方の国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を有する石器群は、サヌカイトを石材とすることを特徴としている。主分布域では、原石産地から遠く離れた遺跡でも、サヌカイト占有率が８割を切ることはない。サヌカイト以外の石材の使用は、ほとんどが製品や一部の剥片類の搬入であり、活発な石器生産が行われることは希であり、サヌカイト石材の使用という点で、見えない拘束があるように思われる。

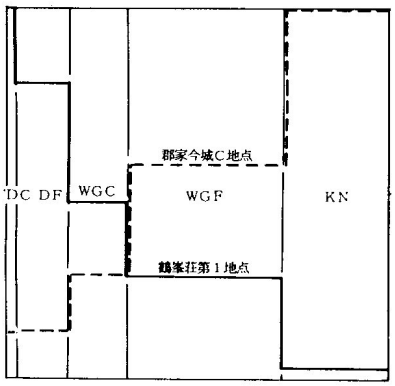
瀬戸内系旧石器遺跡での石器資料の大半は石器生産による砕片や調整剥片などの「副次生産物」であり、不定形剥片剥離技術や縦長剥片剥離技術の工程展開に関係した石器類を把握するには一定の困難がある。瀬戸内系旧石器にあっては、まず原石を剥離・分割する工程や盤状の剥片から目的剥片を生産する工程といった大掴みの工程把握ができ、さらに瀬戸内系横長ナイフ形石器の生産工程が容易に関連資料の識別を果たすことができる。

瀬戸内系旧石器は、ナイフ形石器の生産技術が特に顕著な技術形態学的特徴を示しており、国府型ナイフ形石器や瀬戸内系横長ナイフ形石器として容易に識別が可能となってい



瀬戸内技法による模式的生産物組成

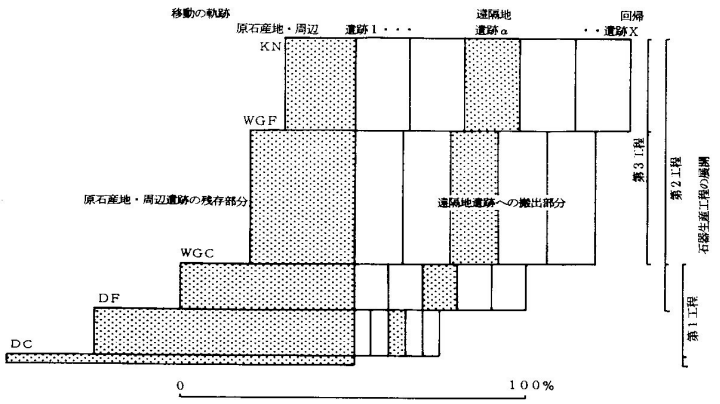
＊一つの原石を盤状剥片石核とし、それから10点の盤状剥片を生産、このうち５点を翼状剥片石核とし、25点の翼状剥片を生産、この中から10点がナイフ形石器に加工された場合を想定する。残される盤状剥片石核１点・盤状剥片５点・翼状剥片石核５点・翼状剥片15点・国府型ナイフ形石器10点が「すべて」遺跡内に遺存した場合の組成比を求めた。比較検討のモデルとして提示する。



瀬戸内技法模式的生産物組成に占める
鶴峯荘第１地点と郡家今城C地点石器群の位置

＊上の模式的瀬戸内技法生産物組成比に対し、鶴峯荘第１地点と郡家今城C地点の残存瀬戸内技法生産物組成比を重ねたもの。どの部分が卓越・欠落しているかを示す。模式的瀬戸内技法生産物組成比と比べてもっとも卓越したものを100%とし、それ以外がどれだけ残存しているかを予測した。

＊翼状剥片石核には横長剥片石核を、翼状剥片には横長剥片を含む。



生産物の量的側面を考慮した瀬戸内技法工程展開とサヌカイト石材保持状況

＊翼状剥片石核には横長剥片石核を、翼状剥片には横長剥片を含む。

石材供給状況と石器生産技術の構造
上：瀬戸内技法による模式的生産物組成
中：瀬戸内技法模式的生産物組成に占める鶴峯荘第１地点と郡家今城C地点石器群の位置
下：生産物の量的側面を考慮した瀬戸内技法工程展開とサヌカイト石材保持状況

図 110　石材供給状況と石器生産技術の構造

る。その他の定型石器は数量的に僅かであり、その生産技術にも斉一性は乏しく、さらに各遺跡での変異の大きさも予測される。大枠として、ナイフ形石器の生産技術をもって瀬戸内系旧石器の石器生産技術体系を評価することは妥当であろう。

瀬戸内技法は、剥片生産工程として盤状剥片を生産する第１工程と翼状剥片を生産する第２工程の２段階があることが特徴である（鎌木 1960　松藤 1974・79）。工程別資料の多寡を観察すると、はさみ山・郡家今城C地点では第１工程がほとんど存在せず、第２工程の遺跡内展開を上回る国府型ナイフ形石器と翼状剥片の搬入が窺える。また鶴峯荘第１地点・国府第３

地点では第 1 工程の存在が顕著で、第 2 工程・第 3 工程で生産された国府型ナイフ形石器・翼状剥片のかなりの点数が搬出されたことが考えられる。

石器生産から石器の使用と消費の流れを考えた場合、前者が後者の遺跡によって補完される関係にあることを窺わせた。第 1 工程生産物である盤状剥片・翼状剥片石核段階は、鶴峯荘第 1 地点・国府第 3 地点での持ち出し、郡家今城Ｃ地点への持ち込みが予測される。第 2 工程生産物である翼状剥片・横長剥片・ナイフ形石器も、鶴峯荘第 1 地点・国府第 3 地点での持ち出し、郡家今城Ｃ地点への持ち込みが予測される。両者の遺跡の状況を対照する事が可能であるなら、遠隔地遺跡での石器生産は、原石産地・周辺遺跡にかなりの部分依拠していることになる。特に第 1 工程が原石産地・周辺遺跡に限定されること、から、石器生産工程の「異所展開」（山口 1991）とも呼びうるであろう。

このような極相期の様相を、板井寺ケ谷下位文化層のチャート等製石器群の石器生産の様相と対比した場合、サヌカイト石材の拘束性と瀬戸内系石器生産技術、瀬戸内技法の特異性が明らかになる。石器生産技術に工程の分化が行われ、それが場所を異にして行われるという、板井寺ケ谷下位文化層から窺えるように瀬戸内系旧石器の初期からの特異性が存在し、次第に技術形態学的に顕在化して極相（技術的に完成されたものとして瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器を当てたい）を呈することを重視する必要があろう。瀬戸内系旧石器の石器生産技術の本質を端的に表現するならば、「瀬戸内系横長剥片剥離技術・瀬戸内技法自体が、この石器生産工程の「異所展開」を前提とした石器生産技術である」と表現できる可能性があるだろう。

鶴峯荘第 1 地点では 1 つの採掘坑内から 7､000 点を上回り、国府第 3 地点では狭い 1 ブロックからの石器群であるが 10ｋｇを上回る石器群の出土をみており、両遺跡とも本来の遺跡全域での石器生産量は膨大なものと推測される。接合資料や石核と翼状剥片・国府型ナイフ形石器の比率などから、国府型ナイフ形石器や翼状剥片の遺跡外への「持ち出し」を示唆する。藤井寺・羽曳野段丘で最近発掘された翠鳥園遺跡では、このように多量の石器生産活動を示すブロックが多数検出されており、原石産地上や周辺ではこのような様相の石器群を持つ遺跡が存在する可能性が高い。

はさみ山は 1 ブロックが完掘されたとは考えられないが、比較的広い範囲に約 2.5ｋｇの石器群が出土したに過ぎず、石器生産的というより消費的様相を示している。遺跡全域で消費された石材量は不明である。原石産地へのアクセスが容易な位置にありながら、消費的な様相の遺跡である。郡家今城Ｃ地点と異なるのは石核類の重量が大きい点で、原石産地に近いという位置的特徴が現れている。藤井寺・羽曳野台地上には、石器生産の活発な遺跡と消費的な遺跡の 2 種類が存在することが予測され、はさみ山は、近畿地方の石器群の補完関係を原石産地からの距離的関係で完全には説明しきれないことを示している。

郡家今城Ｃ地点では、8 ブロックに分かれて約 3.5ｋｇの石器群が出土しただけで、多量の国府型ナイフ形石器・翼状剥片が消費されていることに特徴がある。郡家今城Ｃ地点の状況から、原石産地上・周辺の石器生産遺跡から持ち込まれた石器類を逆に推測すると、国府型

ナイフ形石器・翼状剥片以外にも翼状剥片石核や不定形な剥片や石核類、翼状剥片石核素材として持ち込まれたと考えられる少数の盤状剥片や盤状剥片石核まで存在する。時期は異なるものの、二上山から約 80ｋｍ離れた板井寺ケ谷下位文化層でも、約 3.5ｋｇのサヌカイト石材が出土しており、石核素材を生産する工程が欠落し、遺跡内で生産されたと考えられない中・大型剥片が多く残されている点、搬入石器類の内容も同様で、きわめて類似した石材環境にある。

はさみ山遺跡を保留することが許されるなら、原石産地周辺の遺跡と遠隔地の遺跡では、原石産地からの距離という位置関係によって石器生産工程展開の補完関係があるとの仮説を立てることができる。補完の程度と距離が比例するかは、検討できる遺跡数が少なすぎ、今の所十分には明らかにできないが、しかし、原石産地・周辺と遠隔地の遺跡の直接の対応関係は、原石表皮の特徴や石材流状構造の観察、理化学的な石材成分分析によって、解明できるようになると期待できる。検討可能な遺跡が距離的な遠近と中間領域を埋めるなら、ある程度の主分布域での石材供給実体の法則化が将来可能であろう。

サヌカイト原石産地・周辺遺跡で行われる石材補給が、どれだけの数量・重量のサヌカイト石材を搬出したか、ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核や盤状剥片の搬出比率はどうだったかといった実体は、今の所十分明らかではない（松藤 1985）が、郡家今城Ｃ地点・板井寺ケ谷下位文化層のサヌカイト製石器群の遠隔地に搬出された資料の遺存状況からその一端を窺うことができる。両遺跡では、定型石器に器種を網羅し、中・大型の目的剥片も保持しているにも関わらず、第１工程資料がなく、第２工程石核類や生産された目的剥片も小型であり、遺跡内に残された石材総重量が４～３ｋｇに留まっている。このことは、遠隔地での１遺跡の石材消耗量が、わずか３～４ｋｇに抑えられていたかもしれないことを示している。郡家今城Ｃ地点の石器総重量の少なさは、すでに春成秀爾によって注意されている（春成 1981）。第１工程から第２工程、ナイフ形石器の生産まで一貫した工程展開のあった原石産地では数倍する多量のサヌカイト石材が消費されるのと極端な対照を示している。この３～４ｋｇを原石産地・周辺遺跡から持ち出し、消費する毎に原石産地・周辺に回帰することは、携帯重量があまりに僅かで効率が良くないことから考えにくい。この数倍の量が持ち出され、いくつかの遠隔地遺跡を残しながら巡回していたと考えるほうが自然であろう。この遠隔地遺跡１遺跡あたりの石材消費量がある程度普遍的なものであるなら、原石産地から出発する際に携行された石材総量は、

Ｔ＝Ｗ×Ｓ＋α

Ｔ：原石産地・周辺遺跡から搬出された石材総量

Ｗ：１遺跡での石材消耗量（郡家今城塚Ｃ地点・板井寺ケ谷下位文化層例から推測して約３～４ｋｇか）

Ｓ：変数（原石産地を出発してから「回帰」するまでの間に経由する遺跡数）

α：遺跡間移動中・特定作業地などで消費された石材

によって算定できることになる。仮に５遺跡を経由するとしても総量 20＋αｋｇ、10 遺跡を

巡るなら総量 40＋α、40ｋｇとなって、成人男性数名によっての携帯可能範囲に留まり、過重な重量ではないと評価できル可能性がある。

この程度の石材を、盤状剥片・翼状剥片石核・翼状剥片・国府型ナイフ形石器といった異なった工程段階で、それぞれまんべんなく抽出して搬出するなら、たとえば鶴峯荘第１地点や翠鳥園遺跡といった膨大な遺物量を有する原石産地・周辺遺跡に遺存する石器群の組成に、さして大きな欠落や変動をもたらさない可能性があり、見かけ上原石産地からの石材持ちだしは明確とならず、あくまで一貫した石器生産の痕跡（松藤 1985）を示すことになると考えられる。翠鳥園遺跡などの原石産地周辺遺跡での「遺跡全体」の解明が進み、個体識別は困難としても、接合作業の徹底と遺跡内遺存接合資料の工程展開の様相解明が進めば、原石産地・周辺遺跡石器生産のどの部分が遠隔地の遺跡へ搬出されるのか、遠隔地の石器生産のあり方との相違点が具体的に解明されよう。また、翠鳥園の遺物の数量・重量の膨大さと板井寺ケ谷下位文化層を比較した場合、瀬戸内系旧石器の石材供給の「戦略性」が明らかになるのではなかろうか。

遠隔地での石材消費（１遺跡全体で３～４ｋｇ）は、原石産地・周辺の石材総量（１ブロック・１土壙内一括で 10ｋｇ超）と比べて、きわめて持久的・耐乏的な状況である。遠隔地の遺跡では、遺跡内で行われる石器生産技術が非瀬戸内技法の比率を増やす可能性があり、郡家今城Ｃ地点や板井寺ケ谷下位文化層の接合資料の多様性、非瀬戸内技法の比率の増加は、時期差のほかに、制約された保持石材を使用しての「臨機的石器生産」の性格を考慮する必要があろう。

近畿地方の国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法を有する遺跡は、播磨灘・播磨平野の丘陵部、大阪湾岸・淀川回廊の周辺段丘・丘陵上にあり、ほとんどの遺跡が二上山から半径 60ｋｍ以内に位置していることになる。二上山からそれぞれの地域まで大きな地形障害は存在しない（山口 1991）。これらの遺跡は、サヌカイト石材の拘束を受け、石材占有率はほぼ 80％を上回る。郡家今城遺跡のように周辺でチャート材の入手が可能な地点でも、チャート材は驚くほど使用率が低い。

石器生産工程の「異所展開」とサヌカイト石材の拘束があった場合、それぞれの集団は原石産地への直接採取を行っていたと考えざるを得ない（山口 1988）。石器生産工程の「異所展開」は、一貫した石器生産技術の分担を、遺跡を違えて行うことであり、同一の石器生産技術を保持しない集団間では行い得ないと考えられるからである。交易を行いうる原石産地集団とそれぞれの遺跡集中地域に固有の集団の存在を想定し、一部構成員による直接採取を考える場合では、石材供給に不安のある遠方の遺跡に、サヌカイト製石器類の石器生産工程の存在が選択的に終末段階しか存在せず一貫した石器製作が不可能となる。さらに現地で補完的に使用されるべき在地石材の比率が低すぎ、地域占拠的な安定・独立した石器群とは言いえないと考える。

石器生産工程の「異所展開」を前提として考える場合、集団の軌跡には、以上のように石器生産地的様相と消費的様相の二つの存在があり、さらに原石産地への定期的な「回帰」が

発生することになる。各集団直接の石材採集活動と石器生産工程の「異所展開」によって、瀬戸内系旧石器の分布領域は、各集団の「回帰」の必然化する範囲にまで拡大されていたと考えられる。大阪湾岸・淀川回廊周辺の遺跡分布は、山地山裾や丘陵部に留まり、山地を反対側に隔てた中国山地内部への遺跡分布の浸透は少ない。「瀬戸内技法」の呼称を体現するように、二上山北麓の原石産地から大きな地理的障害なく到達可能な範囲（古瀬戸内盆地・古播磨灘平原・古大阪平野・淀川回廊・奈良盆地など二上山北麓や国分台など有力サヌカイト原産地から直接視認可能な範囲）で、石器生産の「異所展開」を行い、その中で保有サヌカイト石材を消耗し、原石産地・周辺への「回帰」を行っていると考えられよう。一定の領域の占有がきわめて生じやすい瀬戸内系旧石器時代社会であったことになる。

もとより、瀬戸内系地域集団は、石材の欠乏という理由だけで、原石産地への「回帰」したのではない。食料の確保や社会的動機により定期化した移動があり、これに石材供給活動が組み込まれていた（Binford1983）と考えたほうが妥当である。近畿・瀬戸内地域では、その移動領域と地域的地形単位が原石産地を中心として同心円状に配置されており、この環境に瀬戸内系旧石器時代社会と石器生産技術が有機的な構造的支持を行いながら適応したのだと考えられる。その結果、西南日本の後期旧石器時代において、きわめて特徴的な石器群の地域性が顕在化したのであろう。

ところで、播磨や和歌山沿岸地域では、原石産地との間に地理的・距離的な障害が存在する。二上山北麓から播磨の遺跡集中までは約 100ｋｍの距離がある。この地域では、原石産地への「回帰」が必然だったかどうかは、よく分からない。板井寺ケ谷下位文化層では、サヌカイト製石材の約１割が岩屋産と考えられるものが含まれることから、移動中に河川氾濫原や段丘中のサヌカイト原石採集が「臨機的」・「補助的」にでも行われていたことは間違いない。播磨や和歌山沿岸に集団の存在を認めた場合、瀬戸内系旧石器社会にサヌカイト石材の拘束を受け入れつつも、原石産地への定期的な「回帰」を行わない小地域の存在を予測できるかもしれない。国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法盛行期に遠隔地遺跡で原石単位でのサヌカイト石材の使用（松藤 1985）があるとすれば、これら転石採集の「臨機採集」サヌカイト円礫が供された可能性が高い。個々の事例のサヌカイト産地同定作業が求められよう。

５、瀬戸内系旧石器生産技術構造の予察

筆者は、瀬戸内系旧石器の石器生産技術の成立は、後期旧石器時代の初頭にサヌカイト原石産地の開発が行われ、サヌカイトという石材特徴と石器生産工程の「異所展開」の両方に対応した技術適応によっていると仮説している。瀬戸内系旧石器のナイフ形石器生産技術に共通して行われている瀬戸内技法第１工程と第２工程に相当する段階の工程分離は、石材原石産地・周辺から遠隔地への石器生産作業の遠距離展開を支えるために始められたと考える。この点で、瀬戸内技法の技術形態学的検討のみの立場からは、瀬戸内技法・瀬戸内系横長剥片剥離技術の本質は理解することはできず、この石器生産工程の「異所展開」を促した

社会的・自然的要因に遡り、石器生産技術と石材供給関係・当時の社会の動態がどの様に構造化しているかから考察すべきことを主張したい。

第１工程に対応する段階の原石を分割・剥離を行って盤状剥片を生産する作業は、遠隔地への石材持ち出しのための重量軽減と翼状剥片生産のための石核形状の準備という二つの側面がある。サヌカイト石材を原石単位で持ち出すのと盤状剥片段階で持ち出すのでは、可搬性に大きな差があることは明らかである。遠隔地で盤状剥片より大きな石材が必要ないなら、盤状剥片状態での石材持ち出しは極めて合理的であろう。理念的にもっとも効率の良い石材供給を考えた場合、原石産地で生産したナイフ形石器など石器製品だけを遠隔地に持ち出して使用し、重い石核を運ばない場合が最善であることは明らかであるが、それではすべての活動と装備を「予定的に管理」する必要があり、遠隔地での「臨機的な必要」に対応できない。遠隔地で極めて「保険的」な行為として石器素材剥片の生産を行いうる程度の盤状剥片の携帯が必要とされたと推測できる。遠隔地で消費される盤状剥片の形状や総量は、この「臨機的石器生産」を支えうるものであれば足りる。郡家今城Ｃ地点のナイフ形石器・翼状剥片のほとんどが遺跡外からの搬入で、遺跡内生産の翼状剥片が小型で形状が整わないこと、板井寺ケ谷下位文化層の搬入横長剥片と遺跡内接合資料剥片の大きさの落差は、原石産地・周辺での石材の「計画的確保」・一貫工程による石器の「見込み生産」「計画生産」と、遠隔地での石材「臨機採集」の僅少さ・保持石材を消費した保険的「臨機生産」の、両者の間にある明らかな差の証拠であると見なせよう。

遠隔地で適時生産されるナイフ形石器と原石産地周辺で生産されたナイフ形石器の形状や量には、大きな差がある場合が生じよう。また原石産地・周辺で行った計画生産量以上のナイフ形石器が遠隔地で必要なければ、遠隔地遺跡で生産される石器はナイフ形石器以外の器種が中心となり、石器生産技術も非瀬戸内技法・非瀬戸内系横長剥片剥離技術の比率が高くなるのは当然予測される現象であろう。原石産地・周辺遺跡でナイフ形石器が「計画生産」されるのに対して削器や掻器・彫器などの器種は僅かであり、遠隔地において削器や掻器・彫器などが残されていることは、これら器種が「臨機的必要」により要求され、適時その場で製作される器種であり、原石産地・周辺での計画生産の対象とはなっていなかったことを示している。「臨機的」生産物である結果、「異所展開」も顕在化せず、ナイフ形石器生産技術と肩を並べるようには構造化していない。一般的に瀬戸内系旧石器のナイフ形石器以外の定型石器の器種組成の貧弱さと形態的斉一性の乏しさは、石器の「計画生産」がナイフ形石器に限定され、その他の器種は個々の状況に応じて「臨機に」生産されたことに原因があるといえよう。瀬戸内系旧石器における石器器種の保持戦略の特徴が窺える。

このような技術的適応は、すでに板井寺ケ谷遺跡下位文化層で明らかであり、瀬戸内技法の技術的属性がやや個別的にではあるが存在している。この点で、瀬戸内系旧石器の一貫した適応現象の一つとして、瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器の出現を把握することが妥当であろう。瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器は、その「極相」としての発現であり、あくまで瀬戸内系旧石器生産技術の変遷過程の一つの様相にすぎない。本来瀬戸内系石器生産技術に

潜在的・顕在的に組成される技術的属性の組み合わせによって、発現したのである。社会的・自然的条件が準備されれば、時期・場所を違えて出現し得たかもしれない点は、注意する必要がある。原石産地では「極相」としての「典型的」瀬戸内技法は顕在化しやすいことは妥当な結果であり、一方遠隔地においては、「異所展開」と「臨機的石器生産」が行われることによって、瀬戸内技法に対する「ゆらぎ」やバイパス工程の発生（絹川 1993）を促す要因となったのだろう。

このような瀬戸内系旧石器のナイフ形石器生産技術は、日本列島に広く存在する他の石器群とは大きく異なっていることは明らか（山口 1983）である。先の瀬戸内系旧石器の構造観に照らすならば、他地域で出現する「横剥石器群」や「剥片素材石核」は、この石器生産工程の「異所展開」に対する適応が認められない限り、あくまで「他人のそら似」であり、「瀬戸内系石器群」としての認定には慎重であるべきであろう。また逆に、瀬戸内系旧石器の他地域への伝播・波及・分布拡大を検討する視点として、他地域で見つけ出せる「瀬戸内系旧石器」の観察は、サヌカイト石材の拘束を欠くことによる石器製作工程の「異所展開」の不明確さが、その石器群の構造にどのような影響を与えているかを検討することは重要である。

おわりに

石器生産工程の異所展開適応を行うことになった近畿地方中央部・東部瀬戸内地位域において、サヌカイト原産地が古大阪平野や古河内平野・大和盆地の中央にあり、極めて開放的な地形単位を呈していたことは、この瀬戸内系旧石器の「舞台」を提供した点で極めて重要であった。筆者は、瀬戸内系旧石器の地域性発現をもたらした石器群発展構造が、この地理的障害に乏しい眺望の良い地域単位が瀬戸内系集団に共通の地域認識をもたらしたことに深い関係があることを指摘したことがある（山口 1991b）。この地形・自然環境が瀬戸内系旧石器の地域適応を促し、他地域の石器群に先立って明確特異な地域性を発現させることになる（佐藤宏之 1992）。「瀬戸内系」旧石器・「瀬戸内」技法の呼称は、この地域的適応をふさわしく表すものとして、優れていると思われる。

本稿では、近畿地方の内容の明らかな遺跡の石器群を材料として検討したが、現時点で検討に値するべき情報の公開されている遺跡数はわずかである。この結果、時期差を石材供給や石器生産技術の様相と見違った可能性がある危惧がある。また、原石産地上と原石産地周辺に存在する遺跡の内容に違いがあるのかどうか、原石産地周辺にありながら消費的な様相を呈したはさみ山遺跡の評価などは、藤井寺・羽曳野丘陵上の遺跡群の様相がもう一歩明らかになった時点で再評価することが必要である。さらに、生駒西麓での遺跡の発見・実態解明も待たれる。

今後、より多くの情報が公開され、遺跡間の検討が精緻に行えるようになれば、消費的・原石産地的様相の多様さが明らかになる。石材の補給から消耗までの移動の各局面を明らか

にする事ができれば、単位的な集団の軌跡を明らかにできるであろう。石器類の組成情報の定量的側面の一つとして、重量構成の把握を行うことは重要であることを強調しておきたい。

本稿では、サヌカイト石材の搬出・搬入の形態と瀬戸内系旧石器の石器生産技術との関係について検討したに留まり、定型石器の保持戦略・石器のリダクションや石器組成の多様化については議論できなかった。機会を改めて再論したい。

註

1、筆者は、瀬戸内系旧石器の石材供給のあり方と、在地石材を遺跡間移動中に適時採集しながら石器生産を行う汎日本的石器群のあり方を対比し、その特異性を指摘した（山口 1983）ことがある。石材供給の実体と瀬戸内技法の工程展開が深く関係しており、瀬戸内技法の本質的実体となっていることも明らかにした。汎日本的な石器群との対比を重視したことにより、原石産地遺跡の機能を単純化しすぎた部分があった。取り上げた遺跡は、この時点では不十分であり、また数値処理にも問題があったが、筆者の理解は大筋として今も変わらない。数値処理にあった不備は、本稿によって修正される。

2、各遺跡の石器分類基準が一致しないため、はさみ山遺跡・国府遺跡では国府型ナイフ形石器・翼状剥片・翼状剥片石核・盤状剥片・盤状剥片石核など瀬戸内技法関連資料に、横長剥片・横長剥片石核を合わせる。また、ナイフ形石器には、一部国府型ナイフ形石器以外のものも含まれる。

3、国府遺跡・はさみ山遺跡・郡家今城遺跡の石器類の分類と観察は、筆者の観察によるもので、必ずしも原報告とは一致しない。鶴峯荘第 1 地点の組成は、佐藤 1987 の数値による。

4、第 1 工程関連資料として盤状剥片石核と生産物である盤状剥片・翼状剥片石核の両者を含める。第 2 工程には翼状剥片石核と生産物である翼状剥片・ナイフ形石器を含める。第 1 工程関連資料と第 2 工程関連資料の両者の多寡を比較するとき、翼状剥片石核が重複計算されている。

第５節　近畿地方における旧石器時代遺跡の立地

－遺跡立地の差と地域性の発生について－

１，はじめに

後期旧石器時代は、日本列島にいくつかの地域性が発現し、それぞれの地域に適応した石器文化が発達する。西南日本でも、特に瀬戸内地域の石器群が特異な技術伝統を有するものとして注目される。一方、中国山地には、それと異なった石器文化の存在が知られている。

近畿地方には、多くの後期旧石器時代遺跡が存在する。遺跡は、集落や露営地、狩猟・解体作業場、原石産地など、当時の集団の多様な活動の結果残されたものである。個々の遺跡立地を観察した場合、多様な状況が観察できるが、これらの相違は、遺跡の機能差に原因が求められる可能性が高い。一方、近畿地方は、全てを一括して論ずることが出来るほど平板なわけでなく、また、実際に山や川、海などの地域障害で隔てられ、区分された多くの小地域が存在する。これは、日常的にわれわれが持つ生活感覚と一致しよう。

このような近畿地方に分布する旧石器遺跡には、容易に石器文化伝統の判別のできる瀬戸内系石器群と、縦長剥片剥離技術を技術基盤とした石器群の２者が認められる。本稿では、近畿地方の旧石器時代遺跡の立地と当時の環境を、遺跡の視界と立地環境をもとに観察し、当時の集団の領域について考察し、さらに地域性の発生につながっていく当時の集団意識と動態について、私案してみたい。

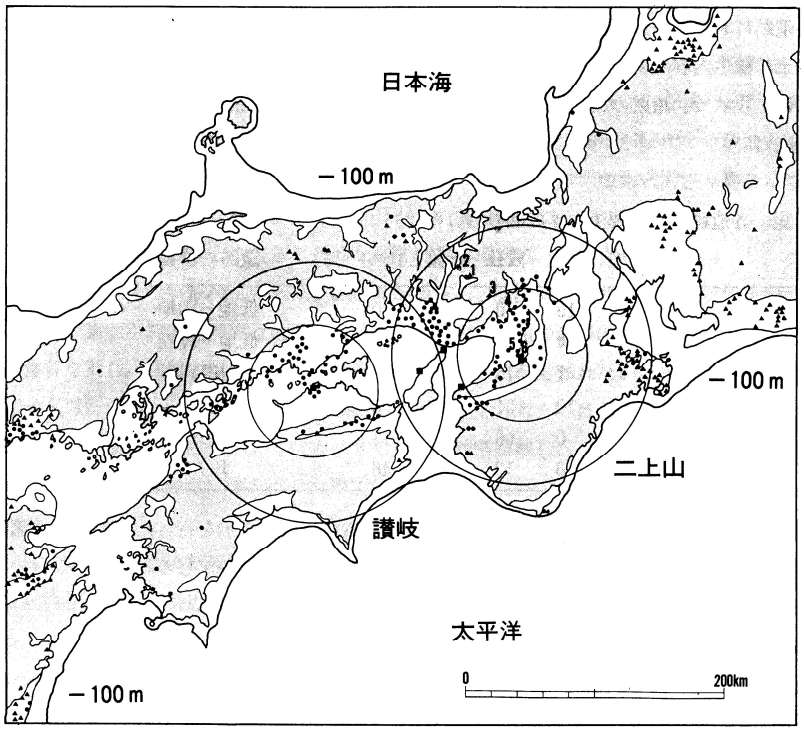


図 111　西南日本の遺跡分布（○瀬戸内系　△縦長系）
1：板井寺ヶ谷　2：七日市　3：溝口　4：郡家今城　5：国府
6：桜ヶ丘

もとより、このような問題は、一般的な実証的手続きを踏んだ論考には叶わない内容である。あえて扱おうとする場合、長期にわたる旧石器時代の一時を捉えて、さらに個別的な事象の

中で議論することには非常な困難があるのは当然である。本稿では、後期旧石器時代のナイフ形石器盛行期を想定し、厳密な時空間の特定を行わず、また個々の事象を単純化する事によって考えてみたい。

２，遺跡周辺の景観と自然環境

近畿地方には、多数の旧石器時代遺跡が発見されている。これらは集中したり、あるいは散漫に分布したりしている。遺跡の分布は、二上山北麓・高槻市周辺、播磨東南部に集中し、その他の部分には散漫である。荒く観察すれば、大阪湾岸・播磨灘周辺の比較的低位な部分と、以北の山地帯内の２つに区別することが出来るであろうか。両者の環境を、典型的な地形を代表する立地を示す遺跡を観察することによって、見てみよう。個々の遺跡ごとに、その遺跡立地周辺で確保できる視界について記載しておく。

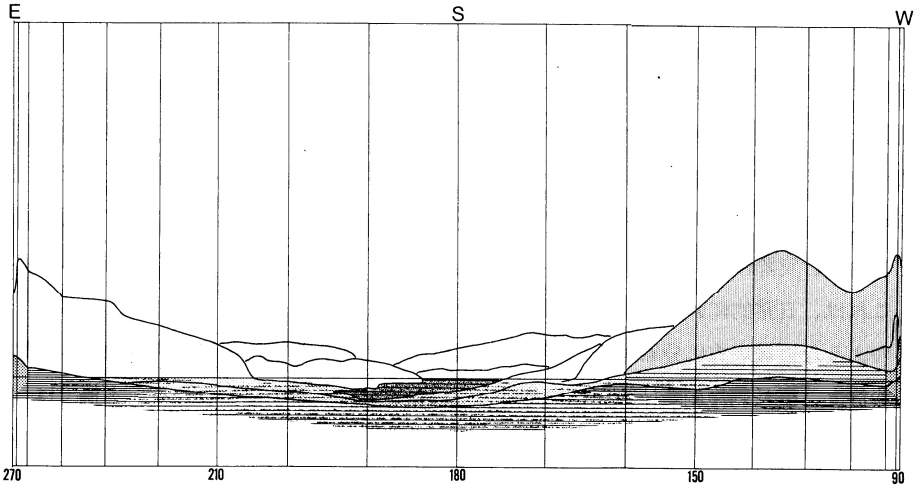


図 112　板井寺ヶ谷遺跡の南展望

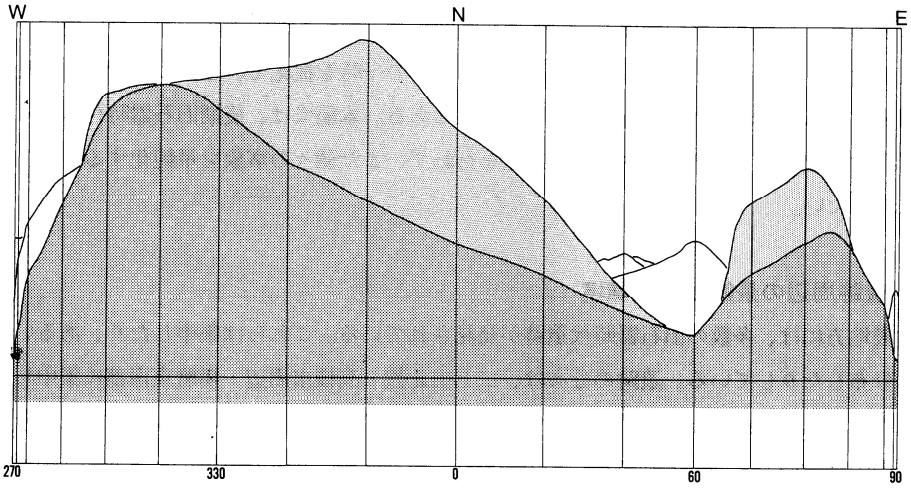


図 113　板井寺ヶ谷遺跡の北展望

板井寺ケ谷遺跡（図 114）

兵庫県多紀郡西紀町上板井に在す。中国山地の東端の篠山盆地北西端の平地が山地に立ち上がる変換点にあり、周辺は標高 400ｍ前後の山地に囲まれている。標高は約 210ｍ前後である。篠山盆地中央は姶良Ｔｎ火山灰降灰前後に排水不良から湖沼面の形成が考えられている。遺跡の視界は南方に約５㎞の距離で開けるが、その他の方向には周辺の山地で遮られ、１～２㎞

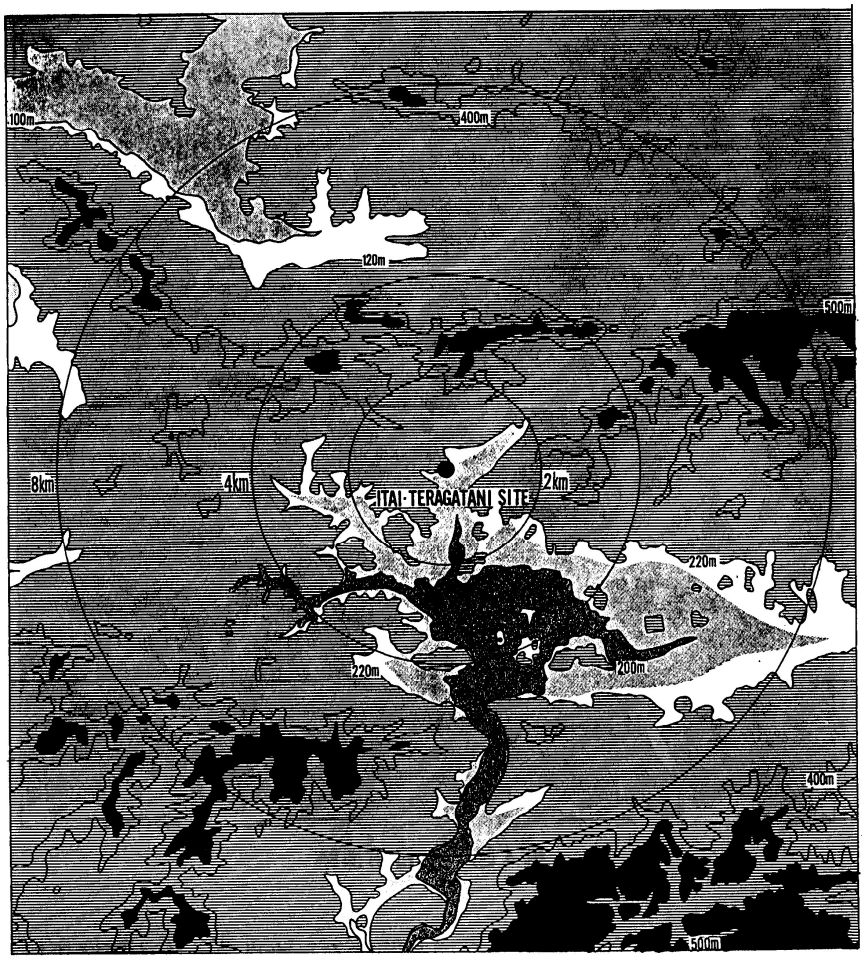


図 114

板井寺ヶ谷遺跡

の視界範囲に留まる。姶良Ｔｎ火山灰降灰前後２時期の遺跡が発見されており、放射性炭素年代測定結果で約２万年前の上位文化層にはサヌカイト製角錐状石器を主体した石器群、約２5000 年前の下位文化層には瀬戸内系の横長剥片剥離技術を技術基盤としたナイフ形石器・削器などを主としたサヌカイト製石器群と縦長剥片剥離技術を技術基盤としたナイフ形石器・掻器・削器などを主としたチャート製石器群が存在する。下位文化層の石材を異にする２つの石器群は、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の瀬戸内系石器群と中国山地帯内系石器群との同時共存を証明した（山口編 1991）。サヌカイト製石器群では、剥片生産工程の前半期の部分が遺跡内に認められないのに対し、チャート製石器群では全工程が一貫して行われている。サヌカイトは、ほとんどが二上山産で僅かに岩屋産が伴うことから遠距離石材で、チャートは周辺の河床や路頭で容易に採取できる在地石材である。ちなみに、二上山まで直線距離で約 80 ㎞ある。下位文化層では、瀬戸内系石器群と中国山地帯内系石器群両者の共存居住、サヌカイト製石器群側の居住的活動、チャート製石器群側の石器製作的・居住的遺跡の性格複合であると考えられる（山口 1991a）。

七日市遺跡（図 115）

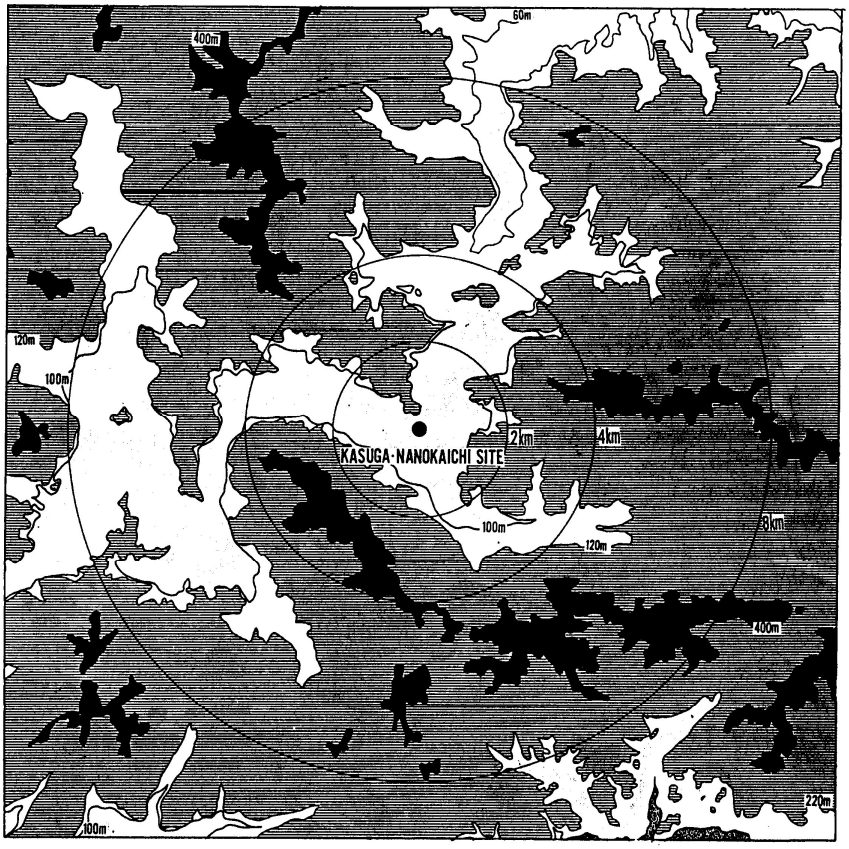


図 115　七日市遺跡

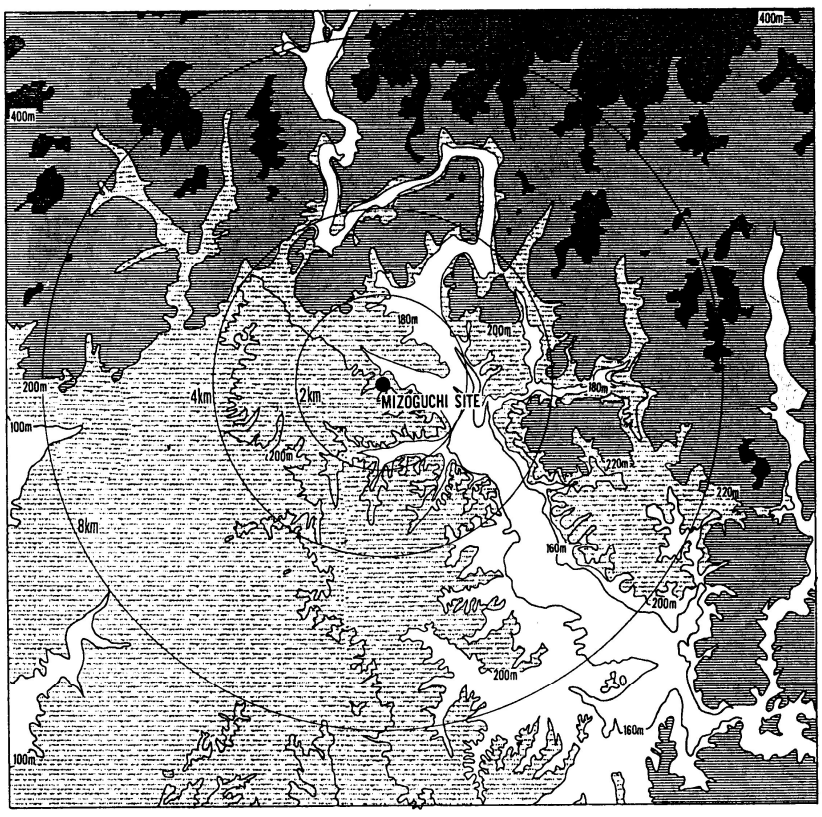


図 116　溝口遺跡

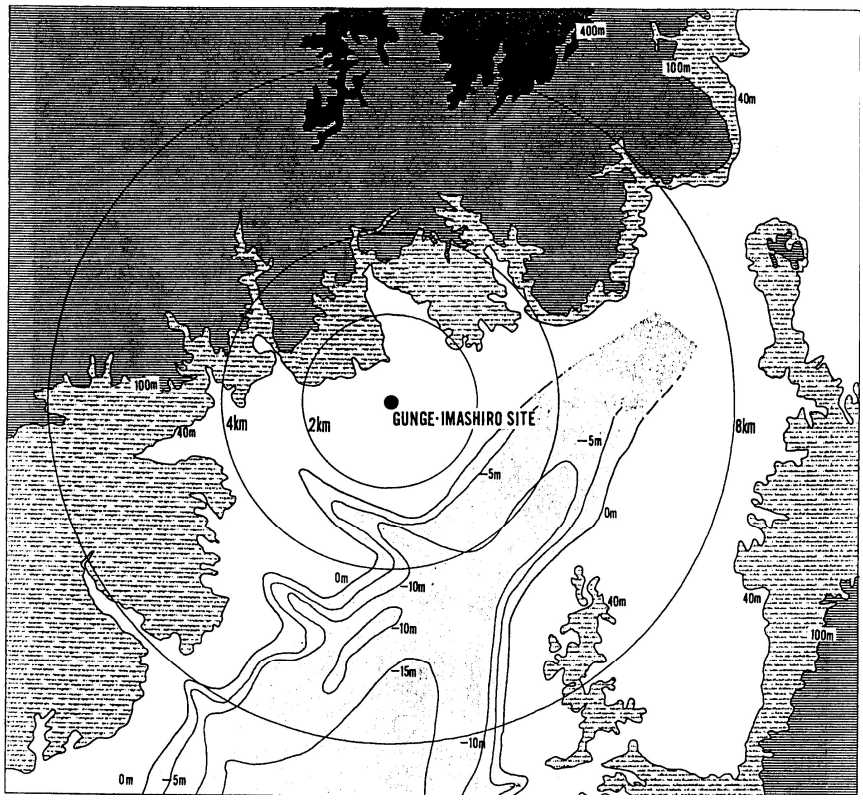


図 117　郡家今城遺跡

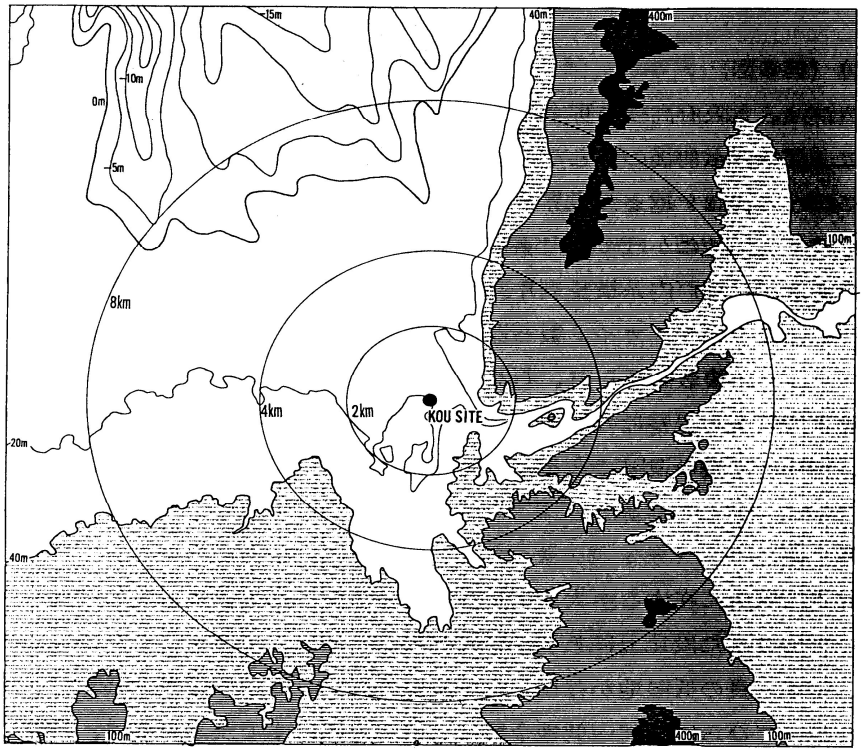


図 118　国府遺跡

兵庫県氷上郡春日町七日市に在す。日本海川に注ぐ由良川と瀬戸内海川に注ぐ加古川の分水嶺である氷上低地の中央にあり、標高約 100ｍ前後である。遺跡自体は極めて低位な段丘上にあるが、広く周辺を見れば標高 400ｍ前後の山地に囲まれている。遺跡の視界は、ほぼ２～４㎞の範囲で全周が開ける。姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器文化３層が検出され、上位には極小型の部分加工石器、中位にはナイフ形石器と台形様石器を主とした縦長剥片剥離技術基盤のチャート製石器群が出土している（久保・藤田 1990）。石器群は、中国山地帯内系石器群の一様相を示す。周辺河床には多量のチャート転石がみられる。遺物量は多量で、河床転石のチャートを原石とした石器製作的・居住的性格の遺跡と考えられる（兵庫県教育委員会 1990）。

溝口遺跡（図 116）

兵庫県三田市溝口に在す。中国山地東端の丹波山塊南麓に広がる丘陵上にあり、東側が大阪湾側に注ぐ武庫川による谷となっている。標高約 200ｍである。遺跡の視界は東北方向に約３㎞の距離で開けるが、その他は丘陵の細かい起伏によって遮られ、以外に視界が延びないようである。姶良Ｔｎ火山灰降灰以前と考えられる鉄石英・チャートなど在地の石材を素材としたナイフ形石器をともなう石器群が出土している（山下・南 1986）。周辺には、これら石材が転石として存在していると考えられるので、中国山地帯内系石器群の居住的・石器生産的遺跡の一つと考えられるであろう。

郡家今城遺跡（図 117）

郡家今城遺跡は、大阪府高槻市郡家にあり、淀川右岸に広がる三島平野中の低位な段丘上にある。淀川は、深さ 30ｍ前後の谷となっていた可能性がある。標高は約 25ｍと低い。視界は東から南、西にかけて 10 ㎞を越えた視界が開け、生駒山や淡路島方向まで遠望できるが、北も約４㎞範囲で丘陵から山地にかけて特に阻害する地形は認められない。姶良Ｔｎ火山灰との上下関係は不明であるが、瀬戸内系横長剥片剥離技術の典型である瀬戸内技法による翼状剥片・国府型ナイフ形石器などのサヌカイト製石器群が認められている（冨成・大船、78）。石器類ブロックや礫ブロックが複数認められ、良好な遺跡でありながら、遺跡内には、剥片剥離作業後半段階での作業が行われたのみで、翼状剥片のほとんどは搬入品であったことから、居住的性格の遺跡であると考えられる。二上山までは、約 40 ㎞である。

国府遺跡（図 108）

大阪府藤井寺市国府に在す。大和川が奈良盆地から生駒・葛城山地をぬけ、河内平野に流下した部分に形成された段丘上にあり、標高約 20ｍである。河内平野中央部は、緩やかな盆地地形を呈し、排水不良の低湿地が存在した可能性が高い。遺跡の視界は、北から西にかけて良好で、10 ㎞を越えてひらけ、河内低地全域・六甲山方向にまで及ぶ。東は、生駒山塊によって約２～４㎞ほどで遮られる。南は約２～４㎞と考えられるが、起伏のある段丘が次第に丘陵と化すことから、以外に良くないかも知れない。国府遺跡には、多数の旧石器出土地

点がある。多くは、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器・翼状剥片を組成する瀬戸内技法盛行期の遺跡で、初期から終末までの活発な剥片剥離作業の展開の認められる遺跡が多い（一瀬他 1991）。二上山の原石産地まで約５㎞であり、また近傍の河床にはサヌカイトの転石が存在しているようである。広範囲の発掘調査は行われていないが、石器製作の活発な居住的

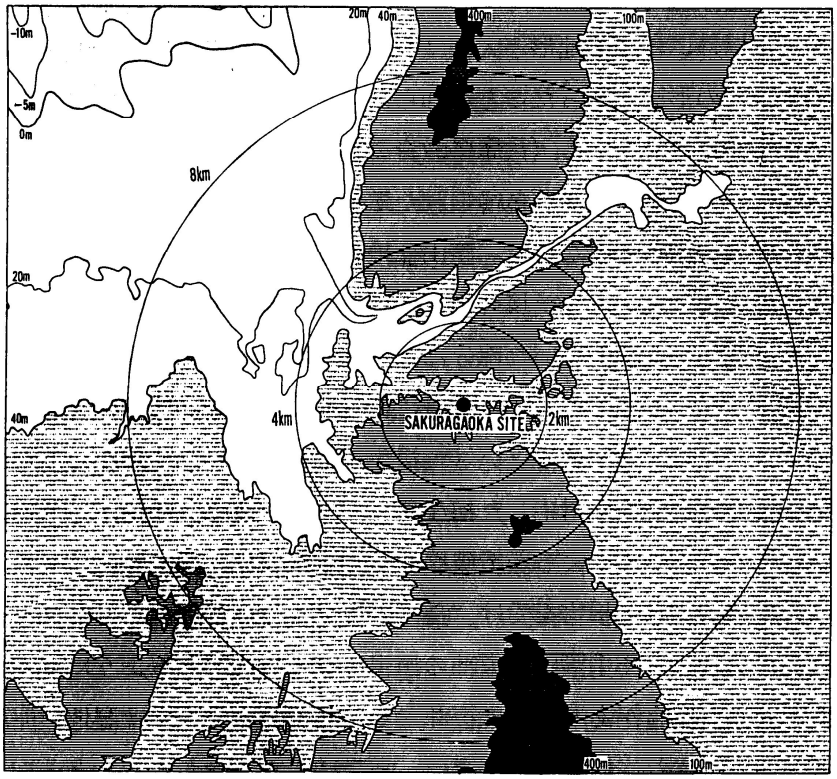


図 119　桜ヶ丘遺跡

性格の遺跡であると考えられよう。

桜ケ丘遺跡（図 119）

奈良県葛城郡香芝町桜ケ丘に在す。二上山の北麓に貫入する小河川の段丘上に位置する。山地と丘陵に挟まれた狭隘な渓谷で、周辺視界は良くない。東西に最大で約１㎞があるに留まり、南北では数百ｍに過ぎない。桜ケ丘第Ｉ地点遺跡では、姶良Ｔｎ火山灰の土壌化した層順とそれより下位の砂礫層中の２つの石器包含層順がある。上層は国府型ナイフ形石器・翼状剥片を多量に組成するサヌカイト製石器群が多量に出土し、瀬戸内技法の盛行期の遺跡であることが知られている（松藤・佐藤 1984）。剥片剥離作業は、全工程が活発に行われている。サヌカイトは、遺跡周辺１～２㎞圏内に露頭・転石状態で豊富に存在し、原石産地内の遺跡であると考えて良い。発掘面積の制限から遺跡の性格は定かではないが、原石産地内の石器製作所としての性格が当然考えられよう。

３，近畿地方の自然環境

以上、６遺跡の立地と視界を観察した。これらは、大ざっぱに考えて、２つに区別できる。板井寺ケ谷、七日市、溝口の各遺跡は中国山地東部にある遺跡であり、郡家今城、国府、桜ケ丘の各遺跡は近畿地方中央の低位な場所にある遺跡である。後期旧石器時代の近畿地方は、ざっと姶良Ｔｎ火山灰降灰前後を相当期として考えると、現在の地形・植生と大きく異なっている。ここでは、この２者を取り巻く自然環境について、簡単に観察しておこう。

瀬戸内東部から近畿地方中央部の低位な場所の自然環境は、どの様であったろうか。ウルム氷期厳寒期での久しい寒冷化の結果、海水面が低下し、大阪湾・瀬戸内海全体が陸化していた。大阪湾は、東西百数十㎞、南北約 60 ㎞の大盆地となる。この中央を、淀川や瀬戸内側から流下する河川が深く侵食谷を刻む。一部には排水不良の湖沼や湿地があったかも知れない。現海水面下の地形はよくわからないが、河川以外の地理的障害に乏しい地形と考えて良かろう。この植生は、あまりに広大であり、どこのデータで代表させて良いか判断が難しいが、六甲アイランドでの分析結果（前田 1985）を参考にすれば、六甲山南麓斜面地の最終氷期後半の植生は、針葉樹ではチョウセンゴヨウ、ヒメコマツなどのゴヨウマツ属、カバノキ属が優先し、モミ属、ツガ属、トウヒ属が随伴し、コナラ亜属がみられ、冷温帯要素の針葉樹林に落葉広葉樹が混成した植生となるという。また、周辺の段丘・丘陵上は草原化した部分があったとする論考（那須 1985）もある。

中国山地東部の自然環境はどうであったろうか。地形的には、侵食谷が深く貫入し、山麓の岩屑生産が活発であった以外、ほぼ現地形と大差はない。篠山盆地や氷上低地などでは排水不良が発生して、湖沼や湿地の形成があったことが知られている。植生については、板井寺ケ谷遺跡で良好なデータが採集されている（大井・南木・能城 1991）。

遺跡湿地部に堆積していた泥炭層から得られた植物化石)と花粉から 26000～20000 年前の遺跡内及び周辺の植生変遷が明らかになった。篠山盆地の基本的な植生として、周辺を取り巻く山地にはマツ属単繊維管束亜属・コナラ属コナラ亜属・ツガ属の木々が繁茂し、低地との境にはトウヒ属が混じる。低地の比較的乾いた部分にはトウヒ属、乾地から湿地へはハンノキ属・カエデ属・ヤナギ属・カバノキ属)の木々が散漫に群落を作る。さらに草本としてカヤツリグサ科・イネ科)・ミズバショウ属が繁るといった植生が描き出された。現在の亜寒帯針葉樹林に相当する。遺跡周辺の地形要素に対応した植生復元が可能である。さらに、23000 年前に西南日本に広く降灰した AT 火山灰による環境破壊の様相も解明し、厚さ 20 ㎝にも及ぶ火山灰降灰の結果、山地の針葉樹が大きな損害を受け、長く回復できない状態があったことが指摘された。

両地域を対比した場合、やや中国山地東部の植生に寒冷傾向があるようにも見えるが、植生は局地的な変異が大きい場合があり、特に板井寺ケ谷遺跡のデータは湿地の泥炭からのもので、注意が必要である。また、植生帯の変遷は、非常に緩やかであるとも考えられる。植

生についての情報は、可食植物・動物相との脈絡から当時の生業との関係で重要であるが、現在の植生についての情報では、差異を強調できるほどではない。

各遺跡における周辺の地形要素が、どの様なものであるか、表にして示す。本来、地形要素と共にその上の植生内容が明かとなれば良いが、植生は、湿乾・日照度、土壌の違いなどで多様に変化する。現状で、遺跡の自然環境を大まかに示す手段は、この地形要素である（Vita=Finzi　Higgs1970）。

表 11　各遺跡の地形要素（4 ㎞圏の百分率比）

	湿地	低地	段丘	丘陵	山地	（%）	遺跡の位置
板井寺ケ谷	11	19	0	0	70		低地－山地
七　日　市		34	50	0	16		低地－段丘
溝　　口		7	15	66	13		丘陵
郡家今城		19	51	22	8		段丘
国　　府		0	66	17	17		段丘
桜　ケ　丘		0	12	42	46		段丘

（註）地形図の地形要素は、地形変換点近くの等高線によって大別を行った。また、細部を無視している。湿地の判断は、現地形からは困難で、板井・寺ケ谷のみに留まる。

4，近畿地方旧石器文化の地域

近畿地方の旧石器時代遺跡の分布を、中国山地東部と近畿地方中央部の低地部分の 2 つに分け、両者の特徴を把握し、その特徴と石器群がどの様に構造的な関係を有しているかを考えてみよう（図 111）。

近畿地方中国山地東部の遺跡分布は散漫で、特に集中した地域は発見されていない。遺跡立地も板井寺ケ谷遺跡のように湿原に面した山裾端、溝口遺跡のように丘陵上、七日市遺跡のように低位な段丘上、畑ケ平遺跡のように高原上など、多様である。それぞれの遺跡の視界も、ほとんどが良く延びて数㎞で、必ずしも良くない。個々の遺跡の立地点は、個別に地形障害によって隔てられている。この領域の遺跡は、チャート・鉄石英・瑪瑙・碧玉・安山岩などの近傍の河床などで採集可能な在地石材を石器素材とし、縦長剥片剥離技術を技術基盤とした中国山地帯内系石器群が主で、板井寺ケ谷遺跡では瀬戸内系石器群が共存する。

近畿地方中央部の低位な部分の旧石器遺跡分布は、主に大阪湾岸から播磨灘にかけて集中し、そのほとんどの遺跡の立地は標高 100ｍ以下の低位な段丘や丘陵端にある。あたかも、沿岸部に張り付くかのように遺跡が分布している。現在、大阪湾・瀬戸内海に没した遺跡が多数あるだろうことを考えると、この遺跡分布の中心は、標高 100ｍ以下、多くが現海面下にあると推定できよう。遺跡の立地点は、原石産地の狭い谷筋に位置した桜ケ丘遺跡、谷筋の大沢池遺跡などを除くと、ほとんどが良好な視界を有している。立地点から直接視認できなく

ても、近傍の高地からならば基本的に他遺跡の立地点の多くが視界中に入るような位置関係、地理的障害に乏しい状況が出現している。

両者の遺跡立地環境の違いは、２つの集団がそれぞれ異なった環境を選択した結果であるのは、当然である。それぞれの領域は、ある程度占有的に保持されるなら、その分布は自然環境による棲み分け的な様相を呈することになる。この現象は、他地域でもしばしば認められることである。

しかし本来、考古学的に確認される現象として、このように見えることを認めることと、この選択が全くの自発的であったか、なんらかの要因で強制されたかを、解釈・説明する事は、議論のレベルとして異なっているといえる。現象の把握に続いて、その理由の説明が必要である。当事者としての２つの石器群と、分布地域を結ぶ構造を検討することが必要かも知れない。筆者は、以前に瀬戸内系旧石器の地域性の発現に対し、サヌカイトという特定石材を使用した石器製作伝統と石材供給システムが強く結びついていることを指摘したことがある（山口 1983）。考古学的に把握される石器文化を、その地域的構造を維持する要因との関係まで振り返って考えてみよう。

近畿地方中央部に分布する瀬戸内系旧石器は、サヌカイトに限定された石器群であり、この石材選択は原石産地と遠隔地の、たとえば 40 ㎞離れた郡家今城でも大差ない。郡家今城周辺では、石器石材として利用可能なチャート材が入手可能であるが、手を出していない。国府型期の瀬戸内技法には、石器製作工程の異所展開を織り込んだ、第Ⅰ・第Ⅱの２つの工程段階が存在し、第Ⅰ工程は原石産地中心に展開され、原石産地に日常的な立ち入りの困難ないわば「遠隔」の地では、第Ⅰ工程が欠落する。原石産地からは、盤状剥片や翼状剥片石核、翼状剥片・製品石器が持ち出され、遠隔地ではそれらを次第に消耗していくことになる。所持する石材が枯渇した時点で原石産地への回帰が必然化することになると考えた。サヌカイト製の瀬戸内系旧石器の分布範囲は、サヌカイト原石産地周辺と遠隔地の２つのゾーンから成り立っていると考えても良いであろう。サヌカイト製瀬戸内系石器群の分布範囲は、このように考える場合、石材消費の結果、原石産地への回帰が必然化（山口 1988）する限界点が分布の範囲を決定していると推定することが出来る。瀬戸内系旧石器の特徴は石器製作技術の特異性と共に、他の石材が転石などで容易に採取可能な位置にあってもほとんどこれを利用せず、サヌカイトに固執する性格は、この瀬戸内系石器群の分布範囲を結果として制約し、また石器製作技術の異所展開対応という特異性がこれを維持していたと考えてみることも出来るであろう。

一方、中国山地東部の諸遺跡では、サヌカイトのような優先石材はなく、在地石材主体の石器群となる。石器製作技術も当該期の汎日本的な流れに位置づけられる石器群で、瀬戸内技法のような特異性に乏しい。石器製作は、在地の石材を適時入手・消費していく形と考えられ、遠隔地の石材を多用しない限り石器製作工程の異所展開などは、健在化し得ないことになる。このような条件下にあった場合、特に中国山地東部のみに限定して地域性の発現されることにならず、瀬戸内系旧石器と対比した場合、さらに広域に、また曖昧な形とならざ

るをえない。

両者には、石器群の分布範囲の相違以外に、その地域の石器文化を保持するシステムからの相違があるということが理解されよう。

5，旧石器時代人の風景

近畿地方において、２つの石器群が２つの異なる範囲に分布し、その石器群には考古学的に検証できる石器文化の構造に差があることが推定できる。この２つの地域が、旧石器時代人にどのように考えられていたか、そして、それが彼らの生活・社会・考古学的事実にどんな影響を与えたのであろうか。旧石器人の心象風景にまで立ち入って、推論を重ねてみたい。

旧石器時代の地域性は、当時の社会的集団の一つの階層に対応し、その時間的・空間的な活動の場であった。この地域と石器文化の関係には、本来的に因果関係があるのであろうか。一つの自然的・生態的環境としての地域が、人類社会に適応的影響を与え、これが石器文化に地域性をもたらしたということか、ということである。日本の旧石器文化の内容は、長い時間的経過の中で、日本列島内に出現した適応結果であると考えて良かろうが、直接的な因果関係を地域と石器文化との間に結び付けるのには、いささかの躊躇があると考える。先の検討においても、中国山地東部と近畿地方中央部では植生に大きな相違はなく、これが石器文化の相違を生む要因であったと決めつける訳には行かない。当時の社会システムを決定づける最大の要因は、食料の獲得であり、その環境が最終的な基盤を提供していたのではあろうが、その地域を選ぶという選択の意志決定は、旧石器時代地域社会自身の決定によることは、ほぼまちがいの無いことである。また、多少の植生差といった環境の相違は、石器文化の差異として大きな違いとはならなかった可能性も高い。東北日本の北海道のナイフ形石器の欠落、杉久保・金谷原系石器群との対比はともかくとすると、西南日本においては、瀬戸内系旧石器を除いて大きな石器文化の地域的断層は認めがたいのである。

本稿の目的は、近畿地方における遺跡分布から、地域がどの様に認識され、その共通認識が考古学的遺跡分布・立地にどの様に反映しているかを探ることにあるので、瀬戸内系旧石器と中国山地帯内系旧石器の対比に論を戻したい。

瀬戸内系旧石器の分布する近畿地方中央部・瀬戸内地域は、先に明らかにしたように、石器文化として他地域と異なった均質性を有したものとなっている。この要因は、石器製作技術大系に横長剥片剥離技術を採用したこと、サヌカイトを優先的に使用することが挙げられる場合が多い。筆者は、瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統とサヌカイト石材の供給システムが深く関係していることを指摘したが、この両者を結び付けるに当たり、さらに当時の社会的認識にまで検討を及ぼす必要があることを指摘したいのである。

本稿で検討したように、瀬戸内系旧石器の主分布域での遺跡立地は、非常に開放的な地形単位にある。サヌカイト石材の供給範囲とこの地形単位がまさに対応する。言い替えると、

サヌカイトの産出地から消費地までが、その気になればすぐに相互に一望できる関係にあるといえる。原石を採集して、その消費を続け、再び原石産地へ回帰するという移動パターンが有るとすれば、その移動領域全てが一望できることとなる。二上山を例に取れば、古河内平野に回帰した小集団は、二上山北麓へサヌカイト石材の補給活動を行い、再び遠隔地のたとえば高槻市周辺へと出発するという形が考えられる。地形的には両地点への移動最中の長きにわたって相互に大まかな場所を視認する事が可能である。「あそこで採取した石材を、ここで消費する」ということが、日常的に認識されることとなる。一般的な狩猟採集民にとって、自分の活動領域の地形や植生、季節的変動の範囲を熟知することはもとより、資源的環境についての知識も有することは当然であったろう（Binford1983）。地形的な特徴から自身の位置を把握することが出来るのは、いずれの狩猟採集民でも当たり前であろう。近畿地方中央部のように、極めて遠距離の眺望が獲得できる場所ではなおさらである。どれだけの規模の集団がこのような活動を行ったか十分な情報はないが、この活動を行った旧石器時代人にとっての石材と地域との結びつきは、強く認識されたであろうことは、想像に難くない。これらの集団は、石材にサヌカイトを選ぶことによって、一つの地域に縛り付けられたとも考えることが出来るが、この地域と一体となった共通認識を持つことにより、より強固になったのではなかろうか。

一方の中国山地帯内系石器文化は、固有の石材を有さず、在地の石材を臨機採集して石器製作に供する。石材と石器文化との関係は希薄である。地形単位は山地や渓谷、高原などに分割される。ここにあっては個々の集団の移動範囲を一望することは不可能で、自身の地域についての共通認識は近畿地方中央部と比較して、より育ちにくいと考える。

旧石器時代社会において、ある地域的集団が一定の地域を占有するという選択は、個々の集団ごとになされ、隣接する集団との間で最終的に調節されたと考えることが出来る。瀬戸内系と中国山地体内系の両者が、同時に平行して居住し、分布領域を分けたことは、個々の集団の地域認識と活動の結果であると共に、両者がお互いにその領域を尊重したからであろう。瀬戸内系の集団にとって、山地帯内に入ることは日常的ではなく、その分割された地形の異質さが強く認識され、またサヌカイト石材の供給を危うくする行為であると考えられると共に、隣接する集団である中国山地帯内系の領域を犯すことを承知していたと想像する。中国山地帯内系にとっても、近畿地方中央部の開放的地形は違和感のあるものであり、また異質な石器文化である瀬戸内系との接触をもたらすのである。

筆者自身は、瀬戸内系旧石器の特異性は、技術的・石材的構造に、地域的選択が本来的基盤を提供し、それを瀬戸内系社会集団全体が共通して認識したことにより強固に構造化したと私案する。他の地域の石器群では、この構造化する要素が少ないか、共通認識が不成立であったのでは無かろうか。考古学的地域性の発現は、旧石器時代の社会において一つの社会的集団が一つの地域に対し適応を重ねると共に、その地域に対し「自分達の領域である」との共通認識をする事により始まると考える。瀬戸内は、近畿地方中央部から瀬戸内西部までいくつかの単位があるものの、見通しの良い大地形が広がり、そのほぼ中央にサヌカイト原

産地を有する。遺跡の分布は、その大盆地地形の縁辺を取り巻くように発見されている。海没している部分での遺跡存在を考慮すると、地形単位と遺跡分布は一致するのである。瀬戸内系旧石器の技術的・石材的特性のみを強調するのではなく、当時の地域的共通認識を仮定し、それが石器文化を構造化させる契機であると考えることも必要であろう。

6，おわりに

本稿では、瀬戸内系と中国山地帯内系の石器文化が、どの様な地域性を発現させているかを糸口として、その契機となった石器文化諸集団に共有された地域に対する共通認識の存在について論を進めた。瀬戸内系旧石器の成立は、石器文化の構造性に、この共通認識が根底にあったと考える。瀬戸内系旧石器の特異性は、この構造が石器文化に対して発現したから考古学的に認識されたが、その他の文化的・社会的発現も有り得たであろう。石材供給システムの特異性から推測できるように、同族的社会集団の紐帯の保ちかたなどは、重要な問題である。

他地域の石器文化において、瀬戸内系ほど構造的な地域性を指摘することは困難であるが、後の縄文時代以降には明瞭な構造となって発現する。また、地域性発現の要因も地域の共通認識以外の社会的な有力要因も発生しているのであろう。

瀬戸内系旧石器の遺跡立地と中国山地帯内系旧石器の遺跡立地は、個々の立地選択は、集落単位に個別の集団によって行われる。この選択は、食料獲得を始めとする諸戦略に基づくものであり、この基本的な生業・居住活動を中心とした個別遺跡ごとの立地選択要因についても、視野を広げて検討していく必要が有ろう。

本稿では、遺跡立地の景観的・視覚的側面について、十分な記述・検討が出来なかった。また、近畿地方を中央部と中国山地東部に２分して扱ったのみで、時空間を特定しての分析を行っていない。繁茂する樹木と集落の眺望、資源と立地選択の関係など、これらの点については、機会を改めて論ずることとしたい。

第６節　西南日本における後期旧石器時代前半期の一様相

1、はじめに

日本における旧石器研究は、近年蓄積された膨大な調査資料を背景とし、日本文化に根ざしたともいい得るような、精緻な遺物観察、報告書の作成を経て、世界で稀な精緻な地域旧石器群の技術的・編年的解明を行ってきた。調査事実の蓄積とその開示は、考古学の学問的成果として、まさに世界に冠たるものと言えよう。しかし一方では、その膨大な調査資料を前にして、考古学が本来はたすべき「歴史学」ないし「人類学」的科学としての成果の訴求がおろそかにされているとの警鐘があるのも事実である。日本の旧石器時代研究者は、どのような立場から、どんな考古学を選択し、あるいは構築して行くのであろうか。

考古学という学問が日本国内で認知され、発達してきた歴史の中で、一つの学問的領域としての社会的・文化的に還元された「成果」が、まさに問われつつあるのではなかろうか。旧石器時代研究においても、岩宿以後、高度成長期を経て現在までの間に、学問的な「社会的責任」をどれだけ果たせたかを自問したい。

2、後期旧石器時代前半期と瀬戸内系旧石器の変遷

日本における旧石器時代の研究は、特に南関東の良好な火山性降下物の豊富な堆積環境の良かった地域を中心として進展してきた。西南日本の旧石器研究は、土壌堆積環境の地域的ばらつき、調査事例の僅かさなど、多くの制約により、石器群の内容把握を中心とした研究が行われてきた。個々の石器群の形態的・技術的組成の把握と比較が行われ、地域性の把握、編年研究を精力的に行っている段階といえようか。東北日本、とりわけ関東地方との間で大きな研究上のアンバランスを来たしている。編年・系統論的研究においても、後期旧石器時代前半期石器群の全国対比では、両者の間に「ひずみ」が生じているようにも見える。その顕著な例が、瀬戸内系旧石器をめぐる扱いであろう。

国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を極相とする瀬戸内系旧石器は、本来の分布中心領域での層位的検出例の僅少さが原因となって、後期旧石器時代前半期での存在が今まで十分明かではなかった。近年ようやく、層位的検出状況が良好で姶良Ｔｎ火山灰降灰以前と考えられる遺跡が相次いで発掘されるようになってきた。兵庫県板井寺ケ谷遺跡・七日市遺跡、大阪府長原遺跡、奈良県平城京左京下層遺跡等である。本稿では板井寺ケ谷遺跡の調査成果を中心にこれらの遺跡の石器群を検討し、西南日本とくに近畿・中国地方における後期旧石器時代前半期の様相を考えてみたい。

特に本稿で問題とするのは、瀬戸内系旧石器の変遷であり、さらに後半期に顕著となる地

域性の起源を、いつ・なにに求めるかということである。瀬戸内系旧石器は、剥片素材の石核の側縁から連続して生産された横長剥片素材のナイフ形石器を主要器種とする石器群（山口 1983）である。国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を「極相」とした瀬戸内系旧石器文化は、いつ成立するのだろうか。後期旧石器時代前半期は汎日本的に地域性に乏しく、その発現は姶良Ｔｎ火山灰降灰後とされている（佐藤宏之 1992）が、瀬戸内系旧石器の地域性顕在化は他の地域と同様に遅れるのであろうか。

まず、この地域での台形様石器とナイフ形石器を主体とする石器群のあり方とその技術的基盤を、主に板井寺ケ谷遺跡下位文化層などの近畿地方北部・中国山地内の遺跡をもとに検討する。台形様石器とナイフ形石器の主要器種の移行がどうだったかも観察したい。また、この地域においては、サヌカイトという火山性石材とチャートや鉄石英などの堆積岩・安山岩などの在地石材、日本海側からの搬入材である黒曜石が使用されるので、石材と特定の石器製作技術の関係がいつ成立したかも検討する。さらに今のところ明かでない近畿地方中央部・瀬戸内海地方での当該期石器群の変遷を、現時点での情報をもとに作業仮説的に推定してみたい。

3、近畿・中国地方の当該期の遺跡

板井寺ケ谷遺跡下位文化層と同じく、近畿・中国地方当該期の他の遺跡を簡単に観察してみたい。台形様石器とナイフ形石器、サヌカイト製石器群と在地性石材が共伴した遺跡で、それらの関係がどのようなものかを中心に検討しよう。

七日市遺跡

七日市遺跡第Ⅱ文化層（久保・藤田 1990）では、姶良Ｔｎ火山灰下に三枚の文化層が検出されている。第Ⅱ文化層では、1982 点の石器群が出土しており、ナイフ形石器・台形様石器・楔形石器・抉入

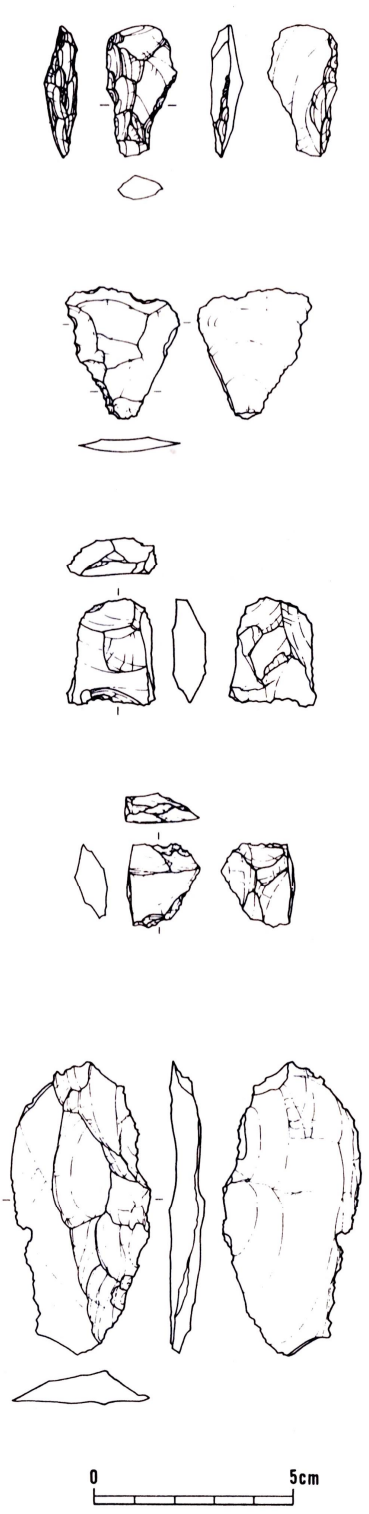


図 120
七日市遺跡第Ⅱ文化層のサヌカイト製石器

石器や鋸歯縁石器を含む削器・局部磨製石斧・加工痕有剥片・使用痕有剥片などが出土している。在地のチャート材を使用した縦長・不定形剥片剥離技術を石器生産技術の基盤としているので、ほとんどがチャート製石器群である。

僅かに約 40 点、石器総数のわずか 2%のサヌカイト製石器が共伴している。サヌカイト製石器には、ナイフ形石器・台形様石器・使用痕有剥片と剥片類がある（図 120）。原石産地分析結果は、二上山産が約六割、岩屋産が二割五分を占めている。サヌカイト製石器類は、剥片素材の石核から剥離された横長剥片素材ものは僅かで、ほとんどが石核の形状の推測できない不定形な剥片を素材としている。石核は認められず、接合資料も僅かなことから、サヌカイトによる石器生産は活発ではなく、素材剥片や石器としての搬入を推測させる。遺跡内での分布は、Gブロックにサヌカイト製石器の約七割が集中する点が注意される。

溝口遺跡

溝口遺跡（山下・南 1986）は姶良Ｔｎ火山灰が把握できず、層位は明かではないが、石器群の形態から後期旧石器時代前半期の石器群と推測されている。合計 1121 点の石器群が出土し、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・削器・局部磨製石器・加工痕有剥片・使用痕有剥片等がある。石器群中に明らかな台形様石器は組成しないが、一部に部分加工石器または台形様石器とも分類し得る石器の存在を指摘する意見もある（麻柄 1986　佐藤 1992）。ほとんどの石器類が鉄石英・玉髄・チャート・頁岩等の在地性堆積岩を素材としており、サヌカイト製の石器は僅かに 2 点、0．2%あるに過ぎない。堆積環境の悪さから、縄文期の資料との分離は問題がある。

サヌカイト製の石器 2 点は、いずれも剥片素材の横長剥片石核である（図 121）。石核素材剥片の側縁に剥離作業面を設定し、表裏から目的剥片を生産している。

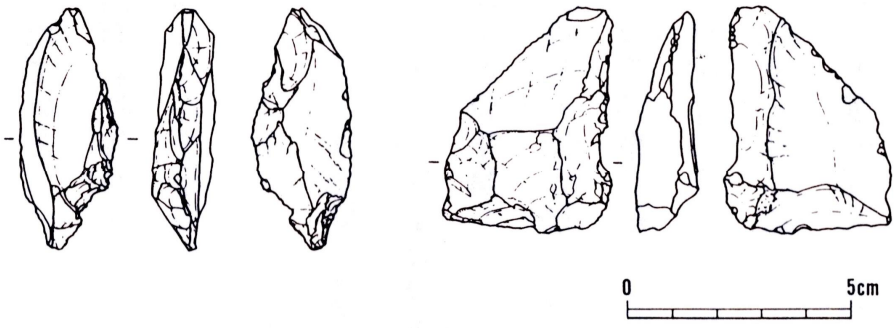


図 121　溝口遺跡のサヌカイト製石器（山下他 1986）

平城宮左京下層

平城宮左京下層（松沢・佐川 1989）では 794 点の石器群が出土し、ナイフ形石器を定型石器として有している。全てがサヌカイト製である。ナイフ形石器は縦長剥片の側縁を調整し

た極小のものが中心で、剥片剥離技術も石核素材剥片の小口部に打面を設定した縦長剥片剥離技術で、横長剥片剥離技術は認められない。

桜ケ丘第一地点遺跡

桜ケ丘第一地点遺跡（松藤・佐藤 1984）では、姶良Ｔｎ火山灰ガラスを包含するⅡ層の下のⅢ層からサヌカイト製石器群が出土している。国府型ナイフ形石器・翼状剥片・楔形石器・削器があり、翼状剥片石核・盤状剥片石核なども伴う。

野原早風Ａ地点遺跡

野原早風Ａ地点遺跡（平井 1979）ではナイフ形石器・台形様石器・掻器・削器・楔形石器・石斧を組成する石器群が出土している。黒曜石・安山岩・石英・水晶・流紋岩など多様な石材を使用している。縦長または不定形の剥片を塊状石核から生産する技術を基盤としている。僅かにサヌカイト製と考えられる石器が共伴し、翼状を呈する横長剥片も存在するという。

冠高原Ｄ地点

冠高原Ｄ地点（妹尾 1989）では、姶良Ｔｎ火山灰下から 965 点の石器群が出土し、台形様石器・錐状石器・掻器・削器・加工痕有剥片・使用痕有剥片などを組成している（図 122）。全てが冠高原産出のサヌカイト製である。冠高原Ｄ地点では、ナイフ形石器を組成せず、台形様石器が主体となっていることが注意される。台形様石器は、横長または不定形剥片を素材とする。石核や接合資料からは、剥片素材の横長剥片石核から横長剥片を生産した痕跡に

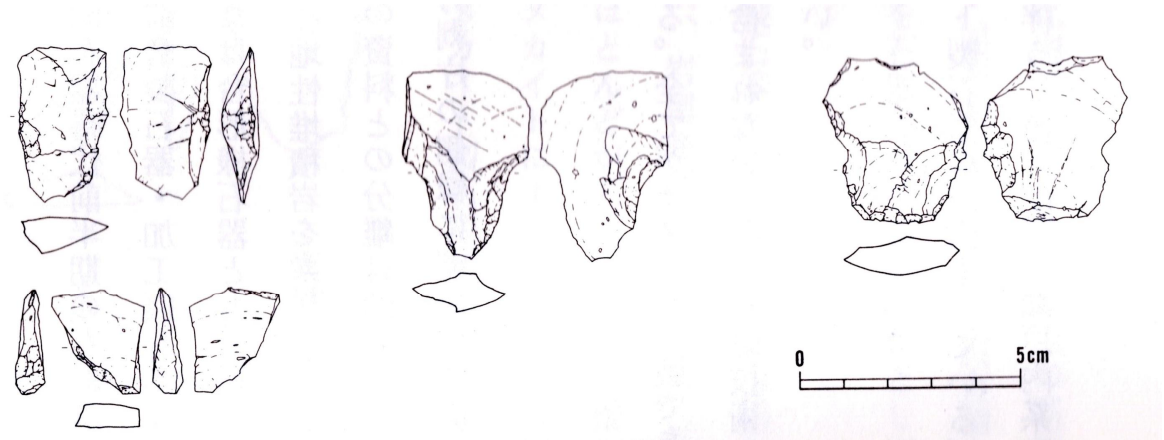


図 122　冠高原Ｄ地点の安山岩製石器（妹尾 1989）

乏しく、円盤状石核や塊状の石核から不定形に剥離された剥片を選択的に使用した可能性が考えられる。

4、後期旧石器時代前半期の石器群の一様相

ある石器群に特殊な石材の石器が存在する場合、それをめぐる考古学的仮説は多数におよ

ぶことが知られている（小野 1988）。石器が持ち込まれたのか原石なのか、直接採集をしたのか間接的な入手だったのか、その行為者は誰かなどである。本稿で検討した遺跡はサヌカイト製石器を出土してはいるが、その様相は多様であった。個々の石器群の由来では解釈が分かれるであろうことは間違いない。本稿では、近畿地方北部・中国山地でサヌカイト製石器群に伴った在地の石器群を、技術形態学的編年作業の「根拠」として、限定的に利用したい。

近畿・中国地方において、層位条件の劣悪で姶良Ｔｎ火山灰以外の鍵層に乏しいという環境から、遺跡間の編年を行うことには非常な困難がある。先に見た遺跡間の先後関係を考察する方法は、従来どおりの技術形態学的な検討に限定される。ナイフ形石器と台形様石器のあり方を材料に、従来の編年に従って検討しよう。

台形様石器のみを主体としたのは冠高原Ｄ地点、ナイフ形石器と台形様石器を組成したのは板井寺ケ谷遺跡・七日市遺跡・溝口遺跡・野原早風遺跡で、板井寺ケ谷遺跡と溝口遺跡での台形様石器の存在は技術的・形態的な安定性・斉一性に乏しい。ナイフ形石器のみを組成するのは平城宮左京遺跡・桜ケ丘第 1 地点遺跡である。サヌカイト製の石器群は桜ケ丘第 1 地点・平城宮左京・冠高原Ｄ地点で認められ、板井寺ケ谷遺跡では在地石材製石器群と拮抗、七日市遺跡・溝口遺跡・野原早風遺跡では僅かが他石材製石器群に共伴している。サヌカイト製石器群のみを注目すると、冠高原Ｄ地点では台形様石器、板井寺ケ谷遺跡・七日市遺跡では台形様石器とナイフ形石器、溝口遺跡では横長剥片石核、野原早風遺跡では翼状剥片、桜ケ丘第 1 地点・平城宮左京ではナイフ形石器がある。一方、桜ケ丘第 1 地点・平城宮左京・冠高原Ｄ地点を除いた遺跡でサヌカイト製石器群に伴ったチャート等製石器群は、剥片剥離技術の細部や石器組成に違いがあったりするものの、ナイフ形石器と台形様石器を伴ったものである点で一致している。

近畿・中国地方のこれらの遺跡の編年（佐藤 1991、山口・久保・藤田 1991）については、最古の段階に溝口遺跡・冠高原Ｄ地点、次に七日市Ⅱ文化層・野原早風遺跡、約二万五千年前（放射性炭素測定結果）に板井寺ケ谷遺跡下層、やや新しく七日市Ⅲ文化層、姶良Ｔｎ火山灰降灰以前のそう古くない時期に平城宮左京、直前に桜ケ丘第 1 地点を推定することでは、ほぼ一致しているので、サヌカイト製石器群とその他の在地石材製石器群との共伴は、全時期を通して認められることになる。二上山や冠高原のような原石産地に近い遺跡ではサヌカイト石材に占有され、遠隔地においてもサヌカイト製石器が主体・客体であるかの違いがあるものの出土することは、興味深い事実として指摘しておきたい。板井寺ケ谷遺跡は二上山まで約 80km、岩屋では約 40km、野原早風遺跡では讃岐まで約百キロメートルである。

瀬戸内系旧石器のうちで、近畿地方中央部・瀬戸内地域にある姶良Ｔｎ火山灰降灰以前と考えられている遺跡は、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を有する桜ケ丘第 1 地点が直前に推定できるだけある。平城宮左京遺跡では瀬戸内系旧石器文化伝統の範疇に入る石器は認められず、近畿地方中央部にあって特異な存在となっている。瀬戸内系旧石器分布の集中する

地域では、今のところ後期旧石器時代前半期の様相を十分に検討することはできない。近畿

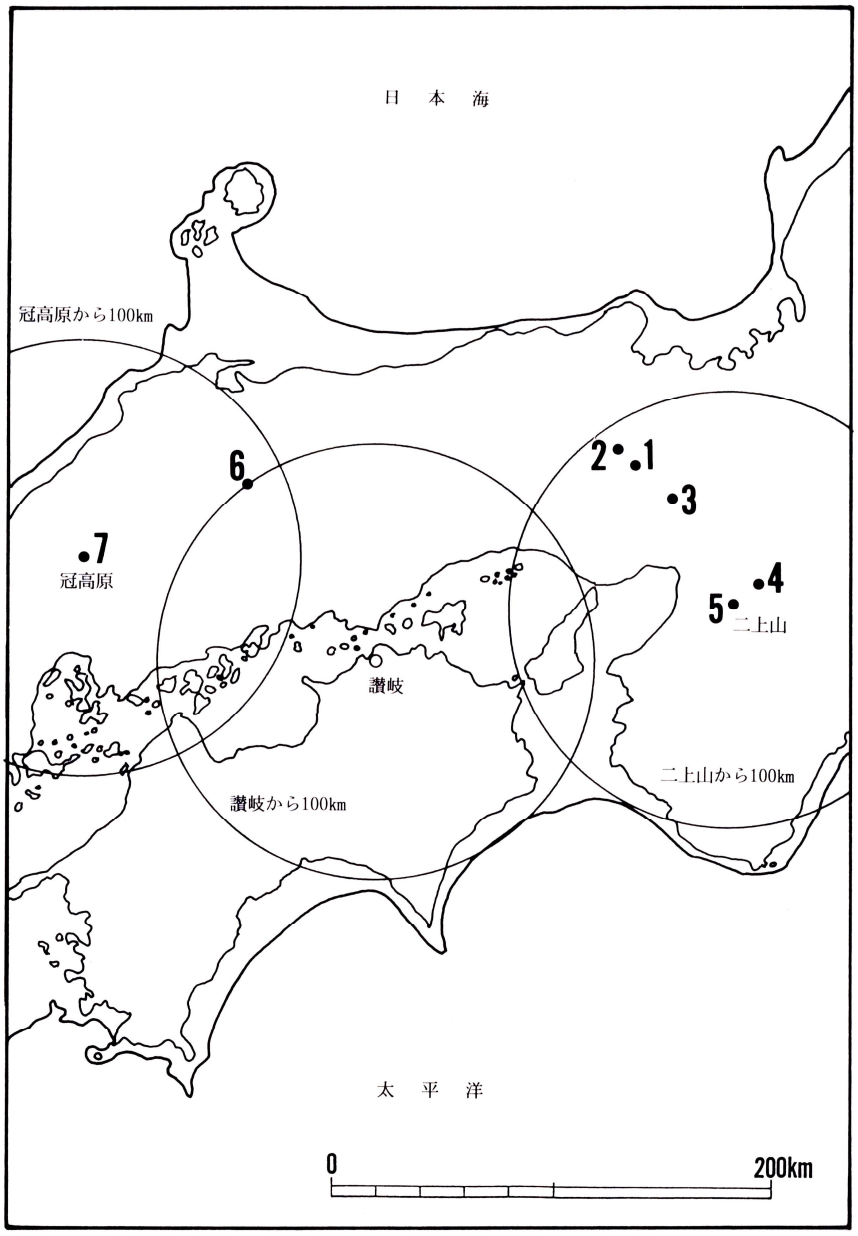


図 123　遺跡分布図　1：板井寺ヶ谷　2：七日市　3：溝口　4：平城左京
5：桜ヶ丘第 1 地点　6：野原早風　　7：冠高原Ｄ地点

地方北部と中国山地の資料から推測するに留まるだろう。

次にサヌカイト石材と瀬戸内系旧石器文化伝統の関係を検討してみよう。中国山地内で最古の段階に位置付けられる冠高原Ｄ地点では瀬戸内系横長剥片剥離技術の存在は明瞭ではなく、ナイフ形石器が欠落して台形様石器が組成する。言い替えると、サヌカイト原産地にありながら瀬戸内系旧石器とは簡単には見なす訳には行かない。一方溝口遺跡では瀬戸内系横長剥片石核があり、その他の石器組成が不明確であるものの、従来の編年案が正しいとする

限り、瀬戸内系旧石器伝統の起源が後期旧石器時代前半期初頭にまで遡り得る可能性を示唆する。冠高原Ｄ地点との関係では、溝口遺跡に在地石材石器群のナイフ形石器があることから先後関係があると考えるか、近畿地方周辺と中国山地内ですでに地域的様相の違いが生じていると考えるか、いずれかの可能性があろう。溝口遺跡の横長剥片石核の形状は後出の感が強く、また最近大阪府では姶良Ｔｎ火山灰下で台形様石器を組成しナイフ形石器が欠落する遺跡があるといわれており、近畿地方中央部でさらに時期を遡り得る段階がある可能性が高く、とりあえず先後関係を推測しておきたい。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層では、サヌカイト製の石器群とチャートを主とする石器群が拮抗して存在するが、両者は石器形態・器種組成や技術基盤を異にすることが明らかである。この両者が同時と考え得るならば、板井寺ケ谷遺跡下位文化層では、異なった石器文化伝統が共存していることになる。板井寺ケ谷遺跡の台形様石器は、サヌカイト製とチャート製では、形態・製作技術共に異なっており、器種毎の技術的共通性よりも同石材石器群のナイフ形石器等との技術的共通性が高く、サヌカイト製石器群と一体となっていると見られる。サヌカイト製石器群は、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を極相とする瀬戸内系旧石器文化伝統（山口 1983）の中にあるのは明かであり、一方にチャート等製石器群は近畿地方北部から中国地方にかけて分布する「中国山地系」石器群の範疇にあると考えられる。野原早風遺跡でも翼状を呈する横長剥片があり、この段階で近畿地方中央部と瀬戸内海地方に瀬戸内系旧石器文化伝統の存在を推定するのは妥当なところであろう。板井寺ケ谷遺跡下位文化層では、国府型ナイフ形石器はないものの、接合資料や翼状を呈する剥片・石核類から、瀬戸内技法の成立過程を伺うことが可能である。また、瀬戸内系石器群に遠隔地での石器生産を意図したサヌカイト石材供給の戦略化が存在する可能性が高い。当該期の遺跡を近畿地方中央部・瀬戸内地域で検出し、原石産地からの近遠相互の補完的関係を明らかにする必要がある。一方、七日市遺跡では、サヌカイト製石器群に瀬戸内系旧石器文化伝統としての特徴に乏しく、板井寺ケ谷遺跡と至近にありながら様相の違いを見せており、異なった石器群の領域での客体としての異系統石材の一つのあり方を示していると考えられる。

地域性の発現・健在化の時期について考えておこう。一般に地域性は、後期旧石器時代後半期初頭の段階に汎日本列島的に顕在化したと考えられている（佐藤 1992）。しかし本稿では、瀬戸内系旧石器の地域的特色の発現は後期旧石器時代前半期のサヌカイト石材に地域適応した瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統（山口 1988）とナイフ形石器の生産開始の時期にまで遡り、近畿地方中央部・瀬戸内海地域での当該期遺跡を示すことはできないものの、板井寺ケ谷遺跡下層を念頭に考えると、その地域性の顕在化は前半期にすでに顕在化していたと推定した方がよいと考えられた。この地域性発現と顕在化は、石材供給の社会システムへの組み込み戦略化と石器生産技術の特化が構造化したものである点で、他の地域の石器群とは異なっていると言えよう。他の地域の地域性発現と顕在化が遅れるのは、これらの誘因を欠いたからではなかろうか（山口 1991）。

姶良Ｔｎ火山灰降灰直前には、桜ケ丘第１地点例に代表されるように近畿地方中央部で国

府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が存在し、近畿地方中央部・瀬戸内海地方に分布する瀬戸内系旧石器文化伝統が極相を迎えたことを示している。平城宮左京遺跡は、石器群の技術形態学的に他遺跡との比較が困難なほど相違した石器群でありながら、近畿地方中央部に存在する。平城左京下層遺跡はサヌカイト製であることから瀬戸内系旧石器との異質さが強調されているが、異系統の石器群が異なった石器群の領域に突然出現したということでは、中国山地系石器群の領域にある板井寺ケ谷遺跡のサヌカイト製石器群と同じ様な存在であると言い得るかも知れない。国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法という遠隔地でのサヌカイト石材による石器生産の確保のための石器生産技術は、原石産地から最も合理的な形状で石材を運ぶことを石材戦略として埋め込まれたものである（山口 1983）。この時期以降、瀬戸内系旧石器は遺跡数を増大させた可能性が高く、姶良Ｔｎ火山灰降灰以後の遺跡が近畿地方中央部・瀬戸内海備讃瀬戸地域・冠高原などの遺跡密集地域を形成させた可能性が高いと考えられよう。

以上、従来の編年案に従ってサヌカイト製石器群を整理してみた。本稿の検討の結果、仮説的に提示される瀬戸内系旧石器の主分布域での石器群の変遷は次のようになる。

１，後期旧石器時代前半期初頭に原石産地周辺でサヌカイト石材の開発が開始されるが、ナイフ形石器の組成が顕著でなく、汎日本的な初期の台形様石器中心の石器群としての様相が強い段階。冠高原Ｄ地点が上げられる。本来特定の石材への拘りはなく、サヌカイト石材の開発はいわば偶然的であったと考えられ、石材への石器生産技術の特化は認められない。いつからサヌカイト石材の開発が始まるか、二上山・讃岐・冠高原、その他の産地で、大きくばらつきがあると推定されよう。

２，台形様石器中心の石器群と共伴して、剥片素材の石核から生産される横長剥片を素材とするナイフ形石器が出現する瀬戸内系旧石器の成立期。溝口遺跡が考えられるが、横長剥片石核の形状が完成され過ぎており、その位置付けには問題がある。

３，主要石器としての地位をナイフ形石器に明け渡しつつある台形様石器が、ナイフ形石器の瀬戸内系横長剥片剥離技術と同様の技術基盤で生産される段階。板井寺ケ谷遺跡が代表として上げられ、この時期にはすでにサヌカイト製石器群の石材供給が石材産地からの近遠周期移動を前提としたもの（山口 1991）になっていた可能性が高く、サヌカイト製石器への地域集団的石器製作技術と社会の構造が一体化していると考えられる。野原早風遺跡例によって、瀬戸内海備讃瀬戸地域にも同様の可能性が推定できる。

４，国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が成立し、瀬戸内系旧石器文化伝統の極相を迎えた時期。二上山を中心とした地域では、桜ケ丘第１地点下層がこの時期に位置付けられよう。瀬戸内海備讃瀬戸地域・冠高原では今のところ同時期の遺跡は明かではない。姶良Ｔｎ火山灰降灰後、国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法が日本列島各地で発見される時期があり、後期旧石器時代後半期初頭には、瀬戸内系旧石器文化の「膨張」または「拡散」の時期があったことが知られている。この段階の遺跡が近畿地方中央部・瀬戸内海地域・中国山地内冠高原などでの分布集中を形成したと考えられる。

この石器群の変遷は、瀬戸内系旧石器本来の資料によって把握されたものではなく、従来の型式学的・編年的研究成果とは一部矛盾している。現時点ではあきらかに限定的・仮説的な段階に留まっていることを再び明記しておく。

5、おわりに

従来の編年案は、いずれも中国山地系石器群の技術形態学的検討の結果と汎日本的な編年網との比較によって成り立っている。近畿地方中央部・瀬戸内地域での当該期の遺跡が明らかになっていないので、サヌカイト製石器群または瀬戸内系石器群を直接編年網に対比した訳ではなく、極めて間接的な検討であるに留まっている。本稿で仮説的に描いた瀬戸内系旧石器の変遷の細部は、中国山地系旧石器の編年の修正によって容易に改変され得るであろう。

今後早い時期に、近畿地方中央部・瀬戸内海地域で当該期の遺跡によって直接編年を組み立てることが可能になり、直接瀬戸内系旧石器の変遷を描けるようになることを期待したい。そうなれば、逆に中国山地石器群の編年の修正が行われ、相互検討が可能でより精密な議論を期待できる環境が整備されよう。その中で、瀬戸内系旧石器が汎日本的に考えても特異性のある石器群であることが明らかになるだろうと考えている。

現状においては、近畿地方での検討可能遺跡は僅かで、先進地域との研究条件の優劣は明かではあるが、全国的な石器群の対比に見られる「ひずみ」も、研究の進展に従って、次第に実態に即して補正していくことができるのであろう。

本稿では、西南日本における後期旧石器時代前半期の様相、特に瀬戸内系旧石器の出現過程とその変遷を仮説的に提示することに絞って作業を行った。地域性発現の構造と石器石材供給、集団間関係、特定形態の石器器種の消長など、この段階で触れねばならない多くの問題を論じていない。これらについては機会を改めて再論したい。

第７節　近畿地方台形様石器群の一様相

－板井寺ケ谷下位文化層の台形様石器－

はじめに

近畿地方における台形様石器群の存在は、近年近畿地方において幾つかの遺跡で後期旧石器時代前半期の石器群の検出が相次いだことにより、漸く注目されるようになってきたが、依然として個々の遺跡での台形様石器群の存在を指摘するに留まっている段階といえる。研究の遅れは、近畿地方における土壌堆積環境の劣悪さが石器群編年を困難とし、また遺跡発見のアンバランスさが大きく影響しているのであろう。

後期旧石器時代前半期の編年案が幾つか提示（松藤 1992b、佐藤宏之 1989、山口 1993 など）されており、台形様石器群が先行する石器群との関係が予測される存在と考える佐藤宏之氏の見解（佐藤 1988）を受け入れている。初期ナイフ形石器の石器群とともに後期旧石器時代前半期の石器群を評価する上で重要な器種であるとする点では共通の認識が生まれつつあるが、一方では台形様石器という「器種」を、それぞれの遺跡でどう判別するかといった、研究上の基礎レベルでの齟齬も発生しており、台形様石器の認定やその背後の石器群の「二極構造」（佐藤宏之 1989）を含めると、多様な立場の表明とならざるをえない現状であろう。近畿地方の「台形様石器」は、技術形態学的・型式学的に定型化・安定化した「器種」として存在する気配に乏しく、各遺跡の石器群から型式学的「操作」として抽出されるいわば概念的器種であるという点（山口・久保・藤田 1992、竹岡 1993）に原因が求められよう。台形様石器群に当該期近畿地方における当該期の様相を理解する上で、個々の遺跡での台形様石器群のあり方を把握することが、まず進められるべき作業として求められよう。

筆者は、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の石器群を報告した（山口他 1991）が、技術形態学的・型式学的まとまりを欠く「台形様石器」の認定を慎重にしたため、既存の器種分類を重視したため台形様石器群に対する記述が十分ではなく、またその抽出にも問題を残していた。本稿では、さらに高度な社会構造論的操作を必要とする「二極構造」論や地域社会自体をめぐる議論は避け、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の台形様石器群のあり方を考えた場合、石器群がどの様な基盤に依拠しているか、地域石器群の成立はいつ認められるかを主に考えてみたい。

１、板井寺ケ谷下位文化層の台形様石器群

ａ、板井寺ケ谷下位文化層の台形様石器

板井寺ケ谷遺跡下位文化層からは、合計 2,353 点の石器群が出土している。礫石器類と原石破砕片を除いたうちの 976 点がサヌカイト製、1,340 点がチャート等製である。放射性炭素年

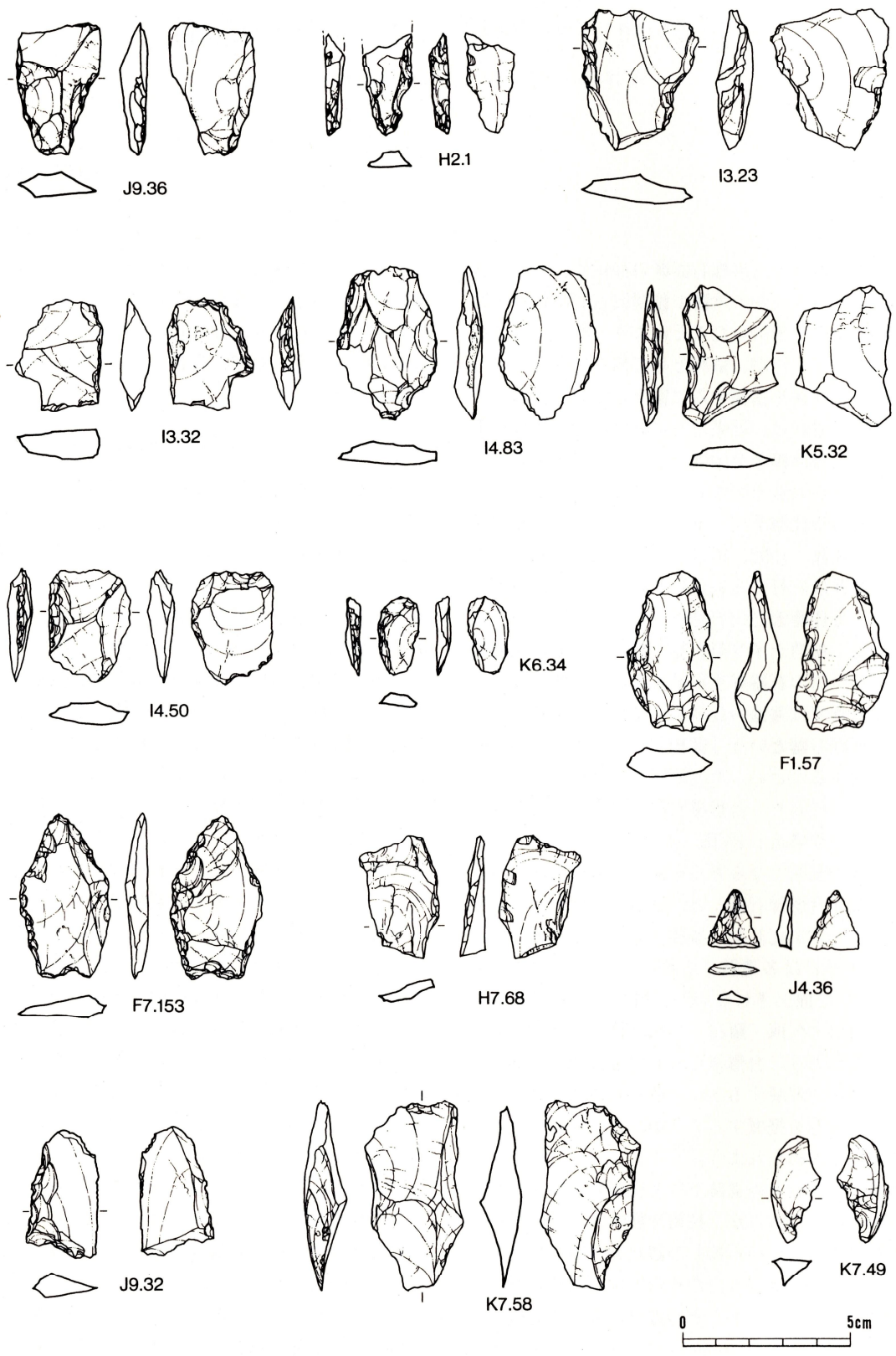


図 124　台形様石器実測図（サヌカイト）1

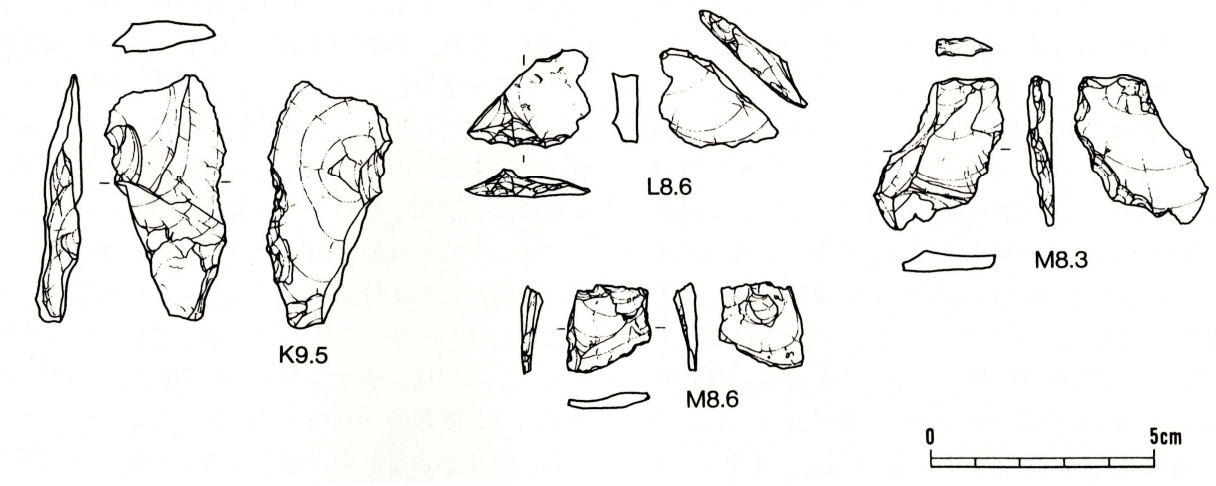


図 125　台形様石器実測図（サヌカイト）2

代測定法によれば、約 2,5000 年前の結果を得ている（山田 1991）。板井寺ケ谷遺跡の報告書（山口編 1991）では、台形様を呈する石器群に加工部位や加工技術に斉一性が無く、形態的な変異が激しいことから、従来の器種分類を優先し、台形様石器として器種分類を果たしていない。これら台形様石器の形状と調整技術が、ナイフ形石器や削器などの形状と整形技術に、ほとんど差異が無いのである。報告書では、台形様を呈する石器は、サヌカイト製ナイフ形石器に 2 点、サヌカイト製削器に 6 点、サヌカイト製加工痕有剥片に 10 点、チャート製ナイフ形石器に 3 点、チャート製加工痕有剥片に 6 点が含まれていることを、個々の器種の記述の中で記載したに留まる。

ここで台形様石器・台形様を呈する石器を観察する。サヌカイト製のものと、チャート製のものを分けて記載する（図 124-126）。実測図は、報告書所収のものと同じであるため、必ずしも台形様石器正位の主軸と展開とはなっていない。

サヌカイト製のものには、疑問のあるものも含めると合計 18 点がある（図 124・125）。

報告書でナイフ形石器に分類されたのは、2 点である。J9.36 は、ポジティブな底面を持った横長剥片を素材としている。右側縁下半部にやや緩い角度の加工を施し、左側縁では素材剥片の打面を折断し、切断面から角度の浅い加工が表面下半部広くに施される。刃部は主軸にほぼ直交する。報告書ではナイフ形石器に分類しているが、本遺跡出土の中で、もっとも台形様石器として「整った」形態的属性を認める。H2.1 は、両側縁に急角度の加工を施して基部を整形したもので、台形様石器基部の可能性がある。

削器に分類されたのは、6 点である。I3.23 は、表面にポジティブな底面を有する素材剥片の末端に加工を施したもの。I3.32 は、自然面を打面とした素材剥片の左側縁から末端側縁裏面に調整を施したもので、右側縁が刃部となる。I4.50 は、素材剥片の打面部を折断し、左側縁に浅い角度の調整を施したもの。素材剥片末端が刃部となる。I4.83 は、自然面を打面とし

た素材剥片の末端側縁表側に調整を施したもの。K5.32 は、素材剥片の打面部を急角度の調整によって除去したものである。K6.34 は、小型の横長剥片を素材とし、素材剥片末端に調整を施したものである。

加工痕有剥片に分類されたのは、10 点である。F1.57 は、横長の素材剥片の左半に深い平坦加工を施したもの。F7.153 は、横長の素材剥片の打面部側縁と右半の裏面に浅い調整を加えたもの。H7.68 は横長剥片を素材とし、素材剥片の打面部折断・末端の加工を施したもの。J4.36 は、剥片末端に調整を加えた先端部断片の可能性のあるもの。J9.32 は、横長剥片を素材とし、素材剥片打面部と左半を折断、浅い平坦加工を施したものである。K7.58 は、素材剥片の打面部側縁と末端を折断したもの。接合資料（K7S6）で K7.48 と接合する。K9.5 は、横長剥片の末端側縁裏面中央に整わない加工を施したもの。L8.6 は、素材剥片打面部を折断し、末端に加工を施したものである。M8.3+M8.4 は、素材剥片の打面部の一部を折断し、右側縁裏面を調整したものである。M8.6 は、小型の横長剥片を素材とし、両側縁に折損が認められる。

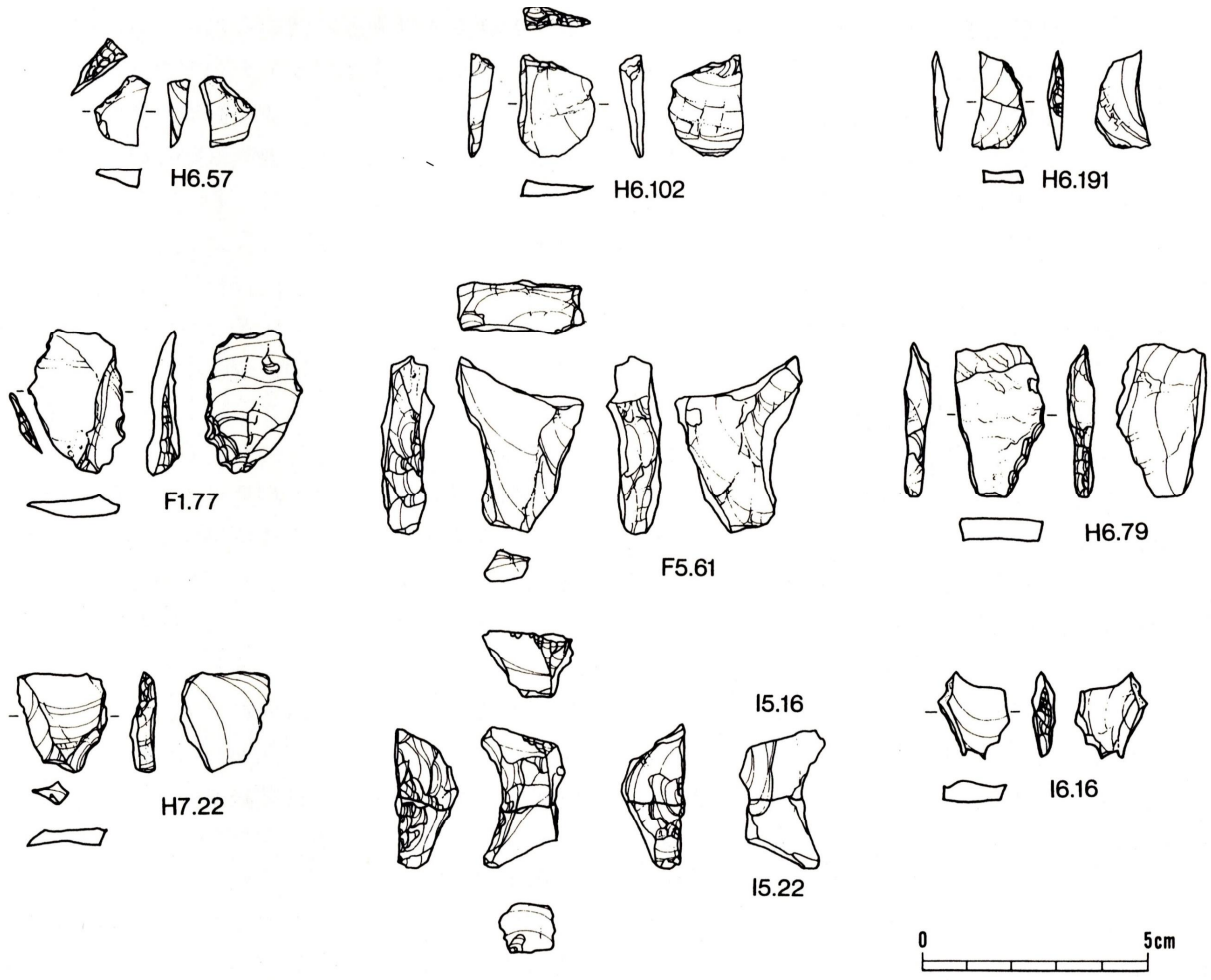


図 126　台形様石器実測図（チャート）3

チャート製のものには、疑問のあるものも含めると合計９点がある（図 126）。

報告書中でナイフ形石器に分類されたものは、３点ある。H6.57 は、貝殻状小型の素材剥片の打面部左側縁に調整を加えたもので、右半が折損している部分を切断加工と見なせば、台形様石器とも見なせる。H6.102 は、縦長剥片の上半部を急角度のブランティング加工によって成形したもので、素材剥片末端には加工は施されない。H6.191 は、素材剥片の上半を折損し、下半部側縁の約半分に急角度の調整を施したもので、折断とブランティング調整による台形様を呈する。

加工痕有剥片に分類されたのは、６点ある。F1.77 は、縦長剥片を素材とし、基部裏面の左右両側縁に調整を施したもの。F5.61 は、厚手大型の素材剥片末端を折断、打面部を急角度に加工して除去したもの。H6.79 は、素材剥片の上半を折断、末端に調整を施したもの。H7.22 は、縦長剥片を素材とし、上半を折断し、切断面に加工を施したもの。I5.16+I5.22 は、両側縁を急角度の調整によって整形したものである。I6.16 は、素材剥片末端裏面に細かい加工を施したものである。

台形様石器・台形様石器と見なせる石器の形状には、形態的・技術的斉一性に乏しく、むしろ既存の「器種分類基準」と馴染みがよい。素材剥片の形状も多様である。一定の加工手続きが必ず踏まれるものを抽出するには、個別的技術属性の具有差が激しい。先に記載したすべてを台形様石器として器種分類することには不安がある。台形様石器の主要な調整技術とされる平坦剥離（佐藤 89）は削器の調整と、後出加工法とされる急角度の加工はナイフ形石器と、サヌカイト製石器群における折断技術は単なる折損や原石産地から離れた遠隔地でのリダクションと連続した技術である。石器の形状が特に整った台形様を呈しないものにつ

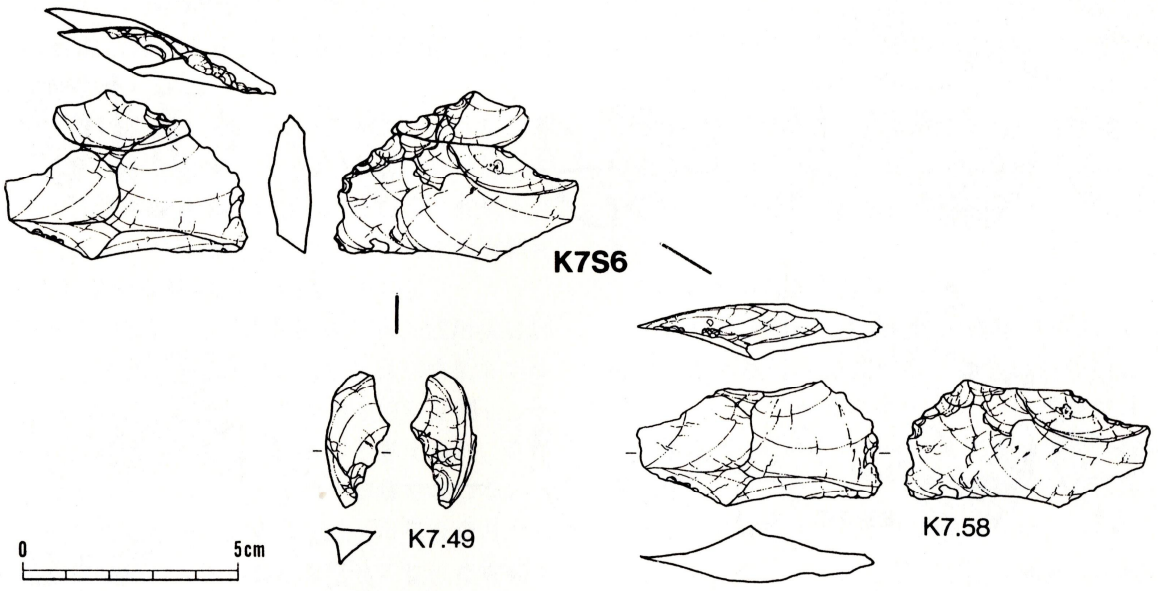


図 127　サヌカイト製台形様石器接合実測図

いては、それぞれ削器やナイフ形石器、使用痕があるだけの剥片として分類したほうが、器種分類の一貫した基準を保ちやすいのである。ここで合計 27 点を取り上げたものには、個々の形状のみの観察で抽出したものであり、既存の「器種」中においたほうが、かならずしも異質感のないものが多く含まれる。あくまで概念的器種として抽出したのであり、すべてを定型的「器種」としての台形様石器と分類しているわけではないことを明記しておきたい。

27 点を観察すると、まずサヌカイト製が 18 点に対しチャート製 9 点とサヌカイト製のものが多い点が注意される。両者には調整加工に相違があり、サヌカイト製には平坦加工を施したものはあるが、チャート製には認められず、急角度のブランティングが施されている。折断加工は両者に認められる。素材剥片の生産は、サヌカイト製に表面にポジティブな底面を有する横長剥片素材のものがあり、多くが横長剥片を素材としているに対し、チャート製のものは縦長剥片や貝殻状剥片・厚手剥片などを素材とし、素材剥片生産技術には違いがあることを窺わせる。

b、台形様石器の個体別・接合資料

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の台形様石器・台形様を呈する石器のいくつかは、遺跡内で接合し、複数接合資料の中に組み込まれることにより、生産技術の一端の把握が可能となったものがある。特にチャート製石器群では、個体識別の容易さから多数の接合資料があり、台形様石器・台形様を呈する石器を含む接合は 3 例あり、2 例は多数接合資料である。また、同一の母岩・個体から生産された組成が把握されたことにより、石器生産内容が把握できる。一方、サヌカイト製石器群では、ほぼ個体識別が不可能で、1 例の接合資料を得たにす

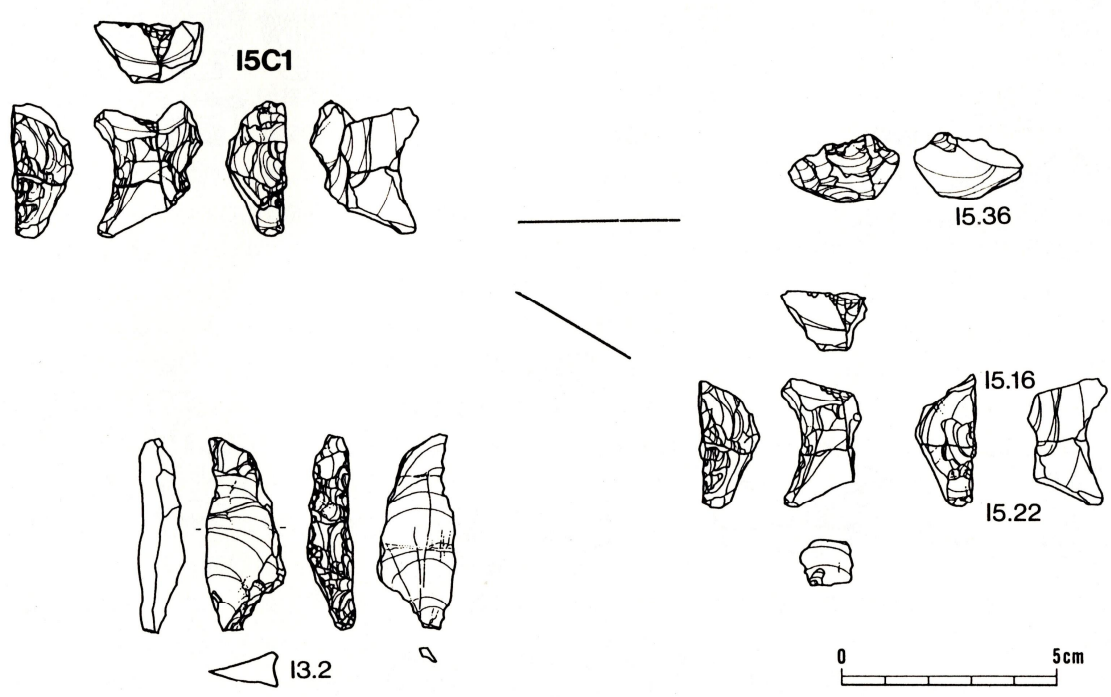


図 128　チャート製個体別資料 NO,39　台形様石器接合実測図

ぎず、内容把握には困難がある。ここでは接合資料・個体別資料を観察する。

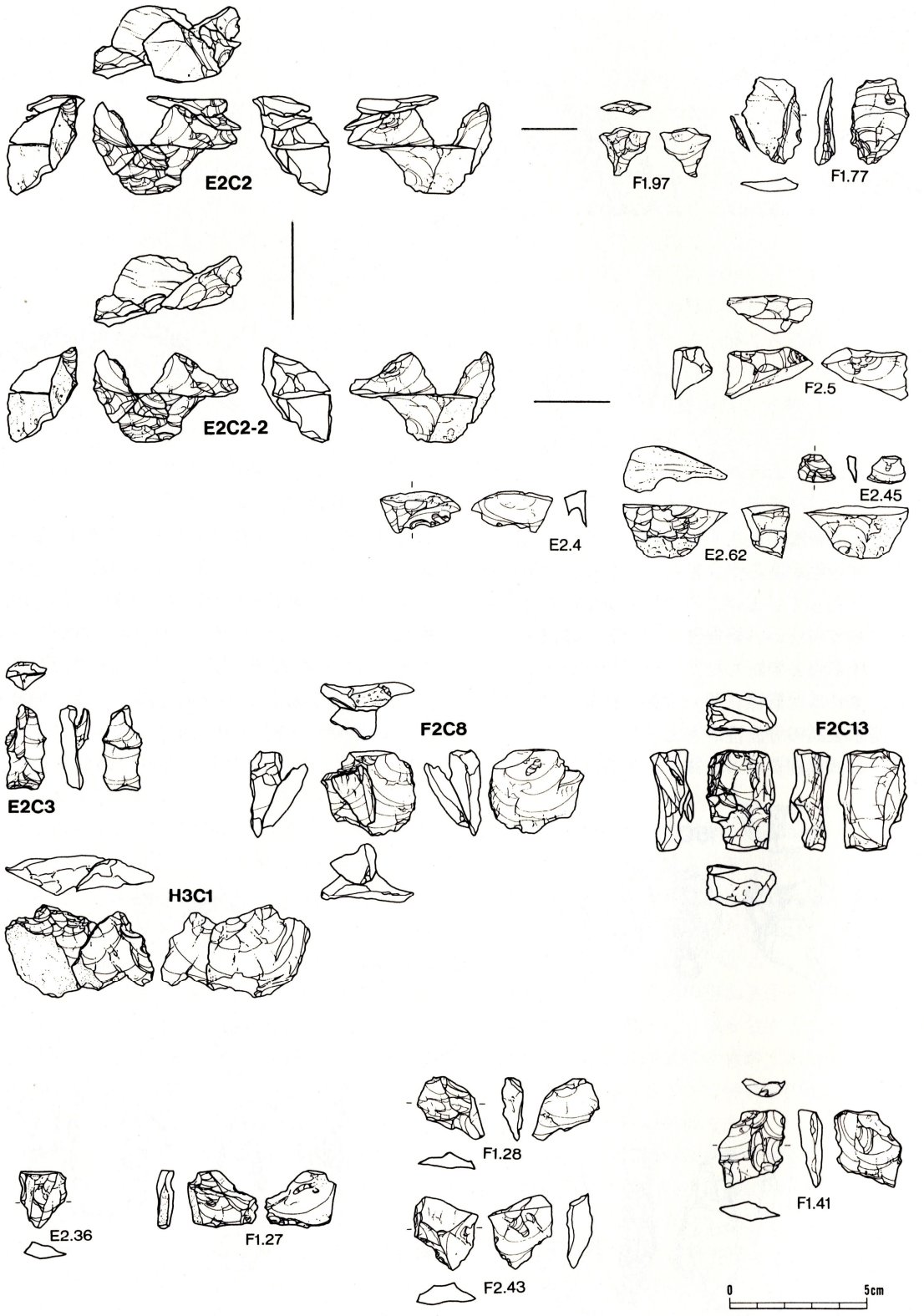


図 129　チャート製個体別資料 NO,59　台形様石器接合実測図

サヌカイト製接合資料 K7S6（図 127）は、K7.58（報告書では加工痕有剥片に分類）に K7.

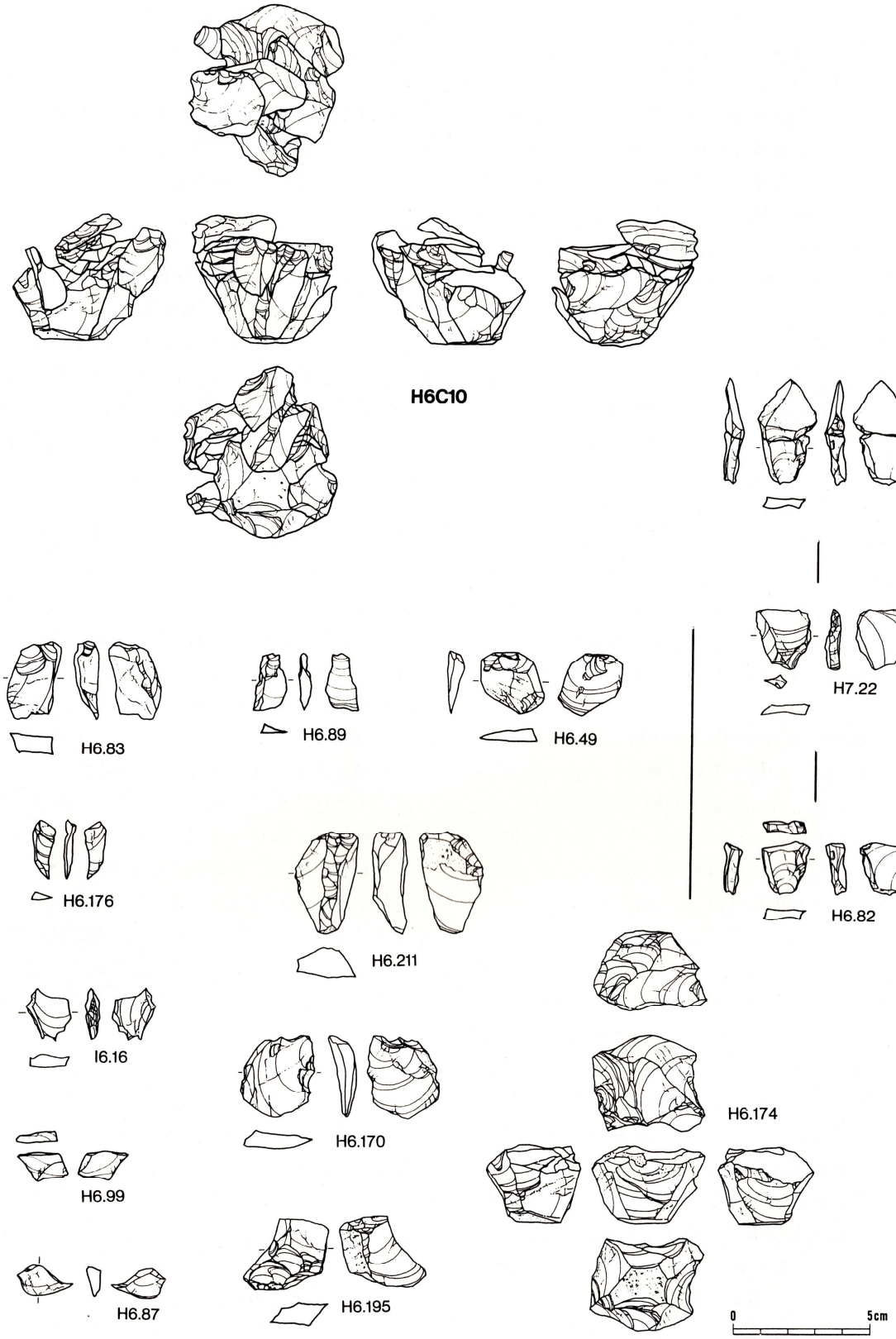


図 130　チャート製個体別資料 NO,106　台形様石器接合実測図　1

49（加工痕有剥片断片）が接合する。大型の剥片の右側縁裏面に削器状の調整を加えた後、裏面に加撃して K7.49 を剥離、続いて表面を加撃して 1 枚の剥片を剥離したものである。この 2 枚の剥離が大きく行われることから折断整形の工程の可能性があるが、先行した削器状の調整をほとんど取り去ってしまい、その他の調整加工は新たに行われていない。報告書では削器の破損または再調整や石核転用と判断したが、折断的な調整加工や形状を重視すれば台形様石器の調整工程資料として、台形様石器未製品の可能性が考えられる。このような折断工程の接合資料は興味深い。

チャート製個体別資料 NO.39（図 128）は、ナイフ形石器 1 点・加工痕有剥片 4 点・使用痕有剥片 1 点・剥片 1 点からなり、接合資料 1 例（I5C1）を含む。接合資料 I5C1 は加工痕有剥片 2 点と剥片 1 点からなる。加工痕有剥片 I5.16 と I5.22 は急角度の加工をほぼ全周囲に施した石器で、鼓形を呈する。これに調整剥片 I5.36 が接合する。ナイフ形石器または台形様石器の再生工程の接合資料と考えられる。本来の刃部は調整剥片 I5.3 以前に失われており、いずれかを決せないが、失われた刃部を考慮しても、ナイフ形石器としては異質である。個体別資料№39 には接合しないがナイフ形石器 I3.2 があり、この接合資料 I5C1 の急角度の加工と共通する。

チャート製個体別資料 NO.59（図 129）は、接合資料 5 群 14 点と非接合資料 17 点からなる。内訳は加工痕有剥片 2 点、使用痕有剥片 6 点、剥片 17 点、砕片 4 点、石核 2 点である。台形様石器と見なせる加工痕有剥片 F1.77 を含む接合資料 E2C2 が注目される。

接合資料 E2C2 は、加工痕有剥片 1 点、使用痕有剥片 1 点、剥片 2 点、砕片 1 点、石核 1 点の合計 6 点からなる。拳大の亜円礫を幾つかの単位に分割し、単位個々に剥片剥離を行った

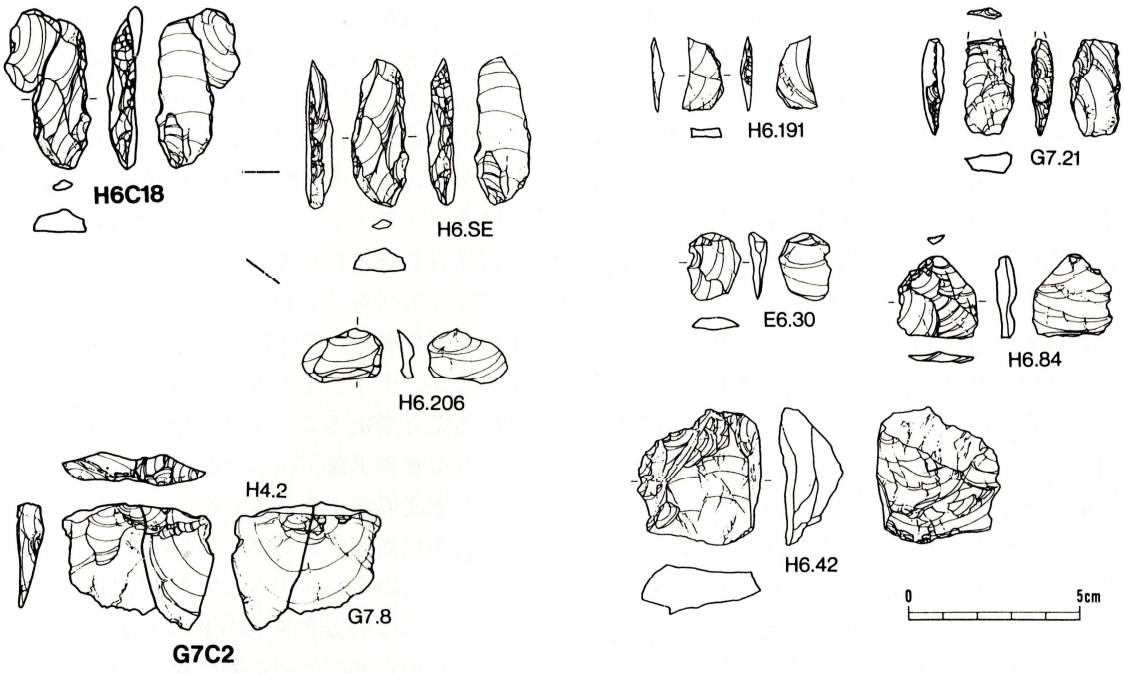


図 131　チャート製個体別資料 NO,106　台形様石器接合実測図　2

ものと考えられ、自然面や節理面を打面として２～３枚の剥離を行い、剥離作業面を変えながら作業を進行した接合資料である。分割後初期に台形様石器とみなせる加工痕有剥片 F1.77 が剥離されている。F1.77 は縦長で、以後の生産剥片よりも形の整った大形となっている。

個体別資料中には、幾つかの分割単位で剥片生産が進行し、幾つかの接合資料が得られている。また一部には微細な加工痕や使用痕を伴う剥片があるが、ナイフ形石器や掻器・削器といった定型石器は組成していない。

チャート製個体別資料 NO.106（図 130・131）は、接合資料４群 19 点、非接合資料７点、内訳ナイフ形石器３点、削器１点、加工痕有剥片３点、剥片 16 点、砕片２点、石核１点からなる。このうちナイフ形石器１点と加工痕有剥片２点が台形様石器とみなしうる。加工痕有剥片２点が接合資料 H6C10 に含まれる。

接合資料 H6C10 は、削器１点、加工痕有剥片２点、剥片９点、石核１点の合計 13 点からなる。個体に属する他の資料もこの接合資料の前半の工程に位置づけられると考えられる。良質の５～６㎝大の板状亜角礫の分割材を素材とする。作業の進捗に合わせて作業面と打面を移動し、前期には縦長剥片が、後期には貝殻状剥片が生産される。接合資料 H6C18 のナイフ形石器 H6.SE は最初期に生産された縦長剥片を素材とする可能性が高い。後半初めには貝殻状の剥片を続けて生産し、一点を分割して台形様石器（報告書では加工痕有剥片）H7.22 を生産している。H7.22＋剥片 H6.82 は折断工程の接合で、切断面に僅かに調整を施している。やや不定形な貝殻状剥片１点は削器 H6.195 となる。終末には、極小貝殻状剥片が生産され、１点が台形様を呈する加工痕有剥片 I6.16 となっている。

個体別資料 NO.106 は、接合資料 NO.106 を核とし、初期を除いてほぼ一貫した工程の資料を残している。ここでは、ナイフ形石器と台形様石器の可能性のある石器の両者、削器が生産され、生産剥片の大きさにより何に加工されるかが決せられているように見える点、十分な作業面長の確保できる前半期でナイフ形石器の素材を確保、縮小した時点では台形様石器素材を生産、さらに続いてナイフ形石器・台形様石器の器形整形作業をしている点は注意されよう。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の石器組成（山口編　1991の組成表から台形様石器を分類した組成）

註：原位置を保った石器組成、（　）に台形様石器原位置不明数

TR：台形様石器・台形様を呈する石器　KN：ナイフ形石器　EN：掻器　SC：削器　P：楔形石器　DR：錐状石器　GR：彫器　AX：斧形石器（サヌカイト）　RF：加工痕有剥片　UF：使用痕有剥片　EGAX：局部磨製石斧　CH：礫器　HS：敲石　PS：磨石　AN：台石　F：剥片　C：砕片　CORE：石核　B.C：石核素材　DEB：原石破砕片

石器類	合計	TR	KN	EN	SC	P	DR	GR	AX	RF	UF	EGAX	CH	HS	PS	AN	F	C	CORE	B.C	DEB
全組成	2,353	21(6)	22	19	52	6	4	1	1	53	185	1	5	4	1	1	376	412	160	4	25
サヌカイト	976	17(1)	11	4	22	4	2	1	1	21	100	-	-	-	-	-	558	179	56	0	-
チャート	1,340	4(5)	11	15	30	2	2	0	0	32	85	-	-	-	-	-	818	233	104	4	-

表 12　台形様石器を再定義した石器組成

C、台形様石器の遺跡内分布

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の遺物分布は、湿地部に突出した舌状の陸地部に集中し、ＡからＬまでの石器類ブロックが検出されている。石器類ブロックＡからＦまでが北半、ＧからＪまでが南半に位置する。興味深いのは、サヌカイト製石器群が南半に中心を持ちながらも、ほぼ全ての石器類ブロックに組成するのに対し、チャート製石器群が陸地部北半に集中する点である。ここでは紙幅の関係から再述を行わないが、両石器群の独立・同時存在を窺わせる状況（山口編 1991）であった。

台形様石器と見なせる石器の分布は、サヌカイト製の７点が南半、10 点が北半で検出され、チャート製の９点全てが北半で検出されている。台形様石器の分布は北半に中心があり、サヌカイト製でも北に偏っている。石器類ブロックでは、ブロックＦ周辺でサヌカイト製１点とチャート製６点の合計７点、Ｅａ周辺ではサヌカイト製の５点、Ｅｂ周辺ではサヌカイト製の２点とチャート製の１点の合計３点、Ｉ周辺ではサヌカイト製の３点、Ａ周辺ではサヌカイト製とチャート製各１点の合計２点、Ｈ周辺ではサヌカイト製２点、Ｊａではサヌカイト製の２点が出土し、Ｂ周辺ではチャート製１点、Ｃ周辺とＧ周辺ではそれぞれサヌカイト製１点を検出している。特定ブロックへの遍在は明らかで、北半のＦ・Ｅａ・Ｅｂ周辺に集中する。石器類ブロックＦではチャート製が集中するのに対し、Ｅａではサヌカイト製が集中するなど、ブロック毎の製材別組成の違いもある。台形様石器は、分布の遍在性から推測して、一カ所で集中して生産または使用・管理される可能性がある。

２、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の石器群構造

板井寺ケ谷遺跡下位文化層の石器群は、ナイフ形石器・掻器・削器・楔形石器・錐状石器・斧形石器・局部磨製石斧などを組成する。石材にはサヌカイト製とチャート製の二者があり、組成比率はサヌカイト製約４割、チャート製約６割となり、主要器種の組成ではほぼ拮抗した点数を有しているが、石材重量的には在地石材であるチャート製石器群が圧倒的で、約 14.4ｋｇ、遠隔地石材であるサヌカイトは約 3.6ｋｇに留まる。サヌカイト製石器群は、ナイフ形石器や横長剥片・横長剥片石核の存在から、瀬戸内系旧石器の早い時期の存在と位置づけられる。チャート製石器群は、縦長剥片剥離技術の存在や中国山地内他遺跡との比較から「中国山地系」石器群と位置づけられる。

台形様石器・台形様石器と見なせる石器は、この石器群にどの様に組み込まれているだろうか。抽出した合計 27 点は、形態的・技術的斉一性に乏しく、一貫した分類基準を持ち得ない概念的な操作による器種であるため、報告書では他の定型石器・加工痕有剥片中に含めていた。台形様石器という「機能的」石器（佐藤宏之 1988）であることから、定型的な器種ではなく、分析者の「意図」によって、数量的・個別評価的に、大きく変動しうる余地がある。これらを敢えて台形様石器として再分類し、独立した器種として検討してみよう。な

お、抽出した台形様石器と目されるものの形態的細分類は、先に挙げた型式学・技術形態学的不安定を原因として、より定型的な器種に配されるべきものが多数あるため恣意的な操作となる危惧があり、本稿では行わない。台形様石器・台形様石器と見なしうるものを抽出した下位文化層全体の組成を表 12 に示す。

台形様石器合計 27 点は、ナイフ形石器合計 19 点に対して数量的に凌駕し、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の主要器種の一つとして再評価される。石材別では、チャート製では各 9 点と拮抗するが、サヌカイト製では台形様石器合計 18 点に対しナイフ形石器 10 点とほぼ倍の組成を示すことから、石材別に台形様石器の組成比にはばらつきがあることになり、台形様石器分類以前の組成でのサヌカイト製ナイフ形石器 12 点、チャート製台形様石器 12 点など、主要石器に認められたある程度の拮抗的組成が崩れる。サヌカイト製石器群では台形様石器主体の石器組成となる。

台形様石器の形態には、サヌカイト・チャート両石材の石器群間に大きな違いがある。この原因は調整技術の具有度であり、素材剥片の形状である。サヌカイト製台形様石器の素材剥片は、一部に表面にポジティブな底面を残す横長剥片素材のものがあり、多くが剥片素材の石核から生産された横長剥片、一部が縦長剥片を素材としていると見られる。一方、チャート製台形様石器の素材剥片では縦長剥片や厚手大形剥片・貝殻状剥片など多様な素材を使用しており、剥片素材の横長剥片石核から剥離されたと見られるものは認めにくい。両者の素材剥片生産技術は、それぞれ板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群とチャート製石器群に広く認められるものであり、特に両石材に共通の器種専用の素材剥片生産技術を持っているとは見なせない。台形様石器の形状と加工技術は、この素材剥片の形態の差異を乗り越えた調整技術であり、両者は同じ台形様石器でありながら、その技術基盤の根本で異なっていることが理解されよう。

サヌカイト製台形様石器の素材剥片生産の実態は、サヌカイト製接合資料で台形様石器素材の接合例がないため、製品や横長剥片・石核の形状から技術形態学的に窺うに留まる。サヌカイト原石産地から遠く離れた遠隔地遺跡の特徴として、保持したサヌカイト石材の僅少さ、石器生産工程の異所展開（山口 1991）という制約の結果である。サヌカイト製台形様石器の形態を観察すると、ナイフ形石器ほど整った素材形状ではないが、瀬戸内系ナイフ形石器の素材剥片生産技術とほぼ同様の剥片生産技術の存在を予測しうる。ただ、極小型ナイフ形石器と対応する小型の横長剥片生産技術は無い点は注意される。素材剥片の形態の「ばらつき」は、一見斉一性のない折断や平坦加工・ブランティングといった多様な台形様石器調整加工を施す中で吸収されたと見ることができる。実際、台形様石器の一部はナイフ形石器よりも素材形状の改変度の高いものから、末端に僅かの加工を施しただけのものまで、多様な形状のものがある。サヌカイト製接合資料 K7S6 は、大形剥片素材の打面部側縁を削器状の調整と折断により除去しようとしたものと見られる。

チャート製台形様石器は、二つの個体別資料において台形様石器を含む接合資料があり、その生産技術を具体的に検討することが可能であった。個体別資料 NO.59 は、分割材素材の

小型のサイコロ状石核から貝殻状の剥片を激しい作業面と打面の転移の中で適時剥離するもので、ナイフ形石器素材の生産は行われていない。一方、個体別資料 NO.106 では、ナイフ形石器素材と台形様石器素材が、剥片生産工程の進行の中で作り分けられている。チャート製石器群では、台形様石器の素材は専用の生産技術を持たない点は同様であるが、ナイフ形石器素材剥片の生産とは別に準備されることがあることを窺わせる。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層において、サヌカイトとチャート両石材の台形様石器は、器形整形技術を除けば、台形様石器群として素材生産技術に共通の技術基盤を有しているわけではないことが窺えた。両者が融合して一つの石器群を形成するとは考えにくく、むしろ同石材の他器種と構造的に結びついていると思われる。サヌカイト製台形様石器は、サヌカイト製横長ナイフ形石器と横長剥片生産技術に代表される近畿地方中央部・瀬戸内中央部に主分布のある瀬戸内系旧石器と、チャート製台形様石器は、チャート製縦長ナイフ形石器と縦長剥片剥離技術に代表される中国山地内に分布するＡＴ下位の「中国山地系」石器群と、それぞれが石材ごとの共通の技術伝統で大別されるのである。

３、近畿地方における台形様石器群の位置

近畿地方において、板井寺ケ谷遺跡を除くと台形様石器群を検出した遺跡は多くはない。兵庫県畑ケ平遺跡群（高松・山口 1991）、七日市遺跡（久保・藤田 1990）、梶原遺跡、溝口遺跡（山下・南 1986）など中国山地東部の遺跡と、近畿地方中央部の大阪市長原遺跡（趙 91）などがあるに過ぎない。特に近畿地方中央部では後期旧石器時代前半期の遺跡自体の発見例が少ない。長原遺跡と板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製台形様石器群を除くと、いずれもいわば「中国山地系」石器群の台形様石器であって、従来の近畿地方台形様石器群の評価は、これら「中国山地系」台形様石器によって測られ、近畿地方中央部の台形様石器群の存在を十分には把握せずにきたのである。

近畿地方中央部から東部瀬戸内地域にかけて、後期旧石器時代中・後半期には、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法に代表される瀬戸内系旧石器（山口 1983）が、顕著な地域性を発現する。汎日本的にも、地域性の発現は後期旧石器時代後半期初頭から認められる（佐藤宏之 1992）とされており、瀬戸内系旧石器の地域性発現はこれと期を同じくしたものと考えられてきた。しかし、板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群が瀬戸内系、チャート製石器群が中国山地系と技術伝統の系譜が認められ、長原遺跡 14 層でもサヌカイト製台形様石器群が出土したことにより、地域性の発現時期と地域性を支える石器群の支持構造・社会的動態についても、再度検討する必要が惹起されよう。

以前より筆者は、瀬戸内系旧石器の地域性発現には、石器生産技術上の特異性であるだけに留まらず、サヌカイトという石材の拘束を受けることが深く関わっており、原石産地から遠隔地への石核素材の搬出、ナイフ形石器素材の事前準備、石器生産工程の異所展開が相互に関係しあい、瀬戸内系横長剥片生産技術として次第に完成されていったと考えている（山

口 1983、91b ほか）。このサヌカイト石材供給と石器生産の異所展開、石器生産技術の特化の三者の特異な構造化が、いつから始まったかは重要な問題であった。近畿地方中央部で当該期の石器群が検出されず、サヌカイト原石産地から離れた板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製石器群例から窺うことができるに過ぎない。

板井寺ケ谷遺跡の台形様石器は、チャート製のものは佐藤氏の分類（佐藤宏之 1988）に照らせば、ナイフ形石器との調整技術の共有など、より後出の形態的特徴が強く認められる。ナイフ形石器と同等の存在であることから、台形様石器群とナイフ形石器群の主従が転換する段階と位置づけられよう。一方、サヌカイト製台形様石器では、組成上はむしろナイフ形石器よりも主体的位置を占めているが、形態的・技術的斉一性に乏しく、やはり後出形態的特徴を備えているといえよう。板井寺ケ谷遺跡下位文化層は、すでに掻器や削器といったより後出とみなしうる定型的石器器種を豊富に組成しており、台形様石器の形態的技術的特徴がそれらに違和感を生じないものである点は、象徴的である。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層のチャート製石器群では台形様石器の数量がナイフ形石器と同等であるのに対し、サヌカイト製石器群では台形様石器がナイフ形石器を凌駕する点は、台形様石器の残存が瀬戸内系旧石器において顕著であると考えられ、台形様石器消滅の時間差の存在の可能性が示唆されよう。

板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製台形様石器とナイフ形石器・横長剥片生産技術のあり方は、瀬戸内系旧石器の地域性発現が期旧石器時代前半期にまで遡り、台形様石器まで組み込んでいる可能性を示唆しているといえよう。一方で、中国山地系旧石器は同様に台形様石器・ナイフ形石器・縦長剥片生産技術も組成しており、台形様石器群の消失とナイフ形石器の盛行という転換期的様相という汎列島的な石器群として広域に認められる内容を呈し、この段階では明瞭な地域性を発現しているわけではなさそうである。汎列島的な石器群がそれぞれの環境における地域適応として次第に地域特化し、ナイフ形石器の盛行する後半期にいたって石器群に明瞭な地域性を有するようになったとする佐藤氏の評価は大枠として頷首できるが、瀬戸内系旧石器にあっては、さらに先行することを明らかにしたい。この事は当然、サヌカイト石材の拘束、サヌカイト石材供給と石器生産の異所展開・石器生産技術の特化という構造が、板井寺ケ谷遺跡下位文化層段階で遠隔地にまで拡大・進行していることを示していると考える。近畿地方中央部において、この三者の構造がいつどの様に発生したかは明らかではないが、根底基盤としてサヌカイト石材の後期旧石器時代初頭での開発があると予測される。国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法盛行期に三者の極相を見ることができることを考えると、これがより完成された後期旧石器時代の構造的適応現象である可能性が高く、ナイフ形石器群との関係が深いと予測されよう。この場合板井寺ケ谷遺跡下位文化層のサヌカイト製台形様石器の技術基盤がナイフ形石器と同様になっている点は、石材供給の一元的構造化により促された、台形様石器群の終末における技術基盤の消失を表すのであろうか。

おわりに

本稿では、板井寺ケ谷遺跡下位文化層の台形様石器として分類可能な石器類を観察し、報告書では十分に記載しなかった台形様石器を一つの器種としての抽出を行った。抽出された個々の石器は、報告書では他の定型石器・加工痕有剥片に含まれており、個々の所属と評価、全体評価の技術的側面・量的把握には異論があり得ることを明記しておきたい。本稿執筆に際し、近畿地方台形様石器分類作業の型式学的「操作」の危うさが実感され、地域的に型式学的操作を行う必要が感じられた。近畿地方台形様石器群自体の存在には疑いを有する余地はないが、後期旧石器時代定型石器とは同列の型式学的安定を果たしていない、あくまで「機能石器」（佐藤宏之 1988）であることを強調したい。台形様石器の抽出は、分析者の主体的な「意図」に負う部分が大きいのである。

本稿では、近畿地方にはサヌカイト製台形様石器の一群が存在し、ナイフ形石器と共に剥片生産技術が特異な地域性を早く発現していることが明らかになった。ただ、台形様石器自体に地域性発現構造が備わっていたかどうか、近畿地方中央部で当該期遺跡の実態が十分には明らかになっていないので明らかではない。遠隔地遺跡から、近畿地方中央部当該期を窺うやり方には、資料操作の上で当然限界がある。新たな資料蓄積を期待したい。また台形様石器とナイフ形石器の二つの石器群が、石材の供給、石器生産工程の異所展開といった部分で地域システムを備えるとする「二極構造」が存在するかの検討も果たせていない。機会を改めて再論する必要がある。

第８節　淡路島、大阪湾と播磨灘

はじめに

一般国道２号線は近畿と九州を結ぶ山陽の幹線となる道路で、神戸の須磨区から明石市の間は海岸を走っている。この間、国道走行中の自動車からは、明石海峡を隔てて淡路島がよく見える。今は舞子と岩屋間に明石大橋が架橋されたが、ここから西が播磨灘、東が大阪湾となる。神戸のウエストコーストとして、展望スッポットでもある。

氷期の環境復元と、旧石器考古学との関連、大阪湾と播磨灘、淡路島、近畿地方中央部から瀬戸内の旧石器時代の景観について考えてみたい。

１．淡路島

大阪湾と播磨灘は、間に淡路島を挟さんで、近畿と四国・中国地方に囲まれた東部瀬戸内の中心に位置する。

この地域には、東の近畿地方中央部に二上山を中心としたサヌカイトが供給される国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法を極相とする、サヌカイト製横長剥片剥離技術伝統を技術的基盤とする瀬戸内系旧石器の主分布域、西には備讃瀬戸を中心としたサヌカイト供給の行われた島嶼部に多数の瀬戸内系旧石器遺跡群がのこされた、大きな旧石器遺跡の集中箇所がある（第１図）。サヌカイト原石産地に近い部分に遺跡が多い傾向が明らかな状況から、かならずしも均一に遺跡が分布しているわけではないことが理解される。

岐の原石産地周辺、四国吉野川などにまとまって遺跡がある。大阪平野の中心などは、分厚い沖積層によって覆われているので、遺跡は見つかりにくいし、また海没した大阪湾や播磨灘にも遺跡の存在が予測される。当該地域の地勢が大地形でありながらも、いくつかの基本地形に分割されていることや、人類活動への環境的好適・不適点が反映しているのであろうか。

このような地勢の中で筆者の注目するのは、その中心にある淡路島で遺跡に乏しい点である。

大阪平野北部、淀川回廊や藤井寺段丘、二上山周辺、播州の段丘上、備讃瀬戸の島嶼部、讃

淡路島は、兵庫県津名郡、三原郡、洲本市からなる島であり、二上山北麓、讃岐北部のサヌカイト原石産地から、それぞれ海に隔てられて約 60～90km ほど離れた中間にある。

その地勢は、津名郡の島北部の 300ｍ前後の山間部から島中部の 200ｍ前後の丘陵部、洲本市を中心とする洲本平野、三原郡の島南部の三原平野と標高 608ｍの諭鶴山から柏原山までの山地から構成される。淡路島は、海上に立ち上がったいくつかの山塊の間に、海浜や狭い平野部の形成される分断された地形単位の集まりとなっていることが理解されよう。

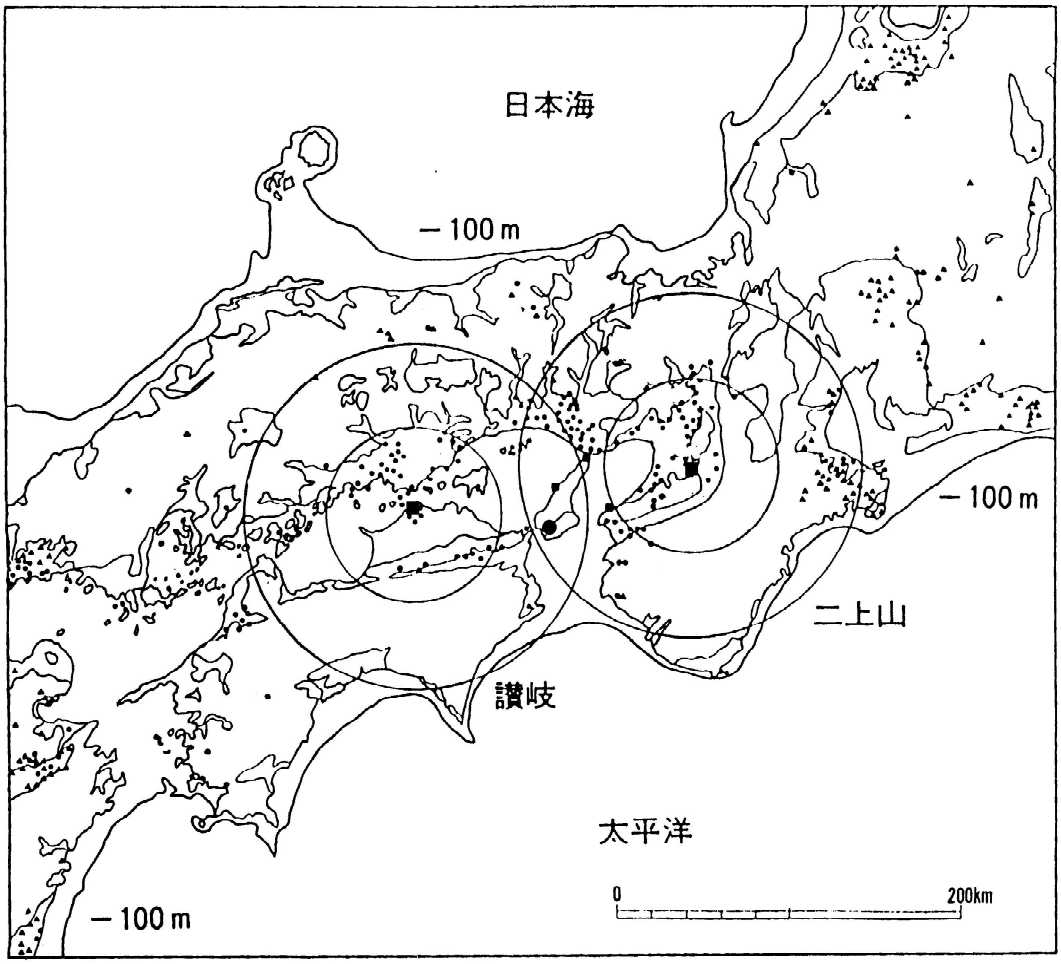


図 132　東部瀬戸内地域の遺跡分布（●：浦壁池　■：サヌカイト原石産地）

淡路島は、大阪湾側から眺めると、予想外に大きな高まりをもって海上に眺められるが、これは淡路島自体が山地を背骨にしているからである。特に島南部の 500～600ｍ級の山地は南に急峻な断崖を形成して、和歌山の紀ノ川から徳島の吉野川までの中央構造線を繋いでおり、北部も六甲山塊からの断層面が連続した細長い屏風状地形となっている。

淡路島には、今のところ旧石器の発見が少ない。ナイフ形石器が採取された遺跡に、浦壁池遺跡と南淡町曽根遺跡があるに留まる。

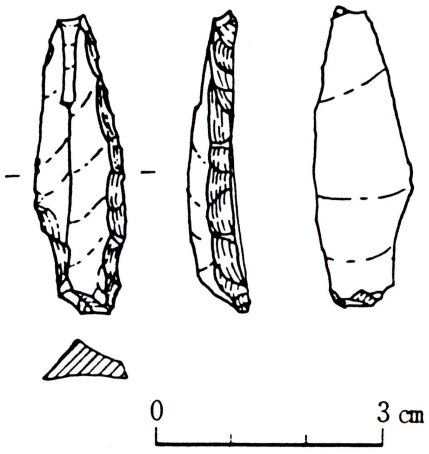


図 133
浦壁池遺跡のナイフ形石器
（浦上 1992）

浦壁池遺跡は浦上雅史氏により紹介されている（浦上 1992）。三原郡三原町神代に位置し、淡路島南部の諭鶴羽山地北麓から三原平野を西北に流下する三原川西岸の中位段丘面上に作られた溜池、浦壁池底にある。標高約 80ｍである。三原平野は西北に開けるので、播磨灘から小豆島、播磨西部が望めるという。

岡本稔氏により一点のみ採集されたナイフ形石器は、暗緑色良質のチャート製縦長剥片素材で、右側縁全縁と左側縁末端を背部加工し、素材剥片の打面部を背付け加工により除去、基部を素材剥片末端、先端部を素材剥片打面部方向に作出している。側縁に背付けすることなど部位の使いこなしが異なること、そもそも素材剥片がチャート製で、石刃系縦長剥片剥離技術の所産であり、技術基盤から瀬戸内系旧石器と異なったナイフ形石器である点は、注目される。

曽根遺跡は、三原郡南淡町筒井にあり、先の浦壁池遺跡から西南に約３ｋｍの地点にある。紀伊水道側との分水域に近い三原平野の段丘上に位置している。兵庫県埋蔵文化財調査事務所により 1997 年 12 月に約 320 ㎡が発掘され、江戸時代水路埋土からサヌカイト製の国府型ナイフ形石器・翼状剥片・二次加工のある剥片・チップなどが出土したが、水磨の形跡は軽微であったという。下層の調査はおこなわれていないので、詳細は不明で、サヌカイトの産地も明らかではない。曽根遺跡は、標高 40ｍほどの緩やかな北向き段丘に位置している。

なお、鳴門海峡では、徳島県側海底から浚渫砂から石器が発見されたことも知られており、淡路島南部から鳴門周辺に今後旧石器時代遺跡がまとまって発見される可能性がある点は、注意される。淡路島において、旧石器の発見は、今後少しずつ増加していくのであろうか。浦壁池遺跡の標高は約 80ｍと少し高いが、曽根遺跡とともに三原平野の段丘上にある点は、淡路島の旧石器遺跡のあり方の特徴を示していると考える。

２．大阪湾と播磨灘

ウルム氷期寒冷期には、海水面は現水面から少なくとも 100ｍ前後は低下したことが知られている。その結果、水深の浅い瀬戸内は海水面の後退によって排水され、東から大阪湾、播磨灘、燧灘、斎灘、伊予灘、さらに周防灘まで、全瀬戸内が陸化することになる。各湾や灘は、現在の海峡部が地峡となって括られる連続した盆地群へと変容する。これら盆地群と瀬

戸内沿岸地域を総称して、本稿では「古瀬戸内」と呼称する。まず、瀬戸内の当該期環境を、現時点での情報を基に整理しよう。

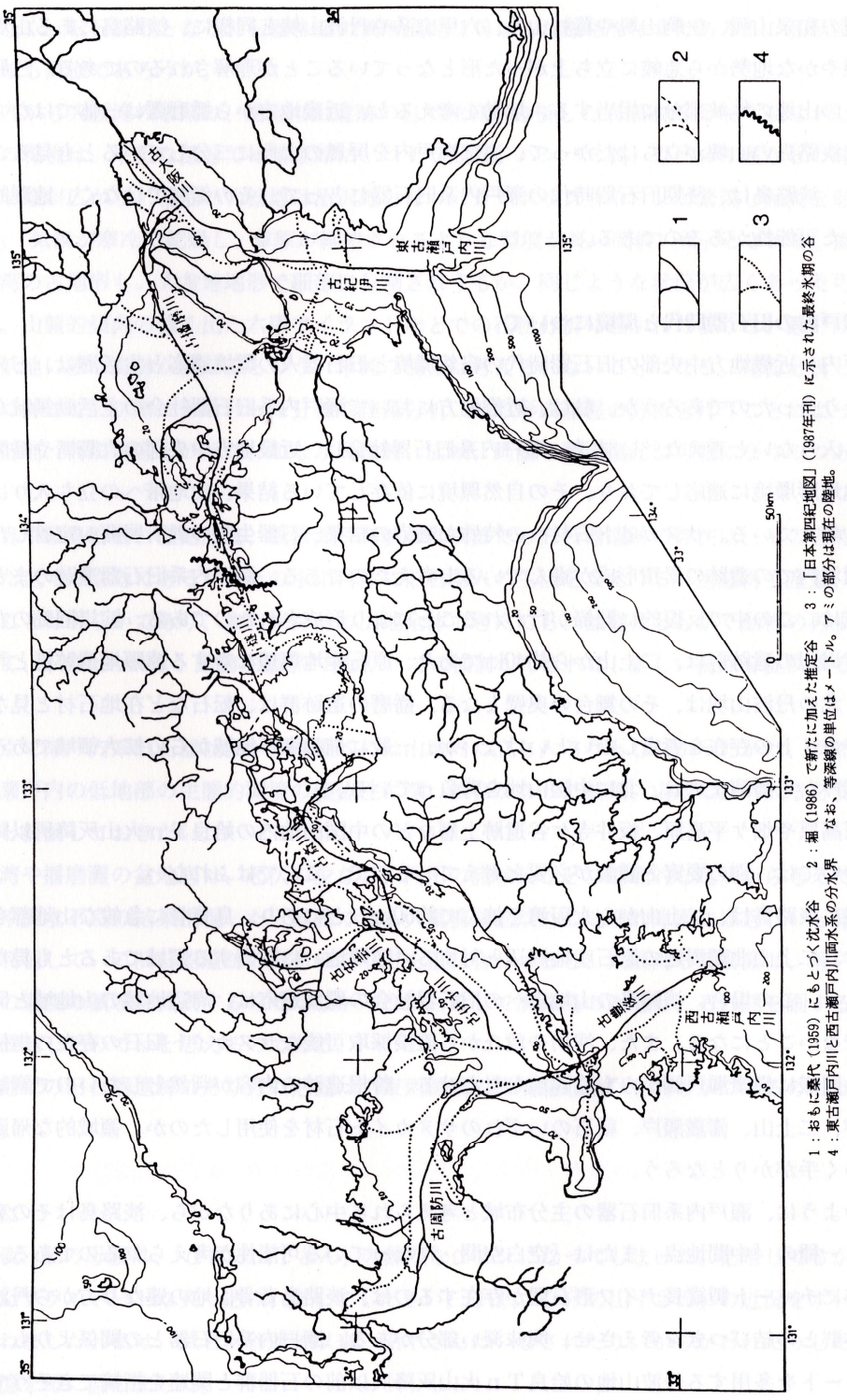


図 134　瀬戸内の沈水谷（堀 1994）

最終氷期の瀬戸内がどのような地形を示していたかを明らかにした研究として、堀信行（1994）がある。氷期における海水準の低下によって陸化し、現海底には当時の河川の沈水河谷が存在することを指摘し、その古水系を明らかにした。堀は、先行する研究を、新しいデータによって更新・補正し、旧石器研究者の利用しやすい形で報告しているので、ここではそれに従って観察したい。堀による瀬戸内海の沈水谷の図を示す。また、古河川の名称は、堀によって現在の灘名などをとって与えられているので、これに従う。

「古瀬戸内」には、東に流下する「東古瀬戸内川」がある。「東古瀬戸内川」は「古紀伊川」から「古大阪川」・「古播磨川」に分岐し、「古大阪川」は現在の淀川に、「古播磨川」は備讃瀬戸へ遡上する。現在の近畿、中・四国地方の河川は、東西の「古瀬戸内川」のどちらかに合流することとなるが、その両者の分水界は、おそらく現在の備讃瀬戸周辺にあったと考えられている。

分水界から播磨灘に達した流れは、明石海峡か鳴門海峡をへて流下することになる。播磨灘の現海底は、約 20 から 40m深ほどであるが、部分的に海流による浸食によって抉られる 60m深以下の部分も生じており、流下方向を容易に決し得ないらしい。特に鳴門海峡と明石海峡は激しい海流によって海底を深く抉られているので、陸化した時期の地形は辿れないだろう。大阪湾では、50m深の海底で厚い海底堆積物で覆われているが、流下する古大阪川は、本来 70m深前後を流下していたようなので、段丘の形成を行っている。古大阪川は紀伊水道を流れ出て太平洋に達していた。

播磨灘では東西に 70ｋｍ、南北に 50ｋｍ、大阪湾では東西 50ｋｍ、南北 30ｋｍで、それぞれ深さ数十ｍの浅い盆地が出現する。両者とも、現陸地の平野と山地間よりも遙かに広大である点を理解できるであろう。播磨灘では古播磨川、大阪湾では古大阪川が中央を流下するので、氷期にはこの現海底部分にも段丘の形成が進んでいたと考えられ、支流の流れ込みなどによっても変化が生じるが、標高に関してはきわめて穏やかな地勢であったことが伺える。大阪湾の古大阪川が古紀伊川になって流下する部分の段丘形成は、かなり深いと思われる。当時の古河川の流水量を推測することは難しいらしいので、これらの古河川や段丘などの地形が、どれだけの地理的障害になったかはよくわからないが、氷期の降雨量が、現在を上回ると考えられないので、決定的な地形的分断要因であったとは考えにくいであろう。

このような広大な領域を考慮すると、むしろ逆に、大阪湾・播磨灘といった部分を取り囲む山塊は、先に見た遺跡分布にとって大きな障壁であったと見なせるのではなかろうか。近畿地方中央部での旧石器時代遺跡の分布は、先に見たようにかなりの粗密をもっている。大阪平野周辺の遺跡分布は、ほとんどが数十メートルまでの段丘上に位置しており、二上山北麓のサヌカイト原石産地は、むしろ「例外的な立地」条件にあるといえる。

先に見た海没した古大阪平野の存在を考慮に入れて淡路島の周辺地勢から考え直すと、大阪平野周辺の和泉山脈、生駒山塊や葛城山系、六甲山系や丹波山塊と同様に、淡路島にある山塊も、この穏やかな地勢から急峻に立ち上がった形となっていることが理解されるのである。三原平野は、この山塊の地峡部分に相当する。地勢を考えると、近畿地方から播磨灘は

一体ではなく、真ん中に淡路島の山塊が立ちはだかって、東部瀬戸内を屏風のように二分しているとも見ることができる。淡路島は、後期旧石器時代の瀬戸内系旧石器にとって、その領域ではなく、地理的障害であった可能性があるのである。

3. 瀬戸内の旧石器時代と環境について

瀬戸内・近畿地方中央部の旧石器時代の自然環境と旧石器人の環境適応と生活圏は、どのように重なり合ったのであろうか。私は、近畿地方において瀬戸内系旧石器社会の主活動領域が山地に立ち入らないと考えた。本来、瀬戸内系旧石器社会は、近畿地方中央部の大阪湾や播磨灘の大盆地地形環境に適応しており、その自然環境に依存している結果、山地帯への立ち入りは稀であると考えている。サヌカイト石材への特殊な適応の結果、石器生産の異所展開が定着した以降、この環境内での遺跡の累積形成が進んでいると考えたのである。瀬戸内系旧石器遺跡のまとまった地域は、この中で反復的に回帰が行われることにより形成されたのである。淀川回廊の右岸、高槻市周辺の遺跡群は、二上山から約 40km であり、原石産地周辺に対する遠隔地遺跡群と評価できる。北の丹波山塊は、その舞台の奥壁となる。播磨の遺跡群は、転石など在地石材と見なしうるサヌカイトの存在を考慮しないといけないが、一般に備讃瀬戸地域からの拡大領域であろう。備讃瀬戸から播磨までは、北に中国山地を背負っている。

恩原高原や畑ケ平高原、板井寺ケ谷遺跡上層などの中国山地内の姶良Ｔｎ火山灰降灰以降の遺跡については、別の要素と議論が必要と考えているので、ここではふれない。

同様に淡路島は、二上山から大阪湾を挟んで約 60ｋｍにあり、島背骨に急峻な山地部有しており、二上山北麓周辺の原石産地周辺と対する「遠隔地」に該当する領域であるとも見なせるであろう。この場合、淡路島の山地部への旧石器社会の環境適応は、周辺地域の山地域と同様に十分でないことになる。また、河川や段丘から直接採取可能なサヌカイト転石の存在の指摘もあるが、同様に備讃瀬戸側からも遠隔地と見なせる。曽根遺跡の内容が判然としないので議論は難しいが、二上山、備讃瀬戸、転石のいずれのサヌカイト石材を使用したのか、領域的な帰属を考えていく手がかりとなろう。

このように、瀬戸内系旧石器の主分布域と考えられる中心にありながら、淡路島はその東西を分ける一種の「中間地点」または「空白空間」になっている可能性が考えられるのである。浦壁池遺跡にチャート製縦長ナイフ形石器が存在するのは、淡路島背骨山地の連なり方から丹波山地の遺跡群との結びつきを考えさせ、興味深い部分がある。瀬戸内系旧石器との関係よりも、在地のチャートを多用する丹波山地の姶良Ｔｎ火山灰降灰以前の石器群と関連を指摘できそうである。

そのほか、徳島県吉野川の遺跡は、備讃瀬戸地域からの山越えの領域形成ではなく、河川下流域からの遡上領域部分であると考えた方がいいかもしれない。この場合、石材供給は原石産地からではなく、転石採取となり、石器生産の異所展開は異なった様相を示すであろ

う。和歌山県紀ノ川流域も同様であろうか。

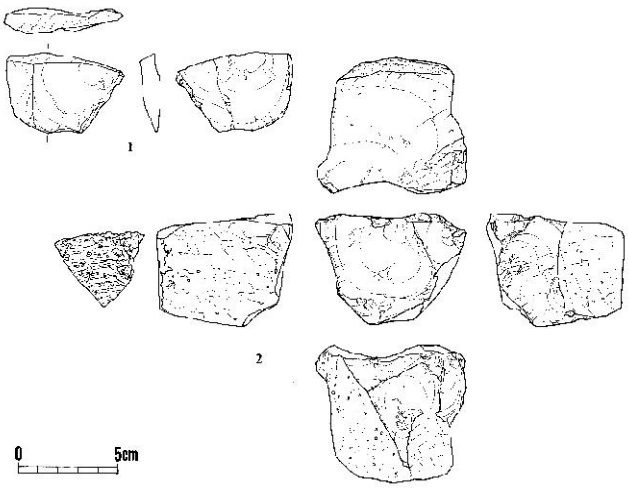
瀬戸内から大阪湾の氷期は、碇岩南山遺跡の自然環境を分析した成瀬敏郎氏らによれば、最終氷期の環境は、基本的に「コナラ亜属、ハシバミ属、カバノキ属などの疎林と広大な草原が広がり、谷沿いの低地は沼沢地となり、カヤツリグサやヨシが繁茂し泥炭を形成する環境」「気候が寒冷で乾燥し、草原が維持されるような環境が長い間続いた」とされる。播磨灘や大阪湾の古地形も、大盆地地形で細部に分割されえるが、同じような状況が広くあった可能性が高い。六甲アイランドなどでの花粉分析で描かれたような、瀬戸内や大阪湾の低地に広く森林が広がるという、単純な植生は考えられないことになる。花粉分析と材化石分析に併せて、プラントオパール分析や珪藻分析、地形形成過程の分析を行うことによって、かなり局地的、広域、両面の環境復元が可能になりつつあるといえる。

瀬戸内系旧石器社会が、積極的には山地内に立ち入ろうとしなかったかは、判然としない。瀬戸内の低地部の生態的環境の優位性に深い依存があった結果、山地に立ち入る必要がなかったと仮説としておきたい。

大阪湾や播磨灘の盆地底は、起伏の少なさ、河川の流域長など、地理的な起伏から考えても、大河川や排水不良の結果出現したと推測できる大規模湖沼以外の地理的障害には乏しいと見られる。今判明している旧石器遺跡の分布のあり方を重ね合わせると、大阪湾と播磨灘は、瀬戸内系旧石器の東西の領域を代表するのではなかろうか。そして淡路島の山地は、その間を画する障壁として機能したのではと思えるのである。

淡路島での旧石器遺跡のあり方の把握は、東西領域の環境適応差異を明らかにするのではなかろうか。

第５章　サヌカイトの開発と黒色ガラス質安山岩



甲山北西麓採集の黒色ガラス質安山岩製石核

第 1 節　サヌカイト以前

はじめに

近畿地方の旧石器時代研究史は、「岩宿」以前にも直良信夫氏による 1931 年の「明石原人」発見という重要な日本旧石器時代研究上のエポックを有しており、これを考慮するとすでに 68 年の歴史を有している。また、大正年間の京都大学などによる国府遺跡の発掘調査も、ヨーロッパ旧石器との対比を意図したことに契機があったことは、思い出されねばならない。近畿地方は、戦後、「岩宿」以後には、鎌木義昌による瀬戸内地域でのいくつかの調査と連動して国府遺跡の発掘が行われてから、同志社旧石器文化談話会の二上山北麓でのサヌカイト原産地の踏査・研究やいくつかの研究史上重要な遺跡の発掘調査など、いくつかの節目を経ている。これらは、近畿地方独自の動きとして発生した場合と、近畿地方の研究動向の自立的な展開によるものではなく他地域の研究動向を受けたものであったり、またその連鎖が遙かに遅れて派生したりする場合も見られるものが含まれている。旧石器時代研究の根幹を揺さぶった旧石器遺跡捏造事件も、次第に影響を及ぼしていくであろうし、旧石器時代研究者の研究視点も、実際に大きな転換を迎えたと実感している。

本稿では、近畿地方から瀬戸内地域中央部にかけての研究が、後期旧石器時代を中心に集中していく過程で、サヌカイト石材という地域的優占石材に研究意識が収斂されたことを指摘し、今後の旧石器時代研究のための簡単な整理を行っておきたい。

1．近畿地方における旧石器研究前史

近畿地方において、旧石器時代の存在が意識されたのは、奇しくも 1917 年から始まった大阪府藤井寺市国府遺跡（浜田 1918）であった。喜田貞吉氏により「欧州発見の旧石器の或者ににたる形式」の大形無細工な石器が、国府遺跡の深くから出土したとの福原潜次郎氏の情報が浜田耕作氏にもたらしたことにより、浜田氏は国府遺跡の調査を旧石器の包含を確かめることにおいていた。新しいとされた層位より間層をおいて深いこと、獣骨を伴うらしいことから、想定されたのは、ヨーロッパの前・中期旧石器のタイプリストに登場するような石器群であったようだ。しかし後には、大量に出土する縄文人骨と多様な埋葬形式に目を奪われて。旧石器の探索は失念されてしまう。

さらに 1931 年 4 月 18 日、直良信夫氏が兵庫県明石郡大久保村西八木海岸にて一片の腰骨を採集した。発見以前の 1927 年 11 年 26 日、同海岸（屏風ヶ浦）にて石器（瑪瑙）を発見すると共に、旧象化石（臼歯）破片も発見し、直良は、日本にも旧石器時代が存在していたと確信するようになっている（直良 1931、直良 1995、春成 1994）。

その後、この「明石人」の腰骨や、直良信夫の採集した「旧石器」については、春成秀爾をは

じめ、考古学や人類学の分野で多くの調査や様々な議論が展開され、1985 年の西八木の発掘調査へとつながった（春成 1987）。発掘の結果、自然科学的分析により「明石人」腰骨算出層は約 4 万万年前の西八木層であろうとされ、また人為とも見られる木片の出土をみている。しかし、評価は、腰骨が戦災で失われたこと、出土地点自体が海蝕によって失われていることから、今日においてもその決着を見ることはない。

このように、近畿地方における旧石器時代の研究は、ヨーロッパの旧石器洞窟遺跡の例が印象づけられたのか、哺乳動物化石と石器との関連を当初から念頭に置いて、浜田耕作、直良信夫らによって、その科学的な考古学としての研究が開始された当初から意識された点は、近畿地方の旧石器研究前史として、強調されるべきである。

近畿地方でも、近年後期旧石器以前を伺わせる調査が続いた。

1997 年には西八木海岸から東約 2.5km の藤江川添遺跡（明石市）から瑪瑙製の「ハンドアックス」様の石器が発見された。稲原昭嘉はこの石器について、縄文時代に属する溝状遺構下部の砂礫層中で検出したが、「形態的特徴、使用石材等から後期旧石器時代（今から約 3 万年前）をさかのぼる様相を呈したものとみなされ、旧人段階の人類の存在を強く裏付ける資料となった」と報告した（稲原 1998）。直良信夫の採集した「明石人」骨や「旧石器」の出土が想定されている地層と、今回の「ハンドアックス」が出土した礫層との関係は、今後の大きな課題であるが、今回の報告は、今後の「明石人」の新たな展開を予測させる一方、近畿地方における「前期（中期）旧石器」の存在を前進させることが、我々にとっても大きな課題となっている。

また、大阪市文化財協会は長原遺跡や山之内遺跡で、約 10 万年前の層準まで発掘を行い、ナウマン象などの大形動物の歩行痕化石を検出しており、同一水平面に人類活動の痕跡を見いだす試みを続けている。

２．近畿のサヌカイト石材と瀬戸内系旧石器の構造

直良信夫の明石における調査研究以後、戦前の近畿地方では旧石器時代に関する研究は皆無であった。鎌木義昌氏らは、岩宿以降、1954 年の香川県井島遺跡・岡山県鷲羽山遺跡の発掘調査を皮切りに、各遺跡の発掘調査や表面採集資料調査など、瀬戸内海地方の「先土器時代」文化編年の調査研究を本格化させた。岩宿から約 8 年遅れて 1957・58 年、瀬戸内海地方の東に位置する国府遺跡（大阪府）の調査では、「相当量の横剥石核、横剥刃器、ナイフ形石器」を発掘した。そして「特殊の技法による石器製作過程が判明し、瀬戸内技法と名づけ」、さらに、「この技法によってできあがる剥片を翼状剥片とよび、完成したナイフ形石器を国府型のナイフ形石器」と呼んだ（鎌木・高橋 1965）。ここに「瀬戸内技法」・「国府型ナイフ形石器」が提唱され、その後今日に至るまで、近畿地方の旧石器時代研究の技術論的研究の基礎となった。

また、1959 年の太島遺跡（兵庫県家島群島）の発掘調査では、「井島 I 石器文化」の単純遺跡であると評価し、「その純粋性と独立性が再確認」され、竪場島遺跡の層位的な調査成果に

より、各型式の前後関係が検討された。そして、「ほぼ国府型ナイフ形石器、宮田山型のナイフ形石器、井島 I 石器文化という順序があきらかにされ」、瀬戸内海での「先土器時代文化編年表」を発表した。結果的に、ナイフ形石器の時間的変遷は、「瀬戸内技法の成立からその衰退へ」の変化とともに、ナイフ形石器自身の「大形から小形」への型式学的な変化がクローズアップされた。

層位的保証の乏しい近畿地方と瀬戸内地方において、以後この編年観が有効となり、鎌木らの編年案を踏襲する形で、様々な編年案が提起され（松藤 1980、山口 1983、久保 1989、佐藤良二 1989）、技術論的側面の「瀬戸内技法」とともに、近畿・瀬戸内地方の旧石器文化研究の基礎となったが、特に近畿地方においては層位的出土例が増加する 80 年代半ばまで、その有効性そのものについての検証はなされなかった。

サヌカイトを占有石材とする瀬戸内系旧石器は、姶良 T n 火山灰降灰直後に国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法に示される「極相」に達する。この「極相」期には、サヌカイト原石産地周辺から遠隔地への「石器生産の異所展開」が徹底して行われる（山口 1994）。この異所展開に対応する技術適応が瀬戸内技法であり、国府型ナイフ形石器であった。後期旧石器初頭には、サヌカイト石材産地の開発、台形様石器素材の供給を板状の剥片から行うという、瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統の基礎が成立している。剥片を寝かせて、さらに剥片を剥離する点で、これは多分に分割技法的な技術体系であったのだろう。前半期で台形様石器からナイフ形石器に主体変移する中で次第に横長剥片剥離技術として個別に出現した技術属性が組み合わさって、最終的に瀬戸内技法が成立するのであろう。

やはり石材の移動についても、同様の経過を辿るようで、初期には石核素材や石核、目的剥片など多様な形の搬出・搬入形態が、極相では斉一的な様相が強まっている。二上山は、長原遺跡から 10km ほどにあるが、14 層段階では遺跡内への石材搬入は円礫だけではなく、板状剥片も持ち込まれている点は、板井寺ケ谷遺跡下位文化層と同様である。初頭の勝手野遺跡や前半期の七日市遺跡や板井寺ケ谷遺跡下位文化層でサヌカイト製石器群が検出されるのは、この時期の瀬戸内系旧石器の移動距離がすでに活発化していることを示している。近畿中央部の石器群の完成を、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法に代表される極相期に限定することも可能であるが、むしろ瀬戸内系旧石器文化の伝統として、台形様石器群を主体とした初頭の石器群から極相まで、一貫して理解した方が、技術基盤の一貫性を損なわずに把握が容易になるのではなかろうか。すなわち、近畿中央部のサヌカイト製瀬戸内系旧石器の成立は、後期旧石器時代の開始と見なせるのではなかろうか。

この原石産地と遠隔地の、石器製作工程の異所展開が、主にサヌカイト噴出源上の二上山北麓と四国、讃岐北部の原石産地を起点として行われたことを考えてみると、まず、どちらも噴出源の山塊であることが指摘できる。また、かってそれぞれがサヌカイト石材を下流域に転石として流下させた点でも同様であった。古大阪川系の二上山北麓は標高 120m前後で、その原石産地遺跡の立地は、通常の近畿地方中央部の遺跡立地とは景観的に異なることが指摘される（山口 1991）ちなみに、讃岐北部の金山は標高 200m、国分台は標高 200mである。讃岐北部

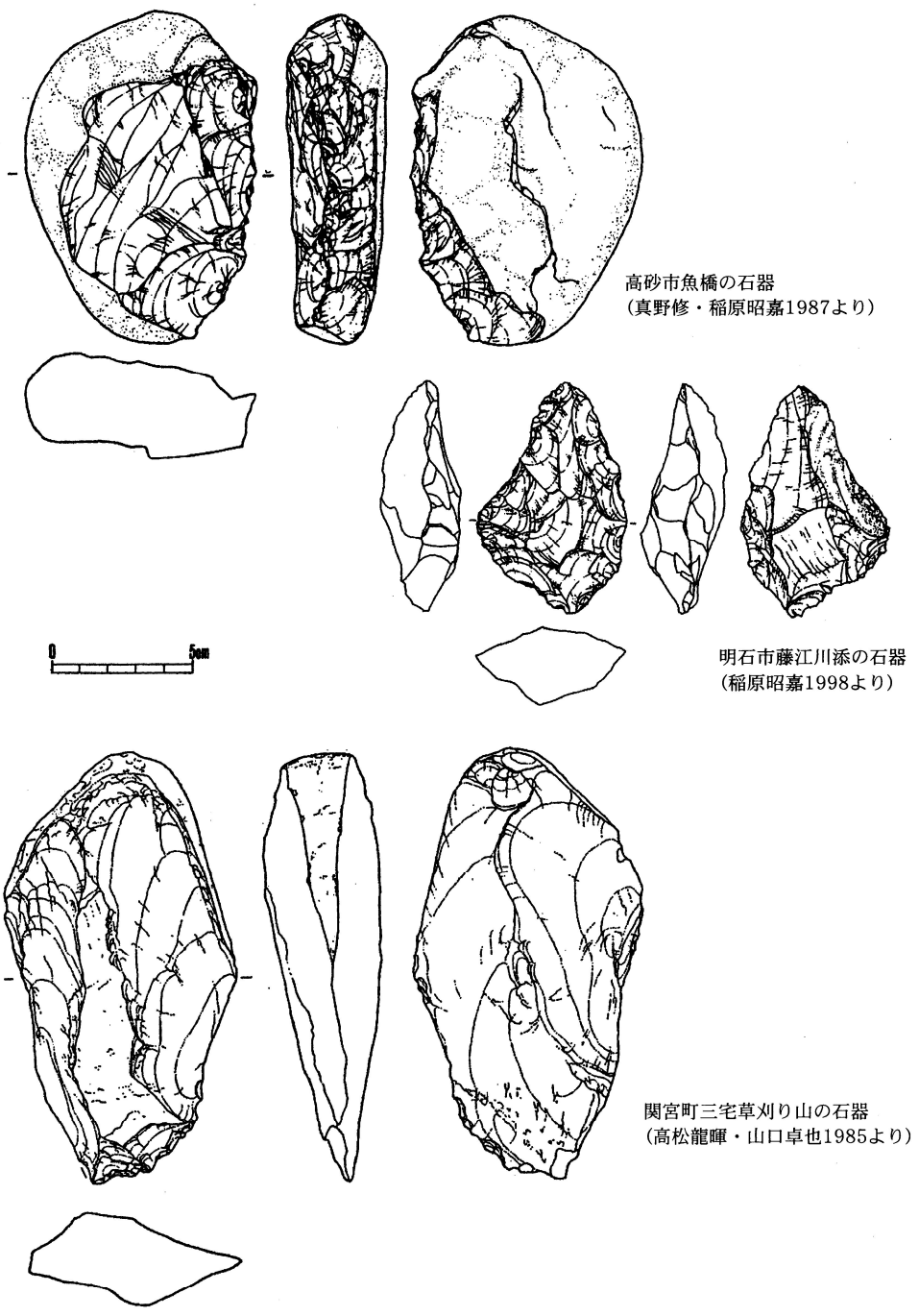


図135　各地の石器

や二上山北麓のいずれも河川上流に位置する噴出源産地であり、立地の異なる山塊中に原石産地遺跡群が形成されること、石器生産に比重のかかった遺跡の存在の予測されることから、大きく傾向を捉えるなら、原石産地－遠隔地間の関係は、河川水源と下流域の関係に置き換える

ことも出来よう。

筆者はすでに、サヌカイト製瀬戸内系旧石器の主分布域が山地や丘陵ではなく、むしろ低位な段丘や低地、現在の海面下海没陸地にあることを指摘した。当時の主活動域が、近畿地方中央部から瀬戸内地域の低位な地形単位に広がっていたと考えるのである。

瀬戸内系旧石器成立以前を予測するならば、地域的適応の特化の始まる以前、おそらく中期旧石器の存在を予測しなければいけないであろう。この段階においても、当然主活動域はより低位な段丘上や低地であったと推測する。この段階において汎日本的な石器群の動向と等しく石材選択は多様であり、サヌカイト石材は河床や浸食崖において採取可能な一石材であったにとどまるであろう。

次第に中期旧石器時代から後期旧石器時代の移行に際し、人類活動域は拡大し、経験的に生まれるサヌカイト石材への嗜好の結果、河川の転石採集が進み、転石の流下した中流域から上流域へと石材採集活動が遡上する。

その結果発見された噴出源サヌカイト石材原産地、二上山と讃岐北部は、どちらも彼らにとっては、低位とはいえ従来の活動領域をわずかに越えた山塊中に位置していた。

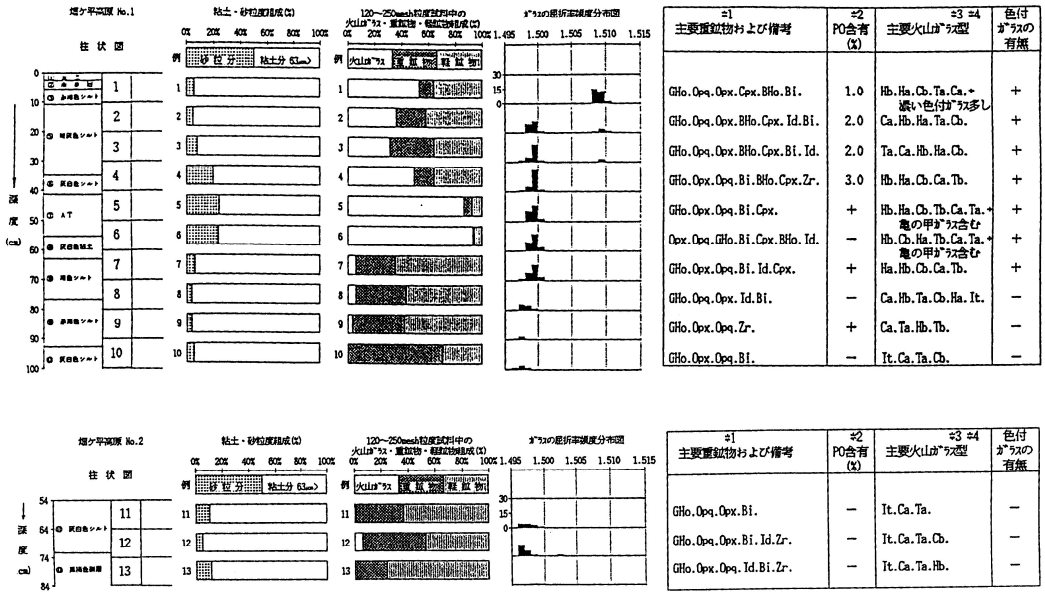
次第にサヌカイト石材への嗜好・偏執が高まり、主活動域に接したサヌカイト石材産地へのサヌカイト石材の直接的採集活動が行われる。この結果、非サヌカイト石材への依存度が低下し始める。石材供給活動が集団の回帰運動に組み込まれるという画期が想定されれば、サヌカイト石材への依存拡大と相まって瀬戸内における後期旧石器的な諸相の成立を推測させうる段階となるであろう。

サヌカイト石材の原産地での回帰的採集活動と遠隔地での非サヌカイト石材の現象は、石器生産技術における「適応」を促し、石器製作工程における異所展開が始まる。これがいわば剥片素材の石核から複数の剥片を生産するという二段階の工程を行う、瀬戸内系横長剥片剥離技術となる。この技術的「適応」は、特定産地の石材が結果として流布した結果と考えるより、すでに存在する主活動領域全体で限定された産地の石材を意図的に使用するために進められたと考えた方が妥当であろう。この点で、筆者はサヌカイト石材の執着的使用、瀬戸内系横長剥片剥離技術の出現、石器製作工程の異所展開といった特徴の出現から、安定した地域社会の存在を推定し、近畿地方中央部・瀬戸内地域における後期旧石器時代の始まりを画期したいと考えている。

繰り返しておくが、サヌカイト石材を用いた瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器は、あくまで瀬戸内系旧石器の「極相」であり、石器生産におけるサヌカイト石材とその供給を回帰移動に組み込んだ瀬戸内系旧石器の様相の一つに過ぎないのであり、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法のみに瀬戸内系旧石器を代表させることは、後期旧石器時代の画期から瀬戸内系旧石器の終焉までの多様な「適応」を視野に入れない危惧があるといえようか。

一方、近畿地方北部の在地石材の縦長剥片剥離技術に基盤を持つ石器群は、その内容から考えて中国山地帯内に広く認められる石器群と同様であると認められる。広く見れば汎日本的な広がりを持つ台形様石器群、ナイフ形石器群として段階を踏んで変遷している。

台形様石器群が、近畿地方の後期旧石器時代初頭において、技術基盤の異なる二系統があったことになるが、この点については中期旧石器時代から後期旧石器時代への変移と地域への適応・定着、地勢的な問題と密接に関わってくることになろう。



※1 主要重鉱物および備考	※2 PO含有(%)	※3 ※4 主要火山ガラス型	色付ガラスの有無
GHo.Opq.Opx.Cpx.BHo.Bi.	1.0	Hb.Ha.Cb.Ta.Ca.＋濃い色付ガラス多し	＋
GHo.Opq.Opx.BHo.Cpx.Id.Bi.	2.0	Ca.Hb.Ha.Ta.Cb.	＋
GHo.Opq.Opx.BHo.Cpx.Bi.Id.	2.0	Ta.Ca.Hb.Ha.Cb.	＋
GHo.Opx.Opq.Bi.BHo.Cpx.Zr.	3.0	Hb.Ha.Cb.Ca.Tb.	＋
GHo.Opx.Opq.Bi.Cpx.	＋	Hb.Ha.Cb.Tb.Ca.Ta.＋亀の甲ガラス含む	＋
Opx.Opq.GHo.Bi.Cpx.BHo.Id.	－	Hb.Cb.Ha.Tb.Ca.Ta.＋亀の甲ガラス含む	＋
GHo.Opx.Opq.Bi.Id.Cpx.	＋	Ha.Hb.Cb.Ca.Tb.	＋
GHo.Opq.Opx.Id.Bi.	－	Ca.Hb.Ta.Cb.Ha.It.	－
GHo.Opx.Opq.Zr.	＋	Ca.Ta.Hb.Tb.	－
GHo.Opx.Opq.Bi.	－	It.Ca.Ta.Cb.	－

※1 主要重鉱物および備考	※2 PO含有(%)	※3 ※4 主要火山ガラス型	色付ガラスの有無
GHo.Opq.Opx.Bi.	－	It.Ca.Ta.	－
GHo.Opq.Opx.Bi.Id.Zr.	－	It.Ca.Ta.Cb.	－
GHo.Opx.Opq.Id.Bi.Zr.	－	It.Ca.Ta.Hb.	－

畑ヶ平遺跡（ 柱状試料 畑ヶ平高原 10cm 間隔 ）

試料採取地点土層模式柱状図および分析結果

＊1 主要重鉱物の略称と鉱物名
Ol：カンラン石 Opx：斜方輝石 Cpx：単斜輝石 GHo：緑色普通角閃石 BHo：褐色普通角閃石
Bi：黒雲母 Ap：アパタイト Zr：ジルコン Id：イディングサイト Opq：不透明鉱物

＊2 PO：プラント・オパール含有率 or 有無

＊3 主要ガラス型の名称（吉川,1976）
Ha,Hb：扁平型（バブルウォール型） Ca,Cb：中間型（軽石型） Ta,Tb：多孔質型（軽石・繊維状型）

＊4 （吉川,1976）以外のガラス型の略称
SG：スコリア質ガラス IT：不規則型

畑ヶ平遺跡の火山灰分析
（京都フィッショントラックによる）

図136 畑ヶ平高原の火山灰分析

3．近畿地方の中期旧石器時代について

近畿地方における中期旧石器時代の存在については、本来はその中期旧石器時代とされるものを残した当事者が、どのような段階の人類存在であるかから検討する必要がある。この検討抜きには、石器がどうだから、層位的にほかより古いから、といった議論は、旧石器時代史として意味を持たない。ただ単なる石器の人格化を進める行為となろう。

しかし、近畿地方において、化石人類遺存などの検討はあり得ないので、まずは、先に見た後期旧石器的な高度な「構造化」を果たしたサヌカイト製瀬戸内系旧石器以外の、「異質な」資料の検討から始めようと考える。客観的根拠としては、やはり、非サヌカイト資料で瀬戸内系旧石器以外の、広域火山灰編年による層位的な資料の検出であろう。

さきに見たように、古くは濱田耕作氏や直良信夫氏の追求から、異質な資料を認識することから始まっている。同志社大学による二上山北麓でのチョッパー状石器など非ナイフ形石器文化資料の異質資料の注目は、先駆的な着目（同志社大学旧石器文化談話会 1974）であろう。明石市藤江海岸の発掘調査（春成編 1987）は、遺物の認定に異論が残るが、生活面を伴わない堆積環境での遺跡存在に注意を促した点は重要である。

中期旧石器が発見されるとすれば、将来層位的環境の良い北部で層位的根拠を持って発見される可能性が考えられる。中期旧石器時代の石器群は、石材開発の時期から推測して非サヌカイト石器群であろう。層位的な条件の劣悪な近畿地方中央部で、考古学的な判別を行い、中期旧石器を分別するなら、この地域での非サヌカイト石器を検討するのが理にかなっている。

近畿地方の異質な資料について紹介しておく（図 135）。いずれも明瞭な時期判定が出来ない資料であり、錯誤資料の可能性も排除できない。高砂市魚橋のため池底に露頭した洪積段丘（下位）から単独で採集された石器（真野・稲原 1987）、凝灰質頁岩製である。明石市藤江川添の石器（稲原 1998）はメノウ製で、古河床の礫層に含まれていたものである。地層の時期判定は出来ていない。転磨が少なく、近傍の河肩から運ばれたと考えられている。春成秀爾氏による藤江海岸の発掘成果との関連で重要である。兵庫県関宮町三宅草刈り山の石器（高松・山口 1985）は、八木川南岸の丘陵からローム状の黄褐色土層中から出土したもので、泥岩製である。出土地は姶良Ｔｎ火山灰よりも深い可能性がある。

近畿地方中央部以南では、段丘上に姶良Ｔｎ火山灰の安定的な堆積すら見いだすことは困難で、さらに中・前期旧石器相当期の広域火山灰を検出することはほぼ困難である。一方、今のところ古い石器群は検出されていないが、兵庫県北部の高原には、将来条件を満たしうる火山灰層が見いだされる可能性が高い。兵庫県美方郡温泉町の畑ケ平高原では、1988 年に開墾予定地に試掘が行われ、その基本的な土層堆積が把握された。

畑ケ平高原では、基本的な層序は、上から 1 ：表土、 2 ：漸移層、 3 ：赤褐色火山灰、 4 ：暗灰色火山灰、 5 ：灰白色火山灰、 6 ：黄色火山灰、 7 ：灰白色粘土、 8 ：褐色火山灰、 9 ：赤褐色火山灰、10：灰白色火山灰、11：黒褐色礫層（火砕流？）となり、1 －10 層で深度約 100

cmとなる。

この基本層序は、㈱京都フィッション・トラックによって火山灰・土壌分析が行われ、図136のような成果が出ている。第3層がアカホヤ火山灰、第6層が姶良Ｔｎ火山灰純層、その間に大山ホーキ火山灰の降灰を含んでいる。また、姶良Ｔｎ火山灰下では、広域火山灰の降灰は認められず、至近火山から供給された堆積である可能性が示唆された。いまのところ、直近の広域火山灰であるＤＫＰの降灰は認められていないので、その精査は必要であるし、さらに局地的な火山性堆積物供給源の確認と年代の把握も必要である。なお、基底層の11：黒褐色礫層が扇山の火砕流であれば、まず扇山の火砕流年代の把握が必要であろう。扇山の火山活動と姶良Ｔｎ火山灰降灰までの時間差が分かれば、畑ケ平高原での旧石器人の活動可能時期が限定できる。さらに姶良Ｔｎ火山灰直下の灰白色粘土層は、下位火山灰層の長期にわたる露頭による風化層とも考えられることから、必ずしも姶良Ｔｎ火山灰降灰直前の時期を示すわけではない点は注意したい。近畿地方北部において、先の捏造事件の舞台となった宮城県下と同様の、局地的火山灰編年網の構築の可能性が広がっている。

畑ケ平高原のような堆積環境は、但馬地方北部に広く認められるので、今後はこのような場所での遺跡発見の努力が必要となろう。

おわりに

層位的な堆積環境が近畿地方中央部でよくなく、そこから発見される旧石器がほとんどサヌカイト製で、後期旧石器の高度な構造化を果たした瀬戸内系旧石器なので、旧石器はサヌカイト製という先入観が広く定着している。しかし、近畿地方の後期旧石器初頭の石器群の様相が、かならずしも単相ではなく、中・南部でのサヌカイト製石器群と北部での在地石材の石器群に、すでに分化していることを指摘した。このサヌカイト石材への適応は、ナイフ形石器群の定着に先立って行われている。このことは、近畿地方でのサヌカイト石材の開発が、後期旧石器時代への移行と連動して行われたことを示唆している（山口1998）。

今のところ、明らかに中・前期旧石器と見なせる石器群は認められないが、近畿地方にも、旧石器時代の資料として異質な資料の存在がある。いずれも単独であり層位も不十分で、現時点での評価は困難であるが、今後の例増をまって評価したい。また、近畿地方北部には、広域火山灰の検出を果たしていないものの、姶良Ｔｎ火山灰下に厚い火山性堆積物がある高原が広がっていることが知られた。

捏造問題発覚以降の近畿地方での、サヌカイト以前の研究の状況をまとめた。

第 2 節　兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材産地

1 . はじめに

サヌカイトは火山岩である安山岩の一種で、特に近畿・瀬戸内圏においてきわめて普遍的な石器石材として、旧石器から縄文・弥生時代まで利用され、主に打製石器が製作された。通常サヌカイトという石材名称は、近畿・瀬戸内中部の第三紀中新世から鮮新世にかけて活動した「瀬戸内火山岩区」の二上山産や金山・五色台、国分台産などを表すものとして使用される。サヌカイトは、蛍光 X 線分析法により産地分析が最も早く行われた石材（東村・藁科 1975）であり、多くの考古学的検討事例と石材産出地データベースの構築もある。

兵庫県北部には、瀬戸内火山岩区の「サヌカイト」と同等石材はないとされてきた。一方、火山学岩石学からは、鮮新世から更新世に活動した火山の溶岩には、黒色無斑晶安山岩やデイサイトがあること（先山他 1995）が紹介されている。火山学岩石学的記述であるが、考古学側からの作業として兵庫県北部の安山岩製旧石器との関係を予察する出発点となりえる。

この地域では、美方郡新温泉町畑ケ平高原や養父市八木西宮遺跡・大山田遺跡などの旧石器で、これら兵庫県北部第四紀火山の石材が使用されているが、石器石材と安山岩溶岩露頭などとの考古学的対照や成分比較による整合作業は今後の課題であり、また、「サヌカイト石同等石材」の在否についても、未探求である。本稿では、近畿・瀬戸内地域の旧石器分布の「辺縁」である兵庫県北部、山陰中国山地東部の安山岩石材産地をめぐる考古学と自然科学の石材産地分析の課題を予察したい。

2 . 兵庫県北部の鮮新世更新世火山岩類

兵庫県北部には、西部に氷ノ山・鉢伏、扇ノ山など標高 1000ｍを超す山体があって、これらは鮮新世から更新世にかけての火山活動による噴出物で生成された。東部に神鍋山や玄武洞、田倉山など比較的小規模単成火山が点在する。鮮新世末から 2 万年前以降まで活動した火山活動があって、流紋岩、デイサイト、安山岩、玄武岩など多様な溶岩類の噴出活動があった（図 137）。兵庫県立人と自然の博物館の先山徹らは、兵庫県北部のこれら火山岩類の露頭調査・K-Ar 年代測定・古地磁気方位測定・主成分元素化学分析を行っている（先山他 1995）。この成果は、旧石器考古学の石器石材研究を目的としたものではないが、安山岩やデイサイトの質的記載と産出地がプロットされており、考古学の側から見て興味深い。ここから石器石材の特徴を備える記述を見てみたい。

鉢伏から扇ノ山の山体地域では、照来・鉢伏・氷ノ山・扇ノ山などの火山活動が累層して溶岩台地を形成している。大きく西日本火山帯東部を形成し、照来（310 万年前）→大屋・轟（280 万年～270 万年前）→美方（170 万年～20 万年目）→扇ノ山（120 万年前～40 万年

前）と火山群活動年代が一部並行しながらシフトした経緯が認められ（表 13)、初期には流紋岩やデイサイトがあって、次第に安山岩や玄武岩に溶岩質が変化したように観察される。

照来層群では、「黒色秘密」な無斑晶安山岩（TSMK-30・90)、無斑晶デイサイト（TSMK-14・15・81）が認められる。鉢伏では板状節理斑状安山岩が産する。扇ノ山火山群では、複数回噴出した溶岩流があり、鳥取県側に流下して八頭郡若櫻町赤松（写真 15・16）に達し、兵庫県側に上山や畑ケ平の溶岩台地を形成（写真 13・14）した。安山岩の柱状や板状の節理の発達度、斑晶の顕在化度については、かなりの地点差がある。溶岩流先端の八頭郡若櫻町赤松では柱状節理の発達した無斑晶安山岩（OG-1)、畑ケ平高原の無斑晶安山岩（OG-4）がある。扇ノ山溶岩では、流下方向、先端末端で珪酸（SiO2）比率が 50.21%の玄武岩から 58.59%の安山岩までの変化幅があることが読み取れ（第 14 表)、火山の噴火時期や噴火火口位置で溶岩質が変化することが知れる。鉢伏では、無斑晶や黒色緻密安山岩は発見されておらず、節理の発達した斑状安山岩がみとめられるが、珪素比率が 57-58%のもの（HY-5・40・44）があって、ここでも噴出時期や火口位置、流下により急冷したり、基盤岩の溶解などで成分が変化して、デイサイトや黒色緻密質無斑晶（玻璃質）溶岩が生成される場合が予測できる。

氷ノ山・鉢伏、扇ノ山の火山山体の東には、玄武洞（160 万年前）→神鍋山（70 万年前～2 万年前）→宝山（田倉山）（40 万年～30 万年）→上佐野・目坂（23 万年～13 万年前）と活動期をシフトした火山がある。ここは玄武岩溶岩が主体で石器石材に相当する安山岩やデイサイト溶岩の噴出は知られていない。上佐野火山は、但馬空港建設工事で発見され、1991 年に命名された単成火山であり、西方の神鍋単成火山群との間に目坂火山（約 13 万年前）があって、北但馬単成火山群の一部をなす。

以上、自然科学的な火山活動と岩石記述であるので、考古学サイドで分類するサヌカイト（黒色緻密無斑晶玻璃質（ガラス質）安山岩）と乖離はあるものの、それなりの石材の存在が予測できる。

兵庫県北部の東半分では、新しい更新世後半の単成火山が散在する。氷ノ山・鉢伏、扇ノ山の山体から東に向かって八木断層と養父断層が連続し、京都府県境の宝山（田倉山）火山まで横断するが、宝山（田倉山）火山などに先行する火山活動が、この断層の発源に関与しているとすれば、両断層に沿って火山活動の痕跡を探索して溶岩質を調査することも必要であろう。

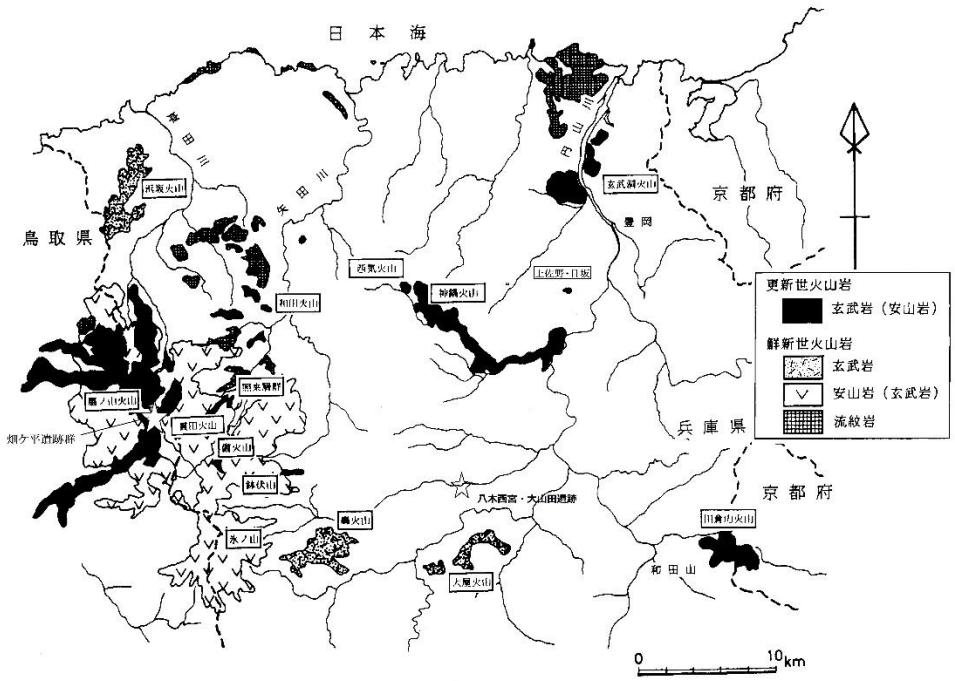


図 137　兵庫県北部の鮮新世～更新世火山岩類の分布（先山他 1995　一部改変）
☆：畑ケ平遺跡群、八木西宮・大山田遺跡

表 13　兵庫県北部の第四紀火山

第四紀火山	所在県	年代	噴出溶岩・火山
宝山（田倉山）	京都、兵庫	400,000～300,000	玄武岩　火砕丘・単成火山
玄武洞	兵庫	1600,000	玄武岩　スコリア丘・小型楯状火山
上佐野・目坂	兵庫	230,000～130,000	玄武岩　スコリア丘・単成火山群
神鍋火山群	兵庫	70,000～10,000・20,000	玄武岩　小型楯状火山群・溶岩流
大屋・轟	兵庫	2800,000～2700,000	安山岩・玄武岩　単成火山群
照来（氷ノ山・鉢伏・寺田）	兵庫	3100,000～2200,000	安山岩・デイサイト・流紋岩 火砕流・・カルデラ　複成火山群
佐坊	兵庫	1700,000	デイサイト・溶岩流
美方火山群（備・葛畑・貫田）	兵庫	1700,000～200,000	安山岩・玄武岩　火砕丘　単成火山群
扇ノ山	鳥取、兵庫	1200,000～400,000 2 期の活動	安山岩・玄武岩　スコリア丘・溶岩流 約 20 個の単成火山群

地質調査総合センター　「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」

表 14　兵庫県北部の第四紀火山岩類化学組成（先山他 1995）

	浜坂火山	照来層群						氷ノ山火山岩			轟火山	大屋火山
	HG-32	OG-2	HY-105	HY-118	HY-11	HY-16	HY-101	HY-5	HY-40	HY-44	HY-108	HY-139
SiO_2	52.64	50.91	59.34	50.51	55.46	53.89	59.20	57.08	58.53	57.74	50.77	51.68
TiO_2	1.24	0.92	0.83	1.17	0.98	0.98	0.83	0.83	0.94	0.92	1.16	1.23
Al_2O_3	16.47	15.28	16.54	16.60	18.07	18.11	17.96	18.61	17.86	17.36	16.69	17.67
$Fe_2O_3^*$	9.72	7.47	5.80	8.40	6.96	7.29	6.08	6.16	6.32	6.41	8.61	8.14
MnO	0.16	0.12	0.1	0.16	0.12	0.12	0.10	0.1	0.11	0.11	0.15	0.14
MgO	6.20	8.96	3.24	7.43	3.79	4.43	2.73	4.06	3.19	3.92	7.26	6.09
CaO	8.68	8.03	5.75	9.46	7.96	8.46	5.93	7.01	5.2	6.46	9.95	9.31
Na_2O	3.38	3.08	3.72	3.13	3.59	3.43	3.91	3.82	3.64	3.64	3.26	3.38
K_2O	1.11	1.51	2.02	0.74	1.40	1.22	1.55	1.38	2.08	1.85	0.90	1.13
P_2O_5	0.27	0.32	0.24	0.30	0.33	0.34	0.24	0.22	0.29	0.26	0.37	0.39
Total	99.87	96.60	97.58	97.90	98.66	98.27	98.53	99.27	98.16	98.67	99.12	99.16

	玄武洞火山		扇ノ山火山					和田火山	備火山	西気火山	田倉山火山
	HG-1	HY-129	OG-1	OG-3	OG-4	OG-5	OG-8	HG-33	HY-121	HG-2	HG-16
SiO_2	49.27	48.23	58.59	54.62	53.79	53.92	50.21	50.84	52.09	49.74	49.63
TiO_2	2.01	2.15	1.06	1.51	1.22	1.21	1.73	1.57	2.30	1.83	1.77
Al_2O_3	17.27	16.86	17.45	18.37	18.50	18.25	17.68	17.98	17.39	17.74	18.24
$Fe_2O_3^*$	9.59	10.26	5.94	7.72	8.29	8.22	9.75	8.30	9.49	10.95	10.88
MnO	0.15	0.15	0.11	0.12	0.14	0.14	0.16	0.14	0.13	0.17	0.18
MgO	6.51	6.96	3.13	3.58	4.43	4.55	5.78	6.07	4.19	5.13	5.34
CaO	8.52	7.92	5.97	7.30	7.15	7.27	8.91	8.13	7.51	8.38	8.46
Na_2O	3.67	3.55	3.80	3.87	3.67	3.68	3.66	3.71	3.97	3.57	3.74
K_2O	1.73	1.72	2.19	1.48	1.46	1.46	1.37	1.70	1.76	1.12	1.08
P_2O_5	0.70	0.66	0.37	0.48	0.52	0.51	0.57	0.68	0.76	0.55	0.67
Total	99.42	98.46	98.61	99.05	99.17	99.21	99.82	99.12	99.59	99.18	99.99

写真 11　兵庫県美方郡新温泉町畑ケ平高原の安山岩四種類の旧石器（高松・山口 1991）
（第 4 地点：1・2　第 7 地点：3〜7）　　2 の長さ：11.0cm

3.畑ケ平高原遺跡群と八木西宮遺跡・大山田遺跡

畑ケ平高原の旧石器遺跡群は、兵庫県鳥取県県境の扇ノ山火山の東 1.7ｋｍの安山岩溶岩台地上にあり、姶良 Tn 火山灰を挟んで上下に石器群がある。上下ともにこの 4 種類の安山岩製石器が認められる。安山岩製石器は、特に第 4 地点・第 7 地点で姶良 Tn 火山灰の上でナイフ形石器、削器など、大形剥片や横長剥片石核が採集されており、扇ノ山火山の安山岩溶岩台地という在地石材を石器生産した様相がうかがえる。溶岩台地を抉る渓流や滝崖などに露頭する安山岩溶岩やデイサイトが開発されたのだろうが、現在台地上が森林となっていて、露頭と安山岩石材との対比は、今後の作業である。

写真 11 の 1 と 2 は「黒色緻密玻璃質（ガラス質）安山岩」である。視覚的にサヌカイトに相当するもの（A 類）で、1 には流理が見られる。2 は極めて緻密質で「二上山」と視覚的に差異は認められない。3 と 4 は、本体が黒色緻密な無斑晶安山岩であるが、珪酸比率が低いのか石基のガラス化が劣って灰白に風化し「微粉」状を呈し、擦れた稜に内部の黒色が窺えるもの（B 類）。欠損部から見て 1 と 2 とほぼ同等の「石器石材」であるが、「無斑晶安山岩」と視覚的判

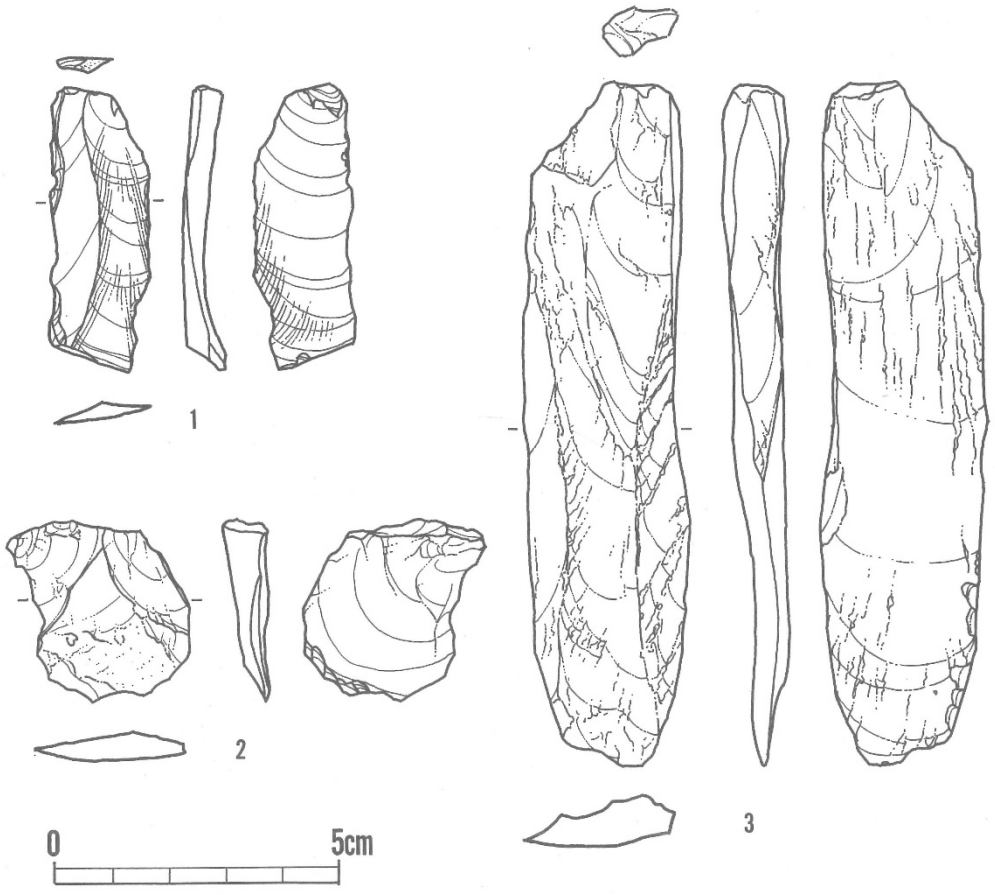


図 138　八木西宮遺跡の旧石器

（1：黒曜石製縦長剥片　2：鉄石英製剥片　3：黒色無斑晶安山岩製大形縦長剥片）

定する。このような石材は、シルトに似た風化状況に惑わされて「泥岩」に分類されることがある。5 と 6 も「無斑晶安山岩」であるが、極端に風化が進行し全面に深い浸食が生じて流理構造が顕在化するもの（C 類）で、3・4 とは相違がある。7 は、2ｍｍ程度の板状節理が発達した「無斑晶安山岩」（D 類）で、シルトに似た風化と板状に剥がれやすいことから「泥板岩」に分類されることがある。他に、厚い板状節理で、風化の進まない暗灰色無斑晶安山岩（E 類）がある。

A 類 1・2 は讃岐や二上山といった遠隔地からの搬入を前提に解釈されてきたが、どちらも大型であり、他の四種類とともに兵庫県北部の第四紀火山岩である可能性が高いと考える。

図 138 は、兵庫県養父市八鹿町八木字西宮外の八木西宮遺跡（八鹿町教育委員会 1988）で発掘された旧石器 3 点である。姶良 Tn 火山灰との上下関係は不明であるが、2 の剥片には古い様相がうかがえる。3 は、擦れた稜線に黒色緻密な石質をみせ灰色微紛状の風化面に覆われていて、ガラス化に劣る石基の黒色無斑晶安山岩である。兵庫県美方郡新温泉町畑ケ平高原の安山岩 B 類の 3・4 と同等の石材であり、照来・扇ノ山など近傍の第四紀火山由来の安山岩と考えられる。なおこの石材は、1988 年の元報告で「泥岩」と誤記している（山口 1988）ので訂正する。1 の黒曜石は隠岐産であろう。

図 139 は兵庫県養父市八鹿町八木字西宮外の大山田遺跡（八鹿町 1988）で発掘された旧石器 5 点である。姶良 Tn 火山灰との上下関係は不明であるが、剥片剥離技術に古い様相がうかがえる。1・2 は、元報告では「サヌカイト製」として記載したが、兵庫県北部の第四紀火山由来である可能性は排除できない。今のところ直近西方の扇ノ山や照来デイサイト・安山岩産出地では同等石材を見出せていないので、範囲を東方に拡大して八木断層や養父断層周辺で、未知の火山活動痕跡を新たに発見するという積極的な考古学側からの努力も必要である。5 のチャート製石核は、板状節理のある丹波中古生層由来であろう。

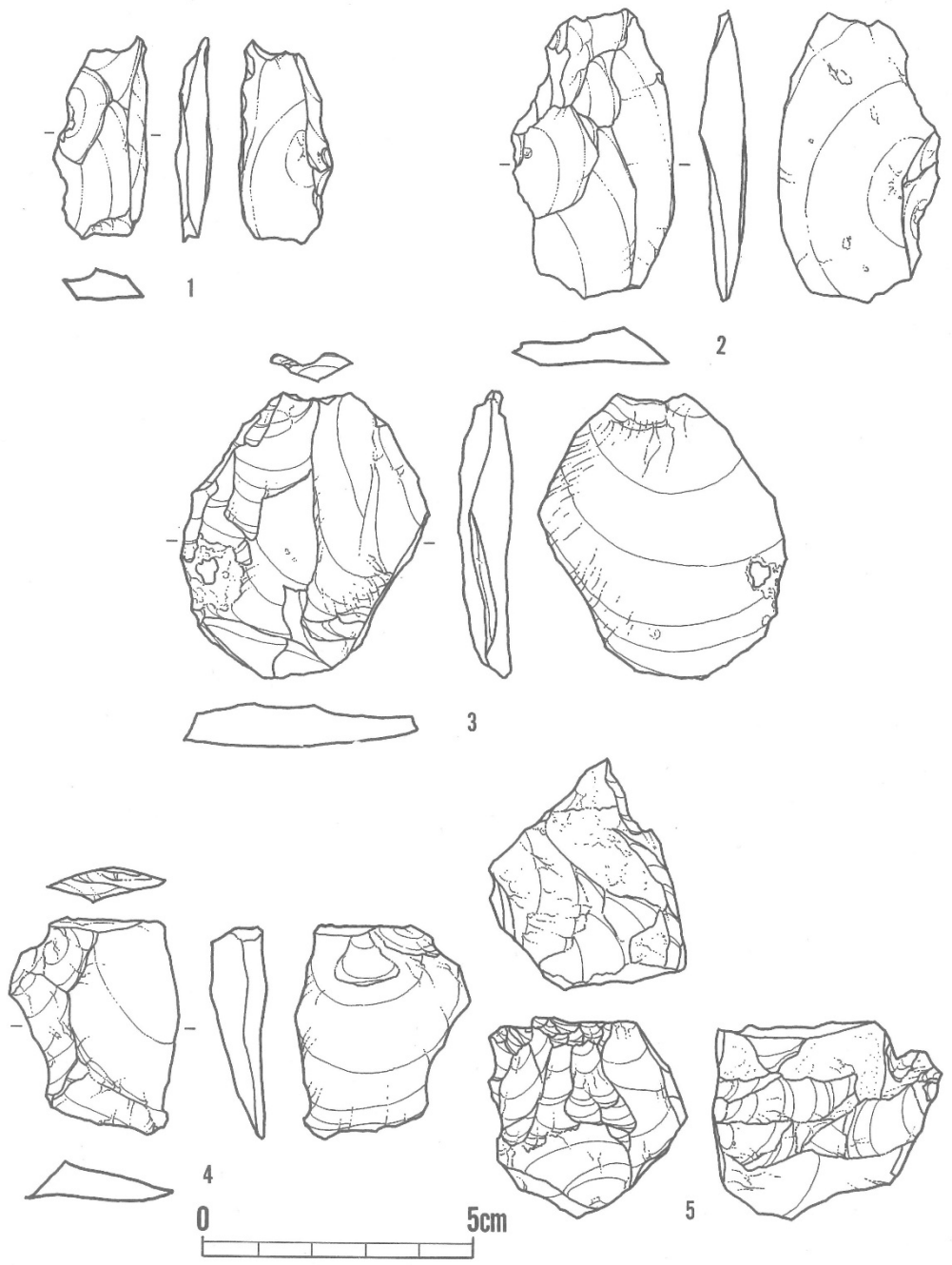


図 139　大山田遺跡の旧石器（1・2：黒色緻密玻璃質安山岩（サヌカイト）製横長剥片
3：メノウ製縦長剥片　4：凝灰岩製縦長剥片　5：チャート製石核）

4.サヌカイトの蛍光Ｘ線分析法による原石産地推定

サヌカイトの産地分析は、1970 年代に東村武信・藁科哲男により始められた蛍光Ｘ線分析が主な方法で、現在では複数の研究機関によってサヌカイト産地データベースが形成されている（杉原・小林 2006)。遺跡から発掘される石器石材の産地推定のための分析であるので、あく

まで考古学的に識別した特定の「黒色・緻密・無斑晶・玻璃質（ガラス質）な安山岩」サヌカイト同等石材が対象となっている点は、先に紹介した先山らの火山学岩石学的研究とは本質的に異なっている。兵庫県北部の遺跡で発見される安山岩製石器類は、ほとんどが珪酸の比率のためか石基のガラス化の点で大きく劣ったものが多く、現時点で安山岩産地がデータベースに登録されない。

分析するのは、原産地間で差異の少ない珪素など主成分ではなく、いわば不純物として包有される微量成分を対象としている。サヌカイトは安山岩の一種であり、溶岩流の系統や噴出時期、冷却され方などで、微量成分に変異が生じているので、同じ産地にあってもかなりの変異幅を持った微量成分組成であることは注意される。石材産地のサヌカイトについて本当に均質かどうか、蛍光X線分析後の統計的検定作業には問題ないと分析者はするが、ある程度の精度を確保しようとするなら、本来の原石産地の変異をカバーする検体数が確保されている必要がある。

サヌカイトや同等石材は､デイサイトや無斑晶安山岩も含めると日本列島に広域に産するが、藁科は、このうちから主なサヌカイト原石産地を単位として原石群を比較資料として登録している（藁科 2001)。考古学的な資料は、この原石群との間で蛍光X線分析により微量成分組成の異同を調べ、多変量解析の手法を経て、原石群すべてとの一致度を計算、各産地に帰属する確率を算出し、可能性の上位を候補としている。遺跡出土の石材を分析して、原石産地が特定できない場合、未発見の産地石材が使用されている場合が考えられ、藁科は、傾向を同じくする試料をまとめて「遺物群」とし、その分布域を求めて将来の原石産地との対比を予定している。

多様な検体の確保には、原石産地の微妙な地点差を把握している原石産地遺跡の考古学側が検体を提供して協力することが必須である。また、新たな遺跡を発見し石器石材の原石産地を分析しようとする時、従来既知の遠隔な石材産地との対比ではなく、その遺跡周辺を考古学側が自ら広く踏査して可能性のある近傍の石材産地を分析に提供するのも、考古学側の責務である。

火山列島である日本には、一般に粗質の安山岩産地が多数あるが、これらの一部についても兵庫県北部、日本海沿岸の広域で石器石材になっているので、積極的な踏査・石材検体の確保が、考古学者の目から行われるべきであろう。本稿で扱う兵庫県北部の鮮新世更新世、第四紀火山においても､考古学の作業として蛍光X線分析など理化学的方法で研究されることが必須である。

５.兵庫県北部における安山岩製旧石器

兵庫県北部における安山岩製旧石器と石器石材産地を考古学的作業で結びつける上での問題点について考えよう。

サヌカイト石材は、旧石器時代では瀬戸内系旧石器の支配的石材として安定して使用され、

国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法を極相に生み出している。「瀬戸内火山岩区」の二上山北麓、国分台・金山・五色台といったサヌカイト噴出源を起点として行われた石器製作工程の「異所展開」を前提とした瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統を発達させることにより、遠隔地での石材欠乏に適応したと考えられる。このサヌカイト石材の拘束性は、瀬戸内系旧石器の構造的発現におおきく関与していると考えられ、サヌカイト石材の開発環境の解明は、瀬戸内の旧石器研究に重要な視座を提供している（山口 1994）。石材の移動については、距離×重量＝仕事量とする物理法則が検討の出発点であり、サヌカイト石材の物理的存在を前提として、そこから旧石器社会の適応と技術開発が発現することを確認しておきたい。

播磨など石材供給圏の狭間では、瀬戸内の当時陸化していた河床などを流下したサヌカイト円礫が臨機に採集されていたことが判明しており、このような石材の分布範囲は播磨灘から大阪湾の海面下に広く広がるのであろう。この場合サヌカイトを使用したとしても石材確保のあり方は、チャートや頁岩といった在地石材の河床での臨機採集と同じと見なせることになり、回帰巡回による火山岩石材原産地に対する拘束性が消失又は弱体化することは注意される。岩屋産には金山・五色台から流下した石材が多く含まれ、この石材個々の場合、石材の蛍光 X 線分析法では金山・五色台から直接採取したものか海没した河床から転石を採集したかは判断できない。遺跡から出土したこのような石材は、付着する表皮面に転磨が認められるかをよく観察する必要かある。また、金山・五色台産以外の瀬戸内海底に未知のサヌカイト噴出源が海没している可能性が考えられ、淡路や播磨の海岸サヌカイト自然礫から化学分析による産地分析作業の継続も必要となる。興味深いのは、当該地域では「使えなさそうだが無理に使った安山岩製の石器」を見かけることは希な点である。

兵庫県北部では、氷ノ山・鉢伏、扇ノ山の火山山体の安山岩・デイサイトは、その多くが瀬戸内火山岩区のサヌカイトとは異相の石材として分類される。畑ケ平高原の安山岩製石器の多様な安山岩のあり方は、この地域的火山岩産出状況を反映しているし、兵庫県北部での安山岩製旧石器も、山体での採掘や河川転石の利用もあるが、同じような石器石材の供給環境にあると考えてよいだろう。

兵庫県北部の旧石器研究史初期、畑ケ平高原の A 類（写真 11-1・2）に類した安山岩は、考古学的経験的判断から黒色・緻密・無斑晶・玻璃質（ガラス質）であることから「サヌカイト」と分類されてきた。今のところ旧石器には分析例はないが、縄文時代石器には、蛍光 X 線分析法により、四国金山産と分析された石鏃などの比較的小型の石器類が多数あって、状況的な蓋然性を生じさせている。その他の B 類 D 類安山岩は、泥岩や泥板岩、C 類 E 類は安山岩に分類された場合がある（高松・山口 1981・1985）。ここで、B 類 D 類に分けられる石材は、「無斑晶安山岩」として訂正したい。同様の石材は、特に八木川流域から円山川流域にかけての縄文時代遺跡などで多用されている。

兵庫県美方郡新温泉町畑ケ平高原の遺跡群（高松・山口 1991）は、兵庫県北部氷ノ山・鉢伏、扇ノ山で形成される火山山体の扇ノ山東南安山岩台地の標高 1,000m にあって、安山岩石材は台地端や裾野から入手が可能である。畑ケ平高原第 4 地点第 7 地点の安山岩石器類（写

真 1）は、他石材と比べて量的に凌駕している。石材環境は、近畿地方中央部の二上山サヌカイト原石産地と原石産地上の遺跡群や国府･翠鳥園遺跡の 5km 圏の関係と相当するであろう。その他の流紋岩やメノウ、碧玉などはより低位ですこし離れた場所から搬入されたことになる。「サヌカイト」と見える A 類の横長剥片や横長剥片石核も、大形である。この存在は、一つの安山岩石器石材産地に、わざわざ遠隔地の同等石材を石核や剥片レベルで大量（重量・数量）に搬入する「不自然」となり、直線距離で 147 k m離れた二上山産や讃岐産サヌカイトではない可能性を予測したい。A 類同等の黒色緻密玻璃質（ガラス質）安山岩が扇ノ山火山や照来火山由来で産したかどうかについては定かではないので、より広範囲を探索して比較検体を用意して蛍光Ｘ線分析法による原石産地推定を行う必要がある。

兵庫県養父市八木西宮遺跡と大山田遺跡（八鹿町教育委員会 1988）は、兵庫県北部西の氷ノ山･鉢伏など火山山体を下って東に約 15km、八木川右岸段丘標高 110m ほどの八木川と円山川の形成する「回廊」に位置する。二上山からは 126km、チャート石材の有力な産地である多紀連山からは 50km となる。八木西宮遺跡（図 138）の黒色無斑晶安山岩製大形縦長剥片は兵庫県北部の火山山体の安山岩石材、チャート製石核は丹波多紀連山のチャート石材、黒曜石製縦長剥片は隠岐、鉄石英やメノウ、凝灰岩製の剥片類は、第三紀以前の火山活動石材として河川露頭などで確保されたものであろう。大山田遺跡（図 139）の 1・2：黒色緻密玻璃質安山岩（サヌカイト）製横長剥片は畑ケ平 A 類と見なせる。今のところ兵庫県北部の石材産地は見つからないが、直線距離で 147 k m離れた二上山産や讃岐産サヌカイトではない可能性を予測したい。

多紀連山のチャートは、兵庫県中部で多用され、北部にも搬入される石材である。大山田遺跡からは直線距離では 50km であるが、「仕事量」を考えると、負担の多い直線コースの山越えや稜線移動を避け、河川回廊を辿るだろう。八木川から円山川合流点、少し遡上して東河川に入り、夜久野高原を越えて、牧川を下り、由良川合流点に出て、由良川を遡上して、多紀連山の麓にたどり着く経路となり、総距離は約 60km になる。日常的にアクセスしにくい距離感が、八木西宮・大山田遺跡の石器石材選択の背景となったに違いない。二上山までを辿るなら、市川を南下するか、水分（みわかれ）分水嶺を超えて、加古川を下るか、多紀連山を超えて篠山盆地に出て、そこから武庫川を下ることになる。ようやく「古大阪平野」または「古播磨灘平野」にたどり着くが、そこからサヌカイト原石山地はまだ遠くて、直線距離でイメージする距離感とは異なる「遠隔性」が感じられるであろう。

今のところ、兵庫県北部における旧石器時代遺跡群の編年や技術形態学的系統研究も果たせていない段階である。兵庫県北部の安山岩製石器石材の開発の始源についても、おそらく姶良Ｔｎ火山灰降灰以前であろうが、その石器群は、いわゆる「瀬戸内系」と見なせるかどうかの検討も十分とはいえない。継続的な研究から事例の追加を待って再考したい。

兵庫県中部には、篠山市板井寺ケ谷遺跡（兵庫県教育委員会 1991）や丹波市春日七日市遺跡（兵庫県教育委員会 1990）などの旧石器時代遺跡があって、直近の多紀連山チャート石材主体で姶良 Tn 火山灰下の石器群がある。ここには、蛍光 X 線分析により二上山産や「岩屋

産」サヌカイト製石器群が伴うが、サヌカイト製石器類全点分析はなされていない。両遺跡の石材に、他の出自が混在していることが見逃されている可能性が残っている。今後兵庫県北部の安山岩製石器の石材産地研究が進捗してきたとき、中部や兵庫県南半の旧石器遺跡のサヌカイト製石器の中に、北部の安山岩製のものが混じっているかどうか、再検討する必要も出てくるであろう。

旧石器時代の日常的な活動領域として、古瀬戸内や古大阪平野といった大地形の生態環境と、兵庫県北部から中部の中国山地東部の、山岳と河川回廊に細かく分断され、入り組んだ生態環境とでは、大きな差異が想像される。植物相・動物相、季節性食糧資源、さらに石器石材のあり方が異なれば、そこに居住するための技術系や蓄積される知識的伝統的基盤も異なる。旧石器時代といえども地域的居住集団が形成されていることを考えると、異なった環境ゾーンに侵入することは容易ではない。旧石器時代において、「石器が動く」「石材が搬入、搬出される」現象は、「集団が持って運びました」という単純な説明では終わらない。「交易」や「交換」、「譲渡」を含めて高次元の集団的、社会的、古民族学的動態を前提とする理解が必要となろう。兵庫県北部にサヌカイト製旧石器が搬入された事例があったとして、これを「日常的行為の所産」と見なすことは難しい、旧石器社会にあって希な行為、「特殊なイベントの所産」の考古学的事例であると考えるのが妥当ではなかろうか。

写真 12　兵庫県養父市鉢伏山東麓の安山岩溶岩露頭（先山他 HY-101 近傍）

写真 13　兵庫県美方郡新温泉町岸田扇ノ山東麓（畑ケ平：亀滝周辺）安山岩溶岩露頭

写真 14　庫県美方郡新温泉町岸田扇ノ山東麓（畑ケ平：亀滝）安山岩溶岩露頭

写真 15　鳥取県八頭郡若桜町諸岡屏風岩の安山岩溶岩露頭

写真 16　鳥取県八頭郡若櫻町赤松の安山岩採石場（先山他 OG-1）

６.おわりに

近畿瀬戸内地方での支配的石材としてのサヌカイトとともに、旧石器時代における国府型ナイフ形石器や瀬戸内技法の模式的分布圏が重なって拡大され、中国山地東部、山陰側までを包括ゾーンとする旧石器時代の「ナイフ形石器文化圏」がよく描かれるが、今回予察したように兵庫県北部の旧石器時代石器群と四国や二上山のサヌカイト石材産地は、必ずしも一体ではない可能性を示唆していると考える。

兵庫県北部の安山岩石材は、遺跡から発見された時にはすでに激しく風化して、一見してサヌカイトとは異なる石材に分類されるが、これは今見て「風化している」と観察するからではなかろうか。旧石器人が露頭から石材を取り出したときに、どのように認知していただろうか。「黒くて緻密でいい石だ」「遠くのサヌカイトと同じ」とでも思っていたか知りたいと思う。ただ、東部火山山体のほとんどの安山岩は、縄文時代の石鏃などにあまり使われず、珪酸比率が低くて細かい調整加工は難しかったのかもしれない。

兵庫県北部の東半では、新しい更新世後半の単成火山が散在する。氷ノ山・鉢伏、扇ノ山の山体から東に向かって八木断層と養父断層（養父市 2012）が連続し、京都府県境の宝山（田倉山）火山まで横断するが、宝山（田倉山）火山などに先行する火山活動がこの断層の発源に関与しているとすれば、両断層に沿って火山活動の痕跡を探索し噴出溶岩を調査することも必要であろう。サヌカイトと同等の黒色・緻密・無斑晶・玻璃質（ガラス質）安山岩についての探索は、火山学的岩石学的研究分野ではあるが、旧石器考古学の課題の一つとなるであろう。

旧石器考古学の「石器が動く」「石材が搬入搬出される」「石材を選んで石器にする」という事実は、実は極めて旧石器時代の「古民族学的動態」として考えるべき分野である。本稿で予察した石材研究上の課題も、この視座での研究の進捗の中で解消されていくことを期待したい。

第 3 節　西宮市甲山の黒色ガラス質安山岩と甲山山頂遺跡の旧石器

1. はじめに

「麓は松に囲まれ、上部はずんべら坊主の、丸いカブト形の山がありました。その山肌にごろごろ転がっている灰黒色の石片が『安山岩』であることを、私は知っていました。 その不規則なかけらを手に取って、鼻先にあてがって嗅いでみると、おそらくマンモス族がのそのそしていた頃に盛んに噴煙を上げていたであろうこの山容が髣髴とするのでした。死火山！むくむくと地中からせり上ったまま活動を停止してしまった甲山！ そこには、富士山や浅間山や駒ケ嶽とはまた違った、悠久とした地球の夢が滞っていました。」（稲垣足穂 1941）

甲山は、新第三紀の火山地形で、マンモスの時代ではないが、甲山を背にする関西学院で学生生活を送った稲垣足穂（1900-1977）に強烈なイメージを植えつけた。甲山は、六甲山山塊東南の西摂地域、東南方向に大阪平野側に開けた位置に孤立する。その「兜」のような偉容が遠くからも容易に視認できることから、阪神間市民に親しまれた低山である。標高 309．2ｍの山頂は、かつて関西学院大学の体育授業で、授業時間内往復の登山「甲山マラソン」が行われていた。今も仁川から六甲山塊へ整備された登山道の縦貫に沿ったランドマークとなっている。

石野博信氏は 1966 年、甲山の安山岩に注目し、そこに石器原材安山岩採石地があることを報告した（石野 1966）。

その後 1970 年、阪府立桜塚高校生、山岡一氏によって、甲山山頂で弥生時代銅剣（戈）が発見されたが、同時に石器類も発見もされた（武藤 1971）。石器類は、西宮市文化財課、西宮市立郷土資料館が収蔵している。

筆者は、二上山以外の黒色緻密な火山岩産出地（沢井・佐藤 1989）の踏査を続けており、このたび、山頂遺跡の石器を熟覧実測する機会を得ることができたので紹介し、また、筆者らの甲山安山岩の踏査記録を中間報告し、さらにサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）を石材とする石器文化と甲山安山岩を巡る知見について論じてみたい。

写真 17
東六甲展望台から甲山・大阪平野を望む（西北西から）

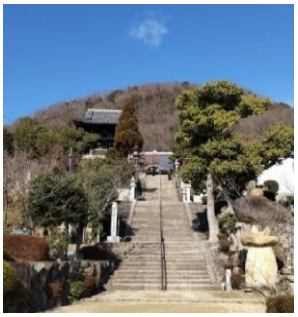


写真 18　甲山（南から）

甲山山頂遺跡の石器

山岡一氏は、1970 年 10 月 5 日、甲山に登山して「山頂付近に石器の材料となるフリント片や細石刃が散布していることに着目」、11 月 1 日に再度登山、「採集、中食のため腰をおろした地点で目にふれたフリント片を手にとろうとしたら、それに接して」（武藤 1971）銅剣（戈）を発見した。現在、その発見地点には平和塔が建立されている。

甲山山頂遺跡の石器類は、銅剣(戈)と同じく甲山山頂部標高 300m前後の範囲で採集されたことになる。山頂部であることから地形浸食と包含層の喪失が予測され、さらに後に山頂部整地が行われて旧表土が観察できないこと、採集者の採集軌跡が復元できないことから、遺物の同時性一括性の確定については、限定的な資料である。

西宮市立郷土資料館が所蔵している石器類は、21 点ある。内訳は、平坦剥離の施された石器 6 点、横長剥片 1 点、折断加工のある剥片 2 点、打面縁調整のある横長剥片 1 点、加工痕ある剥片 2 点、折断剥片 1 点、剥片 3 点、小縦長剥片 1 点、石核 1 点、石鏃 3 点である。全点が、サヌカイトまたは黒色ガラス質安山岩である。以下、記述する。

平坦剥離の施された石器 6 点（図 141　1-6）

1 は、斜行剥離した剥片表面にある自然面底面から裏面に平坦剥離を施した石器である。基部左側縁にも細かい平坦剥離がある。器面は緻密で斑晶類の脱落痕跡はない。重さ 3.85 g。

2 は、薄い横長剥片の裏面打面部を小さな平坦剥離で除き、左の末端にも細かい調整を施した石器である。器面は風化が進んで斑晶類の細かい脱落痕が生じている。重さ 2.31 g。

3 は、小型剥片の打面部を折断または平坦剥離で除き、打面側縁にも調整を行い、末端左も折断した石器である。器面には長石らしい斑晶脱落痕が生じている。重さ 0.67 g。

4 は、縦長剥片の打面部を折断して、左側縁に平坦剥離加工または緩やかな背部成形を施す石器であるが、欠損して器種判別が難しい。やや風化が進んでいる。重さ 0.20 g。

図 140　甲山周辺地形図（国土地理院）A:甲山山頂遺跡　B:仁川河床　C:北東麓の大阪層群

図 141　甲山山頂遺跡の石器　1

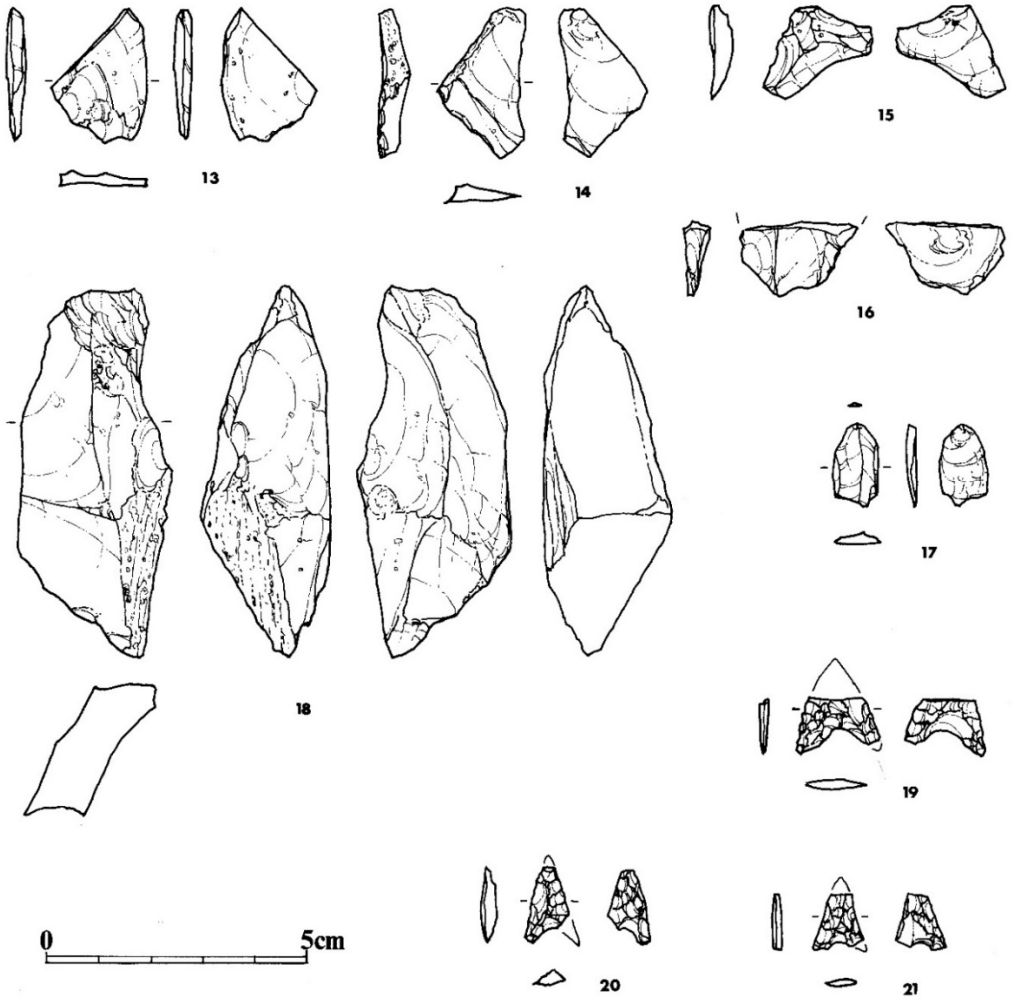


図 142　甲山山頂遺跡の石器　2

5 は、横長剥片の打面部を平坦剥離と折断で除き、剥片末端にも細かい加工を施した石器である。先端部は折断している。白く風化して長石斑晶の脱落が生じている。重さ 2.22 g。

6 は、剥片末端部表面に幅広い平坦剥離、裏面左側に小さい平坦剥離数枚を施したもので、上半は折断している。幅広剥片の上半部破損品、または上半部を意図的に折断加工した平坦剥離の施された石器とすることができる。緻密な黒色石材で、風化により表面に長石または輝石斑晶が浮き出している。重さ 2.60 g。

横長剥片 1 点（図 141　7）

7 は、小型の板状剥片から剥離された横長剥片で、打面左翼が残存し、表面に石核打面縁調整が認められる。風化により器面に長石斑晶などの脱落が生じている。重さ 1.14 g。

折断加工のある剥片 2 点（図 141　8・9）

8 は、底面を持つ横長剥片の打面と左右両翼を折断した剥片である。末端裏面には刃こぼれ状の小剥離が連続する。折断による一種の台形石器に分類できる。風化により長石斑晶脱落が生じている。重さ 2.42 g。

9 は、縦長剥片の打面を折断、末端を平坦加工した剥片である。折断による一種の台形石器に分類できる。風化により長石斑晶脱落が生じている。重さ 1.68 g。

打面縁調整のある横長剥片 1 点（図 141　10）

10 は、自然礫面を打面とした横長剥片で、作業面角を切り落とすように大きく打面縁調整を施す。石核底面縁左に折断が認められる。あるいは、打面縁調整ではなく剥離後の平坦調整剥離である可能性もある。風化による長石斑晶の脱落がある。重さ 4.78 g。

加工痕ある剥片 2 点（図 141　11・12）

11 は、石核小口に自然面を残す厚さ 1cm ほどの板状石核から剥離された横長剥片である。打面調整はない。剥片の末端に折断や小剥離加工痕がある。緻密な石質であるが、風化による長石斑晶の脱落が多い。重さ 12.19 g。

12 は、表面全面に痘痕状自然面を残す剥片の末端部で、打点側は折断されている。表面末端に加工痕が連続する。裏面には流理が現れた風化が強い。重さ 12.87 g。

折断剥片 1 点（図 142　13）

13 は、打点から右翼が剥離時に折れたと思われる底面のある横長剥片である。末端も折れがあって、何からかの整形である可能性がある。やや黒に近い灰色の石材で、風化による長石輝石斑晶の脱落がある。重さ 1.67 g。

剥片 3 点（図 142　14-16）

14・15 は、不定形剥片である。14 は、自然面を打点として石核底面を残す。風化が進行するが、長石斑晶が白化して残る。重さ 2.17 g。15 は、打面縁調整が先行してあって、打面縁調整剥片であろう。重さ 0.96 g。

16 は、打面側を新しく欠損して、本来の形状が判断できないが、右側縁に平坦剥離らしい加工がある。風化により長石斑晶が脱落している。重さ 1.59 g。

小縦長剥片 1 点（図 142　17）

17 は、表面に左から下下上下の 4 面が先行して剥離された小縦長剥片である。打点には小さい打撃瘤があってハードハンマーによる加撃とみられることから、細石刃ではない。あるいは両極打撃による楔形石器の削片かもしれない。黒色無斑晶で緻密な風化の進まないガラス質である。重さ 0.39 g。

石核 1 点（図 142　18）

18 は、剥片素材の横長剥片石核である。打面は左翼に自然面を残し、右翼末端に打面調整を施す。石核底面は撓みが大きい。横幅 4-5cm 程度の剥片が 2-3 枚剥離されているが、流理石理に直交したために剥離作業面上に長石輝石などの斑晶が多く現れ、滑らかな剥離面になっていない。風化が進んで、長石輝石などの斑晶の変質露出や脱落痕がある。数カ所基盤岩である花崗岩からの捕獲鉱物の残存だったらしい脱落痘痕がある。重さ 35.97 g。

石鏃 3 点（図 142　19-21）

3 点とも、縄文時代の所産であり、黒色無斑晶で緻密な風化の進まないガラス質である。19 は、先端を欠く凹基石鏃で、精密な押圧剥離で整形されている。重さ 03.8 g。20 は、先端と右脚をわずかに欠損する凹基石鏃で、これも精密な押圧剥離で整形されている。重さ 0.30 g。21 は、先端と右脚をわずかに欠損する凹基石鏃で、これも精密な押圧剥離で整形されている。重さ 02.6 g。

2. 甲山山頂遺跡の旧石器時代石器

a. 石器石材について

甲山山頂遺跡の石器群のうち、縄文時代に所属する石鏃 3 点と小縦長剥片を除く 17 点の石器類について、石材、所産時期と石器生産の技術的系譜について検討する。

甲山山頂遺跡には、数量 17 点、重量合計 88.90 g の石器がある。サヌカイトと類似する黒色ガラス質安山岩ではあるが、風化が進行したものが多い。器面に基盤岩である花崗岩由来の捕獲物や輝石や長石斑晶の脱落痕が多数あって、石理や冷却破断や斑晶で剥離面が伸展せずに撓むものも見られる。この山頂遺跡の石材は、後段の踏査報告で示す、甲山産出安山岩のうちの黒色ガラス質安山岩 A を選別したものと考える。

近畿地方石器の支配的石材である二上山領域のサヌカイト：黒色ガラス質安山岩（以下サヌカイト）・サヌキトイド類には、かなりの変異があるものの、石器となった石材は、極めてガラス質で甲山山頂石器より斑晶が少なく、基盤岩からの捕獲物も希であることで判別できる。

甲山安山岩には、基盤岩である花崗岩からの捕獲物がやや多く含まれ、また、長石や輝石などの斑晶や石理、冷却節理が多方向にある。このため計画的目的的に定型的な大形剥片が生産できない傾向があって、器形を歪にし、破断や折断が生じやすいという特徴が、試割を行った結果、はっきりと観察できる。このことが、結果として山頂遺跡の石器はいずれも小さいこと、折断加工が多く見られることに関係があるように思われる。

17 の小縦長剥片 0.39 g は、黒色無斑晶で緻密、風化の進まないガラス質で、二上山産出サヌカイトと肉眼観察でき、他の 17 点と異なった由来の石器であると考える。ちなみに、縄文時代石鏃 3 点も、肉眼的観察で二上山産出サヌカイトと判別した。

甲山周辺には、二上山産出サヌカイトで作られた国府型ナイフ形石器があって、いずれも単独発見である。甲山東北、苦楽園六番町、芦屋市岩ヶ平のものを図 143 に示す。1 は、関西大学博物館蔵本山コレクション MY-S0898「摂津国武庫郡甲東村甲山東北」「甲山　大正二ノ三」と記録されたもので、現在の西宮市甲山町にあたり、甲山直近の発見資料である。長さ 8.2cm 重さ 18.77 g を計る（渡邊 2021）。翼状剥片は薄く均等にねじれのない翼を広げる。2 と 3 は、西宮市立郷土資料館蔵である。2 は、芦屋市岩ヶ平のもので、長さ 8.4cm 重さ 014.62 g。3 は、西宮市苦楽園町六番地のもので、先端欠損で 4.6cm 重さ 6.84 g。いずれも翼状剥片剥離の両翼

伸展が阻害されずに均整のとれた器形になっている。

甲山山頂遺跡石器と甲山周辺国府型ナイフ形石器の器面の状態を写真 19 に示す。周辺の二上山産出サヌカイトと甲山の石器石材の風化面に生じる差異が視認できる。

筆者は、2023 年 1 月、仁川河床や甲山周辺山麓、甲山山体で、安山岩の産出状況を踏査した際、剥片 1 点、石核 1 点を採集した（図 144）。筆者採集資料は、甲山での石器生産が、時期は明確ではないものの、山頂遺跡以外でも行われたことを示している。

剥片は、神呪寺山頂間標高 270m で採集。暗灰色無斑晶安山岩で、後段で甲山安山岩 B とする石材である。節理面と思われる自然面を打面として剥離するが、剥離面（腹面）右側に未達剥離を取り込んでいる。所属時期は判明しない。幅 5.9cm 重さ 26.71 g。

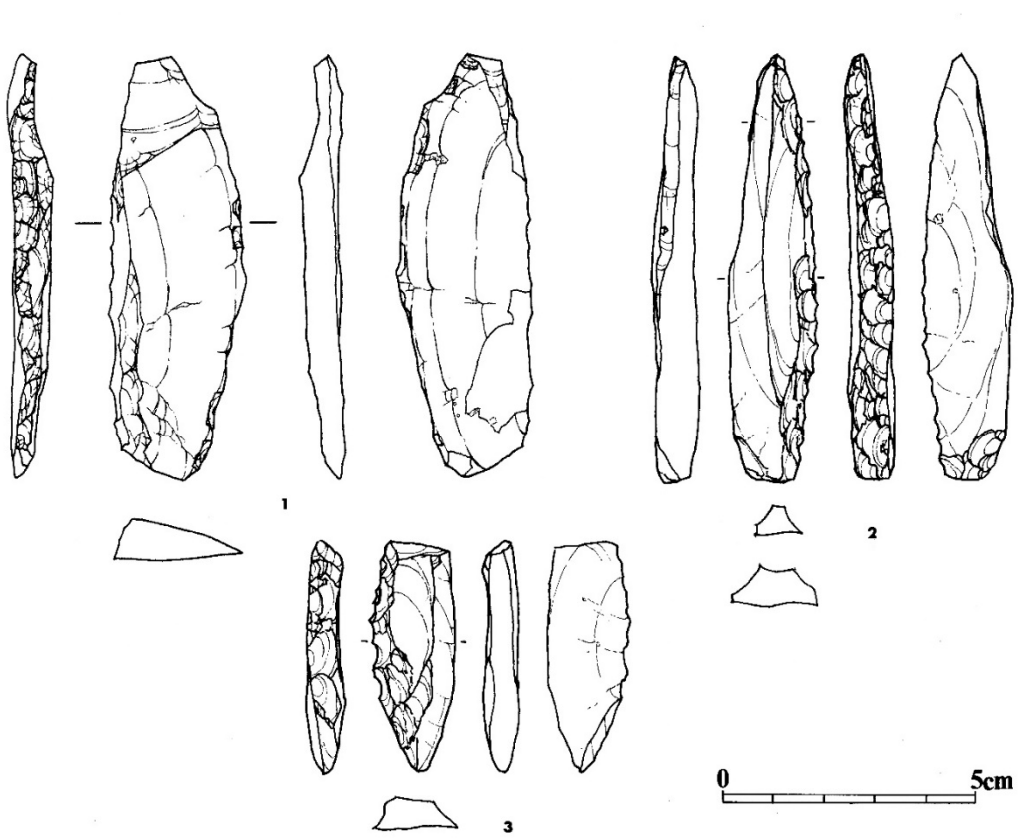


図 143　甲山周辺の国府型ナイフ形石器

1：甲山東北　2：苦楽園六番町　3：芦屋市岩ヶ平　（1 は渡邊 2021 による）

写真 19　甲山山頂遺跡の石器（左）と周辺の国府型ナイフ形石器（右）（縮尺不同）

石核は、甲山山体を下った北西麓標高 160ｍで採集。黒色ガラス質安山岩で、後段で甲山安山岩 A とする石材である。流理の表れた痘痕状自然面が 1 面、2 面は古い冷却クラックか節理面である。打面は石理に沿った剥離面一面で、それに直交して 2-3 面の剥片剥離を行っている。左側面は加撃の衝撃で冷却クラックから大きく剥落する。石材には、輝石長石斑晶が点在し、一部に小さな花崗岩由来の捕獲物がある。剥離作業面高 5.6cm 重さ 281.09 g。所属時期は判明しないが、風化の進行が近く、石材の特徴は山頂遺跡と一致する（写真 20　4・5）。

b.　甲山山頂遺跡の平坦剥離・折断加工による旧石器時代石器群

近畿地方中央部には、後期旧石器時代、二上山産出サヌカイトを支配的石材とする横長剥片剥離技術の伝統があって、横長剥片の打面を除去して背部を整形する横長剥片素材のナイフ形石器が特徴的石器となる「瀬戸内系旧石器」文化が分布する。技術的空間的適応の「極相」は瀬戸内技法によって生産される国府型ナイフ形石器である。瀬戸内系旧石器は、極相期に、二上山北麓でサヌカイト石材を確保、原石産地近傍で原石を盤状剥片に分割（第 1 工程）、それを翼状剥片石核にして翼状剥片を生産（第 2 工程）、国府型ナイフ形石器に仕上げる（第 3 工程）のプロセスをもっている。発生期から終末期まで瀬戸内系旧石器は、二上山のサヌカイト石材を遠くに搬出して使い続けるため、石器生産工程を「異所展開」して空間的構造化し、技術的伝統を形成し、その変動によりナイフ形石器の型式が変化すると考えられる（山口 1994）。

写真 20　安山岩の剥離面（縮尺不同）

1：二上山春日山サヌカイト　2・3：甲山黒色ガラス質安山岩 A（図 1 -C:大阪層群上）　4・5：甲山北西麓採集石器（図 5 -2）　　参考資料 6・7：奈良県生駒市宝山寺安山岩　8：兵庫県香美町寺田火山岩黒色ガラス質デイサイト

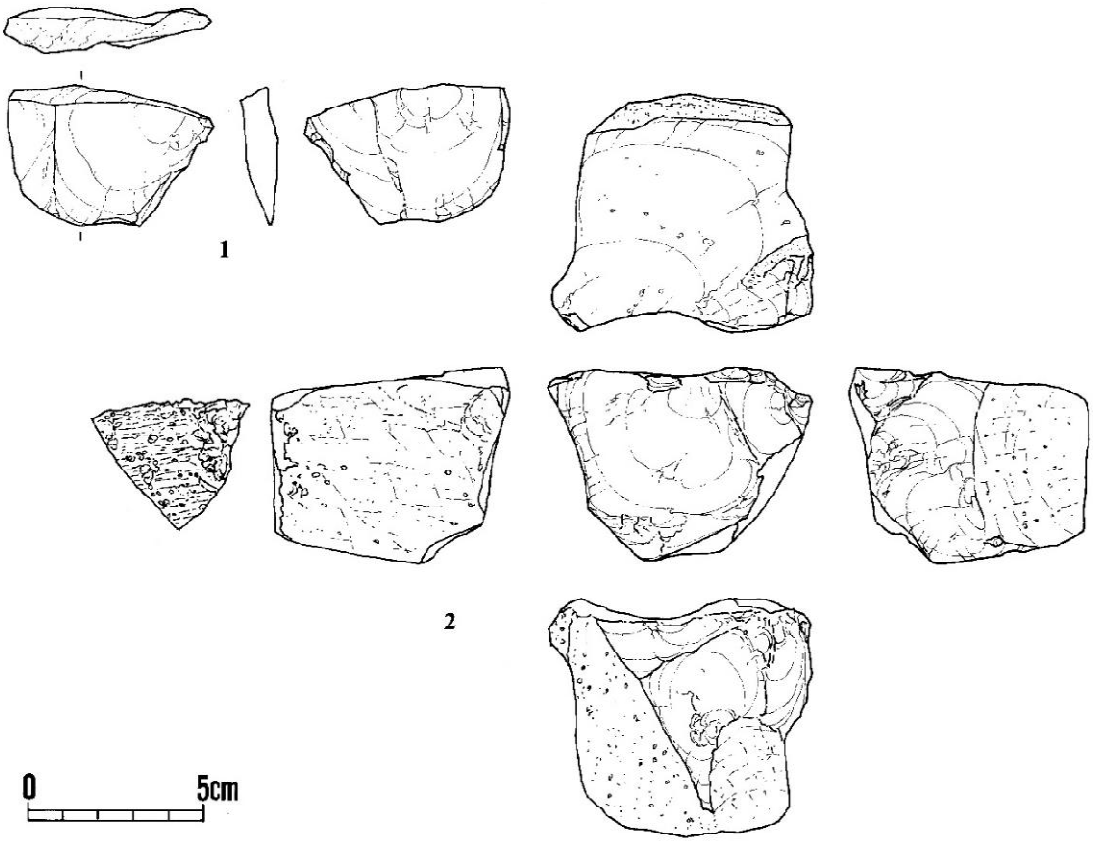


図 144　甲山採集の石器（筆者採集）
1：剥片（神呪寺山頂間標高 270m）　2：石核（北西麓標高 160m）

大阪平野の西北、六甲山東南麓にある甲山は、二上山から北西に約 40km、地形的に低地から丘陵が山地形に変化する大地形の北端境界域にある。石材補充や石器生産の痕跡を伴わない単独発見の二上山所産サヌカイト製の国府型ナイフ形石器があることは、二上山に一元的に縛られた瀬戸内系旧石器の日常的活動領域の辺縁であることを示すと考えることができる。

一方、甲山山頂遺跡の石器は、縄文的な楔形石核や加工度の高い削器、両面加工石器は存在せず、石鏃と小縦長剥片は二上山産出サヌカイトと判定したので、残りの 17 点が縄文期である可能性は除外できる。それらは甲山安山岩 A を石材としていて、小規模ではあるが石器生産と石器使用・遺棄を推定させる内容を保持している。

石材産出地甲山から山頂遺跡に供給した石材は、石材の重量と距離によって仕事量が決定されるという物理学的な補給制約はないので、そのあり方は、むしろ、保持した石器生産技術によって制約なく必要な石器が生産された姿であると考える。甲山山頂遺跡の石器は、瀬戸内系旧石器のナイフ形石器主体石器群とは異なって、定型的な器種分類の困難な個体ばかりであるが、そのような黒色ガラス質安山岩製の不定形石器を主に組成する石器群そのものと判断すべきである。二上山産出サヌカイトと比べると、大きな定形剥片が生産しにくいこと、石器の整

形でも破損の可能性があって、背部加工のような精密な加工が難しいことを、素直に受け入れた石器群の姿なのだろう。

山頂遺跡石器に現れた主な石器生産技術は、不定型な横長剥片剥離技術と石器整形段階の平坦剥離と折断加工により特徴つけられる。特に石器に技術的範型や斉一性のある「型」の存在は感じられない。工程管理のない石核から生産された不定型な剥片に、最小限の改変を施して制作する台形石器・台形様石器主体の石器群と考えられる。時期的には、姶良 Tn 火山灰降灰以前の後期旧石器時代前半期、その中でも早い段階を想定できる。

山頂遺跡でナイフ形石器が組成しないことは、同じ前半期の板井寺ヶ谷遺跡にあるサヌカイト製横長ナイフ形石器と台形石器・台形様石器が組成される石器群（兵庫県教育委員会 1991）とは異なる様相であって、この差異が編年的時期差の現れと考えれば、山頂遺跡が古いと考えることが可能となる。この解釈は、山頂遺跡の石器群が、瀬戸内系旧石器の変遷に先立つという可能性を含ませるであろう。

一方、近畿地方中央部での甲山の空間的位置と石器生産のあり方から考えると、近畿地方中央部において、支配石材である二上山産出サヌカイトの供給が辺縁の地域にあって、瀬戸内系旧石器集団が臨機的な石器生産をおこなったと考えること、または、仮説的に瀬戸内系旧石器集団とは異なる石器文化を有する集団の所産と考えることもできる。前者であれば近畿地方旧石器編年のナイフ形石器文化の一様相とすることになる。後者であれば、近畿地方中央部に瀬戸内系旧石器文化以外の異集団石器文化の「貫入」または「先行」を考えることになる。

今後、近畿地方中央部において、二上山産出サヌカイトを使用する台形石器・台形様石器のみの遺跡、ナイフ形石器と組成する遺跡例を検討すること、甲山安山岩 A を使用する台形石器・台形様石器のみの遺跡、ナイフ形石器も組成する遺跡が、近畿地方中央部に他にもあるかどうか、また武庫川回廊や丹波山塊、氷ノ山山塊、そこに貫入する回廊地形など山地帯内にもあるかどうかを調査し、技術的系統と先後関係と合わせて検討する必要がある。

二上山産出サヌカイトについては、後期旧石器時代、近畿地方中央部から丹波山塊や中国山地東部まで運ばれていた（藁科 2004）とされていて、おそらく二上山産出サヌカイト製台形石器・台形様石器と思われる検出例がある（兵庫県教育委員会 2004）が、出土資料の全数分析は困難であるので、甲山安山岩 A が混在する可能性も注意する必要がある。この場合、近畿地方中央部のサヌカイトを首席材とする瀬戸内系旧石器または先行する台形石器・台形様石器の集団が、甲山安山岩 A を臨機獲得して移動した可能性があることになる。

現時点では、山頂遺跡の石器群を、台形石器・台形様石器群と捉え、姶良 Tn 火山灰降灰以前、後期旧石器時代前半期の位置を与え、そのほかの議論は詳論できる機会を待ちたい。

3. 甲山安山岩とその産出状況

兵庫県南東部に位置する甲山安山岩は、中新世中期の瀬戸内火山岩類に属し、さまざまな様態が観察されたとしても、岩石学的には斜方輝石安山岩で、直径約 500m 標高 309m の椀型を

した小規模な貫入岩体とされる（壷井基裕・澤田慎二郎 2004）。岩体の周囲には、白亜紀末期の六甲花崗岩類と第四紀に堆積した大阪層群が分布する。甲山安山岩は、六甲花崗岩に貫入し、大阪層群に不整合に覆われている。

筆者と渡邊貴亮氏は、甲山安山岩について産出状況を把握する踏査を行っている。筆者らは、石野博信氏が 1965 年に甲山を夙川学院生徒とともに踏査し、1966 年に日本考古学協会第 32 回総会で発表した「兵庫県西宮市甲山石器原材採石地の調査」（石野 1966）の記述を参照した。

甲山は、今から 40 年前までは山頂部は禿山、中腹や山裾も疎林であったが、現時点で森林と化し、山頂部は客土整備されて、甲山の大半が露頭を観察できなくなっているので、立ち入れた範囲は限定的である。この中で発見した石器などの遺物については、別途報告する予定である。まず、石野氏の踏査記録を収録し、その後に確認した甲山安山岩の産出状況を記述する。

a. 石野博信氏 1966 年日本考古学協会総会発表の踏査記録

（地質状況の観察）

昭和 40 年 3 月、奉職する夙川学院地歴部のテーマとして甲山一帯の調査を行なった。調査方法は、甲山安山岩の露頭記録と全山にわたっての石材採集である。安山岩の露頭は東斜面で認められた。全山、等高線 250m の部分で基盤の花岡岩をとりこんでいる状況が明瞭に競察できる。すなわち、甲山安山岩の原堆積地域は、標高 250m 以上の部分であり、以下のものは二次堆積したものと考えてよい。標本は、主として原堆積と考えられる岩石から採集した。採集した標本は 108 地点、150 余点である。

（採石地域）

石器原材の採取は、簡単には礫を採集すれば足りる。この場合、よほど大量でない限り採集地点には痕跡は残らない。今回の調査でも顕著な礫採集地は認められない。

大きな、より良質の石を岩石から割取った痕跡が三つの地点で確認された。

一は東斜面で、岩塊の頂部に水平方向に打撃を与え、剥ぎ取っている。このような岩塊（以下、石材を割取った痕跡のある岩塊を母岩とよぶ）が 3 基点在する。

二は西南斜面で、1m 大の母岩が三基並列して、それぞれ頂部に垂直方向の打撃を加え剥ぎ取っている。

三は北斜面で、10 数基の母岩が 50m 範囲に点在し、その間に石片が夥しく散乱している。母岩からの剥離、すべて垂直方向である。

（採石時期）

1. 剥離面の風化が岩石の自然面（剥離されていない面）と全く同じ程度にすすんでいる。
2. 母岩地域が、良質の安山岩分布地域と一致する。黒くて固い石材が選ばれている。
3. 剥離の打撃点にタガネ状工具の使用痕跡が全くない。
4. 後世の寺院（神呪寺、鎌倉時代）や後期古墳群地城とは反対方向に主な母岩地域がある。大型石材の運搬に不適。

以上 4 点を根拠とし、採石は主に古墳時代以前に行われたと推定している。但、甲山一帯には時代を示す資料（製品・半製品を含めて）の併出はない。

以上、石野 1966 より、標高 250m 以上に甲山溶岩の火山岩頸が露頭すること、東斜面西南斜面北斜面にそれぞれ母岩があること、採石時期は古墳時代以前と推定されるが、時期判定できる遺物は採取できなかったことなどが知れる。筆者らの踏査は、この記述を参考として、散策路や登山道、立ち入れる露頭を踏査したが、甲山全域のごく一部に留まる。急勾配と樹木繁茂のため、石野氏の示す採石地域のほとんどに到達できていないことを明記しておく。

b. 甲山安山岩の産出状況

標高 250m以上には、やや東に偏って暗灰色安山岩溶岩の火山岩頸が、風雨の風化や浸食を受けつつ残存部分が突出し、その突出の東側に板状節理の暗灰色の安山岩が露頭する（図 140）。甲山東北の C 地点の上部には、流理構造の表れた暗灰色安山岩の巨礫が露頭する（写真 21）。暗灰色安山岩は、山頂部全体、北麓の裾野、西側及び南側斜面でも転石や巨礫露頭があって、甲山の主体となる火山岩であると認められた。火山岩頸の 250m以上の露頭では、黒色ガラス質安山岩は発見できていない。火山岩頸と基盤層の花崗岩と接触する境界部分では、捕獲鉱物が多く含まれる。また、場所によっては板状節理が激しく発達し、風化によって安山岩のパイ状分解が発生している場所もある。北麓の沢には、大量の安山岩片が堆積する。甲山全体で、多くの転石は激しく風化して劣化、礫石全体が白色化や粘土化したものが多くある。

甲山安山岩 B

火山岩頸東側（写真 22）や標高 210m の北東麓に岩脈の可能性のある部分（写真 23）、西麓のごく一部に、新鮮な無斑晶またはガラス質で石器生産が可能と思われる暗灰色安山岩もあることから、この暗灰色無斑晶またはガラス質の安山岩を、「甲山安山岩 B」と呼称する。図 144-1 の剥片は、風化しているが同種の石材と思われる。写真 24 に、良質のものの筆者試割と礫を示す（写真 24）。暗灰色無斑晶の安山岩 B の多くは均質な安山岩でほとんど斑晶を含まず、均等に伸延するきれいな剥離を生じるが、ガラス化に劣っているらしく、筆者の試割の加撃打点周辺が白く圧壊する。表面から水による劣化が進行し、白色や黄色の粘土に変化する。あるいは石基の微斑晶が荒いかと思われるので、切片の顕微鏡による岩石学的記述が必要である。考古学的には、剥離後の風化進捗も把握する必要がある。

甲山安山岩 A

甲山北西麓で、花崗岩風化土と山体からの堆積物中に埋もれて、黒色ガラス質安山岩礫を複数発見した（写真 25）。これを「甲山安山岩 A」と呼称する。直径数 cm から 30cm 程度の礫で、その多くは流理構造を示す痘痕状発泡痕に覆われている。周辺には一般的な甲山安山岩や安山岩 B の巨礫や石片が多数存在するが、黒色ガラス質安山岩は 1 %以下の出現率で、礫もそれらより小さい（写真 26）。この周辺で図 144-2 の石核を採取し、続いて複数の石器などの遺物を採集したので、周辺が遺跡地である可能性が高い。遺跡保護のため、ここにでは位置を示さない。採集遺物の検討の後、別途報告する予定である。

写真 21　C 地点上部の露頭

写真 22　火山岩頸東側標高 250ｍの露頭

写真 23　北東標高 210ｍの露頭

写真 24　甲山安山岩 B　暗灰色無斑晶質

写真 25　北西麓の礫

写真 26　北西麓の甲山安山岩 A　黒色ガラス質

写真 27　C 地点大阪層群中の礫

写真 28　C 地点の甲山安山岩 A　黒色ガラス質

写真 29　仁川河床の甲山安山岩（A：左　B：右）

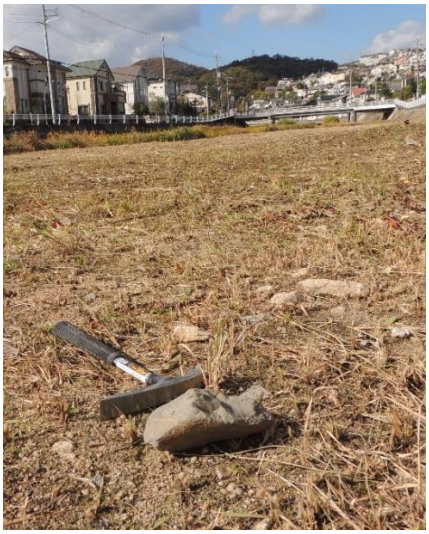


写真 30　仁川河床の転石　1

写真 31　仁川河床の転石　2

写真 32　灰色無斑晶安山岩（写真 15 の個体）

甲山北東麓 C 地点周辺（図 140-C）は、第四紀に堆積した大阪層群が基盤層である花崗岩を覆って残存している。ここでも黒色ガラス質安山岩の礫をわずかに発見した（写真 27)。直径 10cm から 30cm 程度の礫で、流理構造を示す痘痕状発泡痕に覆われている（写真 28)。周辺には一般的な甲山安山岩や安山岩 B の巨礫や石片が多数存在するが、黒色ガラス質安山岩は 1 % 以下の出現率で、礫も小さい（写真 28)。

黒色ガラス質安山岩は、内部が漆黒で石基がガラス質、輝石や長石の斑晶、わずかに基盤岩である花崗岩由来の捕獲物を取り込んでいる（写真 28)。流理構造があって薄い節理を取り込んだもの、石理や冷却節理を潜在させるものがある。これら均等な伸延による一定形状の目的剥片の量産剥離作業を行うには、阻害要因となって困難が予想される。

仁川河床

甲山の北西から東方向に流下する仁川には、甲山からの安山岩転石や、周辺の大阪層群中に含まれていた安山岩礫が洗い出されて転落するものがあって、仁川が武庫川に合流するまでの広い範囲で安山岩礫を認める（写真 30・31)。薄い板状節理や石理、冷却節理が激しく発達し、パイ状の分解が発生する大形の暗灰色安山岩や花崗岩片を捕獲したものが目立つ（図 29 右)。これらは甲山本体からではなく、甲山噴火期に流下した溶岩流が起源かもしれない。わずかに黒色安山岩の小礫が流下している（図 29 左)。河岸の大阪層群から洗い出されたと思われる灰色板状節理の大礫は、筆者の試割では加撃打点が白く圧壊し、剥離面には溶岩流の遊動流理らしい撓みを生じ（写真 32)、もろい石質は、石器生産に困難と思われる。

現在、仁川 B 地点（図 140）より下流の河床では、石器制作が可能な甲山安山岩の質と形状の礫の確保は困難であろう。

c. 甲山の岩石学的地質学的記載

大阪市立大学の藤田和夫教授は、1959 年の西宮市史第 1 巻で甲山地形の形成と周辺地質について記述し（藤田 1959)、市原実教授は、第四紀大阪層群の堆積と六甲山系、生駒山、上町台地、北摂山地の隆起、大阪湾と平野部地下の沈降の関係を解明した（市原 1991)。

現在の甲山は、新第三紀の瀬戸内火山岩区の活動による火山で、火山丘は浸食されて消失したが、火山岩頸溶岩火道が耐え抜いて尖って剥き出しで残存したものである。噴火時の溶岩は当時の地表に広域に流れたが、長期の露出風化と浸食によって、本来あった溶岩地形は破壊された。続いて第四紀の大阪層群が堆積した当時、六甲山や生駒山、上町台地などの隆起は始まっていないので､破壊された安山岩溶岩は､大阪層群に巻き込まれて山体から遠方に運ばれる。現在は、甲山火山岩頸が聳える周辺は標高 250m まで基盤岩の花崗岩となって、その東麓には大阪層群が残存し、さらに取り巻くように隆起した北方の標高の高い段丘や南方の段丘に甲山安山岩を含む大阪層群が分布することから、甲山から流下した溶岩の量は、膨大だったことが推定できる（図 145)。大阪層群堆積当時、甲山からの水域があった範囲に、甲山安山岩礫が運ばれた可能性が考えられることになる。

大阪層群の堆積後半の約 100 万年前まで、大阪周辺は海水が浸入したり、湖沼化したりを繰り返した平原であって、大阪層群が広域に分厚く堆積した。続いて六甲や生駒、上町台地、北摂山地などが隆起、逆に大阪平野と大阪湾が沈降をはじめ、約 50 万年前頃に最も激しく活動して、現在も継続する「六甲変動」が起こる。大阪層群が標高 250mまで持ち上げられたところがある一方、大阪湾の深部では大阪層群下部は深さ 500mを超える深さまで引き込まれているという。大阪層群の堆積量の膨大さが理解されるが、甲山からの安山岩もここに流入していることは間違いない。

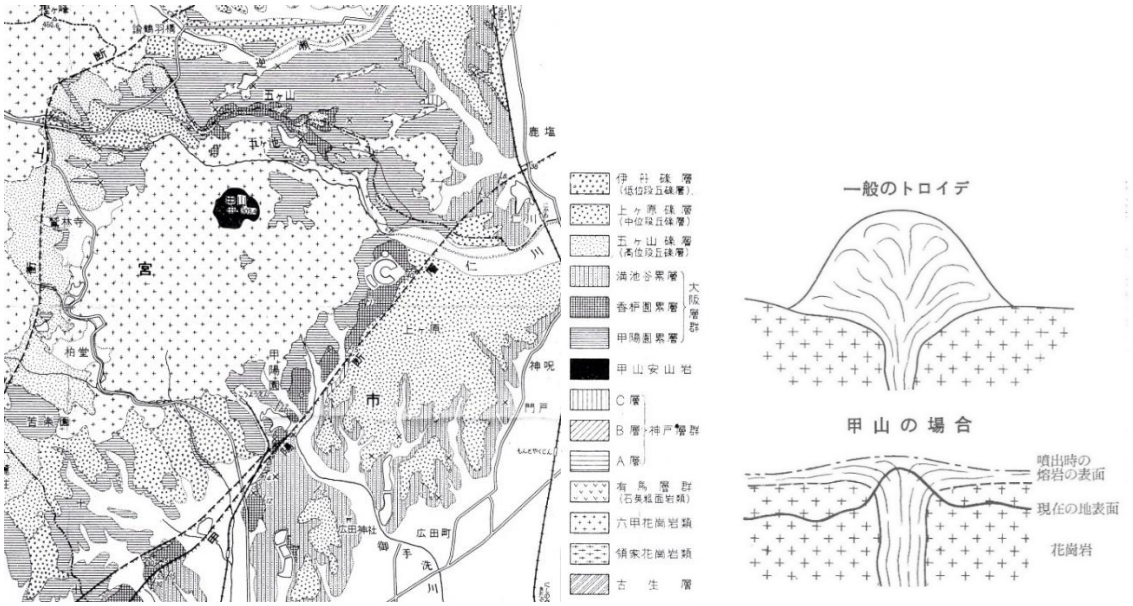


図 145　甲山周辺の地質図と甲山地形の成因（藤田 1959）

石野氏のご教示によれば、川西市雲雀丘北の段丘礫層にも甲山安山岩が含まれていて、石器石材になった可能性があるという（註 1)。さらに早く、壇上重光氏は、川西市摂津加茂のある段丘に、安山岩礫が含まれており、それが石器の石材になった可能性を指摘している(壇上 1959)。大阪平野北部、北西摂の地域の段丘上の堆積層や河川開析部を踏査して、石器石材となる甲山安山岩 A が段丘堆積物中に運ばれた範囲を捕捉することは、考古学側の課題である。

甲山安山岩の岩石成分については、古くはナウマンや小藤文次郎東京帝国大学教授が分析し、後には藤田教授の 1959 年の分析（表 15）と、2004 年の壷井基裕・澤田慎二郎の分析（表 16）がある。両者とも、甲山安山岩を一括して分析し、筆者の認めた岩相の差異は考慮していない。筆者の安山岩 A と安山岩 B は、小藤のサヌカイトとサヌキトイド（サヌカイト類）と対応するか確かめる必要がある。

藤田教授は、甲山安山岩と二上山、四国讃岐の屋島を比較して、甲山安山岩は瀬戸内火山岩区サヌカイト類として非常に類似した組成を持っていること、差異は主要成分組成ではなく微量鉱物組成や火成岩組織によるものであろうとする。壷井・澤田は、甲山安山岩の SiO2 量は、

58.0 から 65.7 wt.%の範囲であり、岩体中心部から、花崗岩と接する岩体周縁部に向けて、SiO2 量が増加する傾向を不明瞭ではあるが認めた。瀬戸内火山岩類に特徴的にみられる高マグネシウム安山岩には属さないが、ハーカー図で六甲花崗岩と瀬戸内高マグネシウム安山岩類との混合線上に諸成分が分布することから、火山内部での六甲花崗岩の捕獲溶融を考察した。

現在、火成岩である安山岩、サヌカイト類は、蛍光 X 線分析によって微量成分の組成比較が行われ、遺跡から出土する石器は、それと対比することで石材産出地を推定することが可能とである（藁科 2004）が、甲山安山岩が石器原産地であることを前提として再分析が必要である。

成分	甲山	二上山		屋島
		春日山	明神岳	
SiO_2	62.94	61.72	64.58	64.02
Al_2O_3	14.34	19.18	18.05	15.42
Fe_2O_3	1.10	0.53	2.34	1.78
FeO	3.53	4.11	0.73	2.43
CaO	4.19	5.59	5.02	2.93
MgO	4.97	2.11	0.87	4.45
Na_2O	5.00	2.65	2.60	3.45
K_2O	1.99	1.99	2.23	2.57
$H_2O(-)$	0.55	0.23	1.69	0.38
$H_2O(+)$	1.70	0.45	0.58	2.32
MnO	0.08	0.10	0.03	0.09
TiO_2	tr.	0.62	0.53	0.42
P_2O_5	0.15	0.18	0.25	0.04
計	100.54	99.47	99.50	100.30
分析者	通産局	地質調査所		

表 15　甲山安山岩の成分組成表 5-3-2
（藤田 1959）

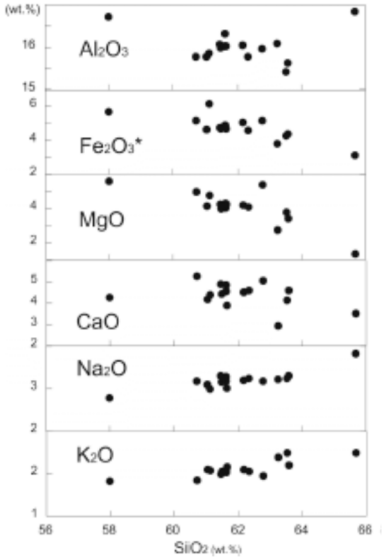


表 16　甲山安山岩ハーカー図
（壷井・澤田 2004）

4. 甲山安山岩 A の石器をめぐって

石野博信氏は、1966 年の日本考古学協会第 32 回総会で、「兵庫県西宮市甲山石器原材採石地の調査」と題した発表（石野 1966）では、甲山安山岩が北西摂の遺跡で石器石材となっていること、甲山から離れた遺跡への石器石材の搬出方法も考察した。

a.

石野博信氏 1966 年日本考古学協会総会発表の甲山安山岩石器石材についての考察

（周辺遺跡から出土する安山岩製石器材質との関連）

近畿地方では、フタゴナイトとよばれる大阪府二上山の安山岩が石器原材の著名なものとして知られている。

讃岐サヌカイトとフタゴナイト甲山安山岩は、岩石成分、組織とも大差ないと言われる。すなわち、各遺跡から出土する「サヌカイト類」の原産地がどこかということを、化学的に証明することは難しい。しかし、素人の

肉眼観察でも、二上安山岩と甲山安山岩は識別できる。前者は緻密で真黒であり、後者は「黒」でも、白い斑点を含む。

肉眼観察によって、大阪湾沿岸の縄文・弥生遺跡（大阪府：四条畷・竹之内・国府・昭橋・池上、兵庫県：朝日ケ丘・上の島・田能・加茂・五ケ山・伯母山）出土のサヌカイト類を分類すると、淀川以東は二上安山岩、以西は甲山安山岩という地理的区分ができる。他方、同一造跡で、時期によりサヌカイト石材が変移するという事実は認められない。

（石材の搬出方法）

遺跡では、大阪府昭橋を除いて安山岩礫の併出はなく、多くは 15cm 内外の剥片として検出される。従って、原産地からの搬出は、礫のままではなく、剥片として、あるいは大形の石片の状態で行われたと思われる。兵庫加茂では、それが大量に搬出（ママ）され、累積していた。

石野氏は、二上山と甲山のサヌカイト・サヌカイト類は、肉眼観察で識別可能であるとし、大阪湾沿岸の縄文・弥生時代の遺跡から出土したサヌカイト類を分類、淀川左岸は二上山、右岸は甲山が主体となる地理的区分があることを指摘した。さらに甲山から安山岩石材を原礫ではなく大形剥片の状態で搬出する搬出したこと、兵庫県川西市加茂遺跡では、甲山から大形剥片が搬入されたことに対応すると報告した。続いて刊行された摂津加茂遺跡の報告書では、この石材判定に基づき、甲山安山岩剥片を累積埋納した土坑があって、甲山からの大形剥片の大量搬入と備蓄の証拠とされている（関西大学 1968）。

筆者は、関西大学在学当時、考古学研究室に収蔵されている摂津加茂遺跡発掘石器類を観察した機会があった。そのとき、石鏃や石錐などの精製石器に二上山産出サヌカイト製が多くあるが、削器や剥片素材刃器類、大形剥片に二上山産に似ているが、石野氏の指摘に該当すると思われる石材が大量に含まれていることに気がついた。それらには、石野氏の「後者は「黒」でも、白い斑点を含む」と記述に一致する特徴があって、それが甲山産出安山岩の基盤岩花崗岩の捕獲物や大形斑晶などであるなら、すべてではなくとも、かなりの比率が甲山産出安山岩の可能性があることになる。それが正しければ、続いて加茂遺跡の甲山産出安山岩が、甲山安山岩 A なのか B なのか、まったく異なる搬入石材なのか確かめねばならない。

蛍光 X 線分析などでの石材原産地判定を待つまでもなく、石野氏の指摘に従い、まずは、摂津加茂遺跡に精粗 2 種類の安山岩石材の存在を再検討する必要を認めたい。

b. 三田市奈カリ与遺跡と溝口遺跡、北西摂、淀川右岸・武庫川回廊の遺跡

近畿地方中央部周辺の遺跡で、まったく甲山という前提なしに、肉眼観察で石器石材のガラス質安山岩を観察し、二上山産出サヌカイトとは異なった特徴がある石材を区別した例がある。

武庫川回廊にある弥生時代中期から後期の三田市奈カリ与遺跡では、蛍光 X 線分析による石器石材産地分析は行われていない。そこでは、経験的な肉眼観察を行い、緻密で良質の二上山

産出サヌカイトとみられるものと、「断口はほぼ同様な黒色を呈するが、石質が均質でないらしくザラザラしている。流理構造が発達しており、剥離面（痕）は往々にして石理面に沿って、末端が階段状剥離を呈している。きわめて広い剥離面は完全に石理走向と一致し、平坦な場合がある。」と記述される石材の二種類があって、後者を「安山岩」と呼び分けている。量的には、サヌカイト 1、安山岩 2 の比率であるという（兵庫県教育委員会 1983）。

記述を見る限り、奈カリ与遺跡の「安山岩」は、甲山で観察した安山岩 A または B とよく一致した特徴が表れている。また、その組成比と器種の使い分けも、摂津加茂の筆者観察で記憶する比率に近いかもしれない。もし、奈カリ与遺跡の「安山岩」が、従来の蛍光 X 線分析の検証対象である四国讃岐や淡路島岩屋産出サヌカイトではなく、甲山産出安山岩であるなら、武庫川回廊を辿っての搬入例となる。

同じく武庫川回廊上にある縄文時代石器の出土した三田市溝口遺跡では、石鏃や楔形石器、削器、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片、石核など 75 点のサヌカイト類に、「緻密で良質のものと粗質で全体が淡い緑色を帯びるもの」の二種類があって、奈カリ与遺跡とよく似た様相であるという（財古代学協会 1986）。

縄文と弥生の両時代、甲山産出安山岩が、武庫川回廊を通って三田まで運ばれたとすれば、甲山安山岩 A の石器素材は、回廊内でむしろ二上山に対して優越する石材であった可能性がある。このことは、石野氏の 1966 年発表で指摘された、淀川右岸の摂津加茂遺跡など北大阪、北西摂の弥生時代縄文時代にある様相について、再度の検証を促す契機となろう。

旧石器時代の前半期の黒色ガラス質安山岩製台形石器・台形様石器群の分布については、類似するような石器類が、甲山のある北西摂の平野周辺、大阪平野北部の低位段丘上、武庫川を遡上して篠山盆地に到達するまでの武庫川回廊にあって、さらに、峠を下った加古川回廊・氷上回廊・由良川回廊の、瀬戸内日本海間を縦断する回廊地形上などにも点在する可能性がある。

以上、各時代の淀川右岸・武庫川回廊の石器類が甲山安山岩 A であるか、その動態はどう復元できるかを考察するため、甲山安山岩を再分析して二上山産出サヌカイトか他産出石材かどうか、光 X 線分析などで再度検証する必要がある。また、その対局に予想すべき近畿地方北部の同種石材産出地の探索も続ける必要がある（山口・渡邊 2023）。

本稿では紙幅がつきたので、これらについては機会を求めて再論したい。

c. サヌカイト類蛍光 X 分析の甲山安山岩再分析の必要性

考古学側から正当に言及されることのなかった甲山安山岩は、今までの蛍光 X 線分析で、既知の原産地を地図化した「サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地」（藁科 2004）では、「▲あまり良質とは言えない産地」とされていた。その分析サンプルは、甲山安山岩 A を選抜したのではなく、一般的な甲山安山岩が供されたのではないだろうか。

埋蔵文化財の調査に際して、出土したサヌカイト類の蛍光 X 線分析によって原産地を推定することが行われているが、その候補地は、すでに検体が与えられている中で順位がつけられる。

その遺跡の近傍に産出候補地があるかどうかは、考古学側が把握すべき項目であり、未知の産出候補地を見落し、産出地を無視して検体が供されなければ、原産地分析は考古学的な意味を持たない作業となる。すでに分析がなされた出土資料であっても、より近くに新しく判明した原石原産地があれば、蛍光 X 線分析の再分析を提案しないといけない。

近畿地方中央部にあって、支配的優越的存在の石材であるサヌカイトは、その分布域を埋め尽くしているかのような印象があるが、今回の甲山山頂遺跡石器群と石野氏 1966 年発表の再確認は、そこに再度座標を持ち込むものである。本稿で繰り返し指摘したが、摂津加茂遺跡や三田市奈カリ与遺跡には、二上山産出サヌカイト以外の石材があって、それと甲山安山岩 A や B の一部が対応する可能性がある限り、その視点での再分析が必要と考える。また、武庫川回廊の入り口にある甲山の安山岩 A が、回廊に搬入されたとして、その判別の精度を高めようとする場合、回廊の反対側や回廊上に原産地の候補地がないかは、考古学の側で調べておかないといけない案件であることは、言うまでもない。

d. 近畿地方黒色ガラス質安山岩石材の「サヌカイト」名称について

石野博信氏は、1966 年の考古学協会総会発表で、「讃岐サヌカイトとフタゴナイト甲山安山岩は、岩石成分、組織とも大差ないと言われる。」と述べた。ここで、四国讃岐の讃岐石：サヌカイトと甲山のフタゴナイト（二上山の黒色ガラス質安山岩）と、石材の名称を分けて記述したのは、濱田耕作京都帝国大学教授の河内国府遺跡 1917 年発掘調査報告書の註に、「・・・されは一般的には玻璃質安山岩と称し、特に国府石器の如く、二子山より原石を採り来れることを想定し得るものに就きては、之を「二子石」と称するを可とす。」とあることを受けたからであろう。なお、「二子石」とは、二上山の古名の一つ「二子山」からきた呼称である。

石野氏は、甲山安山岩が二上山や讃岐屋島の黒色ガラス質安山岩と岩石学的な差はなく、輝石安山岩類に包括されること、現在の岩石学の命名法は、最初の発見地名などの個別名称ではなく、リンネ分類学に則した一般名称に産出地などを付す二命名法に準じることを理解して、甲山産出ガラス質安山岩を、二上山産出サヌカイトの濱田教授命名「フタゴナイト」と重ねて呼称したのである。

筆者は詳細を繰り返さないが、濱田教授の二上山産出黒色ガラス質安山岩名称「二子石」「Futagonite」について、命名の経緯と現在発生している石器石材研究上の齟齬について言及し、「二子石」「Futagonite」を現在使用することは学術命名として不可であることを明らかにしたことがある。筆者は、近畿地方同種石材については、讃岐石と区別して、濱田教授の提案に遡り、一般名称「玻璃質安山岩」、アップデートして「ガラス質安山岩」に、産出地名を冠することを提案している（山口 2022）。

近畿地方の考古学的調査で発見される石器石材は、肉眼観察で二上山産出石材であると思われれば、自動的に讃岐の石の意味である「サヌカイト」と記載する趨勢がある。実は、この部分で、すでに濱田教授の提起を無視して、近畿中央部と讃岐、両地域、さらに交指交流の予測

される中間地域の石器文化の実態を曖昧にする記載法となっているのではなかろうか。

また、中国地方日本海沿岸や近畿地方北部には、瀬戸内火山岩区に属さない火山岩の産出もあって、日本海側の石材は岩石学的な理由で「サヌカイト」呼称は不可となっていることも想起する必要がある。ガラス質安山岩は、「瀬戸内火山岩区」など同一性を記述する場合はともかく、現在の岩石学の趨勢を意識して、考古学的にも意識的に区別して記載されるべきであろう。

本稿の甲山産出黒色ガラス質安山岩製石器を、「甲山産出サヌカイト製」と記載すれば、記述上混乱を生ずるし、なにより記載法として、「居心地の悪さ」を感じるのは筆者だけだろうか。近畿地方中央部での石器石材名称「サヌカイト」の慣性の圧倒的な強さを認めつつも、二上山産出と甲山産出石材の両石材、今後発見される同種石材を、「黒色ガラス質安山岩」を一般名称とし、産出地名を冠して、「二上山産出黒色ガラス質安山岩」、「甲山産出黒色ガラス質安山岩」のように呼称することを提案したい。

要　旨

1. 甲山山頂遺跡の石器は、甲山産出黒色ガラス質安山岩を石材とし、後期旧石器時代前半期の台形・台形様石器群に位置づけられ、近畿地方中央部の二上山産出サヌカイトを主体的石材とする瀬戸内系旧石器とは、異なった石器文化適応である可能性がある。
2. 甲山には、他にも石器生産遺跡が存在する。
3. 甲山安山岩は、石器石材となる黒色ガラス質安山岩（安山岩 A）がわずかに産出し、暗灰色無斑晶安山岩（安山岩 B）や暗灰色安山岩が主体である。これらが瀬戸内火山岩区のサヌカイト・サヌキトイドに相当するかは確認が必要である。
4. 甲山から流下した溶岩流が破壊された礫が大阪層群に取り込まれて流下し、北西摂の段丘や沖積地の地下深くに、広域に分布する可能性がある。安山岩礫露頭の確認は、考古学側の確認作業が必要である。
5. 甲山安山岩は、石野博信氏の指摘の通り、淀川右岸地域の各時代の遺跡で石器石材となり、また武庫川回廊を遡上して北の丹波山地帯内にまで搬出された可能性がある。
6. 甲山安山岩が石器石材となっているので、甲山安山岩 A を新たな比較検体として、近畿地方サヌカイト・黒色ガラス質安山岩製石器の原石産地について、蛍光 X 線分析など科学的方法で再検査、再分析する必要がある。
7. 甲山産出黒色ガラス質安山岩が石器石材となっているので、近畿地方の同種石材である二上山産出「サヌカイト」も、「讃岐石の意味のサヌカイト」ではなく、「二上山産出ガラス質安山岩」と呼ぶ方が適切と考える。

註

1　石野博信氏 2022 年 8 月のご教示による。

「発表していないが、1960 年代半ば、当時古墳群の分布調査を宝塚－川西間で実施していて、阪急雲雀丘花屋敷駅から北の丘陵部斜面で、サヌカイト礫（自然転石）を採取したことがあって、この礫は二上山から来たのではなく、同種石材で既知の産出地なかで一番近い甲山の礫と推測し、加茂遺跡の石器素材となっていると考えた。（大阪市大の藤田・前田先生の教示あり）」「雲雀丘花屋敷周辺では、南の沖積地にはサヌカイト礫はなく、北の丘陵部斜面で礫層中にかなりの量が転石として含まれていた。」

「甲山は、高等学校のクラブ活動で踏査した。当時、甲山には防火帯によって伐採された空間が広がっていて、山頂部から裾野まで山体を踏査できた。高等学校のクラブ活動なので、資料は今自分で保持していない。」「二上山と甲山のサヌカイトの区別は、肉眼観察による。加茂遺跡のサヌカイトを甲山としたのは、甲山の踏査結果による知見での肉眼観察が基準である。」などのご教示を頂いた。

夙川学院で製作した踏査報告書と採集資料については、夙川学院の学校が閉校したことから所在不明との情報を頂いたので、筆者は、その探索を続けたい。

第 4 節　大阪府富田林嶽山周辺の火山岩産出地と龍泉寺西採集の石器

1. はじめに

近畿地方中央部の旧石器は、二上山北麓に産出する火山岩類の一つ、サヌカイト（瀬戸内火山岩類ガラス質安山岩）を主要な石材としている。一方、近畿地方中央部から和歌山県北部には、二上山以外の第三紀瀬戸内火山岩類の小規模産出もあるが（沢井・佐藤 1989）、考古学的にどのような石材が産出したか、石器になっていたかについては、十分な検証が行われていない。筆者は、佐藤隆春の紹介した火山岩産出地のなかで、現状確認が困難な岩脈などを除いて、溶岩や岩床、岩頸など顕在として記載されているものをできるだけ踏査したいと考えた。今回は、大阪府富田林市周辺の踏査を行い、石器となった可能性のある石材の産出を確認したので、これを紹介したい。

2. 富田林市嶽山と汐ノ宮の火山岩

嶽山火山岩は角閃石輝石安山岩の溶岩で、花崗岩の基盤上の甘南備累層（二上層群原川累層相当）の花崗岩類の礫を含む礫層を覆っている。嶽山火山岩は、本来暗灰色の塊状または板状節理の緻密だが風化して灰褐色～白色となっているとされる。踏査では、嶽山山頂周辺及び北尾根（図 146-B）で同様の火山岩が分布していることを認めた。龍泉寺の東斜面では、花崗岩円礫と共に灰色の流理が縞状に現れた流紋岩（デイサイト）や角閃石斑晶の目立つ黒色安山岩など新鮮な火山岩転石が存在していて、甘南備累層に由来する可能性がある。二上山北麓春日山産出ガラス質安山岩（サヌカイト）に類するような石材は発見していない。

嶽山西方の石川川底に露出する汐ノ宮火山岩(写真 34)は、顕著に柱状節理が発達した産状を露出させ、大阪府レッドリスト地形地質版ランク C に指定されている。この火山岩は、かんらん石輝石安山岩の溶岩で、甘南備累層のザクロ石黒雲母流紋岩や無斑晶安山岩の角礫を含む礫岩層を覆っている。踏査では、汐ノ宮火山岩の柱状節理部分は、石基が荒く節理も強くて石器石材には不向きであろうと思われた。一方、汐ノ宮火山岩に覆われた礫層中には、黒色無斑晶安山岩の大礫が含まれていて、これが一部ガラス質であることを認めた。類似の黒色無斑晶安山岩や黒色と灰色の流理が縞状流紋として現れた流紋岩（デイサイト）も、汐ノ宮石川東岸から横山にかけての山裾切通しや住宅の石垣などに積まれ、場所によっては路面露頭（写真 35）している。

踏査の所見では、嶽山から汐ノ宮にかけて甘南備累層礫岩層に、無斑晶（ガラス質）安山岩大礫や流紋岩礫などの二上層群原川累層相当の火山活動由来の火成岩が含まれていると推測された。今後、石器石材になりえる火山岩を探るとき、嶽山火山岩や汐ノ宮火山岩よりも、それより下位の層群の露頭を注目したい。その他、南の金胎寺山周辺には、火山岩脈が複数貫入し

ているとされるが、未踏査である。

3. 嶽山龍泉寺西採集の石器

踏査中に、竜泉寺西の緩傾斜（図 146-A）で若干の石器類を採集した（写真 36）。台形様石器（図 148-1）は、表面が白く薄い風化面で覆われた緻密な黒色ガラス質安山岩（サヌカイト）製である。瀬戸内系横長剥片素材ナイフ形石器の背部加工とは異なり、幅広の剥片を縦に折断しており、折断の一部がヒンジとなっている。灰色の流理構造が流紋を縞状に観察できる流紋岩またはデイサイト製の石器のうち図を示した 1 点（図 148-2）は、一側縁に削器作業部を作出するが、3 面は折断または折損し、本来の器形は不明である。あるいは流理構造のため破断したものか。写真の残り 4 点も、石核または大形剥片に加工を施したものが破断したものと思われ、顕著な流理構造のある同種石材に組織的な石器生産に限界があったことを示している。松脂石製石核は、黒曜石に似た松脂石の円礫を半截する大剥離と不定形小剥片数枚の剥離が観察できるが、有効な剥片生産ではない。松脂石礫は、やはり甘南備類層中の火山活動由来である可能性がある。

4. 近畿地方小規模ガラス質火山岩の産地をめぐって

二上山北麓の黒色ガラス質安山岩（サヌカイト）は、近畿地方の石器生産おける支配的石材であるが、旧石器時代においてその構造は瀬戸内系横長剥片剥離伝統による石器生産の異所展開が構造化して顕在化する。近畿地方中央部にあって、嶽山や汐ノ宮などに産した石材が利用されたなら、この石器生産の異所展開の構造の外にあることも考えられる。西宮市甲山山頂遺跡（山口 2023）のように、小規模原石産出地での臨機的な石材確保と石器生産は、ひょっとすると時間軸を異にすることも考えられるだろう。汐ノ宮から石川は、河内平野へと流下しており、弥生時代での転石利用も可能性を考慮する必要があろう。これから近畿地方小規模ガラス質火山岩の産地の踏査と記載を続けていきたい。

図 146　嶽山周辺地形

図 147　嶽山周辺地質図（沢井・佐藤 1989）

写真 33　嶽山遠景写真

写真 34　汐ノ宮火山岩露頭

写真 35　無斑晶安山岩（横山）

写真 36　嶽山龍泉寺西採集の石器類

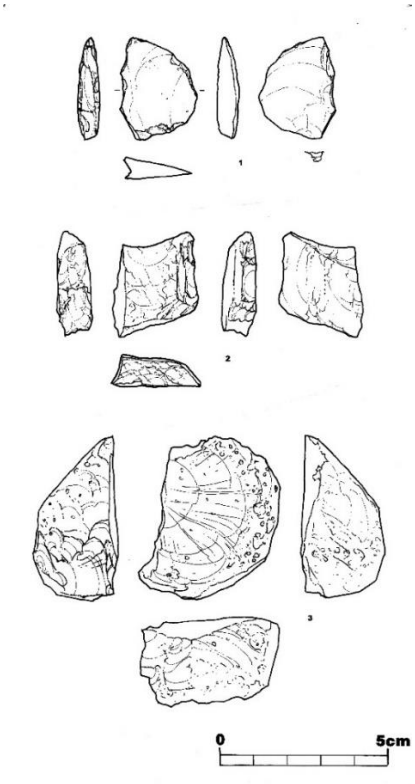


図 148　嶽山龍泉寺西採集の石器類

第 5 節　河内長野市寺ヶ池西岸発見の石器について

位　置　：河内長野市小山田町-木戸町（池底）　寺ヶ池西岸

発見石器：寺ヶ池火山岩製打製石器等約 10 点(2023 年 3 月末)

発見日時：2023 年 2 月 23 日～

発見者　：山口卓也

経　緯　：

山口は、近畿地方の旧石器時代研究を進める中で、後期旧石器時代の国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を極相とする「瀬戸内系旧石器」が、その支配的石材である二上山産「サヌカイト」と、石器生産における工程の「異所展開」を組み込むことで構造化していると考えてきた。一方、近畿地方中央部に中期や前期旧石器時代の石器群があるとすると、石器生産が異所展開に構造化しない段階と想定され、サヌカイト以外の多様な石材とくに二上山産以外の火山岩石材産地の踏査も必要と考えた。

この現地確認は、現地の火山岩を採集して火山岩の産状を記録すること、石器石材に利用可能なものがあるかどうか、また実際に石器生産の痕跡があるかどうかを確かめることを目的とした。

アーバンクボタ 28 号の沢井・佐藤両先生の記事を参考にして、甲山、熊笹峠東、宝山寺、三笠山、蛾瀬、信貴山、畝傍山、耳成山、嶽山、汐ノ宮、鍋山などを踏査し、どのような火山岩産出するか、石器となり得る石材の産出状況、石器生産の痕跡があるかも確認した。その他に石切などの小規模岩脈の踏査も行っているが、現時点で火山岩は未見である。

佐藤「大阪周辺から和歌山市東方の新第三紀火山岩類」『瀬戸内区の特性』1985 に、河内長野市小山田町天野川支流とある地点が、アーバンクボタで寺ヶ池とされる地点と見当をつけ、その記載に「黒色緻密な岩石」「ガラス基流晶質」「板状節理発達」と記載され、さらに巽 1981 論文ではマントル起源マグマの噴出とされていること、アーバンクボタ 30 号の市原先生の大阪層群分布図に、寺ヶ池西の火山岩が、思ったより大きく描かれていることから、石器石材になる火山岩の産出を予測して 2023 年 2 月から現地踏査を開始した。

写真 37　寺池台住宅地石垣の安山岩　B 地点　写真 38　希望ヶ丘住宅地の安山岩　F 地点

写真 39　寺池台の西麓 I 地点、天野川河床の火山岩転石（青い土層は大阪層群か）

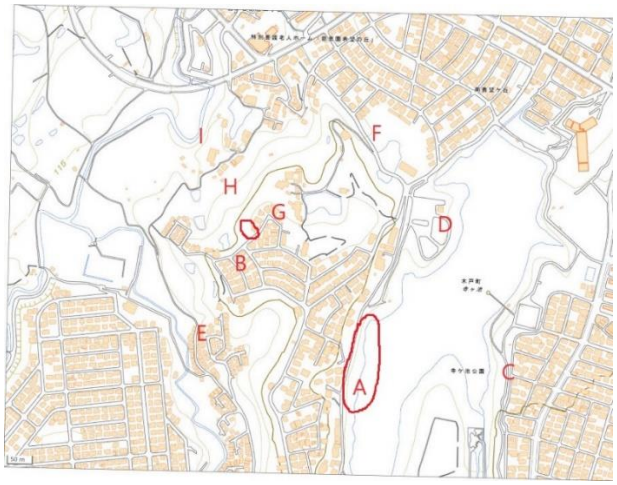


図 149　周辺踏査地図

A：寺ヶ池西岸石器採集箇所　B：寺池台最高所・寺池台緑地　C：寺ヶ池東岸火山岩採集
D:弁天公園火山岩採集　E：板状火山岩露頭　F：寺池台北麓・南希望ヶ丘住宅地火山岩採集
G：火山岩採集　H：火山岩礫採集　I：天野川河床火山岩礫転石あり

石器発見の状況：

2022 年秋から 2023 年冬、寺ヶ池の水面が低下して、池底斜面が現れ、池底に降りることが可能となっていた。

石器 1 を、2 月 23 日、寺ヶ池西岸池底に降りて、寺ヶ池火山岩の産出状況を確認中に発見した（A 地点）。

寺ヶ池周囲を一周する遊歩道の肩から池底への西岸斜面上、池面の波打ち際として長期間晒されていたと思われる場所で、砂層上面に載った状態で発見した。岸に露頭する地層中ではなく、洗い出された状態であるので、発見位置またはさらに上位の地層から洗い出された可能性が高い。周辺を注視したところ、分布域の南端の流路（B 地点）から石器 6 を発見したが、この周辺は西の U 字浸食谷の住宅地造成で掻き出された砂礫の可能性がある。

西岸での石器発見を受け、それ以降踏査を続けて石器または石器の可能性のあるものの採集を行った。

現時点で採集した石器はすべて、岸に露頭する大阪層群や段丘堆積物などプライマリーな地層中ではなく、いずれも砂層上面に載った状態で発見した。洗い出された状態であるので、発見位置またはそれより上位の地層から洗い出されて転落した可能性が高い。

合計 10 点の石器または石器の可能性のあるものを採集している。

3 月末に寺ヶ池の湛水が進み、池底を踏査することはできなくなった。

寺池台の標高 160m付近、寺池台緑地周辺では、板状火山岩、紡錘状火山岩が採集されるが、一部には「打ち欠き」のある火山礫や石核を採集したので、寺池台最高所周辺も注意する。

図 150　寺ヶ池西岸の石器採集範囲

写真 40　　1968 年の寺ヶ池改修

A:石器 1　B：石器 6　C：石器 2　D:石器 3

写真 41　寺ヶ池西岸　石器発見箇所

写真 42　石器 1 発見状況

写真 43　寺ヶ池西岸　石器 6 発見状況

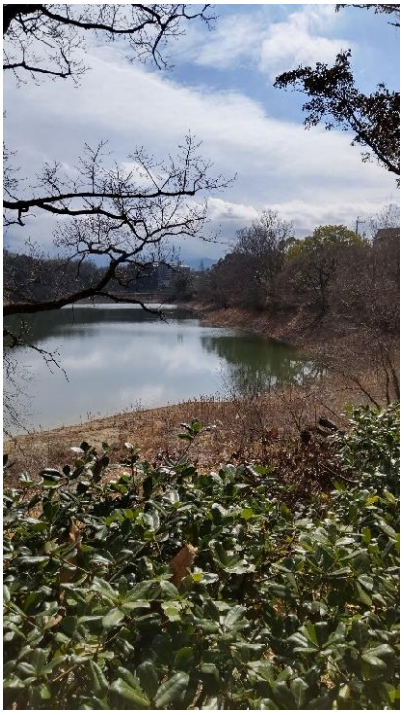


写真 44　　寺ヶ池西岸遠景（北から）

発見地の地質環境：

発見地の寺ヶ池西岸は、河内長野市小山田町と木戸町（池底）にあたり、アーバンクボタ 30 号の市原実「大阪とその周辺地域の第四紀地質図」を参照するなら、周辺の丘陵部は大阪層群下部、トップに上位段丘堆積物が残存する。六甲変動に連動した富田林丘陵・千代田丘陵に繰り返された隆起と断層崖形成によって、天野川・石川の河川争奪が生じ、流域変更のたびに丘陵部に浸食谷が南北方向に刻まれる。

寺ヶ池は、この浸食谷をせき止めたもので、浸食の激しい部分では谷底まで大阪層群下部が露出するが、浸食谷底に浸食時に河床堆積した砂層を残す部分があって、石器を発見した砂層は、この砂層にあたる可能性があると考える。

ただ、寺ヶ池西方の丘陵に、短い浸食谷の痕跡があって、ここが 1970 年ころ住宅地となった際に、この短い谷から掻き出されたものである可能性もあるので、現地の地質学的調査が必要である。

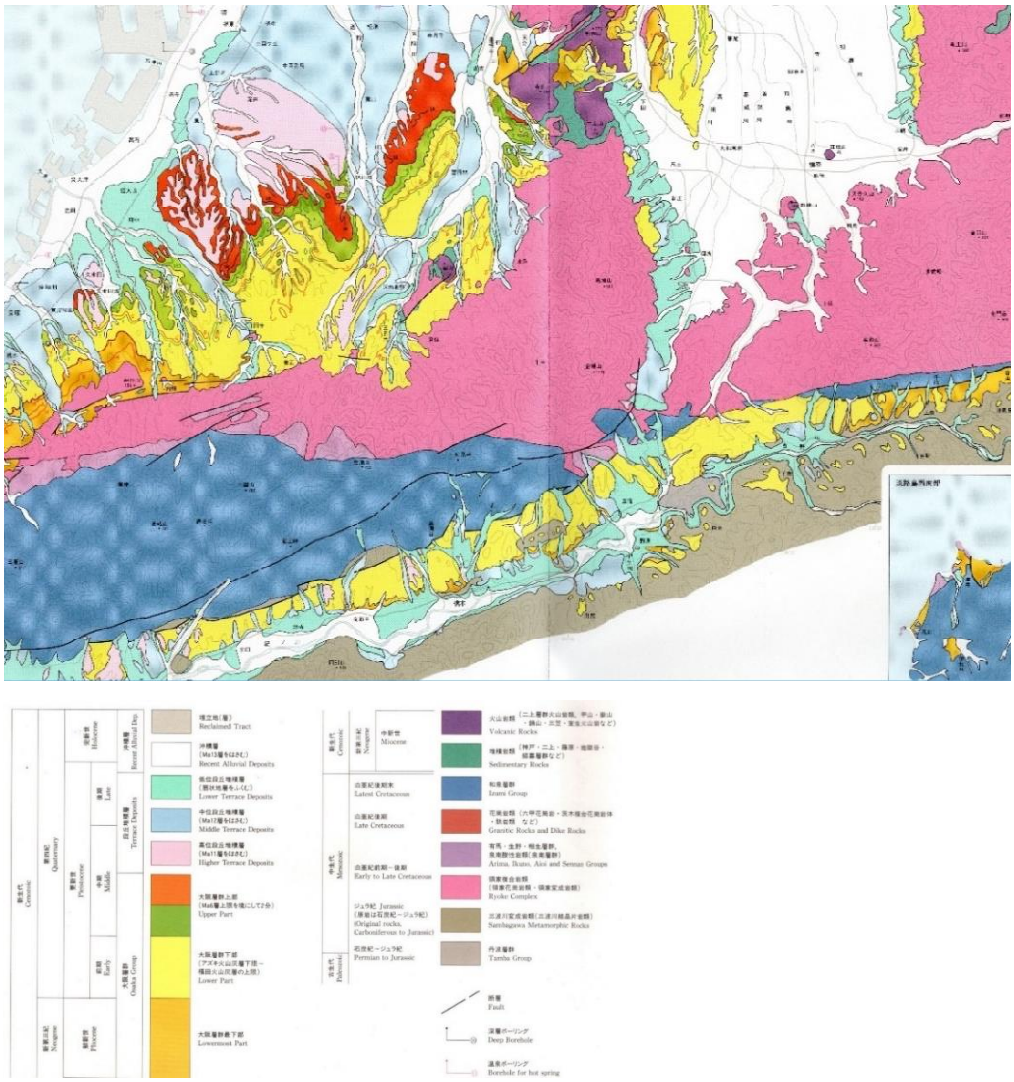


図 151　　アーバンクボタ 30 号（市原）

寺ヶ池西岸採集石器：

採集した状況から、すべてが単一時期とは判断できない。一部には、時期の違う石器や、住宅地開発などで生じた新しい「偽石器」が混入している可能性もあるので、所属時期や石器群としての評価は、遺跡の地質学的年代の検討と埋没環境の検討が必須である。

近畿地方で既知の縄文時代弥生時代や後期旧石器時代以降の石器は、ほぼ二上山北麓産出の黒色ガラス質安山岩（サヌカイト）を石材とする。一般的には、近畿地方の石器時代の石器は、すべて「サヌカイト」であるという決めつけまである。

近畿地方中央部の後期旧石器時代では、瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統のもと、二上山の石材、石核や石器素材剥片、製品としてのナイフ形石器を遠隔地まで安定して運んで使うという「石器生産の異所展開」という極めて特異な地域適応石器文化が顕在化し、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法を「極相」する。この現象は、後期旧石器時代人にとって二上山北麓の「サヌカイト」が石器生産に圧倒的に「良質」であって、二上山北麓のサヌカイトの発見以降、他石材はほぼ顧みられなくなったことを示す。

一　方、前期中期旧石器時代では、日本列島への人類の到達と拡散、定着というプロセスを経て、それぞれの地域環境への適応のなかに石器石材の開発を考えないといけない。前期中期旧石器人の地形単位内での遊動と臨機資源開発と在地石材の選択、火山岩産出地の発見とその選択である。また前期中期旧石器時代の石器生産技術は、押圧剥離技術はなく、世界史的にも古人類学的にも旧人段階の、ハードハンマーによる直接打撃で石器生産を行う段階で、いわゆる「大形重量石器」と小形の剥片石器が組みあわさって組成する場合が多い。

寺ヶ池西岸で採集した石器類には、現時点では二上山北麓産や寺池台で産出した「サヌカイト」に相当する石材は使われず、寺ヶ池火山岩のバリエーションの範囲で石材が使われている。このことは、サヌカイトに固執している石器群ではないことになり、後期旧石器時代ではなく、前期中期旧石器時代に属する可能性を考える。さらに、採集した石器を一括と仮定するなら、小形剥片石器が乏しいという特徴があり、現在日本列島で知られている前期中期旧石器と様相を異にし、より古相を示す石器群である可能性がある。地質学的年代の判定と合わせて、資料の検討が進んだ後に詳細を公表したい。

石器として間違いない石器 1 は、重量 860 g の「大形重量石器」である。一部に花崗岩らしい獲得物のある寺ヶ池火山岩で、引き延ばされたガラス粒や風化による脱落痕がある大形剥片を素材として、剥片打面を取り去って大剥離面（腹面）から背面側に周辺の 240 度程度を器形調整したものである。器種としては、大形剥片素材の「クリーバー」に分類できる。その刃部は、大剥離面側に連続した剥離があって、使用によるダメージである可能性がある。石器 1 の表面は、寺ヶ池西岸で長く水中に晒されたらしく、鉄粒細菌によって錆色に染められている。また、器面全体に鈍い光沢があり、背面稜線に擦ダメージがあるが、顕著な転磨や破損箇所はない。石器 1 によく似た石材（同一の可能性あり）の剥片 1 点があって、剥離角度や先行剥離の状態などが石器 1 の器形整形技術と一致する。

その他の採集石器は、人為的な加工の痕跡を認めるが、器種としての斉一性にかけるものが多い。採集経緯から考えて、ひとまとまりの石器群として判断できるかどうかは、「偽石器」の可能性も含めて慎重に検討する必要がある。

写真 45　寺ヶ池西岸採集の石器 1（2023 年 2 月 23 日採集）

1 の裏面

写真 46　寺ヶ池西岸採集の石器 2　　寺ヶ池西岸採集の石器 3

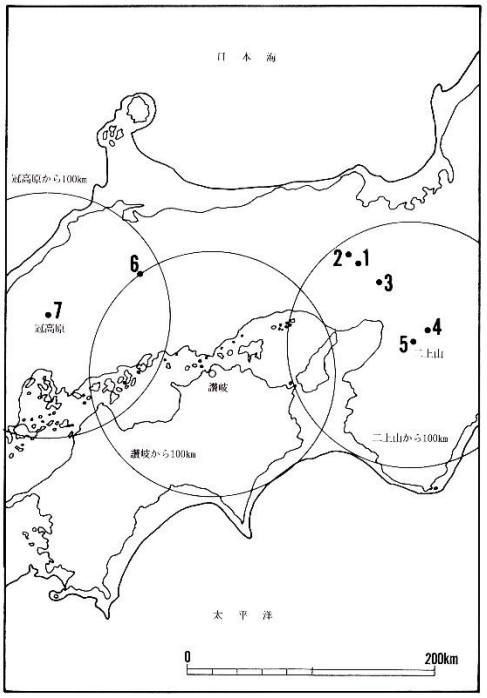
発泡のある寺ヶ池火山岩溶岩製の石器（偽石器？）。石材が脆いこと、住宅地の石垣に同等石材が積まれている場所があり、石材の風化程度などで妥当か、検討が必要である。

写真 47　寺ヶ池西岸採集の石器　4　　5　　6

寺ヶ池火山岩安山岩製の石器　僅かな加工痕がある。　石器 6 は、分布の南端、西の浸食谷住宅開発で掻き出された砂礫中にあった可能性があり、一部ダメージを受けている。

写真 48　2023 年 10 月、水位の下がった寺ヶ池

第６章　瀬戸内系旧石器の構造的研究と成果



遺跡分布図

1：板井寺ヶ谷　2：七日市　3：溝口　4：平城左京

5：桜ヶ丘第１地点　6：野原早風　　7：冠高原Ｄ地点

第1節 旧石器時代研究の背景

近畿地方の旧石器研究史を本書「承前」でたどり、近畿地方瀬戸内系旧石器の構造研究の進展についても言及したが、この時間軸は、筆者自身も当事者であった。

1946 年の岩宿遺跡発見、1950 年代の国府遺跡再発掘発掘（島・山内・鎌木 1957）以降、近畿地方にも旧石器時代の遺跡があることを知った郷土史家や考古愛好家、考古学ボーイを巻き込んで、田野を歩いて表面採集を行い、発見の報告が相次ぐ時代を迎えた。地域ごとに旧石器遺物を蒐集していた著名な考古資料収集家は枚挙にいとまがない。

1970 年代､神戸市西部で青少年期を過ごした筆者も､休日には自転車を漕いで田野をめぐり、遺物を採集した。石器は壊れずに見つかり、何に使うものかが大体わかり、また石材に綺麗なものもあって、その採集を好むようになった。採集した石器は、ほとんどがサヌカイト(黒色ガラス質安山岩)で、縄文時代石鏃や削器などであったが、少しだけ、側縁が刃部で反対側縁を背部加工したナイフ形石器が混じっていて、鎌木・高橋の『日本の考古学』1（鎌木・高橋 1965）で勉強して鑑定できるようになった。このときに蒐集した石器類は、1980 年､『旧石器考古学』に資料紹介した（山口・真野 1980)。

1974 年、二上山北麓サヌカイト原産地周辺の旧石器時代遺跡を報告した『ふたがみ』が刊行（同志社大学旧石器文化談話会 1974）されて、近畿地方の旧石器時代研究は発展期を迎える。小遣いで購入した『ふたがみ』の図版を開くと、掲載された石器類は、原石産地の石器生産遺跡のため大きく重い。二上山から遠く 60ｋｍも離れた神戸西部で、私が表面採集できた旧石器は、剥片のようなものばかりでナイフ形石器も不細工で小さかったので、「この大きさの差は、なぜだ？」「ひょっとして兵庫県播磨地方東部に国府型ナイフ形石器の時期はないのか」と考えた記憶がある。

「国府型ナイフ形石器」は､「瀬戸内技法」で作られ、原石産地で盤状剥片が剥がされ、それが翼状剥片石核となり、剥がされた翼状剥片はナイフ形石器に加工されるので、原石産地には膨大な石器遺物が集積している。神戸では、盤状剥片石核も盤状剥片も見つけたことはなく、原産地周辺遺跡の綺麗な翼状剥片や国府型ナイフ形石器を拾ってみたいと願うようになった。この頃は、瀬戸内系旧石器編年は、国府型から宮田山型、井島 1 型への直線的変遷という形態学的理念で編年（鎌木 1965）され、素材剥片剥離技術も、瀬戸内技法から櫃石島技法に変異するとされていた。確かに、備讃瀬戸地域や近畿地方中央部の資料を基に組み立てられた変遷案は、当時一定の説得力があった。一方、備讃瀬戸と近畿地方中央部の二上山と、両方から挟まれて「辺縁」である播磨地方西部で石器コレクターであった筆者には、腑に落ちない部分が残っていた。そもそも石核のない遠隔地遺跡で見つかる石器の生産が、どこで行われたかという問題が、後に浮かんでくる根となった。

大学入学を果たして考古学研究室に所属すると、網干善教先生から先史考古学、主に旧石器時代を専攻することを許された。研究室では、関西大学博物館本山コレクションを蒐集した本

山彦一毎日新聞社長が組織した本山発掘隊の河内国府遺跡出土石器整理を担当し、研究室の各地の調査にも参加した。

さらに、なかなか触れない旧石器を専攻するとあって、自発的に学外へ武者修行に出て、各地の石器収集家を訪ね、実物を見せてもらって広く教えを請うことにした。瀬戸内海から日本海まで縦貫する兵庫県は土地勘もあってフィールドに手頃だったので、各地を踏査した。但馬地方では、養父郡関宮在住の高松龍暉先生とともに、養父郡八木川流域(高松・山口 1981・1985：第 2 章第 1 節)や温泉町畑ケ平遺跡群（高松・山口 1991：第 2 章第 3 節）などで、山陰火山岩帯の安山岩系や在地石材製石器類を観察し、報告する機会を得た。その詳細観察は、後に、山陰の旧石器のあり方が近畿地方中央部の瀬戸内系旧石器とは異なるとする論考を生んだ（山口 1988・2021：第 5 章第 2 節)。1981 年、山形県越中山遺跡群の採集石器を紹介して、非サヌカイト地帯の国府型石器群の剥片剥離技術の変容について考察した(山口 1981:第 2 章第 2 節)。

古代学協会の発掘にも武者修行参加させていただき、鈴木忠司氏から真摯な研究の進め方を学んだ。静岡県寺谷遺跡（鈴木編 1980）と富山県野沢遺跡（鈴木編 1982）は、遺跡内の遺物分布に潜む構造を、個体識別や接合作業を通して有機的に解析する手法で、世帯ユニットや集落構造まで昇華して描き出すものであった。旧石器時代集落研究として、砂川遺跡（戸田・安蒜 1974）に続く重要な研究であり、この現場に参加した経験は、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の分析に役立つことになった。

1982 年 3 月、修士論文「瀬戸内系の旧石器と横長剥片剥離伝統について」で、近畿・東部瀬戸内に分布する瀬戸内系旧石器を、ナイフ形石器と素材剥片剥離が一体となって、技術伝統を形成していることを整理し、器種であるナイフ形石器とその素材剥片剥離技術は一体であり、構造化して受け継がれる石器文化として理解しなければいけないと考えたことは、以後研究の基礎となった（第 4 章第 1 節)。

1983 年、ヒストリアにて、旧石器時代の石器が作られ、使われて捨てられること、石器を作るために石材を確保しなければいけないこと、使うたびに新たに補充しないといけないことから、石器文化伝統と石材環境の異なる地域間で、石器製作のあり方が違う可能性を検討した。静岡県寺谷遺跡、富山県野沢遺跡、埼玉県砂川遺跡の石材の個体別資料の組成比と、近畿地方の桜ヶ丘第 1 地点遺跡、鶴峯荘遺跡、国府遺跡、郡家今城遺跡 C 地点のサヌカイト製石器の石器制作関係資料の組成比を比較した。その結果、二上山北麓の火成岩であるサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）を使用する瀬戸内系旧石器は、原石産地で瀬戸内技法第 1 工程が行われ、盤状剥片や第 2 工程の翼状剥片や製品である国府型ナイフ形石器が遠方に搬出されていることを指摘し、遠隔地への搬出物の重量を軽減する技術に社会的な行動と石器生産技術が構造化していると考えた（山口 1983：第 4 章第 3 節)。

この発想は、はさみ山遺跡（一瀬 1990）と 1984 年に発掘して 1991 年に報告書が出た板井寺ヶ谷遺跡のデータも加えて遺跡発掘の石器群を、数量だけではなく重量の側面でも再検討して、より明確化する研究に繋がった（山口 1994：第 4 章第 4 節)。筆者は、考古学ボーイであったとき、二上山北麓の原石産地周辺の遺跡の石器と、播磨東部で採集する石器の違いという、

直感的な違和感が、当時の社会と石器生産技術の地域への適応のための構造化であったことを理解するに至ったのである。

近畿自動車道舞鶴線敷設のための板井寺ヶ谷遺跡の緊急発掘調査が兵庫県埋蔵文化財調査事務所によって行われていたが、1984 年、旧石器が出土し、下層の調査のために筆者が参加することとなった。発掘では、南部の湿地部分に堆積した泥炭層中に姶良 Tn 火山灰の降灰があって、その上位にも大山系火山灰の降灰があり、北半部の陸地部分でも姶良 Tn 火山灰の上下に文化層があって、近畿地方の旧石器時代編年に最も確実な編年データとなった。また、古代学協会の鈴木氏らが取り組む潜在構造を顕在化する個体別識別や接合作業等を駆使し、統計学的分析も取り入れながら世帯ユニットの存在を抽出し、集落構造を明らかにしようとする試みを、筆者は精力を傾けて行った。その成果は、報告書巻末「板井寺ケ谷遺跡をめぐる諸問題」と、以降に行った細論「近畿地方台形様石器群の一様相」などを再構築して、本書第 3 章「兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の二つの石器群と古民族学的構造」に収録した。板井寺ヶ谷遺跡では、徹底した自然科学的分析も行われており、集落景観復元のモデルとなった。

さらに、特記したいことに、下位文化層の石器類分布にあるサヌカイトとチャート等の二分する石器群のあり方である。遺跡内空間内に排他的に配置されていることであり、サヌカイト石材が南半に、チャート等石材が北半分布する。両者の関係は、実は、近畿地方においてサヌカイト製瀬戸内旧石器が分布する中央部（播州平野や播磨灘、古大阪平野）と中国山地東部の山間部での旧石器時代遺跡分布のあり方とよく似ていて、中国山地内の遺跡や接触地帯の遺跡には、遠方からの石材で作られた石器が一定数組成されるが、近畿地方中央部の遺跡では圧倒的にサヌカイトの占有率が高く、石材に排他性があるにがわかっている。二つの石器群は、本来技術伝統を異ならせる別の地域集団であり、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層で、遺跡内で集団としても同じ仕組みを見せながら、一時的に「集落合同」したものと解釈できる状況を示している。両者の境界を越えて動く石器があるとすれば、それは両者の接触と交流、交換の行為の証拠であることになるし、その延長には、「ヒト」の動きも重なっているはずである。板井寺ヶ谷遺跡下位文化層は、旧石器時代遺跡の「古民族学的構造」を抽出するという成果をあげた。

近畿地方の遺跡分布に目を転じると、このような状況は、遺跡の立地を、中国山地内、近畿地方中央部といった大地形の周辺地形要素の比率を比較することによって、両者石器文化の環境選択を検討することができる（山口 1991：第 4 章第 5 節）。この空間に、第 4 章第 4 節で検討した石器生産工程の「異所展開」がレイアウトされて、社会的、石器生産技術的な、立体的に構成される構造となっていると考える。

板井寺ヶ谷遺跡の「集落合同」は、中国山地帯内在住集団は、本来の居住空間で通年居住していただろうが、瀬戸内系旧石器集団にとっては、本来の領域を離れて北の武庫川回廊を遡上したという、例外的な遊動から起こった集団間接触である。瀬戸内系旧石器本来の領域での遊動は、原石産地周辺遺跡から発して、遠隔地辺縁へ向かって移動し、石材限界に達した時点で回帰がプログラムされている。この回帰システムは、おそらく旧石器時代の社会にとって環境資源の最大獲得のための季節移動であったと予測する。古大阪平野の中心近い原石産地周辺に

は寒冷な季節に集まり、温暖化と同時に領域遠隔地辺縁の季節性資源を求めて分散発進するモデルが、最も合理的であろうと考えた。篠山盆地の環境資源は、近畿地方中央部・古大阪盆地と異なっていたに違いない。瀬戸内東部から近畿地方中央部の旧石器時代の遺跡は、この季節的回帰遊動により分布の粗密が生じたのではなかろうかと考える。

石器生産における工程の「異所製作」は、瀬戸内系旧石器の編年は、国府型ナイフ形石器から宮田山型ナイフ形石器、井島Ⅰ型ナイフ形石器というような直線的異な変遷モデルではなく、空間構造も加味して再構築する必要を生じさせた。まず、あくまで直線的技術形態学的変遷モデルは、裏預けがない理念モデルであったことを再確認したい。ナイフ形石器と瀬戸内技法の規範が緩んで小型化、不規則化するという変化は、緩いものから強固なものへと逆方向にもありそうなこと、もう一つは、原石産地では規範が守られるが遠隔地では緩みやすいという現象があると捉えられた（山口 1987：第 4 章第 2 節）。

今や、近畿・瀬戸内東部の旧石器時代編年は、いったん編年根拠がリセットされて、古から新、新から古、原石産地から近と遠という、三次元の座標の中で再構築することが求められる。既知の石器群を、このような状況であることを認識した研究者が、置き直す作業となるだろう。

21 世紀に入って良好な遺跡例の追加は停滞していたが、近畿地方中央部では、大阪市南部、八尾地域で広域火山灰が絡む重層遺跡の検出が期待される。それらと板井寺ヶ谷遺跡下位文化層、七日市遺跡（久保・藤田 1990）など、中国山地東部の遺跡と組み合わせての編年再構築が求められるであろう。この中で、播磨地方で青少年期を過ごした筆者の根源的な疑問が解消さ

段　階	石器群の特徴	主要な石器	広域火山灰と^{14}C年代	主な遺跡		
				兵庫県	但馬高原	近畿・中国山地・日本海沿岸
Ⅴ	細石刃石器群	細石刃	Suk 16740±150 MsP 24000±150 Uh Od Sh 24320±150 AT 24830±100			恩原M文化層
Ⅳ	横長剥片剥離技術を基礎とした石器群の解体	多様な小型ナイフ型石器			別宮家野？	星田布懸・原田３～４層
Ⅲb	国府石器群の解体と有底横長剥片剥離技術の展開	多様な横型ナイフ型石器・角錐状石器・周縁加工尖頭器（？）		西脇	別宮家野？	馬見二ノ谷・藤阪宮山・八尾南第6地点
Ⅲa				碓岩南山	上山？	原田５層・津之江南
Ⅱb	角錐状石器群の展開	国府型ナイフ形石器・角錐状石器			上山？	恩原S文化層・翠鳥園上層・八尾南第３地点
Ⅱa	国府石器群の展開			板井寺ヶ谷上位文化層	杉ヶ沢？	郡家今城C・翠鳥園下層・国府第３地点
Ⅰb	瀬戸内技法の出現 石刃技法を基盤とする石器群の出現 汎列島的な共通性をもつ石器群	ナイフ形石器・台形石器・刃部磨製石斧		七日市第Ⅲ・Ⅳ文化層 板井寺ヶ谷下位文化層	畑ヶ平？	恩原R文化層・野原早風A地点・原田７層上部・法華寺南・瓜破北
Ⅰa				七日市第Ⅱ文化層 溝口・勝手野	畑ヶ平	原田７層下部・冠D地点Ⅴ層・地宗寺・小林河原X層・長原14層

＊^{14}C年代はすべてAMS測定による未較正年代

表 17　但馬高原地帯後期旧石器時代遺跡の編年（久保 2021）

れると思う。

2021 年、但馬地方高原の遺跡については、久保弘幸によって編年案が提示された（久保 2021）。兵庫県北部但馬地方には安山岩製主体石器群と在地石材の石器群があって、兵庫県下や、近畿・中国山地、日本海沿岸と軸を分けて整理し、主旋律になるステージの特徴を近畿地方中央部石器群の変遷で明示する。近畿地方中央部から広域の編年を俯瞰するのではなく、兵庫県、但馬地方といったゾーン、おそらく瀬戸内系旧石器の「遠隔地」「辺縁」にあたるところで組み立てられた編年を歓迎したい。

筆者のこれからの目論見は、この兵庫県・但馬高原の編年に、石器群個々の石材の原石産地との間のやりとりを明らかにし、続いて予測される二上山や四国讃岐の黒色ガラス質安山岩と在地石材が交指関係となった変遷を明らかにするというものである。兵庫県播磨地方、丹波地方、摂津地方など地方単位でも、そこを軸とした編年案を提示し、それらを縦断横断しないといけない。近畿内各地方をまたぐ石材交指関係の解明は、各地域をつなぎ合わせたとき、単なる編年作業を越えて、後期旧石器時代瀬戸内系旧石器社会の動態を描き出すことになると考える。

近畿地方の旧石器考古学研究者にとって、なじみ深く離れられないサヌカイト（二上山北麓の黒色ガラス質安山岩）について、濱田耕作京都帝国大学教授が国府遺跡採集石器は讃岐石であると記し（濱田 1900）、河内国府遺跡の報告書以降しばらくの間で「二子石」「フタゴナイト」の名称が使われたことなどを紹介し、近畿地方中央部で二上山北麓産出黒色ガラス質安山岩を「サヌカイト」呼称することの問題を取り上げた（第 5 章第 3 節）。山陰の非瀬戸内火山岩区のガラス質安山岩（山口・渡邊 2023）や近畿地方中央部の甲山（山口 2023）と寺ヶ池（第 5 章第 5 節）などの二上山以外の新第三紀瀬戸内火山岩が石器となるうることも指摘し、近畿地方で二上山産であることが前提にあいまいに使われてきた「サヌカイト」名称は混乱が起きるであろうことを言及し、その結果、サヌカイト名称を濱田耕作の提言に回帰し、二名命法的な「産出地名＋黒色ガラス質安山岩」など、中立的な名称の使用も考慮すべきと提言した（山口 2022）この提言が近畿地方石器研究に携わる諸兄に受け入れられることを願っている。この論考を用意するとき、濱田耕作京都帝国大学教授に師事した末永雅雄先生が、濱田の讃岐石・二子石名命の錯誤を解消する手立てをとり、さらに島・山内・鎌木の国府遺跡再発掘に先立って、二上山の総合学術調査と国府遺跡再発掘を実施したことを明らかにできた。

関西大学名誉教授末永雅雄は、二上山をめぐっての近畿地方旧石器時代研究の先駆者であった。本書承前の近畿地方旧石器時代研究史執筆時に見過ごされたエピソードである。

第2節　近畿地方瀬戸内系旧石器の特性について

近畿地方瀬戸内系旧石器の特性について、後期旧石器時代瀬戸内系集団を古民族学的に描き出すことで、本書のまとめとしたい。

瀬戸内系旧石器の特性は、技術的・石材的構造に、地域的選択が本来的基盤を提供し、それを瀬戸内系社会集団全体が共通して認識したことにより強固に構造化したと私案する。日本列島を俯瞰したとき、後期旧石器時代のナイフ形石器が盛行する段階を通して、瀬戸内系旧石器は、瀬戸内中央部から近畿地方中央部にかけて、非常に強固な石器文化の地域性を発揮するが、ほとんどの地域は、緩やかな石材選択を前提とした石器群の顔つきの変化による地域性が接続した状態が続く（山口 1991b、小田 2003）。

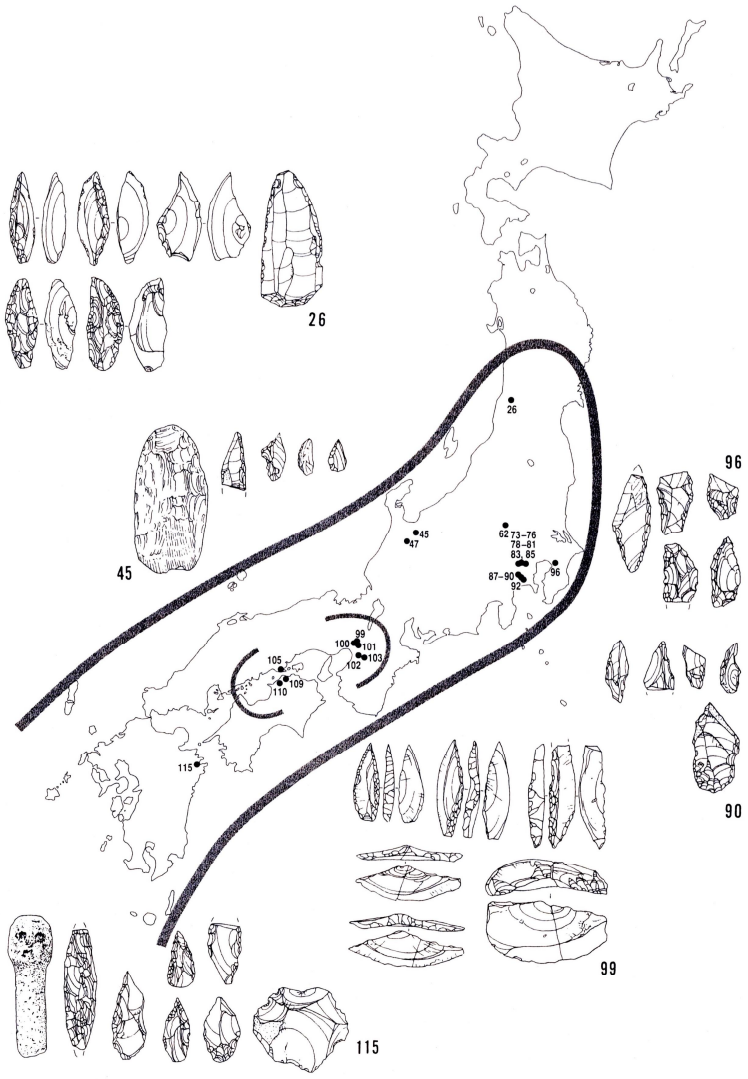


図 152　旧石器文化第 II a 亜文化期　遺跡の分布
（Oda & Keally　1979）

この差異はどこからもたらされたか考えると、石器文化、特に石器生産技術とその石器生産工程の異所展開が、地域内での石器文化を支えた瀬戸内系旧石器と比べて、他の地域の石器群では、この構造化する要素が少ないか、彼ら自身の共通認識が不成立であったのではなかろうか。

考古学的地域性の発現は、旧石器時代の社会において一つの社会的集団が一つの地域に対し適応を重ねると共に、その地域に対し「自分達の領域である」との共通認識をする事により始まると考える。

そのような社会的集団の共通認識が、サヌカイト（二上山北麓産出黒色ガラス質安山岩）、瀬戸内系ナイフ形石器、横長剥片剥離技術伝統と、近畿地方中央部、陸地化した古大阪平野がその舞台となって、強固に構造化し、考古学的な遺跡分布、遺跡構造、石器群の組成や依存状況の連鎖となり、後期旧石器のほとんどの間を支配し、変遷し、また、その構造が維持できなくなったとき、最終的には消滅したのである。

近畿地方瀬戸内系旧石器の構造は、その社会集団が活動した一つの地域領域と不可分に形成された。そのハートランドは、今の瀬戸内海、備讃瀬戸、播磨灘、大阪湾の内海が陸化した大盆地の連続であり、現在の陸地はその大地形の辺縁にあたるので、本来の主領域は海没していて、調査研究の対象となっていないと考えられる。瀬戸内系旧石器の構造を考えるとき、大盆地の連続に、そこに古河川が纏まって流れる一体的な地形単位を想定すべきである（山口 1994・98）。更新された古生態学的環境データはないが（山口 2000）、想定される動植物資源は、極めて豊かであったと考えてよい（第 4 章第 5 節）。

そこに定住して占有的に居住する社会集団は、同じ環境帯を利用し、お互いの存在を認知しながら共存して生活を続けた。そのゾーンの中での移動には、河川以外の地理的障害はなく、地形的な意味でのランドマークや季節的資源の変動についての知識も共有的に蓄積されたと想像できる。本書で筆者が論じている瀬戸内系旧石器の構造は、大地形を共有する地域集団としての一体感、共通認識が支えていると考える。もし、環境の敵対的利用集団が一時でも存在したら、瀬戸内系旧石器の一体的な地域社会集団の形成はなされなかったはずであろう。

讃岐北部や二上山のサヌカイト：黒色ガラス質安山岩の産出地は、古大阪平野、備讃瀬戸平原の中央部近くに位置する。この原石産地が後期旧石器時代の支配的石材となった（山口 1998：第 1 章第 3 節）。大盆地地形に接続する低山に原石産地があって、そこへの遡上開発と石器生産技術の適応は円滑だったのだろう。

後期旧石器時代初頭から利用され、半径約 60km の大盆地が連鎖する近畿地方中央部から播磨灘、備讃瀬戸の縁辺まで安定して石器供給が可能になるように、横長剥片を素材としたナイフ形石器と横長剥片剥離技術、極相としての瀬戸内技法と国府型ナイフ形石器に、石器生産の工程の「異所展開」が石材と地形環境の中での適応として始められた。第 1 工程が原石産地遺跡で行われ、作られた盤状剥片や横長剥片石核または翼状剥片石核、横長剥片または翼状剥片、ナイフ形石器が、搬出重量と移動距離を勘案して持ち出された（山口 1983・94：第 4 章第 3・4 節）。優秀なガラス質火成岩であるサヌカイトは、この「異所展開」が構造化したことにより、近畿地方中央部、播磨灘、備讃瀬戸の大盆地地形で、支配的な石材となる。他の石材に見向きもしないという瀬戸内系旧石器の特色が顕在化する。この「異所展開」が及ぶ範囲に、極相期の国府型ナイフ形石器が分布する。

遠隔地、辺縁に必要な石器を運ぶには、

仕事量＝重力×距離

という物理法則が適応される。単位集団が可搬する石材の最大重量は、成年構成員の人数で決定されるであろうことから、遠隔地、辺縁にはいくつかの中継遺跡が想定されたなら、運ばれ

る石器総重量は限られる。辺縁では、石材を管理し、主要石器を消耗する段階で、古大阪平野と備讃瀬戸平原の中央部に回帰が必然となる。回帰して、原石産地で一定量の石材を再確保するのである。

筆者は、3-5kg 程度が遠隔地一遺跡での消費石材料、成人構成員が一人で 10-20kg、2-4 人で運ぶと最大 20-80kg を運ぶとすると、原石産地から出発して再び回帰するまでの間の経由地は、5 から 20 地点ほどとなると計算した。近くを巡回するなら一つの地点に大量の石器が残され、遠隔地では耐乏モードでの切り詰めた石材消費が行われる。石材が不足したはずの現地では、足下に在地のチャート等の石材があったしても、それを開発することはなく、回帰を選択する点で、明らかな選択の保守性が見て取れる。この集団間の性格の違いが顕在化した特異例と、両者の違いを乗り越えた「集落合同」は、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の集落構造と古民族学的動態（第 3 章第 2 節 1,C）で分析した。

遠隔地遺跡の石器類は、大事に運ばれた定型的ナイフ形石器などの器種を除き、小さく使い潰された石器や、剥離が進行して捨てられた石核などとなり、全く原石産地周辺遺跡の石器類とは様相を変えてしまうことになる。この点で、石器群の見た目、一方向の技術形態学的変遷観で、石器群編年が近畿地方全体を扱うと遠隔地・辺縁の石器群の位置付けが混乱する原因となっている。

近畿地方中央部の周辺部には、ナイフ形石器とは異なる台形様石器を主体とする石器群があり、六甲山系の南東麓にある甲山山頂遺跡（山口 2023：第 5 章第 4 節）や、中国山地東部武庫川回廊の奥にある板井寺ヶ谷遺跡下位文化層（山口 1991・94：第 3 章第 1 節 2,c）、丹波山地氷上回廊にある七日市遺跡（久保・藤田編 1990）など、いくつかサヌカイト：黒色ガラス質安山岩製の石器群が発見されている。台形様石器群とナイフ形石器群が共存して見つかり、石材と石器制作技術に差異が見えない遺跡と、台形様石器のみの遺跡の両者がある。

後期旧石器時代前半期の列島内台形様石器群とナイフ形石器群の関係については、佐藤宏之の二極構造論（佐藤 1992）が興味深い仮説を提示している。横長・幅広剥片剥離技術をベースとした台形様石器群は、先行する中期旧石器時代の技術的系譜をもつ石器群で、そこに後期旧石器時代前半期初頭に縦長剥片・石刃剥離技術をベースとしたナイフ形石器群の技術的構造が加わって、後期旧石器時代前半期の石器群の技術的構造となったと考えた。両者二つの様相が二極として、遺跡ごとの要件、環境や石材などによって現れるとしたのである。良質石材の産出地周辺では縦長剥片・石刃剥離技術によってナイフ形石器が、遠隔地の良質でない在地石材に手を伸ばさざるをえない場所では横長･幅広剥片剥離技術によって台形様石器が生産される。原石産地と遠隔地、その間でさまざまな様相の石器群が残されたとしても、同じ石器群の適応の結果であるとする。この二極構造は、後期旧石器時代後半期には台形様石器群が消滅して、ナイフ形石器群主体の様相となるという点で、旧石器時代の全国編年と親和的な仮説であるといえる。

この解釈でいえば、列島内後期旧石器時代前半、二極構造が発現すれば、良質石材原産地と遠隔地の遺跡では使用石材と石器生産技術の選択がある程度連動することになる。一方、瀬戸

内系旧石器には、はじめから強固なサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）に対する固執があって、必ずしも動態は一致しない。台形様石器の素材剥片は、翼状剥片や横長剥片ではなく、同じ石材の不定形剥片の切断や平坦剥離で整形が行われることが多そうである（山口 1994）。当然、瀬戸内系旧石器は、ナイフ形石器を石刃や縦長剥片ではなく翼状剥片や横長剥片から生産する。このことは、佐藤の二極構造、汎列島的な後期旧石器時代の構造とは異なり、瀬戸内地方東部、近畿地方中央部は、地域的な特徴を、思ったよりも早く顕在化したと評価できる可能性があって、結果として瀬戸内系旧石器の横長剥片剥離技術伝統が列島内石器文化として特異な特徴とみなすほうが妥当と考える。佐藤の仮説の有力さを認めつつ、瀬戸内系旧石器の構造化が二極構造と同様の構造なのかについては、汎日本列島を想定した二極構造理論に、近畿瀬戸内地方東部の事例を当てはめるのではなく、本書で検討した瀬戸内系旧石器の構造化という研究と検証のなかで判断すべきと考える。

日本列島は、中軸に脊梁山脈が縦断し山地が占める面積が大きく、海岸部に平野が張り付く。火山地形も発達して、列島内で居住に手頃な平坦な地域は、いくつにも分割されている。後期旧石器時代前半期初頭には、氷期により海水面は大きく低下していて、平坦な地益は拡大していたが、大盆地地形の中で瀬戸内系旧石器が最初に地域性を顕在化し、列島内でいくつかの地域でしばらくして地域性が表れてくる。考古学的な石器文化の地域性発現は、当時の人類社会の地域環境への技術的適応の結果であって、列島内での分断された環境帯がそのまま反映したのだろう。彼らは、ホモサピエンス：現生人類であるが、この日本列島の後期旧石器時代の細分された地域性は、極端に広域なヨーロッパ石器文化、スペインからフランス、ドイツ西部までマドレーヌ文化の領域などという広域性とは明らかに違う特徴となっていて、興味深い現象である。

瀬戸内系旧石器の終焉は、ナイフ形石器文化の終焉であり、横長剥片剥離伝統の終焉である。後期旧石器時代後半期の終わりを画するその終焉は、石器生産技術の「工程の異所展開」、遠隔地への石器搬出システムの機能不全に原因があったのではないかと推測する。

氷期が終わり間氷期に向かうとき、温暖化、降雨量増加、河川の流量増加、川幅拡幅がおこる。大地形だった古大阪平野や播磨灘の中央には湖沼が発現したかもしれない。さらには、最終的に古大阪湾から古大阪平野に海面上昇による海岸が侵入する。

自然環境水文環境の変動と精密な石器文化編年の突き合わせは完成していないが、このような気候と水文環境の変化が、大盆地地形の中で容易だった遠距離移動の阻害要因となり、原石産出地周辺への回帰を難しくしたと予測する。石器生産工程の原石産地周辺と遠隔地間の「異所展開」を安定して行いうる前提条件が失われていったという仮説を念頭に、瀬戸内系旧石器の終焉については今後の課題としたい。

瀬戸内系旧石器終焉の後、近畿地方は細石刃文化、神子柴系尖頭器文化、有舌尖頭器を伴う縄文時代草創期文化へと変遷し、後氷期の新たな適応段階である縄文時代、高度狩猟採集民の社会へと変遷していくことになる。

第 3 節　瀬戸内系旧石器以前

近畿地方に、後期旧石器時代より前の石器群が存在するとすれば、前・中期旧石器と後期旧石器の移行期石器群または、さらに遡る前・中期旧石器時代の石器群を想定することになる。

筆者は、本書第 5 章第 1 節で、日本列島にあって特異な近畿地方瀬戸内系旧石器の構造は、サヌカイト（ガラス質安山岩）と石器生産の技術構造が一体であり、これを大地形と資源環境を共有する範囲で､広く拡大する形で成立しているので､先立つ石器を検出しようとする場合、二上山北麓のサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）以外の石材から発見される可能性を指摘した（山口 2004)。

二上山北麓では、同志社大学旧石器文化談話会により二上山産サヌカイト製ハンドアックスが発見されているが、大量の他時期資料と混在しているらしい（同志社大学「旧石器文化談話会 1974)。二上山北麓は、瀬戸内系旧石器の石器生産の「異所展開」の起点であり、後期旧石器時代に膨大な石器・石片類が残されたので、仮に前・中期旧石器が残されたとしても、石器群としての切り分けは難しい。特異、例外的な資料を抽出できるに留まるであろう。筆者も、サヌカイトとは異なる石材の石器若干を紹介した。それらは、ほぼ単独発見で、安定した堆積環境から得られたものはなく、積極的に評価は難しい。

そこで筆者は、近畿地方中央部の二上山北麓以外の新第三紀瀬戸内火山岩区の火成岩産地で佐藤隆春氏によって紹介（佐藤隆春 1985）されたている地点に注目し、現地を踏査してサヌカイト以外の火成岩が石器生産に供されたものがあるかどうか、石器があるとすれば瀬戸内系旧石器とどこが違うか、後期旧石器時代の石器生産があるか、前・中期に遡る可能性があるかに注目して踏査を続けている。

踏査は、佐藤に従って、西宮市甲山（山口 2023)、六甲山麓熊笹峠東 500m、奈良県宝山寺、三笠山、信貴山、畝傍山（山口 2022b)、耳成山、大阪府嶽山と汐ノ宮・横山（第 5 章第 4 節)、寺ヶ池（第 5 章第 5 節)、鍋山で火成岩の産出状況の確認、石器となり得る石材があるかどうか、周辺での石器生産痕跡の有無の確認を行っている。佐藤のリストには、その他に岩脈など少規模産出地の記載があるが、現在露頭地を探し当てられていない。

甲山北西麓では、ナイフ形石器の伴わない黒色ガラス質安山岩製石核などが集中する散布地があって、台形様石器群の素材剥片生産工程が行われている（山口 2023)。奈良県宝山寺の西麓鞍部では、暗灰色無斑晶安山岩と僅かの黒色ガラス質安山岩があって、僅かに不定形剥片を採集している。三笠山周辺では、三笠山春日山山体に主体があって、黒色で石基が無斑晶またはガラス質の角閃石輝石安山岩があるが、春日山南麓と約 2km 南の白毫寺南で、この三笠安山岩の一部が試し割のような剥離のある円礫を採集している。橿原市畝傍山では、新第三紀黒雲母流紋岩が露頭し、多くが風化して凝灰岩板石のようになっているが、一部に新鮮な岩相の部分があって、石器を採集した。耳成山もザクロ石黒雲母流紋岩が露頭し、石器類が散布している。大阪府嶽山では、風化した無斑晶安山岩や黒色安山岩があって、松脂石製石核と不定型

な剥片を切断した台形様石器、流理の見える加工痕ある剥片等を採集したことから、嶽山火山岩の一部に多様な石器生産可能石材があって僅かでも石器生産が行われた可能性が考えられた。汐ノ宮・横山では、石川河床に柱状節理の安山岩が露出し、東岸の横山には橄欖石などの斑晶を僅かに含んだ黒色ガラス質安山岩や灰色流理のある安山岩が産出している。寺ヶ池では、火山体は確認できないが、大阪層群中に黒色橄欖石安山岩や灰色流理のある安山岩礫が広範囲に含まれていること、二上山北麓春日山サヌカイト（黒色ガラス質安山岩）と肉眼観察で区別できない良質の黒色ガラス質安山岩礫を僅かではあるが採集した。周辺踏査の際、寺ヶ池西岸で寺ヶ池安山岩製大形重量石器を、露出状態で採集した。鍋山では、黒色玄武岩質無斑晶安山岩が大量に露頭している。

これらの産出地の一部では石器生産が認められた。さらに、甲山と寺ヶ池で、二上山北麓春日山産と肉眼で区別のつかないサヌカイト（黒色ガラス質安山岩）があることは、近畿地方の石材供給原が僅かでも複数化したことを示している。自動判断で「近畿地方のサヌカイトは二上山」と決めつけることはできない。これらの多くは、後期旧石器時代の所産であろうことから、その石材製石器の分布範囲や開発年代と継続期間を確かめる必要がある。

近畿地方の石器石材供給は、後期旧石器時代の瀬戸内系旧石器構造化以降、縄文時代。弥生時代と、二上山北麓に収斂していく。二上山以外の石材産地は、その収斂が始まる前の開発の可能性があって。実態把握して、その石材の利用のあり方を近畿地方の後期旧石器時代研究に組み入れていく必要がある。

河内長野市寺ヶ池西岸の池底に露出した状態で採集した大形重量石器（写真 45）は、石英などの獲得鉱物を含み僅かに発泡した、明らかにサヌカイト質ではない寺ヶ池安山岩を石材とする。ハードハンマーで直接剥離された大形剥片を素材としており、腹面に大きな打瘤が観察できる､腹面から背面に向かって 220 度ほどの側縁と打面部を楕円形に急角度で器形整形をする。打面部はそれで除去されている。石器の機能部と思われる部分は素材剥片末端に当たる部分であるが、背面から腹面側への小剥離で繋がっていて、素材剥片末端刃部分は残っていない。石器の技術形態学的型式では、いわゆるクリーバーに該当する器種属性を備えている。筆者の知る限り、近畿地方中央部でこのような石器の事例は未発見である。

現時点では、この石器が寺ヶ池西岸のどのような堆積環境からもたらされたのか、阿蘇などの広域火山灰との関係の確認など、所属年代を決める情報が不足している。河内長野周辺の千代田段丘は、大阪層群下部に下位段丘堆積物が載っており、そこに六甲変動に連なる隆起が生じて丘陵化した地形であり、中位段丘形成期以降に浸食を受けて南北の谷地形が形成されている。寺ヶ池はその南北の谷をせき止めたもので、岸の崖には、大阪層群と中位段丘以降に浸食されて堆積した土層が観察できる｡何らかの手段で､現地の堆積環境の確認をする必要がある。この石器の年代決定作業とともに、近傍の後期旧石器時代縄文時代の石器石材利用の事例も把握したい。

この石器は、近畿地方サヌカイト（黒色ガラス質安山岩）開発以前の旧石器時代人が、遊動中に、たまたま行き当たった火山岩産出地の安山岩で作った可能性を考えている。

典　　拠

各章各節の基となった論考論文の掲載先をまとめる。論考論文発表時から研究が進展し、新たな発見や解釈の変更があったものの一部については、訂正を行った。大半の論考論文は、発表時の問題意識を損なわないため、変更調整は最小限にとどめて収録した。

前　哨

近畿の 77 年　1999「近畿地方」　「石器文化研究　7　岩宿発掘 50 周年記念　日本旧石器時代研究 50 年と今後の展望」 p 61-70 を改編

第 1 章

第 1 節　2022「濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」」『関西大学博物館紀要』28　p 13-32

第 2 節　2018「末永雅雄先生の二つの大形石器」『泉森皎先生喜寿記念論集』

第 3 節　1998「古瀬戸内とサヌカイト石材」『網干善教先生古希記念考古学論集』p1-17

第 4 節　2001「サヌカイトの産地」『季刊考古学』77　p62-64

第 2 章　後期旧石器時代石器群の研究

第 1 節　高松龍暉・山口卓也 1981「但馬地方における旧石器について」『兵庫考古』第 13 号 p1-5・高松龍暉・山口卓也 1985「但馬地方における旧石器について（2）」『兵庫考古』第 21 号 1-7 を改編

第 2 節　1981「山形県越中山遺跡群 K 地点遺跡採集の資料と瀬戸内技法についての一考察」『阡陵、関西大学博物館学課程二〇周年記念特集』p9-25

第 3 節　高松龍暉・山口卓也 1991「兵庫県畑ケ平高原採集の石器群」『旧石器考古学』No,43 p79-92

第 4 節　1988「西日本における初期尖頭器石器群について」『紀伊半島の文化史的研究考古学編』p637-646

第 5 節　1988「旧石器時代集落の周辺　Ⅰ－郡家今城遺跡の集落環境－」『網干善教先生華甲記念考古学論集』p1-20

第 3 章　兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の二つの石器群と古民族学的構造

1991「板井寺ヶ谷遺跡をめぐる諸問題」『板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査－』　p629-670

1998　「板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の横長剥片剥離技術」『旧石器考古学』第 56 号 p1-10

YAMAGUCHI Takuya 1993「PRE'SENCE SIMULTANE'E DE DEUX TRADITIONS DIFFE'RENTES DANS LE SITE PALE'OLITHIQUE "ITAI-TERAGATANI"　A' PROXIMITE' D'UN ANCIEN LAC DANS LA RE'GION SUD-OUEST DU JAPON」『L'Anthropologie』97　p427-468　SCIETE DE L'ANTHROPOLOGIE

（Paris）
を改編

第 4 章　瀬戸内系旧石器の構造
第 1 節　1983「所謂瀬戸内系の旧石器と横長剥片剥離技術伝統について」『関西大学考古学研究室開設三十周年記念考古学論叢』 p 919-951
第 2 節　1987「瀬戸内系旧石器の存続期間について」『横田健一先生古希記念文化史論叢（上）』p58-80
第 3 節　1983「先土器時代における『移動』について」『ヒストリア』第 101 号 p88-106
第 4 節　1994「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』p185-198
第 5 節　山口卓也 1991a 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地－遺跡立地の差と地域性の発生について一」『関西大学考古学資料室紀要』第 8 号　p1-14
第 6 節　1993「西南日本における後期旧石器時代前半期の一様相」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』p1-23
第 7 節　1994「近畿地方台形様石器群の一様相」『旧石器考古学』48　p15-26
第 8 節　2004「淡路島、大阪湾と播磨灘」『山下秀樹氏追悼考古論集』p139-146

第 5 章　サヌカイトの開発と黒色ガラス質安山岩
第 1 節　2004「サヌカイト以前」『関西大学博物館紀要』10　p 91-99
第 2 節　2021「兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材産地」『ひょうご考古』第 18 号　p43-54
第 3 節　2023「西宮市甲山の黒色ガラス質安山岩と甲山山頂遺跡の旧石器」『ひょうご考古』19　p1-23
第 4 節　投稿中「大阪府富田林嶽山周辺の火山岩産出地と龍泉寺西採集の石器」
第 5 節　踏査記録「河内長野市寺ヶ池西岸発見の石器について」

第 6 章　瀬戸内系旧石器の構造的研究と成果
本書

引用・参考文献

青崎和憲編　1981　「加栗山遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
青木哲哉　1991　「板井寺ヶ谷遺跡における旧石器時代の地形環境」『板井寺ヶ谷遺跡　自然科学編』p95-102
秋里籬嶌著・丹羽桃渓画　1801　『大坂名所図會』
秋枝芳　1974　「吹田市古志部遺跡採集の石器について」『吹田の歴史』2
秋枝芳　1980「姫路市における先土器時代について」『旧石器考古学」21
秋枝芳・山口卓也　1981「先土器、縄文時代」『吹田市史考古編』
安里進　1987　「南花田遺跡の火山灰分析による層序の検討」『火山灰と考古学をめぐる諸問題』
旭慶男・宮田栄二　1987　「石橋遺跡」『横建遺跡ほか７遺跡』
阿子島香１　990『石器の使用痕』
麻生優　1975「原位置論の現代的意義」『物質文化』24
安孫子昭二１　971「練馬区北大泉町比丘尼橋遺跡調査概報」『文化財の保護』3
穴沢咏光　1994　「小林行雄博士の軌跡」角田文衛編『考古学京都学派』
安斎正人　1986a　「先史学の方法と理論１」『旧石器考古』32
安斎正人　1986b　「先史学の方法と理論２」『旧石器考古』33
安斎正人　1987a　「先史学の方法と理論３」『旧石器考古』34
安斎正人　1987b　「先史学の方法と理論４」『旧石器考古』35
安斎正人　1990　『無文字社会の考古学』
安蒜政雄・戸沢克則　1975　「砂川遺跡」『日本の旧石器文化』1
安蒜政雄　1986　「先土器時代の石器と地域」『岩波講座　日本考古学』５
安楽勉　1980「原の辻遺跡の先土器文化」『原の辻遺跡Ⅲ』
石井八萬次郎　1894　「箱根火山研究録」『地質学雑誌』第１巻第７号-10 号
石神怡　1981　「藤井寺市国府遺跡」『シンポジウム二上山旧石器遺跡を巡る諸問題』
石神怡　1990　「国府遺跡第３地点と第６地点」『南河内における遺跡の調査Ⅰ　旧石器時代基礎資料編Ⅰ』
石田志郎・笹嶋貞雄・横山卓雄・竹村恵二　1984　「近畿・中国地方の遺跡に関連する火山灰層」『古文化財の自然科学的研究』
石野博信　1966　「兵庫県西宮市甲山石器原材採石地の調査」『日本考古学協会第 32 回総会要旨』
一瀬和夫他　1990　「はさみ山遺跡」『南河内における遺跡の調査Ⅰ』大阪府文化財調査報告書 38
一瀬和夫編　1991　『南河内における旧石器時代の調査』
市原実　1975　「大阪層群と大阪平野」『アーバンクボタ』11
市原実・藤野良幸　1979　「大阪平野の発達史」『アーバンクボタ』16
市原実　1991　「大阪とその周辺地域の第四紀地質図について」『アーバンクボタ』30
稲田孝司　1969　「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』第 15 巻第１号
稲田孝司　1977　「旧石器時代の小集団について」『考古学研究』第 24 巻第２号
稲田孝司　1984a　「更新世哺乳動物遺体の産状と人類文化」『考古学研究』第 31 巻第２号
稲田孝司　1984b　「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』第 30 巻第４号

稲田孝司　1986a　「恩原遺跡」『岡山県史』18
稲田孝司　1986ｂ　「中国地方旧石器文化の諸問題」『岡山大学文学部紀要』7
稲田孝司編　1988a　『恩原遺跡』
稲田孝司　1988b「旧石器集団の行動軌跡」『旧石器人の生活と集団』古代史復原１
稲原昭嘉　1998　「藤江川添遺跡出土の旧石器」『旧石器考古学』56
妹尾周三編　1989　『冠遺跡群　D地点の調査』
岩崎泰一他　1986　『下触牛伏遺跡』
今井功　1966　『黎明期の日本地質学』
磐田市教育委員会編　1989　『匂坂上４遺跡発掘調査報告Ⅱ』
上治寅次郎　1944　「宮瀧遺跡の附近の地質調査並に出土石器の材料顕微鏡検査報文」『宮瀧の遺跡』
植田千住穂・梅本健治・桑原隆博・三枝健二他　1983　『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』4
上野章・山本正敏・岡上進一・松本幸治　1977　『立野ケ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』
上野佳也　1985　『こころの考古学』ｐ94
牛ノ浜修　1982　「木場Ａ－２遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
牛ノ浜修・宮田栄二　1985　『成岡遺跡Ⅱ』
氏家治　1973　「四国に分布する“サヌカイト（讃岐石）質安山岩”について」『地質ニュース』No,454　p29-36
梅本健治・三枝健二　1983　「冠遺跡」『中国自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告４』
浦上雅史　1992　「浦壁池遺跡」『兵庫県史考古資料編』p108
江本直編　1986a　「伊野遺跡」『熊本県旧石器時代調査報告書』
江本直編　1986b　「石飛東遺跡」『熊本県旧石器時代調査報告書』
王建・王同前・陳哲英　1978　「下川文化-山西下川遺址調査報告」『考古学報』第３期
大井信夫・南木睦彦・能城修一　1991　「兵庫県板井寺ヶ谷遺跡の植物化石と周辺の古植生」『板井寺ヶ谷遺跡自然科学編』p17-84
大井晴男　1968　「日本の先土器時代石器群の系統について」『北方文化研究』第３
大阪市文化財協会　1997　『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅸ』
大阪府教育委員会　1989　『八尾南遺跡－旧石器出土第３地点－』大阪府文化財調査報告書 36
大阪府教育委員会　1990a　『八尾南遺跡－旧石器出土第６地点の調査－』大阪府文化財調査報告書 44
大阪府教育委員会　1990b　『南河地における遺跡の調査Ⅰ』大阪府文化財調査報告書 38
大湯正雄　1910　「二上火山調査報告」『震災豫防調査會報告』72
大山柏　1924　『歐洲舊石器時代』
緒方勉・古森政次　1981　『下城遺跡Ⅱ』
緒方勉・田中寿夫　1979　『下城遺跡Ⅰ』
緒方勉・古森政次　1980　『下城遺跡Ⅱ』
岡本勇　1986　「先土器・縄文時代の食料生産」『岩波講座日本考古学』
岡村道雄　1976　「日本前期旧石器時代の始源と終末」『考古学研究』第 23 巻第３号
奥義次　1985　『三重県度会郡玉城町上地山遺跡発掘調査報告書』
奥義次・織笠昭　1989　「東への視点と西への視点」『中部高地の尖頭器文化』
奥村吉信　1987　「東日本のペン先形ナイフ形石器を伴う石器群」『旧石器考古学』35
小田静夫・C•T•KEALLY・肥留間博、1974「平代坂遺跡発掘調査報告」『平代坂・七軒家』

小田静夫　1974　『調布市仙川遺跡』
Oda & Keally　1979　Japanese Paleolithic Cultural Chronology
小田静夫　1980　『小金井市西之台遺跡Ｂ地点』
小田静夫　2003　『日本の旧石器文化』
小野昭　1969　「ナイフ形石器の地域性とその評価」『考古学研究』第 16 巻第 2 号
小野昭　1976　「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』第 23 巻第 1 号
小野昭　1988　「文化の広がりと地域」『日本人類文化の起源』
小野有五　1985　「最終氷期の地形環境と気候」『月刊地球』72
織笠昭　1987　「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』第 72 巻第 4 号
恩原遺跡調査団　1988　『恩原遺跡』
香川県教育委員会　1978　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』第 1 巻
香川県教育委員会　1979　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』第 2 巻
香川県教育委員会　1980　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』第 3 巻
梶原洋　1981　「第２、第３、第４遺物集中地点の石器群の使用痕分析」『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
梶原彦太郎・市原実　1974　「大阪平野の発達史－14Ｃ年代データからみた－」『地質学論集第７号　海岸平野特集』
柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団　1983　『柏ケ谷長ヲサ遺跡発掘調査報告書』
笠井新也　1915　「玉類・斎瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺跡（一）」『人類学雑誌』第 30 巻第 11・12 号
柏倉亮吉・加藤稔・宇野修平・佐藤禎宏　1964　『山形県の無土器文化』
加藤晋平　1970　「先土器時代の歴史性と地域性」『郷土史研究と考古学』
加藤稔　1959　「庄内・越中山Ａ地点の石器群」『考古学手帖』第 7 号
加藤稔　1964　『山形県の無土器文化』
加藤稔　1969　「東北地方の旧石器文化」『山形中央高等学校研究紀要』1
加藤稔　1972　「ある研究史」『山形考古』第 2 巻第 2 号
加藤稔　1975　「越中山遺跡」『日本の旧石器文化　2』
加藤稔・鈴木和夫　1976　「越中山Ｋ遺跡の接合資料」『考古学研究』第 22 巻第 4 号
鎌木義昌　1956　「岡山県鷲羽山遺跡」『石器時代』
鎌木義昌　1957a　「香川県井島遺跡」『石器時代』 4
鎌木義昌、1957b　「西日本の無土器文化-特に瀬戸内を中心として」『私たちの考古学』第 4 巻第 1 号
鎌木義昌　1960　「先縄文文化の変遷・打製石器に見る生活技術」『図説生活文化史体系』20
鎌木義昌　1965　「刃器文化」『日本の考古学』1
銘木義昌・高橋謹　1965「瀬戸内海沿岸地方の先土器時代」『日本の考古学』1
鎌木義昌　1966　『石ケ堂洞穴』
鎌木義昌・小林博昭　1986　「戸谷遺跡」『岡山県史』18
関西大学　1968『　摂津加茂』
関西大学教育後援会　1986　『末永雅雄　常歩無限　関西大学考古学二十年の歩み』
関西大学博物館　2011　『本山コレクションの由来』
関西大学博物館　2017　パンフレット『国府遺跡発掘 100 周年―近畿地方先史時代考古学のはじまり―』
木下修　1976　「冠高原遺跡」「日本の旧石器文化」3

木崎康弘編　1987　『狸谷遺跡』
木崎康弘編　1986　『大丸・藤ノ迫遺跡』
喜田貞吉　1915　「南河内郡古代遺跡に就いて」『大阪府史蹟調査委員会報』4
京都大学総合博物館　1994　『旧石器時代のアトリエ　翠鳥園遺跡』
京都大学総合博物館　2016　『京都大学総合博物館考古学資料目録　エジプト出土資料』
絹川一徳　1993　「瀬戸内技法に関する 2，3 の考察」『岡山大学文学部紀要』19
絹川一徳　1999　「大阪市長原遺跡 14 層出土石器群について」『『櫃石島技法』の再検討』第 23 回近畿旧石器交流会資料
吉備町教育委員会編　1985　『土生池第二次発掘調査概報』
久保弘幸・藤田淳・山口卓也　1987　「兵庫県における最近の旧石器時代遺跡調査の動向」『日本考古学協会 1987 年度大会発表要旨』
久保弘幸　1989　「大阪湾沿岸地域における小型ナイフ形石器とその編年について」『旧石器考古学』38
久保弘幸・藤田淳編　1990　『七日市遺跡』
久保弘幸　2002　「第 3 章　勝手野遺跡（後期旧石器時代）の調査」『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会
久保弘幸　2021　「但馬高原地帯における後期旧石器時代・縄文時代草創期の遺跡群解明への期待」『ひょうご考古』18　p17-28
熊本県教育委員会　1979　『熊本県文化財調査報告 38：生産遺跡基本調査報告書 11』
栗島義章　1983　「ブロックの構成と機能」『多聞寺前遺跡Ⅱ』
栗島義章　1986a　「先土器時代遺跡の構造的研究序説」『土曜考古』11
栗島義明　1986b　「槍先形尖頭器石器群の研究序説」『考古学研究』第 32 巻第 4 号
栗島義章　1987a　「先土器時代における移動と遺跡形成に関する一考察」『古代文化』第 39 巻第 4 号
栗島義章　1987b　「先土器時代遺跡の研究」『考古学研究』第 34 巻第 3 号
栗島義明　1987c　「先土器時代における移動と遺跡形成に関する一考察」『古代文化』第 39 巻第 4 号
栗島義明　1989a　「槍先形尖頭器の地域的様相」『中部高地の尖頭器文化』
栗島義章　1989b　「旧石器時代住居と遺物分布に就いて」『土曜考古』14
栗島義章　1990　「遺跡分布から見る遺跡の構成」『石器文化研究』 2
栗田勝弘・須田良平・潜水宗昭　1985　『百枝遺跡』
黒坪一樹・山尾典子　1981　「敲石類・磨製石斧をめぐる分布論」『野沢遺跡』
黒坪一樹　1983・84　「日本先土器時代における敲石類の研究」『古代文化』第 35 巻第 12 号・第 36 巻第 1 号
桑代勲　1959　「瀬戸内海の海底地形」『地理学評論』
桑代勲　1972　『瀬戸内海の地形発達史』
恋ケ窪遺跡調査会　1980　「多摩蘭坂遺跡」
小藤文次郎（KOTO）　1916　「ON THE VOLCANOES OF JAPAN」『地質学雑誌』第 23 巻 279 号
財団法人古代学協会　1986　『兵庫県三田市溝口遺跡―北摂工業地区―』
小林達雄　1970　「日本列島における細石刃インダストリー」『物質文化』16
小林達雄・小田静夫ほか　1971　「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第 10 巻第 4 号
小林達雄　1976　「概説」『日本の旧石器文化』」3
故本山社長伝記編纂委員会　1937　『松陰本山彦一翁』」
近藤義郎　1976　「先土器時代の集団構成」『考古学研究』第 22 巻第 4 号

三枝健二編　1982　『地宗寺遺跡発掘調査報告』
三枝健二　1983　『冠遺跡－1979 年の調査－』
酒井忠一・加藤稔　1973　『越中山遺跡の研究、序説』
坂入民子　1980　「「国府期」ナイフ形石器の形態的様相」『旧石器考古学」21
坂田邦洋編　1980　『大分県岩戸遺跡』
坂本嘉弘編　1989　「松山Ａ遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書VI』
相模考古学研究会　1972　『小国前畑遺跡発掘調査報告書』
相模考古学研究会　1974　『地蔵坂道跡発掘調査報告書』
先山徹・松田高明・森永速男・後藤篤・加藤茂弘　1995　「兵庫県北部の鮮新世～更新世火山岩類―K-Ar 年代・古地磁気・主化学組成―」『人と自然』6　p149-170
笹原芳郎　1989　「愛鷹・箱根山麓における砂川期の石器群」『沼津市博物館紀要』13
佐藤達夫　1969　「ナイフ形石器の編年的一考察」『日本の先史文化』
佐藤宏之　1988　「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第 73 巻第 3 号
佐藤宏之　1991　「列島内の様相と対比（１）」『石器文化研究』 3
佐藤宏之　1992　『旧石器時代文化の構造と進化』
佐藤良二　1980　「志方町・加西市および周辺の旧石器」『旧石器考古学』21
佐藤良二 1984「近畿・瀬戸内地域の旧石器製作技術伝統とその波及について」　『旧石器考古』28
佐藤良二　1987　「近畿地方中央部における国府石器群－鶴峯荘第 1 地点の遺物組成を中心として－」『日本考古学協会 1987 年度大会研究発表要旨』
佐藤良二　1989　「近畿地方におけるナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』38
佐藤隆春　1985　「大阪周辺から和歌山市東方に分布する新第三紀火山岩類」『瀬戸内区の特性』
佐藤祐司　1991　「板井寺ヶ谷遺跡堆積土の珪藻分析と旧石器群相当期における篠山盆地の（兵庫県）の水文環境」『板井寺ヶ谷遺跡　自然科学編』p85-94
沢井誠・佐藤隆春　1989　「瀬戸内火山岩類」『アーバンクボタ』28
沢井誠・佐藤隆春　1989　「瀬戸内火山岩区―設楽と二上山を中心に―」『アーバンクボタ』28
四手井晴子・都出比呂志　1971　『京都府乙訓郡の石器」
四手井晴子・田代克己・西谷正　1964　「大阪府高槻市塚原採集の石器について」『古代学研究』39
芝香寿人・山口卓也　1995　『碇岩南山遺跡』
清水宗昭・高橋信武・橘昌信、1982『津留遺跡発掘調査概報』
清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄編　1980　『岩戸遺跡発掘調査概報』
清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄編　1986　『岩戸遺跡』
清水宗昭・栗田勝弘編　1985　『百枝遺跡Ｃ地区』
島五郎・山内清男・鎌木義昌 1957「河内国府遺跡略報」『日本考古学協会第 20 回総会』
島田貞彦 1926「河内國中河内郡日下発見の貝塚に就いて」『人類学雑誌』第 41 巻第 12 号
白石浩之　1971　『先土器配石遺構を持つ海老名町上今泉谷遺跡調査概要』
白石浩之　1972　「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」『物質文化』21
白石浩之　1974　「尖頭器出現過程における内容と評価」『信濃』第 26 巻第 1 号
白石浩之　1978　「西南日本におけるナイフ形石器終末の予察」、『神奈川考古』3
白石浩之　1979　「尖頭器石器群研究の現状と展望」、『神奈川考古』7
白石浩之・荒井幹夫　1976　「茂呂系ナイフ形石器を主体とした石器群の変遷」『考古学研究』第 23 巻第 2 号

白石浩之　1989　『旧石器時代の石槍』
末永雅雄　1935　『本山考古室要録』
末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎　1943　『大和唐古彌生式遺跡の研究』
末永雅雄　1944　『宮瀧の遺跡』
末永雅雄　1983　『考古学調査に末永作戦』
末永雅雄　1986　『常歩無限-関西大学考古学廿年の歩み-』
末永雅雄　1987　「二上山文化調査」『青陵』64
杉原荘介　1960　「佐賀県多久三年山石器時代遺跡について」『日本考古学協会第二六回総会研究発表要旨』
杉原荘介・戸沢充則　1961　「佐賀県多久茶園原石器時代遺跡について」『日本考古学協会第二七回総会研究発表要旨」
杉原荘介・戸沢充則・安蒜政雄　1983　『佐賀県多久三年山遺跡における石器時代の遺跡』
杉原重夫・小林三郎　2006　「文化財の自然科学的分析による文化圏の研究―ガラス質安山岩産出地データベース―」『明治大学人文化学研究所紀要』59　p43-94
鈴木遺跡調査会　1978　「鈴木遺跡Ⅰ」
鈴木遺跡調査会　1979　「鈴木遺跡Ⅱ」
鈴木遺跡調査会　1980　「鈴木遺跡Ⅲ」
鈴木追跡調査会　1981　『鈴木遺跡Ⅳ」.
鈴木次郎・矢島国雄　1978　「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1
鈴木忠司・片田良一　1979　「初矢遺跡採集のナイフ形石器」、『岐阜県考古』7
鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫他　1985　『広野北遺跡』
鈴木忠司編　1980a　『寺谷遺跡』
鈴木忠司　1980b　「ブロックとユニット」『寺谷遺跡』
鈴木忠司　1981　「先土器時代遺跡の構造」『報告・野辺山シンポジウム』
鈴木忠司編　1982　『野沢遺跡』
鈴木忠司　1983　「旧石器人のイエとムラ」『季刊考古学』4
鈴木忠司　1984　『先土器時代の知識』
鈴木忠司・山下秀樹　1985　『広野北遺跡』
鈴木忠司・辻本宋夫・保坂康夫・金山喜昭　1987　「先土器時代の礫群をめぐって」『古代文化』第39巻第7号
鈴木忠司　1988　「素描・日本先土器時代の食料と生業」『朱雀』1
須藤隆司　1989　「中部槍先形尖頭器文化の成立」『中部高地の尖頭器文化』
諏訪間順　1989　「相模野台地における尖頭器の様相」『中部高地の尖頭器文化』
砂川遺跡調査団　1974　『砂川先土器時代遺跡」
妹尾周三　1989　『冠遺跡群D地点の調査』
石器研究会　1982　『殿山遺跡』
石器文化研究会編　1989　『石器文化研究』1
石器文化研究会編　1990　『石器文化研究』2
石器文化研究会編　1991　『石器文化研究』3
芹沢長介・柳田俊雄　1978　『岩戸　考古学資料集２』
第四紀学会　1987　『日本第四紀地図』

高尾好之　1989　「東海における尖頭器の様相」『中部高地の尖頭器文化』
高槻市教育委員会　1978　『郡家今城遺跡発掘調査報告書－旧石器時代遺構の調査－』
高松龍暉他　1974　『養父郡の埋蔵文化財』
高松龍暉・山口卓也　1981　「但馬地方における旧石器について」『兵庫考古』13　p 1-5
高松龍暉・山口卓也　1985　「但馬地方における旧石器について（2)」『兵庫考古』21　p 1-7
高松龍暉・山口卓也　1991　「兵庫県畑ケ平高原採集の石器群」『旧石器考古学』43　p79-92
竹岡俊樹　1976　「国分台遺跡群」、『日本の旧石器文化』3
竹岡俊樹　1978　「朱雀台遺跡におけるナイフ形石器の形態分析」『物質文化』29
竹岡俊樹　1979　「連光寺山第一地点における石刃技法の分析」、『考古学基礎論」1
竹岡俊樹　1988　『香川県史』考古学資料編
竹岡俊樹　1993　「石器分析の方法」『考古学ジャーナル』360
竹村恵二・檀原徹　1991　「板井寺ヶ谷遺跡の火山灰および土壌の分析」『板井寺ヶ谷遺跡　自然科学編』p1-10
高井戸東遺跡調査会　1977　『高井戸東遺跡』
橘昌信　1975　「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢３』
橘昌信・清水宗昭・高橋信武　1982　『津留遺跡発掘調査概報』
橘昌信・牧尾義則・村上佳典　1983　『峠山遺跡』
巽好幸　2003　『安山岩と大陸の起源　ローカルからグローバルへ』
田中眞吾　1991　「兵庫県における山麓部の地形形成」『板井寺ヶ谷遺跡　自然科学編』p115-122
田村隆　1989　「二項的モードの推移と巡回」『先史考古学研究』２　p1-52
田村隆　1994　「下総台地における石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』p 199-207
地質調査所　1892　『20 万分一地質図大阪図幅』
地質調査所　1893　『大阪圖幅地質説明書』
趙哲済・藤田幸夫　1991　「中谷芳蔵氏による建設工事に伴う長原遺跡（NG90-62 次）調査略報」『平成２年度大　阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
壷井基裕・澤田慎二郎　2004　「甲山安山岩の全岩化学組成」『日本地質学会学術大会要旨』
塚田松雄　1974　『古生態学』Ⅰ・Ⅱ
同志社大学旧石器文化談話会　1974　『ふたがみ』
戸沢充則　1968　「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第４巻第１号
戸沢充則・安蒜政雄　1974　『砂川先土器時代遺跡』
戸沢充則・安蒜政雄　1975　「砂川遺跡」『日本の旧石器文化』２
土質工学会関西支部　1941　『大阪地盤図』
壇上重光　1958　「トロイデの産物、甲山」『祖先のあしあとⅠ』
壇上重光　1959　「加茂遺跡は重工業地帯」『祖先のあしあとⅡ』
同志社大学旧石器文化談話会　1974　『ふたがみ』
ナウマン　1885　（山下昇訳）「日本群島の構造と起源について」『日本地質の探求：ナウマン論文集』1996
富樫泰時・白石建雄・村岡百合子・藤原姫敏　1977　『米ケ森遺跡発掘調査報告書』
冨成哲也・大船孝弘編　1978　『郡家今城遺跡発掘調査報告書』
冨成哲也・大船孝弘　1976　『津ノ江南遺跡発掘調査報告書』
直良信夫　1931a　「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品（一）」　『人類学雑誌』第 46 巻５号

直良信夫　1931b　「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品（二）」　『人類学雑誌』第 46 巻 6 号
直良三樹子　1995　『見果てぬ夢「明石原人」考古学者直良信夫の生涯』
中津由紀子・千滴美智子・小田静夫・I・E・キダー　1977　『新橋遺跡』
中村孝三郎　1960　『小瀬ケ沢洞穴』
中村孝三郎　1972　『御淵上遺跡』
中村正和　1979　「日ノ岳遺跡採集の一資料」、『長崎県の考古学』1
中村喜代重　1979　「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』 7
長野県考古学会編　1989　『中部高地の尖頭器文化』長野県考古学会誌 59・60
成瀬敏郎・潮見良三・佐溝理・中川毅　1995 年「兵庫県御津町碇岩南山遺跡をめぐる自然環境の復元」『碇岩南山遺跡』兵庫県揖保郡御津町教育委員会 P 38～68
那須孝悌　1985　「先土器時代の環境」『岩波講座　日本考古学』 2
奈良県立橿原考古学研究所　1957　『二上山文化總合調査』
奈良県立橿原考古学研究所編　1979　『二上山・桜ヶ丘遺跡－第 1 地点の発掘調査報告』
奈良県立橿原考古学研究所　1996　「三郷町　峰ノ坂遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1995 年度
西井龍儀　1966　「安養寺遺跡」、『大境』2
西井龍儀　1972　「先土器時代」『富山県史考古編』
西川宏・杉野文一　1959「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」、『古代吉備』3
西住欣一郎編　1988　『鼓ケ峰遺跡』
日本考古学協会　2003『前・中期旧石器問題の検証』
埋蔵文化財研究会鹿児島集会実行委員会編　1987　「加治屋園遺跡」『火山灰と考古学をめぐる諸問題』
沼弘、増田進治　1966　「福井県鳴鹿遺跡出土の旧石器」　『考古福井第一号』
野尻湖人類考古グループ　1978　「野尻伸町遺跡と向新田遺跡の旧石器・縄文草創期文化」　『野尻湖の発掘』地団研専報 27
野川遺跡調査会　1971　「野川遺跡の調査」、『文化財の保護」3
野村亮太郎　1991　「篠山盆地の地形発達」『板井寺ヶ谷　自然科学編』p103-114
萩原博文　1976　「中山遺跡」『日本の旧石器文化』3
萩原博文　1977　『長崎県平戸市鹿島揚牟田中遺跡』
萩原博文　1980　「西南日本における旧石器時代石器群の様相」、『考古学研究』第 26 巻第 4 号
はけうえ遺跡調査会　1980　『はけうえ』
橋本正　1973　『富山県大沢野町直坂遺跡発掘調査概要』
橋本正　1975 「石器の機能と技術」、『日本の旧石器文化」1
橋本正　1975　「富山県における先土器時代石器群の概要と問題」『物質文化』24
橋本正　1976　『大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』
橋本正　1980　「コメント、剥片剥離技術について」、『神奈川考古』8
濱田耕作　1900　「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」『東京人類学会雑誌』174
濱田耕作　1918　「河内国府石器時代遺跡発掘調査報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』 2
濱田耕作　1922　『通論考古学』
濱田耕作　1929　『博物館』
濱田耕作　1930　「考古学上より見たる大和」『奈良文化論叢』第一編
春成秀爾　1976　「先土器・縄文時代の画期について（1）」『考古学研究』第 22 巻第 4 号

春成秀爾　1980　「明石市西脇遺跡の旧石器」『旧石器考古学』21
春成秀爾　1981a　「神戸市大歳山遺跡の旧石器」『旧石器考古学』22
春成秀爾　1981b　「明石市寺山遺跡の旧石器」『旧石器考古学』23
春成秀爾　1982　「播磨南部採集の旧石器」『旧石器考古学』24
春成秀爾編　1987　『国立歴史民俗博物館研究報告　第 13 集』
春成秀爾　1994　『「明石原人」とは何であったか』
羽曳野市教育委員会・京都大学文学部考古学研究室編　1995　『旧石器人のアトリエ』
原田昌則・長屋幸二・三原慎吾・松藤和人　1989「八尾南遺跡第２地点の旧石器」『旧石器考古学』38
樋口浩之・小林達夫　1964　『伊勢見山遺跡調査既報』
麻柄一志　1985　「国府型ナイフ形石器と掻器」『考古学と移住・移動』
真野修・稲原昭嘉　1987　「兵庫県高砂市阿弥陀町魚橋採集の石器」『旧石器考古学』35
真野修・稲原昭嘉　1988　「兵庫県高砂市曽根町馬坂採集の石器」『旧石器考古学』37
樋口清之　1926「　大和発見の特殊石包丁と石錐用石鏃について」『人類学雑誌』第 41 巻第 10 号
樋口清之　1931　「大和二上山石器製造遺蹟研究」『上代文化』4・5
肥後考古学会　1985　「特集：熊本の旧石器文化」『肥後考古第５号』
平井勝　1979　『野原遺跡群風早Ａ地点』
平口哲夫　1974　「ナイフ形石器」、『考古学ジャーナル』100
平口哲夫　1976　「越中山Ｋと茎戸工にみる国府系統の要素について」、『東北考古学の諸問題』
平口哲夫・松井政信・樫田誠　1984　「福井県三国町西下向遺跡の横剥技法」『旧石器考古学』28
広島県埋蔵文化財調査センター　1989　『冠遺跡群Ｄ地点の調査』
兵庫県教育委員会　1983　「奈カリ与遺跡」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』
兵庫県教育委員会編　1985a　『旧石器時代の人間と自然』
兵庫県教育委員会　1985b　「2 万年前の集落跡」『兵庫の遺跡』4
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1990 『兵庫県文化財調査報告 86：七日市遺跡 2』
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1991 『兵庫県文化財調査報告書 96-1：板井寺ケ谷遺跡 ： 旧石器時代の調査考古学編』
兵庫県土木地質図編纂委員会　1996　『兵庫の地質』
兵庫県教育委員会　2004　「4 章　七日市遺跡第Ⅱ文化層の遺構と遺物」『七日市遺跡Ⅲ』
平井勝　1979　「野原遺跡群早風Ａ地点」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』32
平井勝・山本誠　1991　「中国・四国地方の様相」『石器文化研究』 3
深井明比古　1980　「兵庫における先土器時代終末から縄文時代草創期の石器群の様相」『藤井祐介君追悼記念考古学論論叢』
藤岡謙二郎　1972　『洛西三-タウン地域の歴史地理学的調査」
富士見市教育委員会　1976　『打越遺跡第二地点・第三地点』
富士見市教育奮貝会　1977　『打越遺跡第四地点・第五地点・第六地点』
藤田淳　1996　「玉津田中遺跡の石器の検討」『玉津田中遺跡』第６分冊　p327-338
藤田和夫　1959　「西宮地方の地質と構造―その自然史―」『西宮市史』1
藤田和夫　1963　「甲山の成因」『西宮文化』1
藤田和夫・笠間太郎　1982　『大阪西北部地域の地質、 地域地質研究報告(5 万分の 1 図幅)』
藤野次史　1978 「宇部台地における旧石器時代の遺物」、『山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究』

藤野次史　1980　「使用痕有剥片」『寺谷遺跡』
藤野次史　1986　「ガガラ山西南麓地区の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅴ』
藤野次史　1988　「西ガガラ遺跡第１地点」「西ガガラ遺跡第２地点」『広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報Ⅵ』
藤野次史　1989a　「鴻ノ巣遺跡」『広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報Ⅶ』
藤野次史　1989b　「西日本における槍先形尖頭器石器群」『中部高地の尖頭器文化』
藤野次史　1989c　「中国地方・近畿地方西部におけるＡＴ下位の石器群について」『九州旧石器』創刊号
藤原学・山口卓也　1981　「吉志郎遺跡の調査」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
深井明比古　1980　「兵庫県における先土器時代終末から縄文時代草創期の石器群の様相」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』
福本遺跡発掘調査団　1980　『福本遺跡発掘調査の記録』
古谷正和　1979　「大阪湾周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」『第四紀研究』第 18 巻第３号
保坂康夫　1986　「先土器時代の礫群の分布とその背景」『山梨考古学論集Ⅰ』
堀信行　1986　「瀬戸内海の海底地形と最終氷期の古水系に関する考察」『瀬戸内海地域における完新世海水準変動と地形変動』
堀信行　1994　「瀬戸内海海底の古地形」『瀬戸内技法とその時代』
堀川純　1985　「小林河原遺跡採集の台形様石器」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告』11
前田保夫　1985　「六甲アイランドの最終氷期相当層の花粉分析」『月刊地球』1985－6
前田豊邦・高松龍暉　1972　『別宮野遺跡発掘調査報告書』
前田豊邦　1974　『上山高原、杉ケ沢高原における埋蔵文化財分布調査概要』
間壁葭子　1968　「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報』４
麻柄一志　1982　「井島Ⅰ型ナイフと立野ケ原ナイフ」『旧石器考古』24
麻柄一志　1985　「局部磨製石斧を伴う石器群について」『旧石器考古学』31
麻柄一志　1986　「いわゆる立野ケ原ナイフ形石器の基礎的整理」『旧石器考古学』33
町田洋・新井房夫　1976　「広域に分布する火山灰-姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義-」『科学』第 46 巻第６号
松井政信　1980　「埼玉県上尾市殿山遺跡出土の先土器時代資料」、『石器研究』1
松尾吉高　1989　「老松山遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 10』
松沢亜生・佐川正敏　1989　「平城京跡出土の旧石器」『日本考古学協会第５５回総会研究発表要旨』
松藤和人　1974　「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ』
松藤和人　1980　「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」『旧石器考古学』21
松藤和人　1981　「西日本における舟底形石器の編年的予察」『旧石器考古学』22
松藤和人・佐藤良二　1984　『香芝町桜ケ丘第一地点第４次発掘調査概報』
松藤和人　1985a　「瀬戸内技法・国府石器群研究の現状と課題」『旧石器考古学』30
松藤和人　1985b　「旧石器時代の石材移動をめぐって」『考古学と移住・移動』
松藤和人　1987　「西日本におけるＡＴ下位の石器群」『国立歴史民族博物館研究報告』13
松藤和人　1991　「大阪府のあけぼの」『大阪府史別巻』
松藤和人　1992a　「火山灰の降るなかで」『新版古代の日本　第五巻　近畿Ⅰ』
松藤和人　1992b　「大阪平野部における件石器編年研究に寄せて」『旧石器考古学』44
御津町教育委員会　1995　『碇岩南山遺跡Ⅰ』ｐ68

村野正景・平田健　2016　「京都府立鴨沂高等学校所蔵の考古・人類学模型標本について」『朱雀』28
武藤誠 1971「銅剣の新資料―甲山から出土した銅剣について―」『西宮文化』17
明治大学考古学研究室・月見野遺跡調査団　1969　『概報月見野遺跡群』
湊正雄　1974　『日本の第四系』
森先一貴　2009　「瀬戸内東部後期旧石器文化の特質―台形様石器・ナイフ形石器の編年的研究から―」『第 26 回　中・四国旧石器文化談話会　香川県における旧石器文化の様相』p27-34
森先一貴　2010　『旧石器社会の構造的変化と地域適応』 p 262
森嶋稔他　1975　『男女倉』
森嶋稔　1972　『上ケ屋遺跡調査既報」
森田克行　1981　「郡家川西遺跡　64－Ｂ・Ｆ地区の調査」『二上山シンポジュウムー旧石器遺跡をめぐる諸問題』
安田喜憲　1980　『環境考古学事始』
矢島国雄　1977　「先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察」『考古学研究』第 23 巻第 4 号
柳田俊雄　1977　「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と課題」『プレリュード』
柳田俊雄　1979　「近畿地方における国府石器群の様相」、『考古学ジャーナル』167
柳田俊雄　1980　「ナイフ形石器にみられる剥片生産技術」、『旧石器考古学』21
柳田俊雄・藤原姫敏　1981　「瀬戸内技法と石刃技法」『旧石器考古学』23
山沢義貴　1976　『ナゴサ遺跡発掘調査報告』
山口卓也・真野修　1980　「神戸市垂水区における旧石器」『旧石器考古学』21　p 15-26
山口卓也　1981a　「河内国府遺跡の旧石器」『阡陵 』4
山口卓也　198b1　「山形県越中山遺跡群 K 地点遺跡採集の資料と瀬戸内技法についての一考察」、『阡陵、関西大学博物館学課程二〇周年記念特集』p9-25
山口卓也　1981c　「和歌山市山東大池遺跡採集の旧石器・縄文時代の遺物」『古代史の研究』3　p54-68
山口卓也　1983a　「旧石器時代における移動について」『ヒストリア』99　p88-106
山口卓也　1983b　「所謂瀬戸内系旧石器と横長剥片石核剥離技術伝統について」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』 p 919-951
山口卓也　1987a　「瀬戸内系旧石器の存続期間について」『横田健一先生古希記念文化史論叢』p58-80
山口卓也　1987b　「滋賀県大津市粟津採集の翼状剥片石核」『関西大学考古学研究紀要』5　p74-75
山口卓也　1988a　「旧石器時代集落の周辺Ⅰ」『網干善教先生華甲記念考古学論叢』p1-20
山口卓也　1988b　「第 4 章（2）八木西宮・大山田遺跡出土の旧石器」八鹿町教育委員会『八木西宮遺跡・大山田遺跡』p55-57
山口卓也　1988c　「西日本における初期尖頭器石器群について」『紀伊半島の文化史的研究考古学編』　p637-646
山口卓也・久保弘幸・藤田淳　1989　「丹波地方西部における旧石器時代集落」『第四紀研究』27 巻 4 号　p233-240
山口卓也　1990a　「遺跡の景観と視界」『阡陵』19
山口卓也　1990b　「はさみ山遺跡出土石器群の石材供給状況について」『南河内地方における遺跡の調査Ⅰ』p92-95
山口卓也・久保弘幸・藤田淳　1991　「近畿地方の様相」『石器文化研究』 3
山口卓也　1991a　「板井寺ケ谷遺跡をめぐる諸問題」『板井寺ケ谷遺跡－旧石器時代の調査－』p629-670

山口卓也　1991b　「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地－遺跡立地の差と地域性の発生について」『関西大学考古学等資料室紀要』8　p1-14
山口卓也・久保弘幸・藤田淳　1992　「白石・佐藤編年へのコメント」『石器文化研究』4
山口卓也編　1991c　『板井寺ケ谷遺跡－旧石器時代の調査－』
山口卓也　1993　「西南日本における後期旧石器時代前半期の一様相」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』　p1-23
山口卓也　1994a　「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』p185-198
山口卓也　1994b　「近畿地方台形様石器群の一様相」『旧石器考古学』48　p15-26
山口卓也　1994c　「近畿地方における地域性の発生」『考古学ジャーナル』270　p19-24
山口卓也　1997　「石が動くということ－近畿地方の事例から－」『石器石材Ⅱ』p2-8
山口卓也　1998a　「古瀬戸内とサヌカイト石材」『網干善教先生古稀記念考古学論集』p1-17
山口卓也　1998b　「板井寺ヶ谷遺跡下位文化層の横長剥片剥離技術」『旧石器考古学』56　p1-10
山口卓也　1999　「近畿地方」「石器文化研究　7　岩宿発掘50周年記念　日本旧石器時代研究50年と今後の展望」　p61-70
山口卓也　2000a　「旧石器時代の道具と技術」『旧石器時代のムラを探る』p14-22
山口卓也　2000b　「旧石器時代の七日市遺跡をめぐって」『七日市遺跡と「氷上回廊」』p37-50
山口卓也　2001　「サヌカイトの産地」『季刊考古学』77　p62-64
山口卓也　2003　「世帯ユニットの景観」『関西大学考古学研究室開設五十周年記念考古学論叢』p33-52
山口卓也　2004a　「サヌカイト以前」『関西大学博物館紀要』10　p91-99
山口卓也　2004b　「周辺からみた鳥取の地域性」『鳥取県における旧石器文化の様相』p42-53
山口卓也　2011　「本山コレクションの由来」図録『本山コレクションの由来』
山口卓也　2018「末永雅雄先生の二つの大形石器」『泉森皎先生喜寿記念論集』
山口卓也　2021「兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材産地」『ひょうご考古』18　p43-54
山口卓也　2022a　「近畿地方石器時代石材産出地をめぐって」『阡陵』84　p11-13
山口卓也　2022b「濱田耕作の「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」」『関西大学博物館紀要』28　p13-32
山口卓也　2023　「西宮市甲山の黒色ガラス質安山岩と甲山山頂遺跡の旧石器」『ひょうご考古』19　p1-23
山口卓也・渡邊貴亮　2023「兵庫県北西部寺田火山岩の石器石材産出地」『阡陵』86　p10-11
YAMAGUCHI Takuya 1993「PRE'SENCE SIMULTANE'E DE DEUX TRADITIONS DIFFE'RENTES DANS LE SITE PALE'OLITHIQUE "ITAI-TERAGATANI"　A' PROXIMITE' D'UN ANCIEN LAC DANS LA RE'GION SUD-OUEST DU JAPON」『L'Anthropologie』97　p427-468　SCIETE DE L'ANTHROPOLOGIE（Paris）
山田治　1991　「板井寺ケ谷遺跡の液体シンチレーション14C年代測定」『板井寺ケ谷遺跡－旧石器時代の調査－自然科学編』p11-16
山崎信二　1976　「中・四国における先土器文化の横剥技法」『考古学研究』第22館3号
山崎直方　1889　「河内国ニ石器時代ノ遺跡ヲ発見ス」『東京人類学会雑誌』第4巻第40号
山下傳吉　1893　「輝石安山岩」『大阪圖幅地質説明書』
山下秀樹・鈴木忠司・保坂康夫他、1985『広野北遺跡発掘調査報告書』
山下秀樹　1986a　「出張遺跡」『先土器の遺跡』

山下秀樹・南博史編　1986b　『溝口遺跡』
山下秀樹　1988　「日本先土器時代遺跡における受熱石器の分布」『朱雀』1
山下秀樹　1993　「抉入石器の形態的研究－九州地方の様相－」『朱雀』6
山下秀樹　1995　「東海・南関東地方の抉入石器」『朱雀』8
山本慶一　1969　「鷲羽山遺跡採集の石器と土器」、『倉敷考古館研究集』6
山本　誠　1998　「ゾウからシカへ－旧石器時代－」『３万年のメッセージ　七日市遺跡』
山本誠・山下史朗・守岡克倫　1998　「瀬戸内技法成立前夜の一様相」『旧石器考古学』56
山本正敏　1983　「新造池Ａ遺跡」『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告』
八鹿町教育委員会　1988　『八木西宮遺跡・大山田遺跡』
横山卓雄・壇原徹・山下透　1986　「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』第 25 巻第 1 号
吉田英敏編　1987　『寺田・日野Ｉ』
渡辺誠 鈴木忠司　1977　『武者ケ谷遺跡発掘調査報告書』
渡邊貴亮ａ　2021　「本山彦一蒐集考古資料に含まれる後期旧石器時代資料について」『阡陵』82
渡邊貴亮ｂ　2021　「後期旧石器時代における山地帯と低地帯についての一考察」『ひょうご考古』18
綿貫俊一　1982　「東九州における瀬戸内系の人類遺物」　『旧石器考古学』25
藁科哲男・東村武信　1975　「蛍光Ｘ線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ｉ）」『考古学と自然科学』８　p61-69
藁科哲男・東村武信　1983　「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16
藁科哲男・東村武信　1991　「板井寺ケ谷遺跡出土のサヌカイト製剥片の石材産地分析」『板井寺ケ谷遺跡－旧石器時代の調査－自然科学編』p123-131
藁科哲男　2001　「石器・玉類の原材産地分析から考察する使用圏（４）」『日本考古学協会第 67 回総会研究発表要旨』p26-29
藁科哲男　2004　「七日市遺跡出土サヌカイト・黒曜石製の石器・剥片原材産地分析」『七日市遺跡Ⅲ』
Binford　L,R　　1980　　「 Willow smoke and dogs tails:hunter-garther settlement systems and archaeological site formation」『American Antiquity』vol 34
Binford,L.R　1983　　『In Pursuit of the Pas』t
Boshinski,Gerhard　1979　『DER MAGDALENIEN-FUNDPLATZ GONNERSDORF Bd3』
Edmund Naumann　1885　『Ueber den Bau und die Entstehung der japanischen Inseln. Begleitworte zu den vor der geologischen Aufnahme von Japan‘den internationalen Geologen-Congress in Berlin bearbeiteten topographischen und geologischen Karten』
Ernst Weinschenk　1891　『Beiträge zur Petrographie Japans', Neues Jahrbuch für Mineralogie, Geologie und Paläontologie, Beilageband 7』
Gamble,Clive　1984　『Tha Palaeolithic Settlement of the Europe』
Guthrie R,D 1982 『 MAMMALS OF THE MAMMOTH STEPPE AS PALEOENVIRONMENTAL INDICATORS」『PALEOECOLOGY OF BERINGIA』
HIGGS,E,S　1972 『PAPERS IN ECONOMIC PREHISTORY』
HIGGS,E,S 1975 『PALEOECONOMY』
Lee R,B and Irven Devore　1968　『MAN THE HUNTER』
Orton,Clive　1980　『Mathematics in Archaeology』　クライブ・オルトン著　小沢一雄・及川昭文訳　19

87　『数理考古学入門』
Hodder.Ian and Orton,Clive　1976　『Spatial Analysis in Archaeology』　イアン・ホッダーとクライブ・オルトン著　深沢百合子訳　『考古学における空間分析』
Vita-Finzi,C & E.S,Higgs　1970　『Prehistoric economy in the Mount Carmel area of Palestine ;Site-catchiment analysis』. "Proceeding of the Prehistoric Society"

近畿地方瀬戸内系旧石器の構造

2023 年 11 月 30 日

著者　山口　卓也